

茨城県教育財団文化財調査報告第55集

一般国道349号道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書

北郷 C 遺跡
森戸 遺跡
(上)

平成 2 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第55集

一般国道349号道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書

きた 郷 C 遺 跡
もり と 戸 遺 跡
(上)

平成 2 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団



写真 豪族居館跡張出部全景
豪族居館跡 堀下層出土遺物

序

茨城県は、産業・経済の発展にともない、交通量の著しい増加による交通渋滞の緩和と地域の活性化をはかるため、県内の道路の整備を進めております。一般国道349号道路改良工事もその一環として計画されたものです。

このたび、財団法人茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び、昭和62年度（4月～9月）及び昭和63年度（4月～10月）の2年度にわたり、一般国道349号道路改良工事実施区域内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

本書は、北郷C遺跡と森戸遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が、研究の資料としてはもとより、郷土の歴史への理解を深め、教育・文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理にあたり、委託者である茨城県の御協力に対して、深く感謝申し上げます。また、茨城県教育委員会、那珂町教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導・御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成2年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 儀 田 勇

例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、昭和62年度と昭和63年度に実施した那珂郡那珂町に所在する北郷C遺跡・森戸遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 北郷C遺跡・森戸遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は次のとおりである。

理 事 長	川 又 友 三 郎 磯 田 勇	～昭和63年 5月 昭和63年 6月～	
副 理 事 長	磯 田 勇 小 林 元	～昭和63年 3月 昭和63年 4月～	
常 務 理 事	滑 川 貞 雄 小 林 洋	～平成元年 3月 平成元年 4月～	
事 務 局 長	坂 場 庸 克 一 木 邦 彦	～平成元年 3月 平成元年 4月～	
調 査 課 長	青 木 義 夫 石 井 毅	～平成元年 3月 平成元年 4月～	
企 画 管 理 班	班 長	水 飼 敏 夫	昭和62年 4月～
	主任調査員	山 本 静 男	～平成元年 3月
	〃	小 河 邦 男	平成元年 4月～
	係 長	園 部 昌 俊	昭和63年 4月～
	主 任	山 崎 初 雄	～平成元年 3月
	主 事	富 永 明	～昭和63年 3月
〃	大 部 章	昭和61年 4月～	
〃	吉 井 正 明	平成元年 4月～	
調 査 班	班 長	石 井 毅	昭和62年度
	〃	加 藤 雅 美	昭和63年度
	主任調査員	斉 藤 弘 道	昭和62年度調査
	調 査 員	西 野 則 史	昭和62・63年度調査，平成元年度整理・執筆
〃	浅 井 哲 也	昭和63年度調査，平成元年度整理・執筆	
整 理 班 長	加 藤 雅 美	平成元年度	

3 本書は、次のように分担して執筆・編集した。

第5章第2節の1……………加藤雅美

第2章，第5章第1節，第2節の2・3，第3節，終章……………西野則史

第1章，第3章，第4章，第5章第2節の2・4・5・6・7・8，第3節……………浅井哲也

※第5章第2節の2の竪穴住居跡は，弥生時代，古墳時代，及び時期不明については，西野則史が，奈良・平安時代については，浅井哲也が分担して執筆・編集した。

まとめについては，森戸遺跡の弥生時代の竪穴住居跡，古墳時代の竪穴住居跡，豪族居館跡については西野則史が，北郷C遺跡，森戸遺跡の奈良・平安時代の竪穴住居跡，土坑については，浅井哲也が分担して執筆・編集した。

4 発掘調査ならび報告書作成にあたり，多くの方々から御指導・御協力を賜りました。記して感謝の意を表す次第であります。(順不同・敬称略)

阿久津久(茨城県立歴史館 主任研究員)，岩崎卓也(筑波大学 教授)，亀井正道(日本大学 教授)，川井正一(茨城県立歴史館 主任研究員)，酒井清治(埼玉県立歴史資料館 学芸員)，桜場一寿(群馬県埋蔵文化財調査事業団 主任調査研究員)，佐藤政則(日立市郷土博物館 学芸員)，鈴木裕芳(日立市郷土博物館 学芸員)，橋本博文(早稲田大学 助手)，福田健司(東京都教育庁文化課 学芸員)，村田健二(埼玉県埋蔵文化財調査事業団 主査)

5 本書に使用した記号等については，第3章第1節・第2節の項を参照されたい。

目 次

— 上 卷 —

序

例 言

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法	1
第3節 調査経過	4
第2章 位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 遺構・遺物の記載方法	12
第1節 遺構の記載方法	12
第2節 遺物の記載方法	15
第4章 北郷C遺跡	17
第1節 遺跡の概要	23
第2節 遺構と遺物	23
1 竪穴住居跡	23
2 掘立柱建物跡	40
3 土坑	43
4 溝	48
5 道路跡	52
6 柵列跡	53
7 性格不明遺構	54
8 ピット	55
第3節 まとめ	80
写真図版	
第5章 森戸遺跡	115
第1節 遺跡の概要	117
第2節 遺構と遺物	119

1	先土器時代	119
2	竪穴住居跡	139
	(1) 弥生時代	139
	(2) 古墳時代	142
	(3) 奈良・平安時代	230
	(4) 時期不明	262
3	豪族居館跡（堀）	269
4	溝	274
5	道路跡	282
6	土坑	282
7	井戸	310
8	ピット	311
	第3節 まとめ	312
	終章 むすび	381

— 下 卷 —

森戸遺跡

1	遺物実測図	383
	(1) 竪穴住居跡出土遺物	383
	(2) 豪族居館跡出土遺物	519
	(3) 溝・道路跡・土坑・井戸・ピット・遺構外出土遺物	539
2	出土土器観察表	554
	(1) 竪穴住居跡出土土器	554
	(2) 豪族居館跡出土土器	627
	(3) 溝・道路跡・土坑・井戸・ピット・遺構外出土土器	635
3	土製品・石製品・石製模造品・鉄製品・古銭一覧表	644

写真図版

挿 図 目 次

上 巻

第 1 図	小調査区名称図……………	1			
第 2 図	北郷C遺跡土層柱状図……………	2	第 37 図	遺物実測図……………	56
第 3 図	森戸遺跡土層柱状図……………	2		第 5 (2)・6号住居跡出土遺物	
第 4 図	北郷C・森戸遺跡周辺遺跡分布図…10			実測図……………	57
	北郷C遺跡		第 38 図	第 6・8 (1)号住居跡出土遺物	
第 5 図	北郷C・森戸遺跡周辺地形図			実測図……………	58
	及び遺跡位置図……………	19	第 39 図	第 8 (2)・10・11 (1)号住居跡	
第 6 図	北郷C遺跡地形図……………	20		出土遺物実測図……………	59
第 7 図	北郷C遺跡全体図……………	21~22	第 40 図	第11 (2)・12・13 (1)号住居跡	
第 8 図	第 1号住居跡・カマド実測図…	24		出土遺物実測図……………	60
第 9 図	第 3号住居跡・カマド実測図…	25	第 41 図	第13 (2)・15 (1)号住居跡出土	
第 10 図	第 5号住居跡・カマド実測図…	26		遺物実測図……………	61
第 11 図	第 6号住居跡・カマド実測図…	28	第 42 図	第15 (2)・16・17号住居跡出土	
第 12 図	第 8号住居跡実測図……………	29		遺物実測図……………	62
第 13 図	第10号住居跡実測図……………	30	第 43 図	第18・19・20・21号住居跡出土	
第 14 図	第11号住居跡・カマド実測図…	31		遺物実測図……………	63
第 15 図	第12号住居跡実測図……………	32	第 44 図	掘立柱建物跡・土坑・溝出土	
第 16 図	第13号住居跡・カマド実測図…	33		遺物実測図, 拓影図……………	64
第 17 図	第15号住居跡・カマド実測図…	34	第 45 図	道路跡・性格不明遺構・ピット・	
第 18 図	第16号住居跡・カマド実測図…	35		遺構外出土遺物実測図, 拓影図…	65
第 19 図	第17号住居跡・カマド実測図…	36	第 46 図	遺構外出土遺物実測図……………	66
第 20 図	第18号住居跡・カマド実測図…	37	第 47 図	北郷C遺跡 I 群の土器……………	81
第 21 図	第19号住居跡・カマド実測図…	38	第 48 図	北郷C遺跡 II 群の土器……………	82
第 22 図	第20号住居跡実測図……………	39	第 49 図	埴仏実測図……………	86
第 23 図	第21号住居跡実測図……………	39	第 50 図	北郷C遺跡住居跡分布図……………	87
第 24 図	第 1号掘立柱建物跡実測図…	40	第 51 図	北郷C遺跡住居跡の規模・方向…	87
第 25 図	第 2号掘立柱建物跡実測図…	41		森戸遺跡	
第 26 図	第 3号掘立柱建物跡実測図…	42	第 52 図	森戸遺跡地形図……………	118
第 27 図	土坑実測図 (A類)……………	44	第 53 図	礫や石器等平面・垂直分布状況	
第 28 図	土坑実測図 (B類-1)……………	45		及びセクション図……………	120
第 29 図	土坑実測図 (B類-2)……………	46	第 54 図	遺物平面位置計測法……………	121
第 30 図	土坑実測図 (C類-1)……………	46	第 55 図	メノウの器種別分布状況図……………	122
第 31 図	土坑実測図 (C類-2)……………	47	第 56 図	頁岩及び安山岩の器種別分布	
第 32 図	第 1・2・3号溝実測図……………	49		状況図……………	123
第 33 図	第 4・5号溝, 第 1・2号道		第 57 図	砂岩及びその他の礫等出土分	
	路跡実測図……………	51		布状況図……………	124
第 34 図	第 1・2号柵列跡実測図……………	53	第 58 図	石器実測図 (1)……………	130
第 35 図	第 1号性格不明遺構実測図…	54	第 59 図	石器実測図 (2)……………	131
第 36 図	第 1・3・5 (1)号住居跡出土		第 60 図	石器実測図 (3)……………	132
			第 61 図	石器実測図 (4)……………	133

第 62 図	石器実測図(5) ……………	134	第101図	第74号住居跡実測図……………	173
第 63 図	石器実測図(6) ……………	135	第102図	第76号住居跡実測図……………	173
第 64 図	石器実測図(7) ……………	136	第103図	第77号住居跡実測図……………	174
第 65 図	石器実測図(8) ……………	137	第104図	第78号住居跡実測図……………	175
第 66 図	石器実測図(9) ……………	138	第105図	第79号住居跡実測図……………	176
第 67 図	第106号住居跡実測図 ……………	139	第106図	第80・81号住居跡実測図……………	177
第 68 図	第143号住居跡・炉跡実測図 ……	140	第107図	第82号住居跡実測図……………	178
第 69 図	第148号住居跡実測図 ……………	141	第108図	第83号住居跡実測図……………	179
第 70 図	第 6 号住居跡・カマド実測図…	142	第109図	第85号住居跡実測図……………	180
第 71 図	第12号住居跡・カマド実測図…	143	第110図	第86号住居跡実測図……………	180
第 72 図	第16号住居跡実測図……………	144	第111図	第87号住居跡実測図……………	181
第 73 図	第17号住居跡・カマド実測図…	145	第112図	第88号住居跡実測図……………	182
第 74 図	第20号住居跡・カマド実測図…	146	第113図	第89号住居跡実測図……………	183
第 75 図	第21号住居跡・カマド実測図…	147	第114図	第90号住居跡・カマド実測図…	184
第 76 図	第27号住居跡実測図……………	148	第115図	第91号住居跡実測図……………	185
第 77 図	第33号住居跡実測図……………	149	第116図	第92号住居跡実測図……………	185
第 78 図	第33号住居跡カマド実測図……	150	第117図	第94号住居跡実測図……………	186
第 79 図	第37号住居跡実測図, 遺物 出土状況図……………	151	第118図	第96号住居跡実測図……………	187
第 80 図	第38号住居跡・カマド実測図…	152	第119図	第97号住居跡実測図……………	188
第 81 図	第39号住居跡実測図……………	153	第120図	第100号住居跡・カマド実測図…	189
第 82 図	第41号住居跡・カマド実測図…	154	第121図	第101号住居跡実測図 ……………	191
第 83 図	第44号住居跡・カマド実測図…	155	第122図	第102号住居跡実測図 ……………	192
第 84 図	第45号住居跡・カマド実測図…	156	第123図	第102号住居跡遺物出土状況図…	193
第 85 図	第47号住居跡・カマド実測図…	157	第124図	第103号住居跡・カマド実測図…	194
第 86 図	第49号住居跡・カマド実測図…	158	第125図	第104号住居跡実測図 ……………	195
第 87 図	第52号住居跡実測図……………	159	第126図	第104号住居跡カマド実測図 ……	196
第 88 図	第53号住居跡カマド実測図……	160	第127図	第105号住居跡・カマド実測図…	197
第 89 図	第54号住居跡・カマド実測図…	161	第128図	第108号住居跡実測図 ……………	198
第 90 図	第55号住居跡実測図……………	162	第129図	第109号住居跡実測図 ……………	199
第 91 図	第56号住居跡・カマド実測図, 遺物出土状況図……………	163	第130図	第109号住居跡遺物出土状況図…	200
第 92 図	第60号住居跡実測図……………	164	第131図	第110号住居跡・カマド実測図…	201
第 93 図	第62号住居跡実測図……………	165	第132図	第111号住居跡・カマド実測図…	202
第 94 図	第63号住居跡実測図……………	166	第133図	第112号住居跡・カマド実測図…	203
第 95 図	第64号住居跡実測図……………	167	第134図	第115号住居跡実測図 ……………	204
第 96 図	第64号住居跡石製模造品出土 状況図……………	168	第135図	第116号住居跡実測図 ……………	205
第 97 図	第67号住居跡実測図……………	169	第136図	第117号住居跡・カマド実測図…	206
第 98 図	第70号住居跡実測図……………	170	第137図	第117号住居跡遺物出土状況図…	207
第 99 図	第70号住居跡遺物出土状況図…	171	第138図	第118号住居跡実測図 ……………	208
第100図	第73号住居跡実測図……………	172	第139図	第119号住居跡実測図 ……………	209
			第140図	第120号住居跡実測図 ……………	209
			第141図	第121・122号住居跡実測図……	210
			第142図	第124号住居跡実測図 ……………	211

第143図	第126・127号住居跡実測図……	212	第184図	第35号住居跡実測図……………	250
第144図	第130号住居跡実測図 ……	214	第185図	第40号住居跡・カマド実測図…	251
第145図	第131・132号住居跡実測図……	215	第186図	第42号住居跡・カマド実測図…	252
第146図	第133号住居跡実測図 ……	216	第187図	第43号住居跡実測図……………	253
第147図	第135号住居跡・カマド実測図 …	217	第188図	第46号住居跡実測図……………	254
第148図	第136号住居跡実測図 ……	218	第189図	第48号住居跡・カマド実測図…	255
第149図	第138号住居跡実測図 ……	219	第190図	第50号住居跡・カマド実測図…	255
第150図	第138号住居跡カマド実測図 …	220	第191図	第51号住居跡実測図……………	256
第151図	第147号住居跡実測図 ……	221	第192図	第58号住居跡実測図……………	257
第152図	第150号住居跡実測図 ……	222	第193図	第59号住居跡実測図……………	257
第153図	第155号住居跡実測図 ……	223	第194図	第66号住居跡実測図……………	258
第154図	第158号住居跡実測図 ……	224	第195図	第72号住居跡実測図……………	258
第155図	第161号住居跡実測図 ……	224	第196図	第98号住居跡実測図……………	259
第156図	第162号住居跡実測図 ……	225	第197図	第107号住居跡実測図 ……	259
第157図	第165号住居跡実測図 ……	226	第198図	第114号住居跡実測図 ……	260
第158図	第168号住居跡実測図 ……	228	第199図	第123号住居跡実測図 ……	261
第159図	第174号住居跡実測図 ……	229	第200図	第156号住居跡実測図 ……	261
第160図	第1号住居跡実測図……………	230	第201図	第22号住居跡実測図……………	262
第161図	第2号住居跡実測図……………	230	第202図	第24号住居跡実測図……………	263
第162図	第3号住居跡・カマド実測図…	231	第203図	第32号住居跡実測図……………	263
第163図	第4号住居跡・カマド実測図…	232	第204図	第36号住居跡実測図……………	264
第164図	第5号住居跡・カマド実測図…	233	第205図	第84号住居跡実測図……………	264
第165図	第7号住居跡実測図……………	234	第206図	第93号住居跡実測図……………	265
第166図	第8号住居跡・カマド実測図…	235	第207図	第125号住居跡実測図 ……	266
第167図	第9号住居跡実測図……………	236	第208図	第129号住居跡実測図 ……	267
第168図	第10号住居跡実測図……………	236	第209図	第152号住居跡実測図 ……	268
第169図	第10号住居跡カマド実測図……	237	第210図	第173号住居跡実測図 ……	269
第170図	第11号住居跡実測図……………	237	第211図	豪族居館跡全体(想定)図……	273
第171図	第13号住居跡実測図……………	238	第212図	第1・2・3号溝実測図……………	275
第172図	第14号住居跡・カマド実測図…	239	第213図	第4・5・6号溝実測図……………	277
第173図	第15号住居跡・カマド実測図…	240	第214図	第7・8号溝実測図……………	279・280
第174図	第18号住居跡・カマド実測図…	241	第215図	第9号溝,第1号道路跡実測図…	281
第175図	第19号住居跡・カマド実測図…	242	第216図	土坑実測図(A類)……………	290
第176図	第23号住居跡実測図……………	243	第217図	土坑実測図(B類-1)……………	291
第177図	第25号住居跡・カマド実測図…	244	第218図	土坑実測図(B類-2)……………	292
第178図	第26号住居跡・カマド実測図…	245	第219図	土坑実測図(B類-3)……………	293
第179図	第28号住居跡実測図……………	246	第220図	土坑実測図(B類-4)……………	294
第180図	第29号住居跡・カマド実測図, 遺物出土状況図……………	247	第221図	土坑実測図(B類-5)……………	295
第181図	第30号住居跡・カマド実測図…	248	第222図	土坑実測図(B類-6)……………	296
第182図	第31号住居跡実測図……………	249	第223図	土坑実測図(C類-1)……………	296
第183図	第34号住居跡実測図……………	250	第224図	土坑実測図(C類-2)……………	297
			第225図	土坑実測図(C類-3)……………	298

第226図	土坑実測図(C類-4)……………	299	第258図	森戸V期(鬼高1期)住居跡の 規模・方向と出入り口部施設…	335
第227図	土坑実測図(D類)……………	299	第259図	森戸VI期住居跡分布図……………	337
第228図	土坑実測図(E類)……………	300	第260図	森戸VI期(鬼高2期)住居跡の 規模・方向と出入り口部施設…	337
第229図	土坑実測図(F類-1)……………	301	第261図	森戸VII期住居跡分布図……………	338
第230図	土坑実測図(F類-2)……………	302	第262図	森戸VII期(鬼高3期)住居跡の 規模・方向と出入り口部施設…	338
第231図	土坑実測図(F類-3)……………	303	第263図	森戸VIII期住居跡分布図……………	339
第232図	土坑実測図(F類-4)……………	304	第264図	森戸VIII期(鬼高4期)住居跡の 規模・方向と出入り口部施設…	339
第233図	土坑実測図(F類-5)……………	305	第265図	奈良・平安時代I群の土器……	346
第234図	土坑実測図(F類-6)……………	306	第266図	奈良・平安時代II群の土器……	347
第235図	土坑実測図(F類-7)……………	307	第267図	奈良・平安時代III群の土器……	348
第236図	土坑実測図(F類-8)……………	308	第268図	奈良・平安時代IV群の土器……	349
第237図	土坑実測図(F類-9)……………	309	第269図	奈良・平安時代V群の土器……	351
第238図	土坑実測図(F類-10)……………	310	第270図	森戸IX期住居跡分布図……………	354
第239図	第1・2号井戸実測図……………	311	第271図	森戸IX期住居跡の規模・方向…	354
第240図	高坏形土器分類(1)……………	312	第272図	森戸X・XI期住居跡分布図……	355
第241図	高坏形土器分類(2)……………	313	第273図	森戸X・XI期住居跡の規模・ 方向……………	355
第242図	甕形土器分類……………	314	第274図	森戸XII・XIII期住居跡分布図…	356
第243図	坏形土器分類……………	315	第275図	森戸XII・XIII期住居跡の規模・ 方向……………	356
第244図	甕形土器分類(1)……………	316	第276図	豪族居館跡堀下層出土遺物……	363
第245図	甕形土器分類(2)……………	317	第277図	豪族居館跡堀上層出土遺物……	364
第246図	森戸第III期土器群……………	319	第278図	石製模造品出土住居跡 配置図(1)……………	370
第247図	森戸第IV期土器群……………	319	第279図	石製模造品出土住居跡 配置図(2)……………	371
第248図	森戸第V期土器群……………	321	第280図	有孔円板法量ドット図……………	372
第249図	森戸第VI期土器群……………	322	第281図	剣形品模式図……………	373
第250図	森戸第VII期土器群……………	323	第282図	剣形品計測値ドット図……………	373
第251図	森戸第VIII期土器群……………	324	第283図	勾玉計測値ドット図……………	373
第252図	住居跡規模ドット図……………	329			
第253図	出入り口施設模式図……………	332			
第254図	森戸III期(和泉1期)住居跡の 規模・方向と出入り口部施設…	333			
第255図	森戸III・IV期住居跡分布図……	334			
第256図	森戸IV期(和泉2期)住居跡の 規模・方向と出入り口部施設…	334			
第257図	森戸V期住居跡分布図……………	335			

付 図 目 次

- 付図1 森戸遺跡全体図(300分の1)
 付図2 森戸遺跡時期別住居跡配置図(300分の1)
 付図3 豪族居館跡遺構実測図(200分の1)

目 次

表 1	北郷C・森戸遺跡周辺遺跡一覧表…	11	表19	時期・器種別出土土器一覧表 ……	328
表 2	北郷C遺跡土坑一覧表 ……	43・44	表20	時期別・規模別住居跡数 ……	329
表 3	土製品一覧表 ……	78	表21	古墳時代竪穴住居跡一覧表…	342～344
表 4	石器・石製品一覧表 ……	78	表22	奈良・平安時代遺構別出土土器 一覧表 ……	353
表 5	鉄製品一覧表 ……	78・79	表23	奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表 ……	358
表 6	古銭一覧表 ……	79	表24	弥生時代竪穴住居跡一覧表 ……	360
表 7	北郷C遺跡遺構別出土土器一覧表…	83	表25	時期不明竪穴住居跡一覧表 ……	360
表 8	北郷C遺跡竪穴住居跡一覧表 ……	90	表26	遺構の種類別石製模造品出土点数 ……	367
表 9	石器の石材別・器種別一覧表 ……	119	表27	住居跡別石製模造品一覧表 ……	368
表10	該期外遺構出土石器一覧表 ……	125	表28	時期別石製模造品出土住居跡の 割合 ……	368
表11	遺物整理表(1) ……	126	表29	時期別石製模造品出土状況 ……	369
表12	遺物整理表(2) ……	127	表30	有孔円板法量別集計表 ……	369
表13	遺物整理表(3) ……	128	表31	有孔円板集計表 (横径に対する縦径の割合) ……	372
表14	遺物整理表(4) ……	129			
表15	森戸遺跡土坑一覧表 ……	283～289			
表16	時期別出土土器器種構成表 ……	325			
表17	古墳時代住居跡出土土器一覧表(1) ……	326			
表18	古墳時代住居跡出土土器一覧表(2) ……	327			

写真図版目次

P L 1	北郷C遺跡全景	P L 12	第2号土坑, 第4・5号土坑, 第15・ 16号土坑, 第17号土坑, 第18号土坑, 第29号土坑, 第30号土坑, 第32号土坑
P L 2	調査前全景, 調査後全景	P L 13	第9号土坑, 第13号土坑, 第1号溝, 第2号溝
P L 3	遺構確認状況, 作業風景	P L 14	第3号溝, 第5号溝, 第4号溝・第1 号道路跡
P L 4	調査後全景	P L 15	第1・3・5号住居跡出土土器
P L 5	第1号住居跡, 第3号住居跡, 第3号 住居跡カマド	P L 16	第6・8号住居跡出土土器
P L 6	第5号住居跡, 第6号住居跡, 第8号 住居跡	P L 17	第11・12号住居跡出土土器
P L 7	第10号住居跡, 第11号住居跡, 第11号 住居跡遺物出土状況	P L 18	第13・15・16・17号住居跡出土土器
P L 8	第13号住居跡, 遺物出土状況, カマド	P L 19	第18・19・20・21号住居跡, 第35号土 坑, 第5号溝, 第1号道路跡, 遺構外 出土土器
P L 9	第12号住居跡, 第15号住居跡, 第16号 住居跡	P L 20	墨書土器
P L 10	第17号住居跡, 第18号住居跡, 第19号 住居跡	P L 21	埴仏, 巡方, 土製品, 石製品
P L 11	第1号掘立柱建物跡, 第2号掘立柱建 物跡, 第3号掘立柱建物跡	P L 22	鉄製品, 古銭

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

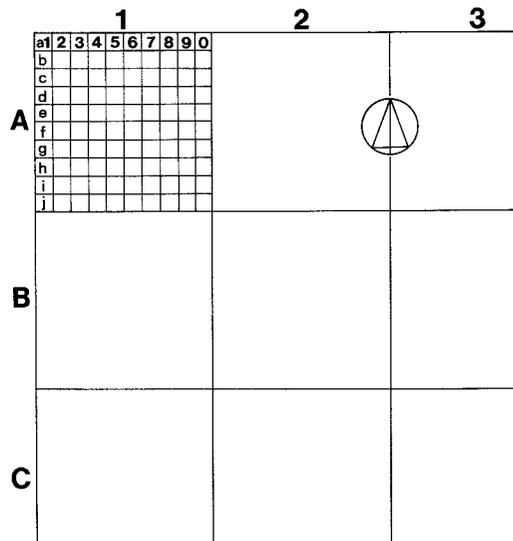
一般国道349号は、水戸市を基点に、那珂町、常陸太田市を經由して、宮城県柴田町に至る総延長259.4kmの道路である。この道路は、幅員の狭い箇所が多く、近年の交通量の増加に対応できなくなっている。特に那珂町地内においては、道路沿いに人家が密集し、幅員を拡張することは極めて困難となっている。そのため、茨城県は、那珂町菅谷地区を起点に常陸太田市までの区間について、現在の路線に並行するバイパス道の建設を計画した。工事に先立ち、昭和62年1月19日、茨城県大宮土木事務所は、那珂町教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。同町教育委員会は、分布調査を実施し、工事予定地内における遺跡の存在を確認し、その取扱いについて茨城県教育委員会と協議されたい旨を回答した。そこで茨城県教育委員会と茨城県大宮土木事務所は、文化財保護の立場から、埋蔵文化財の取扱いについて協議を重ねた結果、現状保存が困難なため、記録保存の処置を講ずることとなり、調査機関として茨城県教育財団が紹介された。それを受けて茨城県教育財団は、茨城県（土木部道路建設課）と埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協議を重ね、昭和62年4月1日から北郷C遺跡（3,090m²）と森戸遺跡（9,365m²）の調査を実施することで委託契約を締結した。

第2節 調査方法

1 地区設定（第1図）

北郷C・森戸遺跡の発掘調査を実施するにあたり、遺跡及び遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。

調査区の設定は、日本平面直角座標第IX系、X軸(南北)・Y軸(東西)を基準線として、40m四方の大調査区に分割し、さらに大調査区内を4m四方の小調査区に細分割した。調査区の名前は、アルファベットと算用数字を用い、大調査区においては北から南へA・B・C……西から東へ1・2・3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は北から



第1図 小調査区名称図

南へ a・b・c……………j, 西から東へ 1・2・3……………0とし, 小調査区の名称は, 大調査区の名称を冠し, 「A1a₁」, 「B2e₂」のように呼称した。

なお, 両遺跡における基準点の座標は次のとおりである。

- (1) 北郷C遺跡(F4a₁)……………X軸(南北)+54,880m Y軸(東西)+61,160m
- (2) 森戸遺跡(D2a₁)……………X軸(南北)+54,440m Y軸(東西)+60,960m

2 遺跡の基本層序

(1) 北郷C遺跡(第2図)

調査区域の中央部にテストピットを掘り, 土層の観察を行った。

第1層は, 30~35cmの厚さを有する耕作土である。

第2層は, 25~35cmの厚さを有する黒褐色土である。

第3層は, 8~16cmの厚さを有するソフトロームへの漸移層である。

第4層は, 10~20cmの厚さを有するソフトローム層である。

第5層は, 25~42cmの厚さを有する砂を少量含む締めりのあるハードローム層である。

第6層は, 80cm程の厚さを有する極めて締めりのあるハードローム層である。

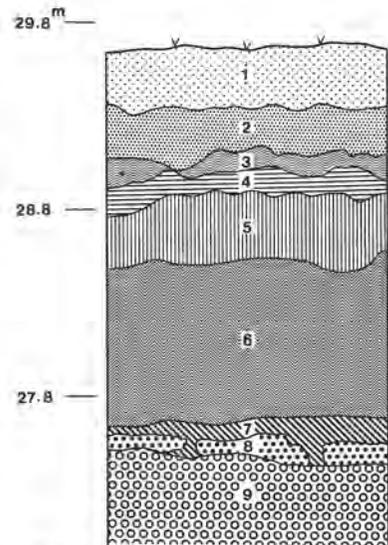
第7・8層は, 12~25cmの厚さを有する鹿沼パミス(KP)層である。第7層は, 多量の鹿沼パミス(KP)とロームが均質に混入した層で, 第8層は, 鹿沼パミス(KP)のブロックである。

第9層は極めて締めりのあるハードローム層で, 明褐色を呈している。

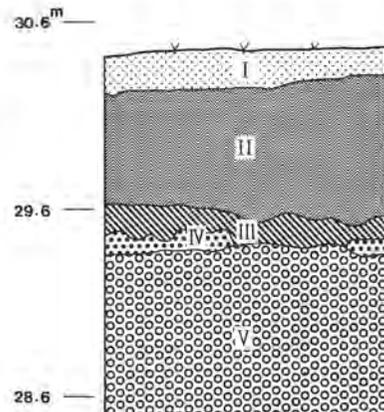
北郷C遺跡の遺構は, 表土下80cm程の第4層上面から検出されている。

(2) 森戸遺跡(第3図)

森戸遺跡の平坦部の土層は, 北郷C遺跡とほぼ同じ堆積状況を示している。第3図は, 先土器時代の遺物が多数出土した北側の台地縁辺部の土層である。



第2図 北郷C遺跡土層柱状図



第3図 森戸遺跡土層柱状図

第Ⅰ層は、20cm程の厚さを有する耕作土である。

第Ⅱ層は、極めて締まりあるハードローム層であり、北郷C遺跡では第6層にあたる。尚、この第Ⅱ層中から先土器時代の遺物が出土している。

第Ⅲ層・第Ⅳ層は、16～28cmの厚さを有する鹿沼パミス（KP）層である。北郷C遺跡では、第7・8層にあたる。

第Ⅴ層は、極めて締まりのあるハードローム層で、北郷C遺跡では第9層にあたる。

本遺跡の台地縁辺部の土層では、北郷C遺跡に見られた漸移層、ソフトローム層、及びハードローム層（第2～5層）が失われていることになる。

本遺跡の遺構は、中央部では北郷C遺跡と同様に、表土下80cmで検出され、台地縁辺部では、表土下20cm程の第Ⅱ層上面から検出されている。

森戸遺跡は、北郷C遺跡の約250m北側に位置し、現地表は、森戸遺跡北端から北郷C遺跡にかけて、0.9mの比高をもって傾斜している。また、鹿沼パミス（KP）が堆積した当時は、森戸遺跡北端から北郷C遺跡にかけて、1.9mの比高をもって傾斜していたことが判断でき、当時は、台地の地表面の傾斜が現在よりも大きかったことが窺える。

3 遺構確認

北郷C・森戸遺跡の現況はともに畑であり、両遺跡からは、土師器片や須恵器片が多量に表面採取されたので、濃密な遺構の検出が予想された。そこでまず、両遺跡ともグリッドを設定して遺構確認調査を実施した。その結果、遺構は場所により密度の差が認められるものの、調査エリアのほぼ全域（表土下40～80cm）に遺構の分布が認められた。そこで重機による表土除去を実施し、その後遺構検出作業を進めた。遺構検出作業は、両遺跡とも耕作（トレンチャー等）による攪乱を受けており、また遺構が重複していたので困難であった。

4 遺構調査

遺構の調査は、次のような方法で実施した。

竪穴住居跡の調査は、長軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを設け、四分分割して掘り込む「四分分割法」で実施し、地区の名称は、北から時計回りに1～4区とした。また、重複している場合は、新旧関係が把握できるような位置にベルトを設定した。土坑の調査は、長径方向で二分して掘り込む「二分分割法」で実施し、井戸の調査も土坑の調査に準じた。堀・溝・道路跡の調査は、適宜な位置に土層観察用ベルトを設定して掘り込んだ。掘立柱建物跡については、柱痕跡を二分分割して掘り込んだ。

土層の観察については、色相・含有物・混入物の種類や量・粘性・締まり具合を観察し、分類の基準とした。

遺構や遺物の平面実測は、水糸方眼地張り測量で行った。土層断面や遺構断面の実測は、遺跡内の水準点を基準として、水平にセットした水糸を基準に行った。また、昭和63年度調査した森戸遺跡については、一部の遺構を除き、遺物出土状況図・遺構断面図・遺構平面図は写真測量で実施した。

遺物は原位置を保ち、各区名・遺物番号・出土位置・レベル等を遺物台帳や図面に記録して収納した。先土器時代の調査については、ユニットごとに、グリッド名・遺物番号・出土位置・レベル等を記録し収納した。

遺構調査の記録方法は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順で行うことを基本とした。図面や写真に記録できない事項は、そのつど野帳に記録し、これを調査記録カードや遺構カードに整理した。

第3節 調査経過

北郷C・森戸遺跡については、昭和62年4月に調査を開始し、同年9月30日に一次調査を終了した。さらに森戸遺跡については、昭和63年4月から二次調査を開始し、同年10月31日に全調査を終了した。以下、発掘調査の経過について記述する。

<昭和62年度—一次調査>

- 4 月 17日から現場作業を開始し、現場事務所用地の整地を行うと共に、両遺跡とも、グリッドを設定し、試掘による遺構確認作業を始める。24日発掘調査の円滑な推進と作業の安全を願って、鍬入れ式を挙行了した。
- 5 月 グリッド発掘による遺構確認調査の結果、調査エリア全域から遺構が濃密に確認されたので、調査地域の表土を全面除去して調査を進めることにした。11日から重機（バックホー）を導入して北郷C遺跡の表土除去を行い、併せて遺構検出作業を始めた。20日には北郷C遺跡の表土除去が終了し、引き続き森戸遺跡の表土除去に入った。
- 6 月 1日には森戸遺跡の表土除去が終了したため、遺構検出作業を継続すると共に、北郷C遺跡の第6～21号住居跡の調査を進めた。22日北郷C遺跡・森戸遺跡から多数の遺構が確認されたため、茨城県教育委員会と茨城県土木部・茨城県大宮土木事務所及び茨城県教育財団による三者協議が行われ、昭和62年度は、北郷C遺跡の3,090㎡と森戸遺跡の9,365㎡のうち4,110㎡を調査し、残りの5,255㎡については、昭

和63年度に6か月間期間を延長して調査することで一致した。

- 7 月 北郷C遺跡の第1～5号住居跡の調査を残し、北郷C遺跡が終了近くなったため、6日から森戸遺跡の調査に主力を移し、第1～40号住居跡の調査を進めた。8日北郷C遺跡の航空写真撮影を行い、9日に北郷C遺跡の調査を終了した。
- 8 月 森戸遺跡の第41～56号住居跡の調査を進めたが、森戸遺跡は北郷C遺跡に比べ、遺構の規模も大きく、重複している住居跡も多く見られた。
- 9 月 10日東京国立博物館学芸部長(当時)亀井正道氏を招いて、石製模造品について、班内研修会を実施した。19日には両遺跡の現地説明会を行い、発掘調査の成果を発表した。22日森戸遺跡の航空写真撮影を行い、さらに図面等の補足と遺物等の搬出準備作業等を行い、事務所も解体し、28日を以て、昭和62年度分の調査は終了した。

<昭和63年度-二次調査>

- 4 月 14日から現場作業を開始し、事務所及び発掘調査に必要な現場倉庫の設置、調査器材等の搬入を行った。さらに、昭和62年度表土除去を行わなかった部分(3,976㎡)の試掘を行うと共に、昭和62年度に表土除去を終了している部分(1,279㎡)の遺構調査を進めた。
- 5 月 第58～74号住居跡、第71～99号土坑の調査を進めた。9日から重機を導入し表土除去を行い、遺構検出作業を進めた。27日には表土除去が終了し、遺構検出作業の結果、多数の住居跡・土坑・堀などが確認された。
- 6 月 第94～120号、第154～174号住居跡の調査を進めた。8日森戸遺跡から多数の遺構が検出されたため、茨城県教育委員会と茨城県土木部・茨城県大宮土木事務所、及び茨城県教育財団による三者協議が行われ、調査期間を1か月延長し、また写真測量を導入することで一致した。28日からシン航空写真株式会社の写真測量を行い、調査の進展を図った。
- 7 月 2日からは豪族居館跡の堀の調査を開始した。堀の覆土中から古墳時代中期・後期の遺物が出土し、特に張出部からは多くの遺物が出土した。19日には、第64号住居跡から300点以上にも及ぶ石製模造品が出土した。
- 8 月 第78～93号、第129～152号住居跡の調査を進めた。また、前月に引き続き写真測量を実施し調査の進展を図ったが、遺構の重複が激しいことや、例年になく雨天日が多いことで調査は難航した。
- 9 月 遺構調査は、残りの住居跡15軒と土坑116基を進めた。8日早稲田大学助手の橋本博文氏を招いて、豪族居館跡の構造と性格について班内研修会を実施した。また、遺跡北端部から先土器時代の石器が出土したので、16日からローム層をグリッドご

とに掘り下げて、石器の検出作業を開始した。26日現地説明会を行い、昭和63年度の発掘調査の成果を発表した。

- 10 月 遺構調査も順調に進み、17日頃から補足調査や航空写真撮影のため、遺構内外の清掃を始めた。20日航空写真撮影を行い、調査終了に伴う出土遺物や調査器材等の搬出を開始した。10月31日森戸遺跡についてのすべての調査を終了した。



調査風景



現地説明会風景

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

北郷C遺跡は、茨城県那珂郡那珂町額田北郷993-1ほかに所在し、森戸遺跡は、同町額田北郷787ほかに所在する。

両遺跡の所在する那珂郡那珂町は、県の中央部からやや北寄りに位置し、県都・水戸市から町の中心部までは北へ約8.3kmである。町域は、東西約11.8km、南北約11.2kmあり、面積は82.73km²（那珂町「町勢要覧1985年」による）、人口は42,552人（平成元年4月現在）である。町の北側は久慈川を隔てて常陸太田市・久慈郡金砂郷村・日立市、東側是那珂郡東海村・勝田市、南側是水戸市、西側は東茨城郡常北町・桂村・那珂郡瓜連町・大宮町に接している。那珂町には、JR水郡線が南北に縦貫しており、常磐自動車道が南西から北東に、国道6号・118号・349号が南から北に併走している。当町の産業の基盤は農業である。集落は、主にJR水郡線の駅周辺や、道路にそって形成されており、近年国道349号菅谷バイパスを中心に新市街地が形成されるなど新しい町づくりが進められている。

那珂町は、北を久慈川、南を那珂川に挟まれた地域で、大部分が、標高35～50mの那珂台地によって占められている。この台地には、奥深くまで久慈川・那珂川の支流が樹枝状に入り込み、台地は開析され、舌状台地となっている。又、町の北西部には、標高90m前後の瓜連丘陵が迫っている。久慈川・那珂川の流域には、沖積低地が広がっており、これら沖積低地を臨む台地縁辺部には河岸段丘（額田台地・門部台地など）が形成されている。久慈川を挟んだ北側の沖積低地に発達した自然堤防には、集落が形成されている。更に、その北方には多賀山地・久慈山地が迫っている。⁽²⁾

今回調査した北郷C・森戸両遺跡は、那珂町の北端部で、額田台地の北西部に位置している。額田台地の北側には久慈川が蛇行しており、南側には本米崎低地から延びる谷が奥深くまで入り込み、独立丘状を成している。額田台地は、標高が30m前後の平坦な地形となっており、その殆どが畑地である。近年まで牛蒡の耕作が盛んに行われ、両遺跡ともトレンチャーによってローム層に至るまで深く攪乱されている。久慈川流域の沖積低地は水田に利用され、両遺跡との比高は約20mである。

第2節 歴史的環境

北郷C・森戸両遺跡の所在する、久慈川右岸の台地上及びその周辺には、先土器時代以降、各時代にわたって数多くの遺跡が濃密に分布している。それらの遺跡群は、茨城県内における各時

代を特徴づける遺物が出土している。⁽³⁾以下、那珂町を中心に北郷C・森戸両遺跡周辺の遺跡について、時代毎に記述したい。⁽⁴⁾

まず、先土器時代に属するものに、額田大宮遺跡⁽⁵⁾・新地遺跡⁽⁵⁾・森戸遺跡⁽⁵⁾があげられる。額田大宮遺跡は、昭和52年に那珂町史編纂に伴い小規模な発掘調査が行われ、200点以上もの細石刃や搔器⁽⁶⁾が出土した。そもそも那珂台地は、山方遺跡⁽⁷⁾（山方町）や後野遺跡⁽⁷⁾（勝田市）など先土器時代の遺跡が所在することで知られており、那珂町、とりわけ額田台地は、先土器文化を考える上で重要な位置を占めるものと思われる。

縄文時代では、草創期に位置付けられる豊喰遺跡⁽⁸⁾から、搔器・削器などと共に爪形文土器・押圧縄文土器が出土し、発生期土器として貴重な資料を提供している。⁽⁸⁾早期の遺跡としては、花輪台式土器を出土した南酒出遺跡⁽⁹⁾が著名である。前期から中期にかけては、久慈川・那珂川に臨む台地縁辺部から多数の土器片が採集されている。しかし、発掘調査がなされていないこともあり、その実相は明らかになっていないのが現状である。後期の遺跡としては、本米崎に所在する籠内遺跡⁽¹⁰⁾がある。当遺跡は、まだ調査されていないが、中期から後期にかけての土器群と共に後期掘之内式期のものと比定される土偶15点が、表面採集によって確認されている。⁽¹⁰⁾

弥生時代では、人面付壺形土器を出土した海後遺跡⁽¹¹⁾（本米崎に所在）が著名であり、⁽¹¹⁾ 女方遺跡⁽¹¹⁾（下館市）・小野天神前遺跡⁽¹²⁾（大宮町）と共に、県内の弥生時代中期を代表する遺跡である。後期終末期では、十王台式土器を出土する遺跡が那珂台地には濃密に分布している。その中でも、久慈川に面した額田・門部の両台地には21か所の遺跡が確認されており、主な遺跡には、海後遺跡⁽¹²⁾・伊達遺跡⁽¹³⁾・門部遺跡⁽¹³⁾などがある。

古墳時代、那珂町において確認されている古墳は、中期の5世紀前半に比定されるひょうたん塚古墳を最古とし、6世紀以降の古墳群が主体をなしている。⁽¹⁴⁾その一方で、那珂台地を挟む久慈川・那珂川の対岸には、5世紀代に比定される県内第2・第3の規模を有する⁽¹⁴⁾ 梵天山古墳⁽¹⁴⁾、愛宕山古墳⁽¹⁴⁾がその威容を誇っており、それぞれ久自（久慈）国造舟瀬足尼、仲（那賀）国造建借間命の墓といわれている。⁽¹⁵⁾当時、那珂台地は、久自国と仲国のそれぞれの国造によって支配されており、⁽¹⁵⁾ 久慈川・那珂川沿岸にはそれぞれ独自の文化が形成されていたものと思われる。⁽¹⁶⁾久自国の影響下にあった久慈川右岸の台地上には、額田東郷古墳群⁽¹⁷⁾・天神小屋古墳群⁽¹⁸⁾・門部古墳群⁽¹⁸⁾などが所在する。額田古墳群の中には、凝灰岩を削りぬいた舟形石棺が数基出土している。7世紀代に位置づけられる⁽¹⁶⁾ 白河内古墳⁽¹⁶⁾は、線刻による壁画を有していることで知られている。7世紀末から8世紀になると、この地域には横穴墓が盛行し、天神小屋横穴墓群では20基以上を確認している。集落跡としては、古墳時代前・中・後期を通じて久慈川右岸の台地上に濃密に遺跡の分布がみられる。特に、今回報告する森戸遺跡は、滑石製石製模造品を大量に出土する遺跡として以前から知られていた。⁽¹⁹⁾また、久慈川を挟んだ対岸の常陸太田市には、7世紀代に比定され本県最古の⁽¹⁹⁾ 幡須恵窠跡⁽¹⁹⁾

があり、注目される⁽²⁰⁾。

奈良・平安時代の遺跡は、他の時代と同様、久慈川・那珂川に臨む台地縁辺部に濃密な分布がみられる。伊達遺跡⁽²¹⁾・森戸遺跡⁽²²⁾・門部遺跡⁽²²⁾などからは、墨書土器が出土している。更に、森戸遺跡からは、平安時代のものと考えられる和鏡も出土している⁽²³⁾。

中世以降の遺跡としては、鎌倉時代初期の築城とされる額田城跡⁽²⁴⁾があげられる。額田城は、佐竹氏から別家した佐竹義直が築き、現在も堀跡を残している。

注・参考文献

- (1) (7) (10) (14) (16) (20) (23) 那珂町史編さん委員会『那珂町史 自然環境・原始古代編』1988年
- (2) 常陸太田市史編さん委員会『常陸太田市史 通史編 上巻』1984年
- (3) (11) 茨城県『茨城県史 原始古代編』1985年
- (4) 川崎純徳「茨城の考古学研究与那珂町の埋蔵遺跡」『那珂町史の研究 第1号』1979年
茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』1987年
- (5) 『茨城県遺跡地図』には「北郷A遺跡」として記載してある。
- (6) 茨城県『茨城県史料 考古史料編 先土器・縄文時代』1979年
- (8) 川崎純徳「那珂町豊喰遺跡の再検討」『那珂町史の研究 第5号』1984年
- (9) 『茨城県史 原始古代編』による。『那珂町史 自然環境・原始古代編』には「山王原遺跡」として記載してある。
- (12) (21) 『那珂町史 自然環境・原始古代編』による。『茨城県遺跡地図』の「新地遺跡」と一部重なる。
- (13) (22) 『那珂町史 自然環境・原始古代編』による。『茨城県遺跡地図』の「中組遺跡」と一部重なる。
- (15) 茨城県『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』1974年
水戸市史編さん委員会『水戸市史 上巻』1963年
- (17) 『茨城県遺跡地図』による。『那珂町史 自然環境・原始古代編』には「伊達古墳群」として記載してある。
- (18) 「おはぐろ塚古墳」「鈴照山塚古墳」など門部地区に所在する古墳を一括してとらえた。
- (19) 大塚初重「古墳時代概観 集落と祭祀遺跡・生産関係遺跡」『茨城県史料 考古史料編 古墳時代』1974年
小野真一『祭祀遺跡地名総覧』1982年
- (24) 阿久津久『日本城郭大系 第4巻(茨城編)』1979年

第4図 北郷C・森戸遺跡周辺遺跡分布図



表 1 北郷 C・森戸遺跡周辺遺跡一覧表

遺跡名	種類	遺跡の時代				遺跡名	種類	遺跡の時代				遺跡名	種類	遺跡の時代			
		先土器	縄文	弥生	古墳			その他	先土器	縄文	弥生			古墳	その他	先土器	縄文
1 本米崎遺跡	集落跡		○			26 籠内遺跡	集落跡					51 西中宿西遺跡	包蔵地				
2 海後遺跡	集落跡			○		27 永井遺跡	集落跡					52 石神外宿古墳群	古墳群			○	
3 松原遺跡	集落跡			○		28 新地遺跡	集落跡					53 向塚越遺跡	包蔵地			○	
4 本米崎古墳群	古墳群				○	29 伊達遺跡	集落跡					54 外銭袋遺跡	包蔵地			○	
5 横堀古墳群	古墳群				○	30 柄目遺跡	集落跡					55 荒工遺跡	包蔵地			○	
6 額田東郷古墳群	古墳群				○	31 森戸遺跡	集落跡					56 西山遺跡	包蔵地			○	
7 富士山古墳群	古墳群				○	32 北酒出遺跡	集落跡					57 鹿島台遺跡	集落跡			○	
8 天神小屋古墳群	古墳群				○	33 額田大宮遺跡	包蔵地					58 鹿島古墳	古墳			○	
9 天神小屋横穴墓群	横穴群				○	34 北郷 B 遺跡	集落跡					59 鹿島遺跡	集落跡			○	
10 南酒出古墳群	古墳群				○	35 北郷 C 遺跡	集落跡					60 星神社古墳	古墳			○	
11 ひょうたん塚古墳群	古墳群				○	36 北郷 D 遺跡	集落跡					61 諏訪古墳群	古墳群			○	
12 畑中古墳群	古墳群				○	37 額田南郷遺跡	集落跡					62 道場塚古墳	古墳			○	
13 おはぐろ塚古墳	古墳				○	38 横堀遺跡	集落跡					63 ばくちくち横穴群	横穴群			○	
14 稲荷様古墳	古墳				○	39 久保遺跡	集落跡					64 東山古墳群	古墳群			○	
15 中組遺跡	その他				○	40 本米崎古墳群わき遺跡	集落跡					65 峰遺跡	包蔵地			○	
16 門部遺跡	集落跡				○	41 藤咲円後館跡	城館跡					66 島遺跡	包蔵地			○	
17 鈴照山塚古墳	古墳				○	42 二軒茶屋古墳群	古墳群					67 峰山古墳群	古墳群			○	
18 白河内古墳群	古墳群				○	43 塚越遺跡	包蔵地					68 梵天山古墳群	古墳群			○	
19 権現山横穴	横穴				○	44 東山南遺跡	包蔵地					69 谷河原横穴群	横穴群			○	
20 加藤安房館跡	城館跡				○	45 宮後遺跡	窯跡					70 島横穴群	横穴群			○	
21 額田城跡	城館跡				○	46 遠西遺跡	包蔵地					71 峰山館跡	城館跡			○	
22 南酒出城跡	城館跡				○	47 八軒原 A 遺跡	包蔵地					72 釜多館跡	城館跡			○	
23 北酒出城跡	城館跡				○	48 八軒原 B 遺跡	包蔵地					73 川合城跡	城館跡			○	
24 所の内遺跡	製鉄跡				○	49 木ノ下南遺跡	包蔵地					74 上河合遺跡	桑里遺跡			○	
25 入向山遺跡	集落跡				○	50 東山遺跡	包蔵地					75 南酒出遺跡	集落跡			○	

第3章 遺構・遺物の記載方法

第1節 遺構の記載方法

本書では、遺構の記載に関して、下記の要領で統一した。

1 使用記号

名称	住居跡	土坑	堀・溝	井戸	道路	掘立柱建物	柵列	その他
記号	S I	S K	S D	S E	S F	S B	S A	S X

2 遺構及び出土遺物の表示方法

焼土 =  カマド・炉 =  凝灰岩 = 
 ● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 ☆ 金属製品

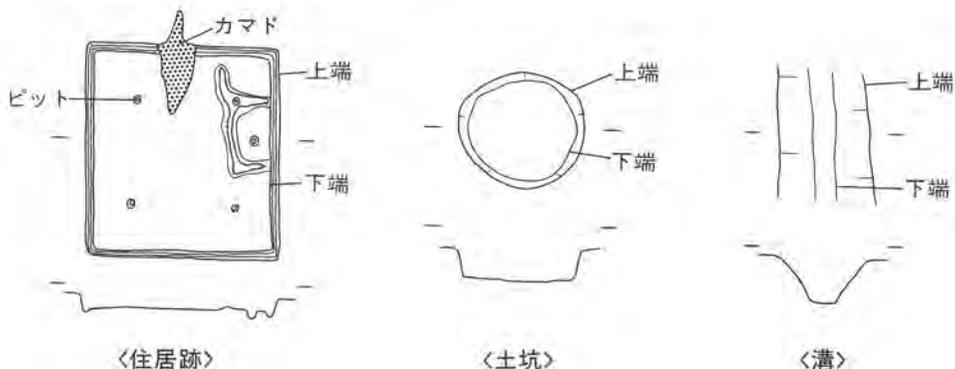
3 遺構番号

遺構番号については、遺構の種別毎に調査順に付したが、後に遺構でないと判断したものは欠番とした。

4 土層の分類

土層観察における色相の判定は、「新版標準土色帳」（小山正忠・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社）を使用し、図版実測図中に記載した。尚、攪乱層についてはKと表記した。

5 遺構実測図の作成方法と掲載方法



- 住居跡は、縮尺20分の1の原図を2分の1に縮小し、トレースして版組し、それをさらに1.5分の1または2分の1に縮小して掲載した。
- 土坑は、縮尺20分の1の原図をトレースして版組し、それをさらに3分の1に縮小して掲載した。井戸は4分の1に縮小して掲載した。
- カマド・炉は、10分の1の原図を2分の1に縮小し、トレースして版組し、それをさらに1.5分の1または2分の1に縮小して掲載した。
- 溝・堀は、縮尺20分の1の原図を4分の1に縮小し、トレースして版組し、それを適宜に縮小して掲載した。
- 実測図中のレベルは標高であり、m単位で表示した。また同一図中で同一標高の場合に限り、一つの記載で表し、標高が異なる場合は各々表示した。

〈本文の住居跡の記載について〉

- 『位置』は、遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。
- 『重複関係』は、住居跡の切り合い関係を記した。
新旧関係の明らかな場合については、「旧」<「新」で表した。
- 『平面形』は、壁の上端部で判断し、方形・長方形の場合は下記の分類基準を設け、そのいずれかを明記した。
方形（短軸：長軸＝1：1.1未満のもの）、長方形（短軸：長軸＝1：1.1以上のもの）
- 『規模』は、壁の上端部の計測値であり、長軸×短軸の順にm単位で表記した。壁高は、残存壁高の計測値である。なお（ ）を付したものは現存値を示し、[]を付したものは推定値を示した。
- 『主軸方向』は、炉又はカマドを通る線を主軸として、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ傾いているかを角度で表示した。なお[]を付したものは、推定を表わす。
- 『壁』は、床面からの立ち上がり角度が81°～90°を垂直、65°～80°を外傾、65°未満を緩斜、さらに90°以上を内傾とした。
- 『壁溝』は、その形状や規模を記述した。
- 『床』は、「平坦」「緩い傾斜」に分類した。
- 『ピット』は、その住居跡に伴うと考えられるピットをPで表示し、P₁・P₂はピット番号を表し、さらに、ピットの直径と深さを記述した。
- 『貯蔵穴』は、その形状を記述し、数字は直径と深さを示した。
- 『炉・カマド』は、その種類を記し、さらに形状と特徴を記した。
- 『覆土』は、堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」、人為堆積の場合は「人為」、攪乱を受けている場合は「攪乱」と記した。

- 『遺物』は、遺物の種類と数、さらに出土位置や状態を記述した。また遺構の平面図中に出土位置をドットで表示し、接合できたものは実線で結んだ。なお出土遺物に付した数字は、遺物実測図及び拓影図の番号と符合する。
- 『所見』は、当該住居跡についての時期やその他特記すべき事項を記述した。

6 一覧表の見方について

(1) 住居跡一覧表

住居番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m)		壁高 (cm)	内 部 施 設					炉 カマド	覆土	出土遺物	時期	備考	
				長 軸	短 軸		壁溝	支柱穴	貯蔵穴	入り口部施設	その他						

本文の住居跡の記載方法に準じた。

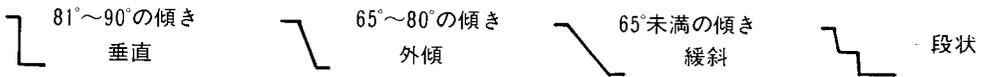
(2) 土坑一覧表

土坑番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模 (cm)			壁 面	底面	覆土	形態	出土遺物	分類	備考	図版番号
				長径	短径	深さ								

○平面形は、円形・楕円形の場合に下記の分類基準を設けて表示した。

円形 (短径:長径 = 1 : 1.2 未満のもの)、楕円形 (短径:長径 = 1 : 1.2 以上のもの)

- 規模の欄の長径×短径は、上端部の計測値(m)で表した。
- 規模の欄の深さは、遺構確認面から坑底の最も深い部分までの計測値(cm)で表した。
- 壁面は、坑底からの立ち上がりの状態を下記の基準で分類し表示した。



○底面は、下記の基準で分類し表示した。

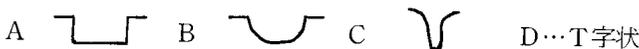


○土坑の形態分類については、下記のとおりに表示した。

① 平面形

- I…円形 II…楕円形 III…方形・隅丸方形 IV…長方形・隅丸長方形 V…不整形
- VI…重複によって形状不明のもの

② 断面形



③ 規模 (長径, 長軸長)

- 1…1.0m未満 2…1.0m以上1.5m未満 3…1.5m以上2.0m未満
 4…2.0m以上3.0m未満 5…3.0m以上

④ 深さ（確認面から底面までの長さ）

- a…0.5m未満 b…0.5m以上1.0m未満 c…1.0m以上

以上の記号を組み合わせる「IB3c」のように表示した。

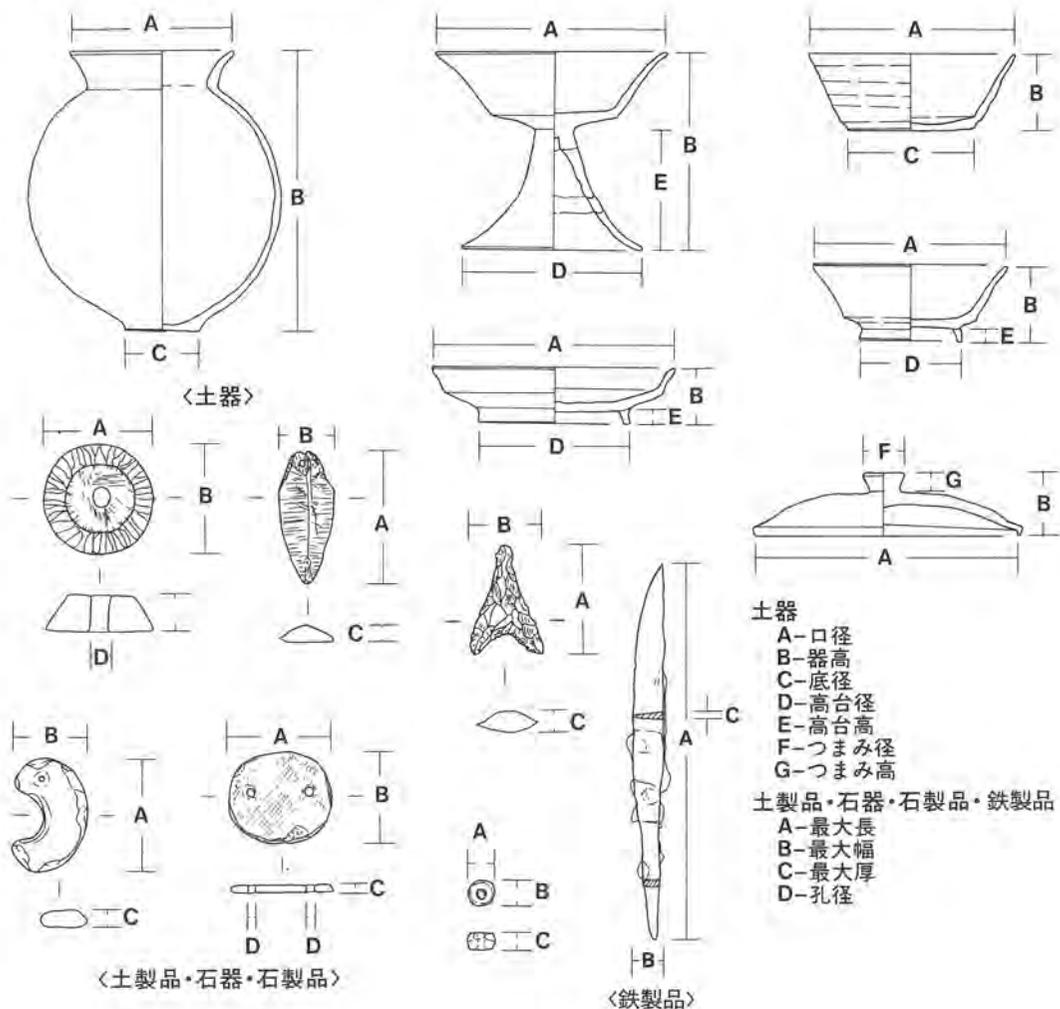
第2節 遺物の記載方法

遺跡から出土した遺物については、実測図・拓影図・写真等により掲載した。

1 遺物の実測図中の表示方法



2 各部位の名称と量表現



3 遺物実測図の作成方法と掲載方法

- 土器の実測は、原則として中央線の左側に外面，右側に内面と断面を図示した。
- 土器拓影図は，右側に断面図を図示した。表裏両面の拓影図を掲載する場合には，断面を中央に配し，左側を外面，右側を内面とした。
- 石器・石製品の実測は，三角図法を用いることを基本としたが，遺物によっては正面図・立面図のみを図示したものもある。
- 遺物は，原則として実測図を原寸トレースしたものを3分の1に縮小して掲載した。しかし，遺物の大きさ等により，それ以外の縮尺を使用した場合もある。

4 出土土器観察表について

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考

- 図版番号は，実測図中の番号である。
- 器種は，同一器種別にまとめて掲載した。
- 法量は，A…口径，B…器高，C…底径，D…高台径，E…高台高，F…つまみ径，G…つまみ高とし，単位はcmである。なお（ ）は現存値を，[]は復元推定値を示した。
- 器形の特徴は，底部・体部等の各部位について土器観察の結果を記した。
- 手法の特徴は，土器の成形・整形について記した。
- 胎土・色調・焼成の順で述べ，色調は「新版標準土色帳」を使用した。焼成については，「良好」，「普通」，「不良」に分類し，硬く焼き締まっているものは良好，焼きがあまり器面が剝離しやすいものは不良とし，その中間のものを普通とした。
- 備考は，出土位置・完存率・遺物番号・写真番号等を記した。
- 須恵器や土師器（奈良・平安）の坏類は，粘土塊から土器を挽き出す方法ではなく，回転台上で底部は粘土円板，体部は巻き上げで成形し，その後回転力を利用して巻き上げ痕を消す方法で製作されたものととらえた。そして，手法の特徴の欄には水挽き整形という名称で記述した。

第4章 北郷C遺跡



第5図 北郷C・森戸遺跡周辺地形図
及び遺跡位置図



那珂町都市計画図より転載



第6図 北郷C遺跡地形図



第7図 北郷C遺跡全体図

第1節 遺跡の概要

北郷C遺跡は、久慈川右岸の標高20～30mの額田台地の北西部に位置し、当遺跡の北東約250mには先土器時代から近世にまで及ぶ遺構・遺物が検出されている森戸遺跡が所在している。

今回の調査は、南北に細長く、道路として開発される幅約24m、長さ約129mで調査面積は3,090㎡である。現況は畑で近年までゴボウ等の耕作が盛んに行われ、トレンチャーにより攪乱されている。

検出された遺構は、竪穴住居跡16軒、掘立柱建物跡3棟、土坑43基、溝5条、道路跡2条、柵列跡2条、性格不明遺構1基、ピット139基である。竪穴住居跡は、奈良時代から平安時代のものであり、調査区全域から検出されている。

遺物は、土師器・須恵器を中心に陶器・石製品・鉄製品・青銅製の鍔帯具・埴仏等が出土している。その他、縄文土器片・弥生土器片・石器が少量出土している。土師器や須恵器は主に平安時代に比定され、日常食器や容器として使用されている坏・甕などである。また、土師器や須恵器の坏・高台付坏には墨書がなされているものも見られる。

これらの遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に20箱程出土している。

第2節 遺構と遺物

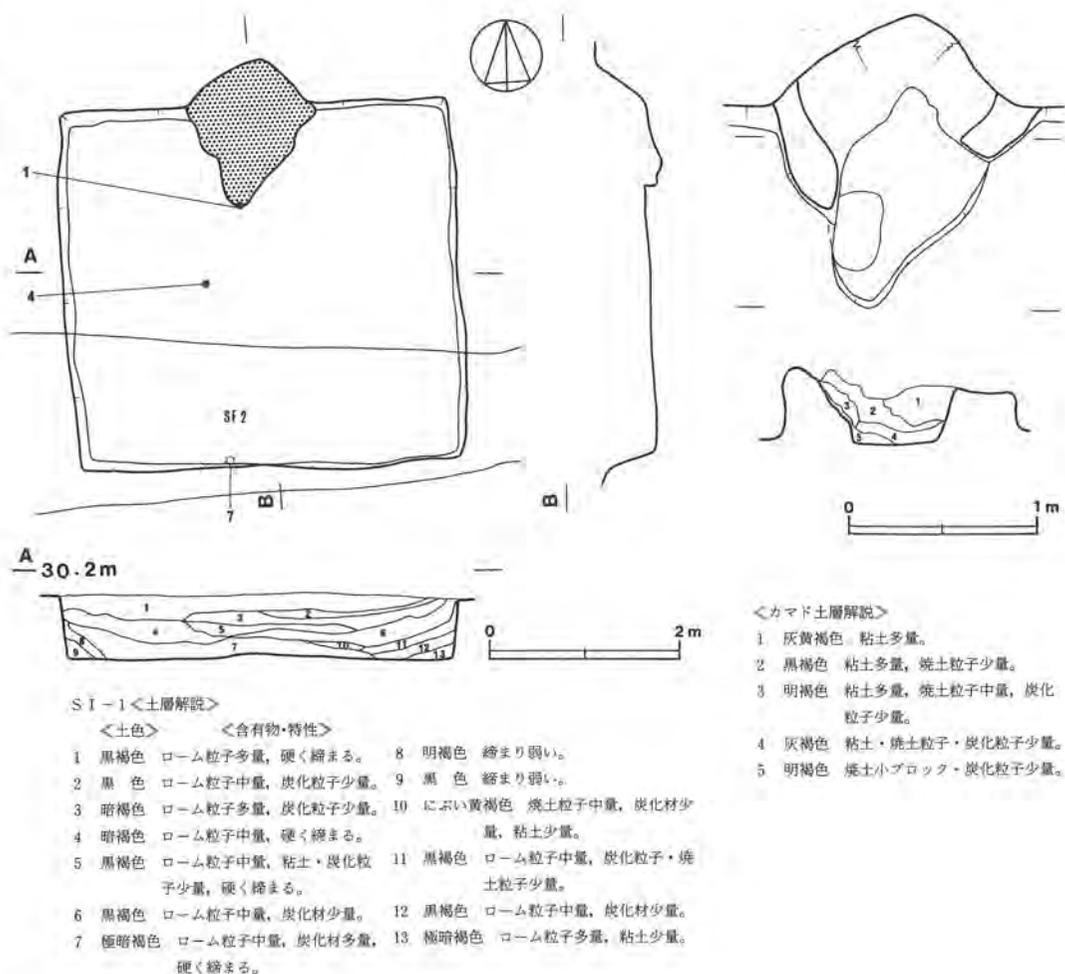
1 竪穴住居跡

第1号住居跡（第8図）

位置 A2f₈区。**重複関係** 本跡<SF-2。**平面形** 方形。**規模** 4.21×3.90m。**主軸方向** N-0°。**壁** 垂直。壁高52～71cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。カマド前方から中央部にかけて極めて硬い。**ピット** 無。**貯蔵穴** 無。**カマド** 北壁中央部を50cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面を15cm程掘り窪め、ロームが火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器片503点（うち内黒土器片40点）、須恵器片41点、鍔帯具1点、鉄製品1点が出土。特に土師器の甕片が多い。第36図7の青銅製の鍔帯具（巡方）が南壁中央部の床面から出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

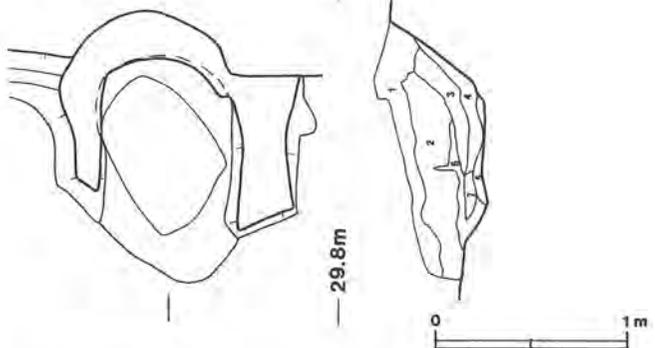
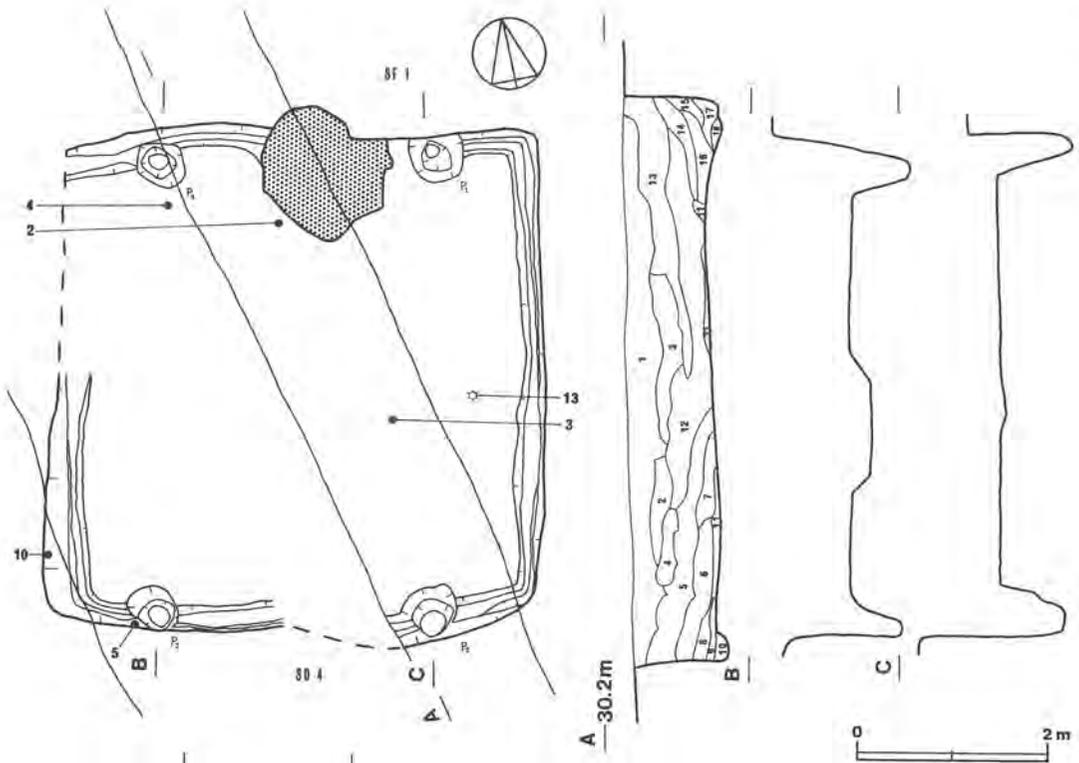


第8図 第1号住居跡・カマド実測図

第3号住居跡 (第9図)

位置 A2j6区。重複関係 本跡<SF-1, SD-4。平面形 隅丸方形。規模 5.32×5.24m。主軸方向 N-15°-E。壁 内傾。壁高75~82cm。壁溝 幅18~30cm, 深さ10cm前後で全周。床平坦。全体的に硬い。ピット 4か所。P₁~P₄(径50cm前後, 深さは57~77cm)はすべて主柱穴。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部を15cm程掘り込み, 粘土・砂などで構築。火床は床面を15cm程掘り窪め, ロームがレンガ状に焼き締まっている。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり, 住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片724点(うち内黒土器片68点), 須恵器片30点, 鉄製品(刀子1点, 鋸片1点, 不明2点)が出土。土師器の甕片が多く, 内黒土器の中には墨書されたものが5点出土。第36図4の坏が北西部の床面から, 10の皿が南西コーナー付近の覆土上層から出土。東壁中央部付近の床面



＜カマド土層解説＞

- 1 灰褐色 粘土多量、焼土小ブロック中量、炭化粒子少量。
- 2 灰黄褐色 粘土少量、焼土小ブロック多量、炭化材少量。
- 3 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、炭化粒子少量。
- 4 暗褐色 粘土中量、焼土粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック中量。
- 5 明褐色 ロームが赤変硬化。
- 6 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・焼けた粘土少量。
- 7 灰黄褐色 焼土粒子・粘土少量。

S 1-3 <土層解説>

＜土色＞ ＜含有物・特性＞

- | | |
|---------------------------------|----------------------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量。 | 11 黒褐色 炭化粒子少量、硬く締まる。 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量。 | 12 黒褐色 ローム粒子多量、炭化物・粘土少量。 |
| 3 黒褐色 ローム粒子少量。 | 13 極暗褐色 ローム粒子中量、粘土少量。 |
| 4 極暗褐色 ローム粒子中量、粘土・炭化粒子少量。 | 14 極暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・焼土粒子少量。 |
| 5 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量、粘土少量。 | 15 明褐色 ローム粒子中量。 |
| 6 極暗褐色 ローム粒子多量、粘土少量。 | 16 明褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量、粘土中量、炭化粒子・焼土粒子少量。 |
| 7 黒褐色 ローム粒子少量。 | 17 暗褐色 ローム粒子多量、粘土・炭化粒子少量。 |
| 8 褐色 ローム粒子多量。 | 18 褐色 ローム粒子少量。 |
| 9 極暗褐色 ローム粒子少量、硬く締まる。 | |
| 10 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量。 | |

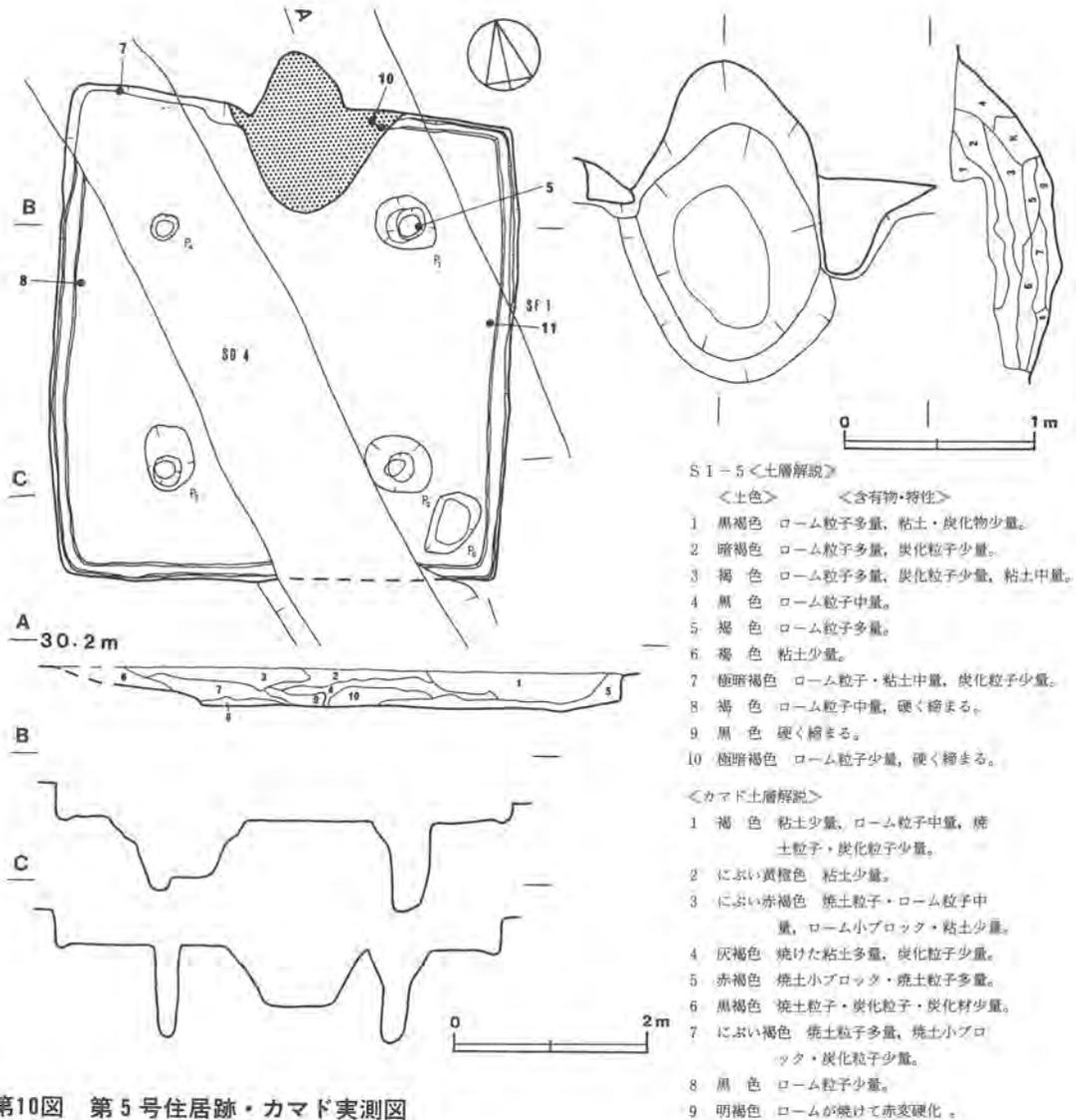
第9図 第3号住居跡・カマド実測図

から13の鉄製の刀子が3つに折れて出土。

所見 支柱穴の位置が他の竪穴住居跡とは異なり、南北の壁際に検出されている。本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第5号住居跡（第10図）

位置 B2c7区。**重複関係** 本跡<SF-1, SD-4。 **平面形** 方形。 **規模** 5.24×4.86m。 **主軸方向** N-18°-E。 **壁** 垂直。 **壁高** 32~36cm。 **壁溝** 幅16~22cm, 深さ2~4cmで全周。 **床** 平坦。 **全体的に** 硬い。 **ピット** 5か所。 P₁~P₄(径30~76cm, 深さ78~100cm)が支柱穴。 P₅(径76×45cm, 深さ20cm)は性格不明。 **貯蔵穴** 無。 **カマド** 北壁中央部に位置し、壁面を60cm程掘り込ん



第10図 第5号住居跡・カマド実測図

で付設。粘土・砂などで構築しており、東側の袖の補強に凝灰岩を使用。火床は床面を17cm程掘り窪め、ロームがレンガ状に焼き締まっている。火床から凝灰岩製の支脚(長さ16.5cm, 径73cm)が倒れた状態で出土。煙道部は火床から緩やかに立ち上がり、住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片81点(うち内黒土器片10点)、須恵器片17点が出土。遺物はカマド付近に集中。第37図4の坏・9の蓋がカマド燃焼部の覆土下層から、11の蓋が東壁中央部付近の床面から逆位の状態で出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

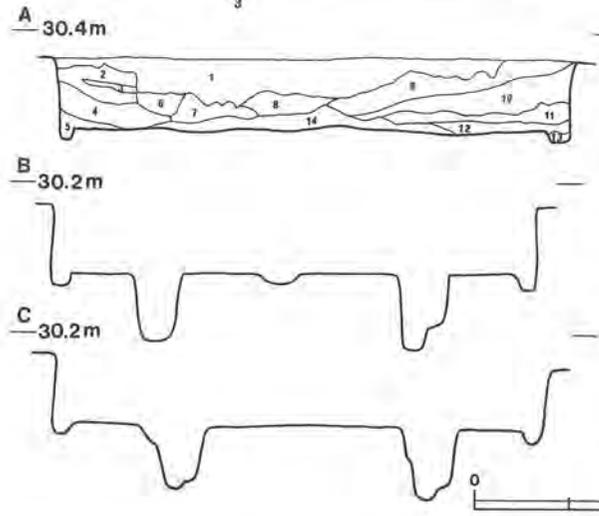
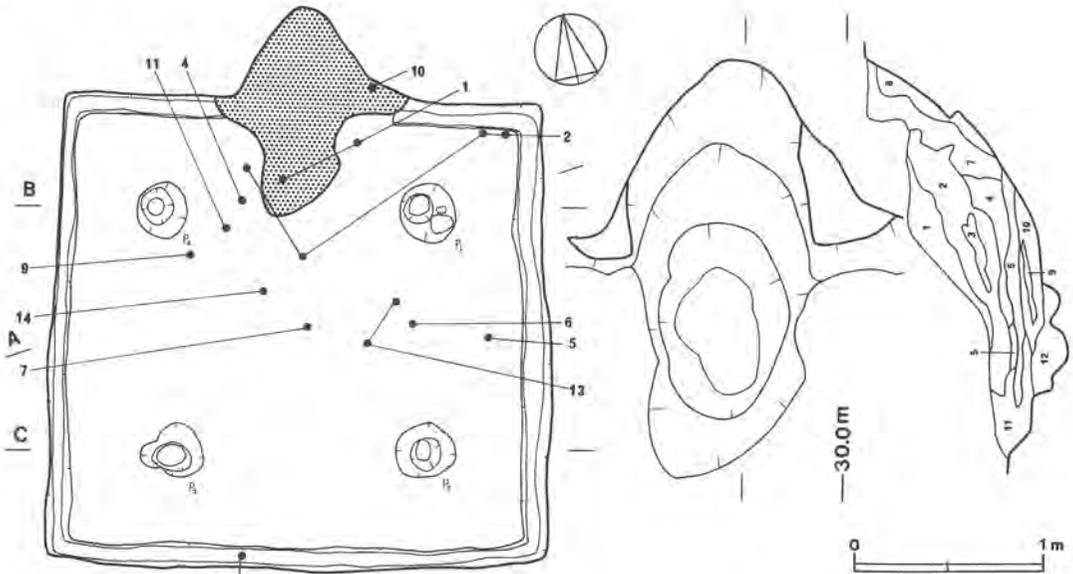
第6号住居跡(第11図)

位置 B2g₃区。**重複関係** 無。**平面形** 方形。**規模** 5.30×5.03m。**主軸方向** N-17°-E。**壁** 内傾。壁高66~75cm。**壁溝** 幅14~32cm, 深さ13~17cmで全周。**床** 平坦。貼床。壁際まで硬い。**ピット** 4か所。P₁~P₄(径60~66cm, 深さ66~78cm)はすべて支柱穴。**貯蔵穴** 無。**カマド** 北壁中央部に位置し、壁面を100cm程掘り込んで付設。粘土・砂などで構築しており、東側の袖の補強に凝灰岩を使用。火床は床面を30cm程掘り窪め、ロームが焼けて赤変硬化している。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片694点(うち内黒土器片41点)、須恵器片209点、鉄製品(釘3点, 刀子片1点, 鋏1点, 不明1点)が出土。特に土師器の甕片や須恵器の坏片が多い。第37図2の甕が北東コーナー付近の床面から、第38図5の坏が東壁中央部付近の覆土下層から逆位で、6の坏が中央部付近の覆土中層から逆位で、12の盤が北壁周溝の底面から、14の釉が付着した蓋が中央部の覆土中層から逆位で出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。





＜カマド土層解説＞

- 1 褐色 粘土多量、焼土粒子少量。
- 2 にぶい黄褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土少量。
- 3 にぶい黄褐色 粘土中量。
- 4 にぶい黄褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、炭化粒子少量。
- 5 極暗褐色 炭化粒子中量、焼土粒子少量。
- 6 赤褐色 ローム小ブロック多量、焼土小ブロック・粘土少量。
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子少量。
- 8 褐色 粘土・炭化粒子少量。
- 9 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子中量。
- 10 赤褐色 焼土小ブロック多量、炭化粒子少量。
- 11 褐色 粘土多量、焼土粒子・炭化粒子少量。
- 12 黄褐色 炭化粒子少量。

SI-6＜土層解説＞

＜土色＞ ＜含有物・特性＞

- 1 黒色 炭化物・焼土粒子少量。
- 2 暗褐色 炭化粒子少量。
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量。
- 4 黒褐色 ローム粒子多量、炭化粒子・焼土粒子少量。
- 5 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量、軟らかく締まり弱い。
- 6 黒褐色 ローム粒子中量、硬く締まる。
- 7 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子・焼土粒子少量。
- 8 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子中量、粘土・焼土小ブロック少量。
- 9 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子・焼土粒子少量、粘性強く締まる。
- 10 極暗褐色 ローム粒子極めて多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量。
- 11 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量。
- 12 暗褐色 ローム粒子・粘土・焼土粒子・炭化粒子中量、粘性あり締まる。
- 13 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、粘土・炭化粒子・焼土粒子少量、粘性あり締まる。
- 14 灰褐色 粘土多量、焼土粒子、炭化粒子中量、焼土小ブロック少量、粘性強く締まる。

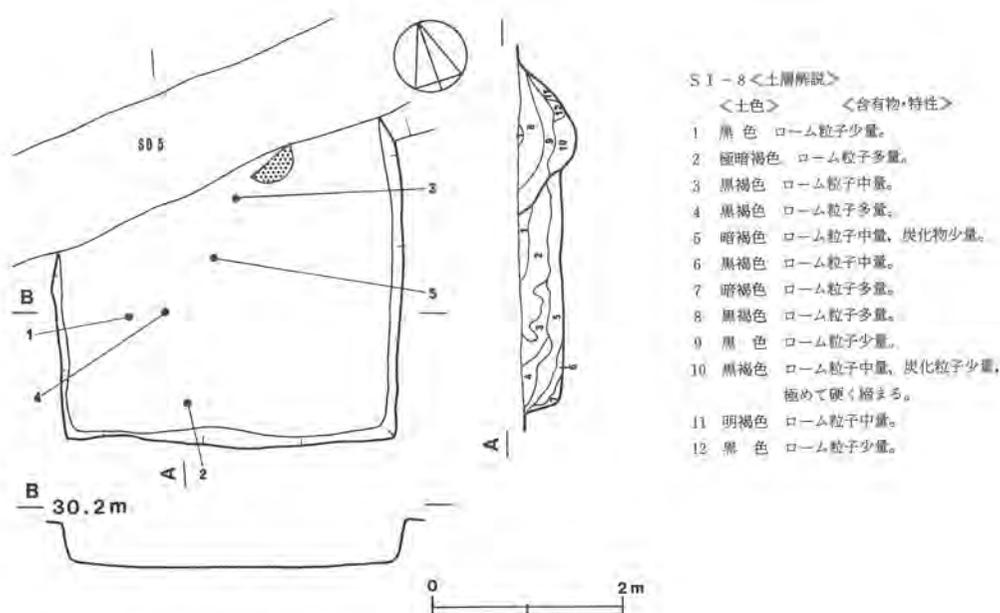
第11図 第6号住居跡・カマド実測図

第8号住居跡 (第12図)

位置 B2b_s区。**重複関係** 本跡<SD-5。平面形 [方形]。規模 3.69×[3.44]m。主軸方向 N-12°-E。**壁** 垂直。壁高43~45cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。特にカマド前方から南壁際にかけて硬い。**ピット** 無。**貯蔵穴** 無。**カマド** 北壁中央部に付設。第5号溝によって切られ、袖の一部が残るだけで、詳細は不明。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器片34点(うち内黒土器片1点)、須恵器片22点が出土。遺物は住居内全体から出土。第38図3の甕の口縁部片がカマド付近の床面から、第39図5の坏が中央部の覆土下層から、6の蓋が北西部の覆土から出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して奈良時代末か平安時代初頭の住居跡と考えられる。

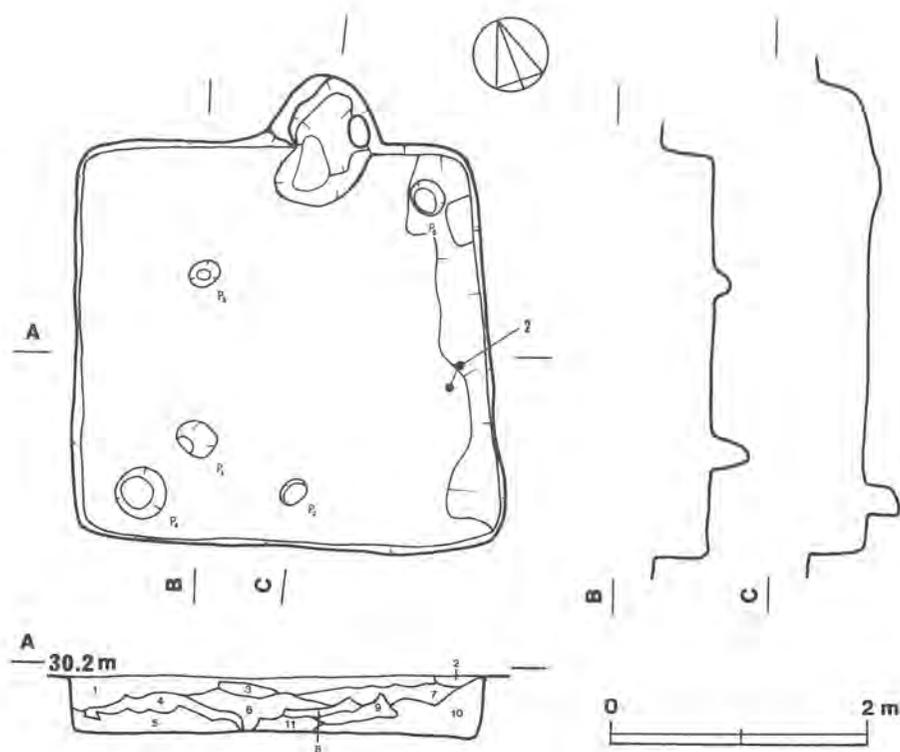


第12図 第8号住居跡実測図

第10号住居跡 (第13図)

位置 B2g_s区。**重複関係** 無。平面形 隅丸方形。規模 3.38×3.25m。主軸方向 N-13°-E。**壁** 垂直。壁高41~53cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。特に中央部が硬い。**ピット** 5か所。P₁(径33×26cm, 深さ31cm)は支柱穴。P₂は入り口部に伴う梯子ピット。P₃~P₅(径21~40cm, 深さ12~25cm)は性格不明。**貯蔵穴** 無。**カマド** 北壁中央部からやや東寄りに付設。壁面を54cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面を5cm程掘り窪め、焼き締まりは弱い。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。**覆土** 人為堆積。

遺物 土師器片22点(うち内黒土器片3点)、須恵器片6点が出土。第39図2の坏が東壁中央部



S I-10 <土層解説>

<土色>	<含有物・特性>		
1 暗褐色	ローム粒子・ローム小ブロック 中量。	6 黒褐色	ローム粒子少量。 中量，硬く締まる。
2 黒褐色	締まり弱い。	7 黒褐色	ローム粒子中量。
3 褐色	ローム粒子中量。	8 明褐色	炭化粒子少量，硬く締まる。
4 褐色	ローム小ブロック，ローム粒子 中量，硬く締まる。	9 黒褐色	ローム粒子・ローム小ブロック 中量。
5 黒褐色	ローム粒子・ローム小ブロック	10 黒褐色	ローム粒子多量，締まり弱い。
		11 褐色	ローム粒子少量。

第13図 第10号住居跡実測図

付近の覆土中層から出土。

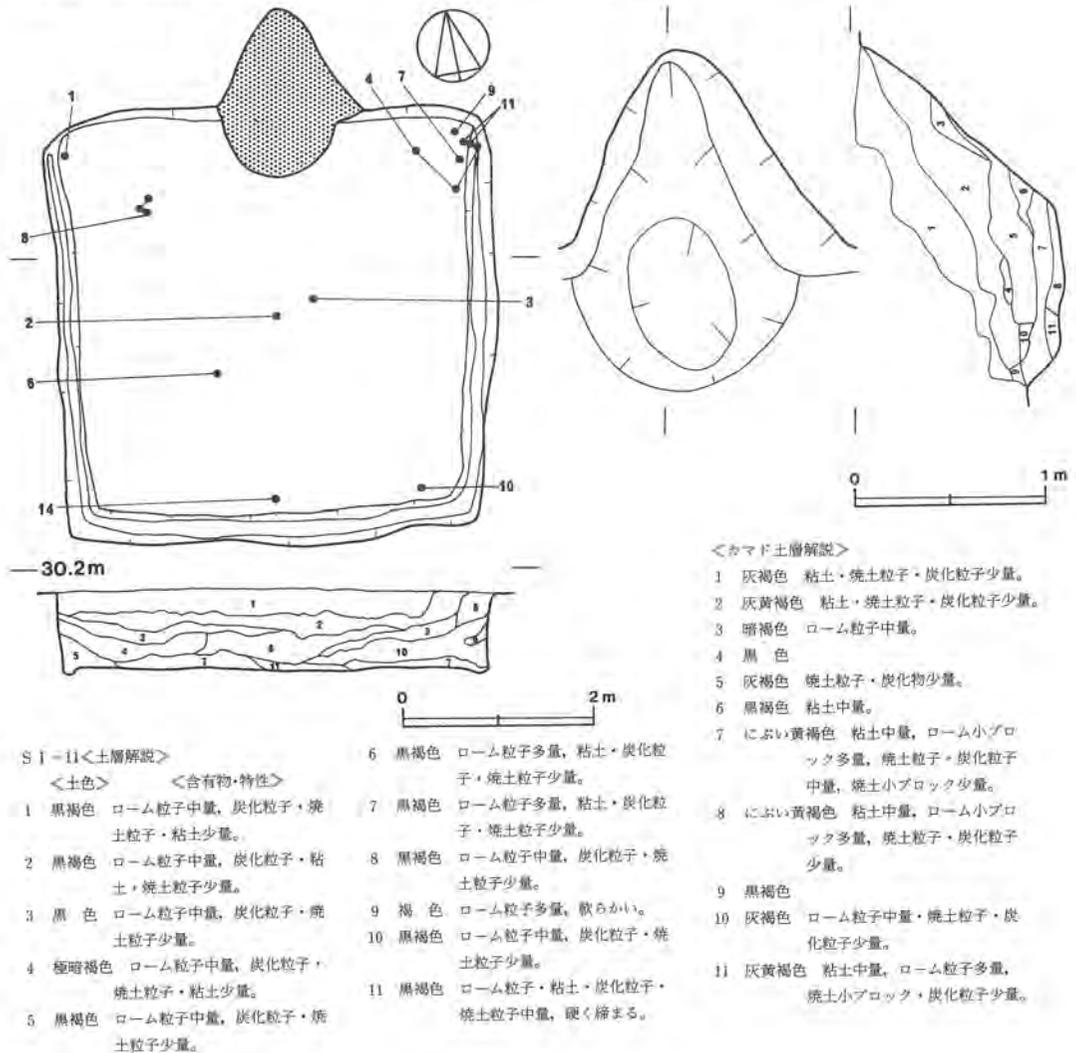
所見 本跡は，遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第11号住居跡 (第14図)

位置 C2g₁区。重複関係 無。平面形 隅丸方形。規模 4.69×4.61m。主軸方向 N-12°-E。壁 内傾。壁高82~89cm。壁溝 幅16~39cm，深さ8cm。北壁を除き周回。床 平坦。各コーナー付近を除き硬い。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部を110cm程掘り込み，粘土・砂などで構築。火床は床面を15cm程掘り窪め，焼き締まりは弱い。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり，住居の外へ長く延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片1,235点(うち内黒土器片136点), 須恵器片90点, 陶器片1点, 手斧1点が出土。第39図7の高台付坏(「稻家」と墨書)・4の坏・9の高台付坏・11の高台付皿が北東コーナー付近の床面から, 8の高台付坏が北西部の覆土下層から, 6の坏(墨書)が中央部付近の覆土下層から, 第40図14の盤が南壁中央部付近の覆土中層から, 12の段皿(灰釉陶器)が北西部の覆土下層から出土。

所見 本跡は, 遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。



第14図 第11号住居跡・カマド実測図

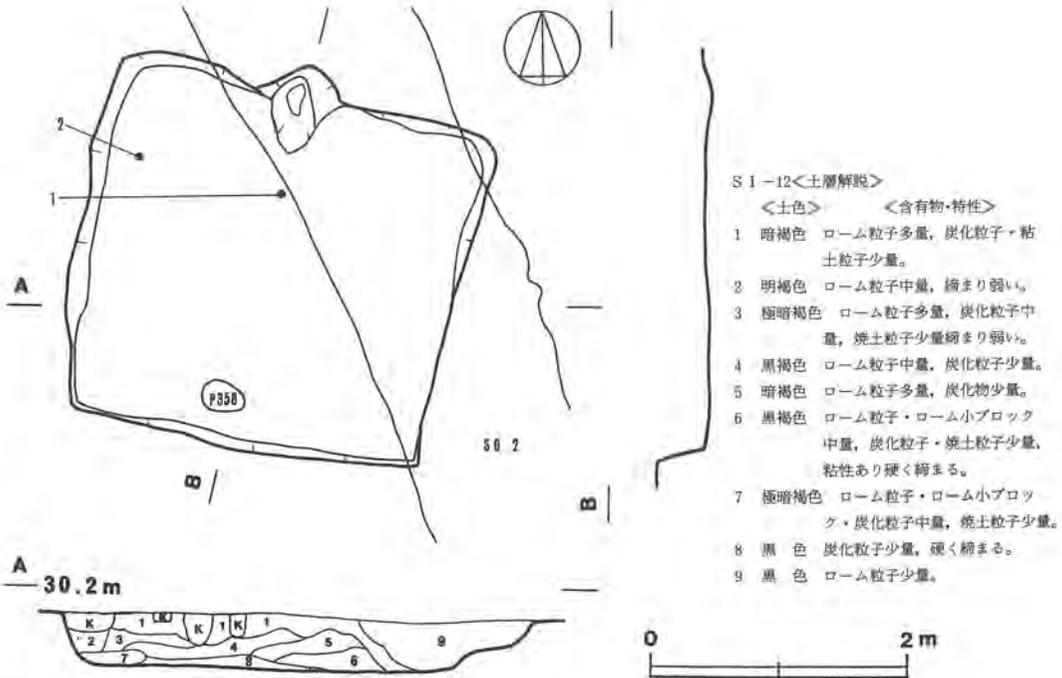
第12号住居跡 (第15図)

位置 C2i₃区。重複関係 本跡<SD-2, P358。平面形 方形。規模 3.10×2.96m。主軸方向 N-17°-E。壁 外傾。壁高40~41cm。壁溝 無。床 平坦。中央部から北東コーナー付近

にかけて、極めて硬い。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部に付設。第2号溝によって切られ、詳細は不明。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片123点(うち内黒土器片21点)、須恵器片29点出土。遺物はカマド周辺に多い。第40図2の坏が北西部の覆土下層から正位の状態で出土。須恵器は甕の胴部片が覆土から出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。



第15図 第12号住居跡実測図

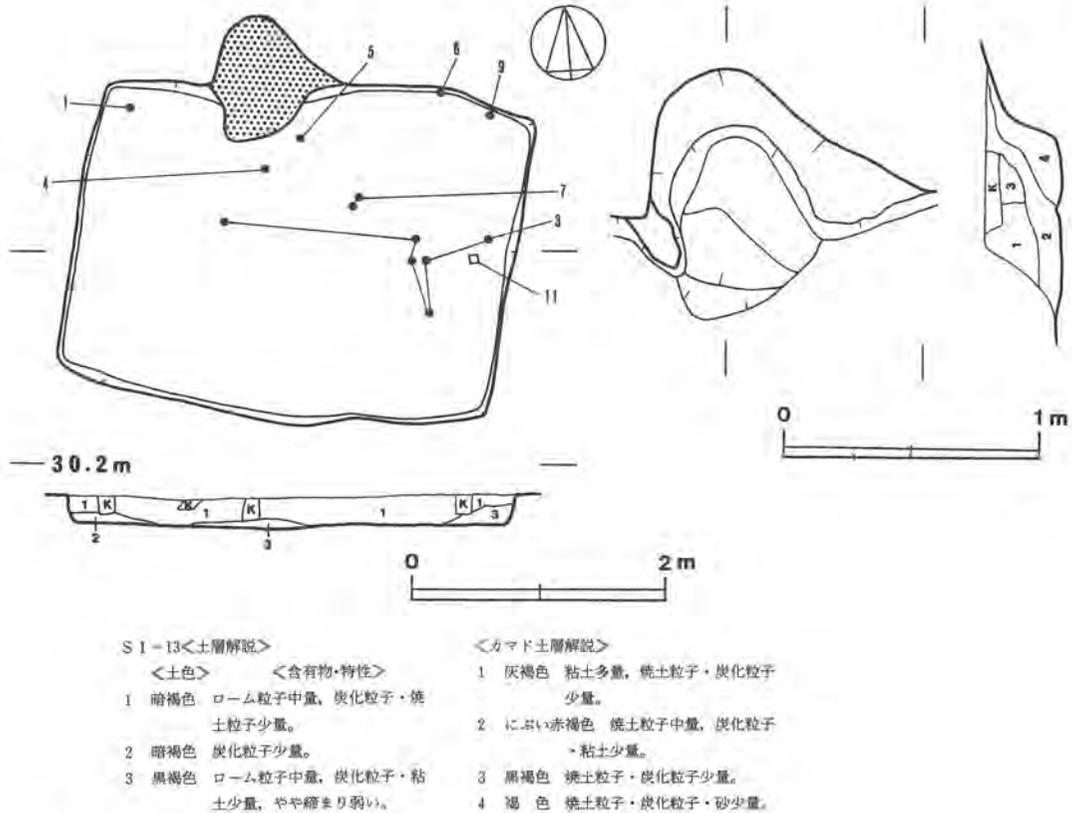
第13号住居跡 (第16図)

位置 C2j₂区。**重複関係** 無。**平面形** 長方形。**規模** 3.44×2.68m。**主軸方向** N-17°-E。**壁** 垂直。壁高20~26cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。中央部が硬い。**ピット** 無。**貯蔵穴** 無。**カマド** 北壁中央部からやや西寄りに位置し、壁面を55cm程掘り込んで付設。粘土・砂などで構築しており、第40図2の甕を側壁に倒立させて、東側の袖の補強に使用。火床は床面とほぼ同じ高さで、ロームが焼けて赤変硬化している。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器片319点(うち内黒土器片85点)、須恵器片24点が出土。遺物はカマド周辺と北東部に集中。第40図1の甕が北西コーナー付近の床面から、第41図3の甕が中央部付近と東壁中央部付近の床面から、6の坏が北東コーナー付近の床面から、7の坏が中央部付近の覆土下層から出

土。その他、11の凹石が東壁中央部付近の床面から出土。

所見 本跡は他の住居跡に比べて東西に長いという特徴をもっている。本跡の時期は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。



第16図 第13号住居跡・カマド実測図

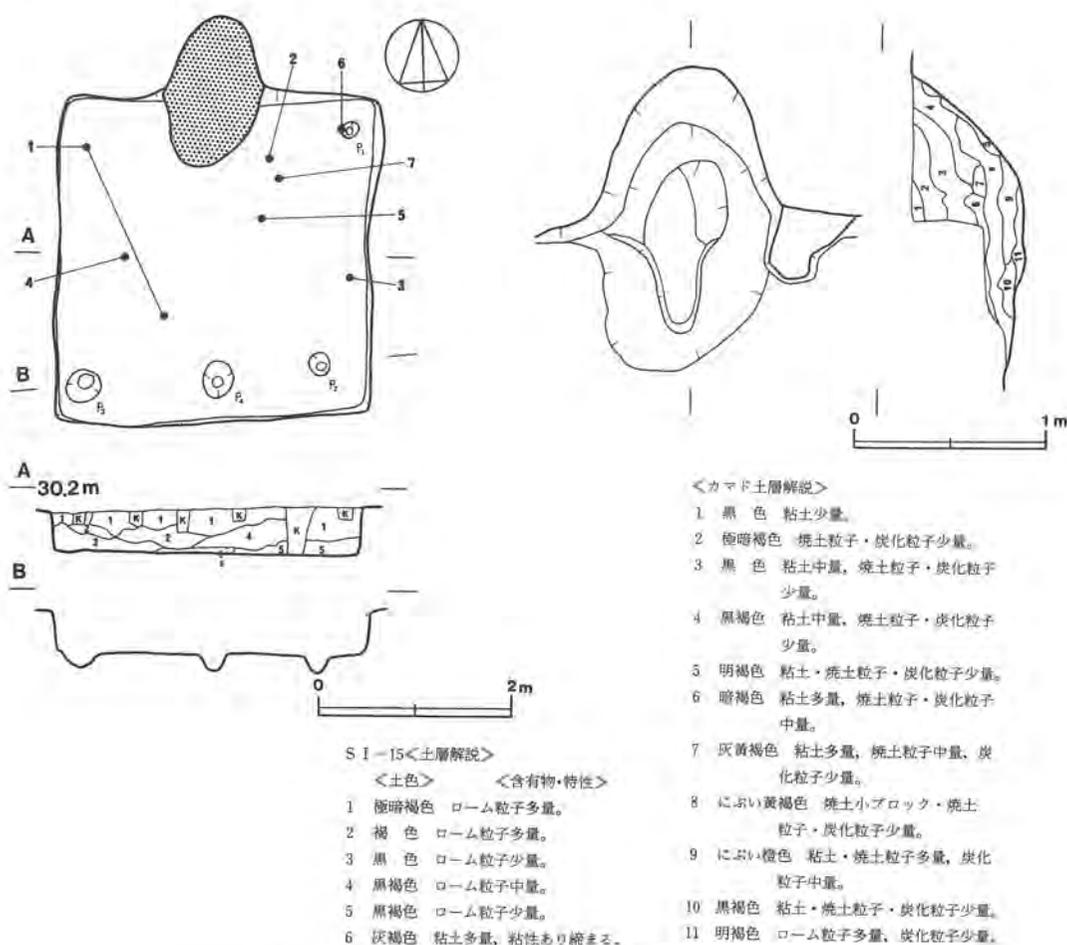
第15号住居跡 (第17図)

位置 D2c₃区。**重複関係** 無。**平面形** 隅丸方形。**規模** 3.54×3.31m。**主軸方向** N-4°-E。**壁** 垂直。壁高44~54cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。全体的に硬い。**ピット** 4か所。P₁・P₂(径19~26cm、深さ9~20cm)は支柱穴。P₄(径40×33cm、深さ16cm)は入り口部に伴う梯子ピット。P₃(径37×33cm、深さ16cm)は性格不明。**貯蔵穴** 無。**カマド** 北壁中央部を90cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面を10cm程掘り窪め、ロームが焼けて赤変硬化している。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。袖の補強に使用された凝灰岩(長さ13cm)が、東側の袖の側壁から出土。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器片183点(うち内黒土器片29点)、須恵器片7点、陶器片1点が出土。遺物は北東部に多い。第42図3の底部に木葉痕が残る甕が東壁中央部付近の床面から、4の坏が西壁中央部付

近の覆土下層から逆位の状態で、6の体部に「廬」と墨書された高台付坏がP₁付近の床面から逆位の状態で出土。須恵器は、叩き目の施された甕の胴部片や高台付坏の高台片が覆土から出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。



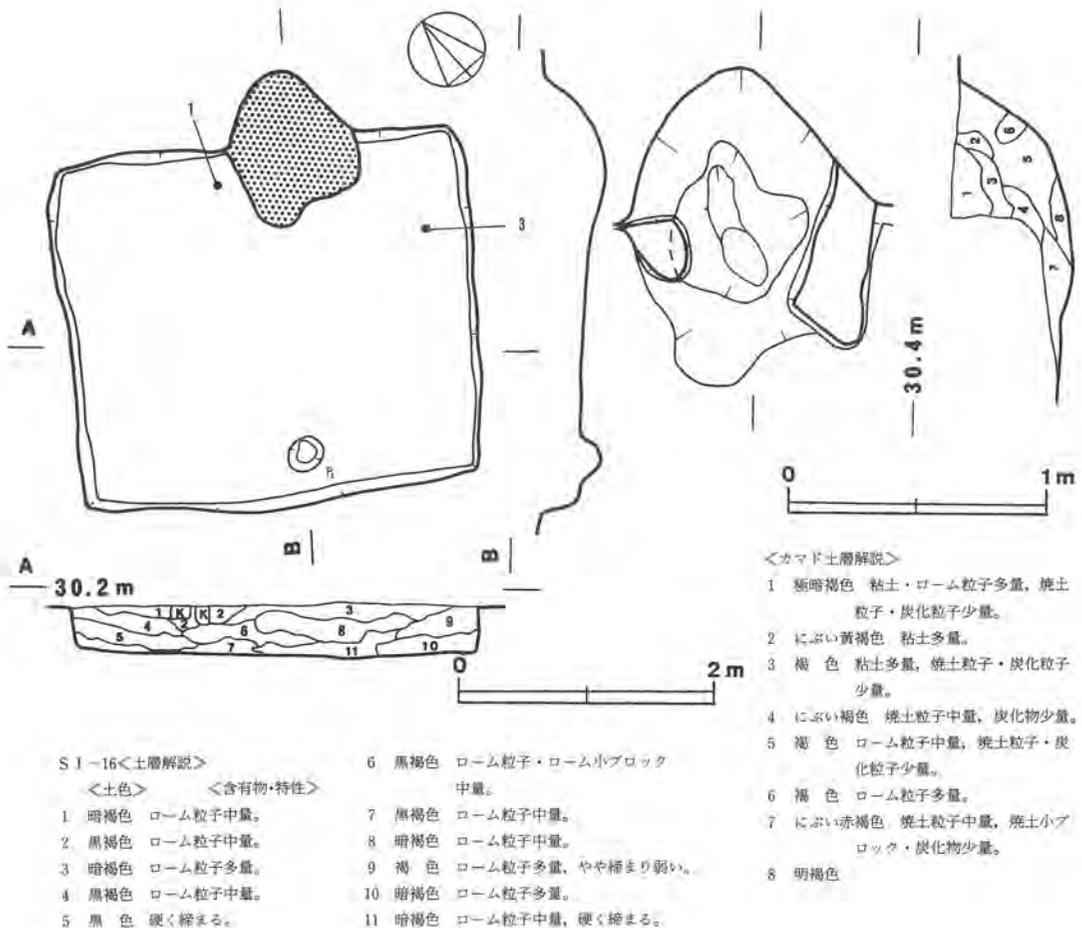
第17図 第15号住居跡・カマド実測図

第16号住居跡 (第18図)

位置 D1c₀区。重複関係 無。平面形 長方形。規模 3.33×2.90m。主軸方向 N-34°-E。壁 垂直。壁高 29~39cm。壁溝 無。床 平坦。中央部は硬く、周囲より若干低い。ピット 1か所。P₁(径27×25cm、深さ15cm)は入り口部に伴う梯子ピット。貯蔵穴 無。カマド 北西壁中央部からやや東寄りに位置し、壁面を55cm程掘り込んで付設。粘土・砂などで構築しており、袖の補強に凝灰岩を使用。火床は床面とほぼ同じ高さで、焼き締まりは弱い。煙道部は火床から緩やかに立ち上がり、住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片2点，須恵器片4点が出土。第42図3の盤(底部・体部に「友」と墨書)が，北東部の覆土下層から正位の状態で，1の坏がカマド付近の床面から正位の状態で出土。

所見 本跡は，遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。



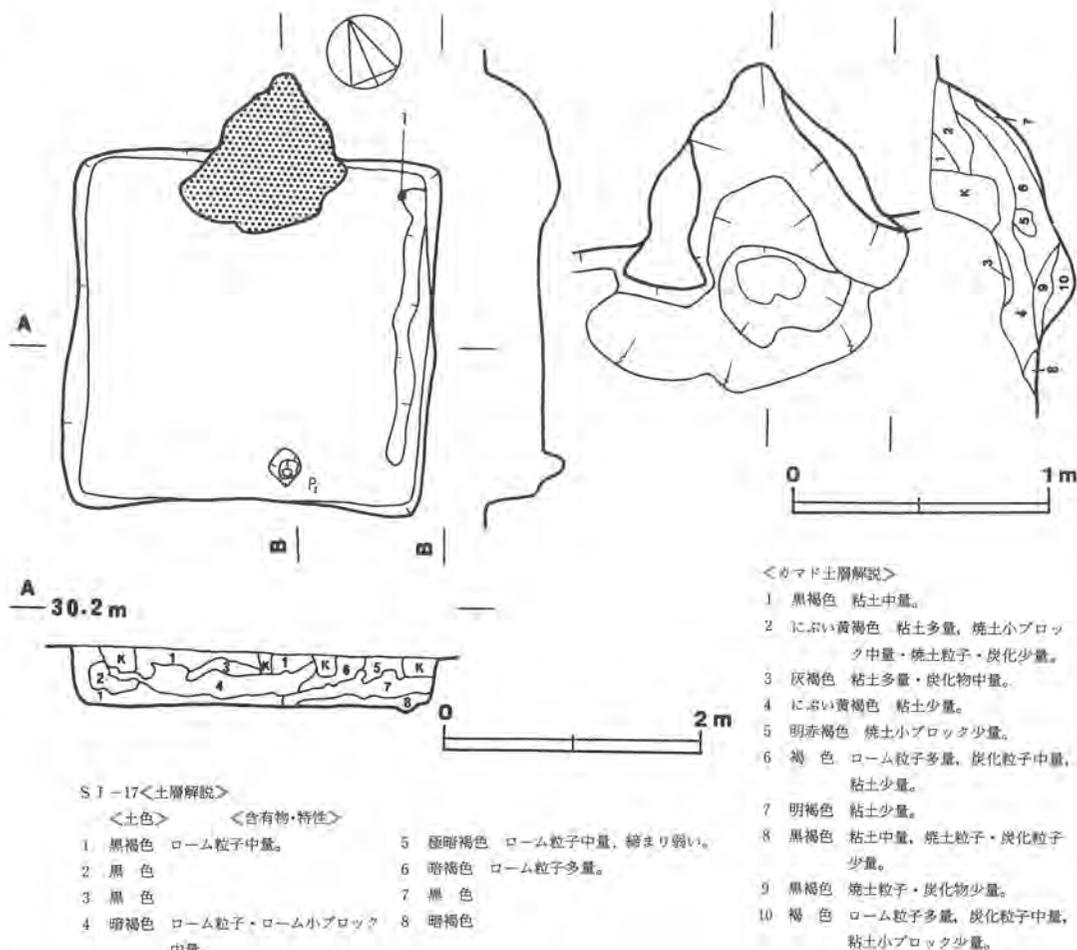
第16図 第16号住居跡・カマド実測図

第17号住居跡 (第19図)

位置 D2e₂区。**重複関係** 無。**平面形** 方形。規模 2.87×2.85m。**主軸方向** N-27°-E。**壁** 垂直。壁高 39~44cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。全体的に硬い。東壁沿いに長さ2.2m，幅10~20cm，深さ4cm程の落ち込みを検出。**ピット** 1か所。P₁(径27×25cm，深さ17cm)は入り口部に伴う梯子ピット。**貯蔵穴** 無。**カマド** 北東壁中央部を65cm程掘り込み，粘土・砂などで構築。火床は床面を15cm程掘り窪め，ロームがレンガ状に焼き締まっている。煙道部は火床から緩やかに立ち上がり，住居の外に延びている。**覆土** 人為堆積。

遺物 土師器片33点(うち内黒土器片7点), 須恵器片2点, 鉄製品(鏃1点, 不明1点)が出土。
第42図3の高台付坏(体部に2か所「入加」の墨書)が, カマド燃焼部の覆土から出土。

所見 本跡は, 遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。



第19図 第17号住居跡・カマド実測図

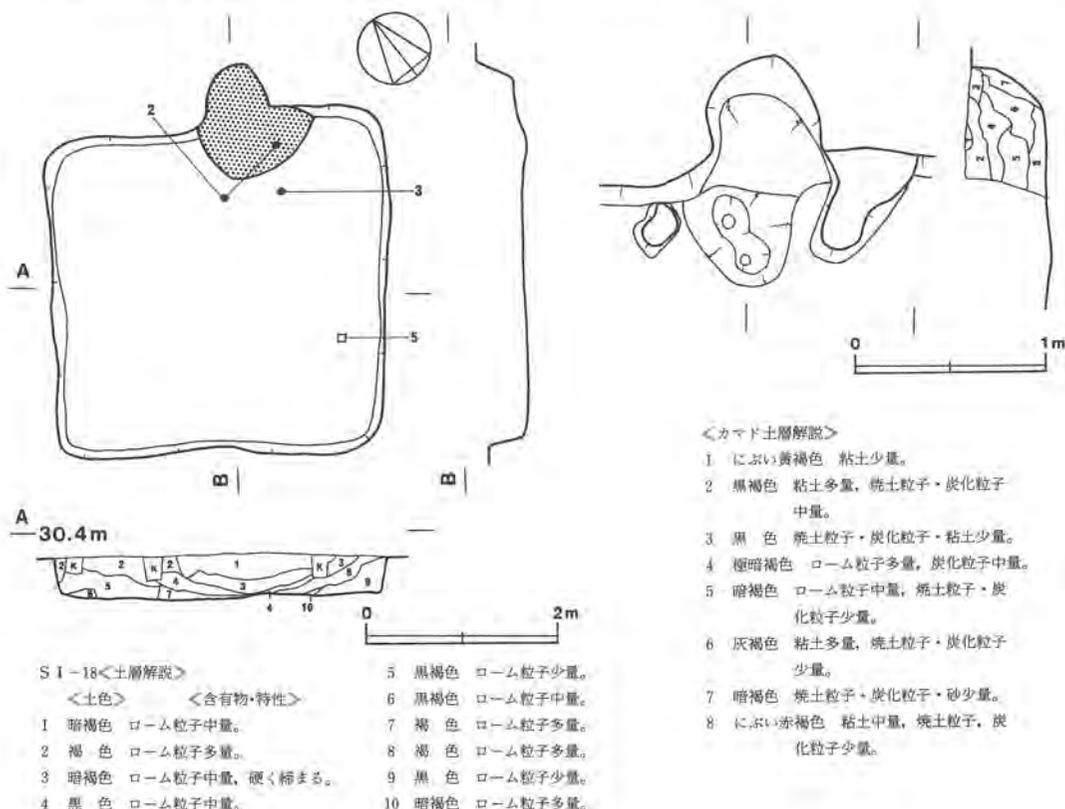
第18号住居跡 (第20図)

位置 D1f₀区。重複関係 無。平面形 隅丸方形。規模 3.72×3.62m。主軸方向 N-33°-E。壁 垂直。壁高36~47cm。壁溝 無。床 緩い傾斜。全体的に硬い。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 北東壁中央部からやや東寄りに付設。壁面を65cm程掘り込み, 粘土・砂などで構築。火床は床面とほぼ同じ高さで, 焼き締まりは弱い。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり, 住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片85点(うち内黒土器片24点), 須恵器片9点, 釘1点, 石製紡錘車1点が出土。

第43図1の甕がカマド燃焼部の覆土から、2の「天」と墨書した高台付坏がカマド付近の覆土下層から、3の高台付坏がカマド付近の覆土下層から、5の石製紡錘車が南東部の覆土下層から出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。



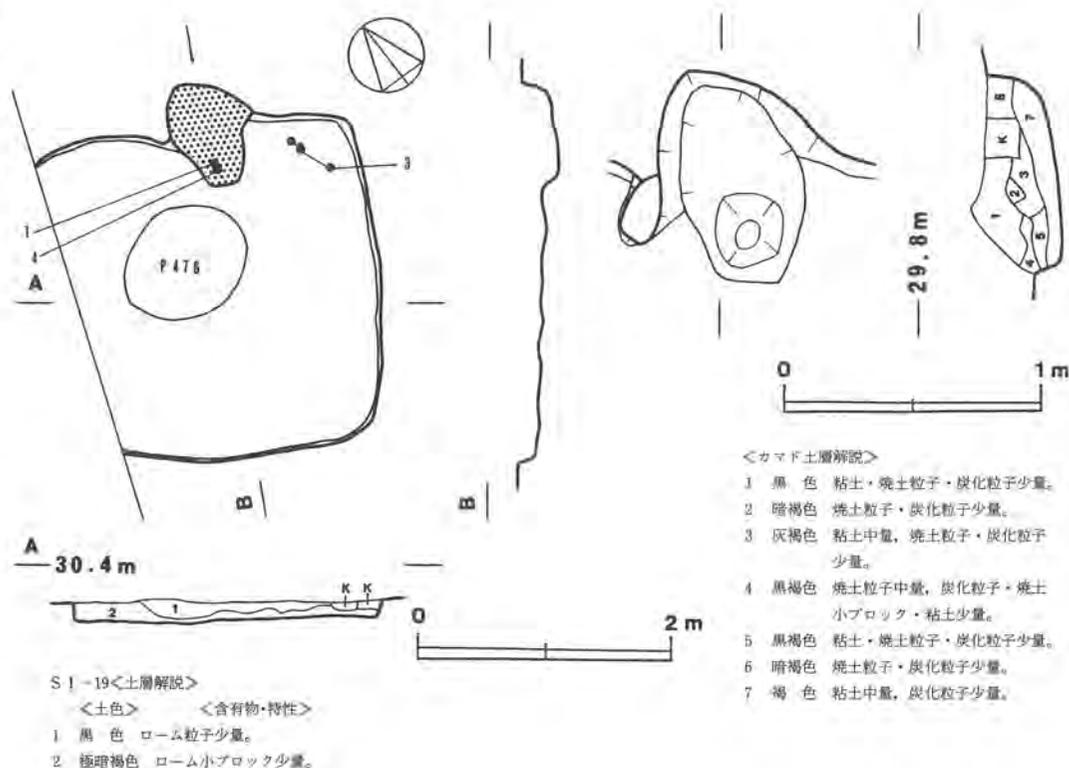
第20図 第18号住居跡・カマド実測図

第19号住居跡 (第21図)

位置 D1e区。重複関係 本跡<P476。平面形 [隅丸方形]。規模 2.64×(2.57)m。主軸方向 N-38°-E。壁 垂直。壁高12~17cm。壁溝 無。床 平坦。中央部が硬く、他は軟らかい。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 北東壁中央部からやや東寄りに位置し、主軸方向はN-9°-E。壁面を30cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面を15cm程掘り窪め、焼き締めりは弱い。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片31点(うち内黒土器片7点)、須恵器片3点が出土。遺物はカマド内と東コーナー付近に集中。第43図3の坏が東コーナー付近の床面から逆位の状態で、4の坏がカマド燃焼部の覆土下層から正位の状態で出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。



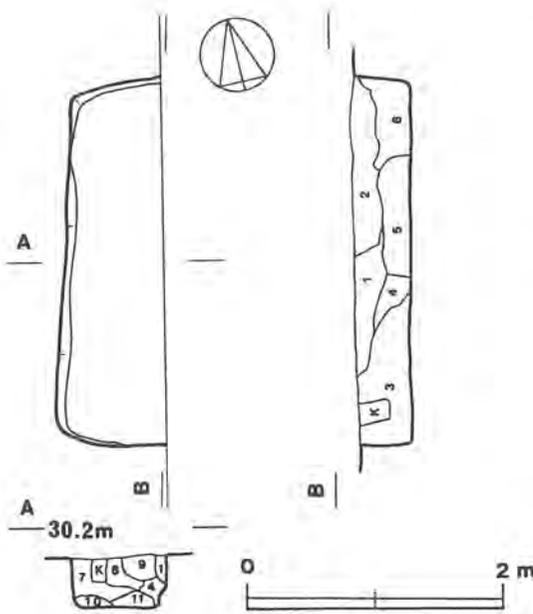
第21図 第19号住居跡・カマド実測図

第20号住居跡 (第22図)

位置 D2d₄区。重複関係 無。平面形 [方形]。規模 2.98×(0.85)m。主軸方向 N-11°-E。壁 垂直。壁高36~45cm。壁溝 無。床 平坦。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 北側のエリア外に付設されているものと思われる。覆土 人為堆積。

遺物 土師器片45点(うち内黒土器片3点)、須恵器片3点、鉄製品1点が出土。その他、流れ込みと思われる第43図3の有茎石鎌1点が、西壁中央部付近の覆土から出土。

所見 本跡は東側の調査区域外へ延びているため、全体を捉えることができなかった。本跡の時期は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。



SI-20<土層解説>

- | <土色> | <含有物・特性> |
|--------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量, 締まり弱い。 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子中量, 締まり弱い。 |
| 3 褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック多量。 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子極めて多量, ローム小ブロック中量, 焼土粒子少量。 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック多量。 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子極めて多量, ローム小ブロック中量。 |
| 7 黒褐色 | ローム粒子多量。 |
| 8 暗褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子少量。 |
| 9 黒褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量。 |
| 10 黒色 | |
| 11 暗褐色 | ローム粒子多量, 炭化粒子少量。 |

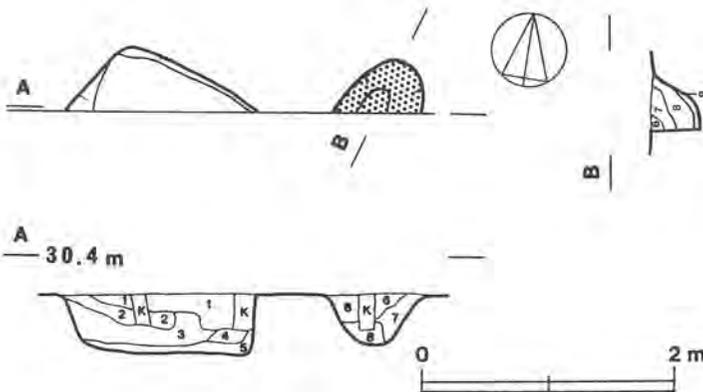
第22図 第20号住居跡実測図

第21号住居跡 (第23図)

位置 D2f₂区。重複関係 無。平面形 不明。規模 (1.10)×(0.72)m。主軸方向 N-24°-E。壁 外傾。壁高44~50cm。壁溝 無。床 平坦。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 北壁をU字形に切り込んで, 粘土・砂などで構築。燃焼部には灰や焼土が多量に含まれ, よく使用された痕跡が窺える。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片7点が出土。第43図1の甕がカマド燃焼部の覆土から出土。

所見 本跡は南側の調査区域外へ延びているため, 全体を捉えることができなかった。本跡は, 遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。



SI-21<土層解説>

- | <土色> | <含有物・特性> |
|---------|-----------------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量。 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子多量, 締まり弱い。 |
| 3 黒色 | ローム粒子中量。 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量, 締まり弱い。 |
| 5 褐色 | ローム粒子中量。 |
| 6 灰黄褐色 | 焼土粒子多量, 炭化粒子・粘土少量。 |
| 7 灰褐色 | 粘土・焼土粒子・炭化粒子少量。 |
| 8 極暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子中量, 焼土小ブロック・炭化材少量, 焼けた凝灰岩ブロック。 |
| 9 明褐色 | ローム粒子中量。 |

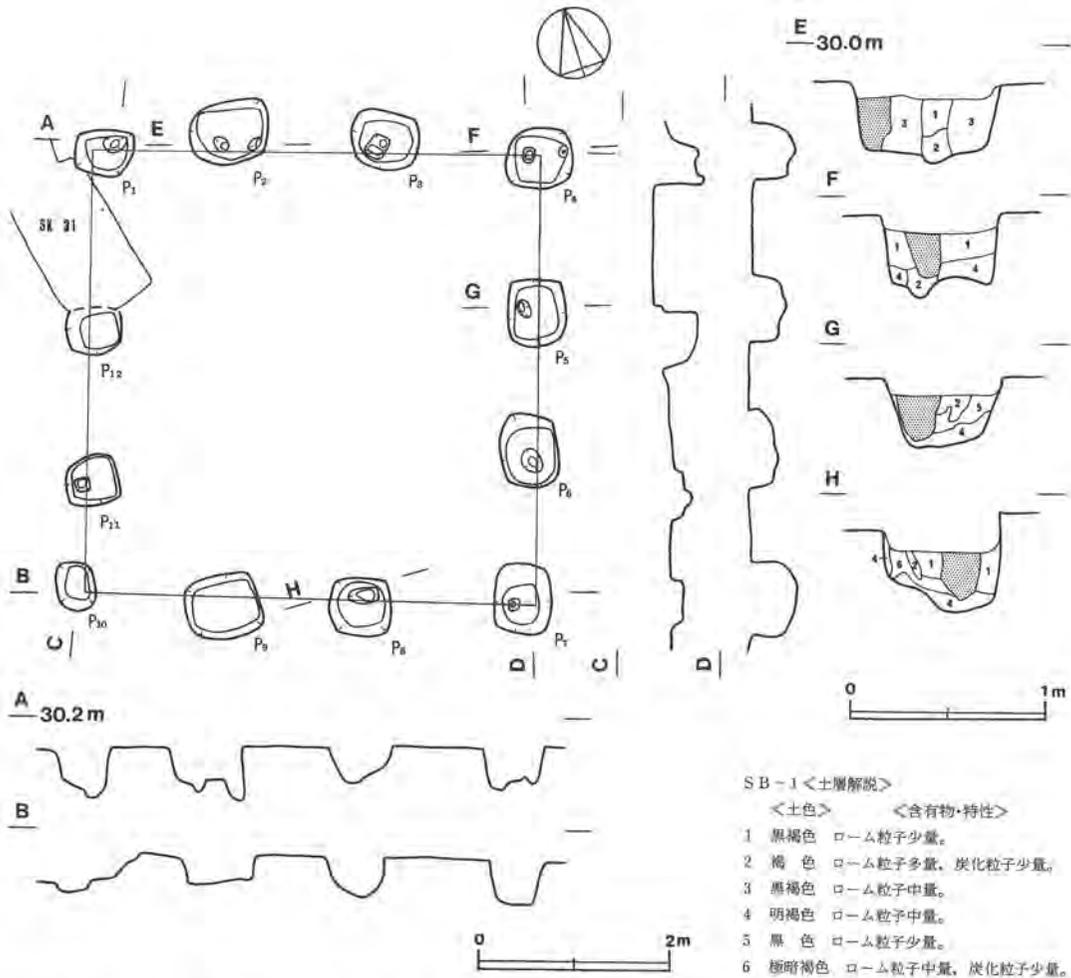
第23図 第21号住居跡実測図

2 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第24図)

位置 B2a₈, B2b₈区。重複関係 本跡<SK31。SF1 (新旧関係不明)。規模 東西3間(4.72m)×南北3間(4.82m)。主軸方向 N-15°-E。柱間寸法 東西1.20~1.74m, 南北1.21~1.92m。掘り方 長軸0.54~0.82m, 短軸0.43~0.70mの隅丸長方形で、深さは0.32~0.59m。底面 平坦なものやU字状を呈するものがあり、P₁~P₅・P₁₁は底面に浅い窪みがある。柱痕跡 P₉・P₁₀・P₁₂以外は各掘り方の下位に確認され、規模は径20cm前後、深さ34~38cm。掘り方内覆土 ローム粒子を少量含む黒褐色土とローム粒子を多く含む明褐色土が互層をなして硬く締まっている。

遺物 須恵器片が1点P₈内覆土から出土。

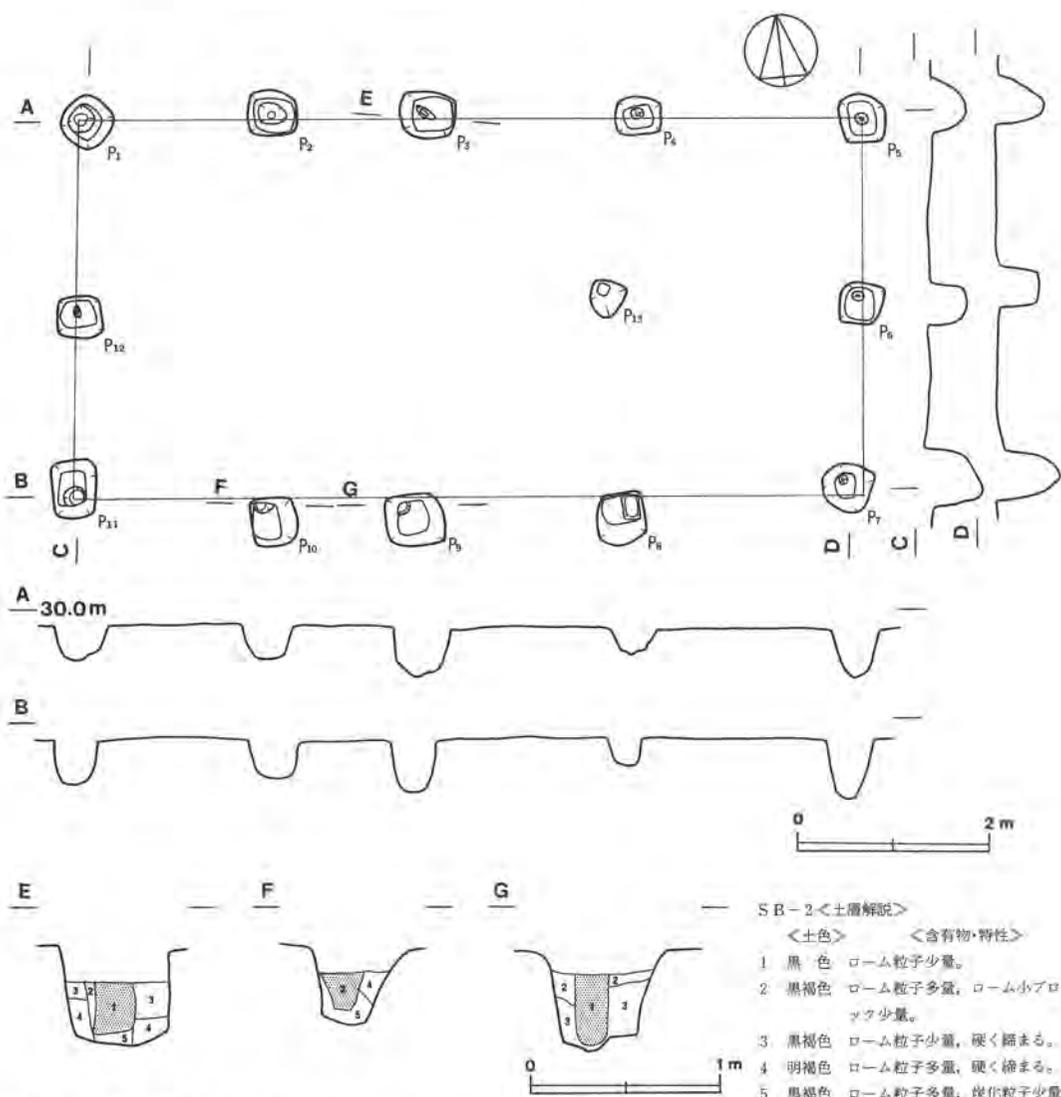


第24図 第1号掘立柱建物跡実測図

第2号掘立柱建物跡 (第25図)

位置 B2i_a, B2j_a区。重複関係 SK11(新旧関係不明)。規模 東西4間(8.30m)×南北2間(4.10m)の東西棟の建物。主軸方向 N-9°-E。柱間寸法 東西1.64~2.36m, 南北2.03~2.05m。掘り方 長軸0.46~0.65m, 短軸0.42~0.55mの隅丸長方形で, 深さは0.30~0.68m。底面 平坦なものやU字状を呈するものがあり, P₄・P₇は底面に浅い窪みがある。柱痕跡 各掘り方の底部に確認され, 規模は径15~20cm, 深さ20~44cm。掘り方内覆土 簡単な版築がなされており, 黒褐色土と明褐色土が互層をなして硬く締まっている。

遺物 無。

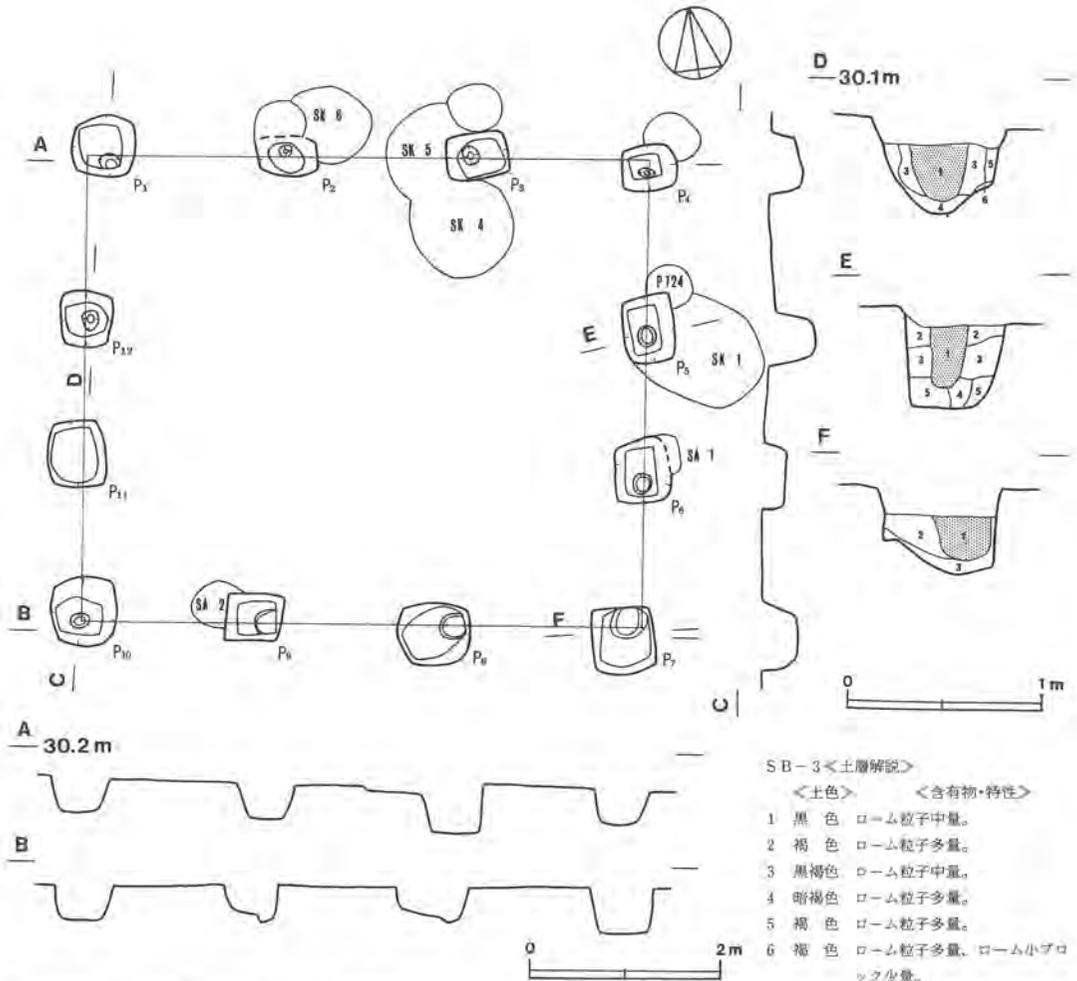


第25図 第2号掘立柱建物跡実測図

第3号掘立柱建物跡 (第26図)

位置 C2d₄, C2e₄区。**重複関係** SK1, SK4, SK5, SK6, SA1, SA2, P124(新旧関係不明)。**規模** 東西3間(5.88m)×南北3間(5.12m)。**主軸方向** N-10°-E。**柱間寸法** 東西1.78~2.00m, 南北1.40~1.90m。**掘り方** 長軸0.60~0.77m, 短軸0.46~0.70mの長方形で, 深さは0.24~0.70m。**底面** 平坦なものとう字状を呈するものがあり, P₉の底面に浅い窪みがある。**柱痕跡** P₁₁以外は各掘り方の底部に確認され, 規模は径22~30cm, 深さ26~45cm。掘り方内覆土全体的に黒褐色土とローム粒子を多く含む褐色土が互層をなして硬く締まっている。

遺物 土師器片16点(うち内黒土器片2点), 須恵器片7点が出土。第44図1の須恵器の坏がP₁₀内覆土から, 2の高台付坏(内黒)がP₈内覆土から出土している。他は土師器の甕片や須恵器の坏片である。



第26図 第3号掘立柱建物跡実測図

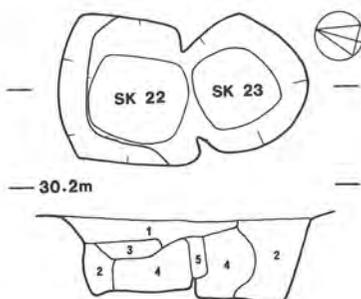
3 土坑

当遺跡からは、総数43基の土坑が検出されている。それぞれの土坑は、その形状・規模・覆土及び遺物の出土状況に差異がみられる。各々の土坑の解説は一覧表の中に掲載し、そのうち特色のある土坑についてはまとめて記述した。

表2 北郷C遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)			壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	分類	備考	図版番号
				長径	短径	深さ								
1	C2e _s	N-59°-W	[楕円形]	151	113		[緩斜]		不明	IIA3a		[B]	P124, SB3重複	第29図
2	C2d _s		円形	146	139	34	垂直	平坦	自然	IA2a	土師器片8点, 須恵器片2点	B		第28図
3	C2e _s	N-37°-W	楕円形	160	128	32	外傾	平坦	自然	IIA3a	土師器片11点, 須恵器片1点	[B]		第29図
4	C2d _s		[円形]	109	[101]	28	外傾	平坦	自然	IA2a	土師器片5点, 須恵器片2点	B	SK5, SB3重複	第28図
5	C2d _s		[不整形]	107	[70]	13	[外傾]	平坦	不明	VIA2a	土師器片10点, 須恵器片5点	[B]	SK4, SB3重複	第28図
6	C2d _s		[円形]	95	[89]		[緩斜]	平坦	不明	I B1a	土師器片2点, 須恵器片1点	B	SB3, P280重複	第28図
7	C2c _s	N-70°-W	隅丸長方形	105	99		[緩斜]	凹凸	不明	IVB2a		[B]		第29図
9	C2a _s		円形	106	102	68	垂直	平坦	自然	IA2b		C		第30図
10	C2a _s		方形	151	142	35	外傾	平坦	自然	IIIB3a		C		第30図
11	B2i _s	N-12°-W	長方形	129	60	36	垂直	平坦	人為	IVA2a		C	SB2	第30図
12	B2i _s	N-15°-W	長方形	168	88	38	垂直	平坦	人為	IVA3a	土師器片2点	C		第30図
13	B2g _s	N-4°-W	長方形	111	48	15	垂直	平坦	人為	IVA2a		C		第30図
14	B2f _s	N-21°-W	楕円形	126	56	20	緩斜	平坦	自然	IIB2a		C		第30図
15A	B2e _s		[円形]	[104]	[100]		[外傾]	平坦	不明	IA2a		B	SK16重複	第28図
15B	B2e _s		[円形]	114	[106]			平坦	不明	[IA2a]		[B]	SK15A-C, SK16重複	第28図
15C	B2c _s		[円形]	[122]	[111]			平坦	不明	[IA2a]		[B]	SK15B-D重複	第28図
15D	B2c _s		[円形]	[125]	(75)			平坦	不明	[IA2a]		[B]	SK15C, SD4重複	第28図
16	B2e _s	N-13°-W	[楕円形]	124	(76)	不明	[垂直]	平坦	不明	IIA2a		[B]	SK15A・B, SD4重複	第28図
17	B2e _s		円形	118	113	28	外傾	平坦	自然	I B2a		B		第28図
18	B2c _s		円形	123	116	34	垂直	平坦	自然	IA2a		B		第28図
19	B2c _s	N-49°-W	不整楕円形	88	66	45	垂直	平坦	[自然]	IIA1a		C		第30図
20	B2c _s	N-89°-E	楕円形	163	66	28	垂直	傾斜	自然	IIA3a		C	P242, 243重複	第30図
21	C2a _s	N-49°-E	不整形	424	195	31	緩斜	皿状	自然	VB5a	土師器片56点, 須恵器片4点, 墨書片	C		第31図
22	C2g _s		方形	[117]	[110]	56	垂直	平坦	人為	IIIA2b	人骨, 古銭1枚	A	墓塚	第27図
23	C2h _s		方形	[102]	[99]	65	垂直	平坦	人為	IIIA2b	人骨, 釘8点, 古銭6枚	A	墓塚	第27図
24	C2a _s	N-24°-E	不整円形	92	80	27	外傾	皿状	自然	I B1a		B		第28図
26	C2a _s	N-90°	楕円形	76	58	11	垂直	平坦	自然	IIA1a		C		第30図
27	B2d _s		[円形]	155	[149]	37	垂直	平坦	[自然]	IA3a		B	SK44重複	第28図
28	B2d _s		[円形]	[128]	[109]	18	[垂直]	傾斜	[自然]	IA2a	土師器片3点, 須恵器片1点, 墨書片	[B]	SK29・30・44重複	第28図
29	B2d _s		[円形]	(133)	126	10	緩斜	平坦	自然	I B2a		B	SK28重複	第28図

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)			壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	分類	備考	図版番号
				長径	短径	深さ								
30	B2d ₄		[円形]	110	107	27	外傾	平坦	自然	I A2a		B	SK28重複	第28図
31	B2a ₄	N-20°-W	長方形	213	100	33	垂直	平坦	人為	IVA4a		C	SB1, SF1	第30図
32	A2i ₉		円形	99	90	9	皿状	平坦	自然	I B1a		B		第29図
33	A3i ₉	N-74°-E	長方形	127	72	20	垂直	平坦	人為	IVA2a	土師器片1点, 須恵器片1点	C		第31図
34	A2f ₄	N-4°-W	不整楕円形	130	94	20	緩斜	皿状	自然	IIB2a	馬骨1点	C	SF1重複	第31図
35	B2a ₄	N-46°-E	不整形	102	60	69	垂直	傾斜	自然	VA2b	土師器片6点, 須恵器片4点	C	本跡 <SD5>	第31図
37	D2c ₃		円形	148	136	52	外傾	皿状	自然	I B2b		C		第31図
38	D2b ₃		円形	82	69	31	外傾	皿状	自然	I B1a		C		第31図
39	D1f ₃		円形	86	79	36	緩斜	皿状	自然	I B3a		C		第31図
40	D1g ₃		不整形	151	(94)	36	緩斜	凹凸	[人為]	VA2a		C		第31図
41	C2i ₁	N-7°-W	不整楕円形	186	100	56	緩斜	皿状	[自然]	IIB3b	土師器片3点	C		第31図
42	C2h ₂		円形	91	78	39	外傾	平坦	人為	I B1a	土師器片3点	C		第31図
44	B2d ₃		方形	165	159	39	垂直	平坦	[自然]	IIIA3a	土師器片1点, 須恵器片1点	C	SK27, 28重複	第28図



SK-22・23<土層解説>

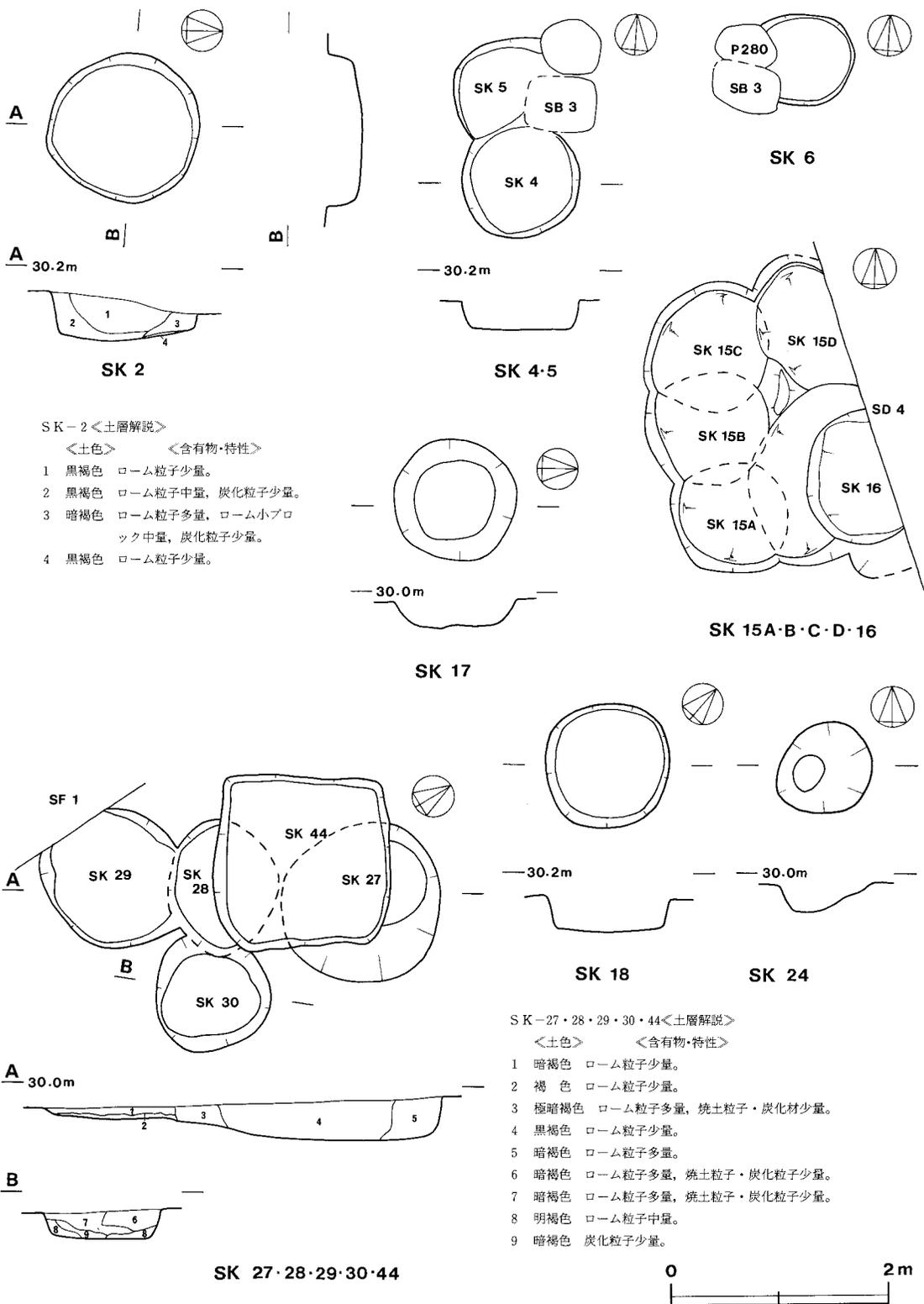
<土色> <含有物・特性>

- 1 黒褐色 ローム小ブロック中量, 炭化粒子少量。
- 2 黒色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量。
- 3 黒褐色 ローム粒子中量。
- 4 黒褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子少量。
- 5 明褐色 ローム粒子多量。

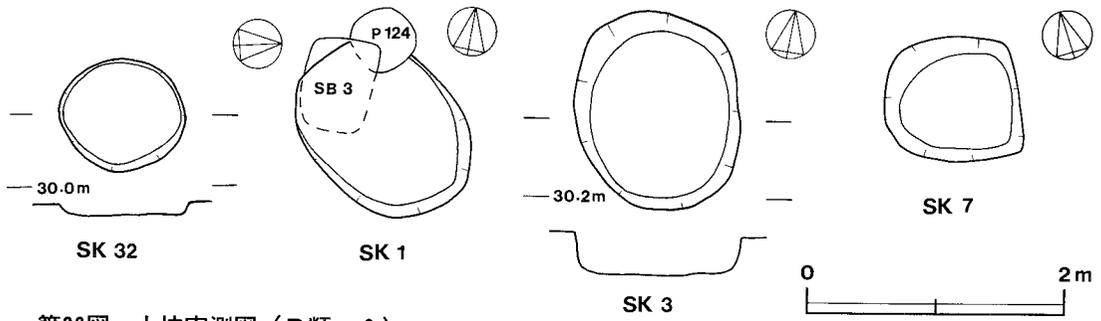


第27図 土坑実測図 (A類)

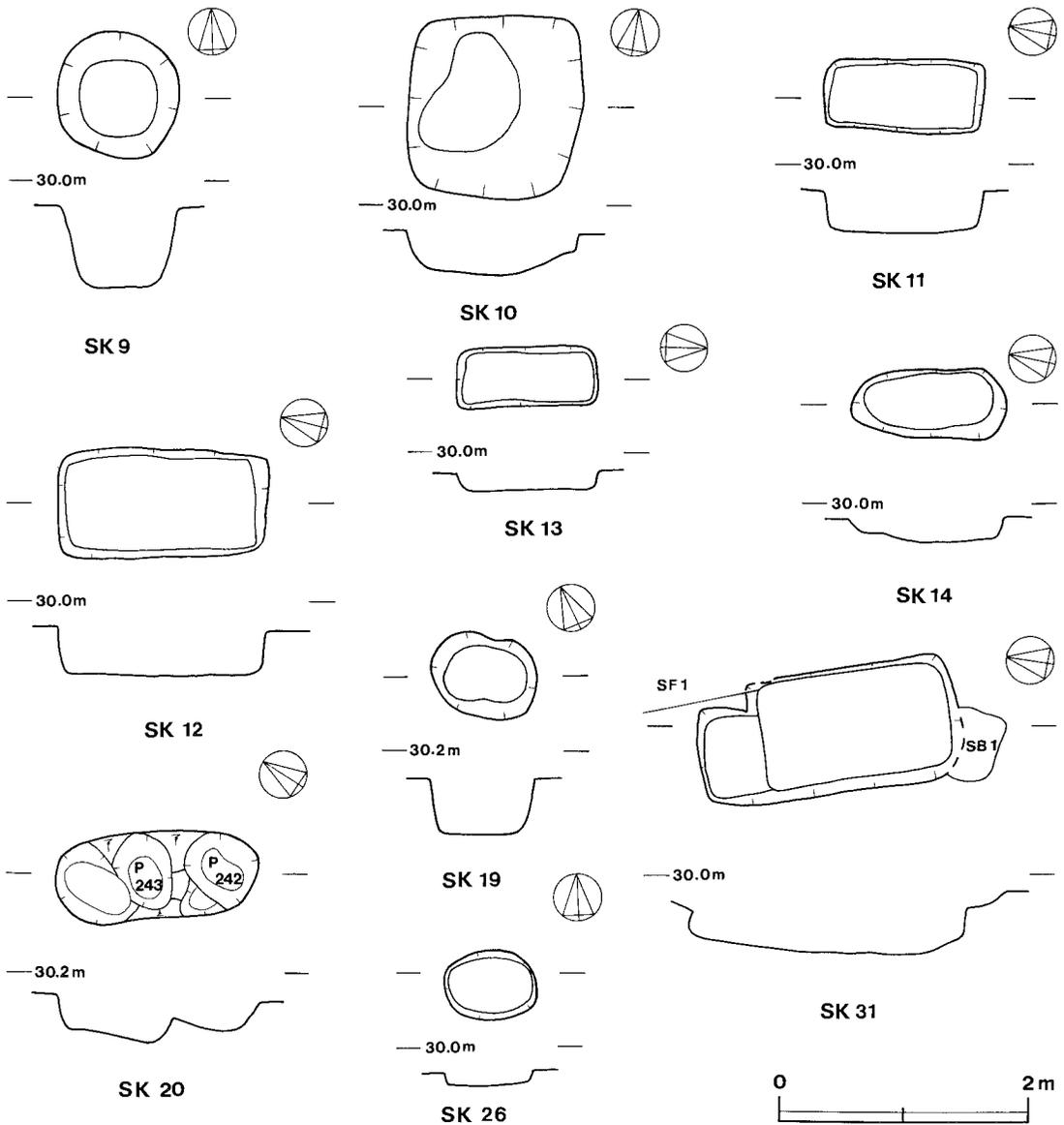




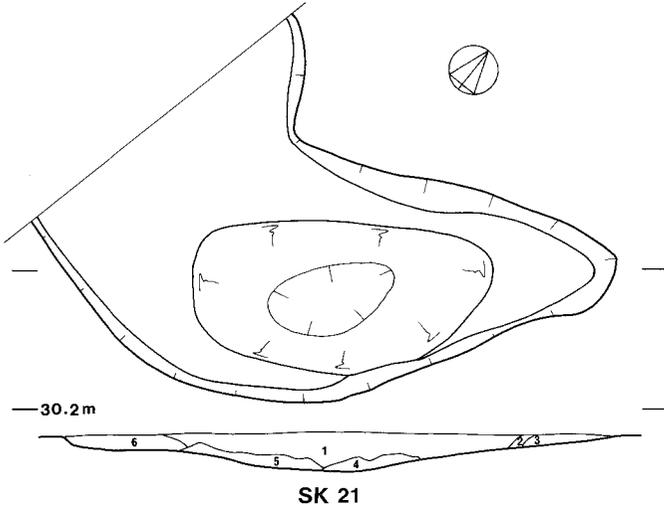
第28図 土坑実測図 (B類一)



第29図 土坑実測図 (B類-2)



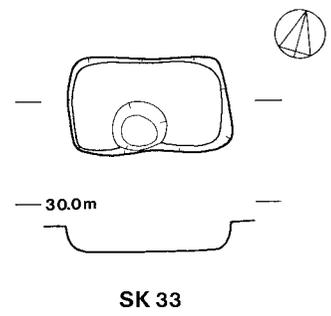
第30図 土坑実測図 (C類-1)



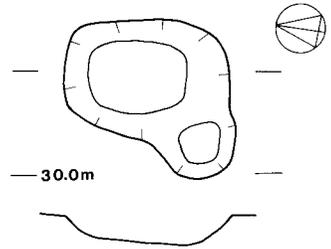
SK-21<土層解説>

<土色> <含有物・特性>

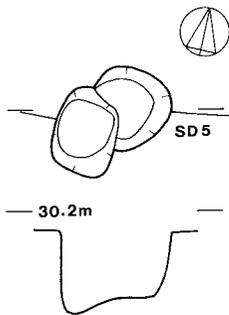
- 1 黒色 ローム粒子少量。
- 2 極暗褐色 焼土粒子少量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量。
- 4 極暗赤褐色 ローム粒子・炭化粒子中量，炭化物・焼土小ブロック少量。
- 5 黒褐色 ローム粒子中量，炭化粒子・焼土粒子少量。
- 6 黒色 焼土粒子少量。



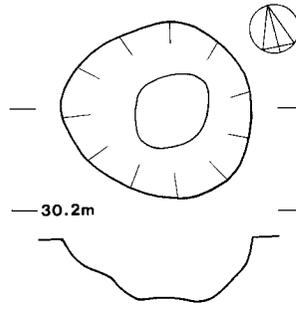
SK 33



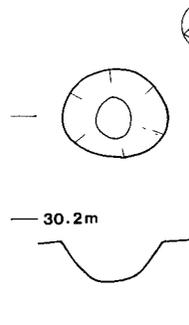
SK 34



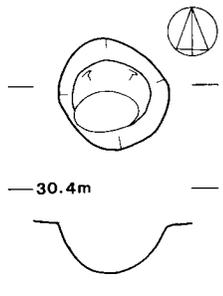
SK 35



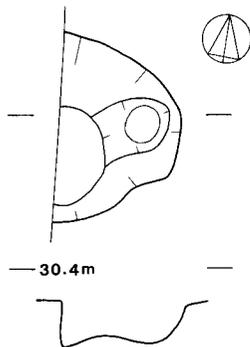
SK 37



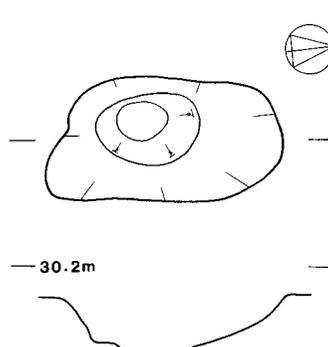
SK 38



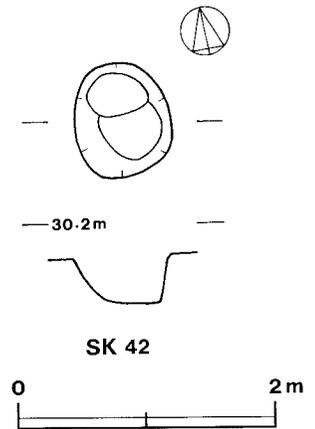
SK 39



SK 40



SK 41



SK 42

第31図 土坑実測図 (C類-2)

4 溝

第1号溝 (第32図)

位置 C1g₀区からC2i₂区。**重複関係** P337 (新旧関係不明)。**規模** 上幅0.33~0.87m, 下幅0.14~0.60m, 深さ0.08~0.16m, 全長[11.70m]。**主軸方向** N-43°-W。北西から南東に直線状に延びている。**高低差** 北西部は標高29.841m, 中央部は29.856m, 南東部は29.833m。ほぼ水平。**断面形** 皿状。**覆土** 自然堆積。

遺物 無。

所見 遺構は西側の調査区域外へ延びている。本跡の時期・性格等については, 出土遺物がなく特定できなかった。

第2号溝 (第32図)

位置 C2b₁区からD2b₅区。**重複関係** 本跡>SI12, SD3, SA2 (新旧関係不明)。**規模** 上幅0.66~1.68m, 下幅0.21~0.38m, 深さ0.38~0.54m, 全長[38.46m]。**主軸方向** N-20°-W。南南東から北北西に直線状に延びている。**高低差** 南東部は標高29.674m, 中央部は29.630m, 北西部は29.556m。北西へ向かって緩やかに傾斜している。**断面形** 中央部から南東部にかけて皿状を呈し, 中央部から北西部にかけてU字状を呈している。**覆土** 自然堆積。全体的に黒色土又は黒褐色土。

遺物 土師器片172点(うち内黒土器片36点), 須恵器片40点, 陶器片40点, 礫30点, 釘2点が出土。第44図1, 2, 3は流れ込みによる混入と思われる。4の常滑の甕片(他14点)が礫(直径12cm程度)と共に中央部の覆土から出土。

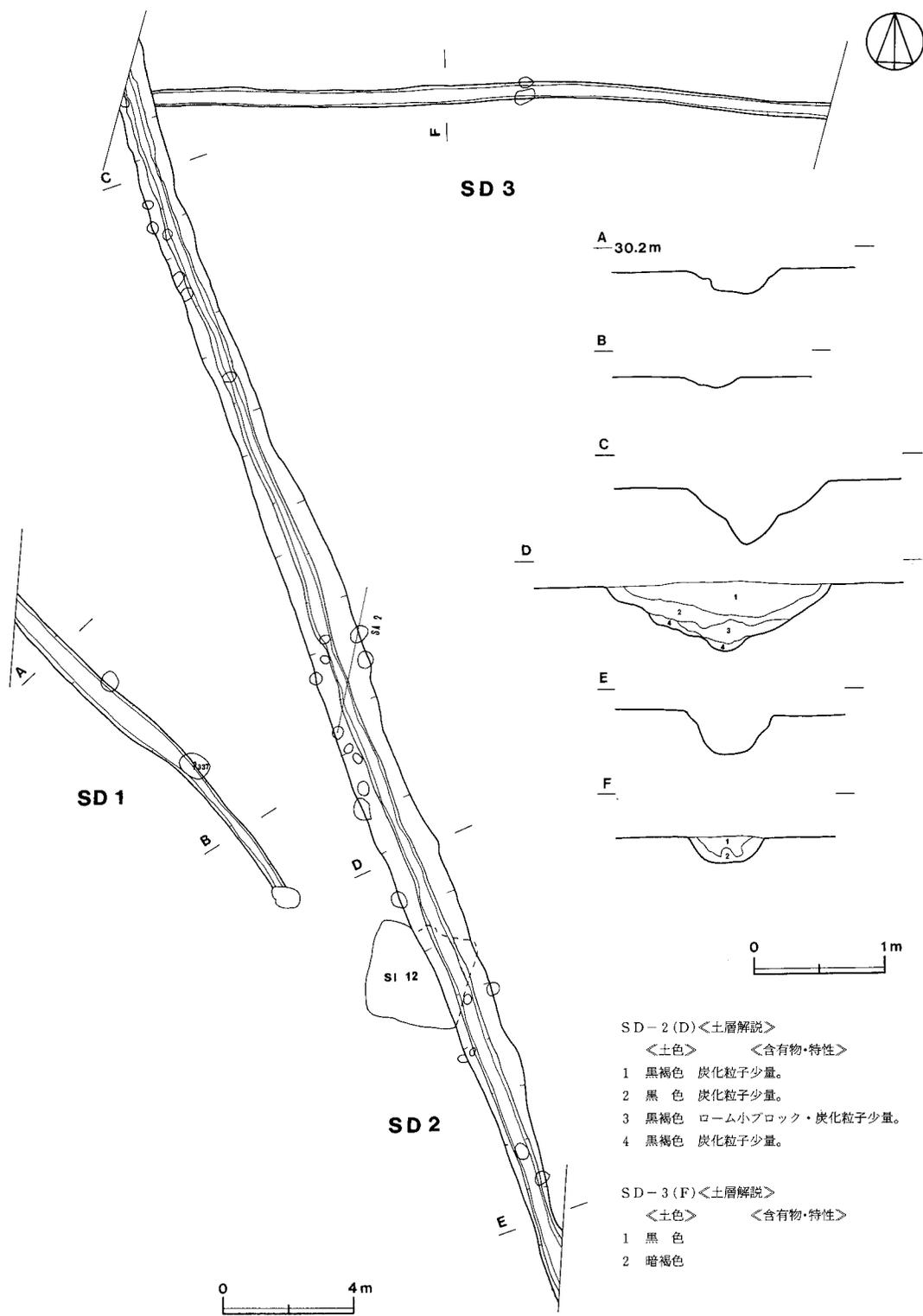
所見 本跡は第12号竪穴住居跡より新しく, 常滑の甕片が出土していることから, 排水的な性格をもつ中世の溝と考えられる。

第3号溝 (第32図)

位置 C2c₁区からC2c₇区。**重複関係** 本跡<SD2。**規模** 上幅0.41~0.61m, 下幅0.30~0.43m, 深さ0.17~0.23m, 全長[21.52m]。**主軸方向** N-90°。東西に直線状に延びている。**高低差** 西端部は標高29,760m, 中央部は29,729m, 東端部は29,620m。東へ向かって緩やかに傾斜している。**断面形** U字状。**覆土** 自然堆積。上層は黒色土, 下層は暗褐色土で硬く締まっている。

遺物 無。

所見 遺構は東西の調査区域外へ延びている。本跡の時期・性格等については, 出土遺物がなく特定できなかった。



第32図 第1・2・3号溝実測図

第4号溝（第33図）

位置 A2f₆区からB2h₈区。**重複関係** 本跡>SI 3, SI 5, SD 5, SF 1。SK15, SK16, P251(新旧関係不明)。**規模** 上幅1.34~2.85m, 下幅0.46~0.78m, 深さ1.02~1.09m, 全長[42.3m]。

主軸方向 N-14°-W。ほぼ南北に直線状に延びており, 南端部でやや東へ向きを変える。**高低差** 北端部は標高28.950m, 中央部は28.900m, 南端部は28.820m。南へ向かって緩やかに傾斜している。**断面形** 逆台形状を呈し, 壁は緩やかに外反して立ち上がる。底面は平坦で, 硬く締まっている。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器片224点(うち内黒土器26点), 須恵器片18点, 土師質土器1点, 陶器片5点, 砥石1点, 馬骨4点が出土。土師器や須恵器のほとんどが甕の胴部片で, 流れ込みによる混入と思われる。第44図5の小皿が北側の覆土中層から伏せた状態で出土。

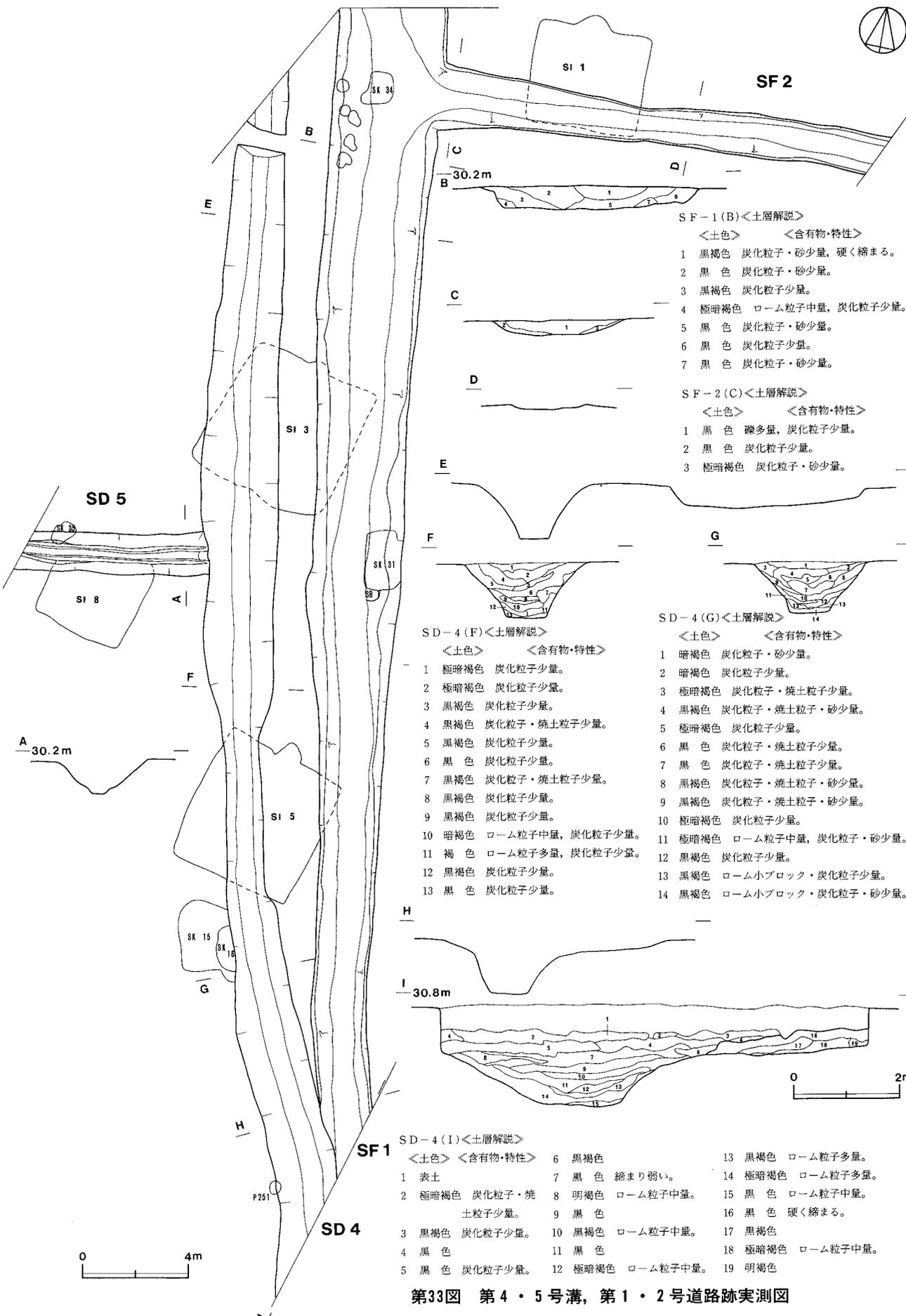
所見 本跡の南端部の土層をみると, 中位にロームを多量に含む層が検出されている。他の場所の土層では, 明瞭に現れてこないが, 溝の西側に土手状の高まりが築かれていた可能性が考えられる。また, 本跡の北端部には, 確認面から暗褐色土を30cm程掘り下げた面に, 幅80cmの黒色の硬く踏み固められた面が検出されている。この地点に溝を渡る土橋状の通路があった可能性が考えられる。

第5号溝（第33図）

位置 B2a₄区からB2a₆区。**重複関係** SI 8, SK35<本跡<SD 4。**規模** 上幅1.51~1.68m, 下幅0.19~0.29m, 深さ0.60~0.69m, 全長[6.83m]。**主軸方向** N-79°-E。ほぼ東西に直線状に延びている。**高低差** 西端部は標高29.393m, 東端部は標高29.313m。東側へ向かって緩やかに傾斜している。**断面形** 逆台形状を呈し, 底面の中央部は二段に掘り込まれている。**覆土** 全体的に黒色土で, 上層に比べ下層にローム粒子が多く含まれている。

遺物 土師器片44点(うち内黒土器片6点), 須恵器片17点, 陶器片1点が出土。第44図6の坏(土師器), 7の坏(須恵器)はいずれも覆土上層から出土しており, 流れ込みによる混入と思われる。

所見 本跡は第8号竪穴住居跡より新しい時期の遺構であるが, 時期や性格等は特定できなかった。



SF-1 (B) <土層解説>

<土色> <含有物・特性>

- 1 黒褐色 炭化粒子・砂少量, 硬く締まる。
- 2 黒色 炭化粒子・砂少量。
- 3 黒褐色 炭化粒子少量。
- 4 極暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量。
- 5 黒色 炭化粒子・砂少量。
- 6 黒色 炭化粒子少量。
- 7 黒色 炭化粒子・砂少量。

SF-2 (C) <土層解説>

<土色> <含有物・特性>

- 1 黒色 礫多量, 炭化粒子少量。
- 2 黒色 炭化粒子少量。
- 3 極暗褐色 炭化粒子・砂少量。

SD-4 (F) <土層解説>

<土色> <含有物・特性>

- 1 極暗褐色 炭化粒子少量。
- 2 極暗褐色 炭化粒子少量。
- 3 黒褐色 炭化粒子少量。
- 4 黒褐色 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 5 黒褐色 炭化粒子少量。
- 6 黒色 炭化粒子少量。
- 7 黒褐色 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 8 黒褐色 炭化粒子少量。
- 9 黒褐色 炭化粒子少量。
- 10 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量。
- 11 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子少量。
- 12 黒褐色 炭化粒子少量。
- 13 黒色 炭化粒子少量。

SD-4 (G) <土層解説>

<土色> <含有物・特性>

- 1 暗褐色 炭化粒子・砂少量。
- 2 暗褐色 炭化粒子少量。
- 3 極暗褐色 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 4 黒褐色 炭化粒子・焼土粒子・砂少量。
- 5 極暗褐色 炭化粒子少量。
- 6 黒色 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 7 黒色 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 8 黒褐色 炭化粒子・焼土粒子・砂少量。
- 9 黒褐色 炭化粒子・焼土粒子・砂少量。
- 10 極暗褐色 炭化粒子少量。
- 11 極暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子・砂少量。
- 12 黒褐色 炭化粒子少量。
- 13 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量。
- 14 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子・砂少量。

SD-4 (I) <土層解説>

<土色> <含有物・特性>

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|---------------------|---------------|------|--------------|-------|-------------|----------------|------|-----------------|-------|------------------|-----------------|------------------|----------------|--------------|--------|------------------|--------|
| 1 表土 | 2 極暗褐色 炭化粒子・焼土粒子少量。 | 3 黒褐色 炭化粒子少量。 | 4 黒色 | 5 黒色 炭化粒子少量。 | 6 黒褐色 | 7 黒色 締まり弱い。 | 8 明褐色 ローム粒子中量。 | 9 黒色 | 10 黒褐色 ローム粒子中量。 | 11 黒色 | 12 極暗褐色 ローム粒子中量。 | 13 黒褐色 ローム粒子多量。 | 14 極暗褐色 ローム粒子多量。 | 15 黒色 ローム粒子中量。 | 16 黒色 硬く締まる。 | 17 黒褐色 | 18 極暗褐色 ローム粒子中量。 | 19 明褐色 |
|------|---------------------|---------------|------|--------------|-------|-------------|----------------|------|-----------------|-------|------------------|-----------------|------------------|----------------|--------------|--------|------------------|--------|

第33図 第4・5号溝, 第1・2号道路跡実測図

5 道路跡

第1号道路跡 (第33図)

位置 A2e₆区からB2f₈区。**重複関係** SI 3, SI 5 <本跡<SD 4。SB 1, SF2, SK3I, SK34(新旧関係不明)。**規模** 道路幅2.01~4.21m。地山を8~55cm程掘り込んでいる。全長[44.1m]。道路幅・掘り込みとも北へ向かうに従って広く深くなる。**主軸方向** N-9°-W。南北に直線状に延びている。**高低差** 南端部は標高29.690m, 中央部は29.580m, 北端部は29.500m。北へ向かって緩やかに傾斜している。**断面形** 皿状。**道路面** 中央部が非常に硬く踏み固められており, 両側は中央部に比べやや軟らかい。

遺物 土師器片220点(うち内黒土器31点), 須恵器片90点, 陶器片5点, 馬骨4点が出土。第45図1~6の壺, 坏, 高台付坏, 高坏や, 9の永楽通貫が中央部から北側の道路最下面(地山面)から確認面までの中から出土。陶器片の中には, 青磁片2点, 黄瀬戸片1点がある。他の土師器片や須恵器片は, ほとんどが甕の胴部片である。

所見 本跡は道路最下面(地山面)から, 次第に道路面が高くなり, 最終的には, ほぼ確認面と同じレベルで使用されたものと考えられる。北端部の東側に第2号道路跡が東西に延びており, 道路最下面が本跡とほぼ同じことから, 同時期に存在したものと考えられる。本跡の西側の第4号溝との関係は, 南端部ではほとんど第4号溝と接しており, 北へ向かうに従って1.0~1.5mの間隔で平行して通っている。南端部の土層観察では, 道路最下面から30cmの硬化面で, 第4号溝に切られていることから第4号溝が新しい遺構と判断した。

第2号道路跡 (第33図)

位置 A2f₇区からA3f₁区。**重複関係** 本跡>SI 1。SF1(新旧関係不明)。**規模** 道路幅1.18~2.52mで, 地山を8~30cm程掘り込んでいる。[全長16.45m]。道路幅・掘り込みとも, 第1号道路跡へ向かうほど広く深くなる。**主軸方向** N-86°-E。東西へ直線状に延びており, 西端で第1号道路跡につながる。**高低差** 東端部は標高29.909m, 西端部は29.871m。西へ向かって緩やかに傾斜している。**断面形** 皿状。**道路面** 中央部は非常に硬く踏み固められており, 両側は中央部に比べやや軟らかい。

遺物 土師器片18点(うち内黒土器1点), 須恵器片8点が出土。第45図7の壺, 8の高台付坏が道路最下面(地山面)から確認面までの中から出土。

所見 道路最下面(地山面)から確認面まで3~25cmほどの堆積層が二層認められ, 道路面が次第に高くなり, 最終的には, ほぼ確認面と同じレベルで使用されたことがわかる。

6 柵列跡

第1号柵列跡 (第34図)

位置 C2e₄区からC2e₆区。重複関係 SB 3 (新旧関係不明)。規模 全長9.14m。主軸方向 N-80°-W。東西に延びている。柱穴間距離 1.24~1.90m。柱穴掘り方 径40~64cmの円形で、深さ35~55cm。各掘り方で柱痕跡が確認された。

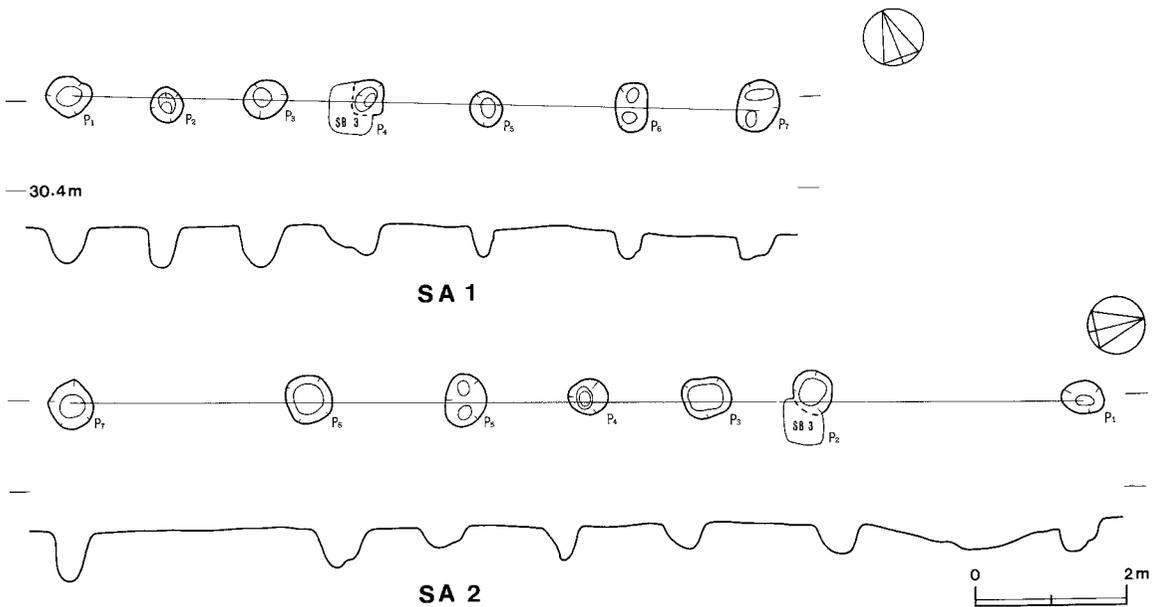
遺物 無。

第2号柵列跡 (第34図)

位置 C2d₄区からC2h₃区。重複関係 SB 3, SD 2 (新旧関係不明)。規模 全長13.34m。主軸方向 N-14°-E。南北に延びている。柱穴間距離 1.42~3.61m。柱穴掘り方 P₁~P₅は径43~59cmの円形で、深さ21~61cm。P₆(62×55×41), P₇(58×51×43)は方形を呈する。

遺物 無。

所見 P₆とP₇の柱穴間が3m程あいており、本来この間に柱穴が一本あったものと思われる。P₁~P₂の柱穴間も3.5m程あいており、中間にある第1号柵列跡のP1が本跡にも共通の柱穴であった可能性が考えられる。



第34図 第1・2号柵列跡実測図

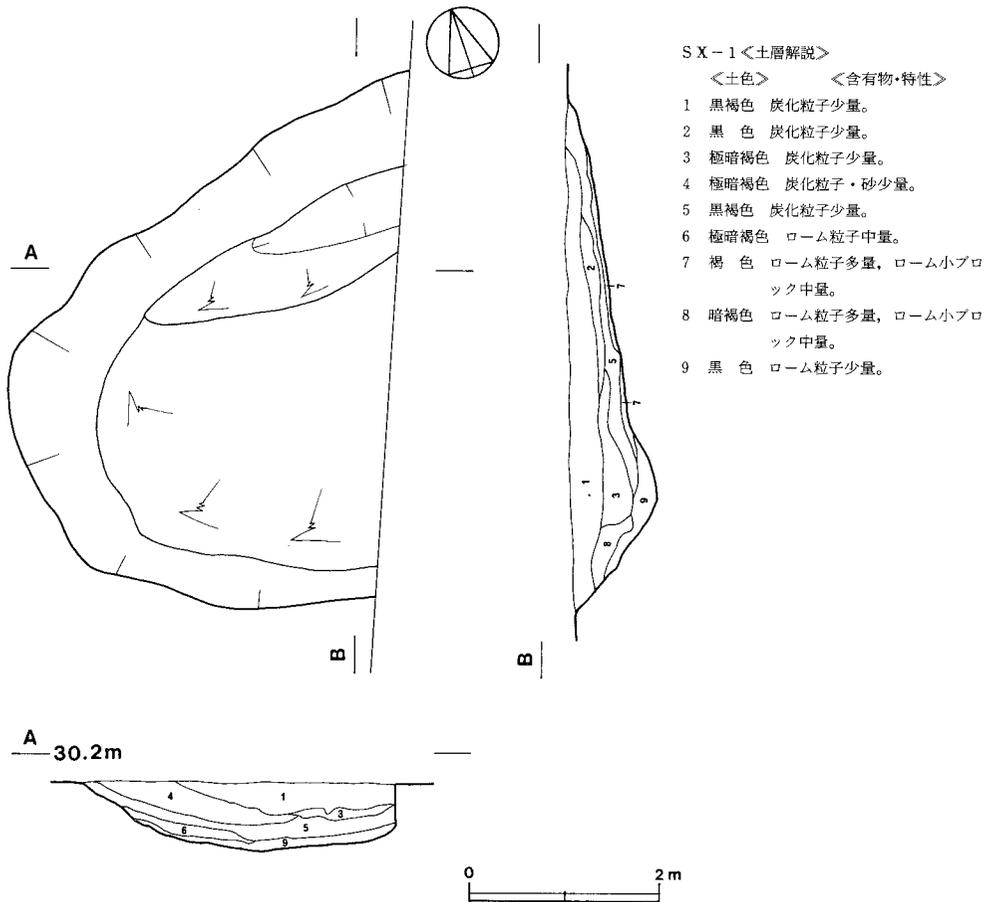
7 性格不明遺構

第1号性格不明遺構 (第35図)

位置 A3g₀区。**重複関係** 無。**平面形** 楕円形。**規模** 上端径4.21×3.95m、深さ0.70~0.91m。**長径方向** N-75°-E。**底面** 北側で落ち込みが見られるが、全体的に皿状を呈する。**覆土** 自然堆積。上層は黒色土で、下層はローム粒子を多く含む暗褐色土。

遺物 土師器片251点(うち内黒土器24点)、須恵器片53点、釘1点が出土。土師器は甕の胴部片がほとんどで、須恵器は甕の胴部片や坏片である。

所見 遺構は東側の調査区域外へ延びているため、全体を捉えることはできなかった。遺物から判断すると平安時代の遺構と考えられるが、底面から出土した遺物もなく、時期・性格等を特定することはできなかった。



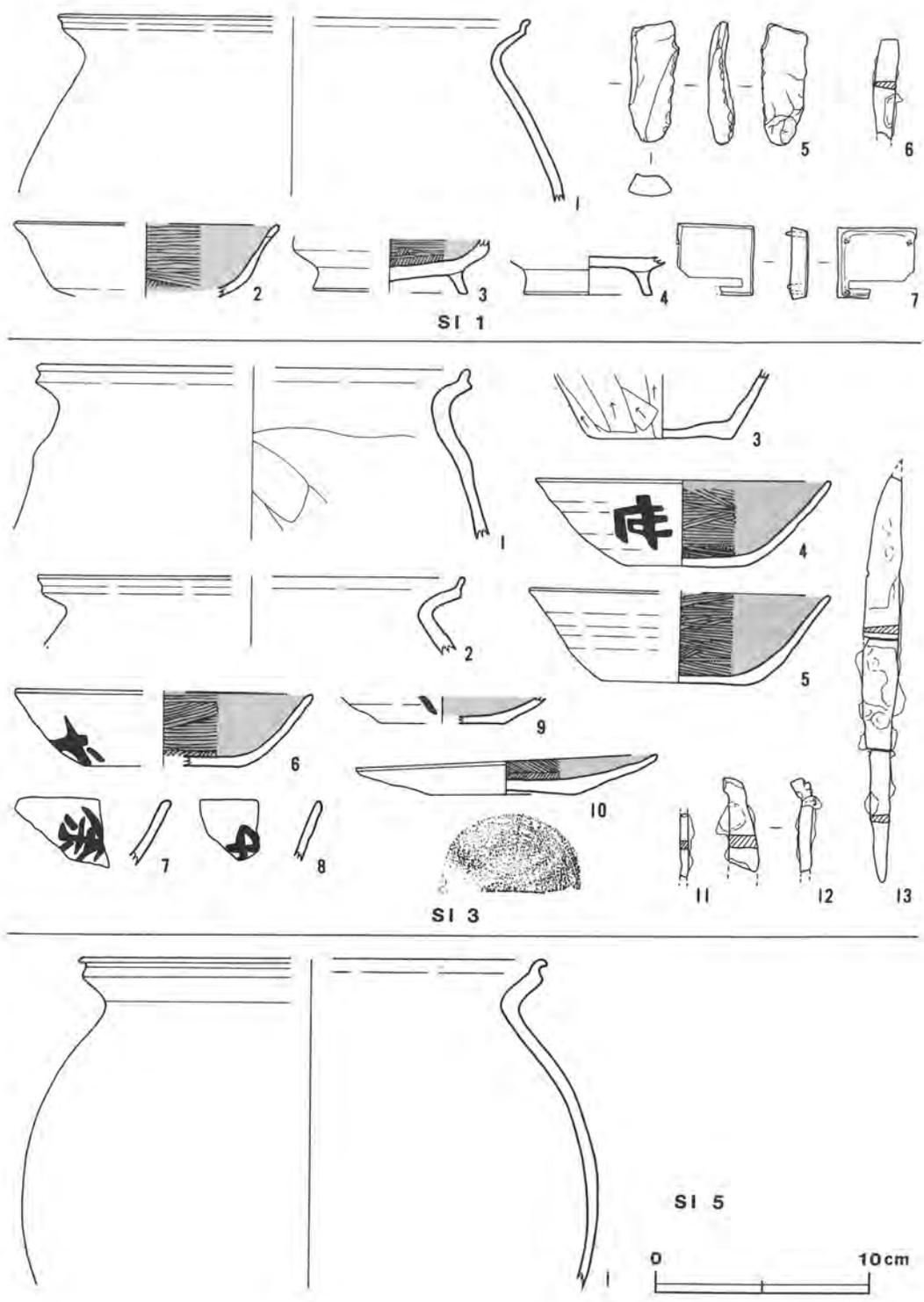
第35図 第1号性格不明遺構実測図

8 ピット

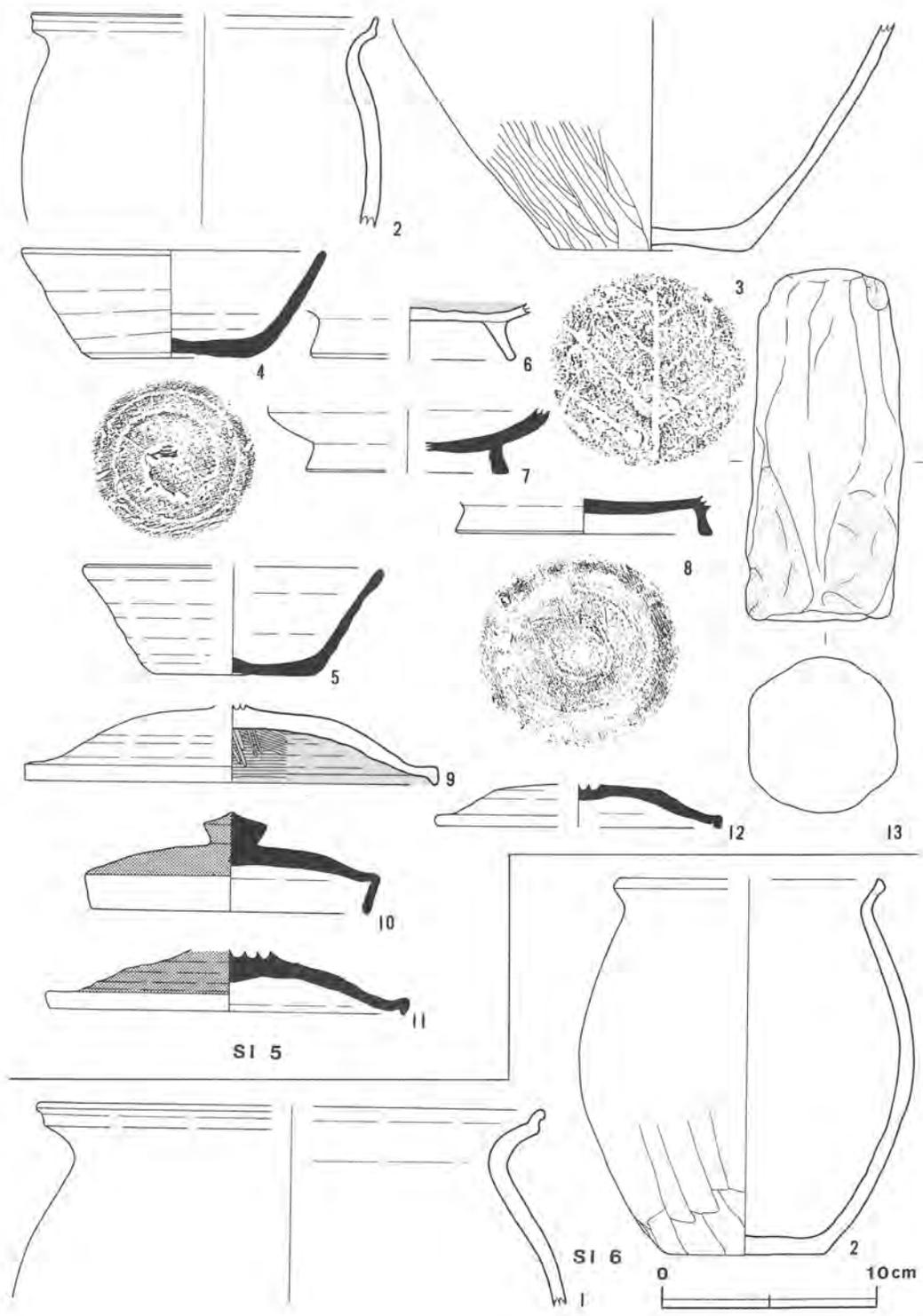
平面形が円形・楕円形を呈し、上端径が50cm前後のものをピットとした。当遺跡では、総数139基のピットが検出されている。各ピットは単独で、あるいは数か所まとめて調査区全域から検出されている。しかし、特に規則的な配列は認められない。ここでは特に遺物が出土しているピットについてだけ掲載した。

ピット番号	位置	規模(cm) 長径×短径×深さ	遺物	備考
P124	C2e ₅	47×46×65	土師器片1点	SB3,SK1と重複
P198	D2a ₃	49×49×52	古銭2点,釘1点	
P251	B2g ₈	40×40×39	土師器片1点	SD4と重複
P253	B2g ₇	68×57×30	土師器片1点,須恵器片1点	
P337	C2h ₂	88×74×79	土師器片3点,須恵器片1点	SD1と重複
P347	C2i ₂	60×58×58	土師器片2点	
P358	C2j ₃	31×29×65	土師器片1点	SI12と重複
P476	D1e ₉	76×71×37	土師器片3点	SI19と重複

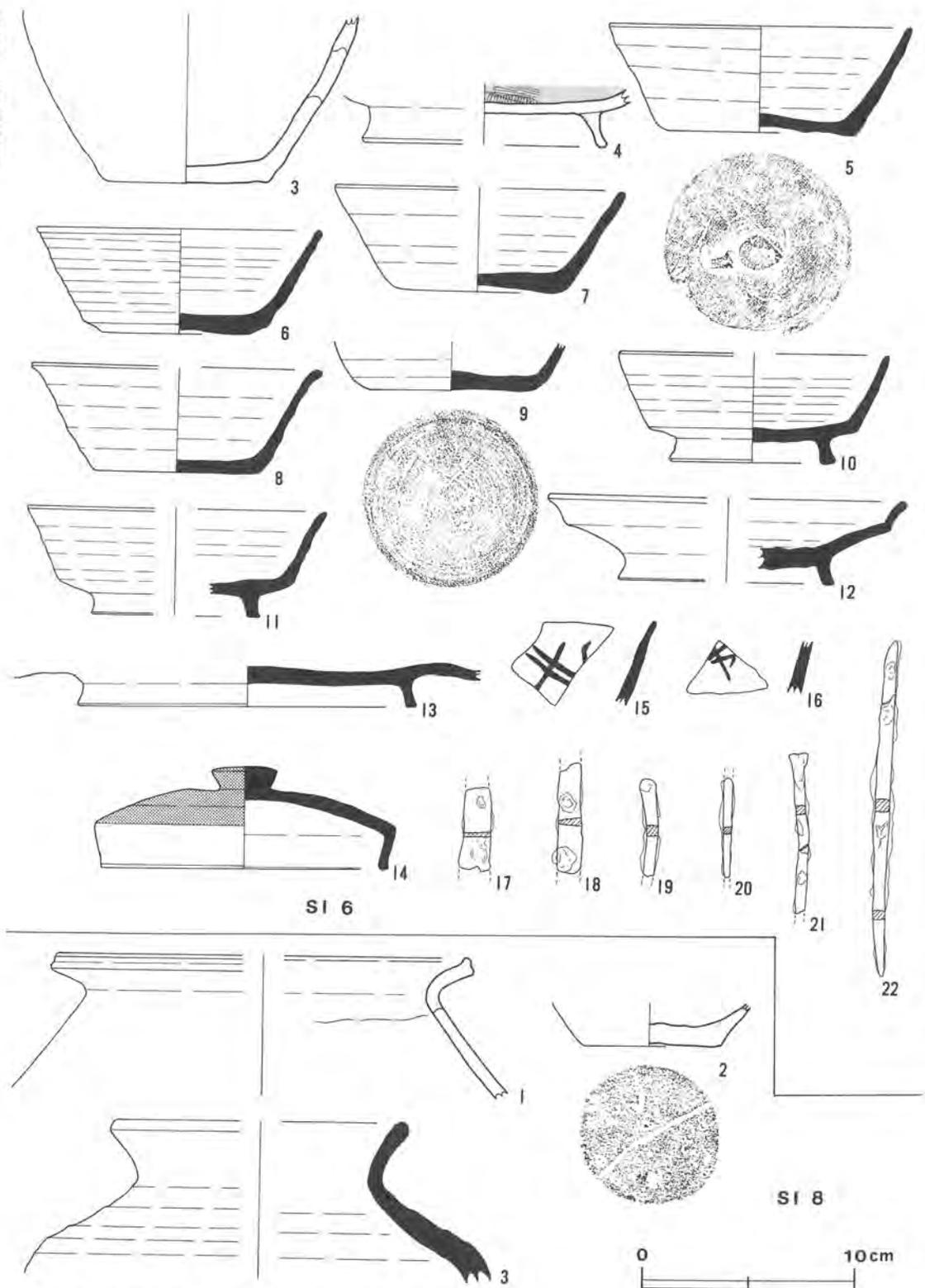




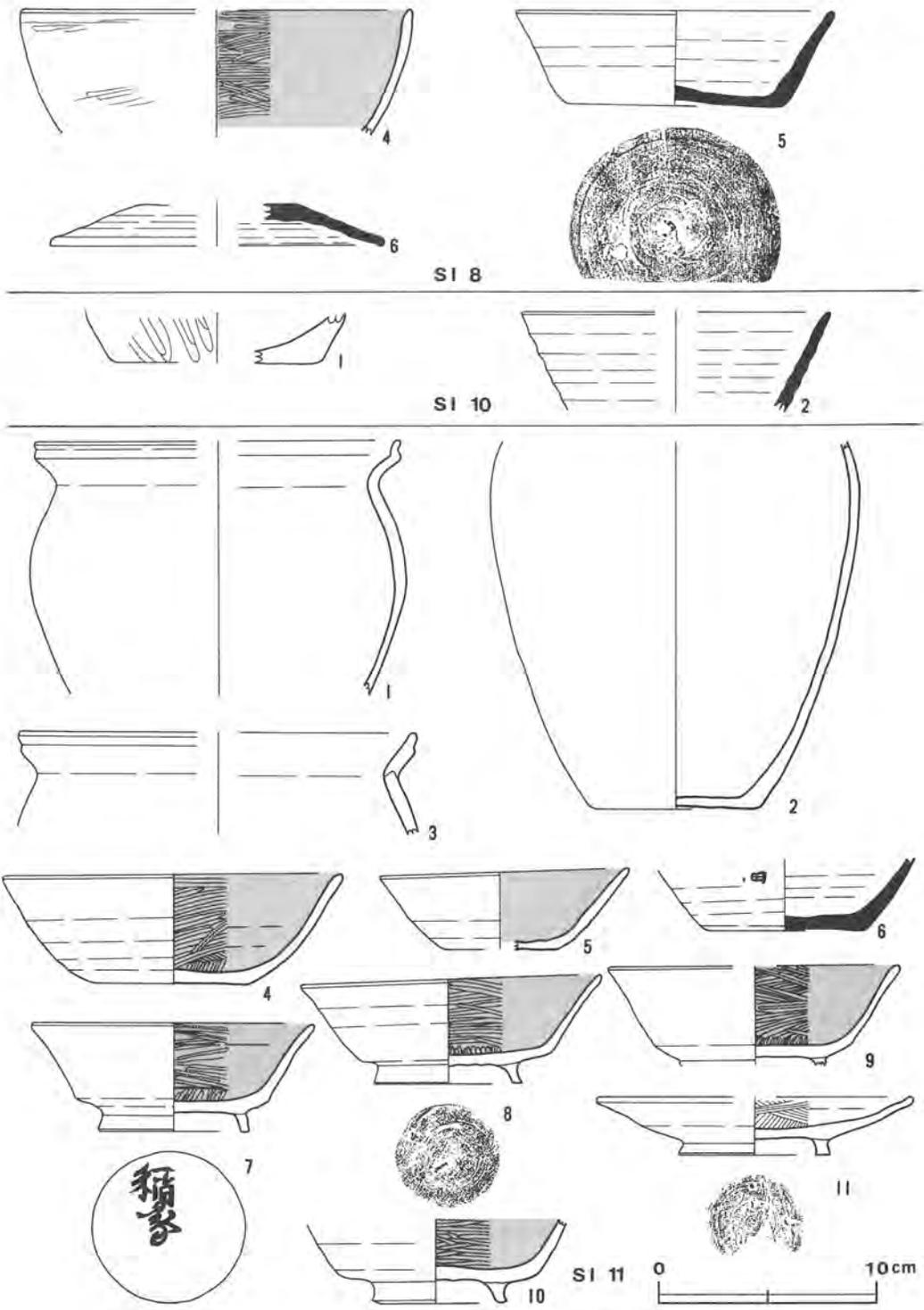
第36図 第1・3・5(1)号住居跡出土遺物実測図



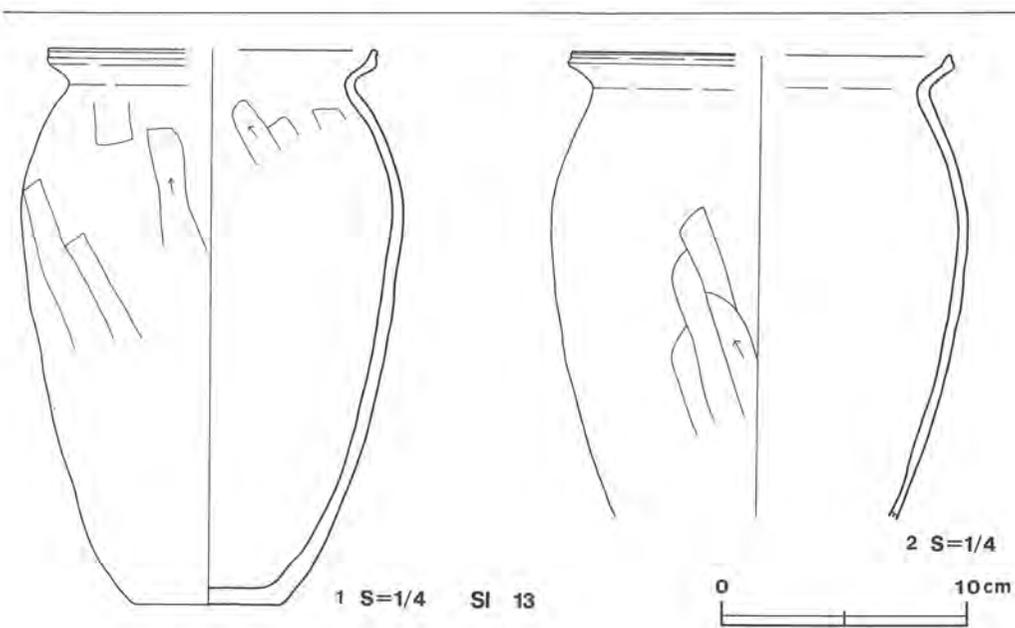
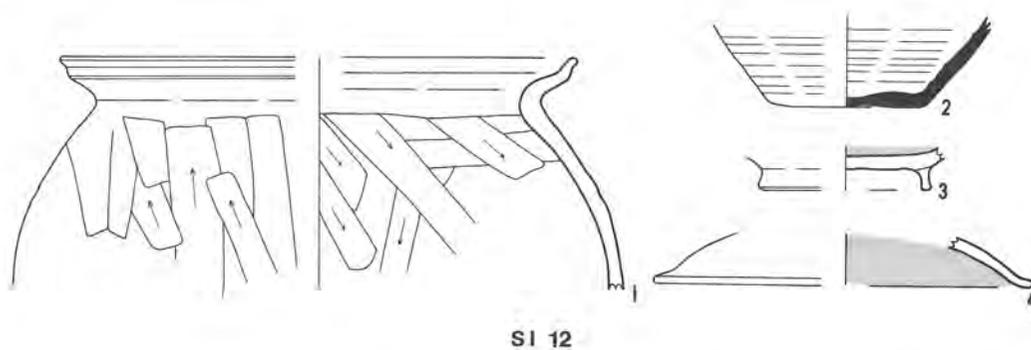
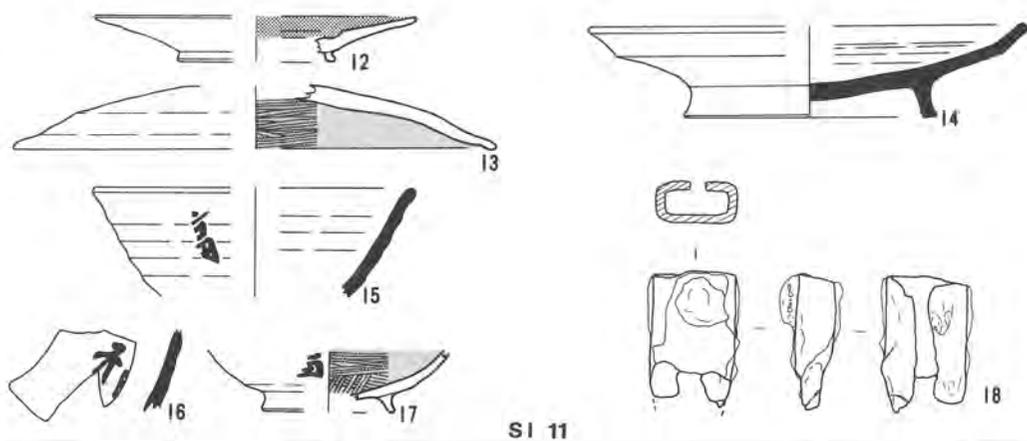
第37図 第5(2)・6(1)号住居跡出土遺物実測図



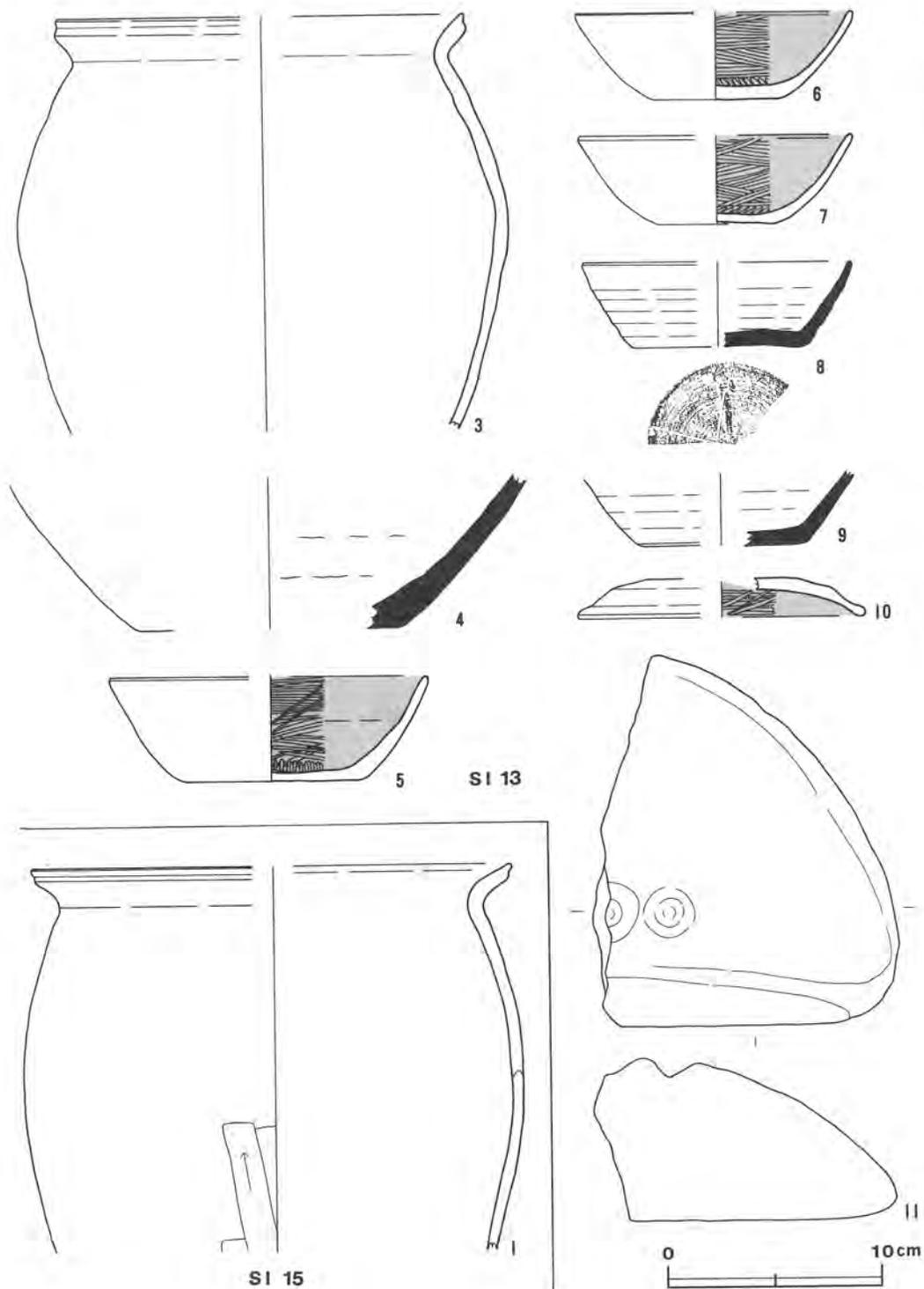
第38図 第6(2)・8(1)号住居跡出土遺物実測図



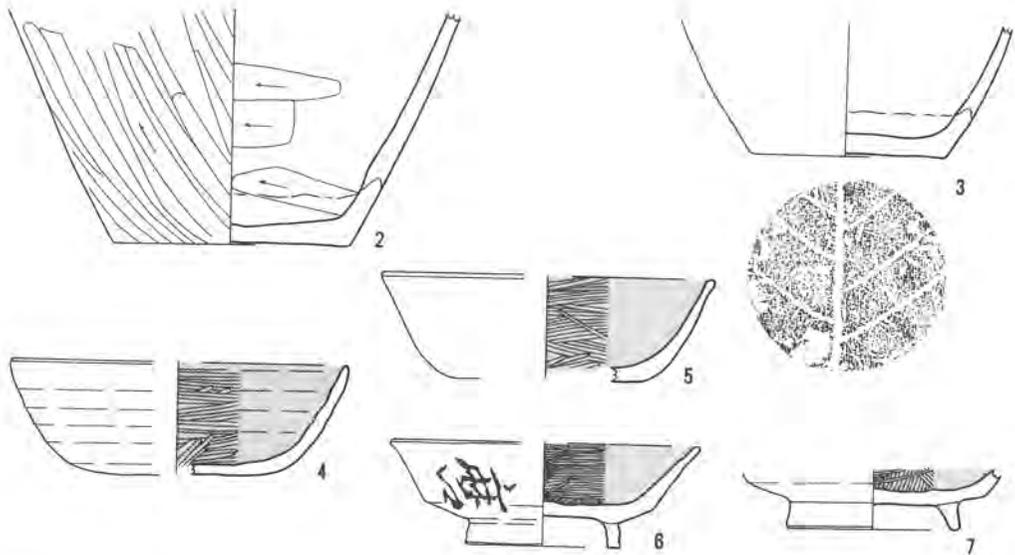
第39図 第8(2)・10・11(1)号住居跡出土遺物実測図



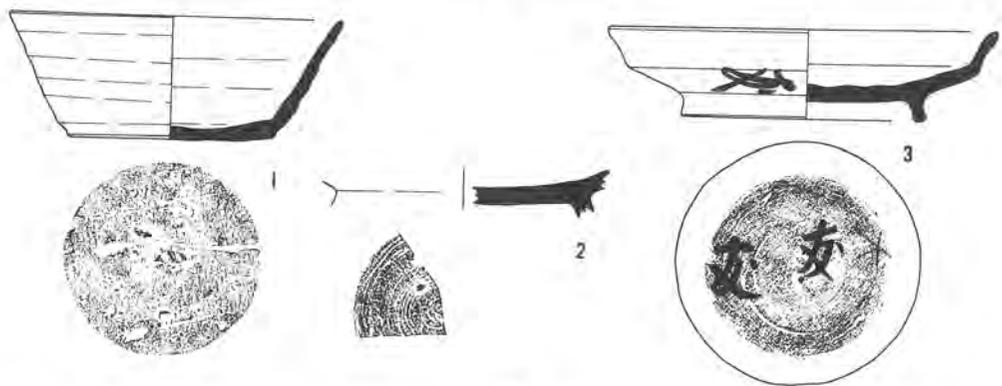
第40図 第11(2)・12・13(1)号住居跡出土遺物実測図



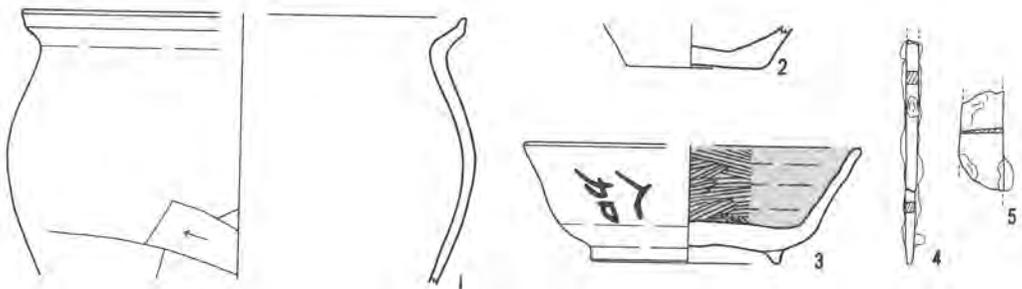
第41図 第13(2)・15(1)号住居跡出土遺物実測図



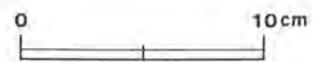
SI 15



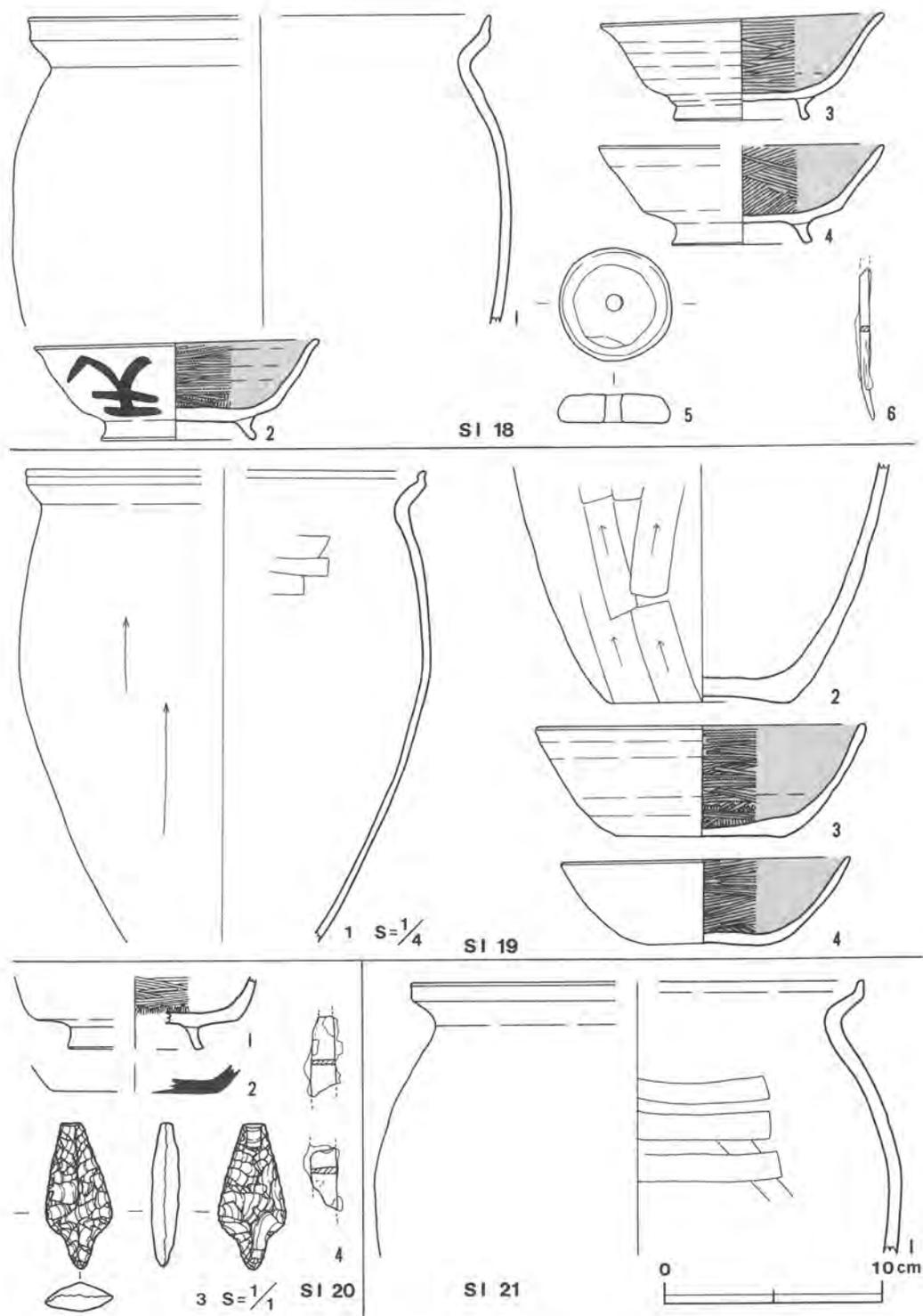
SI 16



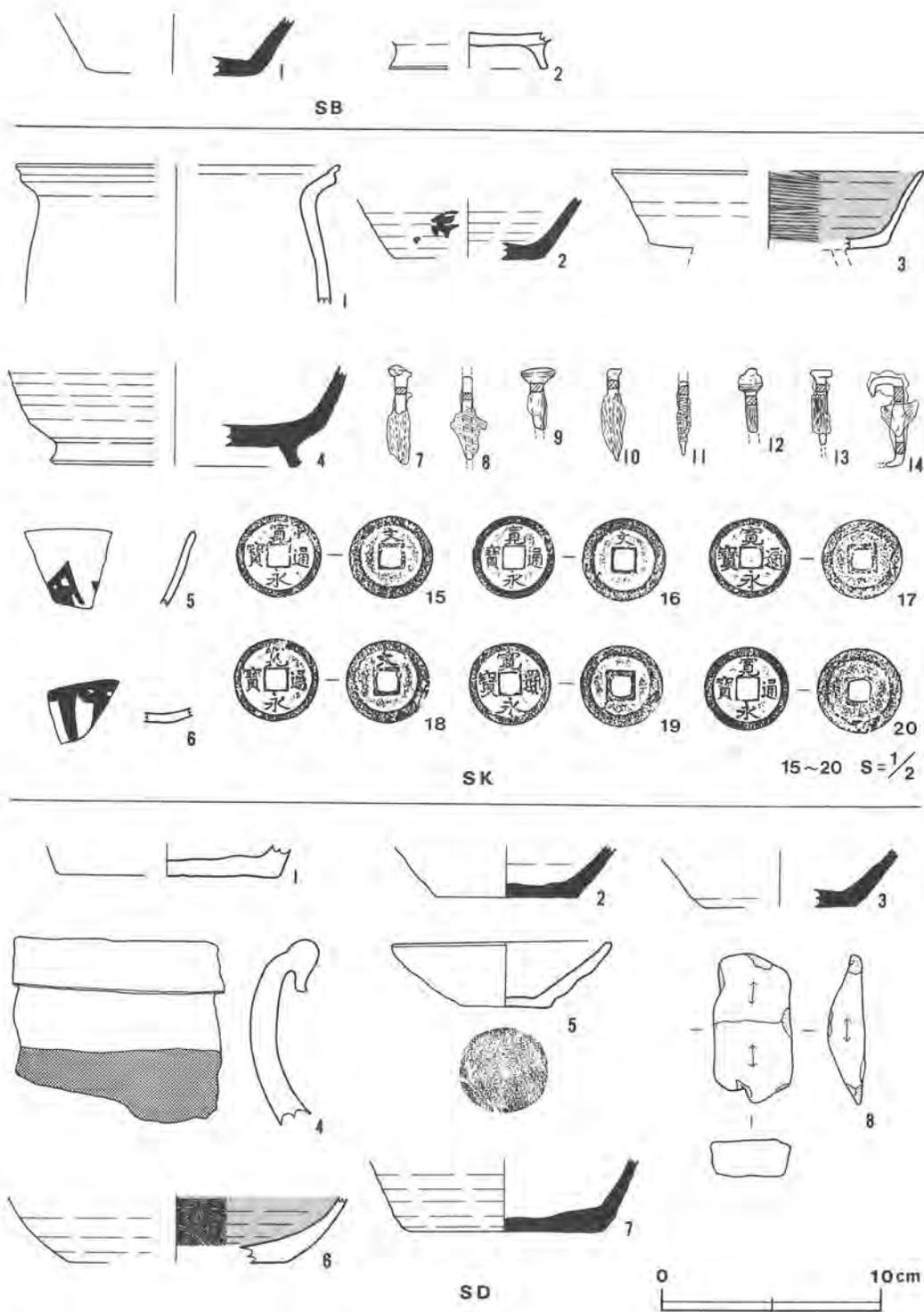
SI 17



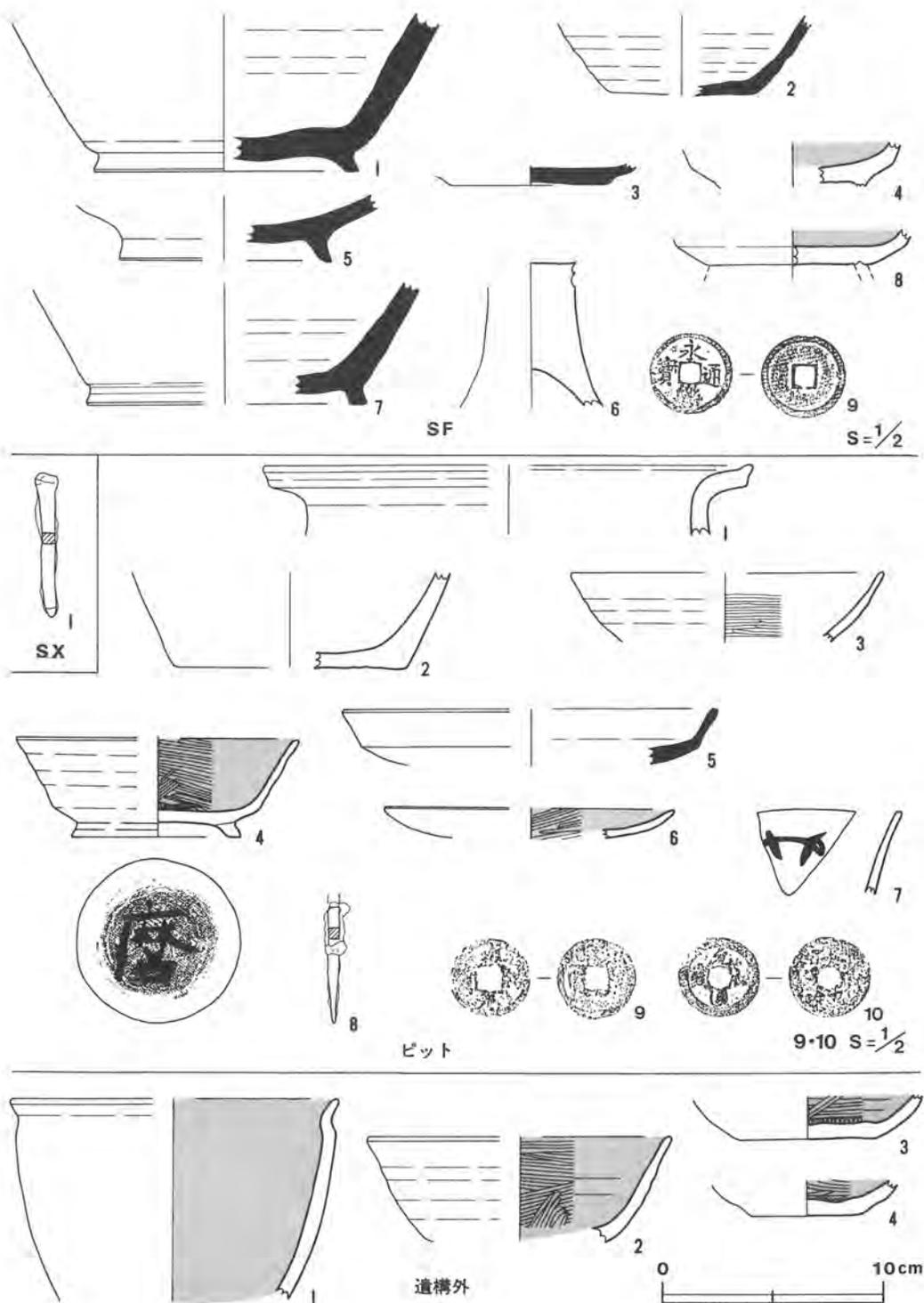
第42図 第15(2)・16・17号住居跡出土遺物実測図



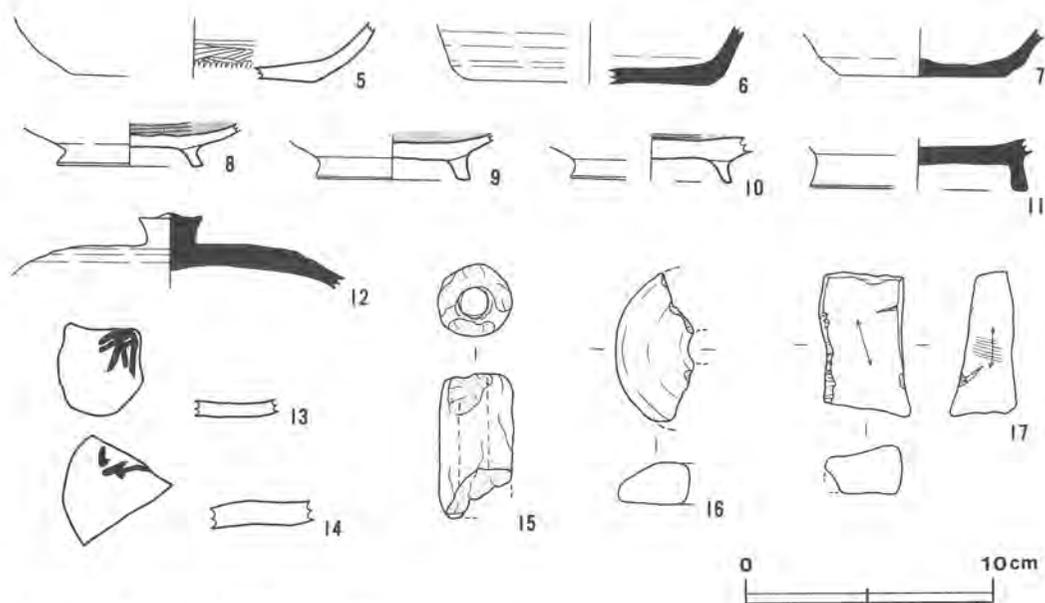
第43図 第18・19・20・21号住居跡出土遺物実測図



第44図 掘立柱建物跡・土坑・溝出土遺物実測図，拓影図



第45図 道路跡・性格不明遺構・ピット・遺構外出土遺物実測図，拓影図



第46図 遺構外出土遺物実測図

第1号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 1	甕 土師器	A [22.0] B (8.6)	強く張った胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口縁端部を外上方へつまみ出す。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。	砂粒・雲母にふい赤褐色普通	10% P 1 PL15 カマド付近の覆土下層
2	坏 土師器	A [12.2] B (3.5)	体部は外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。口唇部は丸い。	水挽き整形。内面寛磨き。内面黒色処理。	砂粒・スコリアにふい褐色普通	15% P 2 PL15 南壁中央部付近の覆土
3	高台付坏 土師器	B (2.5) D [7.2] E 0.9	底部は平底で、外側へふんばる高台が付く。	水挽き整形。内面寛磨き。内面黒色処理。	砂粒にふい橙色普通	10% P 3 西壁中央部付近の覆土
4	高台付坏 土師器	B (1.8) D 6.0 E 1.3	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。	水挽き整形。内面寛磨き。内面黒色処理。	砂粒にふい橙色普通	10% P 4 中央部付近の覆土中層

第3号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 1	甕 土師器	A [20.0] B (8.0)	張りの弱い胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口縁端部を外上方へつまみ出す。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部内面寛ナデ。	砂粒 橙色 普通	10% P 5 PL15 カマド焼成部の覆土
2	甕 土師器	A [19.8] B (3.4)	頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部を外上方につまみ出す。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 明褐色 普通	5% P 6 カマド付近の床面
3	甕 土師器	B (3.2) C 6.8	底部は平底で、胴部は外傾して立ち上がる。	胴部外面寛削り。内面ナデ。	砂粒・雲母 にふい褐色 普通	20% P 7 中央部の覆土下層

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 4	坏 土師器	A 13.9 B 4.1 C 5.5	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 にふい橙 普通	90% P8 PL15 北西部の床面 墨書「世」
5	坏 土師器	A [14.2] B 4.3 C [7.0]	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア にふい橙 普通	40% P9 南西コーナー付近 の覆土中層 逆位
6	坏 土師器	A [13.8] B 3.5 C [7.2]	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部及び体部下端回転篋削り(右)。	砂粒・雲母・スコリア にふい橙 普通	25% P10 PL15 北東部の覆土 墨書有り
7	坏 土師器		口縁部片。口唇部は丸い。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。	砂粒 にふい橙 普通	5% P12 北東部の覆土 墨書有り
8	坏 土師器		口縁部片。口唇部は丸い。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。	砂粒 浅黄橙 普通	5% P13 南西部の覆土 墨書有り
9	坏 土師器	B (1.3) C [6.8]	底部片。底部は平底。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部回転篋削り(右)。	砂粒・石英・長石 灰白色 普通	5% P177 北東部の覆土 墨書有り
10	皿 土師器	A 13.9 B 1.9 C 6.8	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり、大きく開く。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部回転篋削り(右)。	砂粒・石英 灰白色 普通	50% P11 PL15 南西コーナー付近の覆 土上層

第5号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 1	甕 土師器	A [21.6] B (15.5)	丸く張った胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口縁端部を外上方へつまみ出す。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。体部内・外面篋ナデ。	砂粒・雲母 にふい赤褐色 普通	20% P14 PL15 カマド燃焼部の覆土
第37図 2	甕 土師器	A [16.0] B (9.8)	小形甕。張りの弱い胴部から、頸部を外反させて、口縁端部をほぼ垂直につまみ上げる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。体部内・外面篋ナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	15% P15 PL15 カマド燃焼部の覆土
3	甕 土師器	B (10.7) C 9.2	底部は上げ底で、木葉痕をもつ。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面斜位の篋磨き。胴部内面ナデ。	砂粒・雲母 褐色 普通	15% P16 カマド燃焼部の覆土
4	坏 須恵器	A 14.1 B 5.1 C 7.5	底部は平底で、体部は器厚を減しながら、外傾して立ち上がる。口唇部は丸い。	水挽き整形。底部回転篋切り後ナデ。	砂粒・礫 灰黄色 普通	80% P19 PL15 カマド燃焼部の覆土下層
5	坏 須恵器	A [13.7] B 5.0 C 7.5	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。口唇部は丸い。	水挽き整形。底部回転篋切り後底部及び体部下端手持ち篋削り。	砂粒 灰色 普通	30% P20 PL15 P1付近の覆土中層
6	高台付坏 土師器	B (2.7) D [9.4] E 1.8	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒・雲母・スコリア にふい赤褐色 普通	20% P18 カマド燃焼部の覆土
7	高台付坏 須恵器	B (3.1) D [9.4] E 1.4	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がる。	水挽き整形。底部回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒・礫 黄灰色 普通	15% P21 北西コーナー付近の覆 土下層
8	盤 須恵器	B (1.8) D 11.9 E 1.3	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。高台の接地面は平坦。	水挽き整形。底部回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒 灰黄色 普通	30% P22 西壁中央部付近の床面 正位 転用硯

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第37図 9	蓋 土師器	A 19.0 B (3.8)	鈕は欠損。やや深く丸い天井部から、短く垂下する口縁部が付き、口唇部を丸くおさめる。	水挽き整形。天井部内・外面篋磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	70% P17 PL15 カマド燃焼部の覆土下層
10	蓋 須恵器	A 12.8 B 4.5 F 2.9 G 1.4	鈕は宝珠形を呈する。天井部はやや丸みをもつ。口縁部は屈曲して、やや内傾して下降する。天井部外面に自然粘付着。	水挽き整形。	砂粒 黄灰色 普通	95% P23 PL15 カマド付近の覆土中層
11	蓋 須恵器	A 16.3 B (2.9)	鈕は欠損。天井部は浅く丸い。口縁部は屈曲して、短く垂下する。天井部外面に自然粘付着。	水挽き整形。	砂粒 褐灰色 普通	70% P24 PL15 東壁中央部付近の床面 逆位
12	蓋 須恵器	A [13.0] B (2.0)	天井部は上位に平坦な面を持ちなだらかに下降する。口縁部は屈曲して、短く垂下する。	水挽き整形。天井部回転篋削り(右)。	砂粒 灰色 普通	20% P25 北西部の覆土

第6号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第37図 1	甕 土師器	A [23.4] B (9.1)	やや膨らんだ胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口縁端部を外上方へつまみ上げる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部内・外面篋ナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	15% P26 PL16 カマド付近の覆土下層
2	甕 土師器	A [12.1] B 17.5 C 7.6	小形甕。底部は平底。胴部は内彎しながら立ち上がり、胴中に最大径を持つ。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部をほぼ垂直につまみ上げる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面下位は斜位の篋削り。内面篋ナデ。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	40% P28 PL16 北東コーナー付近の床面
第38図 3	甕 土師器	B (8.0) C 8.1	底部は平底。胴部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	内・外面篋ナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	15% P31 南壁中央部付近の床面 正位
4	高台付 土師器	B (2.8) D [11.6] E 1.7	底部は平底で、外側へふんばる高台が付く。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒・雲母 におい橙色 普通	15% P34 カマド付近の覆土下層 逆位
5	坏 須恵器	A 14.3 B 5.1 C 9.0	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がる。口唇部はやや尖る。底部に篋記号有り。	水挽き整形。底部回転篋切り後不定方向の手持ち篋削り。	砂粒・長石 黄灰色 普通	70% P35 PL16 東壁中央部付近の 覆土下層 逆位
6	坏 須恵器	A 13.3 B 5.0 C 7.2	底部は平底で、体部との境に明瞭な稜をもつ。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	水挽き整形。底部回転篋切り後一方の手持ち篋削り。	砂粒 灰白色 普通	80% P36 PL16 中央部付近の覆土中層 逆位
7	坏 須恵器	A [13.4] B 5.0 C 7.6	底部は平底で、体部は外傾して立ち上がる。口唇部は丸い。外傾して立ち上がる。	水挽き整形。底部回転篋切り後手持ち篋削り。	砂粒・礫 褐灰色 普通	55% P37 PL16 中央部の覆土中層
8	坏 須恵器	A [13.5] B 5.0 C [7.7]	底部は平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。	水挽き整形。底部回転篋切り後外周部手持ち篋削り。	砂粒・礫 灰色 普通	50% P38 PL16 南西部の覆土
9	坏 須恵器	B (2.2) C 8.2	底部は平底。体部は外傾して立ち上がる。底部に篋記号有り。	水挽き整形。底部回転篋削り(右)。	砂粒 黄灰色 普通	30% P42 中央部付近の覆土下層 正位

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 10	高台付坏 須恵器	A [12.6] B 5.2 D [7.9] E 1.2	底部は平底で、外側へふんばる高台が付く。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口唇部はやや尖る。	水挽き整形。底部回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒 灰黄褐色 普通	40% P44 PL16 カマド燃焼部の覆土 正位
11	高台付坏 須恵器	A [14.2] B 5.1 D [7.8] E 1.1	底部は平底で、ほぼ直立する高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。口唇部は丸い。	水挽き整形。底部回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒 黄灰色 普通	25% P46 PL16 カマド付近の覆土中層 横位
12	盤 須恵器	A [16.6] B 4.0 D [10.2] E 0.9	底部は平底で、外側へふんばる高台が付く。体部は外反気味に立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外反して開き、口唇部を丸くおさめる。	水挽き整形。底部回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒 灰色 普通	40% P48 PL16 北壁周溝の底面
13	盤 須恵器	B (2.1) D [16.0] E 1.2	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。高台の接地面は平坦。	水挽き整形。底部回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒 褐灰色 普通	15% P51 中央部付近の覆土中層 逆位
14	蓋 須恵器	A 13.5 B 4.8 F 3.0 G 1.0	鈕は偏平。天井部からなだらかに下降し、口縁部との境に稜を持つ。口縁部はやや内傾して、口唇部を平らにおさめる。天井部外面に自然釉付着。	水挽き整形。	砂粒 褐灰色 普通	50% P52 PL16 中央部付近の覆土中層 逆位
15	坏 須恵器		坏の口縁部から体部にかけての破片。	水挽き整形。	砂粒 灰白色 普通	5% P54 北西部の覆土 墨書有り
16	坏 須恵器		坏の体部片。	水挽き整形。	砂粒 灰色 普通	5% P55 南東部の覆土 墨書有り

第8号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 1	甕 土師器	A [19.4] B (6.6)	強く張った胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口縁端部をほぼ垂直につまみ出す。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	10% P56 南西部の覆土下層
2	甕 土師器	B (2.0) C 6.5	底部は平底で、胴部は外傾して立ち上がる。	内面ナデ。外面は摩滅が著しく調整不明。	砂粒・長石 褐色 普通	10% P57 南壁中央部付近の床面
3	甕 須恵器	A [13.6] B (7.5)	頸部から外反して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	-	砂粒 褐灰色 普通	15% P59 PL16 カマド付近の床面
第39図 4	埴 土師器	A [18.0] B (5.8)	体部は内彎気味に立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	水挽き整形。内・外面篋磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	10% P58 中央部付近の覆土下層
5	坏 須恵器	A 14.5 B 4.5 C 10.0	底部は平底。体部は器厚を減じながら外傾して立ち上がる。口唇部は丸い。	水挽き整形。底部回転篋削り(右)。内面の水挽き痕強い。	砂粒 黄灰色 普通	60% P60 PL16 中央部の覆土下層
6	蓋 須恵器	A [15.2] B (1.9)	天井部は浅く、上位に平坦な面を持つ。口縁部は短く垂下し、口唇部を丸くおさめる。	水挽き整形。天井部回転篋削り(右)。	砂粒 灰白色 普通	15% P61 北西部の覆土

第10号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第39図 1	甕 土師器	B (2.3) C [9.8]	底部は平底で、胴部は外傾して立ち上がる。	胴部外面斜位の篋磨き。内面ナデ。	砂粒・長石 にふい橙色 普通	5% P63 カマド燃焼部の覆土
2	坏 須恵器	A [14.2] B (4.6)	口縁部から体部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口唇部はやや尖る。	水挽き整形。外面水挽き痕強い。	砂粒 灰色 普通	10% P64 東壁中央部付近の覆土 中層

第11号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第39図 1	甕 土師器	A [16.6] B (11.8)	小形甕。丸く張った胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口縁端部を外上方へつまみ出す。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部内・外面篋ナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	5% P67 PL17 北西コーナー付近の覆土下層
2	甕 土師器	B (17.0) C [7.6]	底部は平底で、胴部は内彎気味に立ち上がる。全体的に器厚が薄い。	胴部外面縦位の篋ナデ。胴部内面横位の篋ナデ。	砂粒 にふい橙色 普通	30% P66 PL17 中央部の床面
3	甕 土師器	A [18.4] B (4.7)	頸部を「く」の字状に屈曲させて口縁端部を外上方へつまみ出す。口縁端部の外面は凹む。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	5% P69 中央部の床面
4	坏 土師器	A 15.3 B 5.2 C 7.2	底部は平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部及び体部下端回転篋削り(右)。	砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	50% P71 PL17 北東コーナー付近の床面
5	坏 土師器	A 11.4 B 3.8 C [5.2]	底部は平底で、体部は外傾して立ち上がる。口唇部は丸い。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部及び体部下端回転篋削り(右)。	砂粒・スコリア 淡橙色 普通	60% P72 PL17 カマド燃焼部の覆土
6	坏 須恵器	B (3.3) C 7.4	底部は平底で、体部は器厚を減じながら、外傾して立ち上がる。	水挽き整形。底部回転篋削り(右)。	砂粒・石英 灰黄褐色 普通	25% P83 PL17 中央部付近の覆土下層 墨書有り
7	高台付坏 土師器	A 13.1 B 5.0 D 7.0 E 0.8	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。底部と体部の境は面状になる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部及び体部下端回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	60% P65 PL17 北東コーナー付近の床面 墨書底部「稻家」
8	高台付坏 土師器	A 13.8 B 5.0 D 7.0 E 1.0	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒 にふい橙色 普通	70% P75 PL17 北西部の覆土下層
9	高台付坏 土師器	A [13.2] B (4.6) E (0.3)	底部は平底で、高台は欠損。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。底部と体部の境は面状になる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部及び体部下端回転篋削り(右)。	砂粒 にふい橙色 普通	70% P76 PL17 北東コーナー付近の床面
10	高台付坏 土師器	B (3.9) D 6.3 E 1.0	底部は平底で、外側へふんばる高台が付く。体部は外傾して立ち上がる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部は摩減が著しく調整不明。	砂粒 にふい橙色 普通	30% P77 南東コーナー付近の床面
11	高台付皿 土師器	A [14.4] B 2.2 D 7.0 E 0.7	底部は平底で、短くほぼ直立する高台が付く。体部は大きく外傾して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面一部黒色処理。底部回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒 明赤褐色 普通	60% P81 PL17 北東コーナー付近の床面 口縁部に粘土 紐痕有り。

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 12	段皿 灰釉陶器	A [13.2] B 1.9 D [6.4] E 0.4	底部は平底で、やや外反する高台が付く。体部は大きく外傾して立ち上がる。中心から6.8cmのところに段差がつく。	水挽き整形。	内面 明オリーブ灰色 外面 灰白色 普通	10% P180 PL17 北西部の覆土下層
13	蓋 土師器	A [19.8] B (2.6)	鉋欠損。天井部は浅く、なだらかに下降する。口縁部はわずかに外反して、口唇部を丸くおさめる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。天井部回転篋削り(右)。	砂粒 にぶい橙色 普通	15% P82 北東部の覆土下層
14	盤 須恵器	A [17.6] B 3.8 D 10.4 E 1.4	底部はやや丸底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は外傾し、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は軽く外反する。	水挽き整形。底部回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒 褐灰色 普通	35% P86 PL17 南壁中央部付近の覆土 中層 転用硯
15	坏 須恵器	A [13.2] B (4.5)	体部は外傾して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	水挽き整形。	砂粒 黄灰色 普通	5% P88 北東部の覆土下層 墨書有り
16	坏 須恵器		体部片。	水挽き整形。	砂粒 褐灰色 普通	5% P89 南西部の覆土 墨書有り
17	高台付坏 土師器	B (2.5) D [5.6] E 0.8	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部及び体部下端回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒 にぶい橙色 普通	5% P178 PL17 北東部の覆土 墨書有り

第12号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 1	甕 土師器	A [21.0] B (9.6)	丸く張った胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口縁端部を外上方へつまみ出す。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面縦位の篋削り。胴部内面篋ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	5% P90 PL17 カマド付近の覆土中層
2	坏 須恵器	B (3.8) C 6.6	底部は平底で、体部は外傾して立ち上がる。	水挽き整形。底部回転篋切り後ナデ。	砂粒 暗灰黄色 普通	40% P93 PL17 北西部の覆土下層 正位
3	高台付坏 土師器	B (1.8) D [7.0] E 0.9	底部は平底で、ほぼ直立する高台が付く。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒 淡橙色 普通	10% P92 北東部の覆土
4	蓋 土師器	A [15.4] B (2.2)	天井部は浅く丸い。口縁部で軽く外反して、口唇部を丸くおさめる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。	砂粒 橙色 普通	5% P91 南東部の覆土

第13号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 1	甕 土師器	A [18.2] B 31.5 C 7.8	底部は平底。胴部は内彎しながら立ち上がり、上位に最大径を持つ。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部を外上方につまみ出す。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面斜位の篋ナデ。胴部内面篋ナデ。	砂粒・雲母・石英 明褐色 普通	80% P179 PL18 北西コーナー付近の床面 横位
2	甕 土師器	A [21.2] B (26.0)	やや張りのある胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口縁端部をほぼ垂直につまみ出す。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面上位横位の篋ナデ。下位縦位の篋削り。胴部内面横位のナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	30% P95 PL18 カマド燃焼部の覆土

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第41図 3	甕 土師器	A [18.8] B (19.5)	やや張った胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口縁端部をほぼ垂直につまみ上げる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面縦位の篋ナデ。胴部内面横位の篋ナデ。	砂粒 暗赤褐色 普通	40% P94 PL18 中央部付近と東壁中央部付近の床面
4	甕 須恵器	B (7.1) C [12.2]	胴部は底部から、内彎気味に立ち上がる。胴部外面に自然釉付着。	内面に輪積痕有り。	砂粒 褐灰色 普通	5% P102 カマド付近の覆土中層
5	坏 土師器	A [14.6] B (4.9) C [8.2]	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部及び体部下位回転篋削り(右)。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	60% P97 PL18 カマド付近の覆土中層 横位
6	坏 土師器	A [13.0] B 4.1 C 6.1	底部は平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部及び体部下端回転篋削り(右)。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	30% P98 PL18 北東コーナー付近の床面 横位
7	坏 土師器	A [12.7] B 4.2 C 5.5	底部は平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部は摩滅が著しく調整不明。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	35% P99 中央部付近の覆土下層 逆位
8	坏 須恵器	A [12.4] B 4.0 C [8.0]	底部は平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部で軽く内傾する。	水挽き整形。底部回転篋削り(右)。	砂粒 黄灰色 普通	30% P103 カマド燃焼部の覆土 底部に篋記号
9	坏 須恵器	B (3.4) C [8.2]	底部は平底。体部は外傾して立ち上がる。	水挽き整形。底部回転篋削り後手持ち篋削り。	砂粒・礫 黄灰色 普通	10% P104 北東コーナー付近の床面 横位
10	蓋 土師器	A [13.3] B (1.8)	鈕は欠損。天井部は浅く、上位に平坦な面を持つ。口縁部はわずかに外反する。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。天井部回転篋削り(右)。	砂粒 橙色 普通	20% P101 北西部の覆土

第15号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第41図 1	甕 土師器	A [22.2] B (18.2)	張りの弱い胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口縁端部を外上方へつまみ出す。	口縁部から頸部にかけて横ナデ。胴部外面上位横位のナデ。下位縦位の篋削り。胴部内面ナデ。	砂粒・長石 灰褐色 普通	20% P106 PL18 中央部と北西コーナー付近の床面
第42図 2	甕 土師器	B (9.6) C [9.6]	底部は平底で、胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面斜位の篋磨き。胴部内面横位の篋ナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	20% P107 PL18 北東部の覆土下層
3	甕 土師器	B (5.5) C 8.0	底部は平底で、木葉痕有り。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面縦位の篋ナデ。胴部内面横位の篋ナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	20% P108 東壁中央部付近の床面 逆位
4	坏 土師器	A [13.6] B 4.7 C [6.6]	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口唇部はやや尖る。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部及び体部下端回転篋削り(右)。	砂粒 にぶい橙褐色 普通	50% P109 PL18 西壁中央部付近の覆土 下層 逆位
5	坏 土師器	A [13.5] B (4.3) C [7.6]	体部は器厚を減じながら、内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部回転篋削り(右)。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	20% P110 中央部付近の覆土上層
6	高台付坏 土師器	A [12.7] B 4.3 D 6.4 E 1.0	底部は平底で、直立する高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。底部と体部の境は面状になる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部及び体部下端回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒・スコリア 浅黄褐色 普通	65% P113 PL18・20 P ₁ 付近の床面 逆位 墨書「鷹」
7	高台付坏 土師器	B (2.6) D 7.2 E 1.2	底部は平底で、直立する高台が付く。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒・雲母 にぶい橙褐色 普通	40% P111 北東部の覆土上層

第16号住居跡出土土器観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第42図 1	坏 須恵器	A 13.4	底部は平底。体部は器厚を減しながら、外傾して立ち上がる。	水挽き整形。底部回転篋切り後不定方向の手持ち篋削り。	砂粒 灰色 普通	90% P182 PL18 カマド付近の床面 正位
		B 5.2				
		C 8.4				
2	高台付坏 須恵器	B (1.9)	底部は平底。高台欠損。	水挽き整形。底部回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒 褐灰色 普通	5% P115 南西壁中央部付近の覆土
		E (0.9)				
3	盤 須恵器	A 16.2	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外反する。	水挽き整形。底部回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒・礫 灰色 普通	100% P116 PL18・20 北東部の覆土下層 正位 墨書「友」
		B 3.8				
		D 10.1				
		E 1.1				

第17号住居跡出土土器観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第42図 1	甕 土師器	A [18.2]	丸く張った胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口縁端部を外上方へつまみ出す。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面横位の篋ナデ。胴部内面ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	10% P117 PL18 北東コーナー付近の覆土下層
		B (11.0)				
2	甕 土師器	B (1.8)	底部は平底で、体部は外傾して立ち上がる。	胴部内・外面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	5% P118 カマド燃焼部の覆土
		C 5.7				
3	高台付坏 土師器	A [13.6]	底部は平底で、短く直立する高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	65% P119 PL18・20 カマド燃焼部の覆土 体部に2か所「入加」の墨書
		B 4.9				
		D 7.7				
		E 0.6				

第18号住居跡出土土器観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第43図 1	甕 土師器	A [21.1]	張りの弱い胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口縁端部を垂直につまみ上げる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面上位横位の篋ナデ。胴部内面横位の篋ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	15% P120 PL19 カマド燃焼部の覆土
		B (14.4)				
2	高台付坏 土師器	A 12.8	底部は平底で、外側へふんばる高台が付く。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部は摩滅が著しく調整不明。高台貼り付け。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	95% P121 PL19・20 カマド付近の覆土下層 墨書「天」
		B 4.7				
		D 7.1				
		E 1.1				
3	高台付坏 土師器	A 13.0	底部は平底で、外側へふんばる高台が付く。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部は摩滅が著しく調整不明。高台貼り付け。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P122 PL19 カマド付近の覆土下層
		B 4.9				
		D 6.3				
		E 1.0				
4	高台付坏 土師器	A [13.0]	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は下位に稜をもち、外傾して立ち上がる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	35% P123 南東壁中央部付近の覆土
		B 4.6				
		D 6.4				
		E 1.0				

第19号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第43図 1	甕 土師器	A [24.6] B (30.0)	やや張りのある胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口縁端部を垂直につまみ上げる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面縦位の篋削り。胴部内面横位の篋ナデ。	砂粒・スコリア に ぶ い 橙 色 普 通	30% P125 カマド燃焼部の覆土下層
2	甕 土師器	B (11.0) C 8.4	底部は平底で、胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面縦位の篋削り。胴部内面は摩滅が著しく調整不明。	砂粒 に ぶ い 橙 色 普 通	20% P126 PL19 カマド燃焼部の覆土
3	坏 土師器	A 14.9 B 5.3 C 7.8	底部は平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部及び体部下位回転篋削り(右)。	砂粒・長石 に ぶ い 橙 色 普 通	90% P127 PL19 東コーナー付近の床面逆位
4	坏 土師器	A 13.3 B 4.1 C 5.6	底部は平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口唇部はやや尖る。全体的に器厚は薄い。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部回転篋削り(右)。	砂粒・長石 暗褐色 普 通	90% P128 PL19 カマド燃焼部の覆土下層 正位

第20号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第43図 1	高台付坏 土師器	B (3.4) D [6.2] E 1.0	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎しながら立ち上がる。	水挽き整形。内面篋磨き。底部回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒・長石 橙 色 普 通	20% P129 PL19 北西部の覆土
2	坏 須恵器	B (1.8) C [7.6]	底部は平底で、体部は外傾して立ち上がる。	水挽き整形。底部不定方向の手持ち篋削り。	砂粒 灰 色 普 通	10% P130 北西部の覆土

第21号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第43図 1	甕 土師器	A [21.8] B (12.7)	丸く張った胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口縁端部を垂直につまみ上げる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。胴部外面上位横位のナデ。下位縦位の篋削り。内面横位の篋ナデ。	砂粒・雲母 に ぶ い 橙 色 普 通	20% P131 PL19 カマド燃焼部の覆土

掘立柱建物跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 1	坏 須恵器	B (2.8) C [8.0]	体部は器厚を減じながら、外傾して立ち上がる。	水挽き整形。底部回転篋削り後ナデ。	砂粒 褐 灰 色 普 通	5% P139 SB3 ピット10 覆土
2	高台付坏 土師器	B (1.7) D [7.4] E 1.1	底部は平底で、やや開く高台が付く。高台の接地面は平坦。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。高台貼り付け。	砂粒・雲母 に ぶ い 赤 褐 色 普 通	10% P138 SB3 ピット8 覆土

土坑出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 1	甕 土師器	A [14.8] B (6.4)	小形甕。張りの弱い胴部から、頸部を丸く屈曲させて、口縁端部を外上方へつまみ出す。口縁端部の外面は凹む。	口縁部から胴部上位にかけて内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 におい橙色 普通	5% P135 SK35 覆土
2	坏 須恵器	B (2.7) C [6.8]	底部は平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	水挽き整形。	砂粒 灰白色 普通	5% P134 SK28 覆土 墨書有り
3	高台付坏 土師器	A [14.4] B (3.6)	底部は平底で、高台は欠損。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部回転篋削り(右)。	砂粒・雲母 におい橙色 普通	10% P137 SK41 覆土
4	高台付坏 須恵器	B (4.7) D [11.6] E 1.0	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は下位に稜をもち、外傾して立ち上がる。	水挽き整形。外面水挽き痕強い。底部回転篋削り(右)。高台貼り付け。	砂粒 黄灰色 普通	20% P136 PL19 SK35 覆土
5	坏 土師器		口縁部片。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 におい赤褐色 普通	5% P132 SK21 覆土 墨書有り
6	坏 土師器		体部片。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。	砂粒 におい橙色 普通	5% P133 SK21 覆土 墨書有り

溝出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 1	甕 土師器	B (1.5) C [10.2]	底部は平底。		砂粒・雲母 におい赤褐色 普通	5% P155 SD2 覆土
2	坏 須恵器	B (2.4) C [6.5]	底部は平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。底部と体部の境は明瞭に屈曲する。	水挽き整形。底部回転篋切り後ナデ。	砂粒 黄灰色 普通	20% P156 SD2 覆土
3	坏 須恵器	B (2.6) C [7.0]	底部は平底。体部は器厚を減じながら外傾して立ち上がる。底部と体部の境は明瞭に屈曲する。	水挽き整形。底部回転篋切り後ナデ。	砂粒 褐灰色 普通	15% P157 SD2 覆土 底部に篋記号有り
4	甕 陶器		常滑の甕の口縁部から胴部にかけての破片。		砂粒・礫 におい赤褐色 普通	5% P183 SD2 覆土
5	皿 土師質土器	A 10.0 B 3.2 C 4.3	底部は平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部で直立気味になる。	水挽き整形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 橙色 普通	90% P159 PL19 SD4 覆土中層
6	坏 土師器	B (3.1) C [10.0]	底部は平底。体部は器厚を減じながら、内彎気味に外傾して立ち上がる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	10% P160 SD5 覆土
7	坏 須恵器	B (3.4) C [9.6]	底部は平底。体部は器厚を減じながら、直線的に外傾して立ち上がる。	水挽き整形。外面水挽き痕強い。底部回転篋削り(右)。	砂粒 灰色 普通	25% P161 PL19 SD5 覆土

道路跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 1	壺 須恵器	B (7.4) D [12.1] E 0.9	底部は平底で、短くふんばる高台が付く。高台の接地面は平坦。胴部は外傾して立ち上がる。	底部回転篋削り。高台貼り付け。	砂粒 灰黄色 普通	20% P151 PL19 SF1 覆土
2	坏 須恵器	B (3.7) C [6.7]	底部は平底で、体部は外傾して立ち上がる。全体的に器厚は薄い。	水挽き整形。底部手持ち篋削り。	砂粒 灰黄褐色 普通	10% P149 SF1 覆土
3	坏 須恵器	B (0.9) C 7.5	底部は平底で、やや突出する。	水挽き整形。底部回転篋削り後ナデ。	砂粒 黄灰色 普通	10% P150 SF1 覆土
4	高台付坏 土師器	B (2.0)	底部は平底で、高台欠損。体部は下位にあまい稜をもち、外傾して立ち上がる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部回転糸切り。高台貼り付け。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	10% P148 SF1 覆土
5	高台付坏 須恵器	B (3.1) D [9.8] E 1.2	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。	水挽き整形。底部回転篋削り。高台貼り付け。	砂粒 褐灰色 普通	15% P152 SF1 覆土
6	高坏 土師器	B (6.7)	脚部片。円柱状を呈し、裾部で開く。	外面摩滅が著しく調整不明。内面篋ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	10% P147 SF1 覆土
7	壺 須恵器	B (5.6) D [12.8] E 0.9	底部は平底で、短くふんばる高台が付く。高台の接地面は平坦。胴部は外傾して立ち上がる。	高台貼り付け。	砂粒 灰色 普通	5% P154 SF2 覆土
8	高台付坏 土師器	B (1.5)	底部は平底で、高台欠損。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。高台貼り付け。	砂粒・スコリア 淡橙色 普通	10% P153 SF2 覆土

ピット出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 1	甕 土師器	A [22.6] B (3.2)	頸部は丸く屈曲し、口縁端部を外上方へつまみ上げる。	口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	5% P141 ピット251
2	甕 土師器	B (4.5) C [10.6]	底部は平底で、胴部は外傾して立ち上がる。	胴部外面縦位の篋ナデ。胴部内面横位の篋ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	10% P144 ピット347
3	坏 土師器	A [14.4] B (3.2)	体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	水挽き整形。内面篋磨き。	砂粒 褐灰色 普通	25% P146 ピット476
4	高台付坏 土師器	A [13.2] B 4.6 D 7.9 E 0.7	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で軽く外反する。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部静止糸切り。高台貼り付け。	砂粒・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	50% P140 PL20 ピット124 墨書「磨」
5	盤 須恵器	A [17.2] B (2.6)	口縁部は体部から鋭く屈曲して外反する。	水挽き整形。	砂粒 黄灰色 普通	10% P142 ピット253 内面自然釉付着
6	皿 土師器	A [13.4] B (1.4)	体部は外傾して立ち上がり、口縁部でやや内傾する。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 普通	10% P145 ピット358
7	坏 土師器		口縁部片。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。	砂粒 橙色 普通	5% P143 ピット337 墨書有り

遺構外出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 1	甕 土師器	A [15.2] B (9.4)	張りの弱い胴部から、短く外反する口縁部が付き、口唇部を丸くおさめる。	口縁部内・外面横ナデ。内面篋磨き。内面黒色処理。	砂粒 褐色 普通	10% P165 S I 13の西側の表土
2	坏 土師器	A [14.2] B (4.9)	体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 橙色 普通	10% P167 表土
3	坏 土師器	B (2.0) C 6.2	底部は平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。底部と体部の境は明瞭に屈曲する。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部及び体部下端回転篋削り(右)。	砂粒・石英 にふい橙色 普通	30% P168 表土
4	坏 土師器	B (1.6) C 5.0	底部は平底。体部は外傾して立ち上がる。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部及び体部下端回転篋削り(右)。	砂粒 浅黄橙色 普通	20% P162 テストピット
第46図 5	坏 土師器	B (2.5) C [10.0]	底部は平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	水挽き整形。内面篋磨き。底部回転篋削り(右)。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄褐色 普通	10% P166 表土
6	坏 須恵器	B (2.5) C [10.1]	底部は平底で、体部は外傾して立ち上がる。底部と体部の境に偏狭な面をもつ。	水挽き整形。底部不定方向の手持ち篋削り。	砂粒 灰色 普通	10% P171 表土
7	坏 須恵器	B (2.0) C [6.6]	底部は平底で、体部は外傾して立ち上がる。	水挽き整形。底部回転篋切り後ナデ。	砂粒 灰黄色 普通	20% P164 テストピット
8	高台付坏 土師器	B (1.8) D 6.0 E 0.8	底部は平底で、外側へふんばる高台が付く。高台の接地面は平坦。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。高台貼り付け。	砂粒・石英 橙色 普通	30% P163 PL19 テストピット
9	高台付坏 土師器	B (1.9) D 6.2 E 0.9	底部は平底で、ほぼ直立する高台が付く。高台の接地面は平坦。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。底部回転糸切り。高台貼り付け。	砂粒 にふい橙色 普通	30% P169 表採
10	高台付坏 土師器	B (1.9) D [6.6] E 0.8	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。高台貼り付け。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	30% P170 表土
11	高台付坏 須恵器	B (2.1) D [8.8] E 1.4	底部は平底で、ほぼ直立する高台が付く。	水挽き整形。底部回転篋削り。高台貼り付け。	砂粒 黄灰色 普通	15% P173 表採
12	蓋 須恵器	B (3.1) F 2.6 G 1.3	鈕は偏平な宝珠形を呈する。天井部の上位は平坦で、なだらかに下降する。	水挽き整形。天井部径10cmにわたり回転篋削り(右)。	砂粒・長石 褐灰色 普通	80% P174 PL19 表土
13	坏 土師器		底部片。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 浅黄橙色 普通	5% P175 表土 墨書有り
14	坏 土師器		底部片。	水挽き整形。内面篋磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	5% P176 表土 墨書有り

表3 土製品一覧表

図版番号	器種	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第46図15	管状土錘	6.0×3.0	1.2	38.0	表採	DP1 PL21
第46図16	紡錘車	(6.1)×(3.3)	厚さ1.7	27.0	表採	DP2 PL22
第49図	埴仏	(5.4)×4.6	厚さ1.9	27.0	表採	DP3 PL21

表4 石器・石製品一覧表

図版番号	器種	長さ×幅×厚さ(cm)	石質	出土地点	備考
第36図5	搔器	5.7×2.2×1.3	メノウ	SI-1	Q1 16g 覆土 PL21
第37図13	支脚	16.5×7.3	凝灰岩	SI-5	Q2 634g カマド内 PL21
第41図11	凹石	17.5×(14.2)×8.5	砂岩	SI-13	Q3 2031g 床面
第43図5	紡錘車	径5.2 厚さ1.3 孔径0.7	砂岩	SI-18	Q4 38g 台形を呈す。覆土下層 PL21
第43図3	有茎石鏃	4.7×2.1×0.9	メノウ	SI-20	Q5 覆土 PL21
第44図8	砥石	6.9×(3.7)×1.8	結晶片岩	SD-4	Q6 50g 片面と1側面に使用痕が認められる。PL21
第46図17	砥石	(6.0)×3.8×2.7	砂岩	表採	Q7 57g 片面と1側面に使用痕が認められる。PL21

表5 鉄製品一覧表

図版番号	器種	長さ×幅×厚さ(cm)	出土地点	備考
第36図6	不明	(4.7)×1.0×0.4	SI-1	M1 覆土 PL22
第36図7	帯金具(巡方)	3.6×3.3×0.7	SI-1	M29 0.4×2.4の透孔をもつ。裏面に4本の鋸が打たれており、裏金具は欠損。銅製品 PL21
第36図11	鏃	茎長(3.0)茎幅0.4	SI-3	M3 茎の一部。覆土 PL22
第36図12	不明	(4.4)×2.0×0.6	SI-3	M4 覆土 PL22
第36図13	刀子	(19.1)×1.7×0.4	SI-3	M2 刃部だけに開のみられる片開の刀子。 PL22
第38図17	不明	(4.0)×1.5×0.2	SI-6	M5 覆土 PL22
第38図18	刀子	(5.3)×1.1×0.4	SI-6	M6 刀身の一部。覆土 PL22
第38図19	釘	長さ(4.6)太さ0.5	SI-6	M7 覆土 PL22
第38図20	釘	長さ(7.6)太さ0.5	SI-6	M8 覆土 PL22
第38図21	釘	長さ(4.7)太さ0.4	SI-6	M9 覆土 PL22
第38図22	鏃	15.9×0.7	SI-6	M10 PL22
第40図18	手斧	(6.6)×3.3×0.35	SI-11	M11 有袋式無肩。刃先部欠損。覆土 PL22
第42図4	鏃	茎長(9.3)茎幅(0.5)	SI-17	M12 茎の一部。 PL22
第42図5	不明	(4.0)×1.9×0.2	SI-17	M13 覆土
第43図6	釘	長さ(7.0)太さ0.4	SI-18	M14
第43図4	不明	(6.6)×1.2×0.3	SI-20	M15 PL22
第44図7	釘	長さ(4.6)太さ0.5	SK-23	M16木質残存。覆土 PL22
第44図8	釘	長さ(3.9)太さ0.4	SK-23	M17 木質残存。覆土 PL22
第44図9	釘	長さ(2.9)太さ0.6	SK-23	M18木質残存。覆土 PL22
第44図10	釘	長さ(4.3)太さ0.5	SK-23	M19 木質残存。覆土 PL22
第44図11	釘	長さ(3.4)太さ0.4	SK-23	M20 木質残存。覆土 PL22

図版番号	器種	長さ×幅×厚さ(cm)	出土地点	備考
第44図12	釘	長さ(3.5)太さ0.4	SK-23	M21 頭部は半楕円形を呈す。木質残存。覆土
第44図13	釘	長さ(3.0)太さ0.5	SK-23	M22 頭部は折れ曲がっている。覆土
第44図14	不明	(4.2)×1.6×0.7	SK-23	M23 木質残存。覆土 PL22
第45図1	釘	長さ(6.7)太さ0.5	SX-1	M25
第45図8	釘	長さ(5.4)太さ0.5	P198	M26 頭部欠損。覆土 PL22

表6 古銭一覧表

図版番号	名称	初鑄年(西暦)	出土地点	備考
第44図15	寛永通寶	寛文8年(1668)	SK-23	M30 新寛永 正字文
第44図16	寛永通寶	寛文8年(1668)	SK-23	M31 新寛永 正字文
第44図17	寛永通寶	寛永3年(1636)	SK-23	M32 古寛永
第44図18	寛永通寶	寛文8年(1668)	SK-23	M33 新寛永 正字文
第44図19	寛永通寶	寛永3年(1636)	SK-23	M34 古寛永
第44図20	寛永通寶	寛文8年(1668)	SK-23	M35 新寛永
第45図9	永楽通寶	永楽6年(1408)	SF-1	M24 PL22
第45図9	〇元〇寶		P198	M27 PL22
第45図10	元〇通寶		P198	M28 PL22



第3節 まとめ

1 竪穴住居跡と出土遺物

(1) 出土土器について

ここでは、各住居跡から出土している土器の形態やその変化を見ることによって、当遺跡での土器型式の新旧関係を明らかにし、その後、当遺跡の住居跡について述べて見たい。土器区分の基準は主に甕・坏類の形態と器種の組み合わせの変化により、住居跡毎に区分した。

I群 (第47図)

I群は、第5・6・8・10・12・16・20号竪穴住居跡から出土している土器をもって設定した。土師器では甕・坑・高台付坏・蓋、須恵器では甕・坏・高台付坏・盤・蓋が出土している。本群の特徴としては、須恵器が出土量・器種とも多く、実測可能な個体数では土師器を上回る傾向が見られることである。但し、本群の中でも第8号竪穴住居跡は、出土している土器の様相から、他の7軒よりやや先行する住居跡と考えられる。

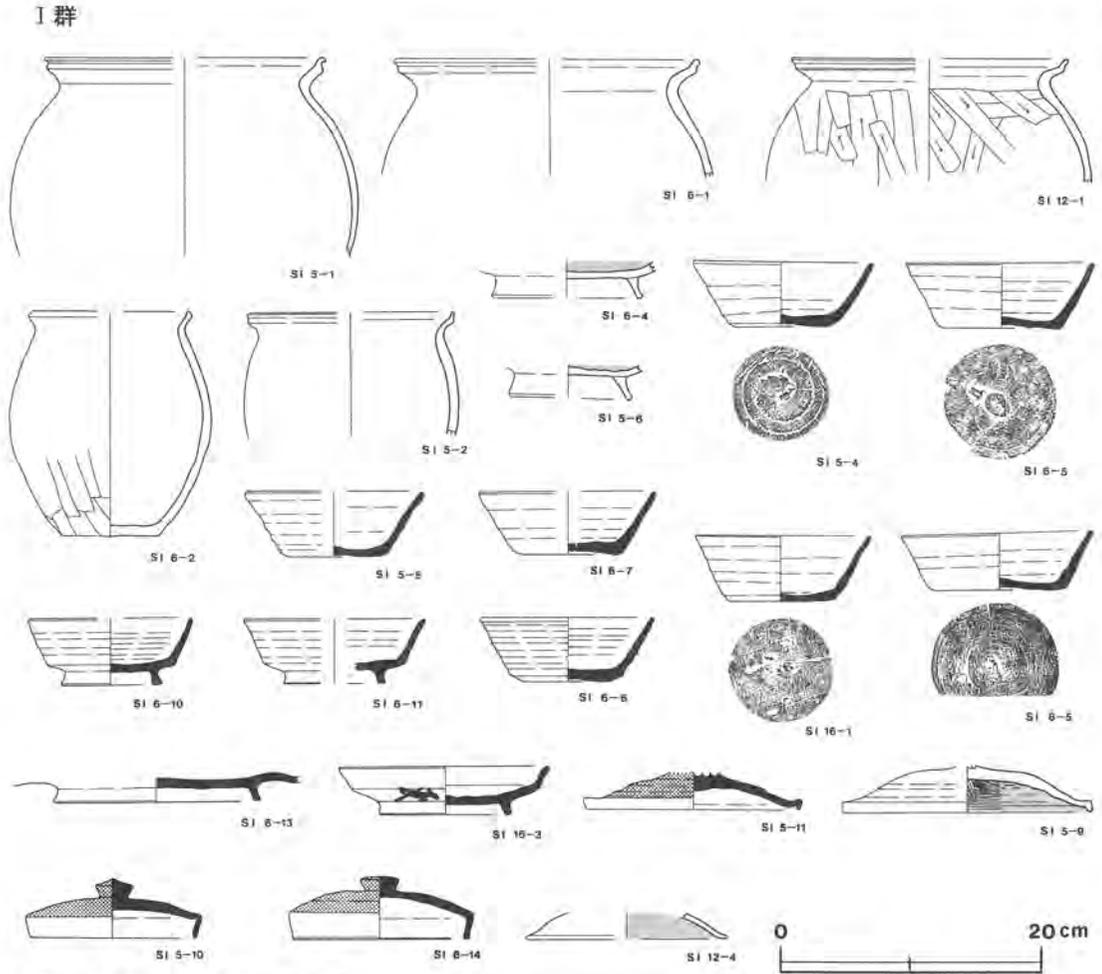
土師器の甕は、ほとんどがいわゆる「常陸型」の甕で、第5・6号竪穴住居跡からは小形甕も出土している。胴部上位は横位のナデ(篋ナデ)で、中位以下は縦方向の篋磨き(篋削り)が施されている。本群における甕の特徴としては、胴部が丸く張り、頸部のくびれが強く、口縁端部が外上方へつまみ出されていることである。

土師器の高台付坏は完全に復元できたものではなく、底部から高台部にかけての破片である。残存部から推定すると大振りの器形が想定され、底部は回転篋削り調整後、高台を貼り付けている。

土師器の蓋は口縁部が短く垂下する形態と、天井部からなだらかに下降し口縁部が屈曲しない形態が認められる。特に前者は丁寧に仕上げられている。内面はどちらも篋磨き調整後、黒色処理が施されている。

須恵器の坏は、口径に対する底径の割合が大きく器高の低い大振りのものと、口径に対する底径の割合が小さく器高の高いものの2種が認められる。前者は第8号竪穴住居跡から出土しているもので、底部は平底で、口径と底径の比が1:0.69の値を示し、61°の傾きをもって立ち上がる。底部の切り離しは回転篋削りで、その後回転篋削りで底部全体を丁寧に調整している。後者は第5・6・10・12・16・20号竪穴住居跡から出土している18個体である。そのうち口径と底径がわかる9個体の平均の口径に対する底径の比は1:0.57で、58°の傾きをもって立ち上がる。底部は平底を呈し、回転篋削り後ほとんどがナデ調整に近い手持ち篋削り調整である。前者の坏は、その形態や調整技法から後者に先行するものと考えられる。また、第5号竪穴住居跡と第16号竪穴住居跡から胎土や調整が同形態の坏が出土している。

須恵器の高台付坏は土師器の高台付坏に比べ高台径が小さく、底部は回転篋削り調整後、高台



第47図 北郷C遺跡 I 群の土器

を貼り付けている。

須恵器の盤は、大形と小形のものが出土しており、小形のほうが多く見られる。いずれも底部は高台部より上がっており、底部に回転篋削り調整が施されている。また、内面の状態から硯として転用されたものも認められる。

須恵器の蓋は、天井部からなだらかに下降して口縁部が短く垂下する形態のものと、口縁部が屈曲して長く垂下するものの2種類が認められる。前者は坏蓋に、後者は短頸壺の蓋になるものと考えられる。

II 群 (第48図)

II 群は、第1・3・11・13・15・17・18・19・21号竪穴住居跡から出土している土器をもって設定した。土師器では甕・坏・高台付坏・皿・蓋、須恵器では坏・盤、灰釉陶器では段皿が出土している。本群の特徴としては、I 群に比べて土師器の出土量が増加し、須恵器が非常に少なくなることで

ある。特に土師器でも坏や高台付坏のような供膳具が多く出土している。また、第1号竪穴住居跡から銚帯具(巡方)が出土している。

土師器の甕は、I群と同様「常陸型」の甕で、I群よりも薄手で、胴の張りが弱く、口縁端部がほぼ垂直につまみ出されていることが本群の特徴と言える。

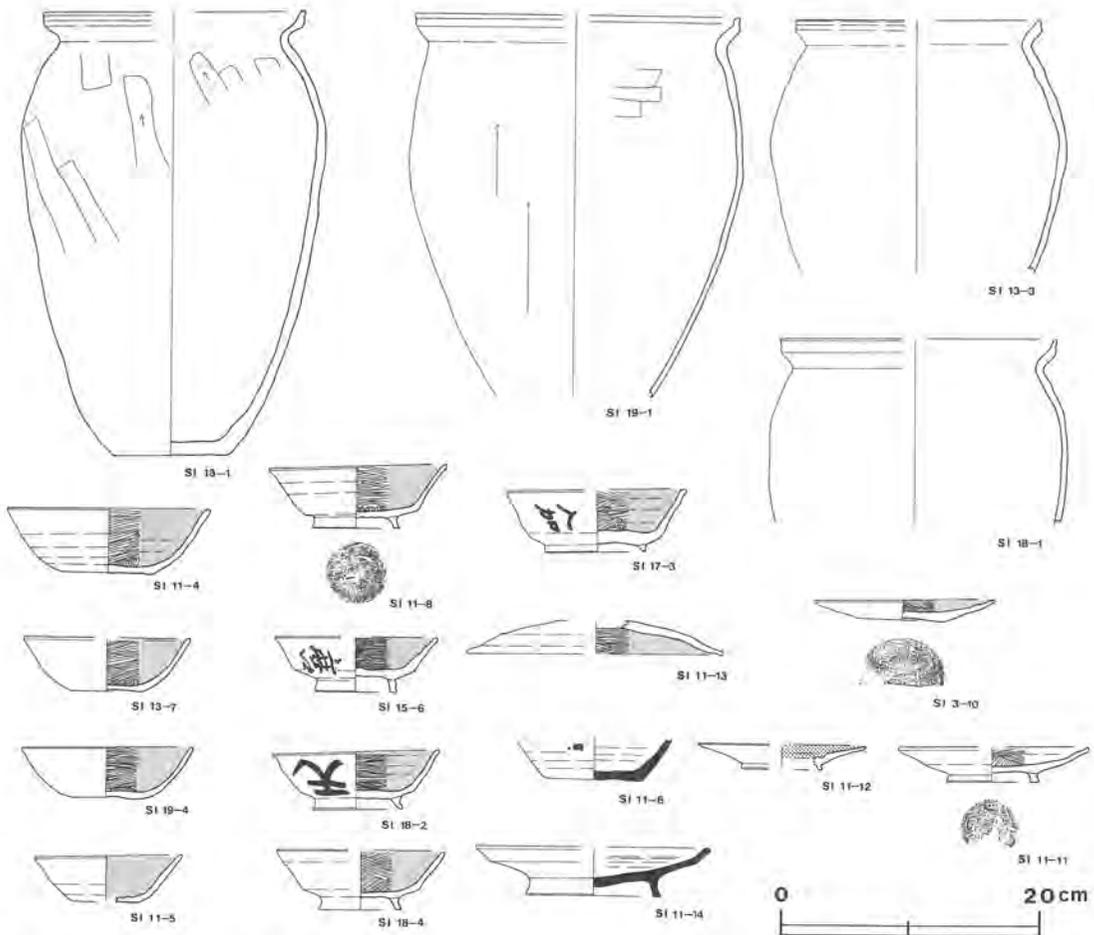
土師器の坏は、すべて内面篋磨き調整後、黒色処理がなされており、底部及び体部下端に回転篋削り調整が施されている。法量の分化が見られ、大中小の3種に分類することができる。

土師器の高台付坏はI群に比べて高台径が小さくなり、須恵器の高台付坏を模倣しているような底部と体部に稜をもつものが増えてくる。底部は回転篋削り調整後、高台を貼り付けている。

土師器の蓋は、I群と同じ口縁部が屈曲しない形態のものが出土している。

土師器の皿は、高台が付く形態のものと、高台の付かない形態のものがあり、どちらも内面は篋磨き調整後、黒色処理が施されている。

II群



第48図 北郷C遺跡II群の土器

須恵器は、第11号竪穴住居跡から盤と坏が、第13号竪穴住居跡から坏が出土している。第11号竪穴住居跡の坏は3点とも墨書がなされており、盤は内面の状態から転用硯として使用されたものと考えられる。

灰釉陶器の段皿は、内面だけ施釉されており、ハの字状に開く短い高台が付いている。

表7 北郷C遺跡遺構別出土土器一覧表

住居 番号	土 師 器								須 恵 器						灰釉 陶器	合計	土器群
	甃	高台 付坏	坏 (内黒)	高台付坏 (内黒)	蓋 (内黒)	皿 (内黒)	高台付皿 (内黒)	土師器 小破片	内黒土器 小破片	甃	坏	高台 付坏	盤	蓋			
5	3			1	1			68	8	2	1	1	3	10		12	I
6	6		1	1				647	39	12	4	4	2	187		30	I
8	2		(甃)1					31		1	1			1	19	6	I
10	2							17	3	1				5		3	I
12	1			1	1			101	19	1				28		4	I
16								2		1	1	1		1		3	I
20		1						41	3	1				2		2	I
小計	14	1	2	3	2	0	0	907	72	1	19	6	6	6	252	0	60
1	1		1	2				462	37					41		4	II
3	3		6			1		653	61					30		10	II
11	5		4	7	1		1	1094	123	3		1		86	1	23	II
13	4		4		1			230	80	1	2			21		12	II
15	3		2	2				151	25					7		7	II
17	2			1				24	6					2		3	II
18	1			3				60	21					9		4	II
19	2		2					22	5					3		4	II
21	1							6								1	II
小計	22	0	19	15	2	1	1	2702	358	1	5	0	1	0	199	1	68
合計	36	1	21	18	4	1	1	3609	430	2	24	6	7	6	451	1	128

(2) 時期区分

当遺跡から出土している土器は上述した特徴から、それぞれI群とII群に区分することができた。次に、区分した土器の新旧関係について考えてみたい。当遺跡においては、住居跡どおしの切り合い関係が認められないので、住居跡の重複関係から時間差を考えることができなかった。しかし、隣接している住居跡が何軒かみられ、16軒が同時に存在していたとは考えられない。その中で特に第12号竪穴住居跡と第13号竪穴住居跡は0.5mと近接しており同時期に存在していたことは考えにくい。さらに、両住居跡の土器の様相をみると差異が認められ、第12号竪穴住居跡はI群に第13号竪穴住居跡はII群に区分できる。ここに、上述したI群とII群の間には、時間的

な差を見いだすことができるものと考えられる。

次に、I群とII群の土器の新旧関係を明らかにするために、新旧関係がはっきりしている森戸遺跡の土器群と対比させてみると、森戸遺跡の土器群の中に北郷C遺跡の土器群に類似するものが認められ、北郷C遺跡の新旧関係を捉えることができる。たとえば、北郷C遺跡I群の第5・6・12号竪穴住居跡から出土している甕と森戸遺跡II群の第10号竪穴住居跡から出土している甕、北郷C遺跡I群の第6号竪穴住居跡から出土している坏と森戸遺跡II群の第15号竪穴住居跡から出土している坏、北郷C遺跡I群の第5号竪穴住居跡から出土している蓋と森戸遺跡II群の第10号竪穴住居跡から出土している蓋、北郷C遺跡I群の第6号竪穴住居跡から出土している蓋と森戸遺跡II群の第14号竪穴住居跡から出土している蓋などの形態や調整技法に類似点が見いだせる。これらのことから北郷C遺跡のI群は、森戸遺跡のII群に相当するものと考えられる。また、北郷C遺跡II群の第11・18号竪穴住居跡から出土している高台付坏と森戸遺跡III群の第8・48号竪穴住居跡から出土している高台付坏、北郷C遺跡のII群の第13号竪穴住居跡から出土している甕と森戸遺跡III群の第18・23号竪穴住居跡から出土している甕などの形態や調整技法に類似する点が認められる。しかし、森戸遺跡III群の土師器の坏の中に底部糸切り放しのものがみられることや、高台付坏の体部の立ち上がりに内彎するものが認められることから、全体的に北郷C遺跡のII群の土器は森戸遺跡のIII群の土器に先行するものと考えられる。

以上のことから、I群の土器は森戸遺跡の奈良・平安時代のII群に、北郷C遺跡のII群の土器は森戸遺跡の奈良・平安時代のII群とIII群の間に位置するものと考えられる。このことから、北郷C遺跡のI群の土器は北郷C遺跡I期に、II群の土器は北郷C遺跡II期へと土器群の区分がそのまま時期区分されることが認められる。

(3) 年代観について

まず、年代を考えるにあたり、銚帯具の存在を考えてみたい。銚帯具は帯の装飾金具のことで、革帯をとめる鉸具、方形の巡方、半円形の丸柄、帯の末端金具の鉞尾などがある。この銚帯具は養老律令の「衣服令」や日本後紀の延暦十五年の条などの文献から、使用年代が神護慶雲四年(707)から延暦十五年(796)、および大同二年(807)から弘仁元年(810)までに限定することができる。

(阿部 1976)⁽²⁾

また、松村恵司氏は、「銚帯具は東国における古代集落にあつては、きわめて身分が限定された人間が所有していたことは事実で、そうした身分を証明・誇示する具として存在している象徴物を、その価値の有効期間内に遺棄するということは考えにくく、この銚帯具が本来もっていた意味を完全に消失化した段階での放棄を考えるならば、9世紀代も半ば以降を想定すべきかもしれない」と述べている(松村 1977)⁽³⁾。これらのことから、当遺跡の第1号竪穴住居跡から出土している青銅製の巡方は、796年もしくは、810年以降に禁止されているという文献上の記録から800年

を中心とした時間帯と、800年代の半ば以降の年代が考えられる。

これらのことと上述したⅠ期とⅡ期の土器の年代観を考え併せてみると、Ⅰ期は当遺跡において須恵器の出土が多くなる時期で、森戸遺跡のⅩ期に該当する8世紀後半から9世紀前半ごろの時期と推定される。Ⅱ期は主体が須恵器から土師器の内黒土器に移る時期で、森戸遺跡のⅩ期とⅪ期の間に位置づけられる9世紀前半から中ごろの時期と推定される。

(4) 墨書土器について

当遺跡から出土している墨書土器は21点で、このうち判読可能なものは7点である。これらの墨書土器は土師器14点・須恵器7点に分類でき、土師器が全体の66.7%を占めている。器種別にみると、土師器は内黒の坏が8点・内黒の高台付坏が6点とすべて坏類に墨書されている。須恵器も坏が6点と多数を占め、他は盤の1点だけである。墨書される部位は体部のものが18点、底部のものが3点と圧倒的に体部に墨書されたものが多く見られる。

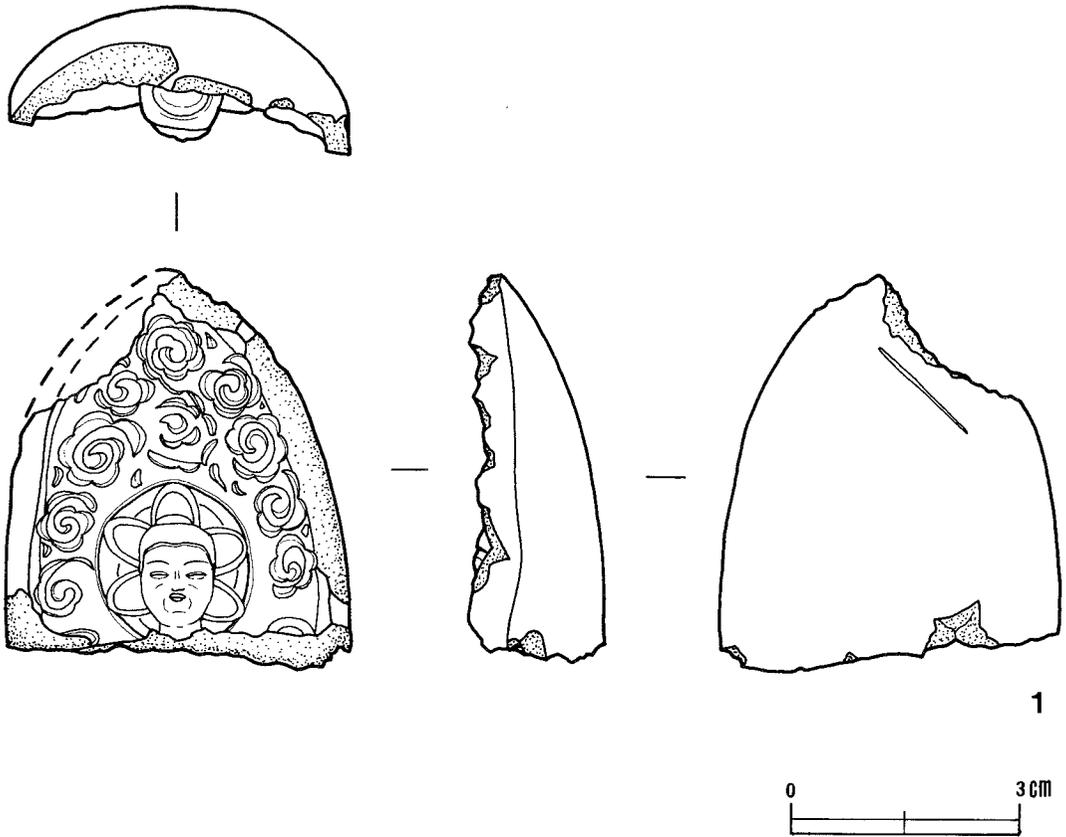
墨書土器の出土遺構をみると、竪穴住居跡16軒中7軒、土坑43基中2基、他はピット1基及び表土から出土している。個々の遺構における点数は、第3号竪穴住居跡と第11号竪穴住居跡の5点が最も多く、次いで第6号竪穴住居跡の2点で、約半数は1点だけの出土である。なお、第3・11号竪穴住居跡はともに上述した土器群ではⅡ群に位置づけられている。また、第3号竪穴住居跡からは、須恵器の転用硯が出土している。

次に判読可能な文字は7点で、それぞれ「世」・「稻家」・「麿」・「友」・「入加」・「天」と墨書されている。その中で、「友」は「ハライ」と訓め、祭祀に関わることを表していると考えられる。「麿」は「マロ」と訓め、人名に関わることを考えられ、「入加」は「イルカ」と訓ませれば、やはり人名の可能性が考えられる。「稻家」は「イネイヘ」・「イネヤ」・「イネケ」と訓め、「稻」からは農耕に関わることが想定される。「家」は人間集団を指したり、施設・建物を表す言葉としての用例が見られる。このことから、農耕に関わる集団、農耕に関わる建物などが考えられる。また、「稻」については、付近の地名や神社・仏閣・人名を捜すと当遺跡の対岸の常陸太田市の天神林に延喜式内社の稲村神社が所在していることが用例としてあげられる。

(5) 埴仏について (第49図)

埴仏とは、范を作り、粘土に押しあて、乾燥させて窯で焼いた仏像彫刻のことをいい、6世紀半ばごろには製作されていたものと考えられている。粘土板に仏像を型押ししたものが主体を占めているが、時代が下がると仏像の裏面が亀甲形のやや丸いものも出現してくる。

当遺跡から出土した埴仏は、舟形光背を有する独尊像で、高さ5.25cm(現存値)、光背の最大幅4.55cm、厚さ1.65cmである。光背は雲形または火焰を表現した渦巻文である。下半部は欠損しており、残存部から推定すると全長は10～15cmである。この埴仏は当調査区の北端部の第2号道路跡付近で、表土除去後の遺構確認作業中に単独で出土したものである。尚、第2号道路跡付近の



第49図 塼仏実測図

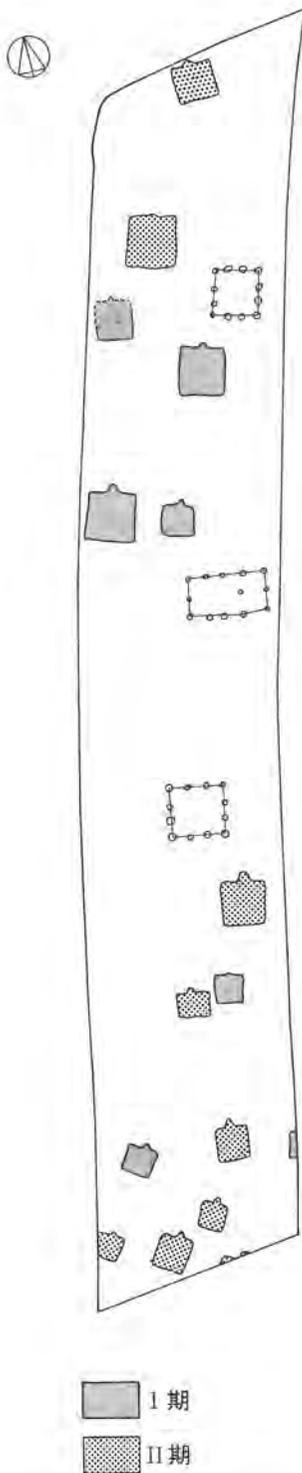
表土の厚さは約80cmである。塼仏の時期については、その形態から中世のものと考えられるが、時期を特定することはできなかった。

(6) 住居跡について

当遺跡は、標高20～30mの台地に立地する規模の大きな集落と考えられる。しかし、今回の調査はあくまで北郷C遺跡の限られた一部分であり、その全体像を捉えるには至らなかった。ここでは、当遺跡から検出された竪穴住居跡16軒を、土器編年の時期区分に基づき2期に分類してその特徴について記述したい。当遺跡の住居跡は一辺が5m前後のものと3m前後の住居跡に大別でき、調査区域の北側に比較的大型の住居跡が存在している。

I期 (第50・51図)

I期に分類される竪穴住居跡は7軒で、第5・6・8・10・12・16・20号竪穴住居跡が該当する。調査区域の北側と南側に分布しており、北側に4軒、南側に3軒で、北側に大型の住居跡が多く見られる。この中で、第8号竪穴住居跡は、出土している土器から他の6軒の住居跡よりやや先行すると考えられるが、住居跡の規模や構造などにおいては他の住居跡との差異は認められない。



第50図 北郷C遺跡 住居跡分布図

住居跡の規模は、第5・6号竪穴住居跡が大きく、一辺が5.24～5.30mの方形を呈している。他の住居跡は一辺が2.98～3.69mとやや小型である。

柱穴は、大型住居である第5・6号竪穴住居跡で支柱穴が4か所ずつ検出されている。他の住居跡では、第10号竪穴住居跡で支柱穴1か所と入り口部に伴う梯子ピットが、第16号竪穴住居跡で入り口部に伴う梯子ピットが検出されている以外、床面からは全く検出されていない。

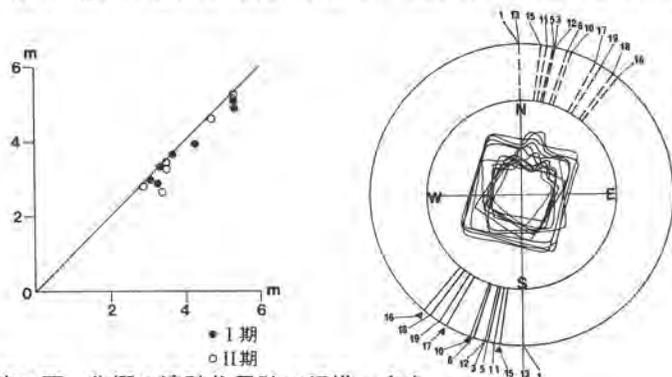
カマドは、北壁中央部付近に粘土や砂で構築されている。当遺跡から検出されている竪穴住居跡は、すべて北壁にカマドを有するという特徴が見られる。第5・6・16号竪穴住居跡のカマドは、袖の補強に凝灰岩が使用されている。一般的にカマドは、時代が下がるほど煙道が壁外へ大きく張り出すようになっていっているが、当遺跡ではI期、II期とも極端な変化は見られない。

主軸方向は、すべて東へ傾き、第16号竪穴住居跡以外はN-11～18°-Eの範囲内におさまっている。尚、当調査区から検出された住居跡は、すべて主軸方向が東へ傾くという特徴が見られる。

II期 (第50・51図)

II期に分類される竪穴住居跡は9軒で、第1・3・11・13・15・17・18・19・21号竪穴住居跡が該当する。住居跡は調査区域の全域から検出されており、特に北側に大型の住居跡が多く見られる。

住居跡の規模は、第3号竪穴住居跡が最も大きく長軸5.32mを測る。他の住居跡は、概ね一辺が3～4m台の規模を有している。



第51図 北郷C遺跡住居跡の規模・方向

最小の住居跡は、第17号竪穴住居跡で長軸2.87mを測る。

柱穴は、大型の第3号竪穴住居跡で支柱穴が4か所検出されたが、他の住居跡では床面からは全く検出されないものが多くなっている。

カマドは、北壁中央部付近に粘土・砂で構築されており、I期と比べても大きな変化は認められない。カマドの袖の補強に第13号竪穴住居跡では壘を据え、第15号竪穴住居跡では凝灰岩を使用している。

主軸方向は、東に傾くが、特定の角度に集中するような傾向は見られない。

2 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、調査区域の中央部から北側にかけて3棟検出されている。配置をみると、第1号掘立柱建物跡と第2号掘立柱建物跡の距離が27m、第2号掘立柱建物跡と第3号掘立柱建物跡の距離が17mで南北にほぼ一直線上に並んでいる。

3棟の建物跡の規模をみると、4間×2間が1棟、3間×3間が2棟である。最も大きい規模を有するのは第2号掘立柱建物跡で、面積は34.0㎡である。次に第3号掘立柱建物跡の30.1㎡、第1号掘立柱建物跡の22.8㎡の順になる。

掘り方の規模や配置をみると、第1号掘立柱建物跡と第3号掘立柱建物跡が長軸長0.54～0.82mで整然と並んでいる。第2号掘立柱建物跡は長軸長0.46～0.65mとやや小さくなっており、掘り方の並びもやや乱れている。

掘立柱建物跡の時期については、時期を特定できるような遺物は出土してはいないが、第3号掘立柱建物跡から出土している第44図1の坏(須恵器)の底部片や2の高台付坏(内黒)の底部片などから、概ね平安時代の遺構と考えられる。さらに、他の2棟も、建物跡の規模・配置・主軸方向などから同時期か、またはそれと前後する時期に存在したものと思われる。

竪穴住居跡との関係は、掘立柱建物跡も竪穴住居跡もすべて主軸方向が北からやや東のほうへ傾いており、なんらかの関連性が窺える。しかし、どの竪穴住居跡とどの掘立柱建物跡が対応するかは明確に捉えられなかった。また、掘立柱建物跡の性格についても、住居跡・倉庫・納屋などが考えられるが明確に捉えることはできなかった。

3 土坑

当遺跡からは、総数43基土坑が検出されている。そのうち特色のある土坑について以下に記述した。

A類 人骨の出土により明らかに墓墳と判断されるもの……………2基(第27図)

調査区域の中央部から南側(C2区)から2基接した状態で検出されている。覆土は人為的に埋め戻された様相を呈しており、ローム粒子やロームブロックを含む縮まりの弱い黒褐色土が堆積している。第22・23号土坑の床面直上から人骨が一体ずつ、人骨の下から第23号土坑は古銭(寛永

通寶)が6枚、第22号土坑は古銭(不明)1枚が出土している。また第23号土坑の覆土から木質が付着した釘が8点出土しており、木棺埋葬と考えられる。第23号土坑から出土している「寛永通寶」の初鑄年から17世紀中頃以降の遺構と考えられる。また、第22号土坑は第23号土坑とは切り合っていないが、同時に掘り込まれたとは考えにくい。しかし、遺構や遺物から判断して第23号土坑と同じように近世の墓壇と判断される。

B類 円形を呈し上端径1m内外深さが30cm前後のもの……………11基(第28・29図)

調査区域の北側のB2区を中心に分布する一群と、中央部のC2区を中心に分布する一群に分かれ、ある程度限られた範囲内に分布している傾向が見られる。特にB2区においては重複しながら分布している。平面形が円形で断面形が円筒状(I A類)の土坑が6基、平面形が円形で断面形が皿状(I B類)の土坑が5基とほぼ半数ずつに分かれる。I A類は上端径が1.19~1.25m、深さが27~37cm、I B類は上端径1.02~1.08m、深さが9~28cmとI A類に比べてやや小型で浅いものが含まれている。覆土は、ほとんどの土坑が自然堆積の様相を示しており、ローム粒子を少量含む、硬く締まった黒褐色土が堆積している。第2・4・6号土坑の覆土から土師器片や須恵器片が数点出土しているだけで、他の土坑からは全く出土していない。土坑の時期については明確にすることはできないが、多摩ニュータウン遺跡⁽⁴⁾や当教育財団の大境遺跡⁽⁵⁾においても類似例が報告されており、概ね平安時代に推定されると考えられる。また、竪穴住居跡と土坑の関係は同時に存在したかどうかは不明である。性格については、明確にすることはできないが、多摩ニュータウンなどでは貯蔵説と墓壇説があり、貯蔵説には食料の簡易的な貯蔵所、種籾もしくはそれに準ずるものの保存施設、放牧に関係ある「エサ入れ」などと考えられている。

C類 A・B類に属さないもの……………21基(第30・31図)

最後に当遺跡で検出された43基の土坑をまとめると以下の通りである。

A類(墓壇) 2基(SK22,SK23)

B類 11基(SK 2,SK 4,SK 6,SK15A,SK17,SK18,SK24,SK27,SK29,SK30,SK32)

[B類の可能性のある土坑] 9基(SK 1,SK 3,SK 5,SK 7,SK15B,SK15C,SK15D,SK16,SK28)

C類(その他) 21基(SK 9,SK10,SK11,SK12,SK13,SK14,SK19,SK20,SK21,SK26,SK31,SK33,SK34,SK35,SK37,SK38,SK39,SK40,SK41,SK42,SK44)

4 北郷C遺跡の概観

北郷C遺跡は、住居跡の規模や構造、住居跡と掘立柱建物跡の主軸方向などにある程度共通性が認められた。また、出土した遺物からは、あまり時間的な差を見いだすことはできなかった。

これらのことから、当遺跡は律令体制の下で存在した、奈良時代の終わりから平安時代前半にかけての集落と考えることができる。また墨書土器や鈔帯具などが出土していることから、当時の人々の中には読み書きのできる人がおり、さらに下級役人が出入りしていたことを窺い知ることができる。

その後当遺跡は、溝や道路が存在し、人々の生活の場として存在していたことが考えられる。また、埴仏の出土は、中世における北郷C遺跡の位置づけを考えるうえで貴重な資料となると思われる。

注

- (1) 村田健二「鬼高期後半から国分期初頭の土師器について」 『千天—鹿島線建設に伴う埋蔵文化財調査報告』 大洗地区遺跡発掘調査会 1980年
- (2) 阿部義平「鈔帯と官位制について」 『東北考古学の諸問題』 東出版 1976年
- (3) 松村恵司「出土土器の分類と編年」 『山田水呑遺跡』 山田遺跡調査会・日本道路公団 1977年
- (4) 鶴間正昭「古代末期の丘陵地域開発について—多摩丘陵の様相」 『研究論集IV』 東京都埋蔵文化財センター 1986年3月
- (5) 川井正一『大境遺跡』 茨城県教育財団 1986年3月

表8 北郷C遺跡竪穴住居跡一覧表

住居番号	位置	主軸方向	平面形	規模		壁高 (cm)	内部施設			炉 カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
				長軸	短軸		壁溝	支柱穴	入り口 部施設					
1	A2f ₆	N-0°	方形	4.21	3.90	52~71				カマド	自然	土師器片, 須恵器片, 鈔帯具	II	SF2重複
3	A2j ₆	N-15°-E	隅丸方形	5.32	5.24	75~82	全周	4		カマド	自然	土師器片, 須恵器片, 刀子, 墨書土器片	II	SF1, SD4重複
5	B2c ₇	N-18°-E	方形	5.24	4.86	32~36	全周	4		カマド	自然	土師器片, 須恵器片	I	SF1, SD4重複
6	B2g ₅	N-17°-E	方形	5.30	5.03	66~75	全周	4		カマド	自然	土師器片, 須恵器片, 釘, 刀子片	I	
8	B2b ₅	N-12°-E	[方形]	3.69	[3.44]	43~45				カマド	自然	土師器片, 須恵器片	I	SD5重複
10	B2g ₅	N-13°-E	隅丸方形	3.38	3.25	41~53		1	P	カマド	人為	土師器片, 須恵器片	I	
11	C2g ₄	N-12°-E	隅丸方形	4.69	4.61	82~89	部分			カマド	自然	土師器片, 須恵器片, 灰釉陶器片, 墨書土器片, 手斧	II	
12	C2i ₅	N-17°-E	方形	3.10	2.96	40~41				カマド	自然	土師器片, 須恵器片	I	SD2, P358重複
13	C2j ₂	N-17°-E	長方形	3.44	2.68	20~26				カマド	自然	土師器片, 須恵器片, 凹石	II	
15	D2c ₃	N-4°-E	隅丸方形	3.54	3.31	44~54		2	P	カマド	自然	土師器片, 須恵器片, 墨書土器片	II	
16	D1c ₀	N-34°-E	長方形	3.33	2.90	29~39			P	カマド	自然	土師器片, 須恵器片, 墨書土器片	I	
17	D2e ₂	N-27°-E	方形	2.87	2.85	39~44			P	カマド	人為	土師器片, 須恵器片, 墨書土器片, 鏃	II	
18	D1f ₀	N-33°-E	隅丸方形	3.72	3.62	36~47				カマド	自然	土師器片, 須恵器片, 釘, 石製紡錘車, 墨書土器片	II	
19	D2e ₀	N-38°-E	[隅丸方形]	2.64	(2.57)	12~17				カマド	自然	土師器片, 須恵器片	II	P476重複
20	D2d ₄	N-11°-E	[方形]	2.98	(0.85)	36~45				[カマド]	人為	土師器片, 須恵器片	I	
21	D2f ₂	N-24°-E	不明	(1.10)	(0.72)	44~50				カマド	自然	土師器片	II	

写 真 图 版

北郷C遺跡





北郷C遺跡全景

PL2



調査前全景(北から)



調査後全景(南端部)



遺構確認状況(南から)



作業風景



作業風景





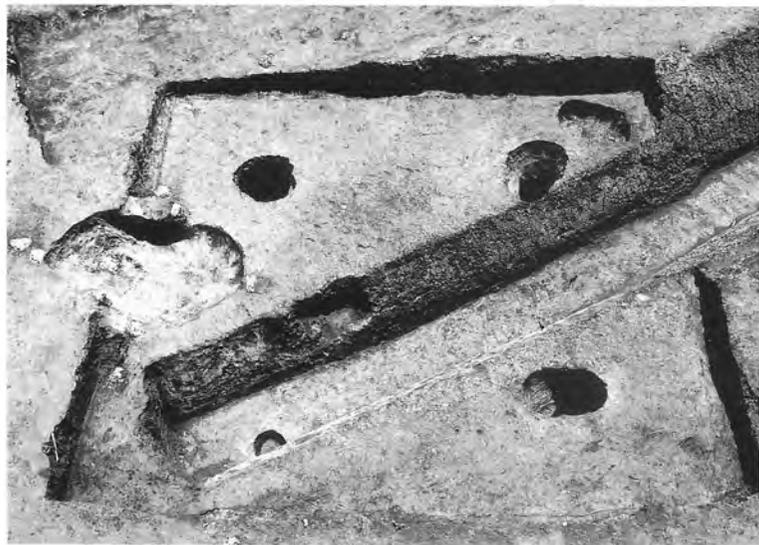
第1号住居跡



第3号住居跡



第3号住居跡カマド



第 5 号住居跡



第 6 号住居跡



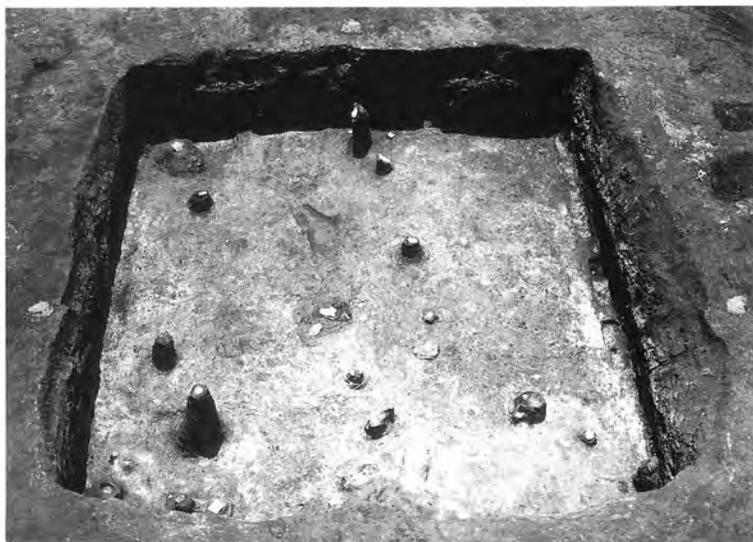
第 8 号住居跡



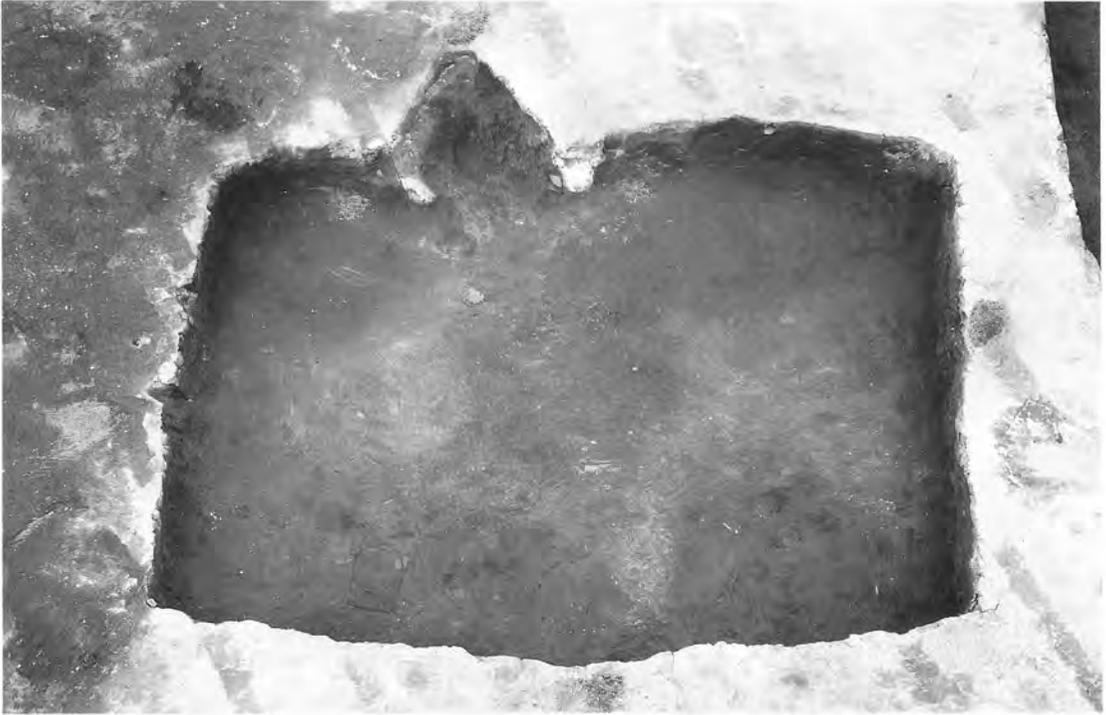
第10号住居跡



第11号住居跡



第11号住居跡
遺物出土状況



第13号住居跡



第13号住居跡遺物出土状況



第13号住居跡カマド



第12号住居跡



第15号住居跡



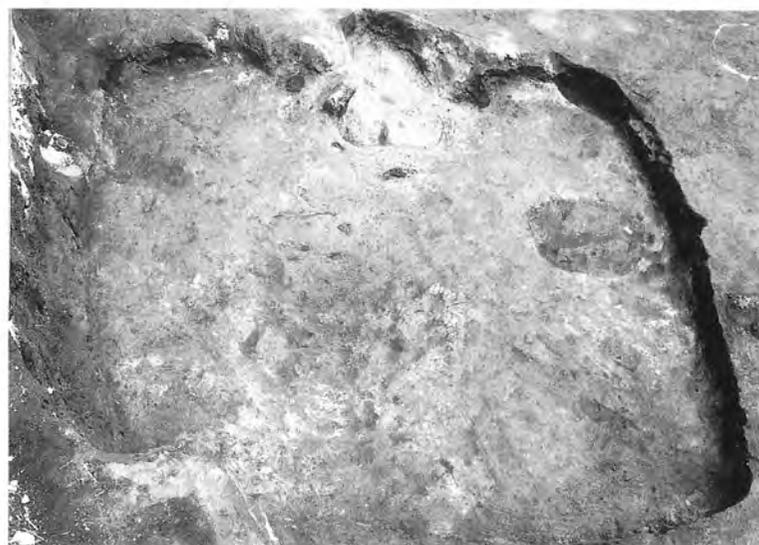
第16号住居跡



第17号住居跡



第18号住居跡



第19号住居跡



第 1 号掘立柱建物跡



第 2 号掘立柱建物跡



第 3 号掘立柱建物跡



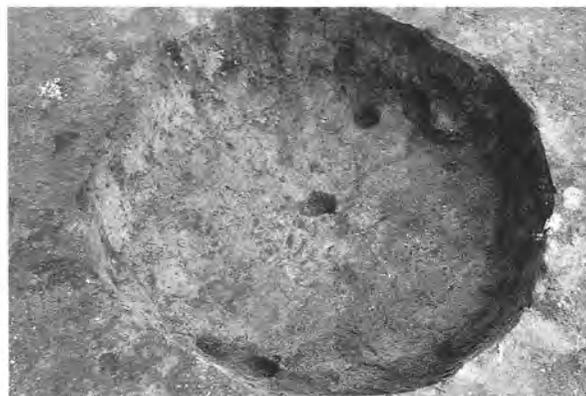
第2号土坑



第4·5号土坑



第15·16号土坑



第17号土坑



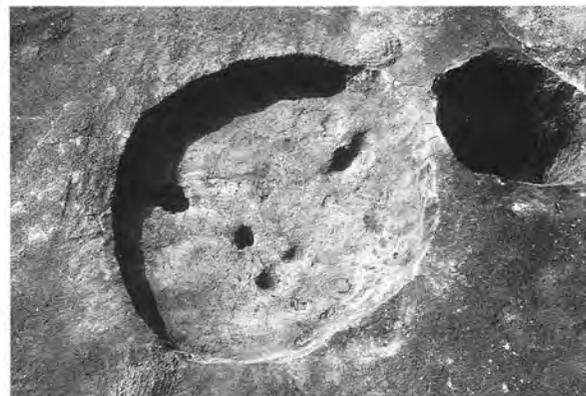
第18号土坑



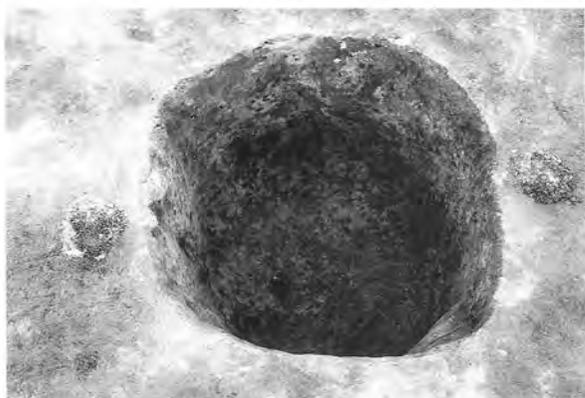
第29号土坑



第30号土坑



第32号土坑



第9号土坑



第13号土坑



第1号沟



第2号沟



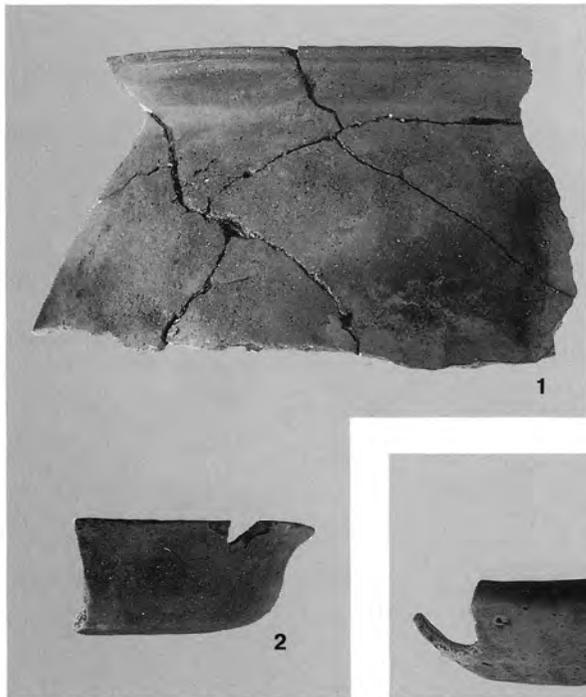
第3号沟



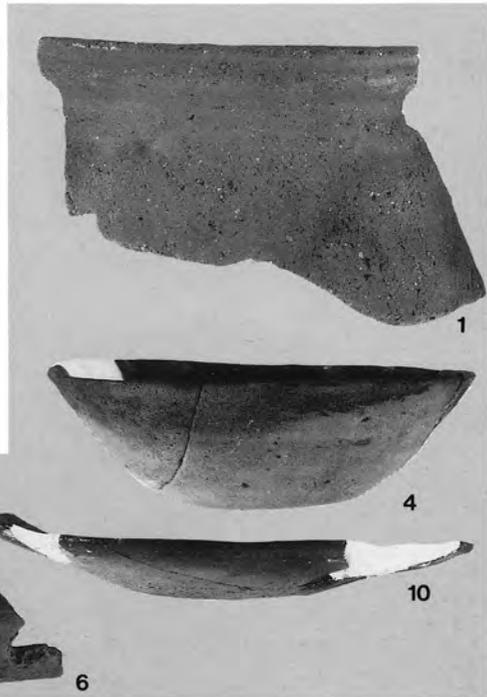
第5号沟



第4号沟·第1号道路迹



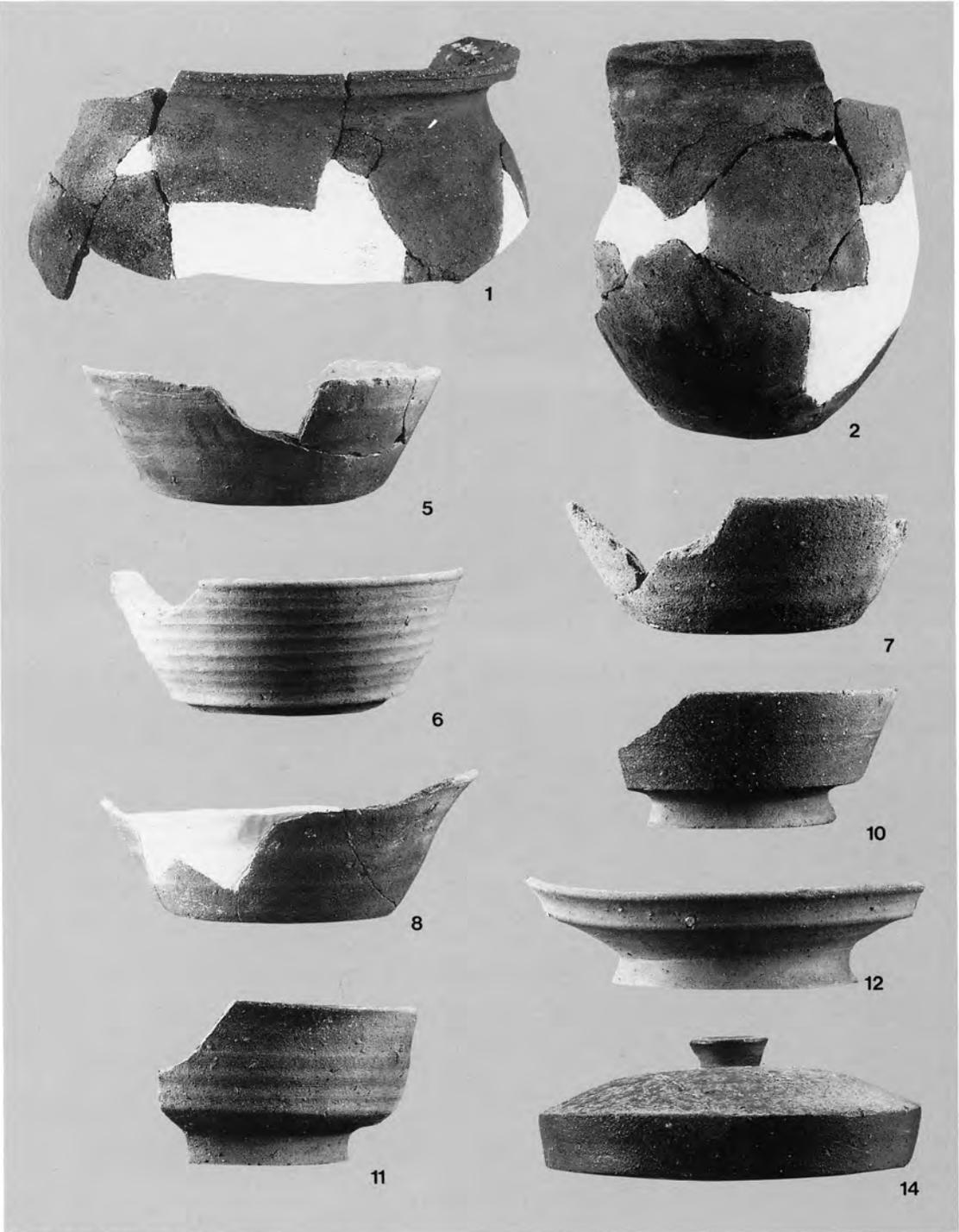
第1号住居跡出土土器



第3号住居跡出土土器



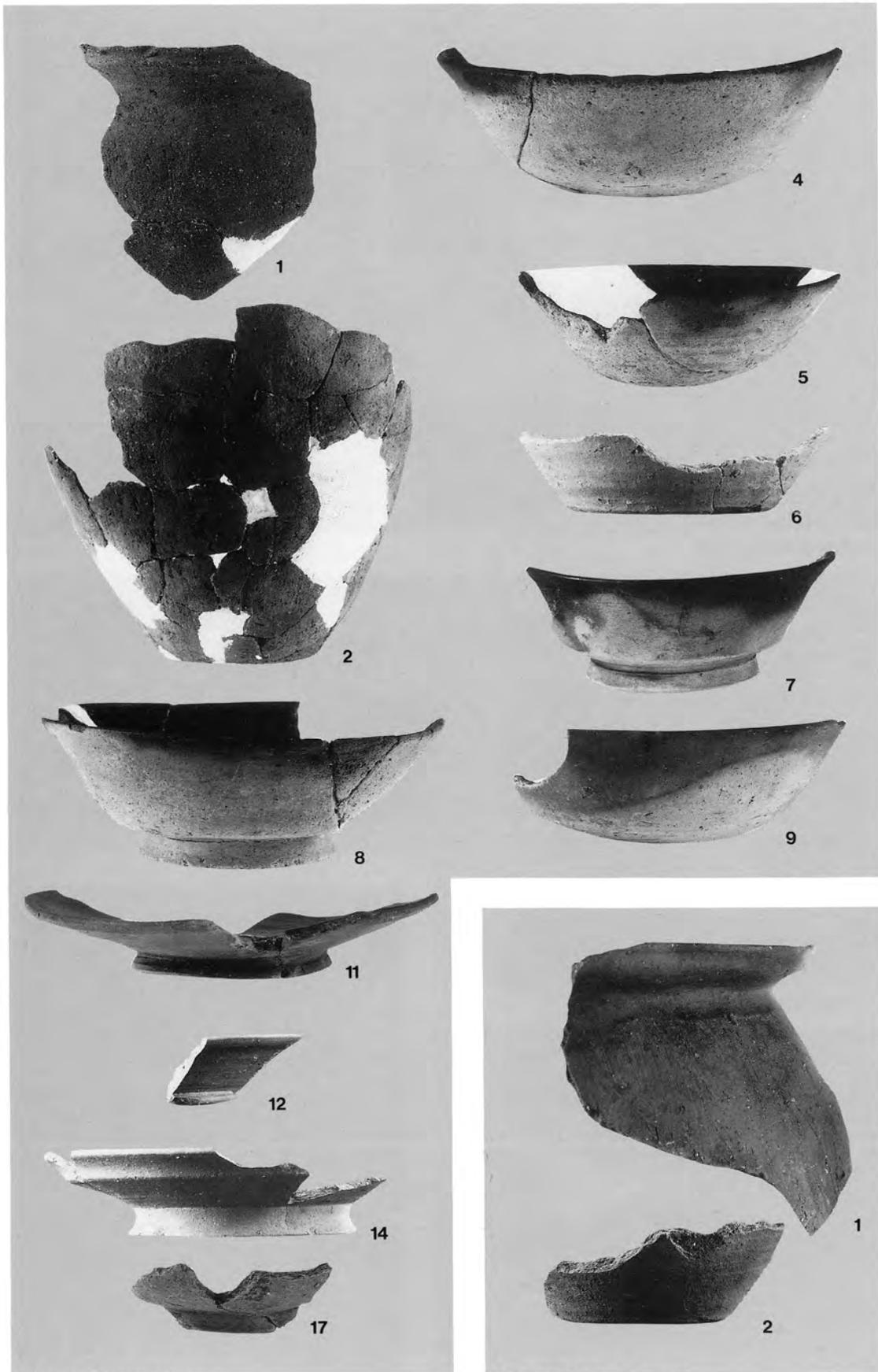
第5号住居跡出土土器



第 6 号住居跡出土土器

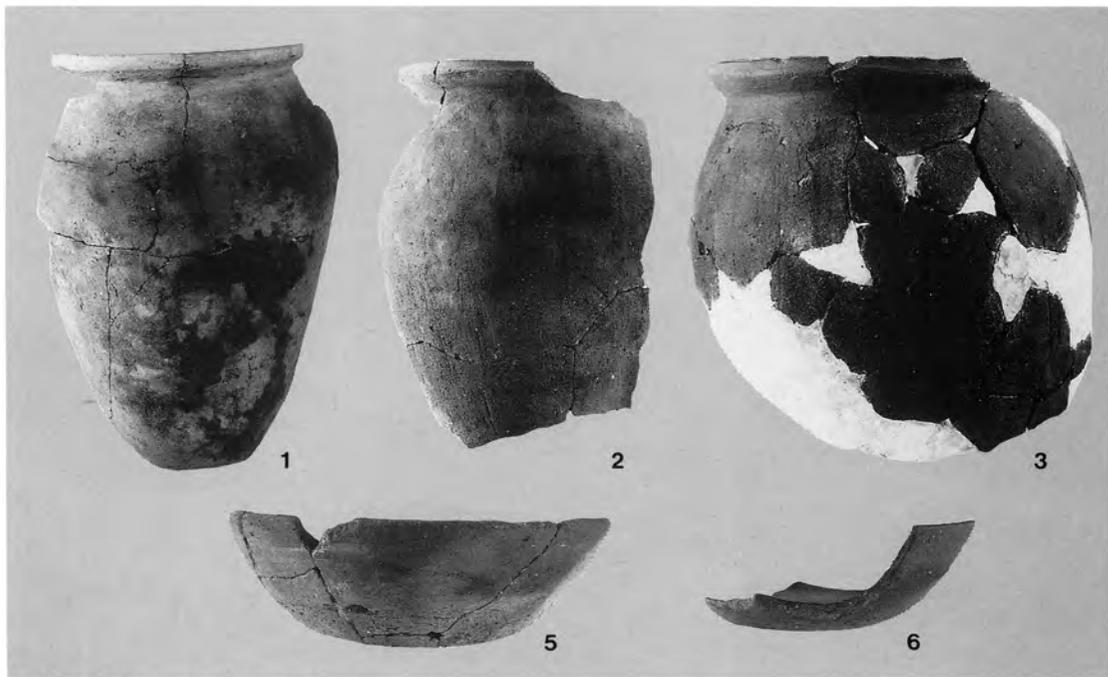


第 8 号住居跡出土土器

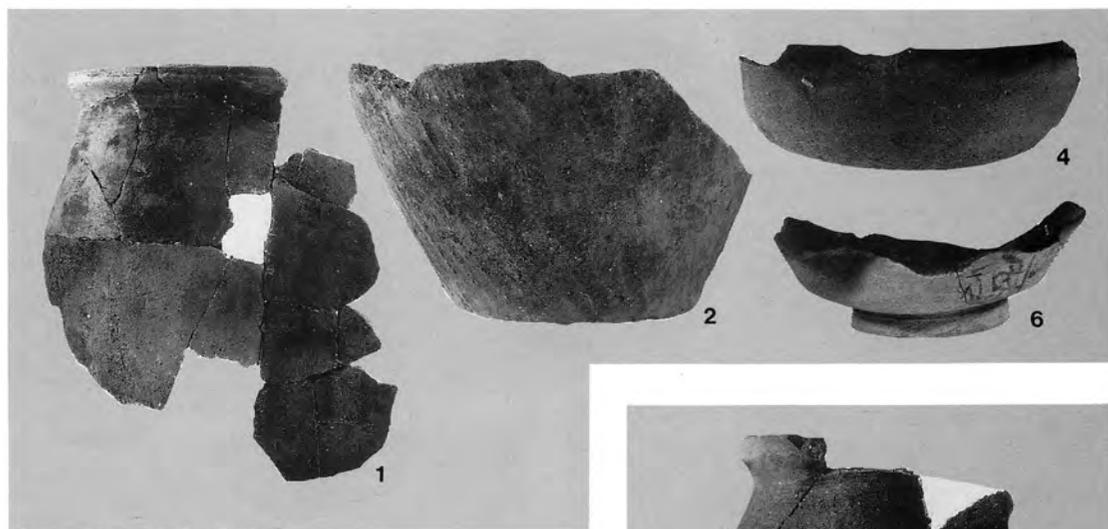


第11号住居跡出土土器

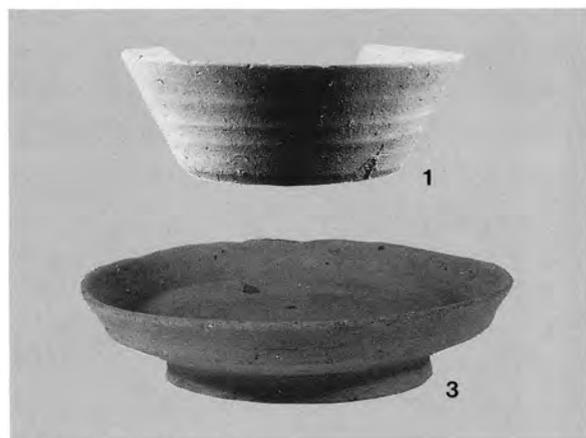
第12号住居跡出土土器



第13号住居跡出土土器



第15号住居跡出土土器



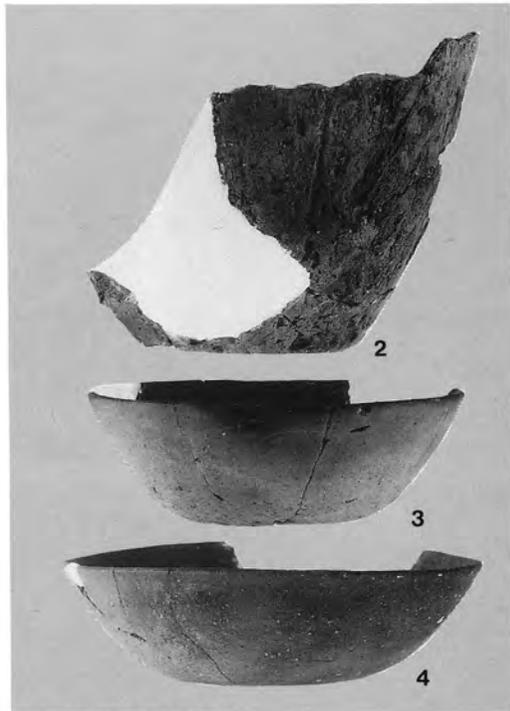
第16号住居跡出土土器



第17号住居跡出土土器



第18号住居跡出土土器



第19号住居跡出土土器



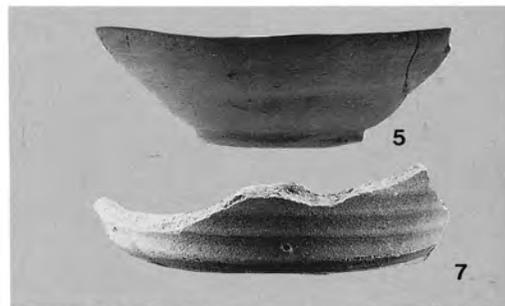
第20号住居跡出土土器



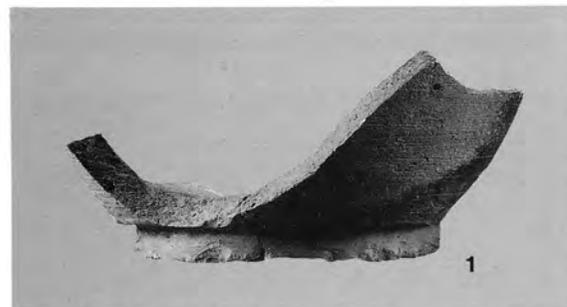
第35号土坑出土土器



第21号住居跡出土土器



第5号溝出土土器



第1号道路跡出土土器



遺構外出土土器



SI11-7



SI15-6



SI16-3



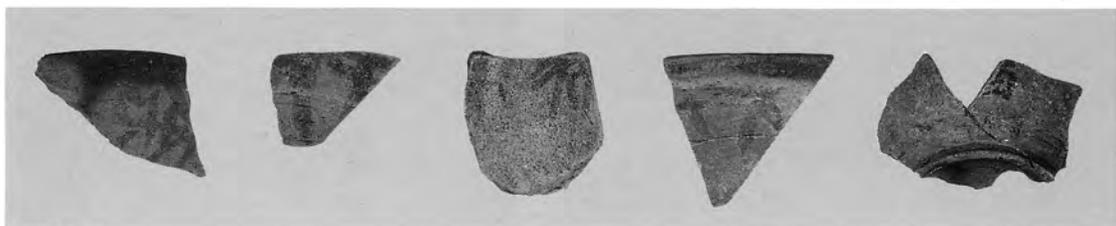
SI17-3



SI18-2



ビット-4

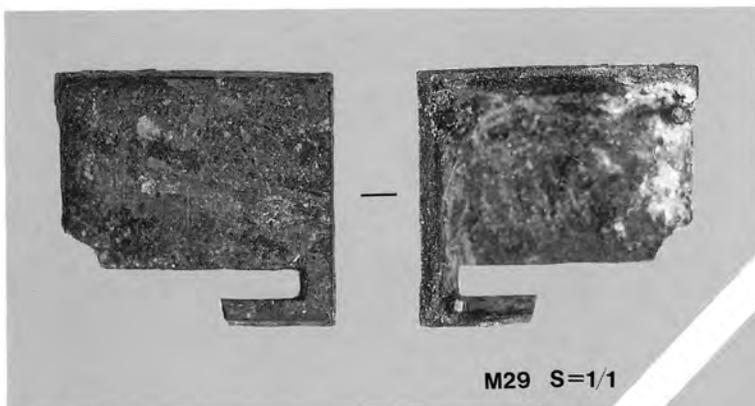




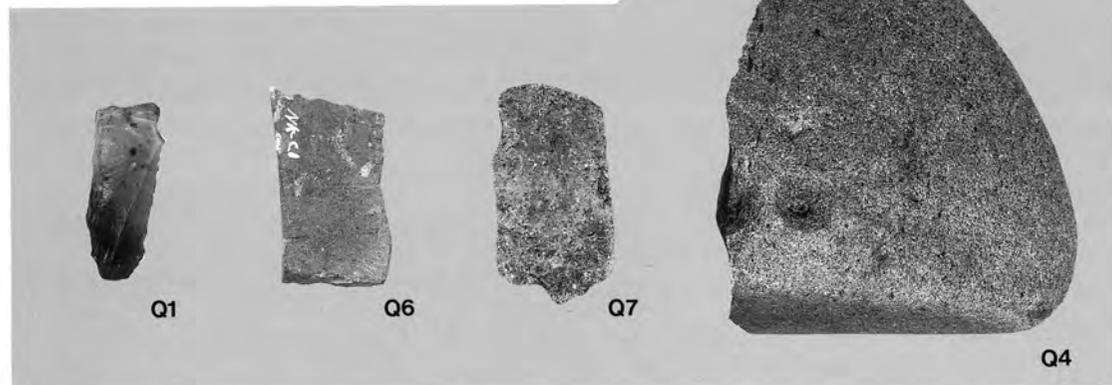
土製品



埴仏



巡方



石製品



鉄製品・古銭

第5章 森戸遺跡



第1節 遺跡の概要

森戸遺跡は、額田台地の北西部、標高30m前後の台地縁辺部に立地している。今回は、森戸遺跡のほぼ中央部を幅27～32m、長さ約350mの規模で南北にトレンチ状に調査した。調査面積は、9,365㎡である。現況は畑であり、周辺には土師器片を中心に多くの遺物が散布している。なお、当遺跡の南西約250mには、北郷C遺跡が所在している。

今回の調査によって検出された遺構は、先土器時代の石器集中地点（ユニット）が6か所、弥生時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡139軒、土坑260基、豪族居館跡、溝9条、道路跡1条、井戸2基、ピット221基である。

先土器時代では、調査区北端の表土から40cm前後下のハードローム層から石器集中地点（ユニット）6か所が検出され、多数の石器が出土している。

縄文時代の遺構は、陥し穴6基で、調査区中央部から検出されている。

弥生時代の遺構は、竪穴住居跡3軒で、調査区の北部に検出されている。

古墳時代の遺構は、竪穴住居跡83軒・土坑53基・豪族居館跡で、調査区全体から検出されている。特に、本時期の竪穴住居跡は、調査区の北部では濃密に検出され、多くが重複していた。前期の竪穴住居跡は1軒、中期の竪穴住居跡は16軒、後期の竪穴住居跡は66軒である。また、豪族居館跡は出土遺物から前期に比定され、堀が2条検出された。

奈良時代から平安時代の遺構は、竪穴住居跡40軒で、調査区の中央部から南側にかけて検出されている。特に、南部からは奈良・平安時代の住居跡が主体をなしており、当遺跡の南方に所在する北郷C遺跡との関連をもつものと考えられる。

近世に比定されると思われる墓坑17基が、調査区北端部から検出されている。

そのほかの遺構については、時期を明確にすることができなかった。

当遺跡からの出土遺物は、遺物収納箱（60×40×20cm）で322箱である。主な遺物は、土師器、須恵器を中心に、弥生式土器、縄文式土器、陶・磁器、鉄器、石器、土製品、石製品などである。特に、古墳時代の住居跡からは滑石製の石製模造品が多量に出土している。



第52図 森戸遺跡地形図

第2節 遺構と遺物

1 先土器時代

(1) 調査の概要と方法

当遺跡における先土器時代に関する調査が行われた区域は、遺跡の最も北寄りの部分の台地縁辺部で、現地表面の標高は約30.4mである。水田面との比高は、15m程である。

当遺跡での先土器時代の存在については、他時期の遺構調査過程で、先土器時代に位置するとと思われる石器等が出土していた事から予測されていたが、遺跡調査の最終段階で本格的に調査した結果、おおむね6か所の石器集中地点から下表のように礫を含め石器等が170点検出された。さらに、先土器時代外の遺構調査の過程でも、先土器時代に属する石器等が57点検出された。総数は、石材16種で石器等227点にのぼっている。

先土器の調査については、当初、11号溝（居館跡の東西堀）から相当数（結果的には33点）の石器類が出土していることから、該期遺構が堀を含む数グリッドの範囲に存在するものと想定し、調査に着手したが、結局、25グリッドで約400m²にも及び、遺跡調査終了間近い中での調査にもかかわらず、予期以上の成果を上げることができた。

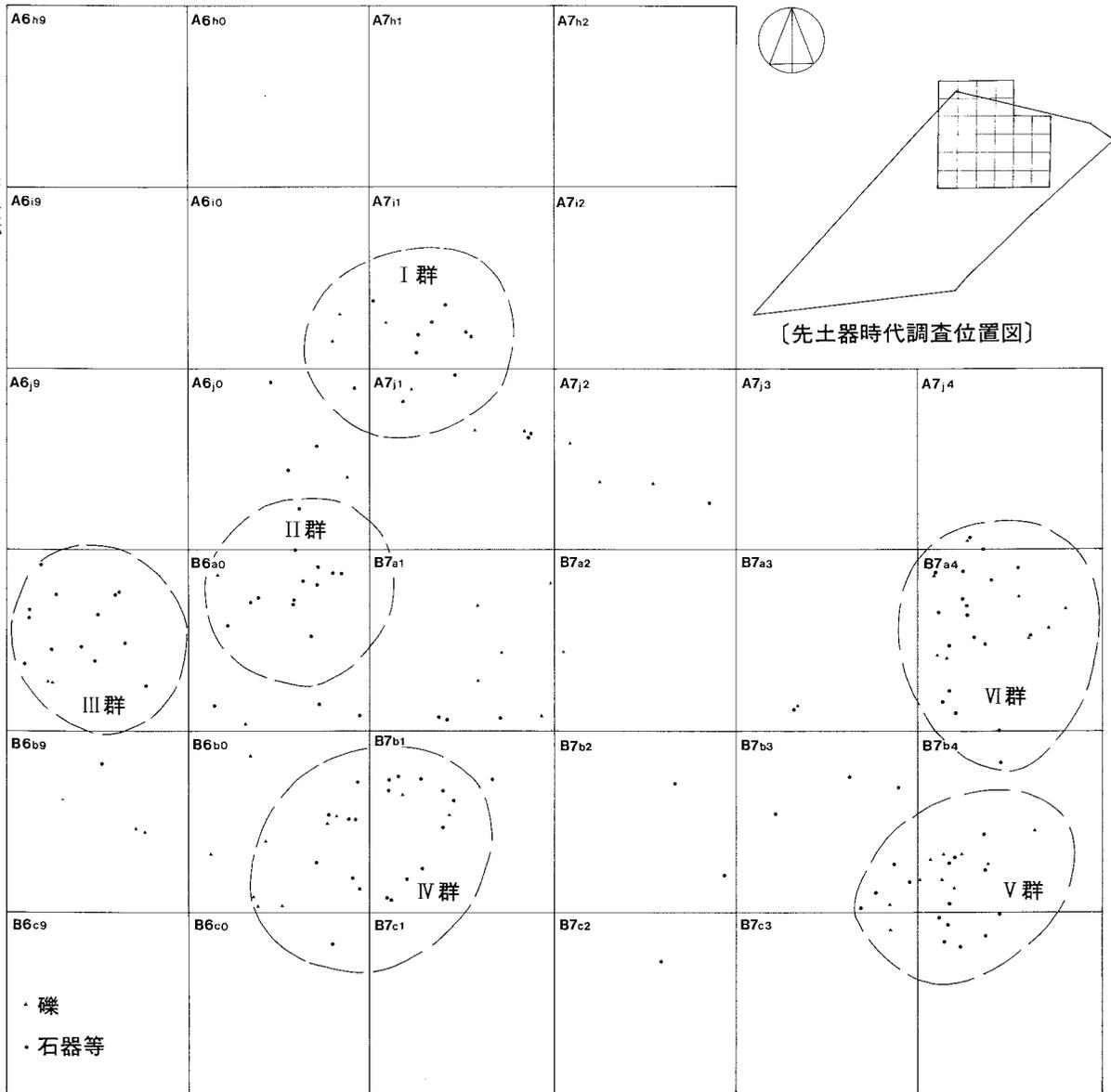
調査は、各グリッド（4m四方の小調査区）の境界線の中軸として幅30cmの土層観察用ベルトを東西と南北の両方向に残しながら、薄く何回にもわたってジョレンで掘り下げ、その過程で検出された礫を含む全ての石器類の原位置を保持し、さらに、生活の痕跡にも注視しながら慎重に行った。

結果的には、その痕跡は認められなかったものの、前述のような成果を得ることができた。

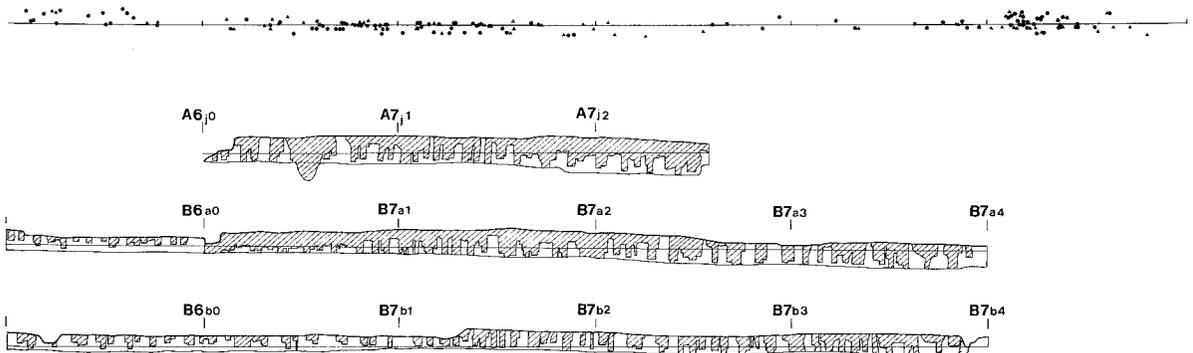
該期調査で出土した石器類の取り扱いについては、

第9表 石器の石材別・器種別一覧表

器種	先土器調査における出土石器等														該期外調査における出土石器等														合計
	ハンマ	チョップ	石	石	石	石	影	削	ノ	削	背	器	片	刺	漢	チョ	石	石	石	影	削	ノ	削	背	器	片	刺	漢	
メノウ	1			9	3		11	5	1		1	46							2	2		7	1					11	100
頁岩					2		1	3	1			13								2	1					1	11	35	
安山岩	1	1					1	1				5														1		10	
チャート							1						5			1		3		1							5	16	
黒曜石																					1						1	2	
粘板岩			1										6															7	
ホルンフェルス													6															6	
流紋岩													1															1	
緑泥片岩			1										1															2	
石英							1						5														4	10	
石英斑岩													1															1	
滑石													1															1	
雲母片岩													1															1	
凝灰岩													1	2														3	
礫岩													3															3	
砂岩	2	1												24														2	29
先土器計	2	3	1	2	0	11	3	1	17	7	1	0	0	1	65	56											170		
該期外計	0	0	0	0	1	2	7	0	10	1	0	0	2	0	32	2											57		
合計	2	3	1	2	1	13	10	1	27	8	1	0	2	1	97	58											227		



L=30.1m



第53図 礫や石器等平面・垂直分布状況及びセクション図

4 M

その都度諸記録を行った後で取り上げる方針であったが、各グリッド及び集中地点での遺物出土レベルに大差がなかったため、面的な観察を通して石器集中地点の予測と正確な把握ができる一括的な取り上げに方針を変えた。なお、具体的な取り上げは、全体写真記録、地点別・個別写真記録を施した後、平面位置の計測を第54図のようにグリッドポイントを利用する方法で実施し、その計測値（先土器遺物整理表の「a (m)－b (m)」欄に表示）に基づき、整理の段階で図化を図ることとした。

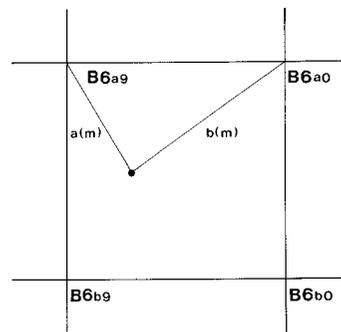
整理の段階では、石材及び器種を確定するとともに、可能な限り個別の図化記録（一部外部発注）を行い、大きさ、重さ等を計測した後、若干のコメントを付して遺物整理表としてまとめた。なお、これらの整理にあたり、赤澤威・小田静夫・山中一郎共著「日本の旧石器」1980年を基軸として進めた。

(2) 基本層序と石器類の垂直分布

先土器調査について、基本層序を検討するため該期調査区域に近い東側部にテストピットを設定して土層の観察を行った。その結果については、第1章第2節2「遺跡の基本層序」の項を参照されたい。石器類の平均出土レベルは約30.13m(160個体平均)で、ほぼ基本層序で示したII層の範ちゅうに収まる。このII層については、締まりのあるハードロームを主体とした一つの層として取り扱ったが、本層上位部分には、分層として明瞭に捉えられないソフトロームがわずかに認められた。しかし、遺物は、主としてハードロームを主体としたII層から出土している。なお、層序を示した土層セクションでも明らかのように、トレンチャーによる攪乱が該期の生活層にまで及んでおり、出土石器類の中で該期外のもものが多少混入している。

(3) 石器類の平面分布

石器類の平面分布については、第53図で示したとおりであるが、この図から、石器集中地点はI～VI群とした6か所と判断される。I群はA7i₁とA7j₁出土のメノウや安山岩で構成され、II群はB6a₀のメノウ・安山岩・頁岩、III群はB6a₉のメノウ、IV群はB6b₀とB7b₁のメノウや安山岩、V群はB7b₄とB7c₄のメノウや安山岩、そしてVI群は、B7a₄の頁岩を主とし、その他メノウで構成されている。また、石器集中地点の大きさは、直径約4m弱で、各地点とも共通しており、石器の石材構成の面でもほぼ共通し、しかもレベル的に大差がない点で各石器集中地点は多くの共通的要素を有している。このことは、集中地点の形成時期を考える上で重要な要素の一つになるものと思われる。



第54図 遺物平面位置計測法

(4) 先土器調査における石材別出土分布状況

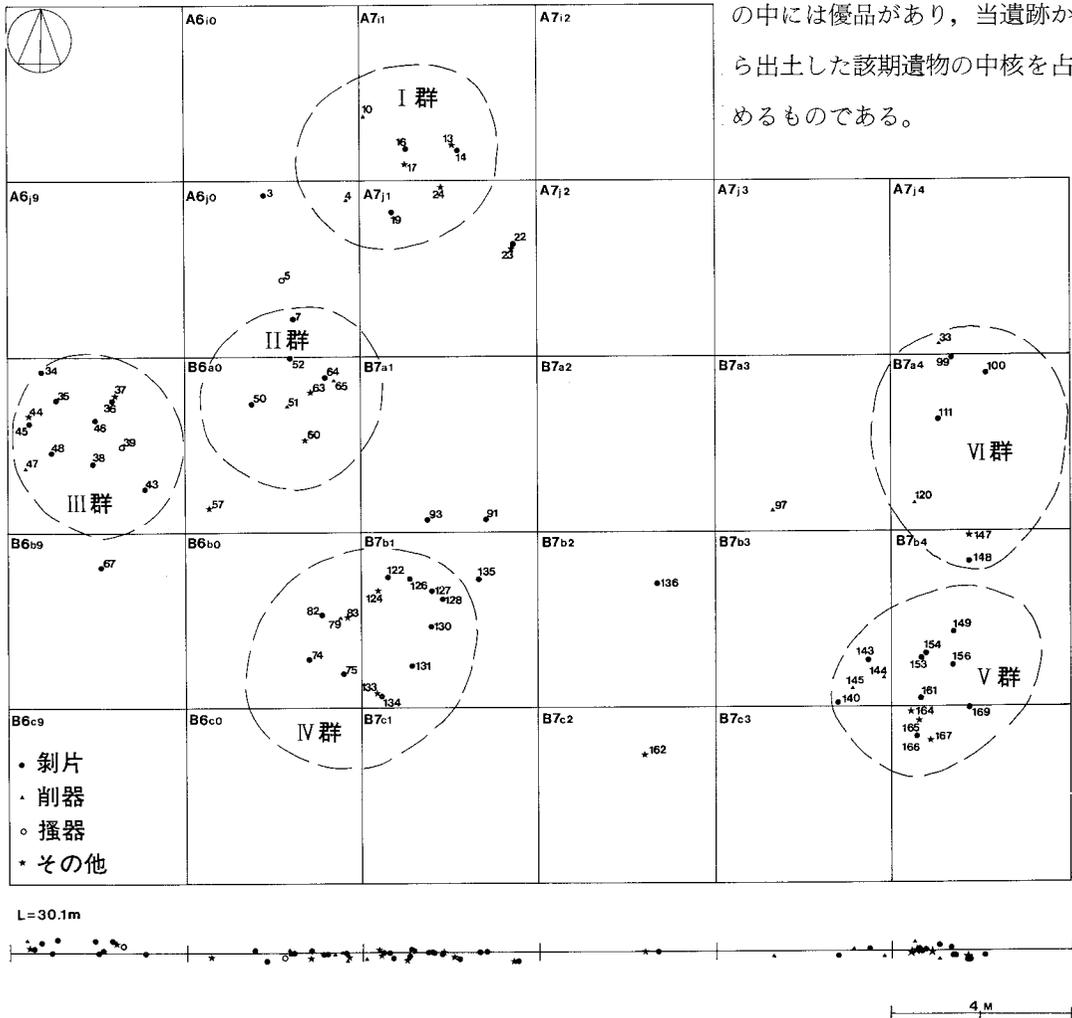
〔メノウ〕

当遺跡の該期出土石器類の中で、最も多く検出された石材はメノウである。その数は100点にのぼり、全体の約半数を占める。この内、77点は先土器調査の過程で検出されている。

器種別では、77点中剥片が最も多く46点、次いで削器が11点、石核9点、ノッチ5点、搔器3点、チョッパー1点、鋸歯縁石器1点、削器とノッチを合せもつ石器1点となっている。

平面分布では、I群の石器集中地点で14点中8点と多数を占め、II群で14点中8点、III群で15点中12点、IV群で27点中14点、V群で25点中14点、VI群で27点中7点となっており、各石器集中地点ともメノウが多くを占めている。特にIII群については単一的様相を示し、特長的である。なお、

チョッパー、削器、搔器等の中には優品があり、当遺跡から出土した該期遺物の中核を占めるものである。



第55図 メノウの器種別分布状況図

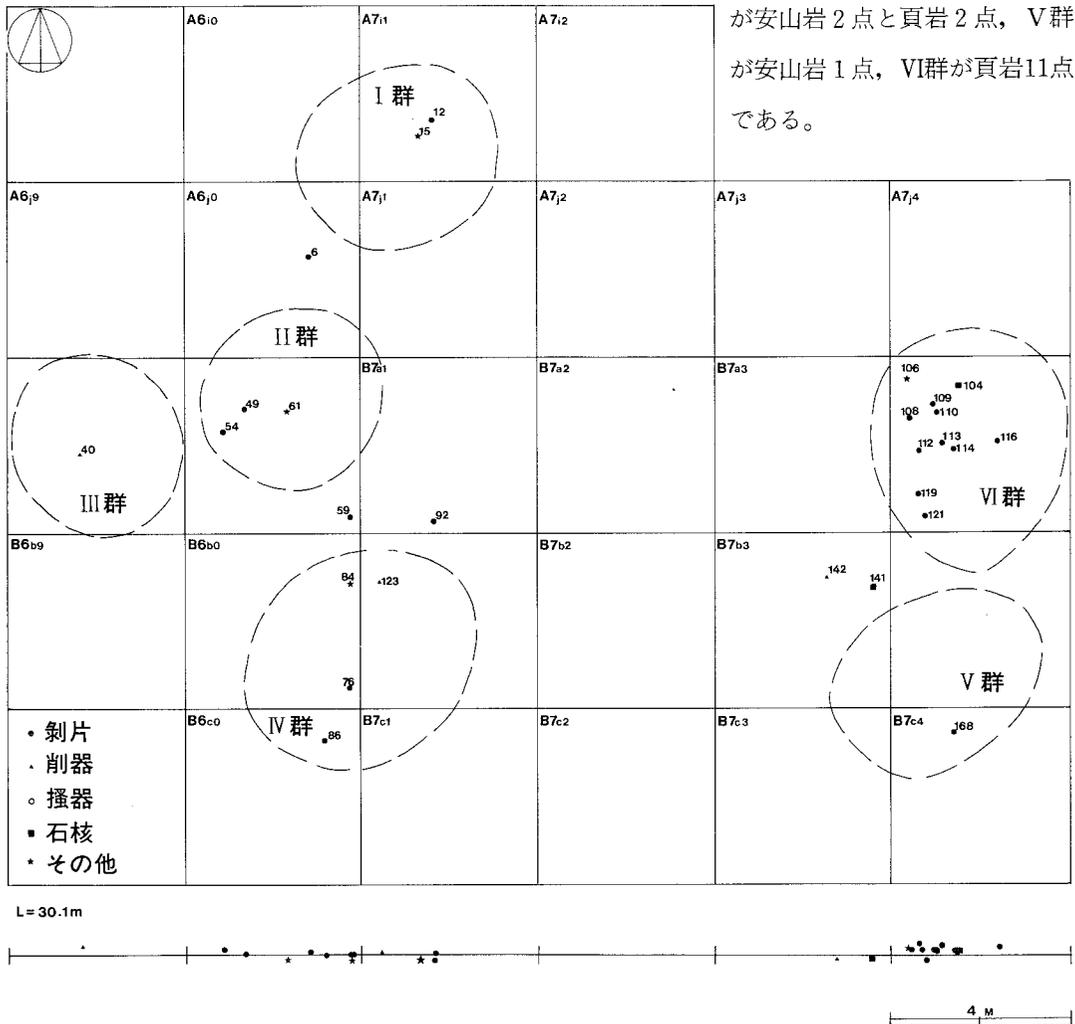
〔頁岩，安山岩〕

メノウに次いで多く検出されたのは，頁岩である。総数35点で，先土器調査の過程で20点，該期外の調査過程で15点である。

器種別では，20点のうち剝片が多く13点，削器3点，石核2点，彫器1点，ノッチ1点となっている。

安山岩は，全体数では砂岩やチャートに次いで五番目であるが，先土器調査過程で9点と多く当跡の該期石器を構成する主要な石材の一つとなっている。

器種別では，剝片5点，チョッパー1点，チョッピングツール1点，削器1点，ノッチ1点となっている。石器集中地点からの出土分布状況は，I群が安山岩2点，II群が安山岩2点と頁岩1点，III群が頁岩1点，IV群が安山岩2点と頁岩2点，V群が安山岩2点と頁岩2点，VI群が頁岩11点である。



第56図 頁岩及び安山岩の器種別分布状況図

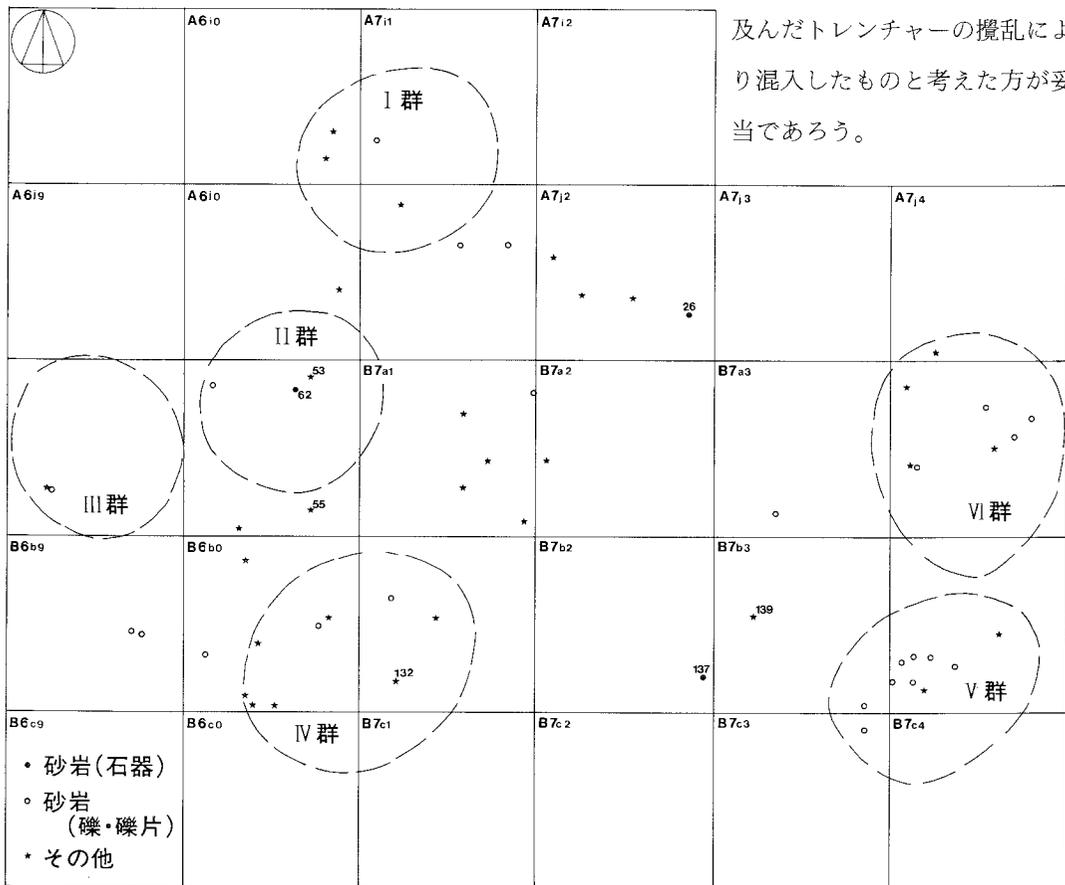
〔砂岩、その他〕

該期調査の中で27点の砂岩が検出された。その大半は礫及び礫片で、石器として明瞭に促えられたのはハンマー2点、チョッパー1点の計3点である。

砂岩の分布状況は、I～III群が各1点、IV群2点、V群8点、VI群4点となっており、計15点が石器集中地点から出土している。従って、集中地点以外からの出土は12点である。

また、該期調査の中で、その他の石材として粘板岩6点、ホルンフェルス6点、チャート5点、石英5点、礫岩3点、凝灰岩3点、流紋岩1点、緑泥片岩1点、石英班岩1点、滑石1点、雲母片岩1点の計33点が出土しており、この内粘板岩と緑泥片岩の石斧各1点と、石英の削器1点を除き、計30点は礫または礫片である。これらの石材の大半は、先土器時代の石器の素材としてよ

り、むしろ該期の生活面にまで及んだトレンチャーの攪乱により混入したものと考えた方が妥当であろう。



第57図 砂岩及びその他の礫等出土分布状況図

(5) 該期外の遺構調査における先土器時代の出土遺物

当遺跡における該期外の遺構調査の段階で、先土器時代に属すると思われる剥片や石器等が、住居跡や堀から57点（内訳は第10表を参照）出土している。

石材別では、メノウが23点と最も多く、次いで頁岩15点、チャート10点、石英4点、黒曜石2点、砂岩2点、安山岩1点となっており、器種別では剥片32点、削器10点、搔器7点、石核2点、背つき石器2点、礫2点、ノッチ1点、石鏃1点である。

出土位置については、先土器時代の調査区域内に位置したSD11から33点とSI165から1点の計34点で多数を占め、その他のものについても当遺跡の北半分の区域で、台地縁辺部ないしはそれに比較的近いところから出土している。このことから判断すれば、当遺跡での先土器の人々の営みは、おおむね台地端部から台地の内側40～50mの範囲の台地縁辺部であったものと思われる。

(6) 小むすび

以上の様に、当遺跡の先土器時代に関する調査結果について、その概要を記載してきたが、このことから明らかな様に、6か所の石器集中地点が認められること、石器素材としての石材は、メノウを中心に頁岩や安山岩であること、そして、先土器時代の人々の営みが台地縁辺部であったことなどが判明した。しかし、明確な生活の痕跡や石器製作にかかる遺物などにも注視しながら調査を展開したが、残念ながらこのこ

第10表 該期外遺構出土石器一覧表

遺構名	点数	内 訳
S I 119	1	背つき石器 1
S I 131	5	剥片 3, 搔器 1, 削器 1
S I 138	3	剥片 2, 削器 1
S I 147	1	剥片 1
S I 155	2	搔器 1, 石鏃 1
S I 165	1	搔器 1
S D 10	10	剥片 6, 石核 2, 削器 2
S D 11	33	剥片 19, 削器 6, 搔器 4, 礫 2, ノッチ 1, 背つき石器 1
表 採	1	剥片 1
計	57	

とについて明瞭とならなかった。さらに、個々の遺物に対するコメントも紙数の都合で十分とはいええず、このことについては、別な形で補っていきたいと考えている。

最後に、先土器時代の時期的位置づけであるが、該期調査段階で古い時期の土器片等が検出されなかったこと、細石刃や大型石刃石器が認められなかったこと、硬質ロームを中心とする層より出土していること、石核石器のあること等から、およそ、小型石刃石器文化を含むそれ以前の文化期と考えている。

第11表 先土器遺物整理表

番号	石	材	器	種	地点	a(m)-b(m)	標高(m)	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	備	考		
1	ホルンフェルス		礫	片	A6i ₀	4.39-2.87	30.200	2.4	1.4	0.5	2.0	円礫の小破片。			
2	滑	石	礫	片	A6i ₀	4.66-3.48	30.182	2.7	1.0	0.5	1.5	先土器調査中唯一の滑石片。(該期外遺物の可能性あり)			
3	メ	ノ	ウ	剝	片	A6j ₀	1.85-2.21	29.968	2.7	2.2	1.2	5.5	剝離面打面のやや厚形の石刃状剥片。		
4	メ	ノ	ウ	削	器	A6j ₀	3.72-0.52	29.986	4.8	4.1	2.0	21.3	素材は石刃状剥片。直刃削器。		
5	メ	ノ	ウ	搔	器	A6j ₀	3.04-2.73	30.056	5.9	4.7	2.4	48.8	素材は石核調整剥片(シャポー)。周縁の一部に刃づけ。		
6	安	山	岩	剝	片	A6j ₀	3.32-2.09	30.023	4.2	6.9	1.2	28.4	横形剥片。背部に原面が残る。削器として利用可能。		
7	メ	ノ	ウ	剝	片	A6j ₀	3.98-3.50	30.101	3.6	3.1	1.7	11.9	石核調整剥片。原面あり。先端は尖る。		
8	砂	岩	礫	片	A6j ₀	4.26-2.45	30.006	3.8	2.0	1.5	13.6	わずかに敲打痕と思われるものが縁部に認められる。			
9	メ	ノ	ウ	剝	片	A6j ₀	—	—	2.6	1.6	0.9	2.6	石刃状剥片。錐状突起に刃づけは認められない。		
10	メ	ノ	ウ	削	器	A7i ₁	2.51-4.68	29.974	4.7	2.5	1.3	13.5	素材は石刃状剥片。刃部は右側縁下位及び先端。		
11	砂	岩	礫	片	A7i ₁	3.13-4.82	30.008	3.7	2.3	1.4	13.0	円礫の破片。搬入石材。			
12	安	山	岩	剝	片	A7i ₁	3.08-3.51	29.983	2.1	1.2	0.4	1.2	剝離面を打面とした石刃の破片。		
13	メ	ノ	ウ	石	核	A7i ₁	3.82-3.71	30.010	8.2	4.9	2.8	107.3	剝離面打面石核。		
14	メ	ノ	ウ	搔	器	A7i ₁	3.95-3.73	29.977	4.2	2.9	2.0	20.3	素材は石刃状剥片。エンドスクレイパー。		
15	安	山	岩	チョッパー	A7i ₁	3.77-3.96	29.985	7.6	5.3	3.3	147.7	素材は石核調整剥片(シャポー)。原面上縁に刃づけ。			
16	メ	ノ	ウ	剝	片	A7i ₁	3.43-4.38	30.039	2.1	1.5	0.6	0.9	細部調整剥片。		
17	メ	ノ	ウ	ノッチ	A7i ₁	3.77-4.70	29.968	3.1	1.7	0.7	3.3	素材は石刃状剥片。クラクトン型。ノッチ幅0.8cm。			
18	凝	灰	岩	礫	片	A7j ₁	1.01-3.16	29.949	4.5	5.3	1.1	19.9	石核調整剥片。原面に一部剝離あり。裏面にバルブ。		
19	メ	ノ	ウ	剝	片	A7j ₁	1.01-3.37	29.984	6.2	2.5	1.3	17.2	石核調整剥片。		
20	砂	岩	礫	片	A7j ₁	2.65-2.20	29.930	5.8	3.3	2.1	56.4	搬入石材。			
21	砂	岩	礫	片	A7j ₁	3.65-1.50	29.897	3.6	2.6	1.3	10.6	円礫片。			
22	メ	ノ	ウ	剝	片	A7j ₁	3.78-1.54	29.875	3.4	2.6	1.2	6.6	石刃状剥片。両縁鋭利。左側縁上位に浅いノッチ状あり。		
23	メ	ノ	ウ	ノッチ	A7j ₁	3.78-1.60	29.883	4.7	3.4	1.4	18.6	素材は石刃状剥片。片面細部調整によるノッチ。			
24	メ	ノ	ウ	石	核	A7j ₁	1.87-2.16	30.137	5.1	7.4	3.7	148.8	剝離面打面石核。3打面以上。		
25	ホルンフェルス		礫	片	A7j ₂	3.34-3.14	29.997	5.5	3.7	0.9	17.8	自然剝離による盤状礫片。(該期外か)			
26	砂	岩	ハンマー	A7j ₂	4.42-2.87	30.010	9.4	6.3	3.2	238.8	左上端部に敲打痕。握り易くするため表面敲打調整。				
27	礫	岩	礫	A7j ₂	1.70-4.00	29.928	4.5	3.2	1.3	20.8	搬入石材。				
28	雲	母	片	礫	A7j ₂	2.73-3.94	29.879	3.0	2.1	1.3	10.0	搬入石材。			
29	頁	岩	ノッチ	A7j ₃	—	—	6.2	2.2	1.2	12.2	素材は石刃状剥片。左側縁に片面細部調整ノッチ2か所。				
30	石	英	礫	A7j ₃	—	—	3.4	2.9	1.5	16.8	自然剝離による角礫片。(該期外か)				
31	石	英	礫	A7j ₃	—	—	2.4	2.1	1.4	7.4	自然剝離による角礫片。(該期外か)				
32	礫	岩	礫	A7j ₄	3.94-4.82	29.965	1.2	1.0	0.8	1.0	1.0	小礫。			
33	メ	ノ	ウ	削	器	A7j ₄	3.90-4.27	29.944	3.1	1.9	0.9	3.9	素材はやや厚形の横形剥片。右側縁が刃部。直刃削器。		
34	メ	ノ	ウ	剝	片	B6a ₉	0.84-3.24	30.346	4.3	2.7	1.8	19.1	石核調整剥片。表面に原面のこる。厚形の横形剥片。		
35	メ	ノ	ウ	剝	片	B6a ₉	1.47-3.10	30.417	1.8	2.1	0.7	1.6	細部調整剥片。		
36	メ	ノ	ウ	剝	片	B6a ₉	2.58-1.89	30.401	2.7	1.5	1.3	4.0	原面打面剥片。		
37	メ	ノ	ウ	ノッチ	B6a ₉	2.63-1.83	30.394	2.6	1.3	0.3	1.0	素材は横形剥片。右側縁中央部に浅いノッチ。			
38	メ	ノ	ウ	剝	片	B6a ₉	3.13-3.20	30.391	2.0	2.7	0.5	2.2	細部調整剥片。横形剥片。		
39	メ	ノ	ウ	搔	器	B6a ₉	3.28-2.48	30.308	3.7	2.3	1.3	13.8	素材は石刃。右側縁の一部と先端部が刃部。		
40	頁	岩	削	B6a ₉	2.72-3.21	30.316	2.8	1.3	0.7	3.0	素材は剥片。両面調整。背部原面。先端部に直刃状刃部。				
41	石	英	斑	岩	礫	B6a ₉	3.08-4.25	30.378	3.0	1.7	1.4	8.6	トレンチャー痕より出土。(該期外か)		
42	砂	岩	礫	片	B6a ₉	3.13-4.22	30.378	2.2	1.2	0.7	1.0	1.0	角礫小片。		
43	メ	ノ	ウ	剝	片	B6a ₉	4.38-3.25	30.135	4.3	3.0	1.1	12.1	石刃状剥片。左側縁上位の鋭利部は刃部利用が可能。		
44	メ	ノ	ウ	鋸歯縁石器	B6a ₉	1.41-3.78	30.195	4.0	2.8	1.7	16.4	先端にノッチを入れ鋸歯縁をつくる。			
45	メ	ノ	ウ	剝	片	B6a ₉	1.60-3.85	30.210	1.5	1.1	0.2	0.2	細部調整剥片。		
46	メ	ノ	ウ	剝	片	B6a ₉	2.47-2.50	30.115	2.0	1.4	0.8	2.2	石核調整剥片。原面が残る。		
47	メ	ノ	ウ	削	器	B6a ₉	2.55-4.41	30.371	4.3	3.8	1.3	17.2	素材は石刃。左側縁上位が刃部。		
48	メ	ノ	ウ	剝	片	B6a ₉	2.43-3.73	30.134	4.3	2.7	1.0	7.1	石刃状剥片。右側縁が鋭利。		
49	安	山	岩	剝	片	B6a ₀	1.80-2.87	30.125	4.4	3.5	1.0	9.6	横形剥片。ノッチとして利用可能。原面が一部に残る。		
50	メ	ノ	ウ	剝	片	B6a ₀	1.90-2.69	30.160	1.5	2.1	0.3	0.9	細部調整剥片。薄形の剥片である。		
51	メ	ノ	ウ	削	器	B6a ₀	2.61-2.01	30.204	2.8	1.6	0.7	2.4	素材は石刃。右側縁が刃部。直刃。磨耗により中央凹む。		
52	メ	ノ	ウ	剝	片	B6a ₀	2.36-1.62	30.143	1.7	1.2	0.8	1.0	原面が残る。先端は尖る。		
53	縁	泥	片	岩	石	斧	B6a ₀	2.92-1.19	30.174	3.5	2.1	1.1	8.9	磨製石斧の破片と考えられ、該期外の石器か。	
54	頁	岩	剝	片	B6a ₀	1.92-3.57	30.244	2.1	1.6	0.8	1.7	1.7	石刃状剥片。断面三角形。先端部折れて欠失。		
55	石	英	削	器	B6a ₀	4.48-3.59	30.167	2.4	2.0	0.6	2.8	2.8	素材は横形剥片の小片。左側縁が刃部。		
56	砂	岩	礫	片	B6a ₀	0.87-3.40	30.090	4.3	2.7	2.1	21.8	21.8	円礫片。搬入石材。		
57	メ	ノ	ウ	石	核	B6a ₀	3.49-4.83	30.098	7.9	5.0	2.9	87.6	87.6	剝離面打面石核。単打面。	

※ 資料番号は、分布状況図、実測図、写真図版中番号と同じ。

第12表 先土器遺物整理表

番号	石	材	器	種	地点	a(m)-b(m)	標高(m)	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	備	考
58	ホルンフェルス		礫		B6a ₀	4.06-4.74	30.100	4.3	2.5	1.9	30.0	円礫。	
59	頁岩	剥片			B6a ₀	5.27-3.66	30.125	5.0	3.7	1.0	10.9	両側縁鋭利。上端に打面が残る。バルブを除去。	
60	メノウ	ウ	チョッパー		B6a ₀	3.34-2.28	30.049	8.1	6.3	3.2	152.7	素材は石核調整剥片(シャボロー)。交互剥離の刃づけ。	
61	安山岩	ノ	ツチ		B6a ₀	2.62-2.08	30.087	4.2	2.9	0.6	6.9	素材は横形剥片。細部調整によりノッチを作出。	
62	砂岩	ハ	ンマ		B6a ₀	2.63-1.56	30.058	7.0	5.1	4.1	172.0	両端に明瞭な敲打痕あり。先端に敲打による剥離あり。	
63	メノウ	ウ	石核		B6a ₀	2.98-1.36	30.040	12.6	9.0	13.3	539.2	原面打面石核。単打面。右側縁面以外は原面。	
64	メノウ	ウ	剥片		B6a ₀	3.23-0.96	30.105	5.8	1.7	1.2	10.0	石刃状剥片。左側縁が鋭利。	
65	メノウ	ウ	削器		B6a ₀	3.44-0.80	30.058	5.9	3.4	1.5	26.9	素材は石刃。右側縁が刃部。凸刃削器。	
66	チャート	剥片			B6a ₀	—	—	4.2	2.1	1.0	7.5	人為剥離は認められない。(該期外か)	
67	メノウ	ウ	剥片		B6b ₀	2.26-2.04	30.175	4.0	2.7	1.4	11.9	右側面を除き原面。	
68	砂岩		礫		B6b ₀	3.58-2.49	30.164	5.4	2.7	1.7	24.7	小礫。	
69	砂岩		礫		B6b ₀	3.83-2.44	30.171	4.9	3.4	2.0	40.7	小礫。	
70	ホルンフェルス		礫		B6b ₀	2.97-3.35	30.281	4.1	1.7	1.1	8.0	円礫。	
71	砂岩		礫		B6b ₀	2.77-4.46	30.232	5.0	1.7	1.4	18.5	円礫の破片。	
72	チャート		礫		B6b ₀	3.89-4.46	30.270	4.4	2.0	1.7	16.1	稜のやや磨耗した自然礫。	
73	チャート		礫		B6b ₀	4.35-4.30	30.177	3.8	2.3	2.0	19.9	稜のやや磨耗した自然礫。	
74	メノウ	ウ	剥片		B6b ₀	4.05-3.13	30.162	1.6	1.5	0.6	1.2	石刃状剥片(小片)。横断面は三角形を呈する。	
75	メノウ	ウ	剥片		B6b ₀	4.88-3.27	30.132	3.5	4.1	1.3	14.7	剥離面打面の横形剥片。	
76	頁岩	剥片			B6b ₀	5.14-3.50	30.154	2.8	2.0	0.5	2.5	石刃状剥片。両側縁鋭利。右側縁上半は凹刃状を呈する。	
77	砂岩		礫		B6b ₀	3.67-2.25	30.152	4.1	2.4	0.8	7.4	円礫の破片。	
78	粘板岩		礫		B6b ₀	3.80-2.02	30.174	3.3	1.8	1.2	3.3	円礫の破片。	
79	メノウ	ウ	削器		B6b ₀	4.04-2.00	30.128	3.1	2.5	1.6	9.9	素材は石刃状剥片。左側縁下位背つぶし。右側縁が刃部。	
80	チャート		礫		B6b ₀	1.48-2.70	30.093	3.3	2.6	2.0	21.7	小礫。	
81	チャート		礫		B6b ₀	4.15-4.57	30.134	5.0	4.4	3.0	57.9	小礫。	
82	メノウ	ウ	剥片		B6b ₀	3.63-2.09	30.105	2.8	2.0	0.3	1.5	横形剥片。先端と右側縁が鋭利。	
83	メノウ	ウ	石核		B6b ₀	4.19-1.96	30.084	5.7	5.0	4.0	94.5	剥離面打面石核。単打面。	
84	安山岩		グトール		B6b ₀	3.94-1.16	30.094	7.7	5.7	2.2	101.1	素材は石核調整剥片(シャボロー)。両面より両縁に刃づけ。	
85	メノウ	ウ	剥片		B6b ₀	—	—	4.3	2.4	0.8	8.2	石刃状剥片。右側縁先端はノッチとして利用か。	
86	頁岩	剥片			B6c ₀	3.28-1.07	30.109	3.1	2.1	1.7	5.8	—	
87	粘板岩		礫		B7a ₁	2.67-2.03	30.087	2.8	1.4	0.8	4.5	小円礫。	
88	粘板岩		礫		B7a ₁	3.68-2.51	30.124	3.6	1.7	1.5	9.7	円礫の破片。	
89	砂岩		礫		B7a ₁	4.02-0.75	30.054	4.6	2.7	0.7	12.7	小礫。	
90	粘板岩		礫		B7a ₁	5.23-3.66	30.129	2.7	1.7	1.1	8.2	円礫の破片。	
91	メノウ	ウ	剥片		B7a ₁	4.62-3.86	30.175	2.4	1.8	1.5	5.8	表面細部調整。上端に原面あり。石核縁つき剥片か。	
92	安山岩	剥片			B7a ₁	4.07-4.41	30.147	2.4	3.6	0.7	5.8	横形剥片の一部。翼状を呈する。	
93	メノウ	ウ	剥片		B7a ₁	3.98-4.46	30.158	1.6	2.0	0.3	0.9	細部調整段階の整形剥片。	
94	凝灰岩		礫		B7a ₁	3.72-3.33	30.197	3.5	2.5	1.1	9.5	破片。	
95	石英		礫		B7a ₁	—	—	2.3	1.4	0.6	1.9	角礫の小破片。	
96	粘板岩		礫		B7a ₂	2.28-4.42	30.180	4.8	3.8	1.7	44.6	円礫の破片。搬入石材。	
97	メノウ	ウ	削器		B7a ₃	3.75-4.45	30.054	6.7	3.1	1.1	14.6	素材は石刃。右側縁下部に背つぶし。両刃削器。	
98	砂岩		礫		B7a ₃	3.73-4.39	30.053	2.8	2.3	0.7	5.2	円礫の破片。	
99	メノウ	ウ	剥片		B7a ₄	1.38-2.62	30.206	3.8	3.2	1.1	6.9	石刃状剥片。右側縁鋭利。	
100	メノウ	ウ	剥片		B7a ₄	2.19-1.90	30.064	1.9	1.6	1.5	2.6	断面菱形。先端部欠損。上端面に原面を残す。	
101	砂岩		礫		B7a ₄	3.46-1.55	29.893	6.0	5.4	1.4	54.4	円礫の盤状破片。	
102	砂岩		礫		B7a ₄	3.29-2.10	30.083	4.2	3.0	1.4	18.4	円礫の破片。	
103	砂岩		礫		B7a ₄	2.44-2.11	29.985	2.9	1.9	0.6	2.8	礫の小破片。	
104	頁岩		石核		B7a ₄	1.69-2.57	30.239	9.0	7.6	5.0	197.0	剥離面打面石核。2打面。	
105	凝灰岩		剥片		B7a ₄	1.07-3.10	29.991	3.9	3.2	1.1	13.4	石刃状剥片。やや厚形の剥片。原面を残す。	
106	頁岩		彫器		B7a ₄	0.68-3.66	30.269	3.7	2.9	1.2	8.5	素材は石刃状剥片。両面彫器。	
107	流紋岩		礫		B7a ₄	0.68-3.72	30.285	2.8	2.7	0.7	6.5	礫の破片。	
108	頁岩		剥片		B7a ₄	1.49-3.84	30.279	2.1	0.8	0.2	0.3	細石刃状の破片。左側縁に使用痕あり。	
109	頁岩		剥片		B7a ₄	1.59-3.23	30.236	4.0	1.9	1.1	4.2	尖頭状を呈する石刃状剥片。断面三角形を呈する。	
110	頁岩		剥片		B7a ₄	1.63-3.23	30.230	1.8	2.0	0.2	0.6	細部調整段階の成形剥片か。	
111	メノウ	ウ	剥片		B7a ₄	1.86-3.23	30.259	2.5	3.4	0.5	3.6	横形剥片。先端部と右側縁が鋭利。刃器として利用可能。	
112	頁岩		剥片		B7a ₄	2.23-3.97	30.377	5.8	3.1	1.4	26.6	石刃状剥片。剥離面打面。左側縁と先端一部が鋭利。	
113	頁岩		剥片		B7a ₄	2.27-3.42	30.325	3.5	3.4	0.9	7.6	石刃状剥片。剥離面打面。左側縁先端に刃こぼれあり。	
114	頁岩		剥片		B7a ₄	2.55-3.33	30.243	1.2	0.8	0.2	0.2	細部調整段階の成形剥片。	

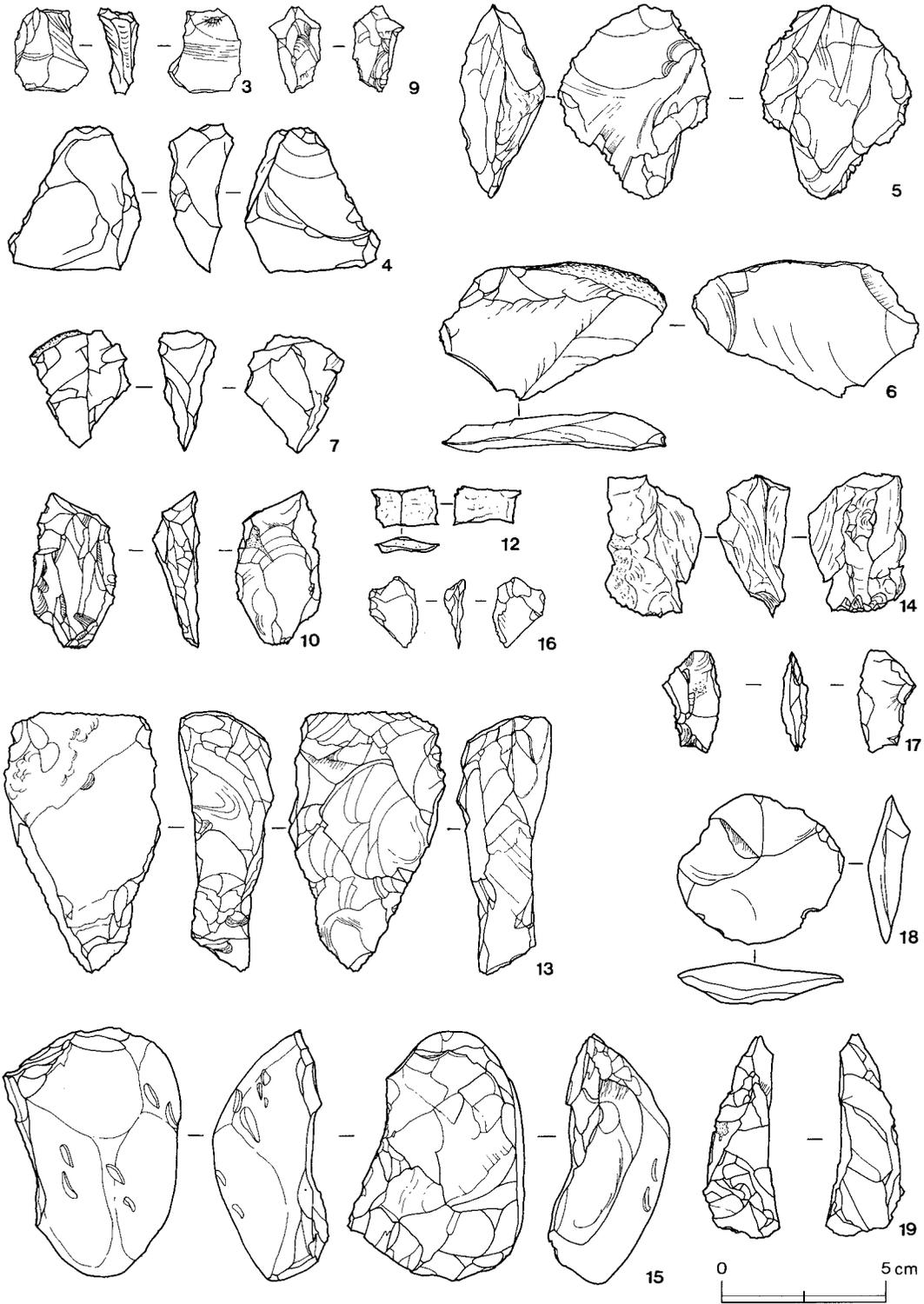
第13表 先土器遺物整理表

番号	石	材	器	種	地点	a(m)-b(m)	標高(m)	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	備	考	
115	石	英	礫	片	B7a ₄	30.7-2.56	30.334	2.6	1.6	0.6	3.1	角礫の破片。		
116	頁	岩	剝	片	B7a ₄	3.10-2.53	30.336	3.2	1.7	0.7	3.2	細部調整段階の整形剥片。		
117	緑	泥片岩	礫		B7a ₄	2.40-4.31	30.334	4.9	2.3	1.0	13.0	加工痕認められない。		
118	砂	岩	礫		B7a ₄	2.49-4.17	30.314	8.6	6.5	3.0	321.5	4点一括出土。接合する。先端が破損。ハンマー使用か。		
119	頁	岩	剝	片	B7a ₄	3.19-4.57	30.260	1.5	2.3	0.4	0.9	細部調整段階の整形剥片。右側縁のみ鋭利。		
120	メ	ノ	ウ	削	器	B7a ₄	3.44-4.86	30.357	3.3	2.4	1.1	6.3	素材は石刃。両縁鋭利で右側縁が刃部。	
121	頁	岩	剝	片	B7a ₄	3.72-4.84	30.052	2.1	1.9	0.3	0.8	細部調整段階の整形剥片。		
122	メ	ノ	ウ	剝	片	B7b ₁	1.19-3.55	30.140	6.2	3.4	2.2	30.9	石核調整剥片。断面三角形。左側縁鋭利で削器に利用か。	
123	安	山	岩	削	器	B7b ₁	1.19-3.73	30.193	4.9	7.0	1.5	44.9	素材は横形剥片。凸刃削器。背部に原面が残る。	
124	メ	ノ	ウ	削	器・ノッチ	B7b ₁	1.36-3.83	30.178	4.0	1.8	0.6	3.4	素材は石刃。上端に深いノッチ。右側縁上位が刃部。	
125	砂	岩	礫		B7b ₁	1.61-3.58	30.149	2.3	1.7	1.3	5.6	小円礫。		
126	メ	ノ	ウ	剝	片	B7b ₁	1.58-3.09	30.168	5.2	4.4	1.5	31.9	石核調整剥片。表面は原面。板状を呈する。	
127	メ	ノ	ウ	剝	片	B7b ₁	2.08-2.75	30.124	2.3	1.2	0.6	1.1	細部調整段階の整形剥片。右側縁が鋭利。	
128	メ	ノ	ウ	剝	片	B7b ₁	2.43-2.66	30.111	3.0	3.5	2.8	18.9	石核調整剥片か。上面は原面。他三面は剥離面。	
129	ホルンフェルス		礫		B7b ₁	2.54-2.94	30.125	3.5	2.4	1.2	12.1	小礫。		
130	メ	ノ	ウ	剝	片	B7b ₁	2.68-3.24	30.138	5.7	5.0	2.0	45.0	石核調整剥片(シャボーン)。掘器 or 鋸歯縁石器に利用か。	
131	メ	ノ	ウ	剝	片	B7b ₁	3.28-4.18	30.185	7.2	3.9	3.0	63.3	石核調整剥片。横断面は扁平な扇状を呈する。	
132	粘	板	岩	石	斧	B7b ₁	3.39-4.57	30.143	7.3	3.9	0.5	19.3	扁平な礫を素材。局部磨製石斧。該期外の遺物か。	
133	メ	ノ	ウ	石	核	B7b ₁	3.72-5.16	30.030	12.8	9.3	7.1	1.07kg	原面を多く残す石核。No130, 131と接合。	
134	メ	ノ	ウ	剝	片	B7b ₁	3.77-5.17	30.094	4.4	2.5	1.1	10.2	表面は右側縁の一部を除き原面。	
135	メ	ノ	ウ	剝	片	B7b ₁	2.87-1.70	30.159	1.4	1.2	0.6	1.0	細部調整段階の整形剥片。	
136	メ	ノ	ウ	剝	片	B7b ₂	2.96-1.80	30.145	4.1	2.8	1.1	12.7	剥離面打面の剥片。右側縁上半が鋭利。	
137	砂	岩	チョッパー		B7b ₂	4.92-3.19	30.263	12.8	10.2	6.1	756.4	素材は大きな礫。両縁各1打の大きな刃づけ。		
138	石	英	礫	片	B7b ₂	——	——	4.6	4.3	1.6	37.2	先端に加工痕あり。石器として利用か。		
139	チャート		削	器	B7b ₂	2.02-3.62	30.190	2.4	1.3	0.4	1.0	素材は成形剥片か。左側縁に刃づけ。直刃削器。		
140	メ	ノ	ウ	剝	片	B7b ₂	4.79-4.10	30.095	8.5	8.2	1.9	209.3	石核調整剥片。(シャボーン) 板状の剥片。表面は原面。	
141	頁	岩	石	核	B7b ₂	3.82-1.33	30.070	11.2	8.8	5.9	520.9	剥離面打面石核。単打面。		
142	頁	岩	削	器	B7b ₂	2.75-1.79	30.154	3.4	3.1	0.4	3.9	素材は剥片。先端が鋭利。		
143	メ	ノ	ウ	剝	片	B7b ₂	4.58-3.00	30.167	2.9	2.4	0.8	5.5	断面四辺形の剥片。刃づけは認められない。	
144	メ	ノ	ウ	削	器	B7b ₂	5.07-3.33	30.085	5.8	3.3	0.7	14.3	素材は石刃状剥片。左側縁が刃部。	
145	メ	ノ	ウ	削	器	B7b ₂	4.77-3.70	30.175	7.0	3.4	2.0	33.1	素材は剥離面打面の剥片。右側縁が刃部。凹刃削器。	
146	砂	岩	礫		B7b ₂	5.12-3.88	30.137	4.9	3.1	0.8	15.8	形状三角形の板状の礫。		
147	メ	ノ	ウ	石	核	B7b ₂	1.74-2.25	30.053	4.7	7.7	2.8	70.8	剥離面打面石核。単打面。	
148	メ	ノ	ウ	剝	片	B7b ₂	1.93-2.23	30.027	4.0	4.2	1.2	21.6	断面四辺形の剥片。先端部は鋭利で直刃状を呈する。	
149	メ	ノ	ウ	剝	片	B7b ₂	2.78-3.46	30.069	3.0	1.8	0.3	2.0	横形剥片か。表面はほぼ原面。右側縁と先端が鋭利。	
150	ホルンフェルス		礫		B7b ₂	3.32-2.67	30.068	6.6	2.7	1.3	40.0	細長い扁平な小礫。搬入石材。		
151	砂	岩	焼	礫	B7b ₂	2.85-4.70	30.095	9.0	4.4	1.9	89.8	細長い扁平な礫の縦長半礫片。火熱を受けもろい。		
152	砂	岩	礫		B7b ₂	2.80-4.41	30.069	8.2	4.9	3.3	176.7	形状の整わない礫。各部使用痕なし。搬入石材。		
153	メ	ノ	ウ	剝	片	B7b ₂	2.98-4.41	30.117	2.4	2.8	0.6	3.6	横形剥片。先端部は鋭利で、凹刃状を呈する。	
154	メ	ノ	ウ	剝	片	B7b ₂	2.92-4.28	30.165	2.1	3.3	0.5	3.4	横形剥片。板状の剥片で、鋭利な部分はない。	
155	砂	岩	礫		B7b ₂	2.90-4.12	30.093	5.9	4.9	2.6	87.4	円礫。使用痕は認められない。搬入石材。		
156	メ	ノ	ウ	剝	片	B7b ₂	3.33-4.04	30.085	4.0	2.4	2.4	13.4	先端は鋭利で浅いノッチ状を呈する。	
157	砂	岩	礫	片	B7b ₂	3.32-3.90	30.094	7.0	5.0	1.5	65.4	円礫の破片。No158と接合して完形となる。敲打痕なし。		
158	砂	岩	礫	片	B7b ₂	3.28-5.15	30.068	9.2	5.2	3.8	258.2	No157と接合。搬入石材。		
159	砂	岩	礫		B7b ₂	3.32-4.79	30.077	6.8	2.7	2.4	53.0	細長の自然礫。搬入石材。		
160	粘	板	岩	礫	片	B7b ₂	3.58-4.75	30.092	6.6	4.2	2.0	59.9	細長い扁平な礫の破片。No151と同質。	
161	メ	ノ	ウ	剝	片	B7b ₂	3.87-5.05	30.155	2.7	1.4	0.6	1.9	細部調整段階の剥片。右側縁が鋭利で凹刃状を呈する。	
162	メ	ノ	ウ	ノ	ツチ	B7c ₂	2.60-1.98	30.148	5.4	3.7	1.2	21.9	素材は石刃状剥片。左側縁中位にノッチ。クラクトン型。	
163	砂	岩	礫	片	B7c ₂	3.44-0.71	30.129	3.6	2.5	0.6	6.6	扁平な小礫の破片。		
164	メ	ノ	ウ	石	核	B7c ₂	0.47-3.55	30.100	4.7	5.4	3.8	81.3	剥離面打面石核。単打面。上面に一部原面が残る。	
165	メ	ノ	ウ	石	核	B7c ₂	0.69-3.40	30.108	5.8	4.6	3.6	78.1	剥離面打面石核。2打面。	
166	メ	ノ	ウ	剝	片	B7c ₂	0.88-3.48	30.175	3.5	2.8	1.2	10.8	両側縁のやや鋭利な断面三角形の剥片。	
167	メ	ノ	ウ	ノ	ツチ	B7c ₂	1.16-3.22	30.118	2.8	3.5	0.7	5.8	素材は横形剥片。右側縁の鋭利部に2つのノッチ。	
168	安	山	岩	剝	片	B7c ₂	1.51-2.64	30.108	4.1	3.6	0.9	14.4	表面に原面を残す。	
169	メ	ノ	ウ	剝	片	B7c ₂	1.76-2.27	30.124	5.3	3.2	1.7	17.4	剥離面不明瞭な剥片。	
170	頁	岩	削	器	B7f ₁	——	——	4.4	3.4	0.7	11.2	素材は横形剥片。左側縁に刃部。凹刃削器。		
171	安	山	岩	背つき	石器	S1119	——	——	5.6	2.1	0.5	7.7	素材は石刃。左側縁に背つぷし加工。ナイフ形石器。	

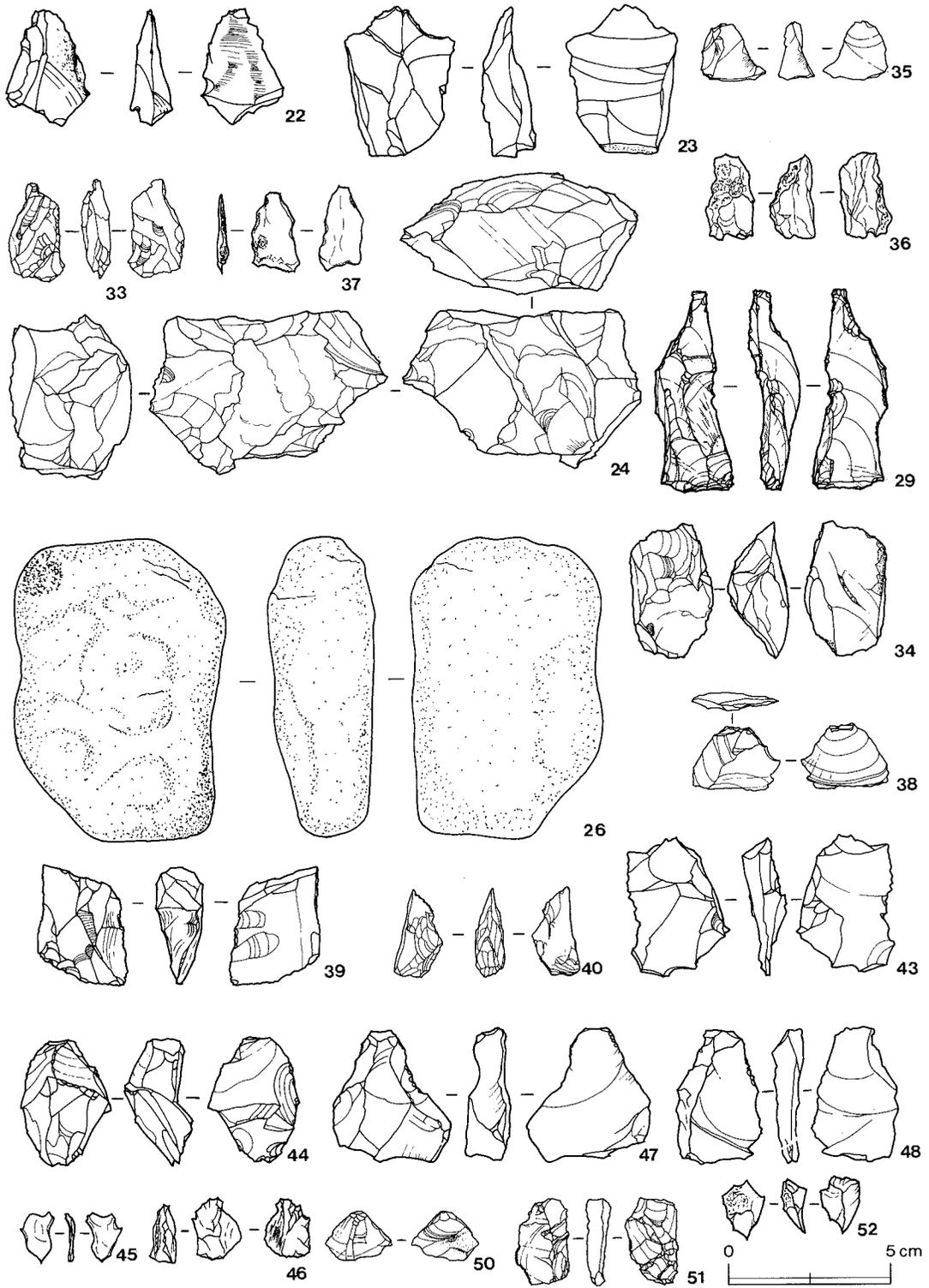
第14表 先土器遺物整理表

番号	石	材	器	種	地点	a(m)-b(m)	標高(m)	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	備	考
172	チャート	掻	器	器	SI131	----	----	4.6	3.0	0.9	10.8	先端に刃づけ。左側縁に刃部。削器としても利用か。	
173	チャート	削	器	器	SI131	----	----	2.5	3.1	0.8	7.6	素材は横形剥片。先端は凸刃、左側縁は直刃。	
174	頁岩	剥	片	片	SI131	----	----	2.2	3.1	0.9	5.9	原面を多く残すやや厚形の横形剥片。上縁に細部調整。	
175	石英	剥	片	片	SI131	----	----	2.6	2.2	0.5	2.7	薄い板状の横形剥片。左側縁鋭利で鋸歯状を呈する。	
176	チャート	剥	片	片	SI131	----	----	1.6	1.6	0.2	0.5	細部調整段階の成形剥片。左側縁が鋭利。	
177	メノウ	ウ	剥	片	SI138	----	----	4.6	5.0	1.2	30.4	石核調整剥片(シャポー)。左側縁に剥離痕。削器利用か。	
178	メノウ	ウ	削	器	SI138	----	----	3.0	3.4	0.5	6.8	横形剥片を半載。左側縁が鋭利。削器として利用。	
179	頁岩	岩	剥	片	SI138	----	----	1.5	3.6	0.4	1.4	横形の剥片。左下縁に使用痕らしき刃こぼれあり。	
180	頁岩	岩	剥	片	SI147	----	----	3.7	3.7	0.6	7.8	周縁に原面が残る横形剥片。打面再生剥片か。	
181	頁岩	岩	掻	器	SI155	----	----	4.7	4.2	1.0	14.4	素材は石核調整剥片。先端が刃部。エンドスクレイパー	
182	チャート	石	掻	器	SI155	----	----	2.1	1.3	0.6	1.6	基部欠損品。左側縁面細部調整。(該期外か)	
183	メノウ	ウ	石	核	SI165	----	----	3.7	3.5	1.1	12.1	素材は厚形の石刃状剥片。エンドスクレイパー。	
184	メノウ	ウ	石	核	SD10	----	----	7.8	3.9	2.6	81.2	剥離面打面石核。単打面。原面が多く残る。	
185	チャート	剥	片	片	SD10	----	----	4.5	4.2	1.5	31.6	石核調整剥片か。	
186	メノウ	ウ	石	核	SD10	----	----	5.2	4.4	1.6	28.4	剥離面打面石核の残核か。打面数は上下の2打面。	
187	メノウ	ウ	削	器	SD10	----	----	4.6	4.7	2.2	29.5	素材は厚形の石刃状剥片。先端が刃部。直刃削器。	
188	メノウ	ウ	削	器	SD10	----	----	4.8	3.7	1.3	13.9	石刃状剥片。右側縁が鋭利。断面三角形。	
189	頁岩	岩	削	器	SD10	----	----	4.1	2.9	1.3	13.5	石刃状剥片。右側縁が鋭利。削器や彫器として使用可能。	
190	頁岩	岩	削	器	SD10	----	----	5.7	3.4	0.9	14.6	素材は横形剥片。右側縁に背つぶしあり。直刃削器。	
191	頁岩	岩	削	器	SD10	----	----	2.9	3.9	0.8	6.5	厚形の横形剥片。上面は平坦。右側縁上端が尖る。	
192	頁岩	岩	削	器	SD10	----	----	2.6	2.6	0.6	2.9	薄形の横形剥片。上面に一部背つぶし。両縁鋭利。	
193	チャート	剥	片	片	SD10	----	----	2.3	3.2	0.6	4.9	横形剥片。左側縁に使用痕あり。削器に利用か。	
194	砂岩	岩	礫	片	SD11	----	----	8.6	5.8	2.6	212.1	扁平な細長い礫で、上位欠損。ハンマー使用该期外か。	
195	砂岩	岩	礫	片	SD11	----	----	7.6	6.6	2.9	215.7	同上。	
196	頁岩	岩	背つき	石器	SD11	----	----	3.2	2.0	0.6	4.2	左側縁背つぶし。下半欠損。ナイフ形石器。(該期外か)	
197	メノウ	ウ	削	器	SD11	----	----	5.2	2.6	1.1	8.8	素材は石刃状剥片。右側縁の鋭利部を利用。凹刃削器。	
198	石英	剥	片	片	SD11	----	----	4.8	3.3	1.5	30.0	厚形の横形剥片。鋭利部なし。上面平坦。	
199	メノウ	ウ	掻	器	SD11	----	----	4.1	4.1	0.9	16.5	素材は横形剥片か。右側縁と先端に刃づけ。	
200	メノウ	ウ	削	器	SD11	----	----	2.0	3.0	3.7	2.3	石刃状剥片。右側縁が鋭利。直刃削器として利用可能。	
201	メノウ	ウ	削	器	SD11	----	----	3.9	2.2	0.7	5.1	素材は石刃状剥片。両縁鋭利だが右側縁を刃部。凸刃。	
202	メノウ	ウ	削	器	SD11	----	----	4.3	2.8	1.6	17.2	素材は石刃。右側縁に刃づけ。直刃削器。断面三角形。	
203	メノウ	ウ	削	器	SD11	----	----	4.1	2.7	0.5	4.3	剥離面打面の薄形の石刃状剥片。両縁が鋭利。	
204	チャート	剥	片	片	SD11	----	----	3.4	4.3	1.2	21.9	石核調整剥片か。	
205	頁岩	岩	剥	片	SD11	----	----	4.6	4.3	1.4	32.0	表面は原面に覆われた厚形の剥片。	
206	メノウ	ウ	削	器	SD11	----	----	4.5	3.6	1.3	14.6	素材は石刃状剥片。右側縁と先端が鋭利。。上面は原面。	
207	石英	剥	片	片	SD11	----	----	3.0	2.0	0.5	2.6	横形剥片の小片。上縁はノッチ状を呈し、鋭利。	
208	頁岩	岩	剥	片	SD11	----	----	2.4	3.3	0.9	5.6	剥離面打面のやや厚形の剥片。裏面に高いバルブあり。	
209	メノウ	ウ	剥	片	SD11	----	----	3.2	1.9	0.7	3.8	左側縁は原面、石核調整剥片か。	
210	石英	剥	片	片	SD11	----	----	2.3	3.5	0.9	5.6	やや厚形の横形剥片。	
211	チャート	掻	器	器	SD11	----	----	2.8	3.8	0.9	11.2	素材は厚形の横形剥片。先端と右側縁に刃づけ。	
212	メノウ	ウ	削	器	SD11	----	----	3.5	1.5	0.8	5.6	断面四辺形の厚形の剥片。下縁と右側縁が刃部。	
213	メノウ	ウ	削	器	SD11	----	----	3.0	2.1	1.0	5.5	断面三角形。厚形の石刃状剥片。	
214	頁岩	岩	剥	片	SD11	----	----	4.5	2.3	0.7	6.5	石刃状剥片。剥離面打面。右側縁が凸刃状を呈す。	
215	メノウ	ウ	削	器	SD11	----	----	2.0	3.3	0.9	4.6	剥離面打面のやや厚形の横形剥片。鋭利部はない。	
216	頁岩	岩	掻	器	SD11	----	----	4.0	3.7	0.9	13.8	素材は石核調整剥片(シャポー)。表裏細部調整。	
217	頁岩	岩	剥	片	SD11	----	----	4.4	3.3	0.9	13.8	剥離面打面の横形剥片。上面に原面を残す。	
218	黒曜石	石	剥	片	SD11	----	----	3.9	3.3	1.1	13.5	側面に原面を残す厚形の剥片。(該期外か)	
219	メノウ	ウ	削	器	SD11	----	----	3.5	2.7	0.8	8.1	剥離面打面の厚形の剥片。右側面に原面を残す。直刃。	
220	メノウ	ウ	ノッ	チ	SD11	----	----	4.4	3.3	0.9	13.9	厚形の剥片。左側縁中央にノッチ。下縁は凹刃に利用か。	
221	頁岩	岩	剥	片	SD11	----	----	3.9	5.9	1.3	11.5	剥離面打面の剥片。	
222	チャート	掻	器	器	SD11	----	----	3.6	3.5	1.6	17.4	素材は剥離面打面の基部の厚い剥片。先端に刃づけ。	
223	黒曜石	石	削	器	SD11	----	----	2.7	1.6	0.5	2.0	素材は細石刃。両縁が刃部。復刃削器。(該期外か)	
224	メノウ	ウ	削	器	SD11	----	----	2.3	1.5	0.8	2.5	小片の削に厚味のある剥片。	
225	チャート	剥	片	片	SD11	----	----	3.6	1.5	0.8	3.1	断面三角形の石刃状剥片。先端が錐状突起。	
226	メノウ	ウ	削	器	SD11	----	----	2.6	1.7	0.5	2.3	打面を原面とする小剥片。表面に稜あり。	
227	メノウ	ウ	削	器	表探	----	----	4.9	3.0	1.6	20.9	剥離面打面の厚形剥片。	

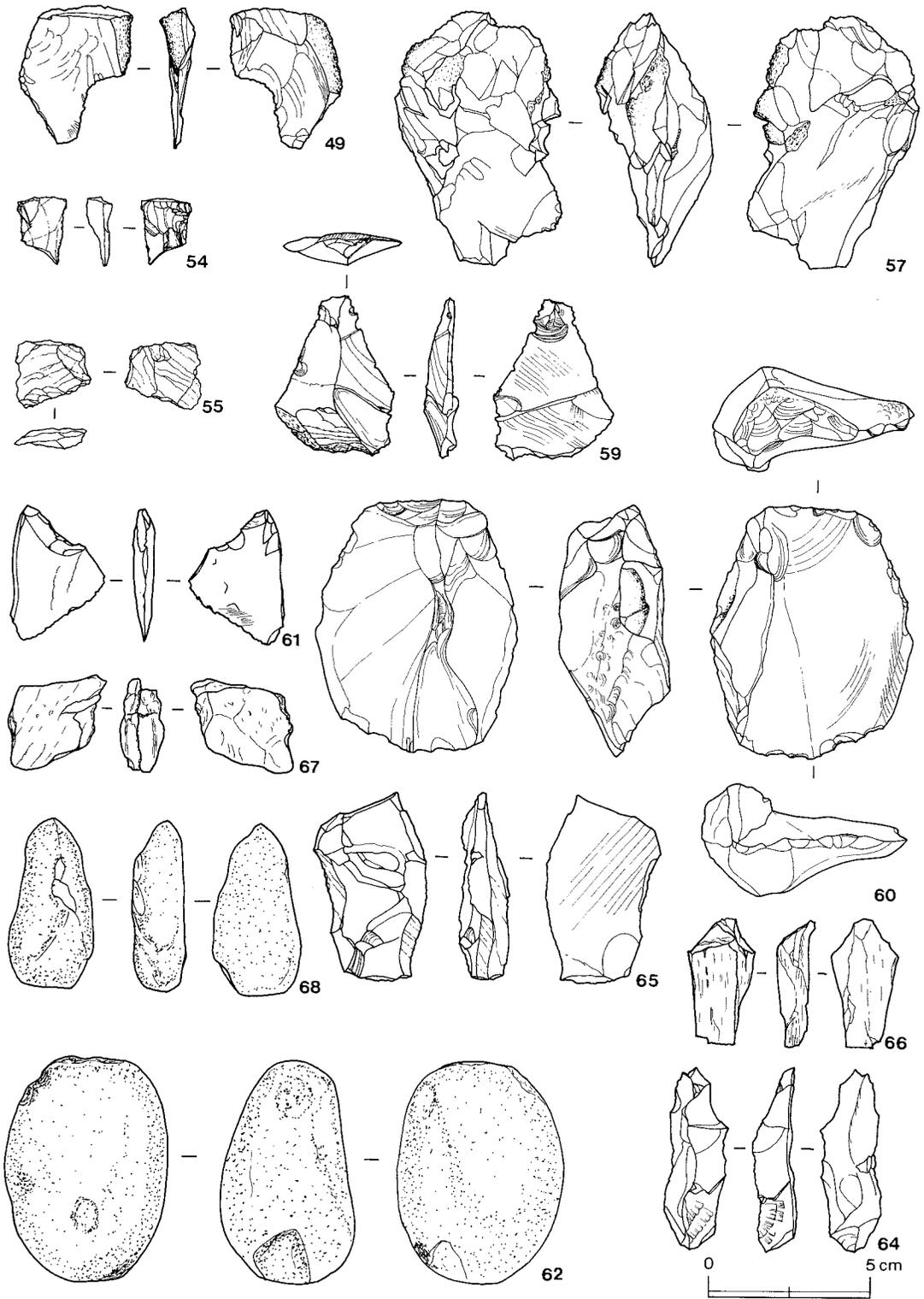
*172番から227番の資料は、写真図版を参照。



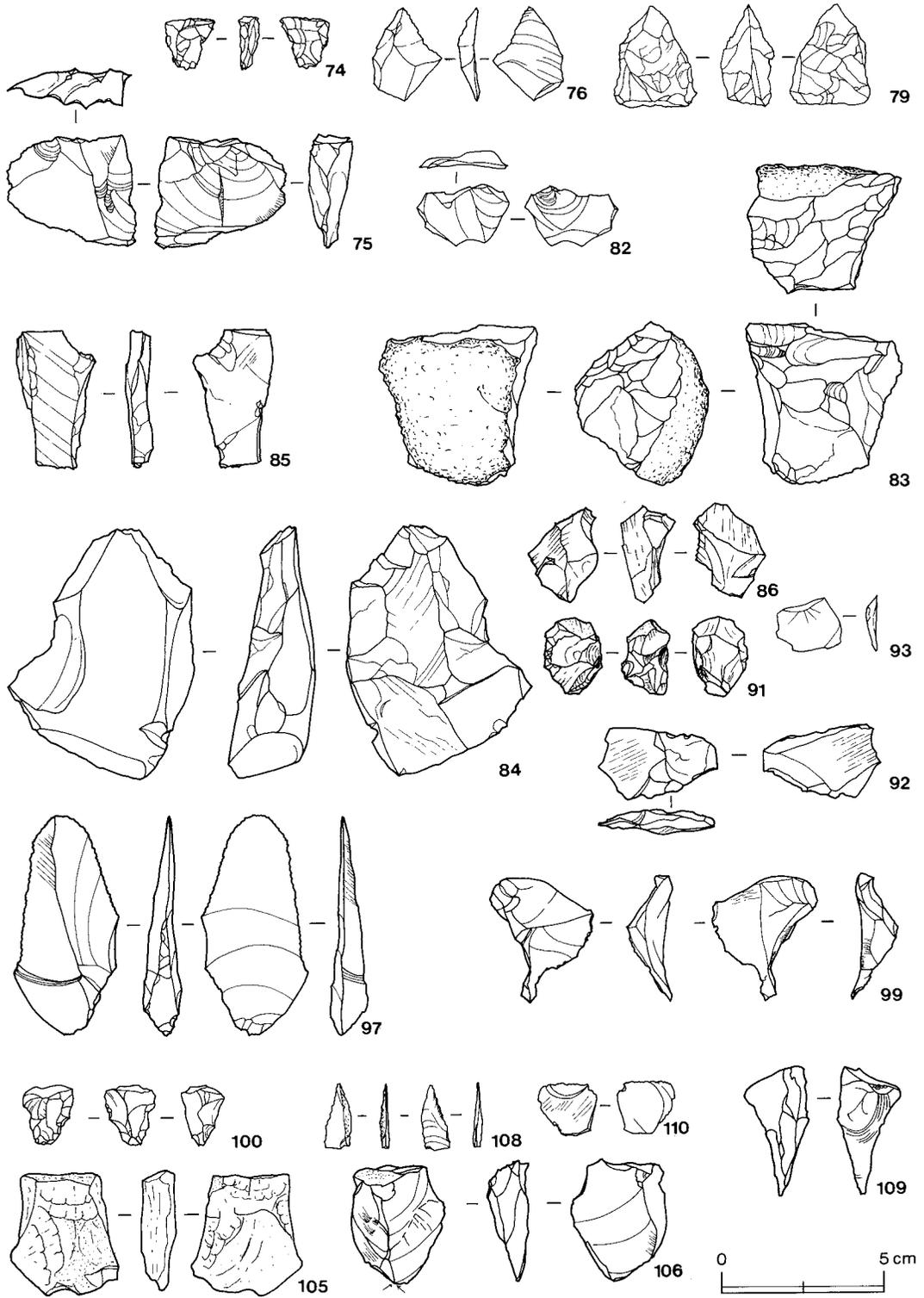
第58図 石器実測図(1)



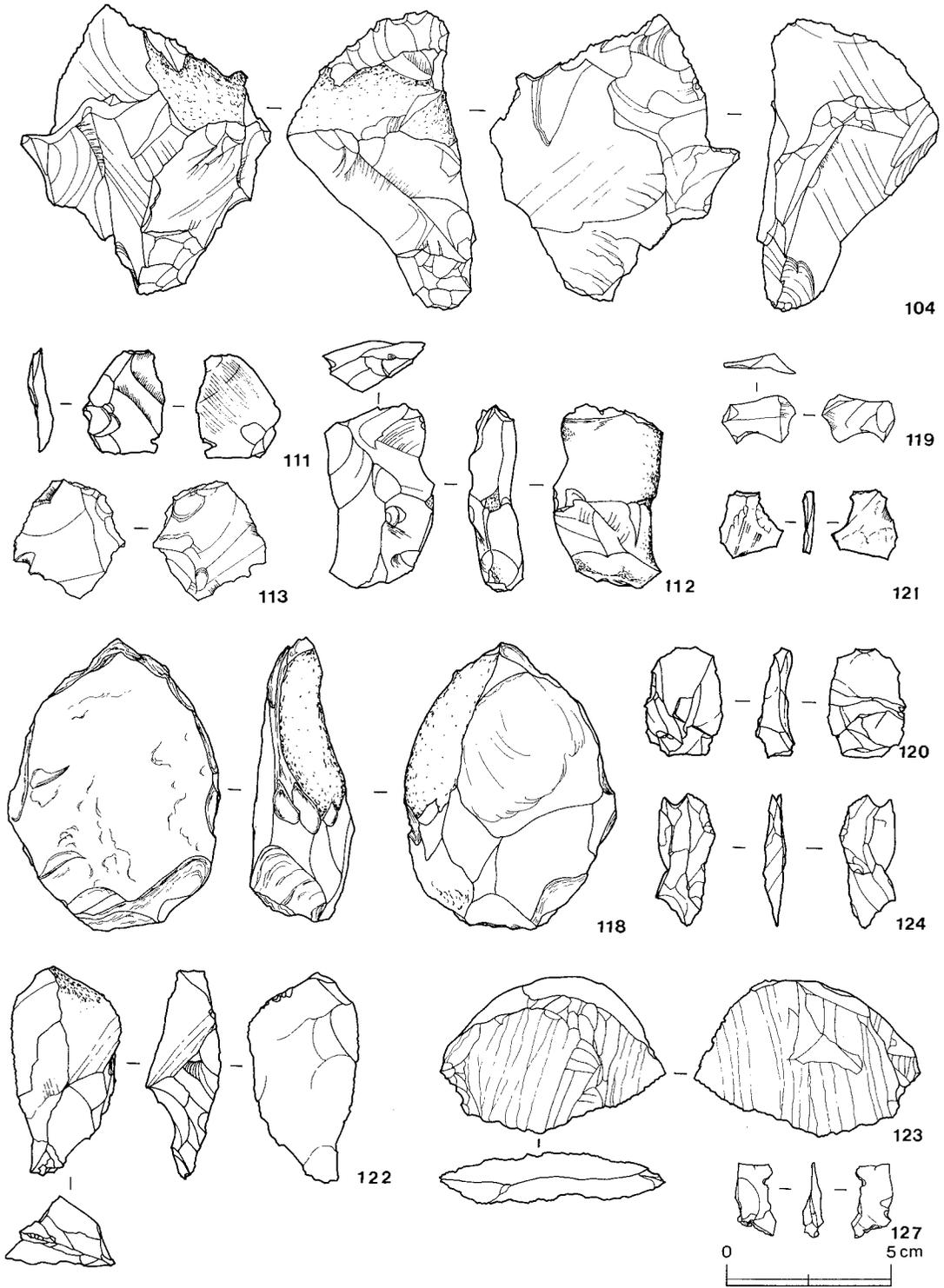
第59図 石器実測図(2)



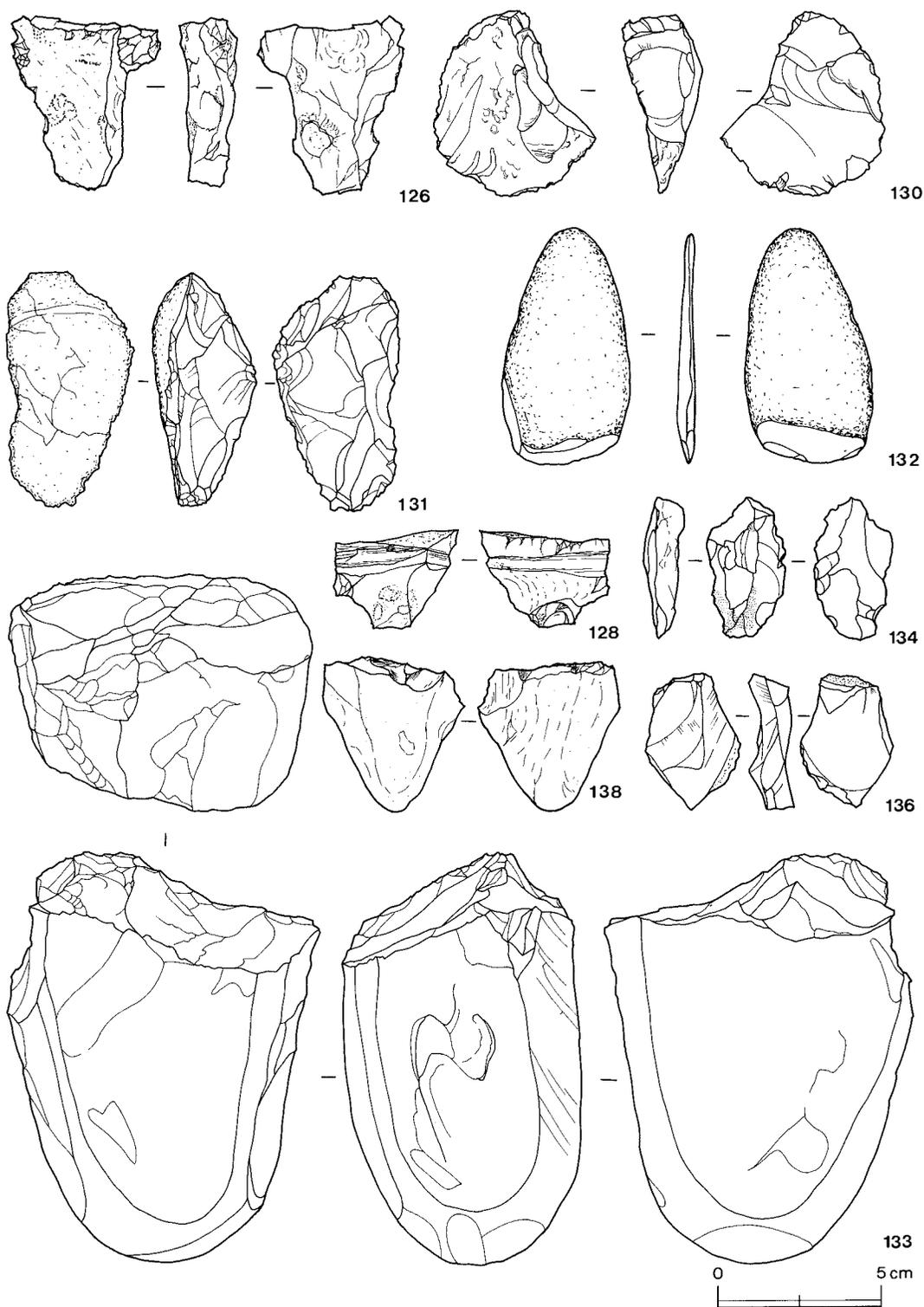
第60図 石器実測図(3)



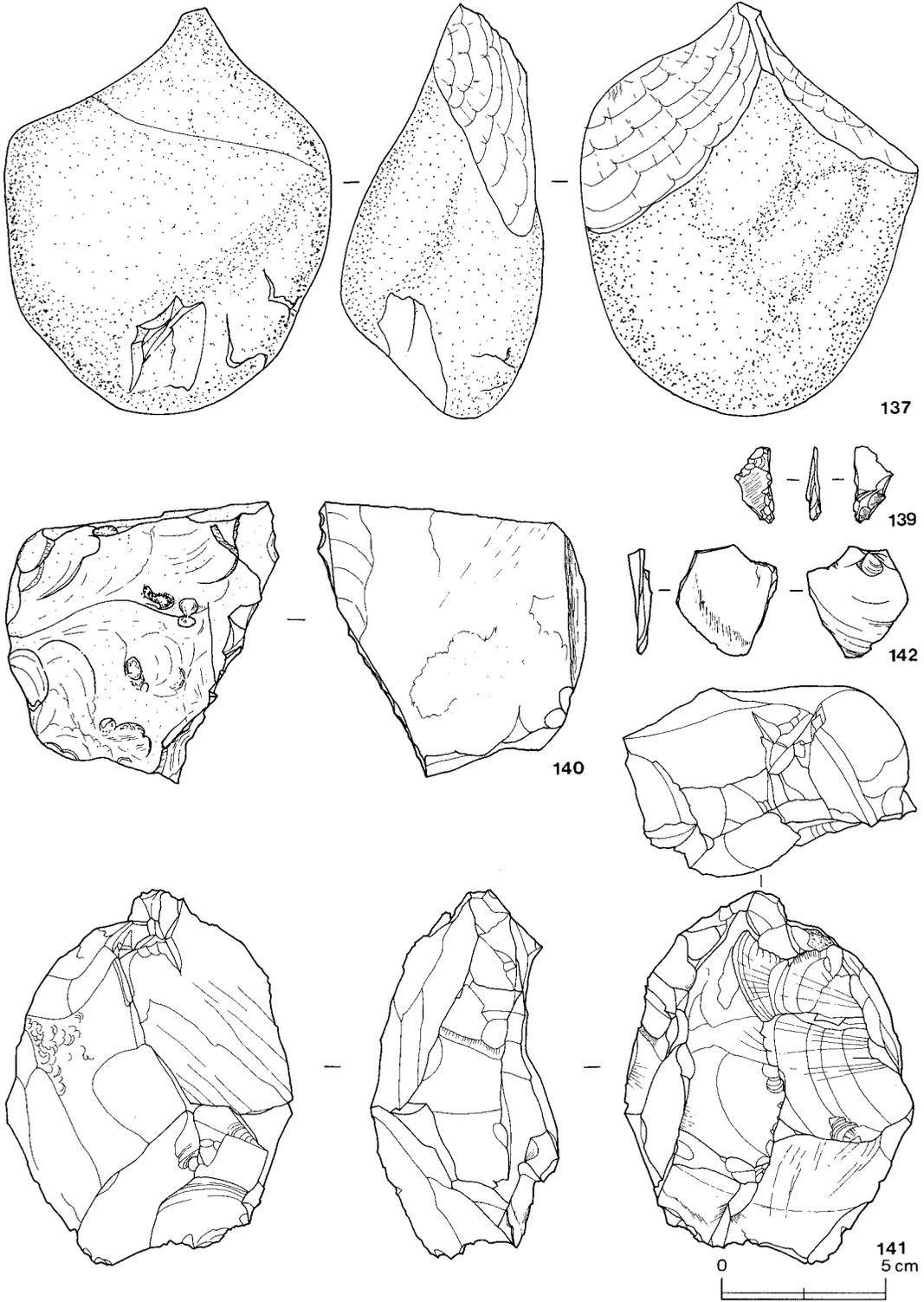
第61図 石器実測図(4)



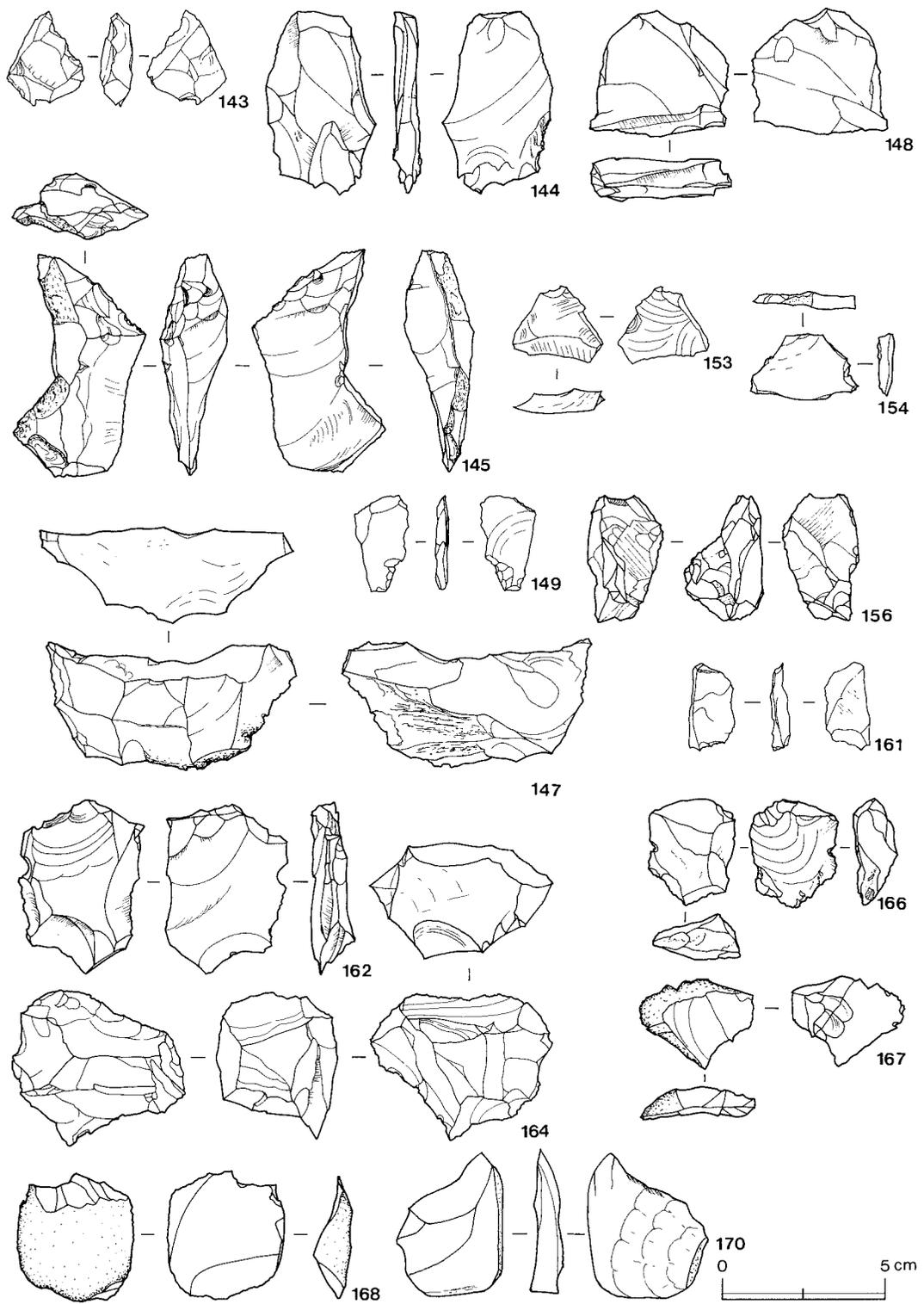
第62図 石器実測図(5)



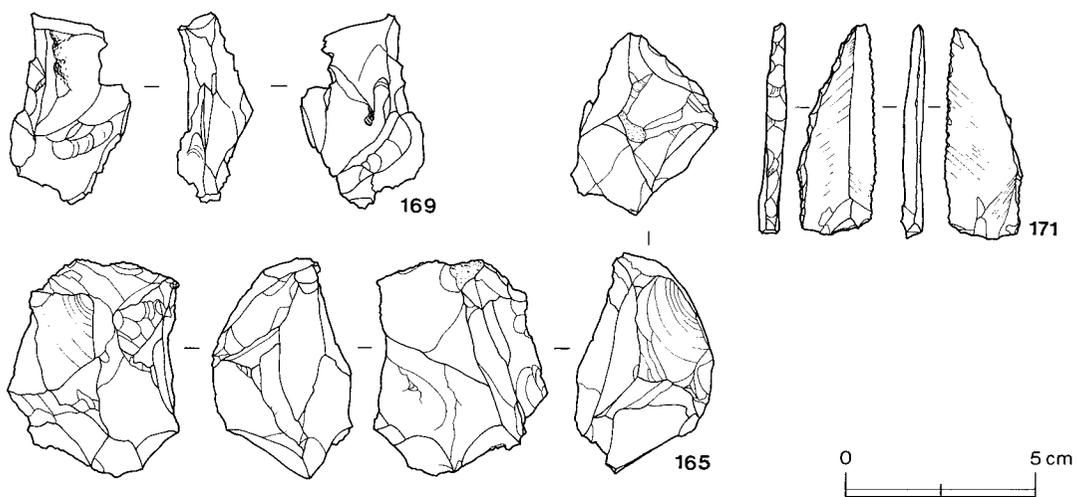
第63図 石器実測図(6)



第64図 石器実測図(7)



第65図 石器実測図(8)



第66図 石器実測図(9)

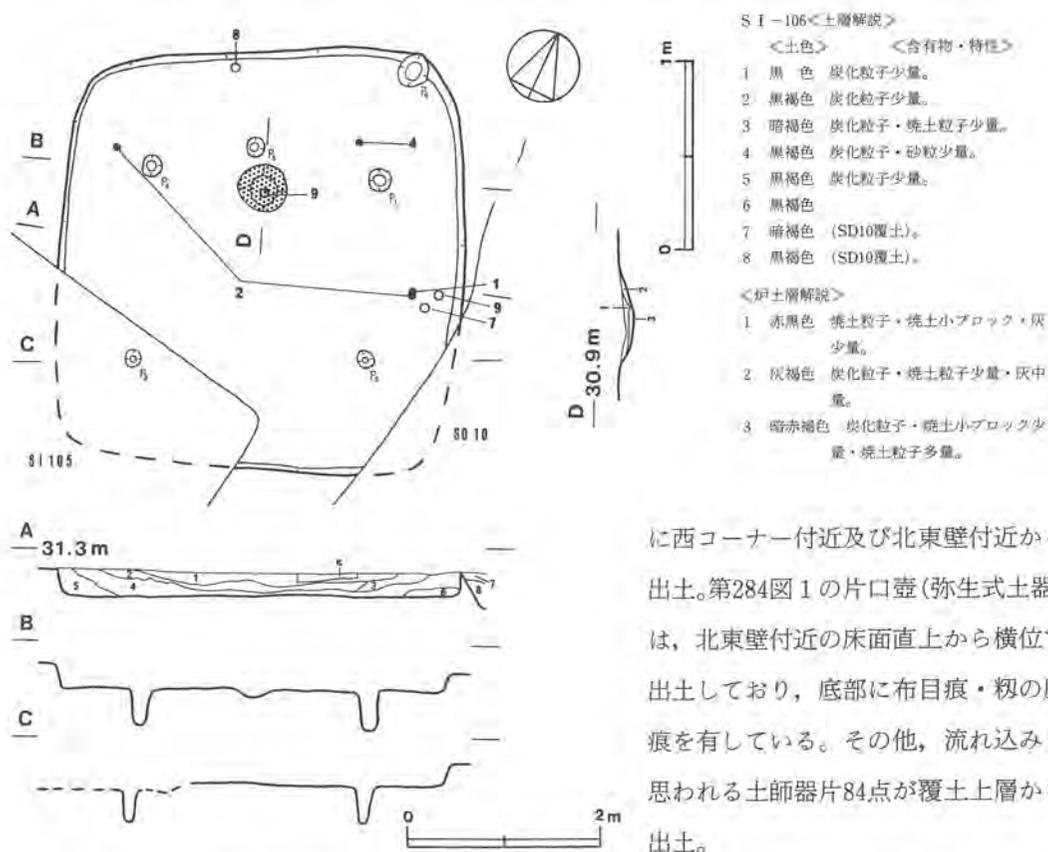
2 竪穴住居跡

(1) 弥生時代

第106号住居跡 (第67図)

位置 C5h₈区。**重複関係** 本跡<SD-10<SI-105。**平面形** 隅丸方形。**規模** 4.59×4.27m。**主軸方向** N-27°-W。**壁** 外傾。壁高18~29cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。壁近くまで床面全体が硬く踏み固められている。**ピット** 6か所。P₁からP₄(径20~25cm, 深さ39~45cm)は支柱穴。いずれも底部は硬く敲き締められている。P₃(径18cm, 深さ36cm)は、第105号住居跡との重複部分にあり、第105号住居跡の貼床下から検出。P₅(径22cm, 深さ6cm)・P₆(径35cm, 深さ52cm)は、本跡に伴うと思われるが、性格は不明。**貯蔵穴** 無。**炉** 床面中央のやや北寄りに付設された地床炉。平面形は、長径54cm, 短径50cmのほぼ円形。炉床は、床面を約10cmほど掘り窪めて構築され、ロームがレンガ状に赤変硬化。炉内には、焼土・焼土ブロック・灰が層状に堆積しており、炉石と思われる長さ33.4cm, 最大径8.2cmの棒状の礫が出土。**覆土** 自然堆積。

遺物 弥生式土器片45点, 土製品 (紡錘車4点), 石製品 (炉石1点)。本跡に伴う遺物は、主



第67図 第106号住居跡実測図

に西コーナー付近及び北東壁付近から出土。第284図1の片口壺(弥生式土器)は、北東壁付近の床面直上から横位で出土しており、底部に布目痕・粃の圧痕を有している。その他、流れ込みと思われる土師器片84点が覆土上層から出土。

所見 本跡は、遺構・出土遺物の特

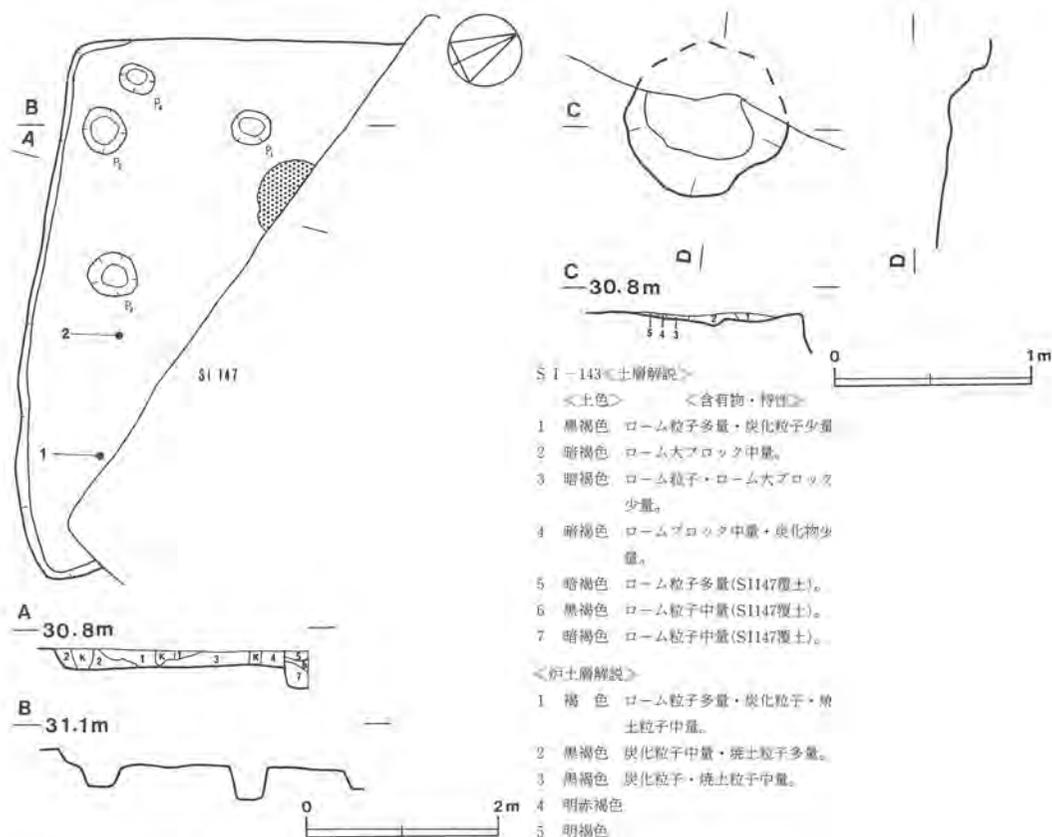
徴から弥生時代後期に比定される住居跡と思われる。

第143号住居跡 (第68図)

位置 B6g₂区。重複関係 本跡<SI-147。平面形 (隅丸方形)。規模 5.74×(3.44)m。主軸方向 N-54°-W。壁 外傾。壁高17cm。壁溝 無。床 平坦。床面中央部は、極めて硬く踏み固められている。ピット 4か所。径40~52cm、深さ20~37cm。第147号住居跡によって住居の3分の2近くが削り取られており、これらのピットのいずれが主柱穴となるかは不明。貯蔵穴 無。炉 床面中央から北西寄りに付設された地床炉。第147号住居跡によって半分近くが削除。平面形は、径87cmのほぼ円形と推定される。炉内には、焼土及び焼土ブロックが堆積。覆土 自然堆積と考えられる。

遺物 弥生式土器片52点。本跡に伴う遺物は、南西壁付近を中心に弥生式土器が出土。第285図2の壺(弥生式土器)は、南西壁付近の床面直上から潰れた状態で出土。その他、流れ込みと思われる土師器片90点、石器1点が覆土から出土。

所見 本跡は、遺物から弥生時代後期に比定される住居跡と思われる。



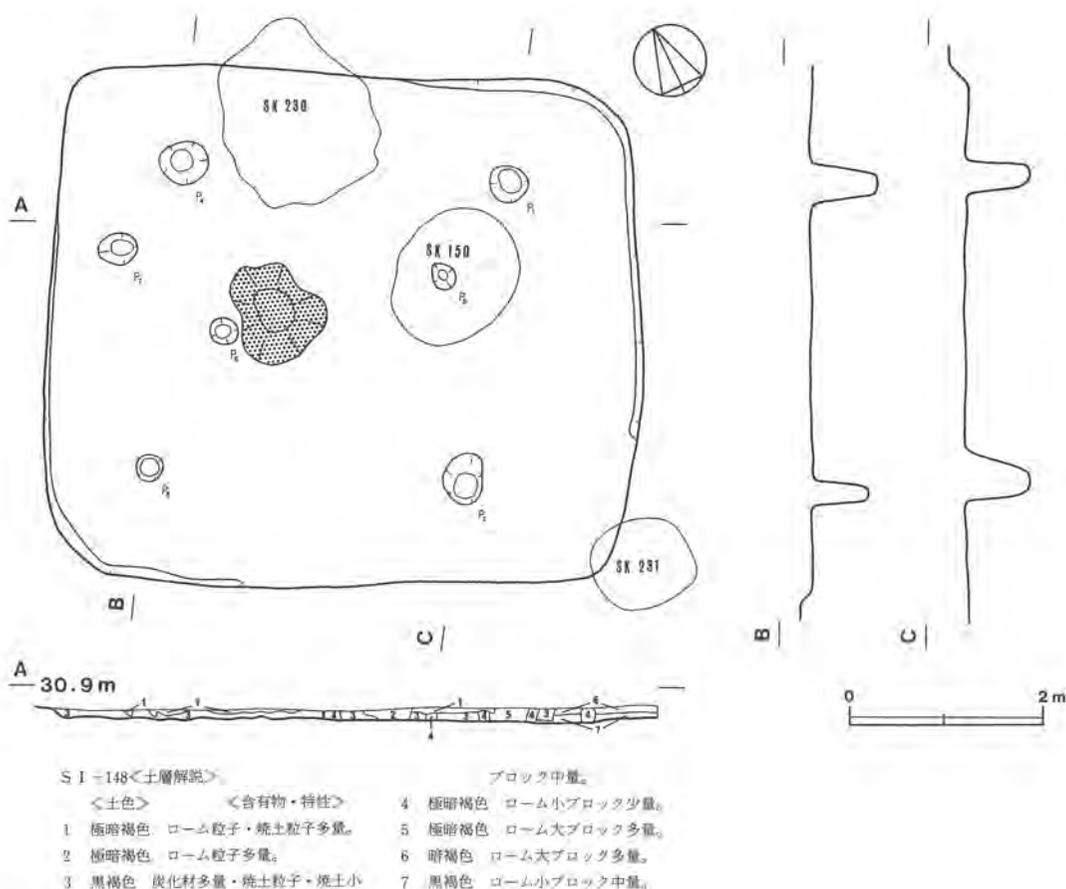
第68図 第143号住居跡・炉跡実測図

第148号住居跡 (第69図)

位置 B6g₅区。**重複関係** 本跡<SI-152, 本跡<SI-136<SI-135, SK-150, 230, 231。平面形 隅丸長方形。規模 6.34×5.52m。主軸方向 N-65°-W。壁 外傾。壁高13~21cm。壁溝 無。床 平坦。壁近くまで極めて硬く固められている。ピット 7か所。P₁からP₄(径29~56cm, 深さ64~70cm)は支柱穴。P₅~P₇は, 性格不明。貯蔵穴 無。炉 床面中央からやや西寄りに位置する地床炉。平面形は長径112cm, 短径90cmの不整楕円形。炉内には焼土が堆積し, 炉床は焼けて赤色硬化。覆土 覆土のかなりの部分が他の遺構によって攪乱されているものの, 残存部は自然堆積と判断される。

遺物 弥生式土器片235点, 土製品 (紡錘車 1点)。本跡に伴う遺物は, 床面東部に多く出土。本跡は焼失家屋と考えられ, 床面から多くの炭化材が出土。その他, 流れ込みと思われる土師器片116点, 鉄製品 (不明 1点), 石器 2点, 古銭 1点が覆土から出土。

所見 本跡は, 遺物から弥生時代後期に比定される住居跡と思われ, また, 炭化材の出土等から焼失家屋と考えられる。

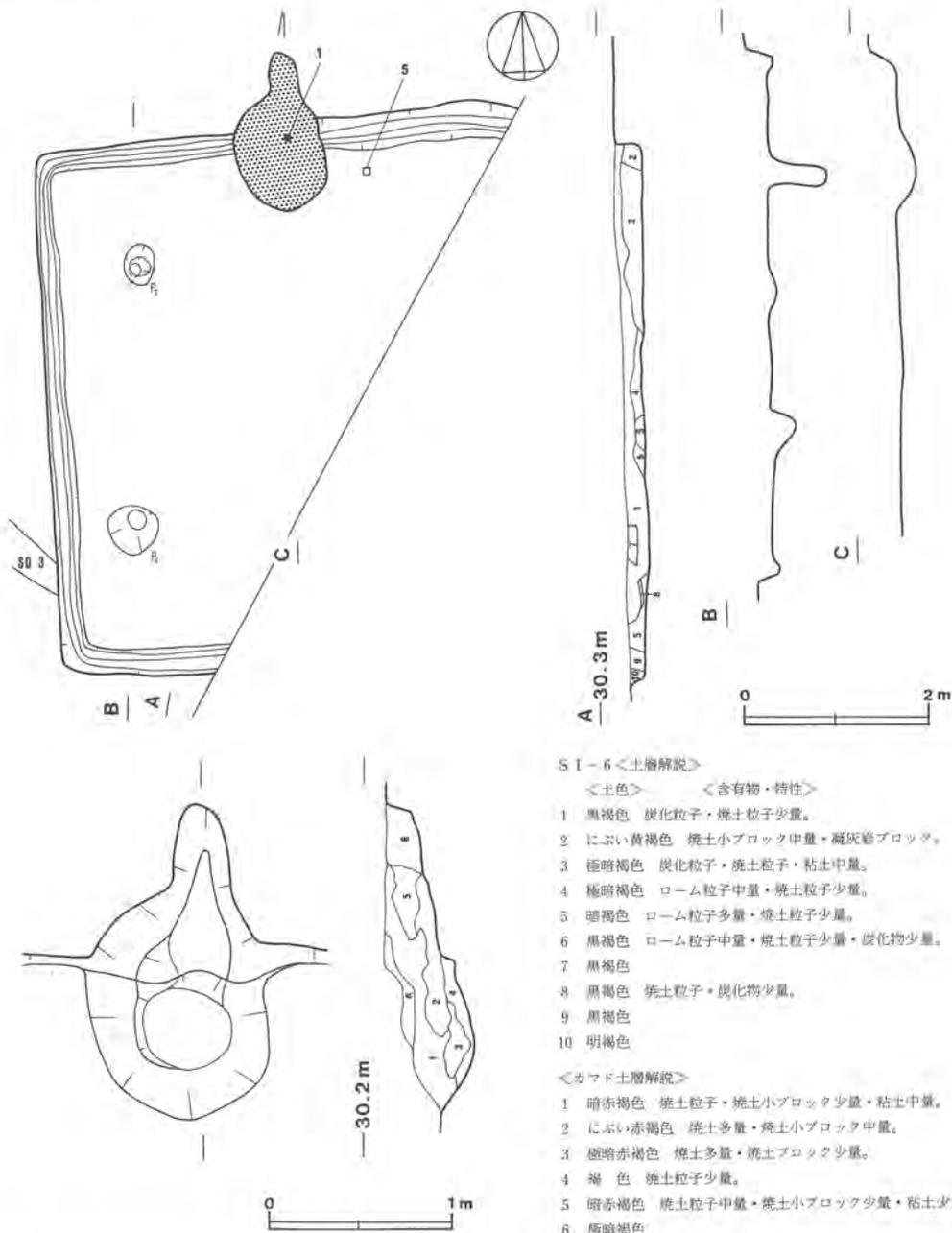


第69図 第148号住居跡実測図

(2) 古墳時代

第6号住居跡 (第70図)

位置 H2b₉区。重複関係 SD-3 (新旧関係不明)。平面形 方形と推定。規模 5.92×(5.20)m。主軸方向 N-4°-W。壁 外傾。壁高14~16cm。壁溝 全周。幅20~38cm, 深さ10cm。床 平坦。床面中央部からカマドにかけて硬く締まる。ピット 2か所。共に支柱穴。P₁ (径56cm,

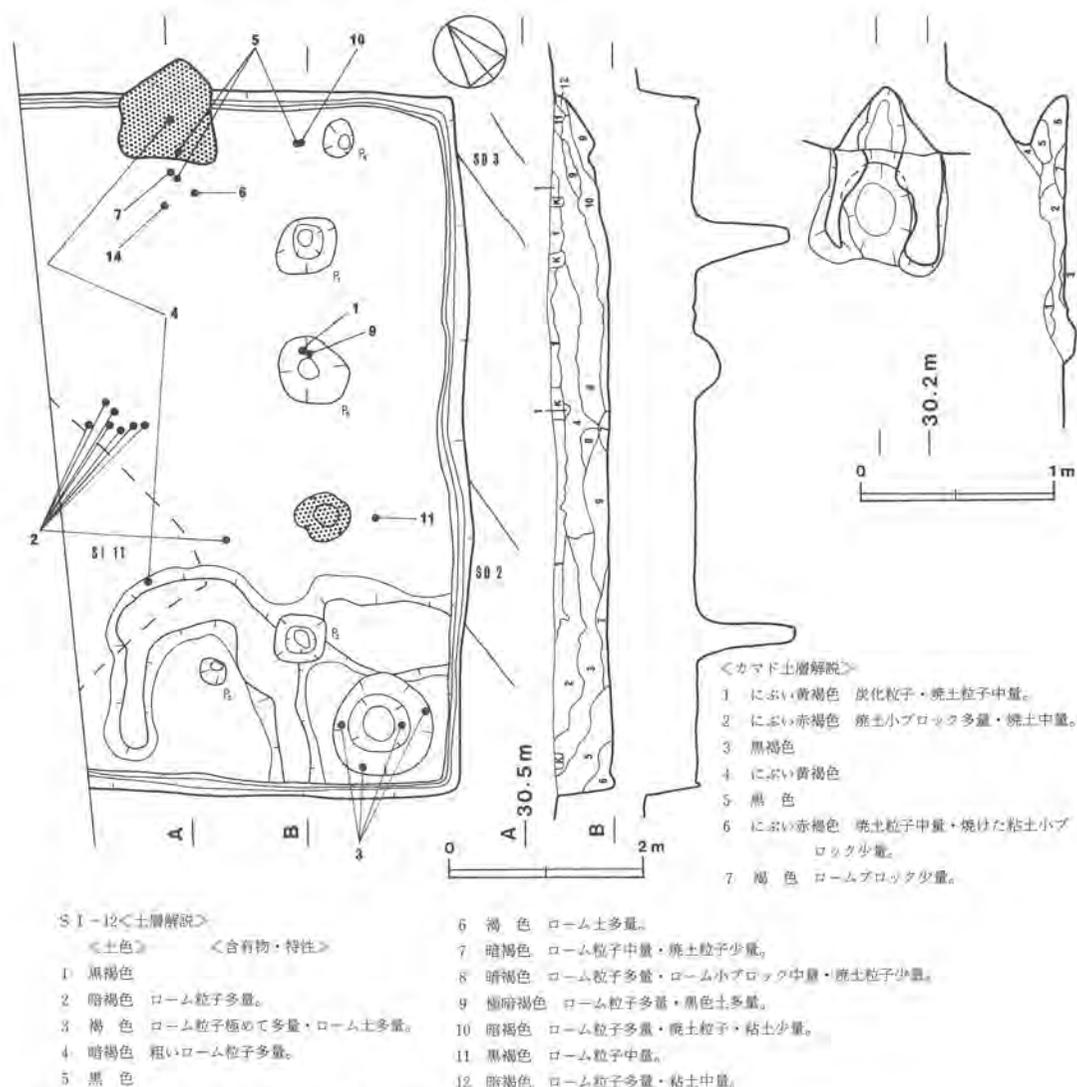


第70図 第6号住居跡・カマド実測図

深さ33cm), P₂(径44cm, 深さ65cm)。貯蔵穴 住居跡の南西部はエリア外のため不明。カマド 北壁中央部と思われる位置に付設され, 住居の壁面から57cm掘り込んで構築。トレンチャーによって攪乱を受け, 右側の袖部が僅かに残存している。袖部は粘土・砂で構築され, 右袖の補強材に用いられたと思われる凝灰岩が出土。煙道部は火床から緩やかな角度で立ち上がり, 住居の外側に延びている。火床は床面から17cm程掘り窪められる。カマド内には, 焼土粒子・焼土ブロックが堆積。袖の内壁は良く焼けて赤色に硬化。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(鉢1, 坏2, 細片22点), 須恵器(蓋1, 細片4点), 石製品(砥石2点, 支脚1点), 礫1点, 鉄製品(釘2点), 鉄滓1点。遺物は, 主にカマド内やカマド周辺から出土。

所見 本跡は, 遺構・遺物の特徴から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第71図 第12号住居跡・カマド実測図

第12号住居跡 (第71図)

位置 G2e₇区。**重複関係** 本跡<SI-11。SD-2, 3 (新旧関係不明)。**平面形** 方形と推定。**規模** 7.38×(4.53)m。**主軸方向** N-38°-E。**壁** 垂直。壁高54~60cm。**壁溝** 幅10cm, 深さ7~8cmでV字状に掘り込まれ, 全周。所々羽目板状のものを嵌め込んだと思われる小さなピット状の掘り込みがみられる。**床** 平坦。全体的に極めて硬い。**ピット** 5か所。P₁(径78cm, 深さ98cm)・P₂(径54cm, 深さ106cm)が支柱穴。ロート状のしっかりとした掘り方。P₃(径25cm, 深さ50cm)は, 出入り口部に伴う梯子ピット。P₄・P₅は, 性格不明。**貯蔵穴** 南西コーナー部に検出。平面形は径110×105cmの円形を呈し, 深さ70cm。**炉** P₂とP₃の中間に位置する。平面形は長径61cm, 短径53cmの不整楕円形を呈し, 4cm程掘り窪められた地床炉。炉床は加熱によってロームがレンガ状に硬化。炉内には焼土・炭化粒子・灰などが層状に堆積。**カマド** 北壁中央部と思われる位置にあり, 粘土・砂によって構築された両袖部が残存。燃焼部奥壁は住居壁面とほぼ一致し, 火床部も床面と殆ど同一レベル。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり, 住居の外に延びている。覆土下層には焼土が層状に堆積。袖の内壁は火熱を受けて赤色硬化。**覆土** 自然堆積。

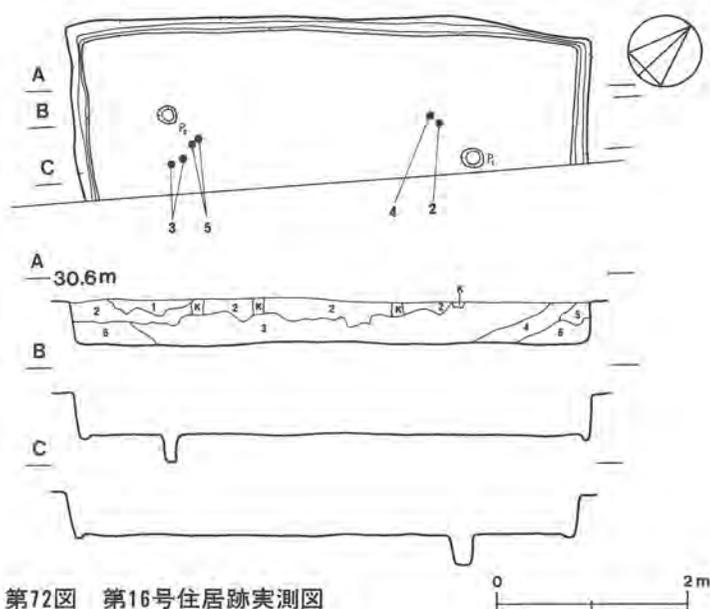
遺物 土師器(甕3, 甌2, 高坏4, 埴6, 坏1, 細片857点), 須恵器片6点, 石製模造品(双孔円板1点)が出土。遺物は, 主に床面中央部及びカマド内, 貯蔵穴内などから出土。カマド内からは, 第287図4・5の甌, 6・7の高坏が潰れた状態で出土。貯蔵穴内からは, 第286図1の甕が斜位で出土。

所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。土手状の入り口部施設を有する。炉・カマドを併存する住居跡は, 当遺跡では本跡1軒のみである。

第16号住居跡 (第72図)

位置 G3d₄区。**重複関係** 無。**平面形** 方形と推定。**規模** 5.48×(1.90)m。**壁** 垂直。壁高40~45cm。**壁溝** 幅8~12cm, 深さ5cm前後で全周するものと推定。**床** 平坦。北側では硬く, そ

- S1-16<土層解説>
 <土色> <含有物・特性>
 1 黒褐色 焼土粒子中量・粘土多量。
 2 黒色 ローム粒子中量。
 3 暗褐色 ローム粒子多量。
 4 暗褐色 ローム粒子多量。
 5 黒褐色 ローム粒子多量。
 6 褐色 ローム粒子極めて多量。



第72図 第16号住居跡実測図

の外は比較的軟らかい。ピット 2か所で、いずれも支柱穴。径22~26cm, 深さ30~32cm。覆土自然堆積。

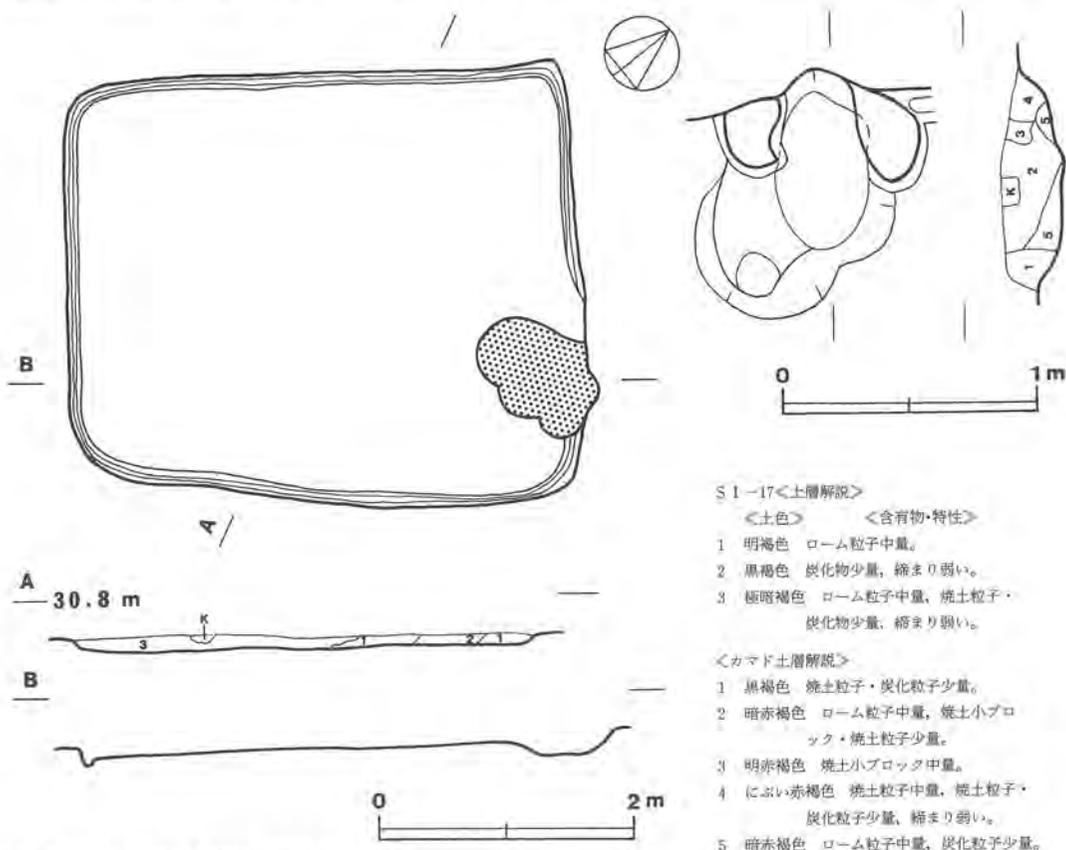
遺物 土師器(甕1, 埴2, 坏3, 細片103点), 石製品(砥石1点)。遺物は、主に、支柱穴の周囲から出土。第288図2の埴は逆位で、4の坏は正位で、北部床面から出土。

所見 住居跡の北西部を調査しただけであり、主軸方向や貯蔵穴, 炉・カマドの存在は不明である。本跡は、遺物から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。

第17号住居跡 (第73図)

位置 G3b₃区。重複関係 無。平面形 隅丸長方形。規模 4.20×3.45m。主軸方向 N-34°-E。壁 垂直。壁高6~9cm。壁溝 幅5~7cm, 深さ4cm前後で全周。床 平坦。中央部付近が硬い。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 東コーナー付近に付設。壁面を5cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面を10cm程掘り窪め、焼き締まりは弱い。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕1, 甑1, 坏1, 細片78点), 陶器片1点。遺物はカマド周辺に集中。陶器片



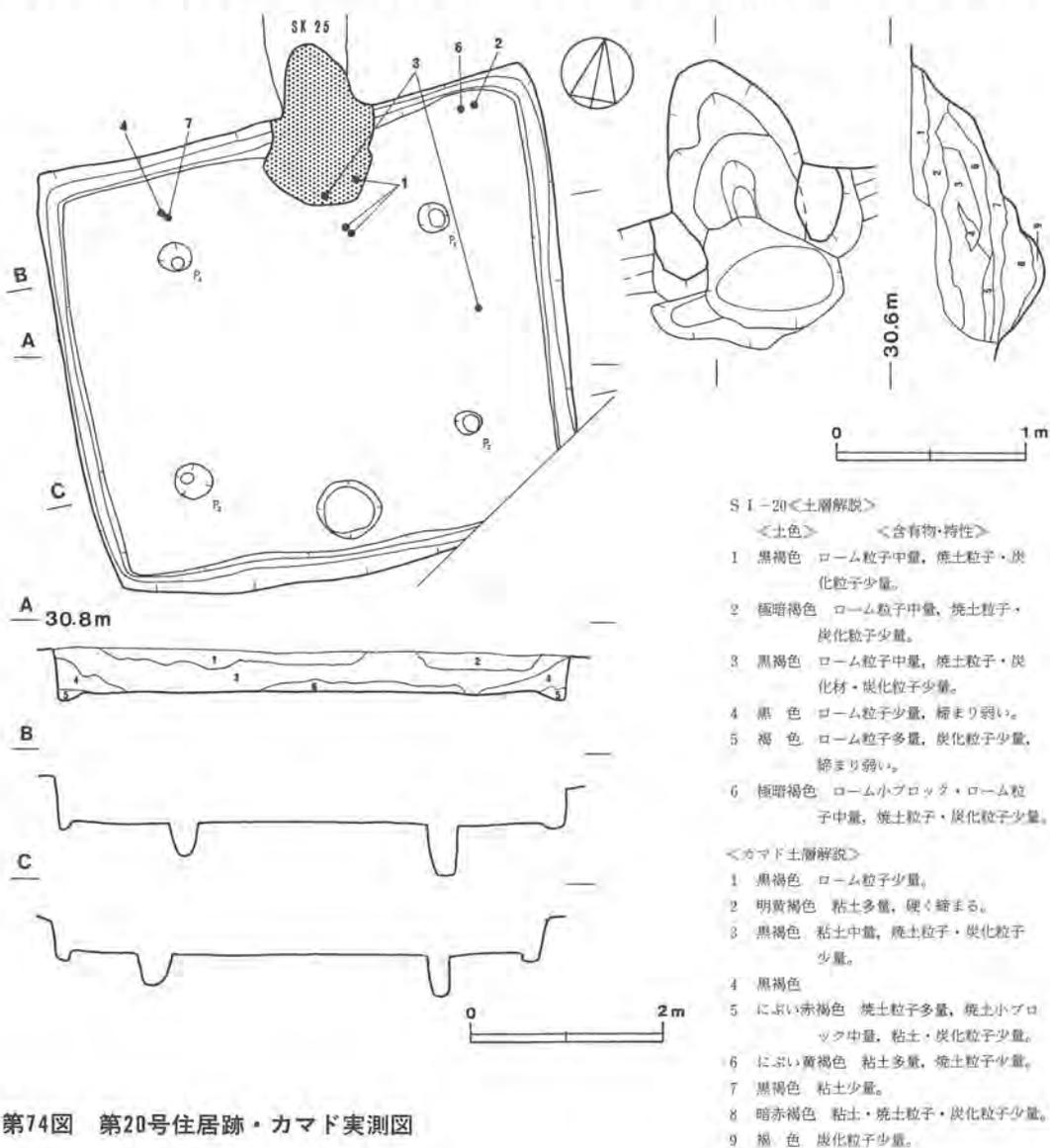
第73図 第17号住居跡・カマド実測図

は本跡に伴うものかどうかは不明。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第20号住居跡（第74図）

位置 G3a₅区。重複関係 本跡<SK-25。平面形 長方形。規模 5.49×4.80m。主軸方向 N-26°-W。壁 外傾。壁高38~48cm。壁溝 幅8~16cm、深さ10cm前後で全周。床 平坦。全体的に極めて硬い。ピット 4か所。P₁~P₄(径30~40cm、深さ35~58cm)はすべて支柱穴。貯蔵穴 南壁中央部に付設。径70×60cm、深さ20cmの円形。カマド 北壁中央部を80cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面を20cm程掘り窪め、ロームが焼けて赤変硬化している。煙道部は火床



第74図 第20号住居跡・カマド実測図

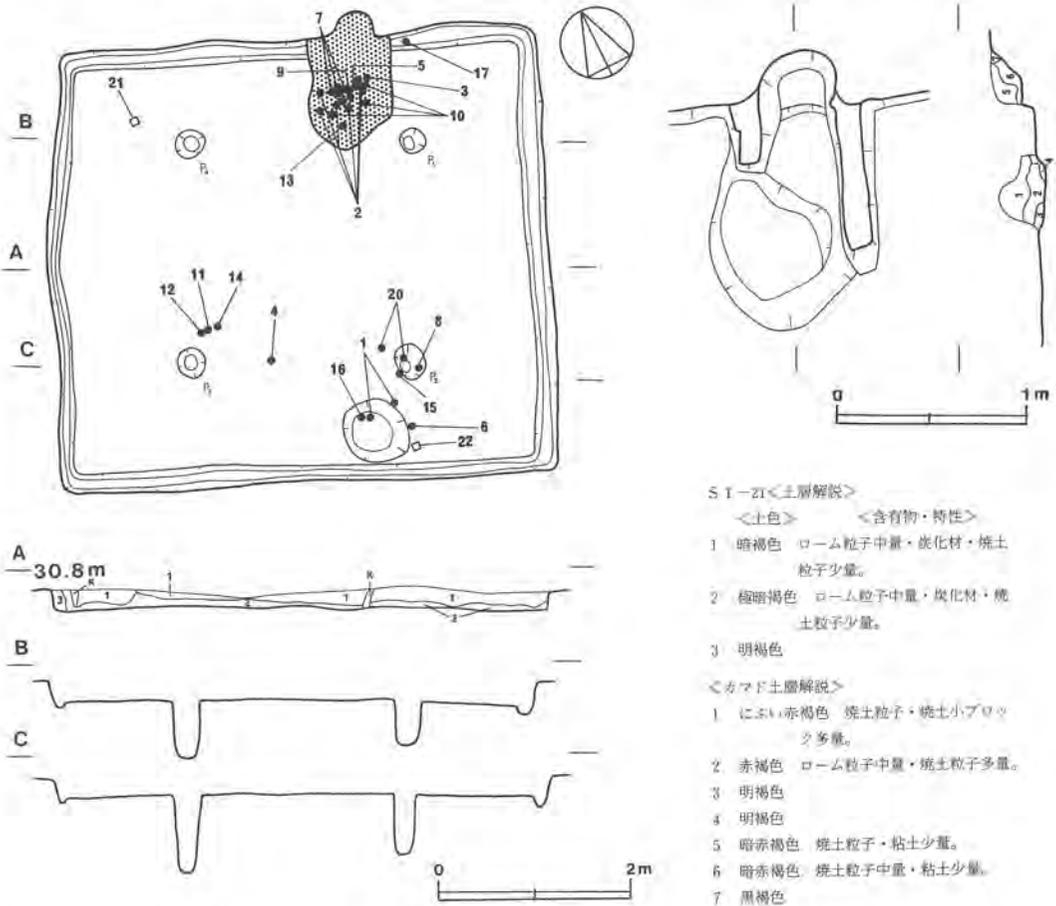
から緩やかに立ち上がり、住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕4, 高坏2, 埴1, 坏2, 細片827点), 須恵器片8点, 陶器片1点, 鉄製品1点, 石製模造品(双孔円板2点, 剣形品2点)。遺物はカマド周辺に集中。第290図3の甕がカマド焚口部の底面から, 6の埴が北東コーナー付近の床面から正位の状態出土。須恵器は坏の底部片や口縁部片が覆土から出土。その他, 流れ込みによる縄文式土器片1点が覆土から出土。

所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第21号住居跡 (第75図)

位置 F31₄区。重複関係 無。平面形 長方形。規模 5.27×4.75m。主軸方向 N-23°-E。壁 垂直。壁高5~24cm。壁溝 幅15~20cm, 深さ5~15cmで全周。床 小さな凹凸がみられるものの概ね平坦。床面中央部では極めて硬い。ピット 4か所。全て支柱穴であり, 底部は締まる。径29~37cm, 深さ48~84cm。貯蔵穴 南壁中央部東寄りに確認され, 径69cmの円形を呈し,



第75図 第21号住居跡・カマド実測図

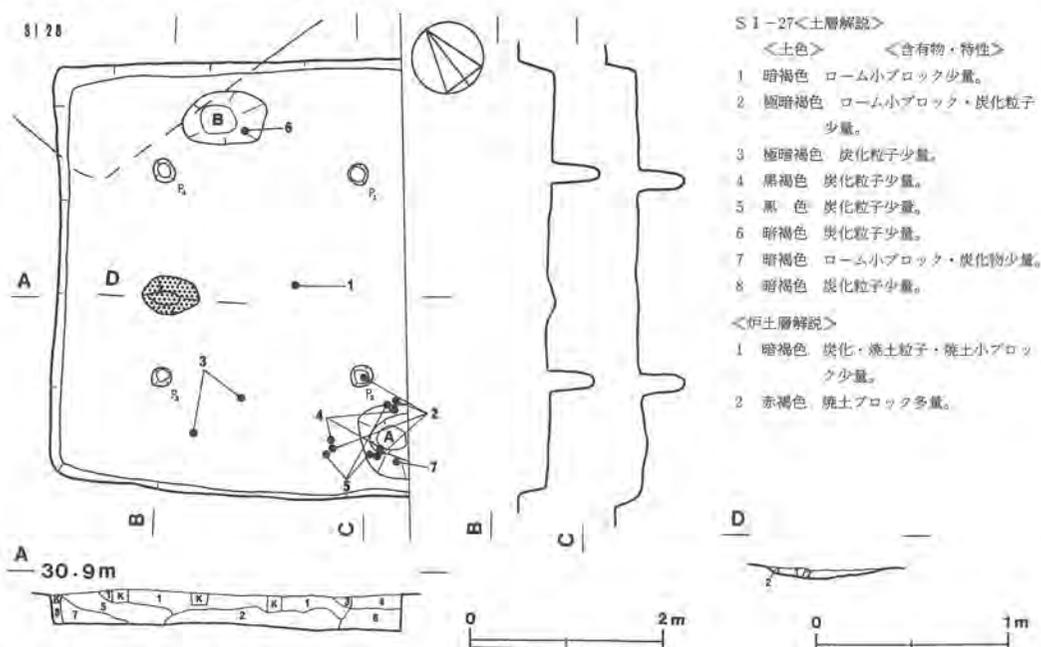
深さ50cm。カマド 北壁中央部やや東寄りに付設され、粘土・砂で構築された両袖部が残存。燃焼部は、住居壁面より内側にある。煙道部までは明確に検出されなかった。カマド内には、焼土・焼土ブロックが多量に堆積。覆土 自然堆積。

遺物 土師器（甕3，壺1，高坏4，埴4，坏8，細片417点），石製模造品（双孔円板1点）。遺物は、カマド内及び床面南東部分を中心に出土。第291図5の高坏と9の埴は重なってカマド内から斜位で出土。覆土下層から炭化材が出土。

所見 本跡は、遺構や出土遺物の特徴から古墳時代後期に比定される。覆土下層から多量の炭化材が出土している状態から判断し、本跡は焼失家屋の可能性がある。

第27号住居跡（第76図）

位置 F3i7区。重複関係 本跡<SI-28。平面形 方形と推定。規模 4.70×(3.65)m。主軸方向 N-51°-W。壁 外傾。壁高28~39cm。壁溝 無。床 平坦。床面中央部は硬く締まる。ピット 4か所。径21~28cm，深さ49~52cm。掘り方は円筒形。貯蔵穴 2か所。貯蔵穴Aは、南東コーナー付近に検出。平面形は径82cmの円形を呈するものと思われ、深さは42cm。覆土は自然堆積。貯蔵穴Bは、北東壁北寄りに検出。平面形は径89×57cmの楕円形を呈し、深さ30cm。覆土は、自然堆積。炉 P₃とP₄の中間に位置し、床面を5~6cm掘り窪めた地床炉。平面形は、長径63cm×短径43cmの楕円形状。炉内には、焼土及び焼土ブロックを含む赤褐色土が堆積。炉床はよく焼け赤色硬化。覆土 自然堆積。



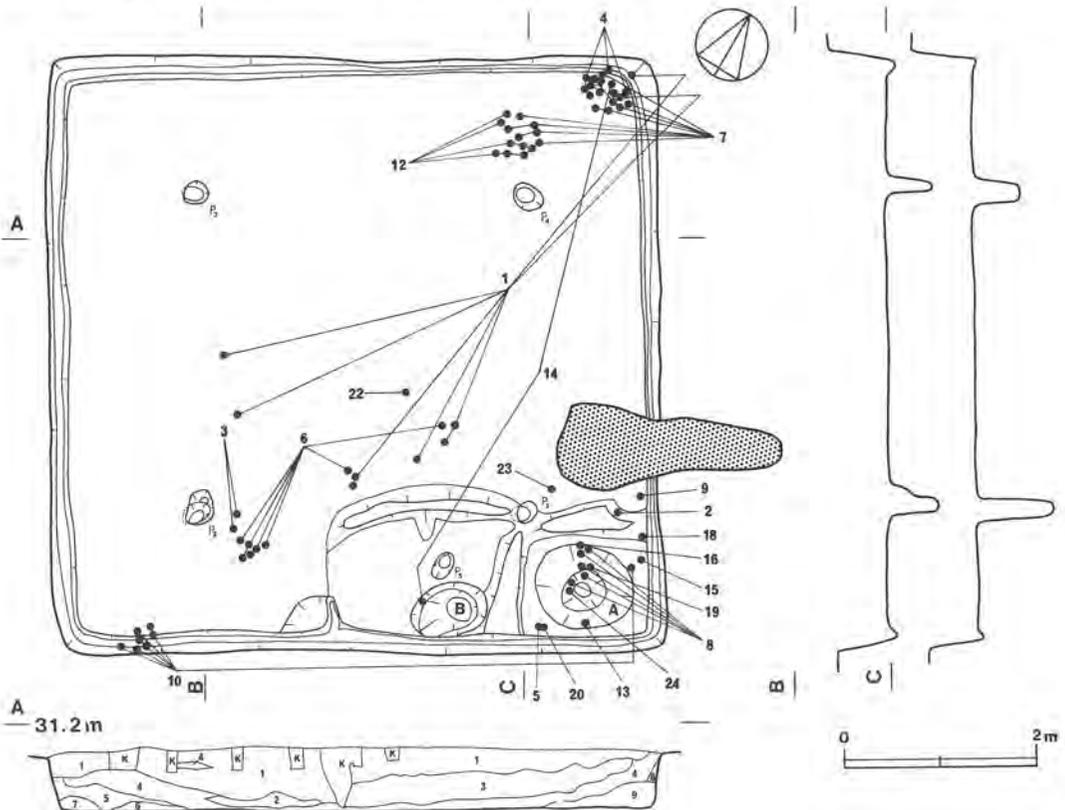
第76図 第27号住居跡実測図

遺物 土師器（甕4，甑1，碗1，坏2，細片119点），須恵器片2点。遺物は，主に，住居の南西部及び貯蔵穴付近から出土。第293図3の甕は南西壁付近の覆土下層から潰れた状態で，第294図6の坏は貯蔵穴底部から逆位で出土。

所見 本跡は，遺構・遺物の特徴から古墳時代中期に比定される住居跡である。

第33号住居跡（第77，78図）

位置 F3e₃区。**重複関係** 無。**平面形** 方形。**規模** 6.46×6.32m。**主軸方向** N-57°-E。**壁** 垂直。壁高52~68cm。**壁溝** 幅8~12cm，深さ10cm前後で全周。**床** 平坦。カマド・出入り口部の周辺と床面中央部で極めて硬い。また，出入り口部の梯子ピットや，貯蔵穴を囲んで，土手状の高まりをもつ。**ピット** 5か所。P₁からP₄（径27~34cm，深さはP₁84cm，他は48~54cm）が支柱穴。底部は極めて硬い。P₅は，出入り口部に伴う梯子ピット。底部は極めて硬い。貯



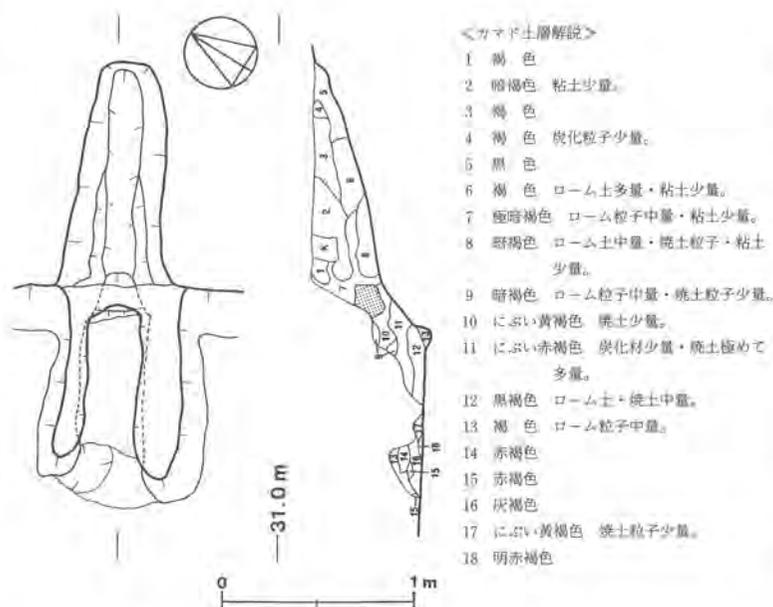
S I - 33 <土層解説>

<土色>

<含有物・特性>

- | | | | |
|--------|-----------------|-------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量・炭化粒子少量。 | 5 暗褐色 | ローム粒子多量・炭化粒子少量。 |
| 2 褐色 | ローム粒子多量・炭化粒子少量。 | 6 黒褐色 | ローム粒子多量。 |
| 3 明褐色 | ローム粒子多量・炭化材少量。 | 7 褐色 | ローム粒子極めて多量。 |
| 4 極暗褐色 | ローム粒子多量・炭化粒子少量。 | 8 黒褐色 | ローム粒子中量。 |
| | | 9 褐色 | ローム粒子多量・炭化粒子少量。 |

第77図 第33号住居跡実測図



第78図 第33号住居跡カマド実測図

込んで構築。煙道部は、幅31～68cm、長さ119cmの規模で、火床から緩やかな傾斜をもって住居の外側へ延びている。カマド内には、焼土粒子・焼けたロームブロックが堆積。火床部及び側壁部は極めて良く焼けて赤色硬化。覆土 自然堆積。

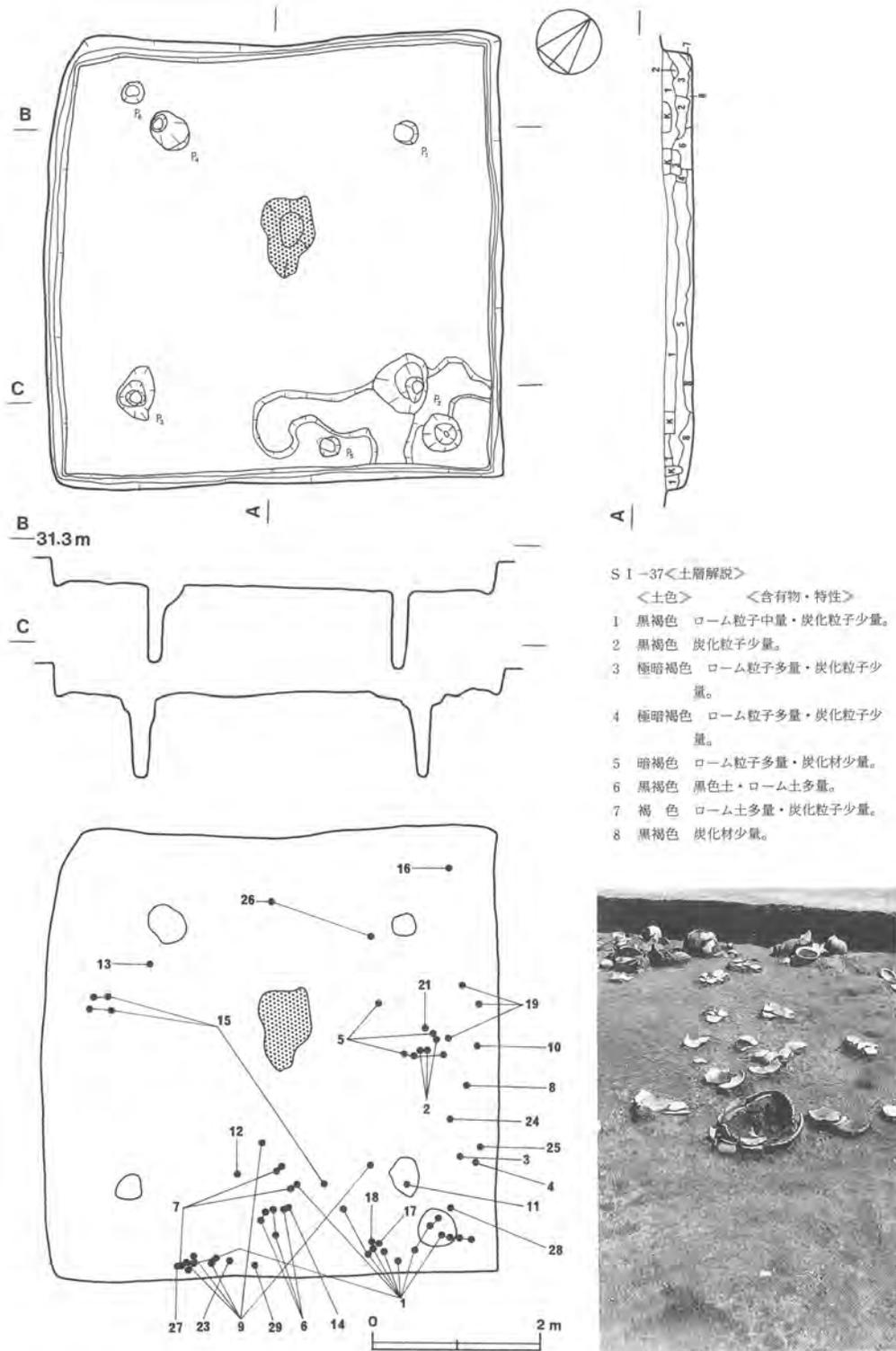
遺物 土師器（甕12、壺2、甑1、高坏1、埴2、坏7、把手付埴1、細片2,229点）、須恵器片17点、石製模造品（双孔円板3点）、礫3点、滑石片3点。遺物は、北コーナー部及び床面中央部から南東壁にかけて出土しており、特に貯蔵穴の覆土や貯蔵穴周辺に多い。第297図19の坏、24の坏（脚付）は貯蔵穴の覆土中層から出土。

所見 本跡は、遺構・遺物の特徴から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第37号住居跡（第79図）

位置 E3j_a区。重複関係 無。平面形 方形。規模 5.38×5.22m。主軸方向 N-34°-W。
壁 垂直。壁高27～39cm。壁溝 幅8～18cm、深さ7cm前後で全周。床 平坦。コーナー部を除き、ほぼ全面的に硬い。南東部から東コーナー部にかけて梯子ピットと貯蔵穴を取り囲むように土手状の高まりを検出。ピット 6か所。P₁～P₄（径29～78cm、深さ89～95cm）が支柱穴。底部は極めて硬い。P₅は、出入り口部に伴う梯子ピット。P₆は補助柱穴。貯蔵穴 東コーナーに検出。平面形は径45cmの円形を呈し、深さ93cm。断面形状は逆円錐形。炉 床面のほぼ中央部に位置し、平面形は長径93cm、短径60cmの不正形。床面を6cm程掘り窪められた地床炉。炉床は、火熱を受けてロームが赤色硬化。覆土 自然堆積。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴Aは、東コーナー部に付設。平面形は径102×90cmの円形を呈し、深さ81cm。貯蔵穴Bは、梯子ピットと南東壁の間にあり、平面形は径89×57cmの不整楕円形を呈し、深さ21cm。
カマド 北東壁のやや東コーナー寄りに付設され、粘土・砂で構築。天井部も一部残存し、遺存状態は比較的良好。燃焼部は壁面をわずかに掘り



第79図 第37号住居跡実測図，遺物出土状況図

遺物 土師器(甕8, 壺5, 埴2, 鉢1, 高坏1, 埴7, 坏6, 細片103点), 石製模造品(双孔円板1点)。遺物は, 遺構全体に散在して出土しており, 特に貯蔵穴や出入り口部の周辺に多い。第299図11の壺はP₁の覆土中位から横位で出土。第301図28の坏は東コーナー床面直上から出土。

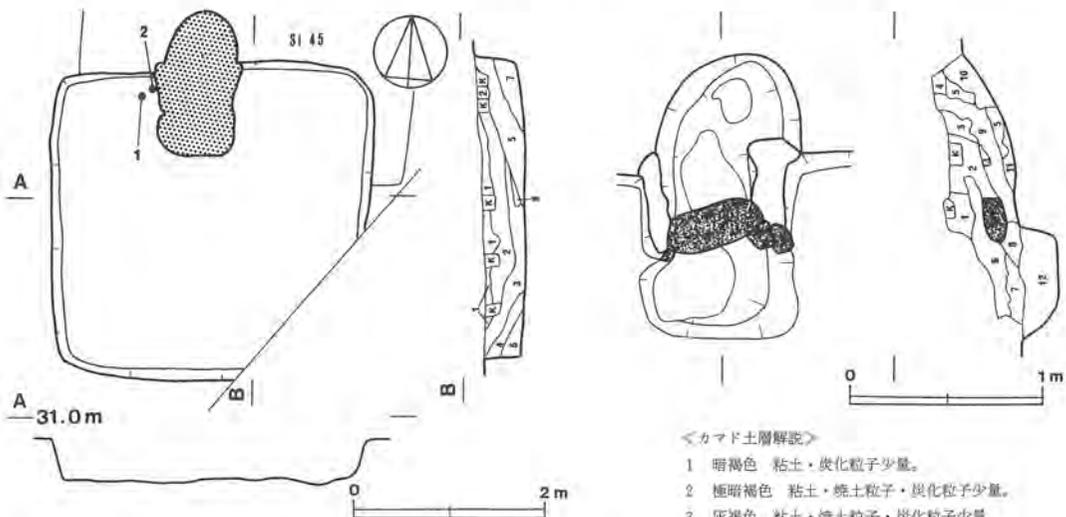
所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。

第38号住居跡 (第80図)

位置 F3e₀区。**重複関係** SI-45<本跡。**平面形** 方形。**規模** 3.37×3.24m。**主軸方向** N-3°-W。**壁** 外傾。壁高38~43cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。ロームの貼床。**ピット** 無。**貯蔵穴** 無。**カマド** 北壁中央部を60cm程掘り込み, 粘土・砂などで構築。火床は床面とほぼ同じ高さで, ロームが焼けて赤変硬化している。火床から西側の袖のほうへ傾くようにして凝灰岩製の支脚(長さ25cm, 径6cm)が出土。煙道部は火床から緩やかに立ち上がり, 住居の外に延びている。焚口部は両袖と天井部に凝灰岩を配し, 箱形の構造にしていたものと思われる。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器(甕3, 鉢1, 細片268点), 須恵器片7点。遺物はカマド周辺に集中。第301図1・2の甕がカマド西側の床面から正位の状態出土。須恵器は甕片や坏片が覆土から出土。

所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



SI-38<土層解説>

<土色>

- 1 極暗褐色 ローム粒子多量, 硬く縮まる。
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 粘土少量。
- 3 黒褐色 ローム粒子中量, 粘土少量。

<含有物・特性>

- 4 黒褐色 ローム粒子中量。
- 5 暗褐色 ローム粒子多量, 粘土中量, 硬く縮まる。
- 6 暗褐色 ローム粒子多量, 炭化物少量。
- 7 暗褐色 ローム粒子多量。
- 8 にぶい黄褐色。

<カマド土層解説>

- 1 暗褐色 粘土・炭化粒子少量。
- 2 極暗褐色 粘土・焼土粒子・炭化粒子少量。
- 3 灰褐色 粘土・焼土粒子・炭化粒子少量。
- 4 極暗褐色 粘土・炭化粒子少量。
- 5 褐色 粘土多量, 炭化粒子少量。
- 6 暗褐色 粘土多量, 炭化粒子少量。
- 7 黒褐色 粘土・炭化物・炭化粒子少量。
- 8 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土少量。
- 9 暗赤褐色 焼土粒子中量, 粘土・焼土小ブロック・炭化粒子少量。
- 10 黒褐色 粘土・炭化粒子少量。
- 11 黒褐色 粘土・炭化粒子少量。
- 12 黒褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量。

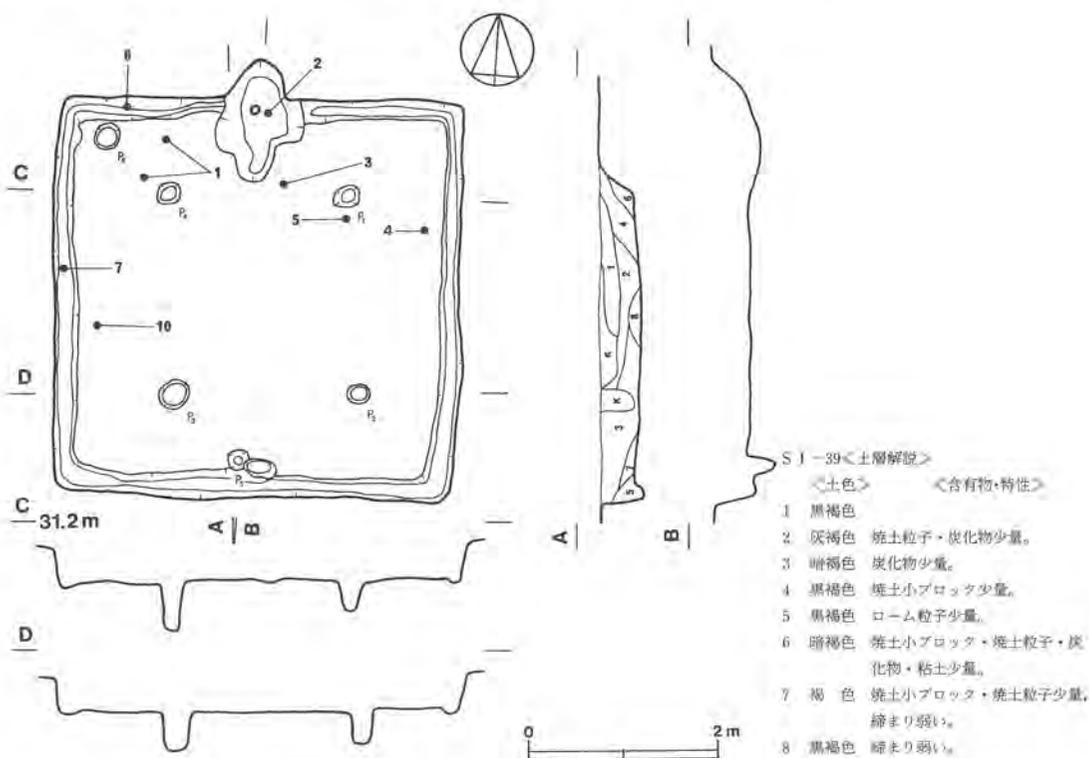
第80図 第38号住居跡・カマド実測図

第39号住居跡 (第81図)

位置 F3c₀区。重複関係 無。平面形 方形。規模 4.27×4.25m。主軸方向 N-0°。壁垂直。壁高36~44cm。壁溝 幅10~20cm, 深さ6cm前後で全周。床 平坦。ロームの貼床。全体的に硬い。ピット 6か所。P₁~P₄(径24~32cm, 深さ33~50cm)が支柱穴。P₅(径22cm, 深さ27cm)は出入り口部に伴う梯子ピットで, 底部は極めて硬い。P₆(径27cm, 深さ22cm)は性格不明。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部を40cm程掘り込み, 粘土・砂などで構築。火床は床面を10cm程掘り窪め, 焼き締まりは弱い。火床から凝灰岩製の支脚(長さ13.5cm, 幅6.5cm)が, 正位の状態で出土。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり, 住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕4, 高坏4, 埴1, 坏1, 細片803点), 須恵器片12点, 石製模造品(双孔円板1点), 石製品(支脚1点)。遺物はカマド周辺に集中。第302図3の甕がカマド前方の床面から, 5の埴がカマド前方の床面から逆位で出土。

所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第81図 第39号住居跡実測図

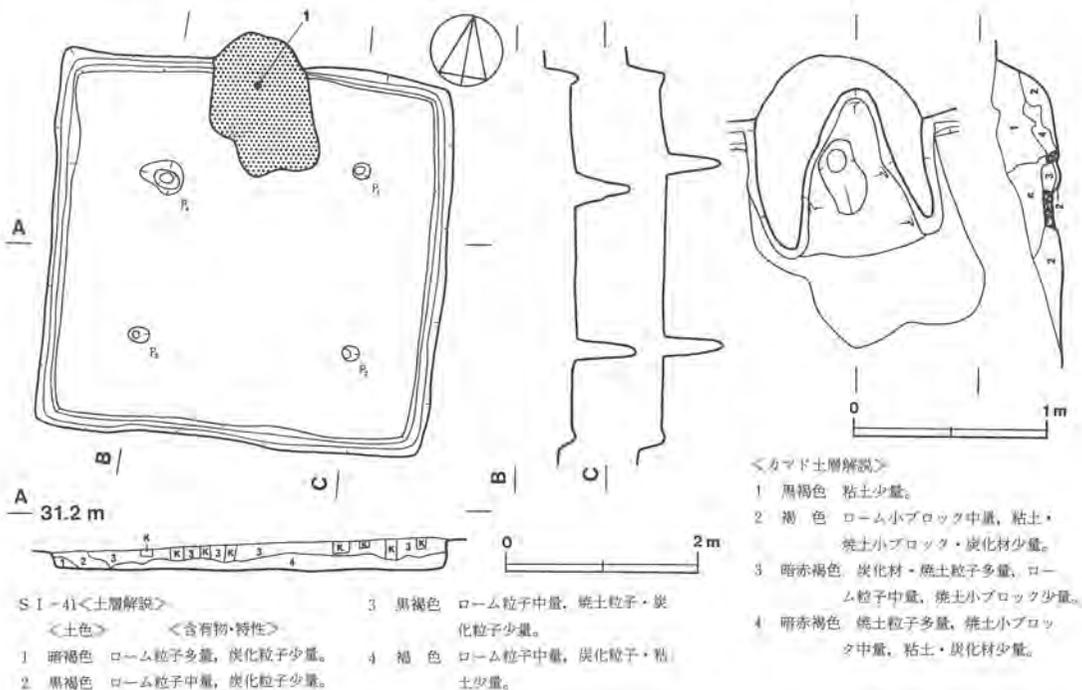
第41号住居跡 (第82図)

位置 E3j₀区。重複関係 無。平面形 方形。規模 4.14×4.12m。主軸方向 N-6°-W。

壁 外傾。壁高16~34cm。壁溝 幅5~12cm, 深さ4cm前後で全周。床 南側へ緩く傾斜し, 全体的に軟らかい。ピット 4か所。P₁~P₄(径18~44cm, 深さ59~69cm)はすべて支柱穴。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部を30cm程掘り込み, 粘土・砂などで構築。火床は床面とほぼ同じ高さで, ロームがレンガ状に焼き締まっている。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり, 住居の外に延びている。焚口部は両袖と天井部に凝灰岩を配し, 箱形の構造にしている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕1, 細片190点), 須恵器片1点, 鉄製品(刀子1点), 石製模造品(双孔円板3点), 石製品(石皿1点, 流れ込み)が出土。全体的に小破片が多い。第303図1の甕の底部片がカマド燃焼部の覆土下層から出土し, その下から凝灰岩製の支脚(長さ20cm, 径5cm)が横位の状態で出土。

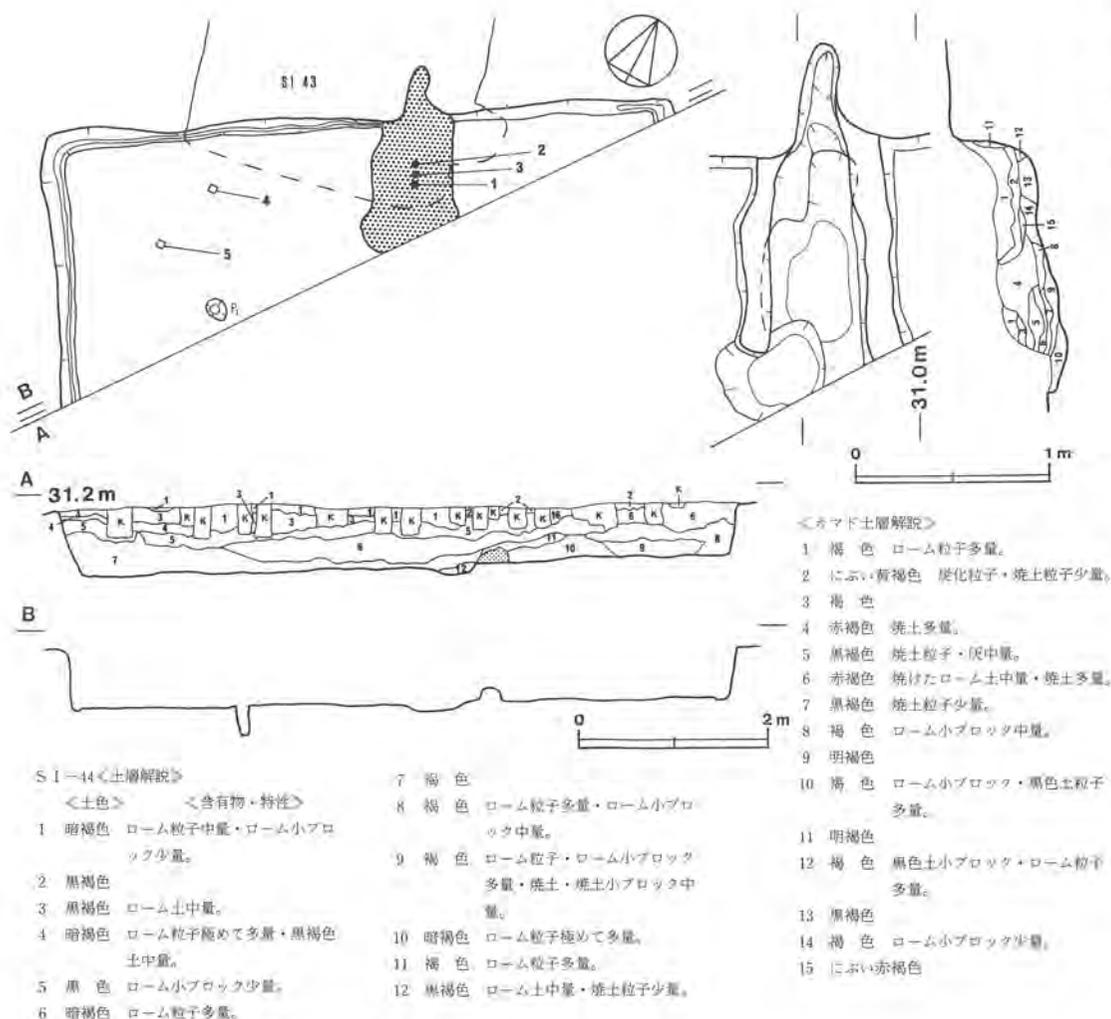
所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第82図 第41号住居跡・カマド実測図

第44号住居跡 (第83図)

位置 F4a₃区。重複関係 本跡<SI-43。平面形 方形と推定。規模 6.75×(2.82)m。主軸方向 N-33°-W。壁 垂直。壁高54~62cm。壁溝 カマド東側の一部を除き, 幅6~14cm, 深さ7cm前後で検出。床 平坦。カマド周辺で硬く締まる。ピット 1か所。支柱穴。径27cm, 深さ36cm。底部は硬い。貯蔵穴 住居跡の南側はエリア外のため, その有無は不明。カマド 北壁中央部に付設され, 粘土・砂で構築。火床部は, 床面からの掘り込みが殆どみられず, ほぼ平



第83図 第44号住居跡・カマド実測図

坦。燃焼部奥壁は住居の壁面とほぼ一致。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。カマド内には、焼土粒子が多量に堆積。覆土 自然堆積。

遺物 土師器（甕1，鉢1，埴1，細片38点），石製模造品（双孔円板2点），礫1点。遺物は、主にカマド内を中心に出土。第303図2の鉢と3の埴はカマド覆土から重なって出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

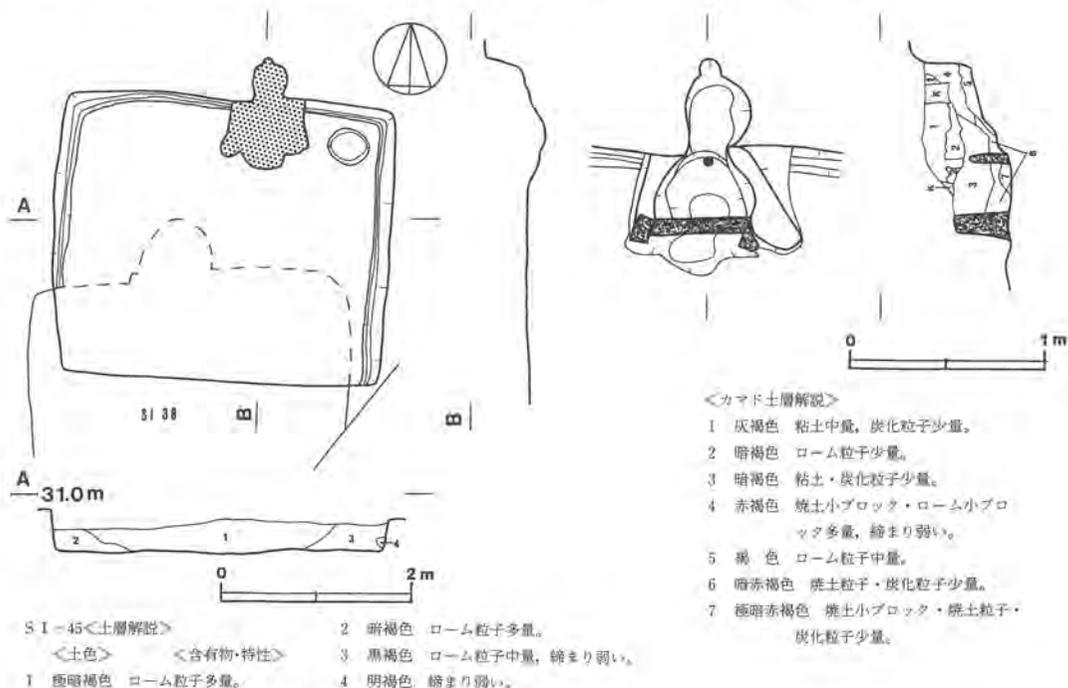
第45号住居跡（第84図）

位置 F3d₀区。重複関係 本跡<SI-38。平面形 長方形。規模 3.55×[3.00]m。主軸方向 N-2°-E。壁 垂直。壁高43~48cm。壁溝 幅4~8cm，深さ8cm前後で全周。床 平坦。特に中央部が硬い。ピット 無。貯蔵穴 北東コーナー部に付設。径44×38cm，深さ15cmの円形。

カマド 北壁中央部からやや東寄りに付設。壁面を30cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面を6cm程掘り窪められ、ロームが焼けて赤変硬化している。火床から凝灰岩製の支脚(長さ21cm, 径6cm)が、正位の状態出土。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。両袖の前と天井部に凝灰岩を使用して、カマドを補強している。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(坏2, 細片93点), 須恵器片4点, 石製品(支脚1点)。遺物は住居内の中央部付近に集中して出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第84図 第45号住居跡・カマド実測図

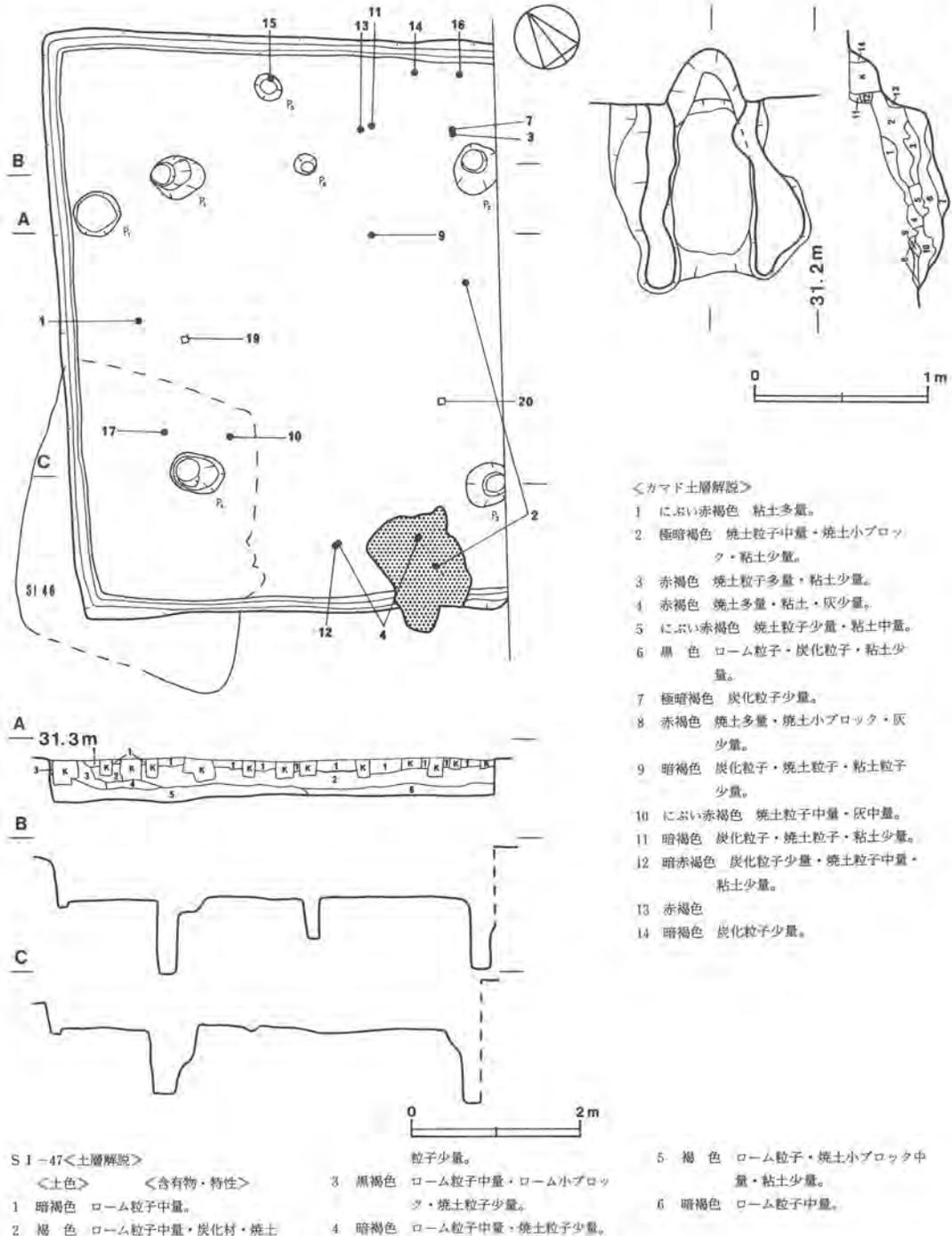
第47号住居跡(第85図)

位置 E4i₃区。**重複関係** 本跡<SI-46, SI-53。&b>平面形 方形と推定。規模 7.05×(5.35)m。**主軸方向** N-40°-E。**壁** 垂直。壁高43~50cm。**壁溝** 幅13~17cm, 深さ8cm前後で全周。床平坦で、全体的に極めて硬い。**ピット** 7か所。P₁~P₄(径57~66cm, 深さ82~94cm)は主柱穴。底部はいずれも硬い。P₅は出入り口部に伴う梯子ピット。P₆は補助柱穴。P₇は性格不明。**貯蔵穴** 住居跡の東側はエリア外のため、不明。**カマド** 南西壁中央部よりやや南コーナー寄りに付設され、粘土・砂で構築。火床部は床面から18cm掘り込まれる。燃焼部奥壁は住居壁面とほぼ一致し、煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。カマド内には、焼土粒子・灰が堆積。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕3, 甑1, 高坏6, 碗1, 坏6, 細片1,338点), 須恵器片7点, 石製模造品

(双孔円板3点), 石製品(砥石1点), 鉄製品(不明1点)。遺物は, 住居跡内の全域から出土。第305図7の甑は北東部床面から潰れた状態で, 第304図4の高坏はカマド内の覆土から逆位で出土。

所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



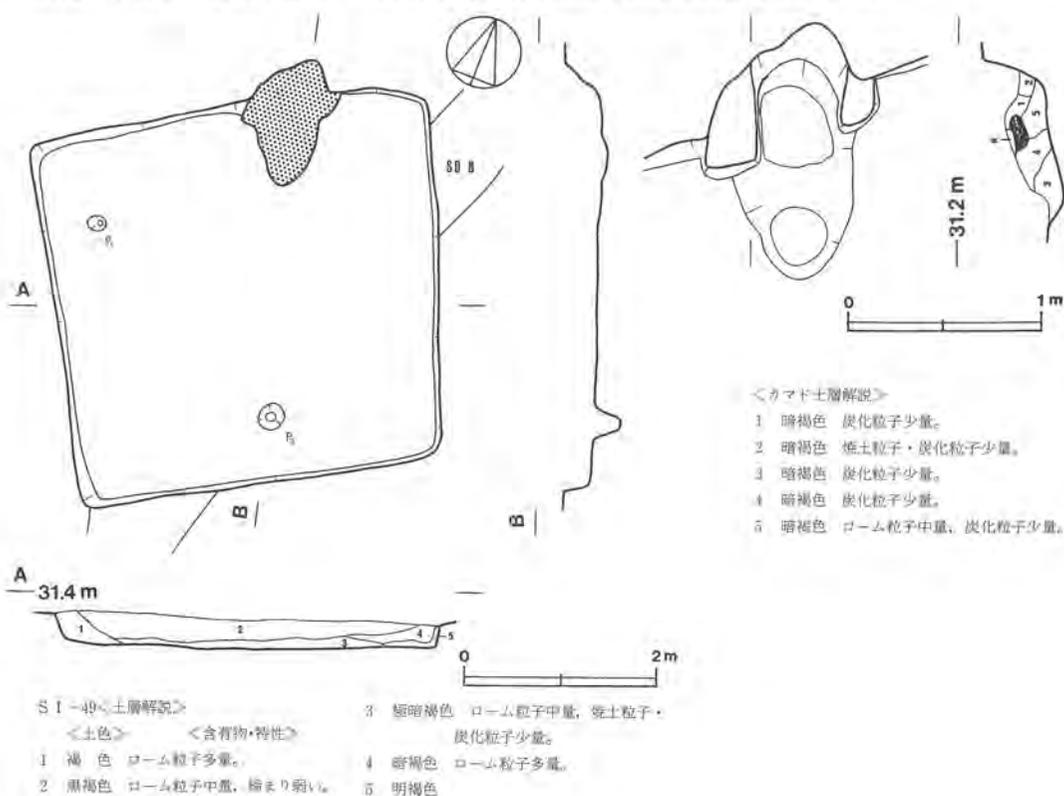
第85図 第47号住居跡・カマド実測図

第49号住居跡 (第86図)

位置 E4f₃区。重複関係 SD-8 (新旧関係不明)。平面形 隅丸方形。規模 4.24×4.00m。主軸方向 N-37°-W。壁 垂直。壁高25~33cm。壁溝 無。床 平坦。ピット 2か所。P₁(径18cm, 深さ52cm)は支柱穴。P₂(径31cm, 深さ32cm)は出入り口部に伴う梯子ピット。貯蔵穴 無。カマド 北西壁中央部からやや北寄りに位置し、主軸方向はN-0°。壁面を40cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面を6cm程掘り窪め、焼き締まりは弱い。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器 (甕3, 甑3, 鉢1, 高坏1, 坏6, 甗1, 細片495点), 須恵器片13点, 石製模造品 (勾玉1点), 礫23点。遺物はカマド周辺に多い。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第86図 第49号住居跡・カマド実測図

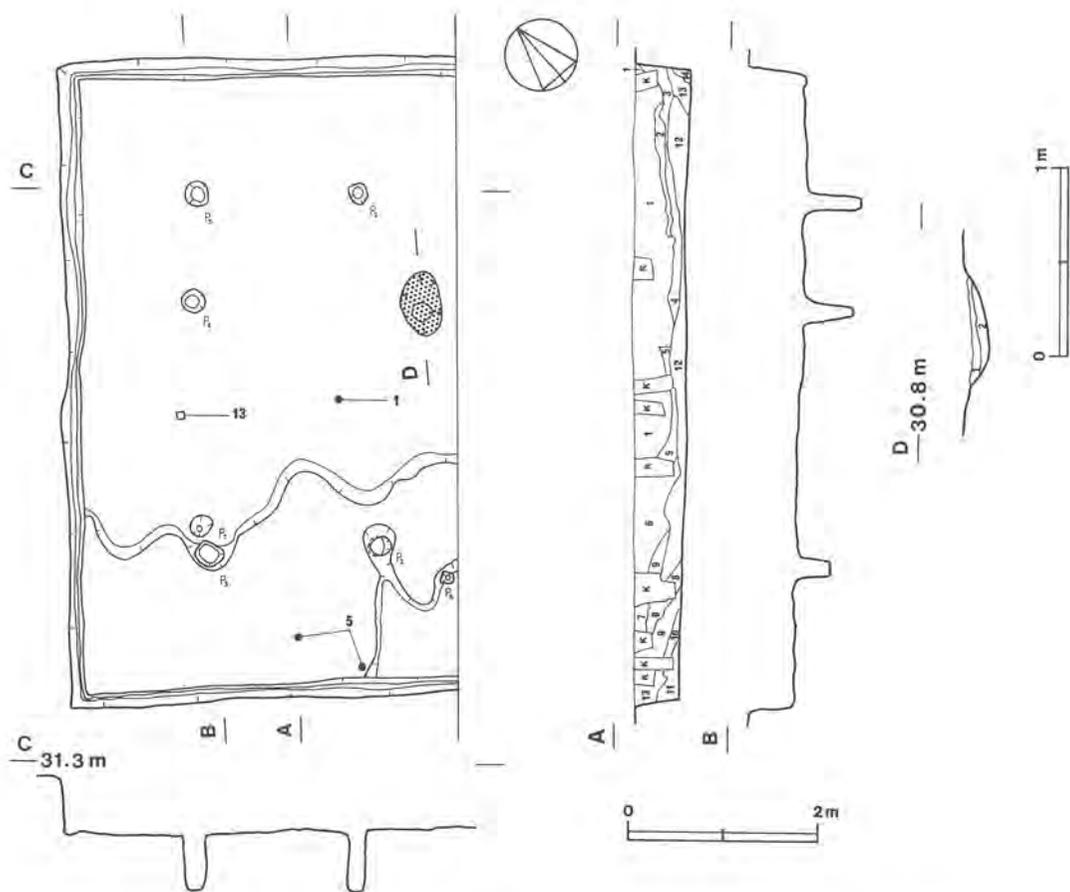
第52号住居跡 (第87図)

位置 E4f₃区。重複関係 無。平面形 方形と推定。規模 6.94×(4.20)m。主軸方向 N-39°-E。壁 垂直。壁高48~56cm。壁溝 幅8~15cm, 深さ7cm前後で全周。床 平坦。床面中央部は硬い。P₆を取り囲む帯には粘土が貼られており、出入り口部に伴う施設と考えられる。ピット 7か所。P₁からP₅(径21~37cm, 深さ41~62cm)は、支柱穴。底部は硬い。P₆は、出

入り口部に伴う梯子ピット。P₇は、性格不明。**貯蔵穴** 住居跡の東側はエリア外のため、その有無は不明。**炉** 床面中央部からやや北東寄りに位置し、床面を12cmほど掘り窪めた地床炉。平面形は長径67cm、短径43cmの楕円形、深さ11cm。炉内には、焼土がブロック化して堆積。炉床のロームは焼けて赤色硬化。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器（甕2、埴1、坏2、細片642点）、須恵器片13点、石製模造品（双孔円板6点）、石製品（敲石1点、砥石1点）、鉄製品（不明1点）。遺物は、主に住居跡の南側から出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。



S 1-52<土層解説>

<土色>

- | | |
|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック多量。 |
| 2 黒色 | ローム粒子中量。 |
| 3 褐色 | ローム土多量・ローム粒子中量。 |
| 4 褐色 | |

- | | |
|-------|----------|
| 5 黒褐色 | ローム粒子中量。 |
|-------|----------|

- | | |
|--------|----------------|
| 6 暗褐色 | ローム粒子中量。 |
| 7 暗褐色 | ローム粒子極めて多量。 |
| 8 黒褐色 | ローム粒子多量。 |
| 9 褐色 | ローム粒子極めて多量。 |
| 10 暗褐色 | ローム粒子多量。 |
| 11 褐色 | ローム土多量・ローム小ブロッ |

ク中量。

- | | |
|--------|-------------|
| 12 暗褐色 | ローム粒子極めて多量。 |
| 13 黒色 | ローム粒子中量。 |

<炉土層解説>

- | |
|--------|
| 1 暗赤褐色 |
| 2 明褐色 |

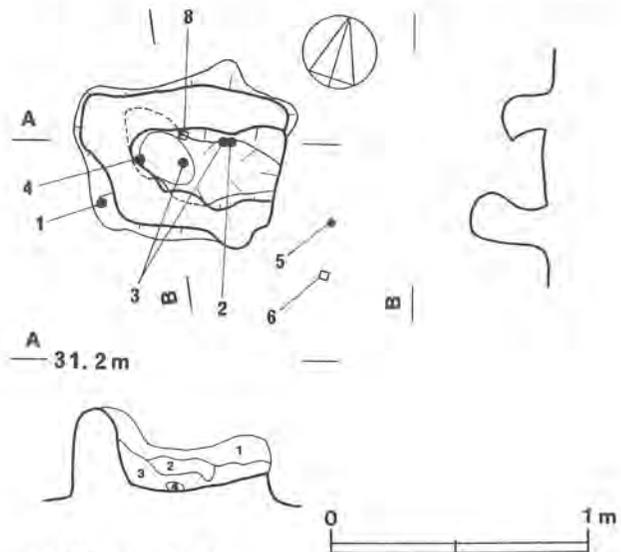
第87図 第52号住居跡実測図

第53号住居跡 (第88図)

位置 E4j₃区。重複関係 SI-47<本跡<SI-46。 **主軸方向** N-90°-W。カマド 住居の西壁に付設されたと思われる、粘土・砂で構築された両袖部が残存。カマド内には、焼土粒子が堆積。

遺物 土師器(甕2, 甑1, 埴1, 坏1, 細片55点), 石製品(砥石1点, 支脚1点, 敲石1点)。第308図1の甑は、カマド覆土から横位の潰れた状態で出土。

所見 第47号住居跡と重複しており、本跡の壁・床等プランを明確にとらえることはできなかった。本跡の平面形、規模、壁、壁溝、床、ピット、貯蔵穴、覆土については、不明。本跡は、遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



SI-53<カマド土層解説>

<土色> <含有物・特性>

- 1 灰黄褐色 焼土粒子少量。
- 2 褐色 焼土粒子中量・粘土小ブロック少量。
- 3 暗褐色 ローム粒子中量・炭化粒子・雑土粒子少量。
- 4 褐色 ローム粒子多量。

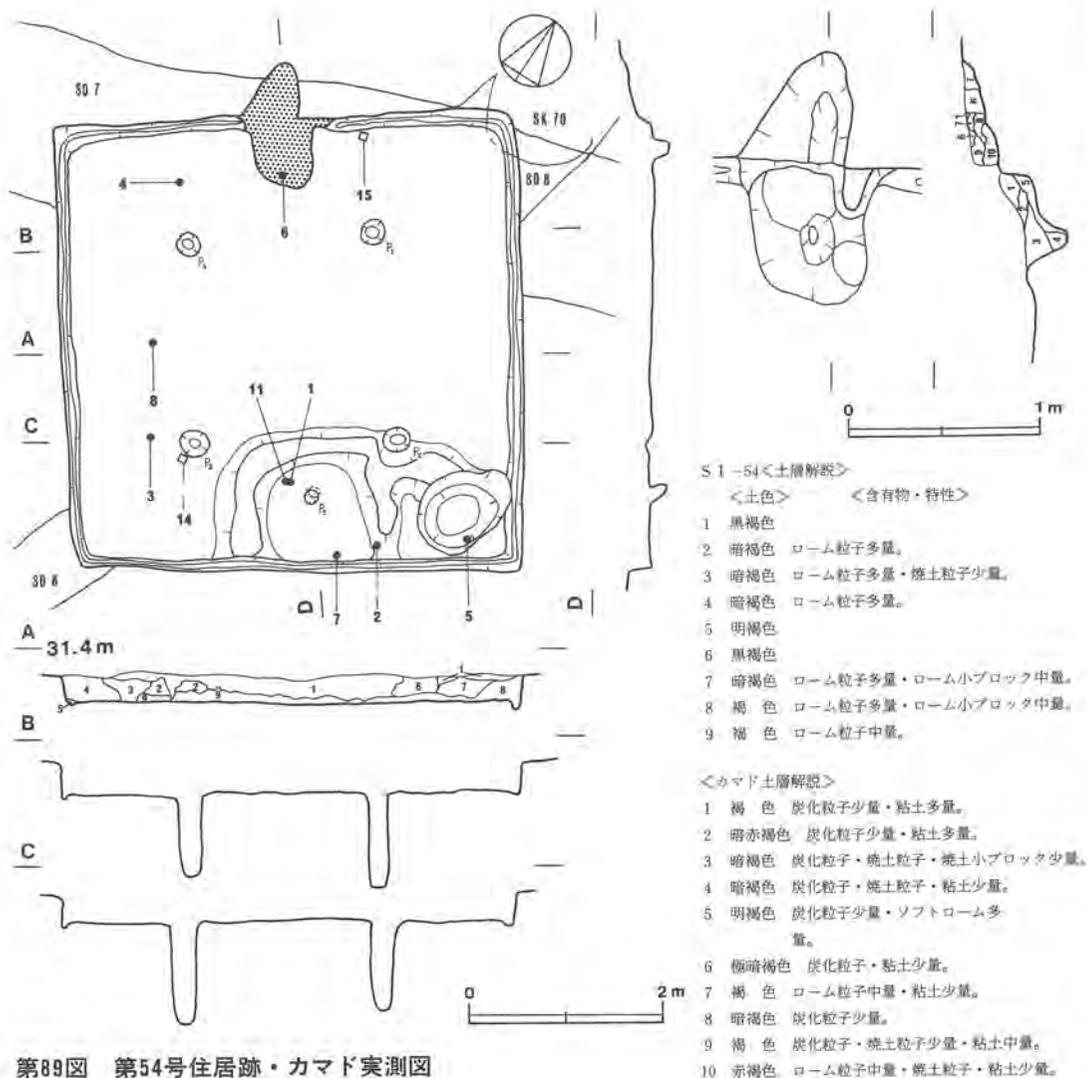
第88図 第53号住居跡カマド実測図

第54号住居跡 (第89図)

位置 E4d₄区。重複関係 SK-70, SD-7, 8 (新旧関係不明)。 **平面形** 方形。 **規模** 4.91×4.83m。 **主軸方向** N-34°-W。 **壁** 垂直。壁高24~41cm。 **壁溝** 幅8cm前後、深さ5cm前後で全周。 **床** 平坦。床面中央部及び出入り口・カマド付近は極めて硬い。南東壁付近には、梯子ピットを取り囲んで、床面から8cm前後の土手状の高まりをもつ。 **ピット** 5か所。P₁からP₄(径26~31cm, 深さ87~107cm)が支柱穴。掘り方は円筒状。P₅は、出入り口部に伴う梯子ピット。約60度の角度で住居の外側に向かって外傾して掘り込まれる。 **貯蔵穴** 東コーナー部に検出。平面形は径108×78cmの楕円形を呈し、深さ46cm。 **カマド** 北西壁中央部に付設され、粘土・砂で構築。天井部は崩落し、袖部も右側の一部を残しただけである。火床は、床面から10cmほど掘り窪められ、煙道部はカマド奥壁から緩やかな傾斜で住居の外側に延びている。 **覆土** 自然堆積。

遺物 土師器(甕4, 壺2, 高坏1, 坏5, 細片516点), 鉄製品(不明1点), 石製品(揚げ砥石1点, 敲石3点), 礫5点。遺物は、主にカマド周辺と床面南部に多く出土。第310図6の壺はカマド内の底面直上から逆位で出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

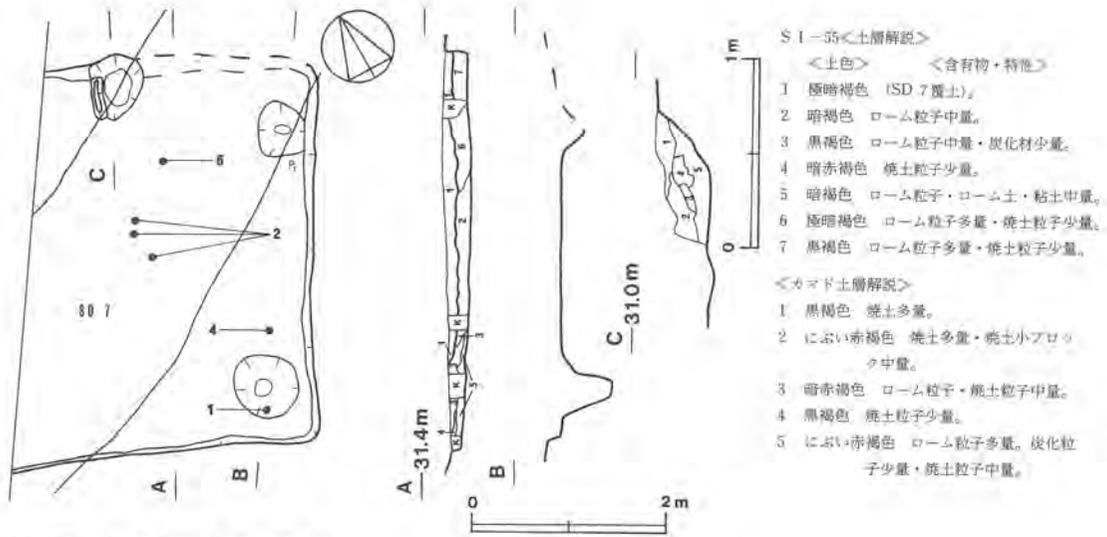


第55号住居跡 (第90図)

位置 E3e₀区。重複関係 本跡<SD-7。平面形 方形と推定。規模 4.26×(3.25)m。主軸方向 N-32°-E。壁 外傾。壁高11~27cm。壁溝 無。床 平坦。ピット 1か所。平面形は円形を呈し、径60×49cm、深さ25cm。性格不明。貯蔵穴 南コーナー部に検出。平面形は円形を呈し、径71×68cm、深さ52cm。カマド 北壁中央部に付設され、第7号溝によって削除され、粘土・砂によって構築された左袖の一部が残存。火床部は床面とほぼ同一レベルにあり、煙道部は火床から緩やかに立ち上がる。カマド内の覆土下層には焼土が堆積。覆土 自然堆積。

遺物 土師器 (甕4, 壺1, 坏1, 細片114点), 須恵器片9点, 石製模造品 (剣形片1点)。遺物は、住居跡内の全域から出土。第312図1の甕は貯蔵穴覆土から正位で出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



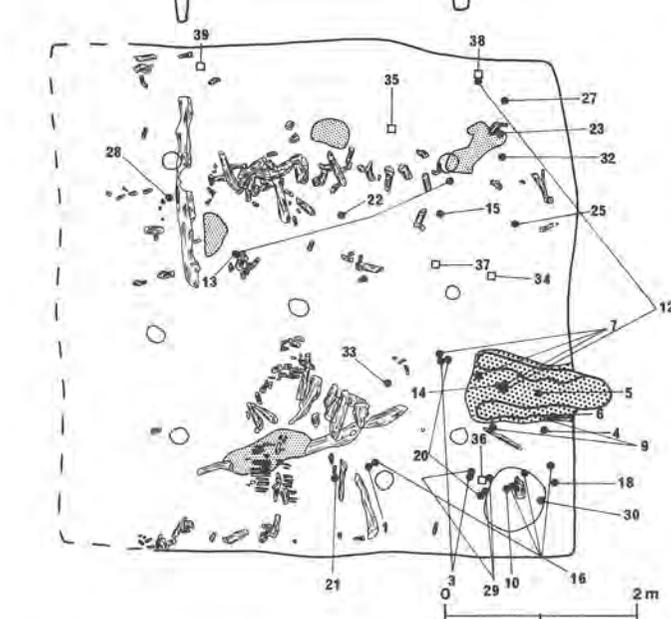
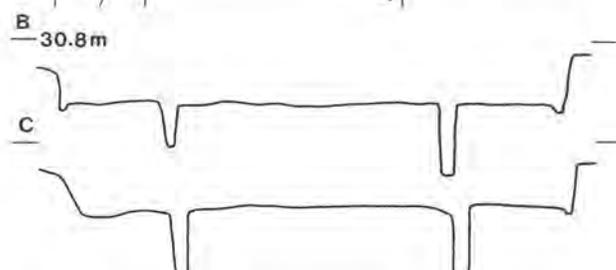
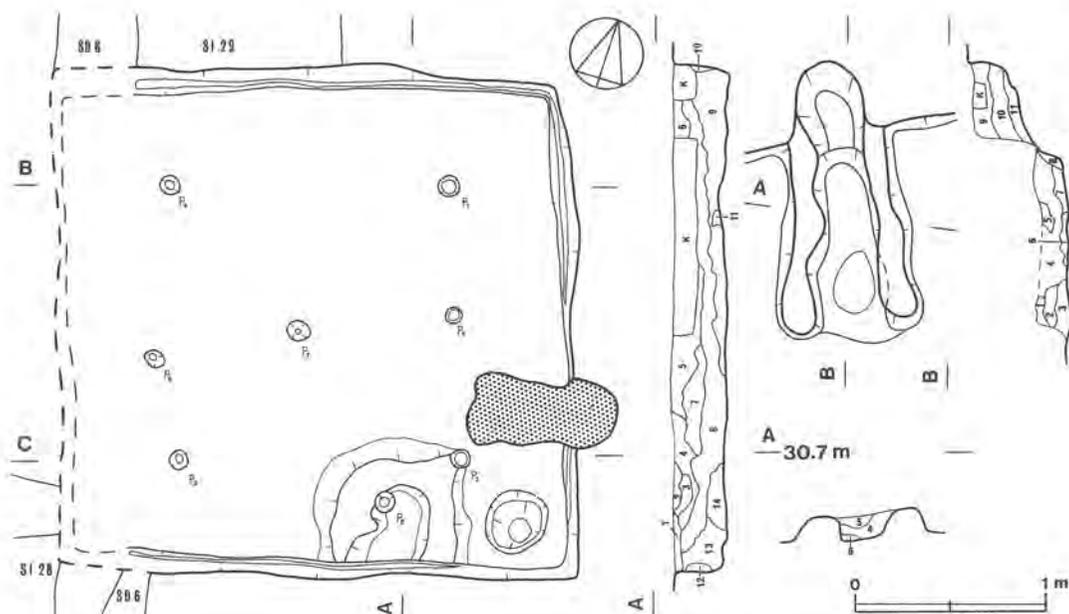
第90図 第55号住居跡実測図

第56号住居跡 (第91図)

位置 F3g区。重複関係 本跡<SD-6<SI-28<SI-29。平面形 方形。規模 [5.49]×5.45m。主軸方向 N-72°-E。壁 垂直。壁高48~57cm。壁溝 幅8~12cm, 深さ7cm前後で全周。床 若干の凹凸をもつが, 全体的に平坦。壁付近を除き極めて硬い。P₈を取り囲んで土手状の高まりを確認。ピット 8か所。P₁からP₄(径21~23cm, 深さ47~86cm)が主柱穴。底部は硬く, 円筒状のしっかりとした掘り方である。P₅・P₆・P₇は, 補助柱穴。P₈(径22cm, 深さ32cm)は, 出入り口部に伴う梯子ピット。貯蔵穴 東コーナー部に検出。平面形は径68cmの円形を呈し, 深さ70cm。カマド 北東壁中央部からやや東コーナー寄りに付設され, 粘土・砂で構築。天井部は崩落しているものの, 両袖部は良好に残存。火床部は, 床面と殆ど同レベルで床面からの掘り込みはみられない。煙道部は火床から緩やかな角度で立ち上がり, 住居の外に延びている。燃焼部奥壁は住居の壁面とほぼ一致。火床部及び袖の内壁は, 火熱を受けて赤色硬化。覆土 自然堆積。

遺物 土師器 (甕6, 壺1, 甗2, 鉢1, 高坏8, 埴2, 坏12, 甗2, 細片850点), 須恵器片3点, 石製模造品(双孔円板2点, 剣形品1点, 器種不明1点), 石製品(紡錘車2点), 鉄滓1点, 礫1点, 炭化材。遺物は, 貯蔵穴・カマドを中心に住居跡内の全域から出土。第314図11の壺は床面北東部の床面直上から正位で, 12の高坏はカマド内から逆位で, 第316図32の甗は北コーナーの覆土下層から正位で出土。また, 床面全体に炭化材が良好な状態で出土。東コーナー付近では, 焼土層から篠と思われる炭化材が規則的に並んで出土。

所見 本跡は, 焼土・炭化材の出土状況から, 焼失家屋跡と思われ, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



- S1-56 <土層解説>
- | <土色> | <含有物・特性> |
|---------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 | |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量。 |
| 3 明褐色 | ローム土多量。 |
| 4 黒色 | ローム粒子中量。 |
| 5 極暗褐色 | ローム粒子中量・焼土粒子少量。 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子中量。 |
| 7 褐色 | ローム粒子多量・ローム小ブロック中量・炭化粒子・焼土粒子少量。 |
| 8 暗褐色 | ローム粒子・炭化材・焼土粒子多量。 |
| 9 褐色 | ローム小ブロック多量・炭化材・焼土粒子少量。 |
| 10 明褐色 | |
| 11 極暗褐色 | ローム粒子中量・炭化材多量・焼土粒子少量。 |
| 12 褐色 | |
| 13 暗褐色 | ローム粒子多量・炭化材・焼土粒子中量。 |
| 14 黒褐色 | ローム粒子・炭化材多量・焼土小ブロック少量。 |
- <カマド土層解説>
- | | |
|----------|-------------------|
| 1 褐色 | 炭化材・焼土粒子少量・粘土多量。 |
| 2 にぶい赤褐色 | 炭化材少量・焼土小ブロック中量。 |
| 3 灰褐色 | 炭化材・焼土粒子少量・灰多量。 |
| 4 にぶい黄褐色 | 粘土。 |
| 5 暗褐色 | 炭化材少量・粘土中量。 |
| 6 褐色 | 粘土中量。 |
| 7 にぶい黄褐色 | 焼土少量。 |
| 8 明褐色 | 粘土少量。 |
| 9 黒褐色 | |
| 10 暗褐色 | 炭化粒子・焼土粒子少量・粘土中量。 |
| 11 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子中量。 |

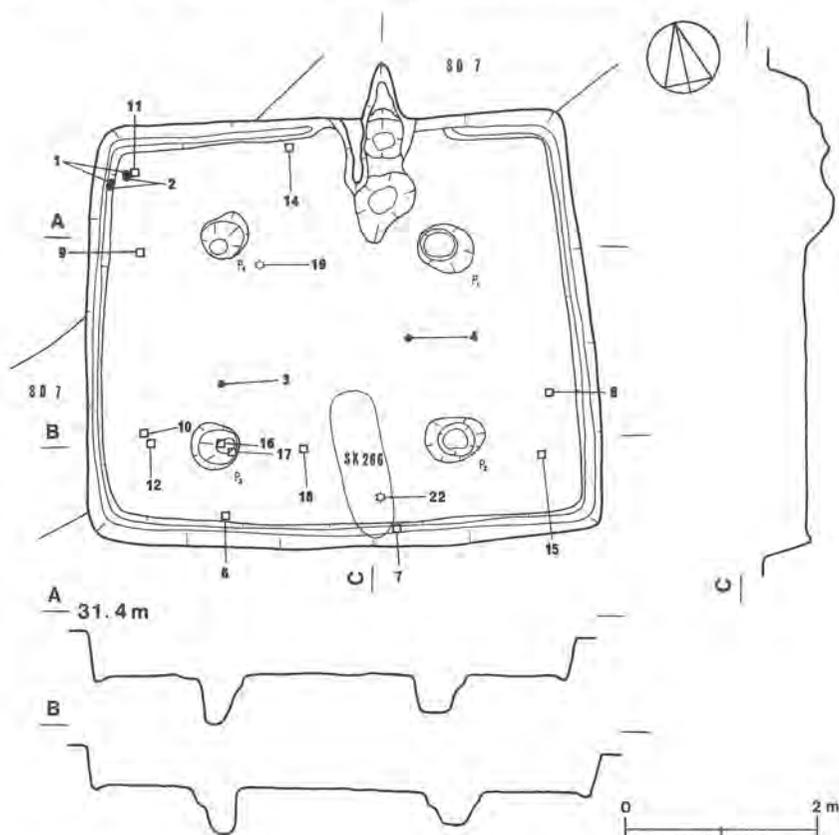
第91図 第56号住居跡・カマド実測図，遺物出土状況図

第60号住居跡 (第92図)

位置 E4c₇区。重複関係 SD-7。本跡<SK-266。平面形 隅丸長方形。規模 5.39×4.61 m。主軸方向 N-9°-E。壁 外傾。壁高40~46cm。壁溝 幅6~10cm, 深さ8 cm前後で全周。床 平坦。貼床。カマド周辺は特に硬い。ピット 4か所。P₁~P₄(径50~63cm, 深さ32~54cm)が支柱穴。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部からやや東寄りに付設され, 北壁を10cm程掘り込み, 粘土・砂で構築。火床部は床面を10cm程掘り窪める。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり, 住居の外に延びる。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕3, 甑1, 高坏2, 坏2, 細片1, 267点), 須恵器片19点, 鉄製品(刀子2点, 釘2点, 不明5点), 石製模造品(双孔円板7点, 白玉5点, 器種不明半欠品12点), 滑石片5点, 石製品(砥石2点)。遺物は, 住居跡内の全域から出土。

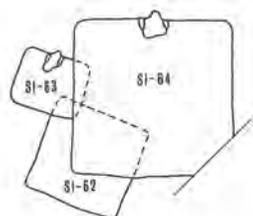
所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



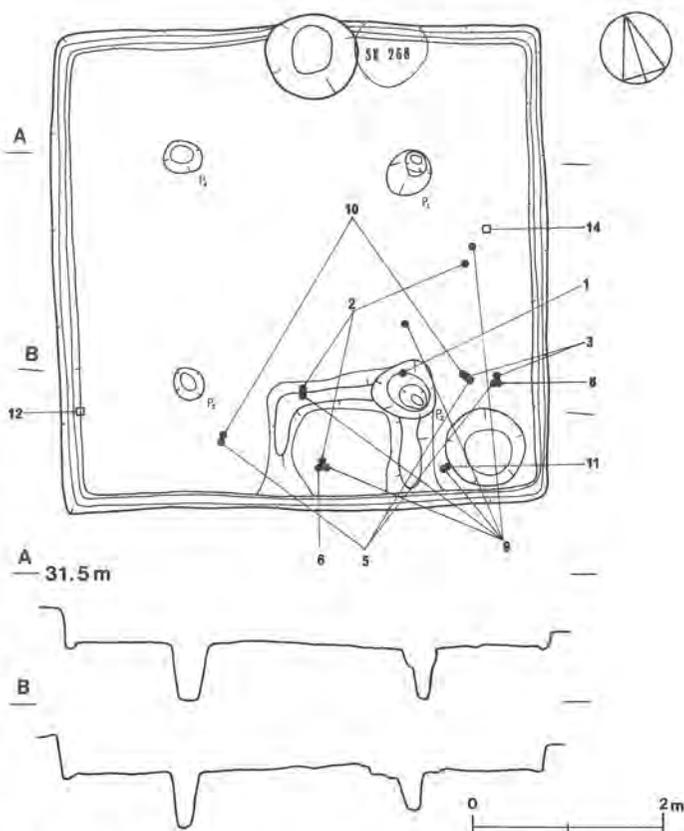
第92図 第60号住居跡実測図

第62号住居跡 (第93図)

位置 E4b₉区。重複関係 本跡<SI-63<64。SD-7, SK-268(新旧関係不明)。平面形 方



形。規模 5.22×5.20m。主軸方向 N-15°-E。壁垂直。壁高27~43cm。壁溝幅11~15cm、深さ6cm前後で全周。床平坦。床面中央部及び出入口付近は硬い。南壁中央部近くの床面には、「コ」の字形に土手状の高まりが構築され、出入口部施設と考えられる。この土手状の高まりの内側には、粘土が貼られている。ピット 4か所。い



第93図 第62号住居跡実測図

ずれも支柱穴。径37~67cm、深さ47~61cm。全てしっかりと掘り方で、底部も硬い。出入口部に伴う梯子ピットは、検出されない。貯蔵穴 南東コーナー部に検出。平面形は径85cmの円形を呈し、深さ54cm。カマド 第64号住居跡によって削除されているが、北壁中央部にカマドの火床部と思われる掘り込みが検出され、カマドの痕跡を確認。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕6, 甑4, 坏1, 細片507点), 石製模造品(半欠品含む双孔円板7点, 器種不明6点), 滓2点, 礫1点。遺物は、住居の南側半分を中心に出土。第319図8の甑は南東コーナー床面から潰れた状態で出土。石製模造品は攪乱による第64号住居跡からの流れ込みの可能性がある。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第63号住居跡 (第94図)

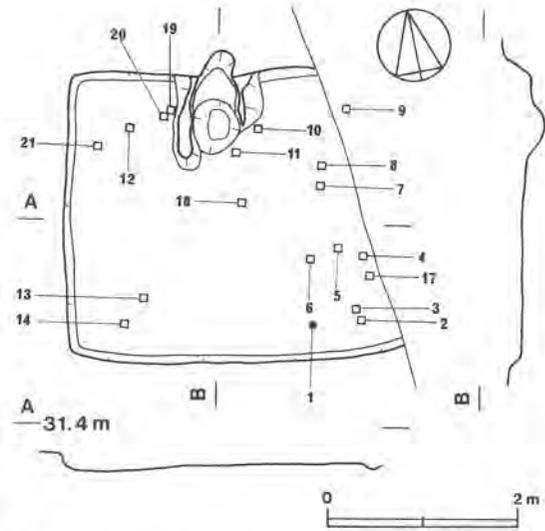
位置 E4a_s区。重複関係 SI-62<本跡<SI-64。平面形 長方形と推定。規模 (3.50)×3.12m。主軸方向 N-11°-E。壁 外傾。壁高13~17cm。壁溝 無。床 平坦。中央部は硬い。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部に付設され、北壁を掘り込んで、粘土・砂によっ

て構築。両袖部の一部が残存。火床は床面とほぼ同レベルにあり、煙道部は明瞭に検出されなかった。カマド内には焼土が堆積。

覆土 自然堆積。

遺物 土師器片518点、石製模造品(双孔円板21点、白玉5点、器種不明7点)。第320図1の高坏、床面全体から出土した石製模造品、鉄製品(燧金? 1点)は流れ込みの可能性が高い。

所見 本跡は、遺構の特徴や重複している第62, 64号住居跡との切り合い関係から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



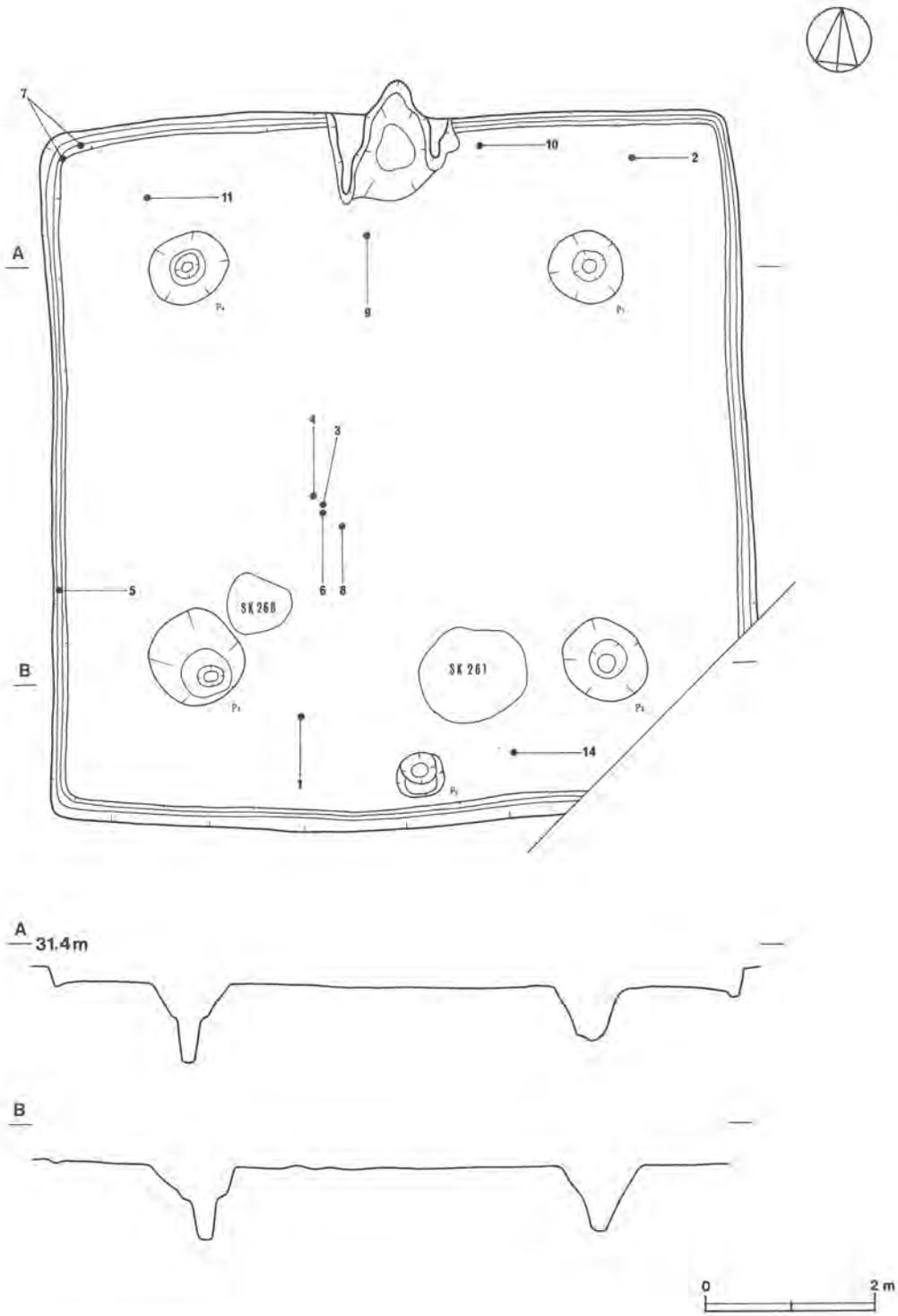
第94図 第63号住居跡実測図

第64号住居跡 (第95, 96図)

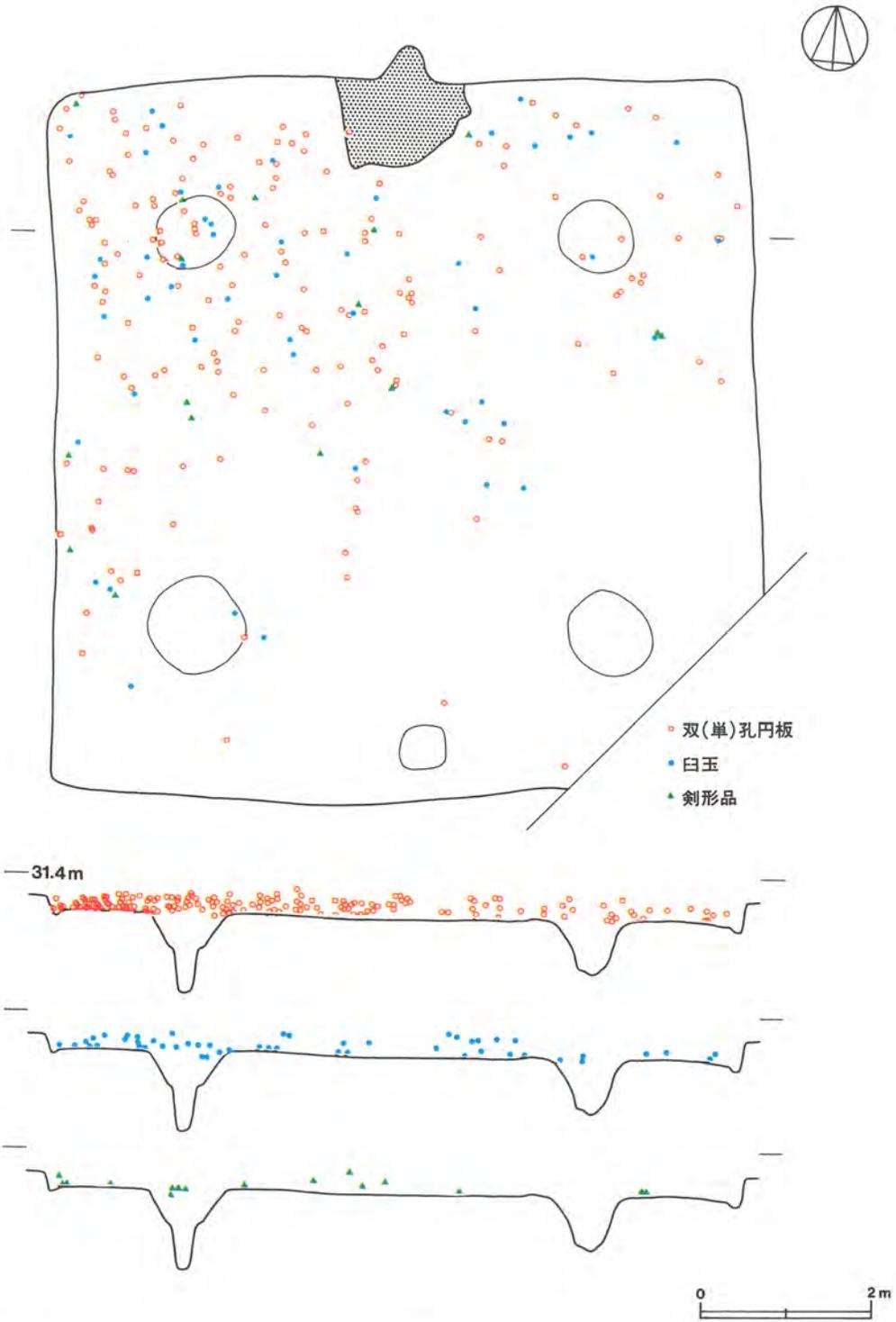
位置 E4a₉区。**重複関係** SI-62<63<本跡。SD-7, SK-261, 268(新旧関係不明)。**平面形** 方形。**規模** 8.51×8.34m。**主軸方向** N-6°-W。**壁** 垂直。壁高12~27cm。**壁溝** 幅10~18cm, 深さ6cm前後で全周。**床** 平坦。床面中央部で極めて硬い貼床。**ピット** 5か所。P₁からP₅(径86~115cm, 深さ64~94cm)が支柱穴。P₅は、径56cm, 深さ31cmで、出入り口部に伴う梯子ピット。**貯蔵穴** 無。**カマド** 北壁中央部に付設され、壁面を26cm程掘り込んで粘土・砂によって構築。天井部は崩落し、袖部のみ残存。火床部は床面から10cm前後掘り窪められている。煙道部は検出されない。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器(甕3, 壺1, 高坏2, 埴2, 坏3, 細片5, 940点), 須恵器(長頸壺1, 細片16点), 石製模造品(双孔円板224点, 単孔の円板1点, 剣形品17点, 白玉59点, 器種不明70点), 石器(石鏃2点)。遺物は、カマド周辺を中心に床面全体に散在して出土。第321図10の坏はカマド右袖付近の床面から正位で出土。本跡からは、多量の土師器片が出土しているおり、土師器の高坏はその脚部片だけで182点に及ぶが、いずれの坏部片との接合も不可能である。また、多量の石製模造品は、床面直上出土のもの、覆土から出土のものなどレベル的なばらつきが認められる。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。本跡は、トレンチャーによる攪乱が著しく一部は床面まで達しており、出土した土師器片・石製模造品は原位置を留めていないものがある。しかし、明らかに床面直上から出土している遺物も多く存在している。以上のような遺物の出土状況から、本跡から出土した石製模造品と土師器片の多くは住居跡廃絶直後から、何らかの意味をもって投棄された可能性がある。



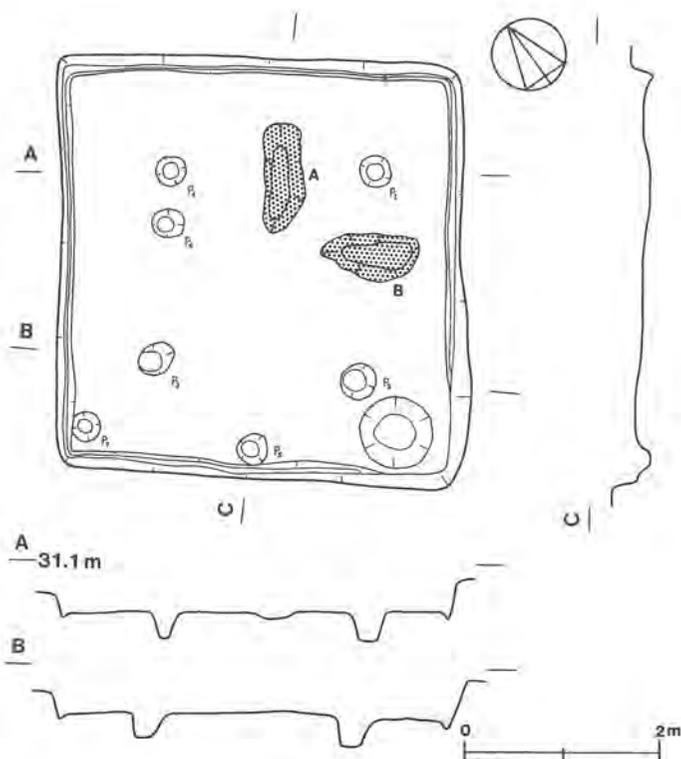
第95図 第64号住居跡実測図



第96図 第64号住居跡石製模造品出土状況図

第67号住居跡 (第97図)

位置 D4h₅区。重複関係 SD-8。平面形 方形。規模 4.50×4.32m。主軸方向 N-33°-E。壁 外傾。壁高 24~42cm。壁溝 幅5~8cm, 深さ5cm前後で全周。床 平坦。床面中央部は硬い。ピット 7か所。P₁からP₄(径31~40cm, 深さ28~30cm)が主柱穴。P₅(径32cm, 深さ50cm)は出入り口部に伴う梯子ピット。P₆・P₇は, 性格不明。貯蔵穴 南東コーナー部に位置し, 平面形は径79×76cmの円形を呈する。炉 2基の地床炉を検出。地床炉Aは, P₁とP₄の中間に位置し, 平面形は長径118cm, 短径46cmの不整



第97図 第67号住居跡実測図

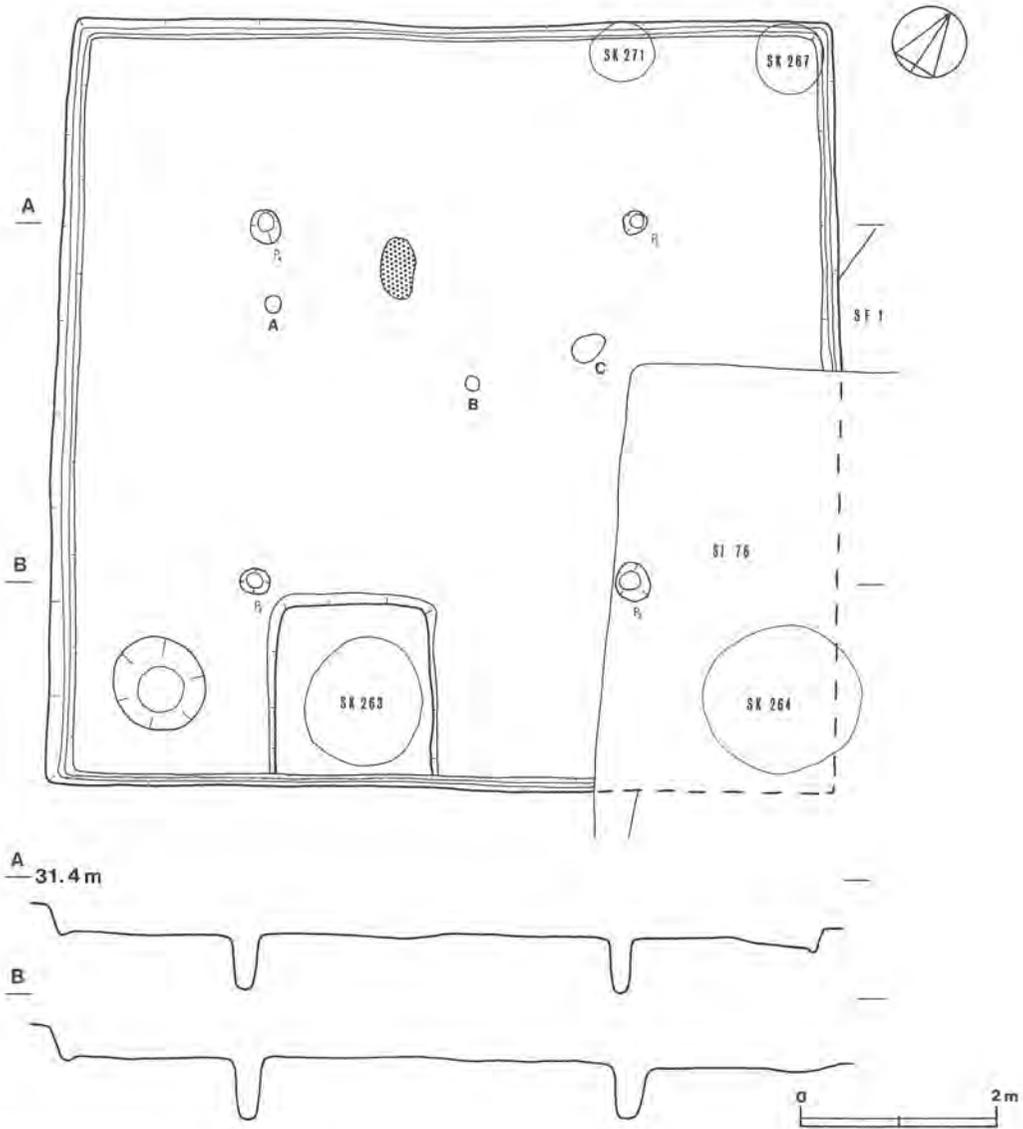
楕円形。地床炉Bは, P₁とP₂の中間に位置し, 平面形は長径102cm, 短径53cmの不整楕円形。共に, 深さは7cm前後, 炉内には焼土及び焼土ブロックが堆積し, 炉床は火熱を受けてロームが赤変硬化。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕2, 埴4, 坏3, 細片594点), 須恵器片4点, 石製模造品(勾玉1点), 滑石片5点。遺物は, 貯蔵穴内や床面全体に散在して出土。第328図2の甕は貯蔵穴覆土から潰れた状態で, 7の坏は南東部床面直上から正位で出土。

所見 本跡は, 2基の地床炉を有する住居跡であり, 当遺跡では他に例がなく, 遺構・遺物から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。

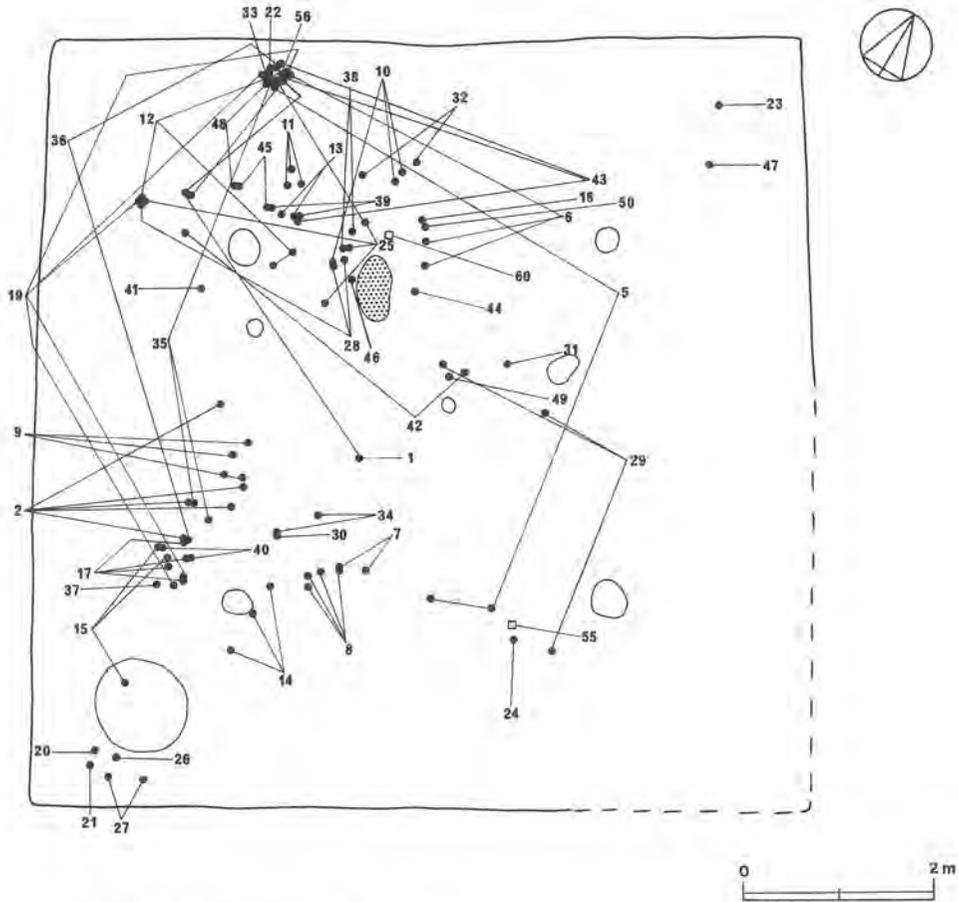
第70号住居跡 (第98, 99図)

位置 D5g₁区。重複関係 本跡<SI-76<SF-1, SK-263<本跡。SK-264, 267, 271(新旧関係は不明)。平面形 方形。規模 8.15×8.13m。主軸方向 N-30°-W。壁 外傾。壁高 10~36cm。壁溝 幅6~10cm, 深さ4~5cmの規模で全周。床 平坦。床面は, 全体的にあまり



第98図 第70号住居跡実測図

硬くないが、鍛冶炉周辺だけは、比較的硬い。南壁中央部寄りの方形に一段高くなっている部分は、極めて硬い。ピット 4か所。全て支柱穴。径27~45cm、深さ54~65cmで、底部は硬い。貯蔵穴 南西コーナー部に検出。平面形は径105cmの円形を呈し、深さ100cm。炉 床面中央部より若干北西寄りに付設された地床炉。平面形は、長径68×短径37cmの楕円形。炉内には、焼土及び焼土ブロックが堆積。炉床は火熱を受けロームが硬化。鍛冶炉 床面の中央部北側に3基（A・B・C）検出。平面形は径14~38cmの円形を呈し、床面から炉床までの深さは2~4cmで、残存しているのは殆ど炉床部のみである。覆土中央部には、黒褐色土に混じって多量の鉄滓が堆積。覆土下層には、焼土がブロック化して層状に堆積。覆土 自然堆積。



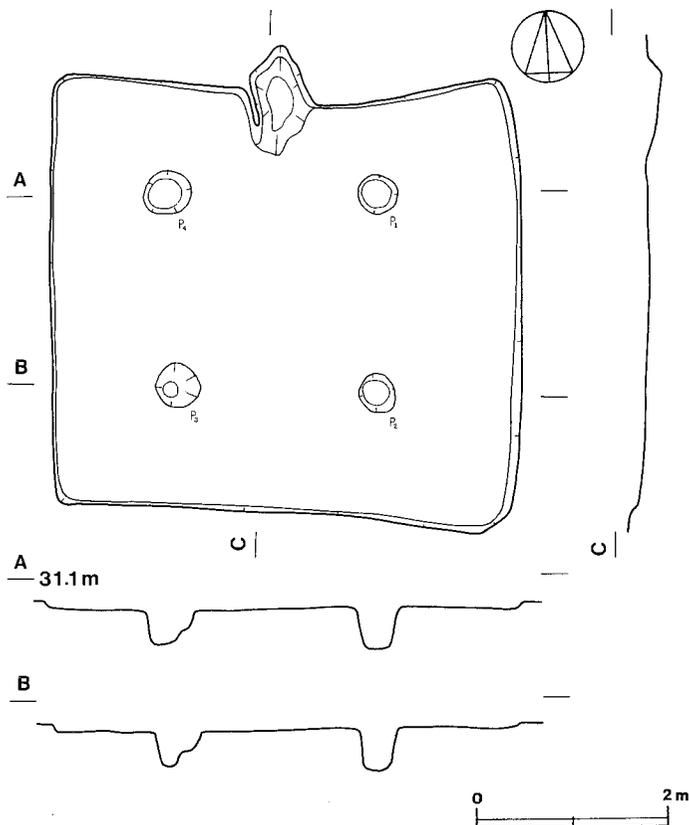
第99図 第70号住居跡遺物出土状況図

遺物 土師器（甕22, 壺2, 甑6, 鉢1, 高坏20, 埴8, 坏8, 埴7, 細片3,207点）、石製模造品（双孔円板1点, 勾玉1点）、鉄滓（30点・総重量170.1g）、土製品（羽口4点）、石製品（凹石1点, 敲石1点）、礫14点, 滑石片1点。遺物の量は極めて多量であり、床面全体から出土。第330図12の壺は北西部床面から潰れた状態で、第332図18の高坏は北西部床面から横位の潰れた状態で、第333図29の埴は中央部付近の床面から潰れた状態で出土。また、4点出土した羽口のうち3点は高坏・脚部の転用であり、第334図52, 53は鍛冶炉Aの直上から出土。礫の中には、火熱を受けているものや、両側に窪みがみられるものもあり、何らかの作業に使用された可能性がある。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。地床炉と鍛冶炉3基が共存し、多量の土器と共に羽口が出土していることから、鍛冶工房的性格をもった住居跡と考えられる。また、覆土中に焼土や炭化材が混入して出土していることから、焼失家屋の可能性はある。

第73号住居跡 (第100図)

位置 D4e₉区。重複関係 無。平面形 方形。規模 5.00×4.56m。主軸方向 N-7°-E。壁 外傾。壁高 5~8cm。壁溝 無。床 平坦。床面中央部は硬い。ピット 4か所。すべて支柱穴で、径 38~50cm、深さ33~48cm。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部に位置し、粘土・砂で構築。左袖部が一部残存し、火床部は床面から12cm前後掘り窪められている。煙道部は緩やかな角度で立ち上がる。覆土下層には焼土・焼土ブロックが堆積し、袖の内壁は火熱を受けて赤色変化。覆土 自然堆積。



第100図 第73号住居跡実測図

遺物 土師器(甕1, 甑1,

細片199点), 須恵器片3点, 石製模造品(双孔円板1点), 鉄製品(鎌1点, 刀子1点, 釘1点)。遺物は少なく, 床面全体に散在して出土。第335図2の甑は北東コーナーの床面から横位で出土。

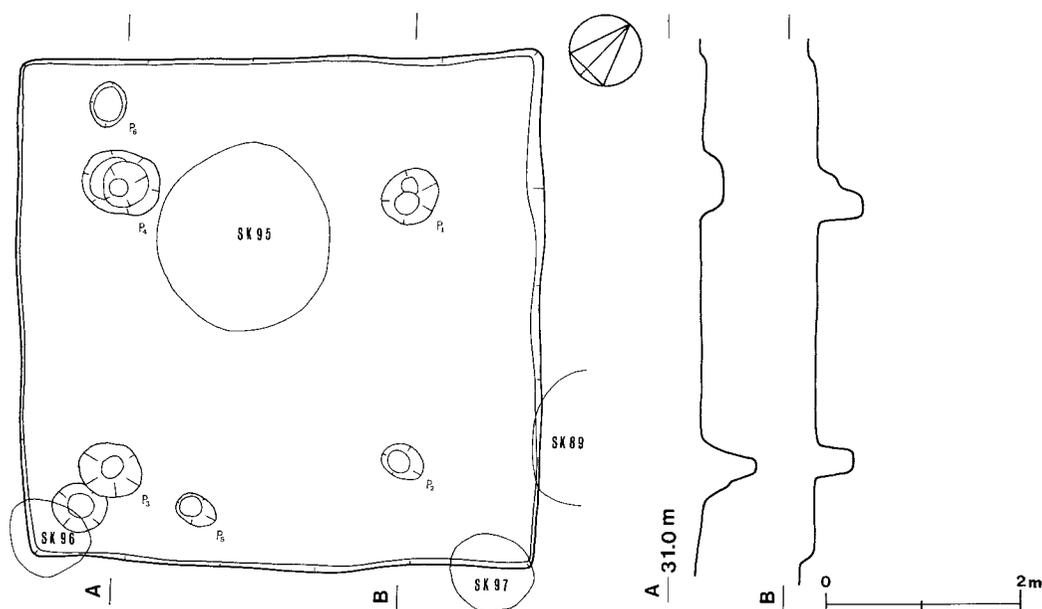
所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第74号住居跡 (第101図)

位置 D4c₉区。重複関係 SK-89, 95, 96, 97(新旧関係不明)。平面形 方形。規模 5.52~5.30m。主軸方向 N-64°-W。壁 外傾。壁高 8~16cm。壁溝 無。床 平坦。出入口部及び床面中央部は硬い。ピット 6か所。P₁~P₄(径47~82cm, 深さ26~57cm)は支柱穴。P₅は出入口部に伴う梯子ピット。P₆は性格不明。貯蔵穴 南コーナーに位置し, 径58×50cmの不整円形を呈する。炉・カマド 土坑との重複関係により, その有無は不明。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(高坏1, 坏3, 細片505点), 石製模造品(白玉1点), 石製品(管玉1点)。全体的に遺物量は少なく, 床面全体に散在して出土。

所見 本跡は, 遺物から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。



第101図 第74号住居跡実測図

第76号住居跡 (第102図)

位置 D5g₂区。重複関

係 SI-70 < 本跡 <

SF-1, SI-77 < 本跡。

SK-264 (新旧関係不明)。

平面形 方形。規模

5.87×5.80m。主軸方向

N-30°-W。壁 垂直。

壁高18~20cm。壁溝

無。床 平坦。支柱穴に

囲まれた床面中央部は硬

い。ピット 5か所。P₁

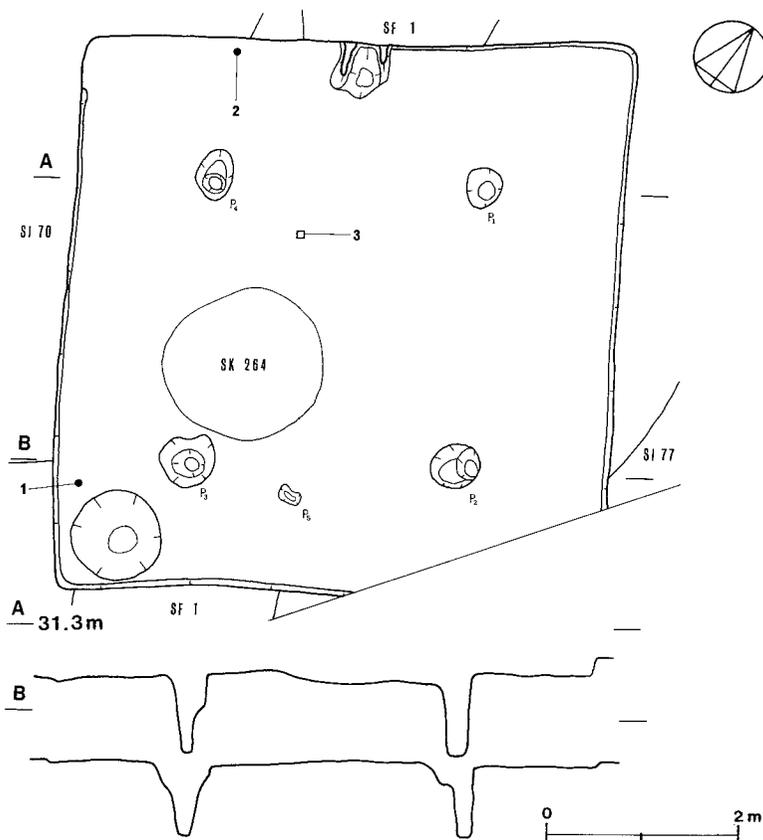
~P₄ (径45~58cm, 深さ

77~89cm) は支柱穴。底

部は硬い。P₅は, 出入り

口部に伴う梯子ピット。

貯蔵穴 南コーナー部に



第102図 第76号住居跡実測図

あり、径96cmの円形を呈し、深さ80cm。**カマド** 北西壁中央部に付設。後世の遺構(SF-1)によって削除され、火床部と思われる掘り込みのみを検出。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器(甕1, 埴1, 細片543点), 須恵器片2点, 石製模造品(双孔円板1点), 石製品(敲石1点), 礫2点。遺物は、床面全体に散在して出土。

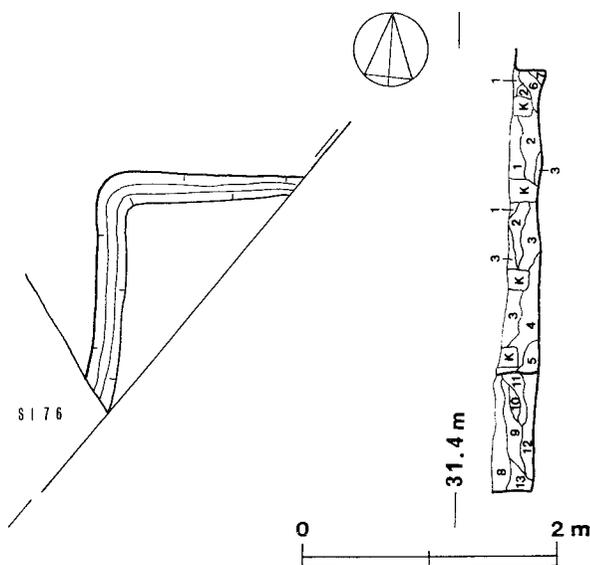
所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第77号住居跡 (第103図)

位置 D5g₃区。**重複関係** 本跡<SI-76。**平面形** 方形と推定。**規模** (1.79)×(1.35)m。**壁** 垂直。壁高19cm。**壁溝** 幅12~17cm, 深さ7cm前後の規模を有し、全周するものと推定。**床** 平坦。壁近くまで硬い。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器(坏3, 細片11点)。遺物は、いずれも小破片であり、覆土から出土。

所見 住居跡の北東コーナーを調査しただけであり、主軸方向は不明。調査した部分からは柱穴, 貯蔵穴, 炉, カマドは検出されなかった。本跡は、復元できた遺物から、古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。



SI-77<土層解説>	7 褐色 ローム粒子中量。
<土色><含有物・特性>	8 (SI76覆土)
1 暗褐色 炭化粒子少量。	9 (SI76覆土)
2 暗褐色 炭化粒子少量。	10 (SI76覆土)
3 褐色	11 (SI76覆土)
4 暗褐色	12 (SI76覆土)
5 黒褐色 炭化粒子少量。	13 (SI76覆土)
6 黒褐色 炭化粒子少量。	

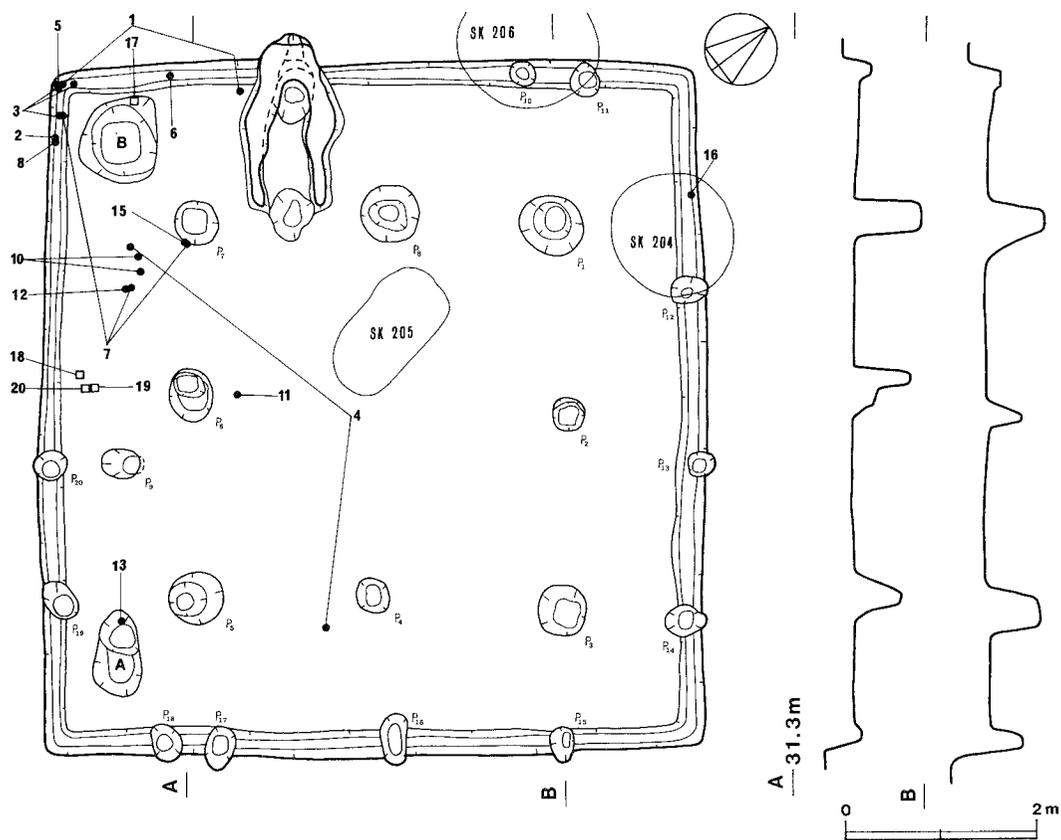
第103図 第77号住居跡実測図

第78号住居跡 (第104図)

位置 D5e₂区。**重複関係** 本跡<SF-1, SK-204, 205, 206(新旧関係不明)。**平面形** 方形。**規模** 7.38×7.06m。**主軸方向** N-54°-W。**壁** 垂直。壁高20~40cm。**壁溝** 幅19~23cm, 深さ10cm前後で全周。**床** 平坦。全体的に硬い貼床。特に、出入り口部の梯子ピット周辺は極めて硬い。**ピット** 20か所。P₁~P₈(径34~68cm, 深さ35~73cm)は支柱穴。底部は、いずれも極めて硬い。P₉(径29×38cm, 深さ51cm)は、出入り口部に伴う梯子ピット。底部・壁共に硬く締まっており、住居の外側に向かって外傾して掘り込まれている。P₁₀~P₁₉(径29~55cm, 確認面からの深さ34~75cm)は、壁柱穴。殆どのピットは住居の壁面を10cm前後外側に掘り込んでいる。主

柱穴の $P_2 \cdot P_3 \cdot P_6 \cdot P_7$, 壁柱穴の $P_{13} \cdot P_{14} \cdot P_{17}$ は, 底部の形状が一辺20~25cmの方形を呈しており, 柱の用材に角材を使用した可能性も考えられる。壁柱穴 P_{20} (径36cm, 深さ52cm) は, 底部に粘土が貼られており極めて硬く締まっている。位置と底部の状態から, 出入り口部の梯子を支えるための柱を据えた柱穴の可能性もある。**貯蔵穴** 2か所。貯蔵穴Aは, 南コーナー部に位置する。平面形は, 径92×47cmの楕円形を呈し, 深さ115cm。貯蔵穴Bは, 西コーナー部に位置する。平面形は, 径100×90cmの不整形円形を呈し, 深さ85cm。**カマド** 北西壁中央部から西コーナー寄りに付設され, 粘土・砂で構築。燃焼部奥の天井の一部と袖部が残存。火床部は, 焚き口部に若干の掘り込みがみられるものの, 床面と殆ど同一レベルである。煙道部は急な角度で立ち上がり, 住居の外に延びている。袖の内壁は, かなり火熱を受け, 赤色硬化。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器(甕5, 壺2, 鉢1, 埴1, 坏7, 細片1,082点), 須恵器片4点, 石製模造品(勾玉1点, 白玉3点, 白玉半欠品1点), 滑石片1点。遺物は, カマドを中心に床面西側部を中心に出土。第337図6の壺は西コーナー部北西壁直下の覆土下層から正位で, 第338図13の坏は貯蔵穴の覆土から斜位で出土。



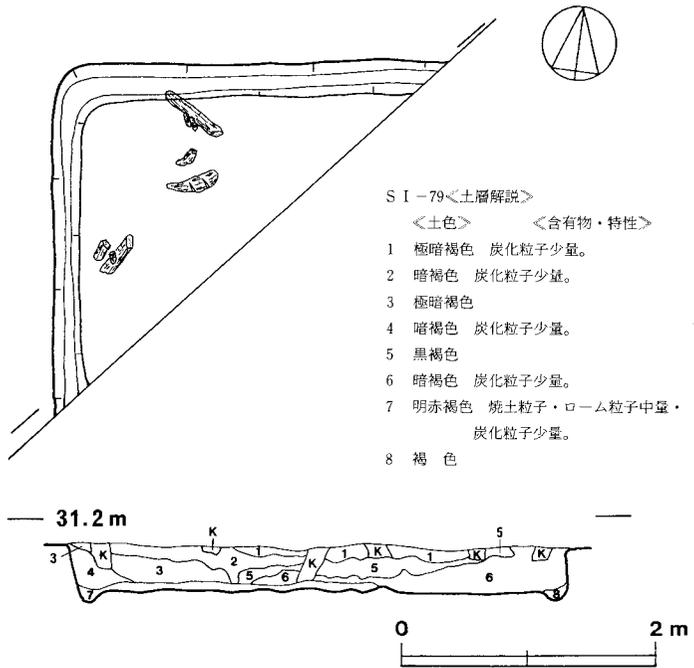
第104図 第78号住居跡実測図

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。また、本跡は、8本の主柱と10本の壁柱によって上屋を支えるという堅牢な構造をもつ住居跡であり、貯蔵穴も2基有している。

第79号住居跡 (第105図)

位置 D5e₅区。**重複関係** 無。**平面形** 方形と推定。**規模** (3.13)×(2.80)m。**壁** 垂直。壁高34~39cm。**壁溝** 幅13~19cm, 深さ7cm前後の規模を有し, 全周するものと思われる。**床** 平坦。硬い貼床。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器(甕1, 坏1, 細片113点), 石製模造品(白玉1点), 鉄滓(12点・232g), 炭化材。調査した北西コーナー付近に遺物が少量出土。全体に焼土が広がり, 炭化材がその上に折り重なるように出土。炭化材は, 面取りしたことが明瞭にわかる。



第105図 第79号住居跡実測図

所見 住居跡の一部(北西コーナー)を調査しただけであり, 主軸方向は不明, 調査部分から柱穴, 貯蔵穴, 炉, カマドは検出されなかった。本跡は, 遺物から古墳時代中期に比定される住居跡と思われ, 焼土・炭化材の出土状況から焼失家屋と思われる。

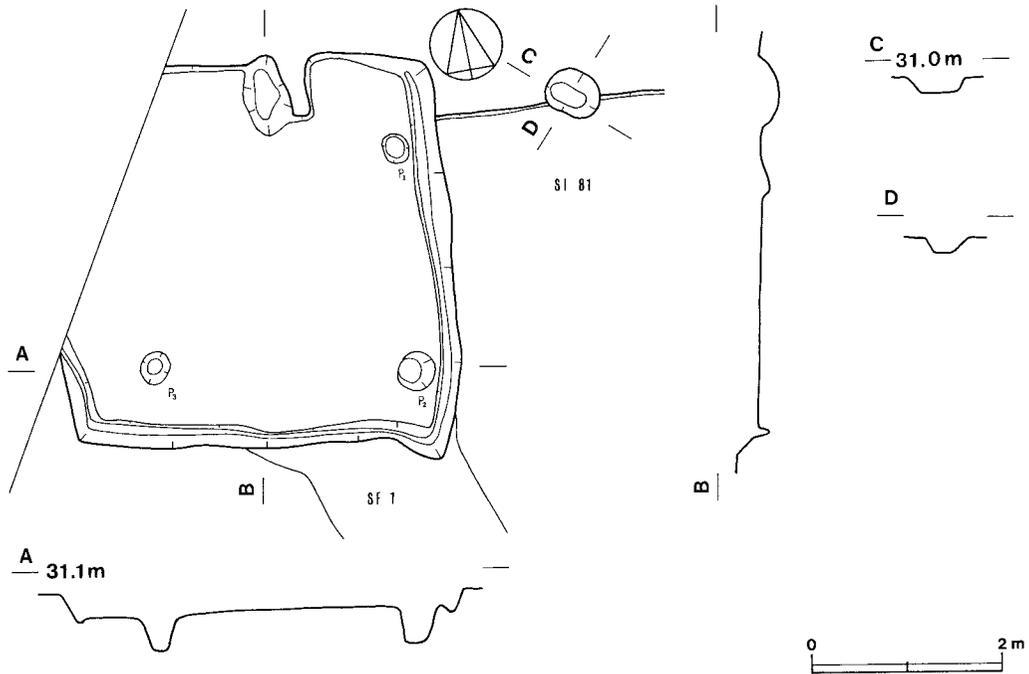
第80号住居跡 (第106図)

位置 D4a₀区。**重複関係** 本跡<SF-1, SI-81 (新旧関係不明)。**平面形** 方形。**規模** 4.18×4.14m。**主軸方向** N-12°-E。**壁** 外傾。壁高20~27cm。**壁溝** 幅10~14cm, 深さ8cm前後の規模を有し, 北壁を除き全周。**床** 平坦。床面中央部は硬い。**ピット** 3か所検出されずべて主柱穴。径32~42cm, 深さ34~38cm。**貯蔵穴** 無。**カマド** 北壁中央部に位置し, 粘土・砂で構築。袖部付近には, 凝灰岩片が出土し, 袖部の補強に使用された可能性がある。燃焼部は床面から18cm前後掘り窪められ, 煙道部は火床部から急な角度で立ち上がる。カマド内には, 焼土が

堆積。覆土 後世の遺構（SF-1）が住居跡の中央に重複しており，不明。

遺物 土師器（坏1，細片413点），須恵器（高台付碗1，細片13点），石製模造品（白玉1点），鉄製品（鉄鏃1点），滑石片4点。遺物は，小破片が殆どであり，実測可能な遺物は2点のみである。第338図2の高台付碗はカマド右側の壁付近の床面直上から逆位で出土。

所見 本跡は，遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第106図 第80・81号住居跡実測図

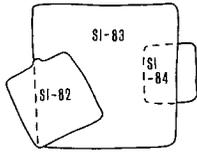
第81号住居跡（第106図）

位置 D5a₁区。重複関係 SI-80, 82, SK-200(新旧関係不明)。床 平坦。カマドの前方部に硬い床面を確認。カマド 北壁に付設されたと思われる，袖部・天井部は削除される。火床部は床面から15cm程掘り窪められる。カマド内には焼土・焼土ブロックが堆積。

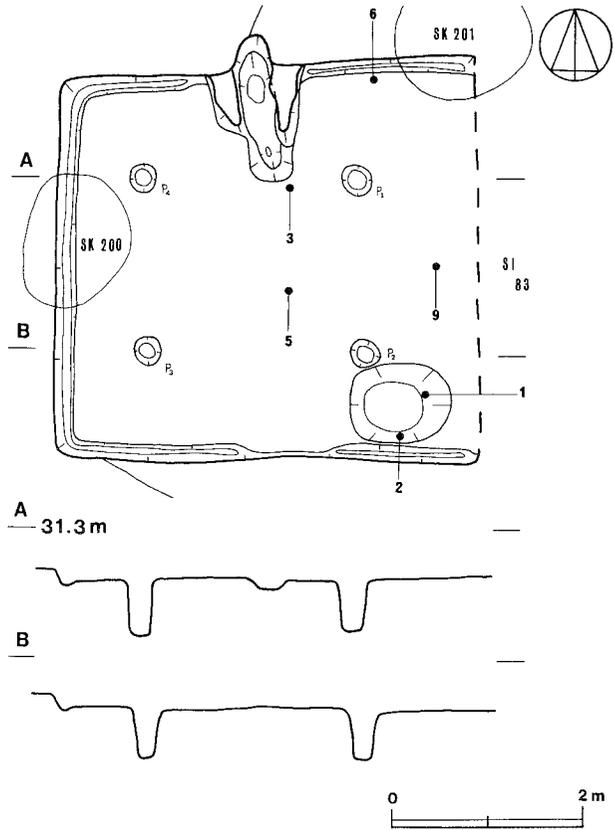
遺物 土師器（甕1，細片150点），須恵器片3点，滑石片1点。遺構確認面と床面が殆ど同一レベルであり，遺物はカマドの覆土やその周辺からのものに限られた。第339図1の甕はカマド覆土から潰れた状態で出土。

所見 本跡は，遺構確認面が殆ど床面のレベルであり，カマドとその周辺の硬い床面を検出できただけである。従って，平面形，規模，主軸方向，壁，覆土は不明であり，壁溝，ピット，貯蔵穴は検出できなかった。本跡の時期については，出土遺物から古墳時代後期のものと思われる。

第82号住居跡 (第107図)



位置 D5b₂区。重複関係 SI-83<本跡。SI-81, SK-200, 201(新旧関係不明)。**平面形** 長方形。**規模** [4.50]×4.12m。**主軸方向** N-5°-W。**壁** 外傾。壁高13cm前後。**壁溝** 幅12~18cm, 深さ7cm前後。北・西壁と南壁の一部に確認。東壁際の溝は不明確。**床** 平坦。中央部は硬く, 貼床。**ピット** 4か所検出され, すべて主柱穴。径30~35cm, 深さ52~60cm。底部は硬い。**貯蔵穴** 南東コーナー部に検出。平面形は径108×86cmの楕円形状を呈し, 深さは15cm。**カマド** 北壁中央部に付設, 粘土・砂によって構築。右側袖部には, 補強材として使用されたとされる凝灰岩が据えられて出土。火床部は床面から20cm程掘り窪め, 煙道部は火床から急な角度で立ち上がる。カマド内には焼土が堆積。袖の内壁は火熱を受けて赤色硬化。**覆土** 自然堆積。



第107図 第82号住居跡実測図

遺物 土師器 (甕3, 甑2, 高坏1, 坏3, 細片804点), 須恵器片1点。遺物は, 住居の東半分に多く出土。第340図6の高坏はカマド東側の北壁直下床面から正位で出土。

所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

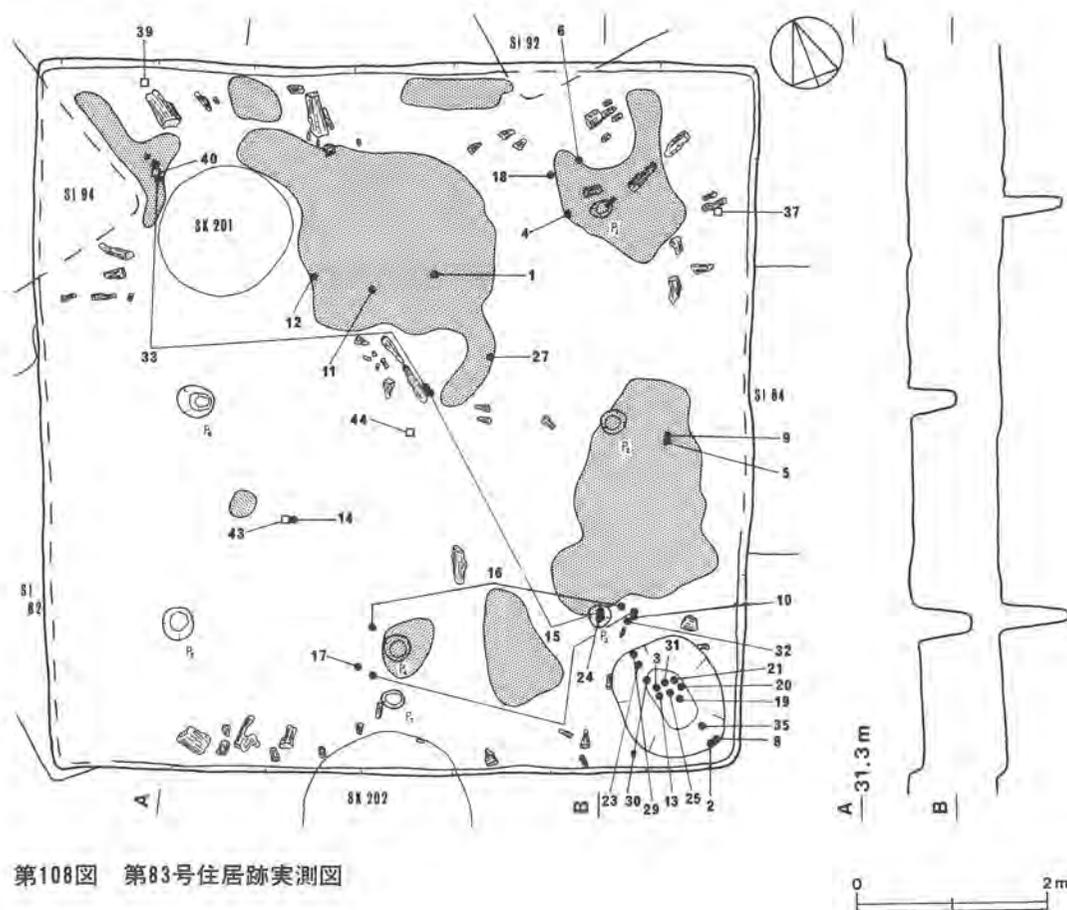
第83号住居跡 (第108図)

位置 D5b₃区。**重複関係** SI-84<本跡<SI-82, 本跡<SI-92, 本跡<SI-94。SK-201, 202(新旧関係不明)。**平面形** 方形。**規模** 7.65×7.56m。**主軸方向** N-26°-E。**壁** 外傾。壁高10~17cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。貼床。床面中央部は硬い。**ピット** 7か所。P₁~P₆。(径24~40cm, 深さ45~74cm)は主柱穴。**貯蔵穴** 南東コーナー部に検出。平面形は径129×110cmの不整形円形を呈し, 深さ116cm。**炉・カマド** 第82号住居跡との重複により, その有無は不明。**覆土** 自

然堆積。

遺物 土師器(甕9, 鉢1, 高坏14, 埴4, 坏7, 細片1, 631点), 須恵器片5点, 石製模造品(双孔円板4点, 白玉3点), 石製品(紡錘車1点, 提げ砥石1点, 砥石1点, 敲石1点), 礫6点, 炭化材。遺物は, 貯蔵穴周辺を中心に住居跡内の全域から出土。第342図12の高坏は中央部の床面直上から横位で, 第343図30の坏は貯蔵穴覆土から斜位で出土。壁付近の床面を中心に焼土及び炭化材が多量に出土。炭化材の中には, 篠と思われるものも含まれ, 規則的に並び重なって層状に出土している。

所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。また, 焼土や炭化材が多量に出土しており, 床面も随所に火熱を受けて赤色硬化している。これらの状態から, 本跡は, 焼失家屋と考えられる。



第108図 第83号住居跡実測図

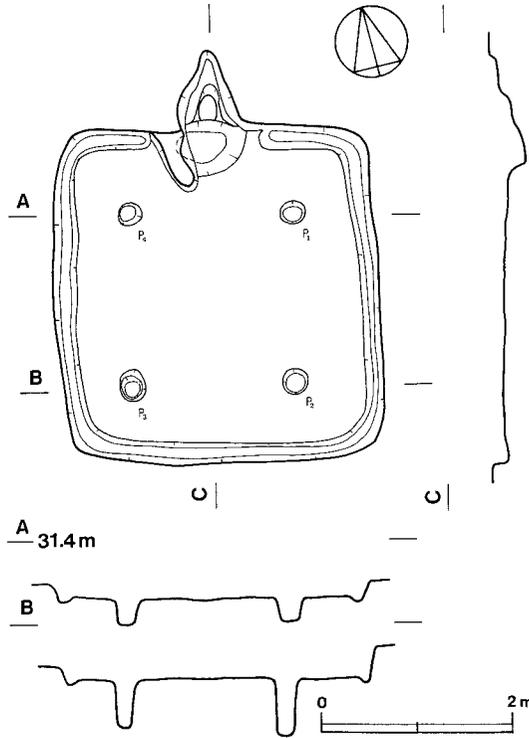
第85号住居跡 (第109図)

位置 D5b₄区。重複関係 無。平面形 長方形。規模 3.65×3.27m。主軸方向 N-16°-E。
壁 外傾。壁高12~30cm。壁溝 幅6~12cm, 深さ7cm前後で全周。床 平坦。中央部が硬い。

ピット 4か所。P₁~P₄(径25~34cm, 深さP₁・P₄が26cm, P₂・P₃が51~62cm) はすべて支柱穴。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部を75cm程掘り込み, 粘土・砂などで構築。火床は床面を12cm程掘り窪め, 焼き締まりは弱い。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり, 住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕1, 坏2, 細片315点), 須恵器片4点, その他, 流れ込みと思われる弥生式土器片2点が覆土から出土。

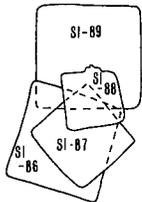
所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



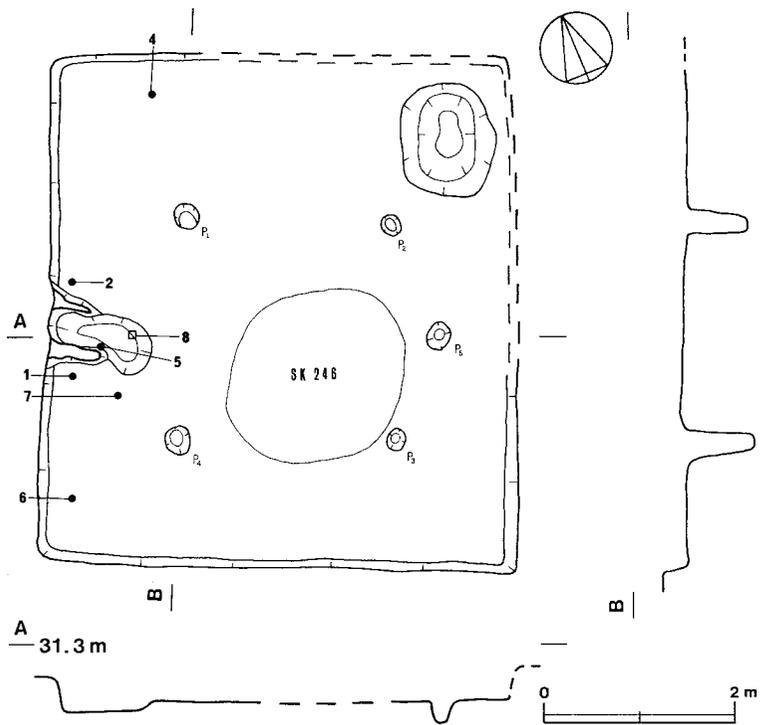
第109図 第85号住居跡実測図

第86号住居跡 (第110図)

位置 D5c₅区。重複関係 本跡と第87, 88, 89号住居跡は上下に重複が激しく, 土層観察の結果, 上記遺構の新旧関係は次の通りである。SI-89 < 本跡 < SI-87 < SI-88。SK-246(新旧関係不



明)。平面形 方形。規模 5.48×5.12m。主軸方向



第110図 第86号住居跡実測図

N-66°-W。壁 外傾。壁高27~38cm。壁溝 無。床 床面中央部は硬く、ほぼ平坦。ピット 5か所。P₁~P₄(径22~30cm、深さ45~78cm)は支柱穴。底部はいずれも硬い。P₅は、出入口部に伴う梯子ピット。貯蔵穴 東コーナー部に検出。平面形は径119×101cmの不整形円形を呈し、深さ130cm。カマド 北西壁中央部に付設され、粘土・砂で構築。袖部のみが残存。火床部は床面を10cm前後掘り窪め、煙道部は火床から急な角度で立ち上がる。カマド内覆土上・中層には粘土が多量に混入し、下層には焼土粒子・焼土ブロック及び灰が多量に堆積。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕3, 壺1, 甑1, 高坏1, 坏1, 細片224点), 須恵器片1点, 石製模造品(白玉1点)。遺物は、貯蔵穴やカマド周辺を中心に出土。第345図6の高坏は貯蔵穴の覆土下層から逆位で出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第87号住居跡 (第111図)

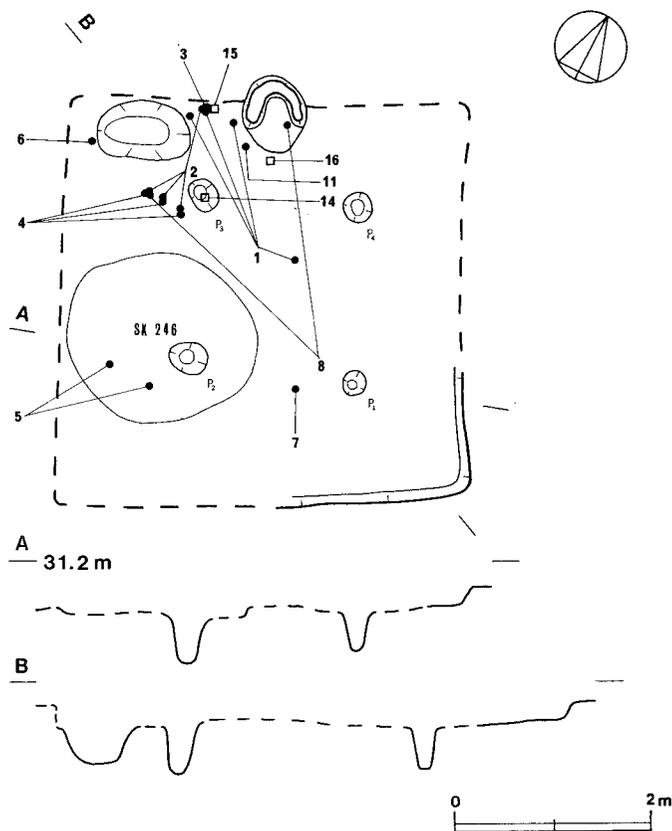
位置 D5c₅区。重複関係 第86号住居跡参照。平面形 方形と推定。規模 [4.43]×[4.18]m。主軸方向 N-29°-W。

壁 外傾。壁高19~20cm。壁溝 不明。床 第86号住居跡覆土上に硬く貼床される。

ピット 4か所。すべて支柱穴であり、径28~40cm、深さ28~53cm。貯蔵穴 西コーナー部に検出。平面形は径98×63cmの楕円形を呈し、深さ40cm。

カマド 北西壁中央部と思われる位置に付設され、粘土・砂によって構築。袖の内壁は火熱を受けて赤色硬化。火床部は床面と殆ど同一レベル。カマド内には焼土・焼土ブロックが堆積。燃

焼部中央から、凝灰岩の支脚が直立して出土。覆土 自然堆積。



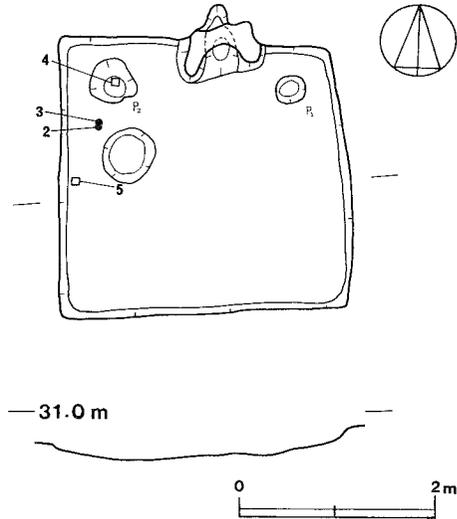
第111図 第87号住居跡実測図

遺物 土師器(甕7, 埴2, 坏3, 細片969点), 須恵器片11点, 土製品(支脚1点), 石製品(提げ砥石1点, 砥石1点), 鉄製品(不明2点)。遺物は, カマド周辺を中心に出土。

所見 本跡は, 重複が激しく, 平面形・規模は推定したものである。本跡の時期は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定されるものと思われる。

第88号住居跡 (第112図)

位置 D5b₅区。**重複関係** 第86号住居跡参照。**平面形** 方形。**規模** 3.07×2.82m。**主軸方向** N-1°-E。**壁** 不明。**壁溝** 無。**床** 黒色土にロームブロックを混入した貼床で, ほぼ平坦。カマドの前の部分は硬い。**ピット** 3か所。P₁・P₂(径31~50cm, 深さ18~21cm)は, 主柱穴。**貯蔵穴** 無。**カマド** 北壁中央部に位置し, 粘土・砂によって構築された天井部・両袖部が残存。火床部は床面とほぼ同一レベル。カマド内の覆土下層には焼土が堆積。**覆土** 自然堆積。



第112図 第88号住居跡実測図

遺物 土師器(坏1, 細片296点), 須恵器(高坏1, 蓋1, 細片3点), 石製模造品(双孔円板1点, 剣形品1点), 礫5点。遺物は, カマド周辺を中心に出土。

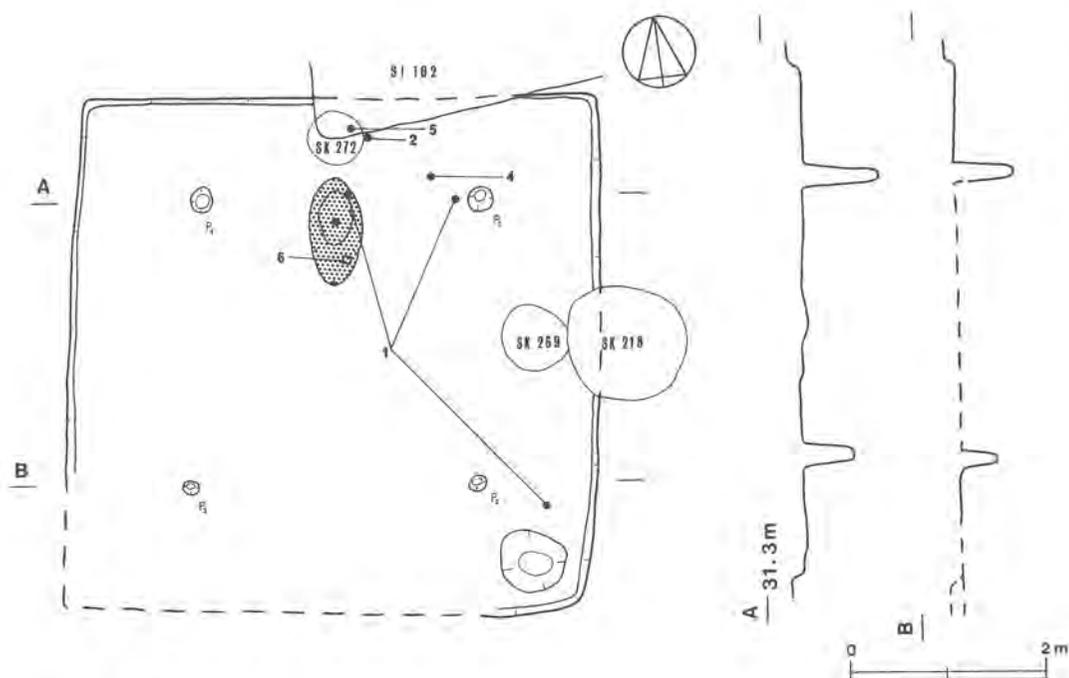
所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第89号住居跡 (第113図)

位置 D5a₆区。**重複関係** 本跡<SI-86<87<88, 本跡<SI-102。SK-218, 269, 272(新旧関係不明)。**平面形** 方形。**規模** 5.55×5.48m。**主軸方向** N-9°-E。**壁** 外傾。壁高11~14cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。床面中央部は硬い。**ピット** 4か所検出され, すべて主柱穴。径18~27cm, 深さ37~81cm。**貯蔵穴** 南東コーナー部に検出。平面形は径63cmの不整形円形で, 深さ78cm。**炉** 床面中央部のやや北寄りに位置した地床炉。平面形は, 長径113×短径53cmの長楕円形を呈する。炉床は床面を7cm程掘り窪め, 炉内には焼土がブロック化して堆積。炉床は火熱を受けて赤色変化。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器(高坏2, 埴1, 坏2, 細片140点), 石製品(炉石1点), 礫1点。遺物は, 主に炉や貯蔵穴の周辺から出土。

所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。



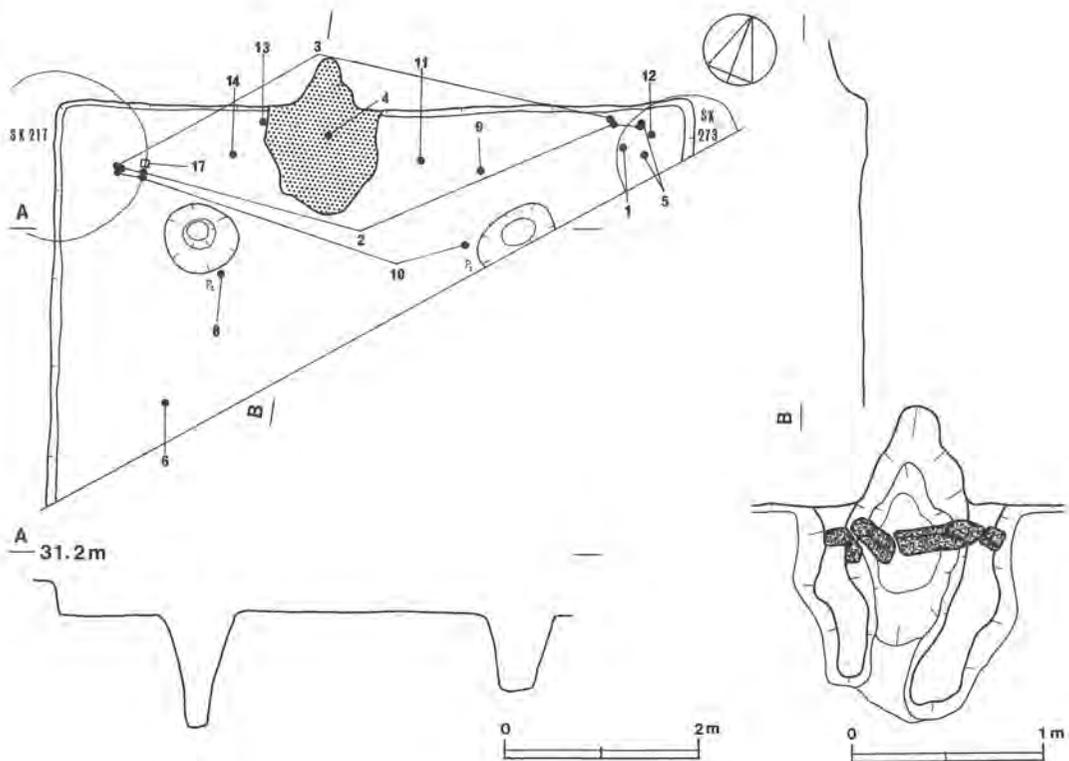
第113図 第89号住居跡実測図

第90号住居跡 (第114図)

位置 D5a₇区。重複関係 SD-10<本跡。SK-217, 273(新旧関係不明)。平面形 方形と推定。規模 6.70×(4.37)m。主軸方向 N-21°-W。壁 外傾。壁高37cm。壁溝 無。床 平坦。カマド付近から床面中央部は、極めて硬い。ピット 2か所で支柱穴。径79~87cm, 深さ(P₁-80cm, P₂-125cm)。断面形状は逆円錐形で、しっかりとした掘り方をもつ。貯蔵穴 無。カマド北壁中央部やや西寄りに付設。粘土・砂によって構築された両袖が残存。袖部には、土師器片を混入して補強し、袖部の住居壁面に接する部分には凝灰岩を直立させて据えている。また、両袖の間には、凝灰岩が半分に折れ曲がった状態で出土しており、天井部に凝灰岩を差し渡していたものと思われる。火床部は床面を8cm程掘り窪めており、煙道部は燃焼部奥壁から緩やかな傾斜をもって外側へ延びている。カマド内の覆土下層には焼土及び焼土ブロックが層状に堆積。火床部・袖の内壁・煙道部は、火熱を受けて赤色硬化。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕6, 鉢1, 高坏1, 坏7, 細片776点), 須恵器(坏2, 細片19点), 土製品(紡錘車1点), 石製品(敲石1点), 礫2点。遺物は、住居跡内の全域から出土。第349図12の坏は床面から逆位で出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。本跡のカマドは、両袖部及び天井部に凝灰岩を使用し、堅牢な構造をとったことが窺える。



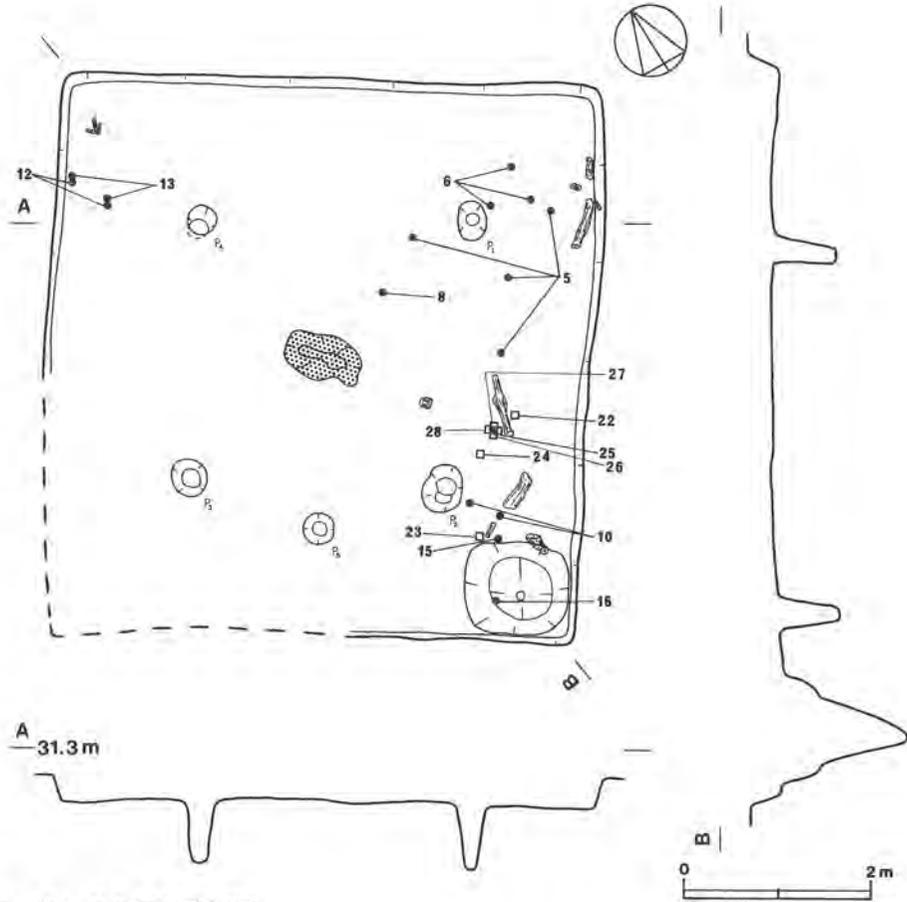
第114図 第90号住居跡・カマド実測図

第91号住居跡 (第115図)

位置 C5j₄区。**重複関係** 本跡は、第92、93、97、98号住居跡と複雑に切り合っており、その新旧関係は次の通りである。本跡<SI-97、本跡<SI-92<SI-93、本跡<SI-98。**平面形** 方形。**規模** 5.97×5.80m。**主軸方向** N-34°-E。**壁** 外傾。壁高27~35cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。床面中央部は硬い。**ピット** 5か所。P₁からP₄(径33~52cm、深さ54~68cm)が支柱穴。底部は極めて硬い。**貯蔵穴** 南コーナー部に検出。平面形は112×100cmの隅丸方形を呈し、深さ133cm。断面形は逆円錐形。**炉** 床面中央部に位置する地床炉。平面形は長径81×短径51cmの不定形。炉床は、床面から殆ど掘り窪めておらず、強く火熱を受けてロームが赤変硬化。炉の下層には焼土がブロック化して堆積。**覆土** 自然堆積。

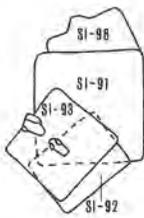
遺物 土師器(甕4、甑2、鉢1、高坏4、埴2、坏2、細片710点)、須恵器(甗1、高坏1、蓋1、細片2点)、土製品(紡錘車1点)、石製模造品(白玉8点)、石製品(砥石2点)、滑石片1点、炭化材。遺物は、炉及び貯蔵穴周辺から出土。第351図5の甑は南部床面から正位で、第352図16の甗(須恵器)は貯蔵穴覆土上層から正位で出土。

所見 本跡は、遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。住居跡の南東部からは多くの炭化材が出土しており、焼失家屋の可能性はある。

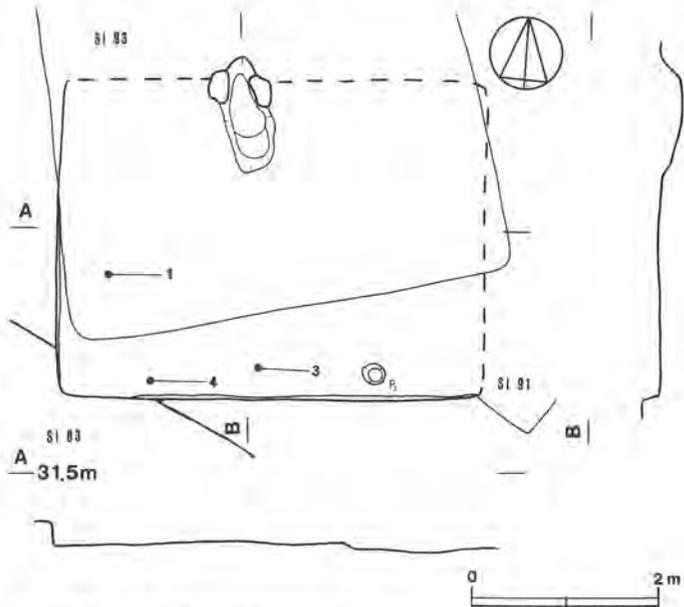


第115図 第91号住居跡実測図

第92号住居跡 (第116図)



位置 D5a区。重複関係
SI-83<本跡, 他は第91号住
居跡参照。平面形 長方形。
規模 [4.54]×3.45m。主軸
方向 N-4°-W。壁 垂直。
壁高19~26cm。壁溝 無。床



第116図 第92号住居跡実測図

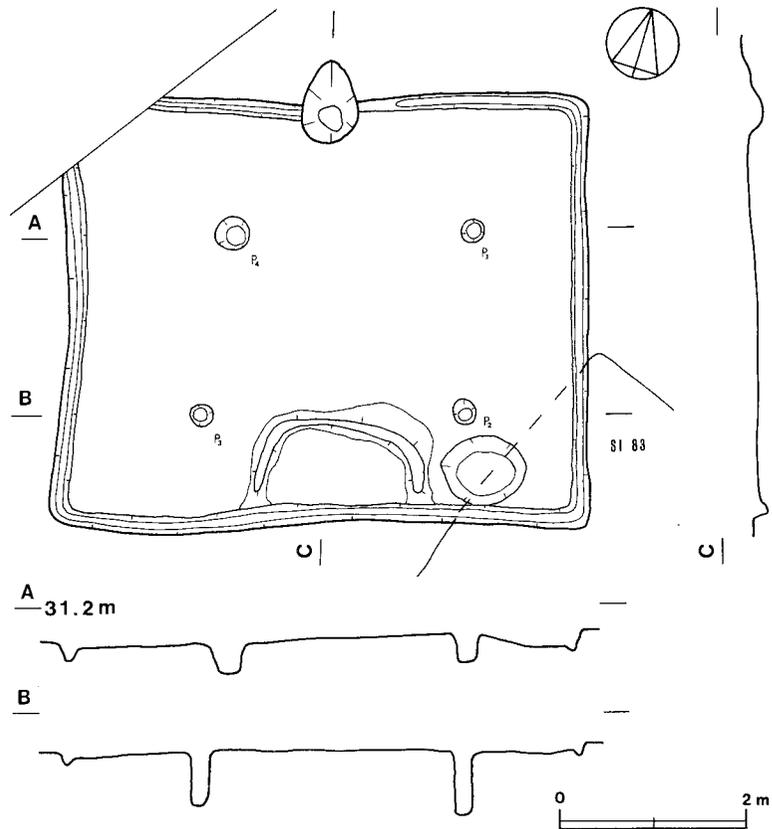
平坦。中央部付近が硬い。ピット 1か所。径23×21cm, 深さ25cmで支柱穴。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部からやや西寄りに付設。壁面を25cm程掘り込み, 粘土・砂などで構築。火床は床面を22cm程掘り窪め, 焼き締まりは弱い。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり, 住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕1, 甑2, 高坏1, 細片455点), 須恵器片7点, 鉄製品(鎌1点, 釘1点)。遺物は住居の全域から出土。

所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第94号住居跡 (第117図)

位置 C5j₁区。重複関係 SI-83<本跡。平面形 長方形。規模 5.73×4.50m。主軸方向 N-12°-W。壁 外傾。壁高8cm前後。壁溝 幅11~17cm, 深さ12cm前後で全周。床 平坦。出入り口部からカマドに至る床面中央部は硬い。南壁中央部付近の床面には, 土手状の高まりを有し, 出入り口部に伴う施設と考えられるが, 梯子ピットは検出されない。ピット 4か所検出され, いずれも支柱穴。径24~34cm。深さはP₁・P₄が30~31cm, P₂・P₃が60~68cm。貯蔵穴 南東コーナー部に検出。平面形は径92×71cmの楕円形を呈し, 深さ45cm。カマド 北壁中央部に付設。天井部・袖部共に崩壊。遺存状態は極めて悪い。火床部は, 床面を15cm程掘り窪めている。燃烧部奥壁には若干火熱を受けた痕跡が認められ, カマド内の焼土の堆積はわずかである。覆土 自然堆積。



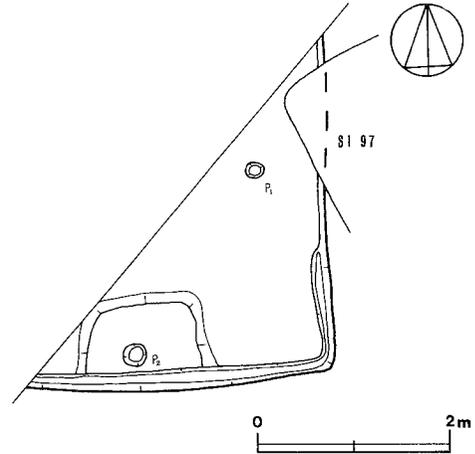
第117図 第94号住居跡実測図

遺物 土師器（甕1，坏1，細片220点）。遺物は，住居跡の全域から出土しているが，細片が殆どである。

所見 本跡は，遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第96号住居跡（第118図）

位置 C5i₃区。**重複関係** 本跡<SI-97。**平面形** 方形と推定。**規模** (3.57)×(3.26)m。**主軸方向** N-4°-W。**壁** 垂直。壁高17~18cm。**壁溝** 幅8~16cm，深さ5cmの規模を有し，南壁際及び東壁際の一部で検出。**床** 平坦。壁近くまで硬い。南壁中央部付近には，出入り口部に伴う施設と考えられるP₂を取り囲んだ極めて硬い半円状の若干の高まりを検出。**ピット** 2か所。径18~24cm，深さ(P₁-14cm，P₂-25cm)。P₂は，出入り口部に伴う梯子ピット。底部は硬い。P₁は，性格不明。



第118図 第96号住居跡実測図

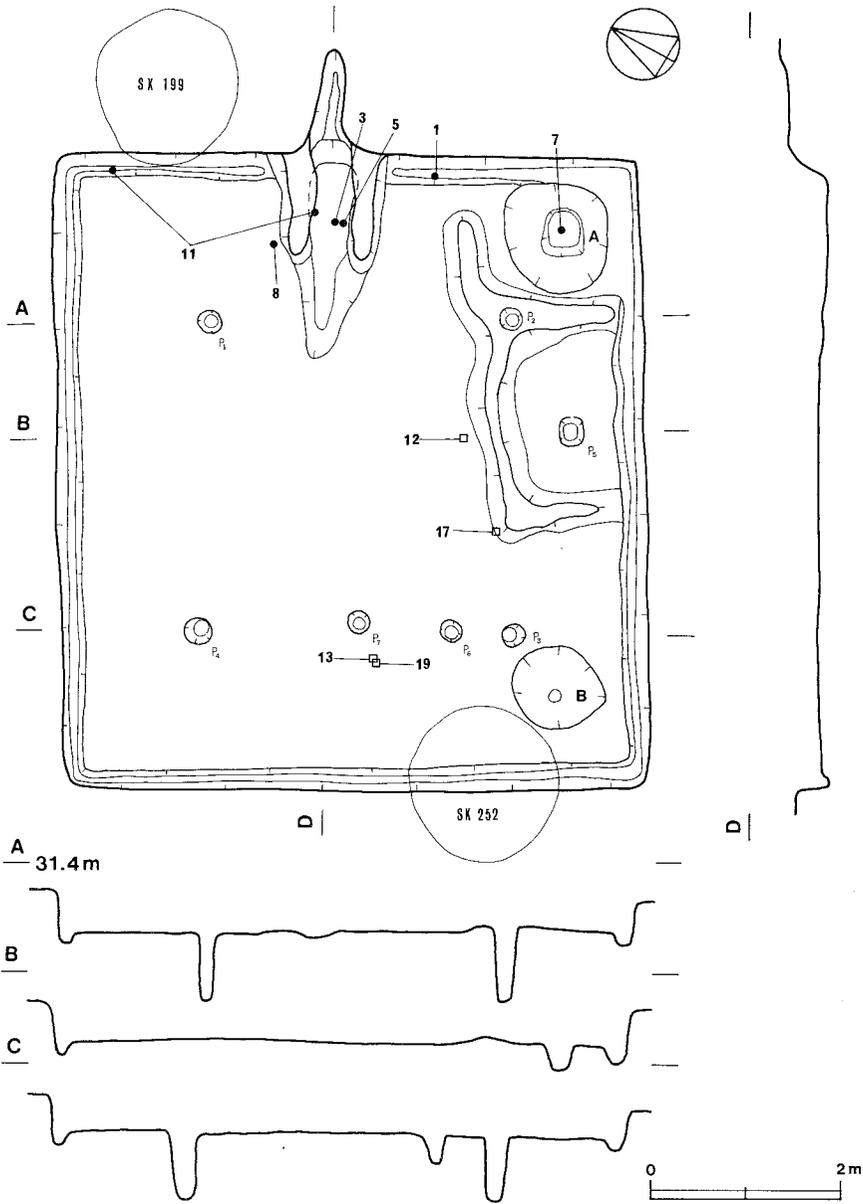
覆土 自然堆積。

遺物 土師器（高坏1，細片66点）。遺物は，細片が殆どである。

所見 住居跡の南東コーナーのみの調査であり，貯蔵穴，炉，カマドの存在は確認できなかった。本跡は，遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第97号住居跡（第119図）

位置 C5i₃区。**重複関係** SI-91<本跡<SI-93，SI-96<本跡。SK-199，252（新旧関係不明）。**平面形** 方形。**規模** 6.77×6.22m。**主軸方向** N-63°-E。**壁** 垂直。壁高27~49cm。**壁溝** 幅15~23cm，深さ15cm前後で全周。**床** 平坦。床面中央部は，極めて硬い。南壁付近の床面には，梯子ピットと貯蔵穴を囲んで土手状の高まりがみられる。幅40~50cm，床面からの比高は6~10cmで，床面にロームを貼って敲击締めた状態が明瞭にわかる。この土手状の高まりは，出入り口部に伴う梯子ピットの位置から考えて出入り口部に関わる施設ととらえられる。**ピット** 7か所。P₁~P₄（径25~31cm，深さ72~80cm）が支柱穴。P₅（径31×25cm，深さ27cm）は，出入り口部に伴う梯子ピット。底部は，粘土を貼って突き固めており極めて硬い。南側の壁面には梯子の用材が当たっていたためか方形にロームが硬化。底部の形状から，梯子は，角材を用いた可能性が考えられる。**貯蔵穴** 2か所。貯蔵穴Aは，南東コーナー部に検出。平面形は径117×109cmの不整楕円形を呈し，深さ90cm。貯蔵穴Bは，南西コーナー部に検出。平面形は径90cmの円



第119図 第97号住居跡実測図

形を呈し、深さ97cm。この貯蔵穴Bには、覆土上面に硬く貼床がなされており、途中から貯蔵穴としての機能を失っていたものと思われる。カマド 東壁中央部に付設され、粘土・砂で構築。天井部は崩落。火床部は平坦で床面を10cm程掘り窪め、煙道部は奥壁から緩やかな傾斜をもって屋外へ延びている。カマド内の覆土下層には、焼土・焼土ブロックが堆積。袖の内壁は火熱を受け粘土が赤色硬化。覆土 自然堆積。

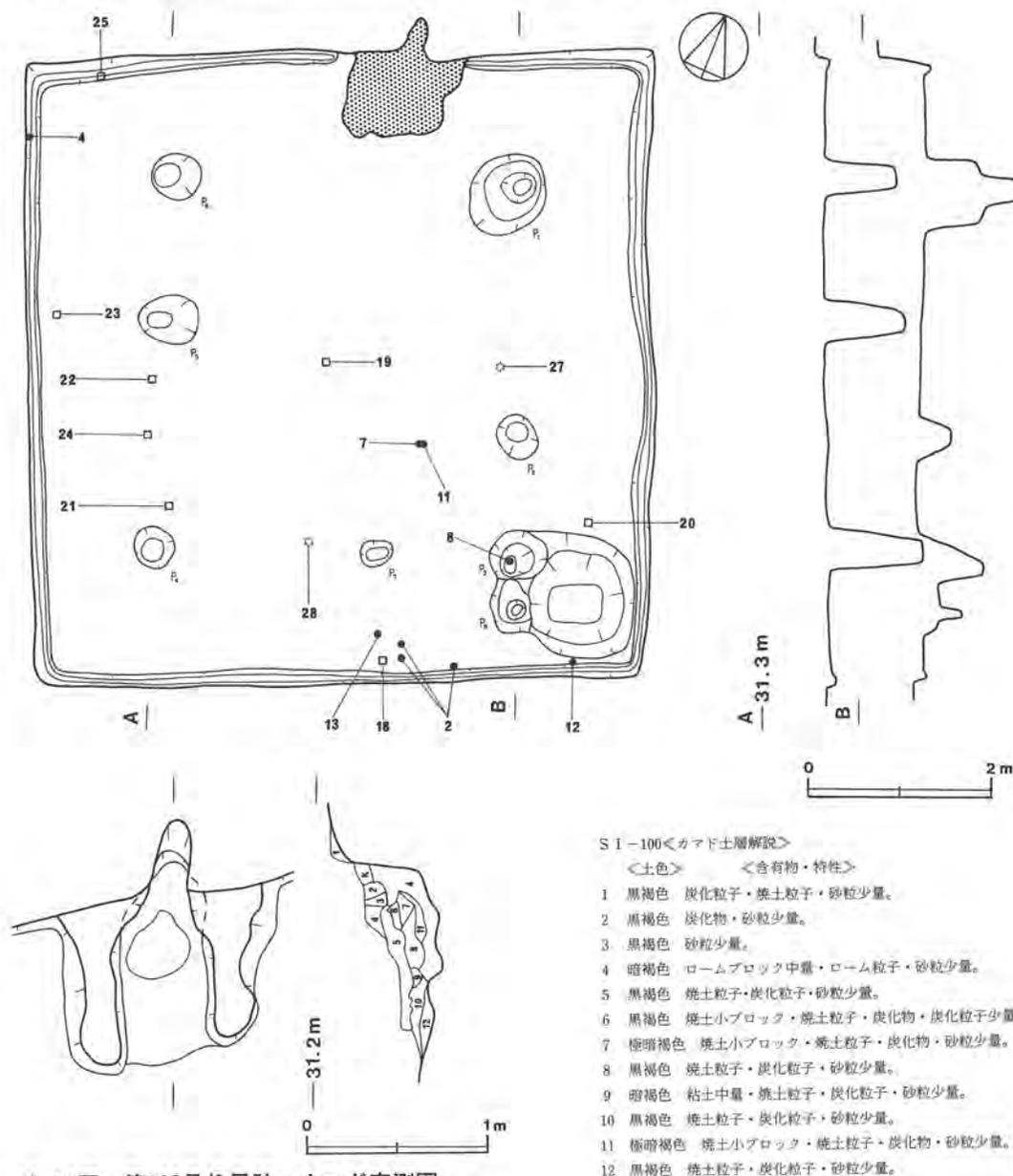
遺物 土師器 (甕3, 壺1, 甗1, 高坏4, 埴1, 坏1, 細片1,217点), 須恵器 (甕1, 細片

7点), 石製模造品(双孔円板3点, 勾玉1点, 白玉5点), 鉄製品(刀子1点), 滑石片8点, 礫6点。遺物は, カマド及び貯蔵穴の周囲から出土。第353図3の壺, 5の高坏はカマド覆土から逆位で, 第354図11の須恵器の甕は北東コーナーの壁直下の床面から潰れた状態で出土。

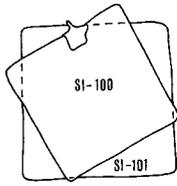
所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第100号住居跡(第120図)

位置 C5h₅区。重複関係 SI-101<本跡。平面形 方形。規模 7.07×6.93m。



第120図 第100号住居跡・カマド実測図



主軸方向 N-28°-W。**壁** 垂直。壁高55~58cm。**壁溝** 幅8~18cm、深さ5~15cmで全周。床 平坦。出入り口部からカマドに至る床面中央部は、硬い貼床。**ピット** 8か所。P₁~P₆(径48~100cm、深さP₂37cm、他は72~105cm)が支柱穴。いずれも、底部は硬く、しっかりした掘り方。P₇(径36cm、深さ26cm)は、出入り口部に伴う梯子ピット。P₈は、性格不明。**貯蔵穴** 南東コーナー部に検出。平面形は径137cmの不整形円形を呈し、深さ88cm。**カマド** 北壁中央部やや東寄りに付設。粘土・砂によって構築された両袖部が残存。火床部は、床面から10cm程掘り窪めて構築。燃焼部奥壁は、第101号住居跡の壁面に一致。煙道部は燃焼部奥壁から緩やかな角度で住居の外側に延びている。カマド内には、焼土粒子・焼土ブロックが堆積。袖の内壁は顕著に火熱を受け、粘土が赤色硬化。燃焼部左側には、凝灰岩の支脚が立った状態で出土。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器(甕5、甑1、高坏3、埴1、坏7、細片4,887点)、須恵器片32点、鉄製品(鎌2点、鋸1点)、石製模造品(双孔円板4点、勾玉1点)、石製品(水晶玉1点、紡錘車1点、砥石1点、敲石1点)、礫1点。遺物は、住居跡内の全域から出土。第355図8の高坏は南東コーナーの床面から、13の坏は南壁直下の下層から出土。

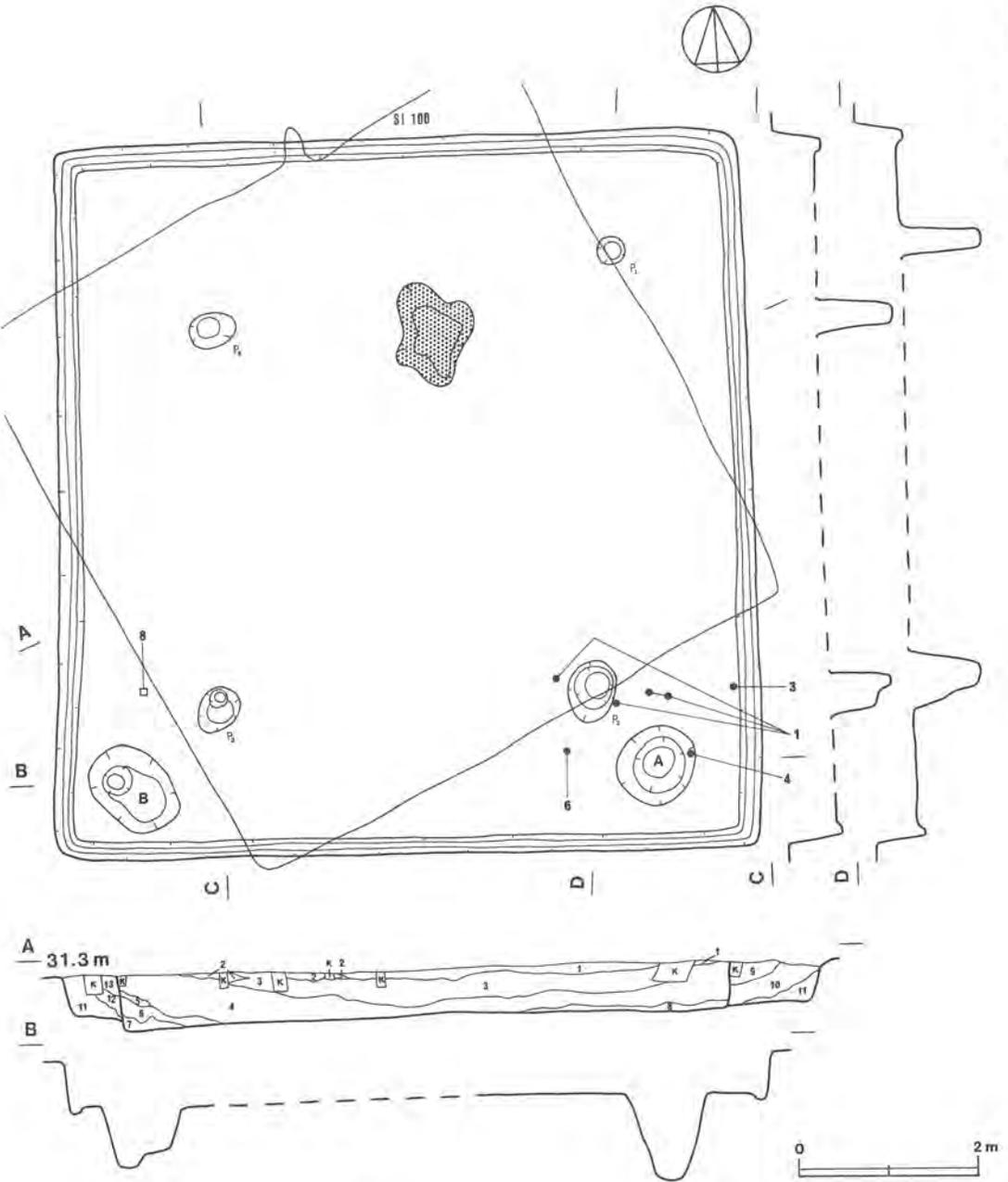
所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第101号住居跡(第121図)

位置 C5h₅区。**重複関係** 本跡<SI-100。**平面形** 方形。**規模** 8.31×8.12m。**主軸方向** N-3°-E。**壁** 垂直。壁高45~57cm。**壁溝** 幅11~17cm、深さ7cm前後で全周。床 床面の大部分は第100号住居跡によって削除され、各コーナー部のみが残存。残存床面の状態は、概ね平坦。**ピット** 4か所。P₁~P₄(径33~72cm、深さ71~99cm)は、支柱穴。**貯蔵穴** 2か所。貯蔵穴Aは、南東コーナー部に検出。平面形は径92cmの円形を呈し、深さ99cm。貯蔵穴Bは、南西コーナー部に検出。平面形は径110×79cmの楕円形を呈し、深さ68cm。**炉** 床面中央部北寄りに位置する。第100号住居跡の構築の際、上部は失われ、第100号住居跡の貼床下から炉床のみが検出。規模は長径124cm、短径101cmで、平面形は不整形楕円形。炉床には、焼土・灰が広がり、ロームは赤色硬化。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器(甕2、高坏4、細片808点)、須恵器片6点、石製模造品(双孔円板1点、剣形品1点、白玉1点)、滑石片1点。遺物は、第100号住居跡との重複により、各コーナーから出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。



S1-100, 101 <土層解説>

<土色> <含有物・特性>

S1-101

- 1 黒褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・砂粒少量。
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量。
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量。
- 4 黒褐色 炭化粒子・砂粒少量。
- 5 黒褐色 炭化粒子少量。

- 6 黒褐色
- 7 黒色 砂粒少量。
- 8 黒褐色 コーム粒子中量。

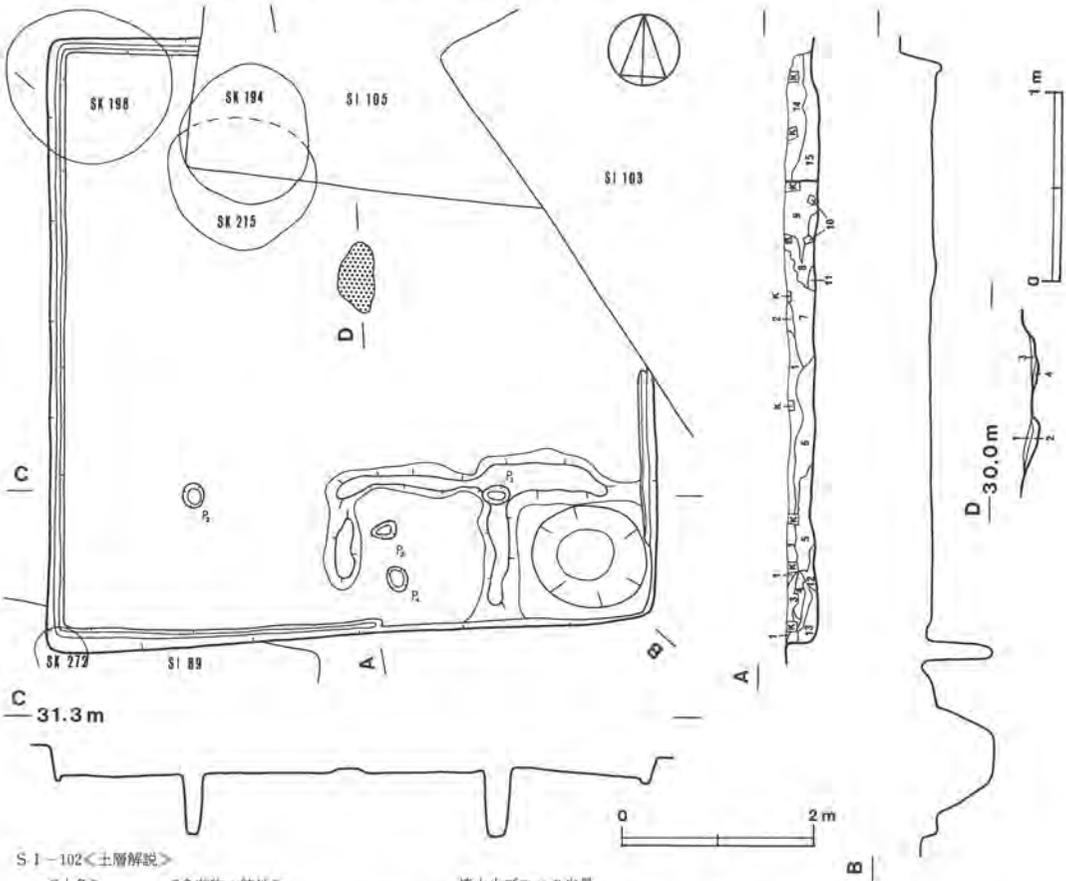
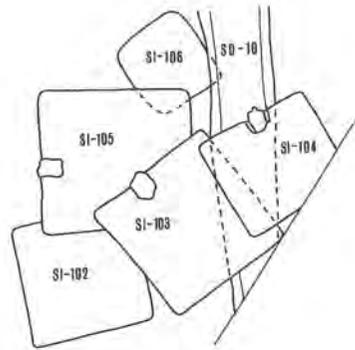
S1-100

- 9 褐色 粘土多量・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量。
- 10 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土少量。
- 11 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土少量。
- 12 暗赤褐色 焼土粒子中量・焼土小ブロック・炭化粒子・粘土少量。
- 13 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量。

第121図 第101号住居跡実測図

第102号住居跡 (第122, 123図)

位置 C5j₆区。重複関係 SI-89<SI-106<SD-10<本跡<SI-105<SI-103<SI-104。SK-194, 198, 215, 272(新旧関係不明)。平面形 方形。規模 6.57×6.44m。主軸方向 N-0°。壁 垂直。壁高23~38cm。壁溝 幅8~12cm, 深さ5cm前後で全周するものと推定。床 平坦。出入り口部から床面中央部は, 硬い貼床。南壁中央部付近には, 梯子ピットと貯蔵穴を囲んで土手



S I-102<土層解説>

<土色> <含有物・特性>

- 1 黒褐色 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 2 褐色 ローム粒子中量・炭化粒子・炭化物少量。
- 3 暗赤褐色 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 4 赤褐色 炭化粒子・焼土小ブロック少量・焼土粒子中量。
- 5 暗褐色 炭化粒子・焼土粒子・焼土小ブロック少量。
- 6 黒褐色 炭化粒子・焼土粒子・砂粒少量。
- 7 暗褐色 炭化粒子・炭化材・焼土粒子・

焼土小ブロック少量。

- 8 黒褐色 炭化材・焼土粒子・焼土小ブロック少量。
- 9 黒褐色 炭化粒子・炭化物・焼土粒子少量。
- 10 褐色 ローム粒子多量。
- 11 赤褐色 炭化物・焼土小ブロック少量・焼土粒子中量。
- 12 黒褐色 炭化粒子・焼土粒子・焼土小ブロック少量。
- 13 暗褐色 炭化粒子・焼土小ブロック少量。

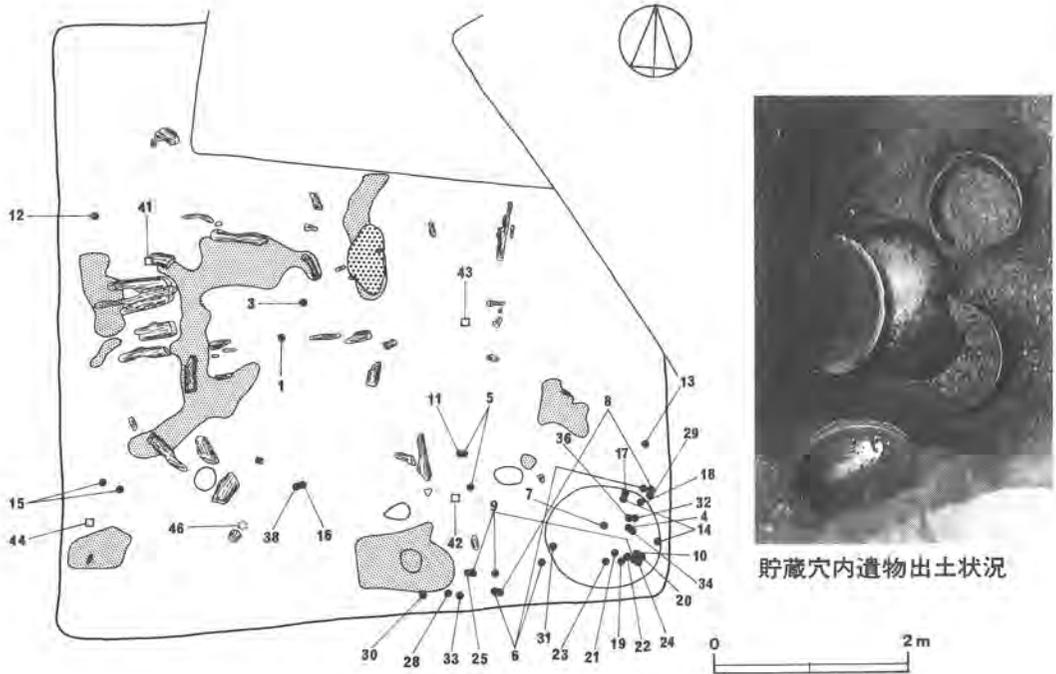
14 暗褐色 (SI103覆土)。

15 暗褐色 (SI103覆土)。

<炉土層解説>

- 1 極暗褐色 炭化物・焼土粒子少量・焼土小ブロック多量。
- 2 暗赤褐色 炭化粒子・焼土粒子少量・焼土小ブロック多量。
- 3 褐色 焼土粒子・焼土小ブロック少量。
- 4 暗赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック少量。

第122図 第102号住居跡実測図



第123図 第102号住居跡遺物出土状況図

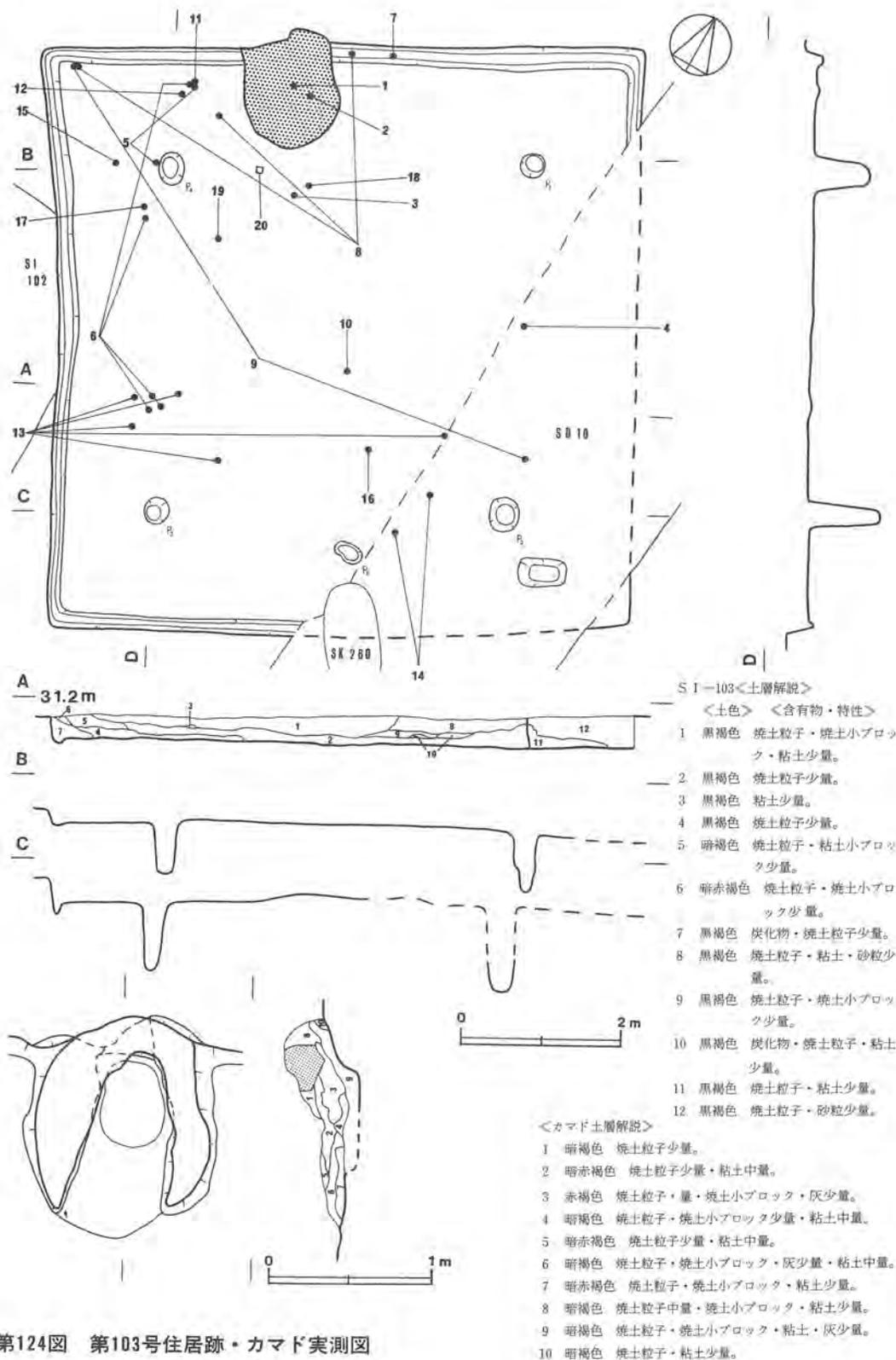
状の高まりが検出され、出入り口施設と考えられる。ピット 4か所。P₁・P₂ (径25~30cm, 深さ65~73cm) は、支柱穴。P₃ (径27cm, 深さ9cm) は出入り口部に伴う梯子ピット。P₄は性格不明。貯蔵穴 南東コーナー部に検出。平面形は径121×108cmの円形を呈し、深さ64cm。炉 床面中央部やや北寄りに位置する。平面形は、長径75cm, 短径39cmの不整楕円形。炉内には、焼土・焼土ブロックが堆積。炉床は赤色硬化。覆土 自然堆積。

遺物 土師器 (甕9, 壺1, 甑3, 鉢1, 高坏3, 埴9, 坏12, 埴1, 細片1,645点), 須恵器片4点, 石製模造品 (双孔円板1点, 白玉3点), 石製品 (砥石2点, 双孔石製品1点), 鉄製品 (刀子1点), 礫7点, 炭化材。遺物は、住居跡内の全域から出土。第359図10の壺は貯蔵穴覆土上層から横位で、第360図15の高坏は南西コーナー西壁直下の床面から潰れた状態で出土。また、西壁付近からは、炭化材が多量の焼土と共に出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代中期に比定される住居跡と思われ、焼失家屋である。

第103号住居跡 (第124図)

位置 C5j_s区。重複関係 住居跡・堀との新旧関係は、第102号住居跡を参照。SK-260 (新旧関係不明)。平面形 方形。規模 7.47×7.24m。主軸方向 N-28°-W。壁 垂直。壁高23~31cm。壁溝 幅10~23cm, 深さ10cm前後で全周するものと推定。床 平坦。出入り口部からカマド



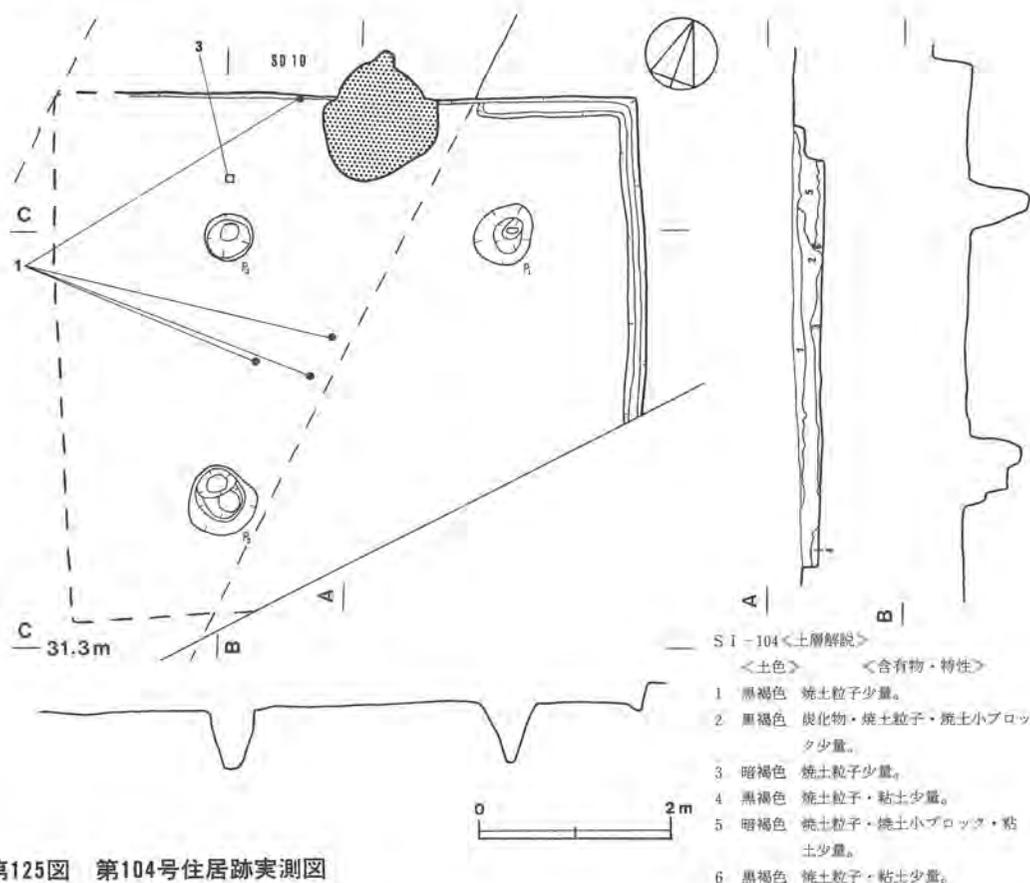
第124図 第103号住居跡・カマド実測図

にかけての床面中央部は、極めて硬い貼床。南壁中央部付近の出入り口部の梯子ピットを囲んで土手状の高まりが認められる。この高まりは、貼床上にロームを貼って構築。ピット 5か所。P₁からP₄(径30~43cm, 深さ66~109cm)が、支柱穴。底部は極めて硬い。P₅は出入り口部に伴う梯子ピット。貯蔵穴 南東コーナー部に位置する。第10号堀の覆土に構築され、第10号堀の底部から貯蔵穴下部の掘り方のみ検出。床面から底部までの深さは、約100cm。カマド 北壁中央部やや西寄りに付設。粘土・砂によって構築された袖部・天井部共残存。燃焼部は住居壁面の内側に位置し、火床部は床面を数センチ掘り窪め、カマド内には、焼土・焼土ブロックが厚く堆積。袖の内壁・天井部等の焼けは顕著。長期間の使用を窺わせる。覆土 自然堆積。

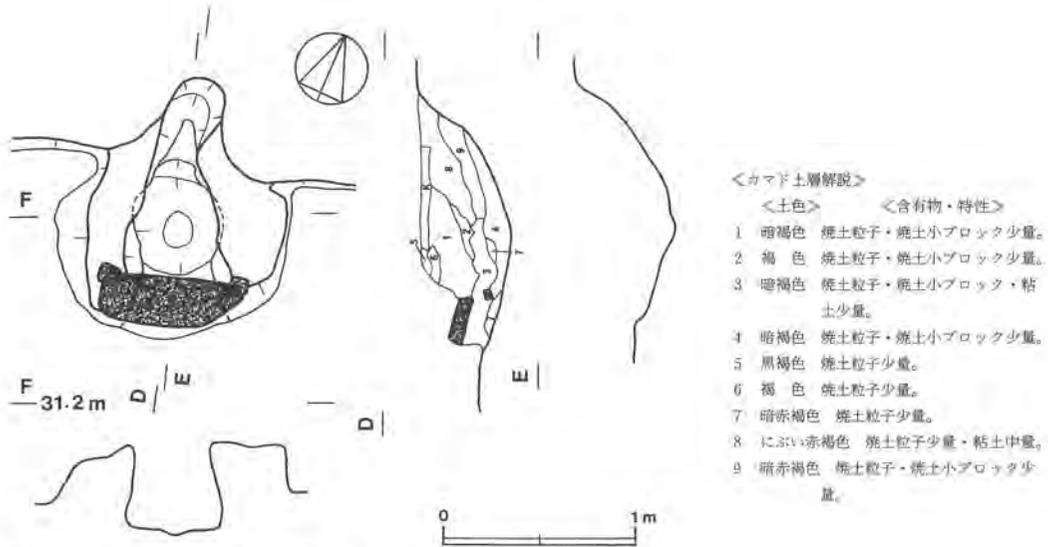
遺物 土師器(甕7, 甑1, 高坏3, 坏8, 細片2,691点), 須恵器片13点, 石製品(支脚1点, 敲石2点), 滑石片7点。遺物は、住居跡内の全域から出土。第364図14・16の坏は共に出入り口付近の床面直上から出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第104号住居跡(第125, 126図)



第125図 第104号住居跡実測図



第126図 第104号住居跡カマド実測図

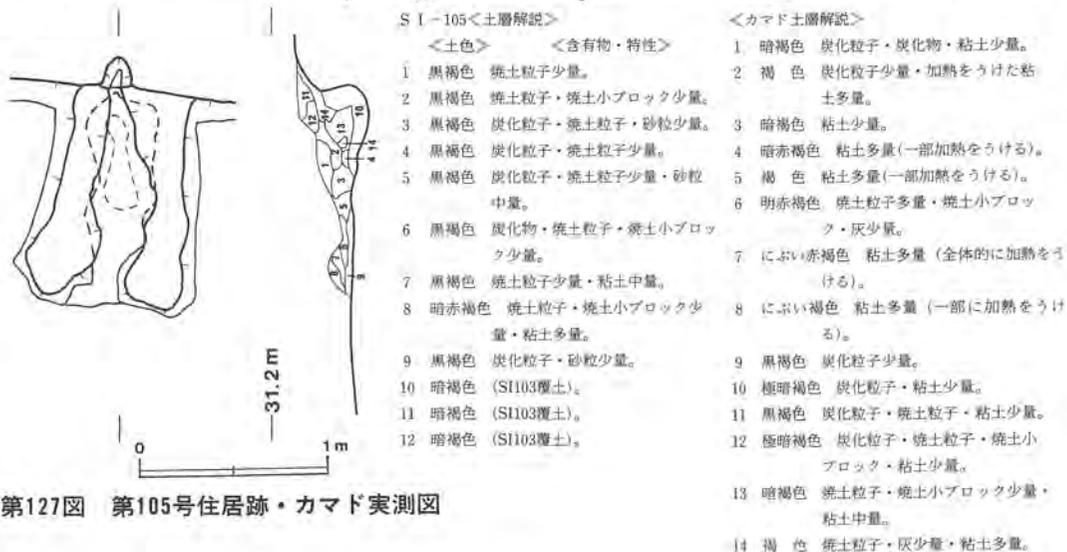
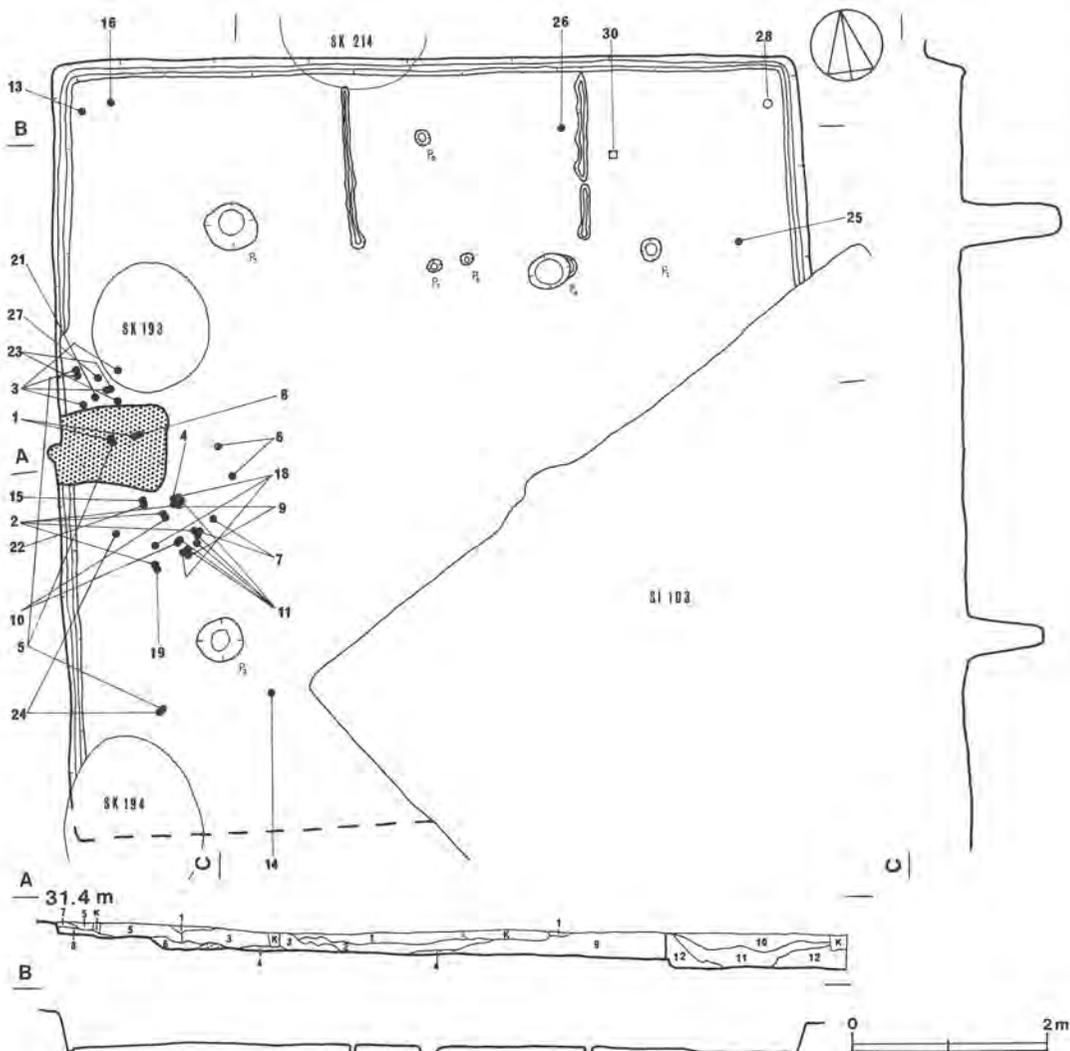
位置 C5i₉区。重複関係 SI-110<本跡。その他の住居跡・堀との新旧関係は第102号住居跡参照。**平面形** 方形と推定。規模 [6.16]×[5.60]m。主軸方向 N-18°-W。壁 垂直。壁高 24~40cm。壁溝 幅12~15cm、深さ8cm前後で全周するものと推定。床 平坦。カマド前から床面中央部にかけて硬い貼床。ピット 3か所。P₁からP₃(径52~77cm、深さ56~63cm)が主柱穴。底部は、極めて硬い。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部に付設。粘土・砂によって構築された両袖部が残存。袖部先端には凝灰岩が補強材として据えられ、その上には、天井部に用いたと思われる凝灰岩(74×25×7cm)が、差し渡されている。これらのことから本跡のカマドは、堅牢な構造をとっていることが窺える。燃焼部は住居壁面の内側に位置し、火床部は床面から14cm程掘り窪められている。煙道部は火床から緩やかな傾斜をもって屋外へ延びている。袖の内壁は、顕著に火熱を受け赤色硬化。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕1、坏1、細片1,981点)、須恵器片17点、石製模造品(双孔円板1点)、石製品(敲石1点)、礫13点。遺物は、住居跡内の全域から出土しているが、細片が殆どである。第364図2の坏は南壁直下の床面から正位で出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第105号住居跡 (第127図)

位置 C5i₇区。重複関係 住居跡・堀との新旧関係は、第102号住居跡参照。SK-193, 194, 214(新旧関係不明)。**平面形** 方形。規模 [8.23]×8.03m。主軸方向 N-83°-W。壁 外傾。壁高 30~39cm。壁溝 幅8~12cm、深さ7cm前後で全周するものと推定。床 平坦。床面中央部は硬



い。北壁中央部付近の床面には、間仕切りのためと思われる溝が2条掘られている。規模は、幅3～12cm、深さ15cm前後を有し、板状のものが嵌め込まれていたものと考えられる。2条の溝の間の床面は、比較的柔らかいロームである。ピット 7か所。P₁～P₃(径23～55cm、深さ82～105cm)が支柱穴。南東コーナー部の支柱穴は検出されなかった。P₄～P₇は、間仕切り施設に伴うものと思われ、いずれもしっかりとした掘り方である。貯蔵穴 無。カマド 西壁中央部に付設され、粘土・砂で構築。燃焼部奥壁は住居壁面とほぼ一致。火床部は、床面とほぼ同一レベル。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。焚き口付近には焼土が堆積。両側の袖の内壁は、かなりの火熱を受けて赤色硬化。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕6, 甑2, 高坏1, 埴4, 坏13, 細片1,717点), 須恵器(坏1, 細片1点), 石製品(砥石1点, 敲石1点), 土製品(羽口1点)。遺物は、カマド周辺を中心に出土。第368図27の坏(須恵器)はカマド右側の床面から正位で出土。その他、流れ込みと思われる石鏃が1点出土している。

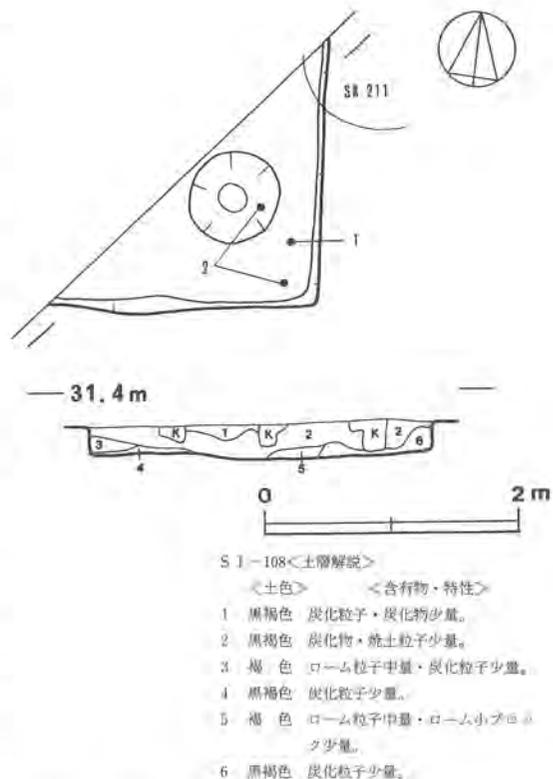
所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第108号住居跡 (第128図)

位置 C5e₅区。重複関係 SK-211 (新旧関係不明)。平面形 方形と推定。規模 (2.13)×(2.12)m。主軸方向 不明。壁垂直。壁高22～23cm。壁溝 無。床 平坦。貯蔵穴 南東コーナー部に検出。平面形は径73×70cmの円形を呈し、深さ83cm。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕1, 高坏1, 坏1, 細片159点), 須恵器片1点, 礫1点。遺物は南東コーナーの貯蔵穴付近から出土。第368図2の高坏は南東コーナー壁直下の床面から潰れた状態で出土。

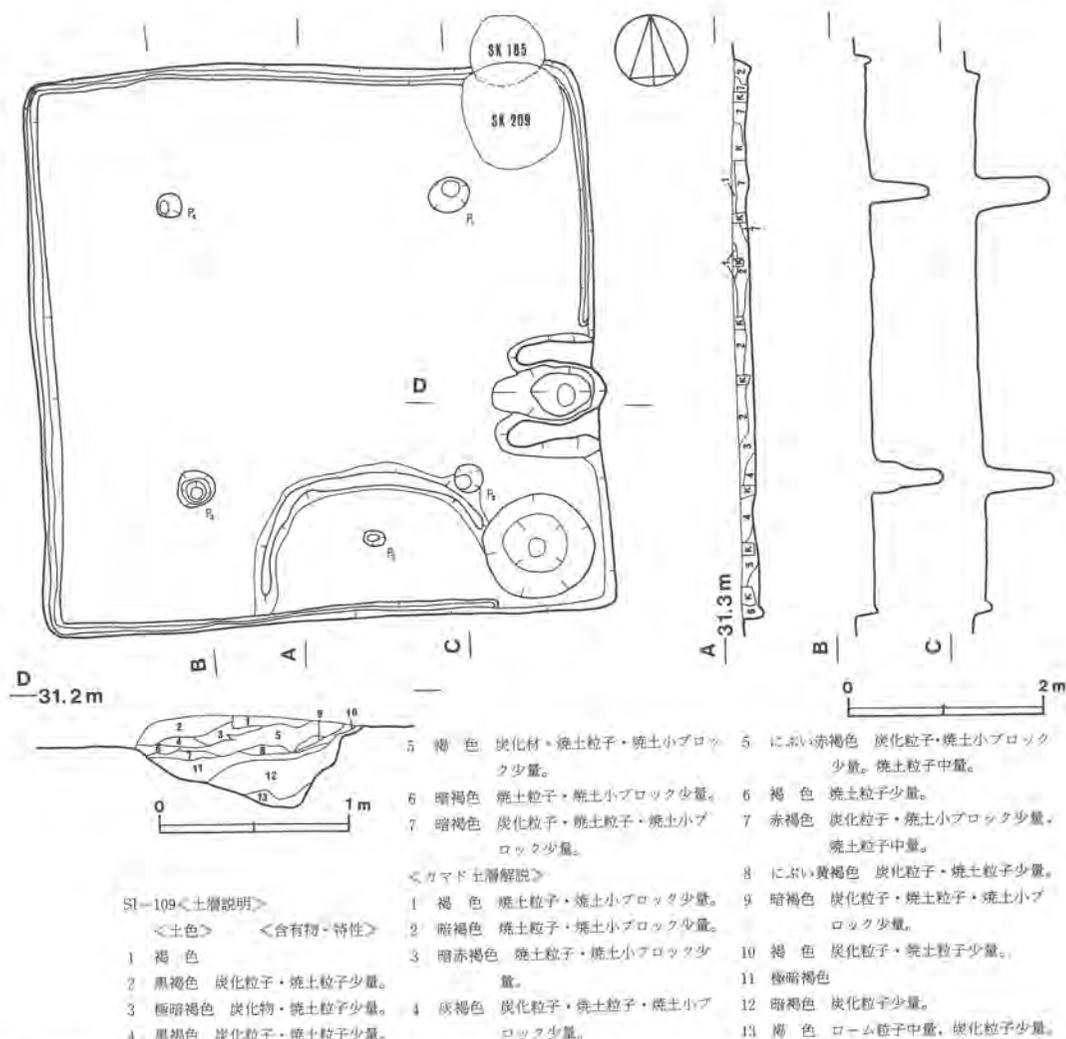
所見 住居跡の南東コーナーのみの調査であり、ピット, 炉, カマドは検出されなかった。本跡は、遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第128図 第108号住居跡実測図

第109号住居跡 (第129, 130図)

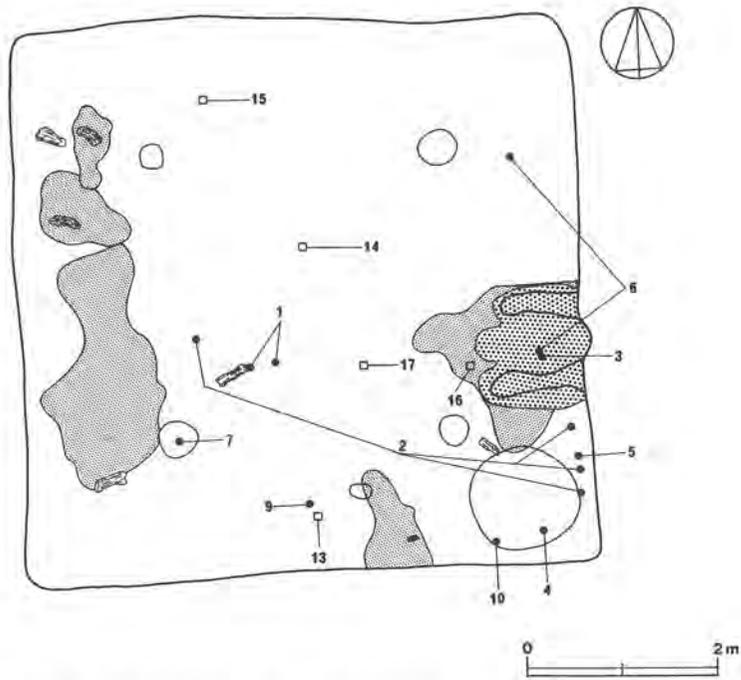
位置 C5e,区。重複関係 本跡<SK-209, SK-185(新旧関係不明)。平面形 方形。規模 5.94×5.89m。主軸方向 N-86°-W。壁 垂直。壁高10~20cm。壁溝 幅7~12cm, 深さ5cm前後で全周。床 平坦。床面中央部及び出入り口部で硬い。P₅の梯子ピットを囲んで土手状の高まりがみられ, その内側の床面には粘土が貼られている。ピット 5か所。P₁~P₄(径28~41cm, 深さ62~77cm)が支柱穴。いずれもしっかりと掘られており, 底部も硬い。P₅(径24cm, 深さ27cm)は, 出入り口部に伴う梯子ピット。掘り方を観察すると, 住居の壁側に傾斜して掘り込まれている。貯蔵穴 南東コーナー部に検出。平面形は径116cmの円形を呈し, 深さ107cm。断面形状は逆円錐形。カマド 東壁中央部やや南側に付設され, 粘土・砂によって構築。燃焼部は, 住居壁面の内側に位置する。火床は, 床面から32cmほど掘り窪められ, 暗褐色土を埋め戻して使用されて



第129図 第109号住居跡実測図

いる。火床部は床面から約7cm下にあり、カマド内には焼土・灰が層状に堆積。袖の内壁はかなり火熱を受けた様子がみられ、長期間の使用を窺わせる。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕3, 甑2, 高坏4, 埴2, 坏2, 埴1, 細片950点), 須恵器片12点, 石製模造品(双孔円板4点, 剣形品1点, 白玉1点), 滑石片1点, 礫4点, 炭化材。遺物は、



第130図 第109号住居跡遺物出土状況図

カマドや貯蔵穴を中心に出土。第370図6の高坏はカマド覆土から逆位で出土。

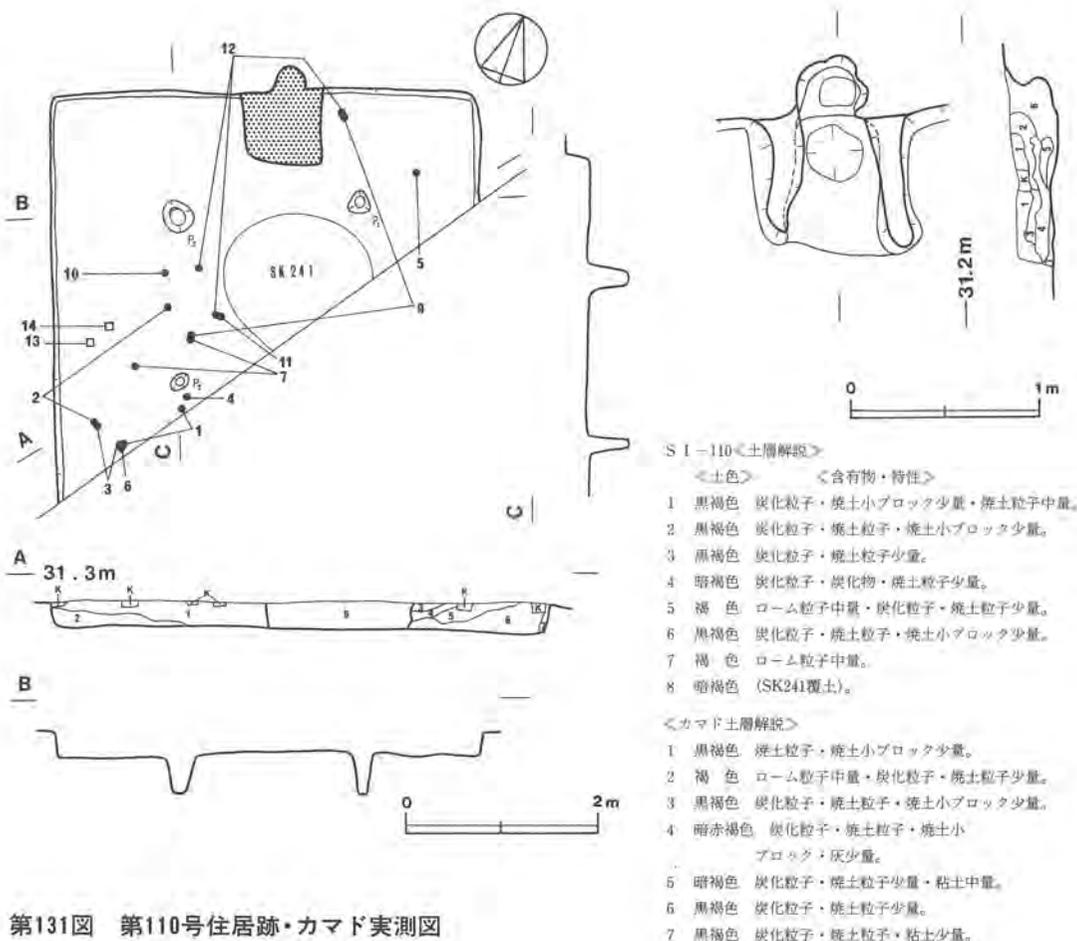
所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。炭化材・焼土の出土状況から焼失家屋と考えられる。

第110号住居跡 (第131図)

位置 C5h₀区。**重複関係** 本跡<SI-104, 本跡<SK-241。**平面形** 方形と推定。**規模** 4.51×(4.30)m。**主軸方向** N-11°-W。**壁** 垂直。壁高25cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。床面中央部は硬い。**ピット** 3か所。径22~36cm, 深さ41~47cmを測り, いずれも支柱穴。しっかりと掘り方で, 底部は硬い。**貯蔵穴** 無。**カマド** 北壁中央部に位置し, 粘土・砂によって構築された両袖部が残存。火床部は床面から7cm前後掘り窪めており, 煙道部は燃焼部奥壁から緩やかな傾斜で住居の外に延びている。カマド内には, 下層に焼土が堆積。袖の内壁は火熱を受けて赤色硬化。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器(甕4, 甑1, 高坏3, 埴1, 坏3, 細片459点), 須恵器片7点, 石製模造品(双孔円板2点), 鉄滓1点, 礫6点。遺物は, 住居跡内の全域から出土。第372図7の高坏は西壁付近の覆土下層から潰れた状態で, 10の坏(脚付)は中央部の床面直上から正位で出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

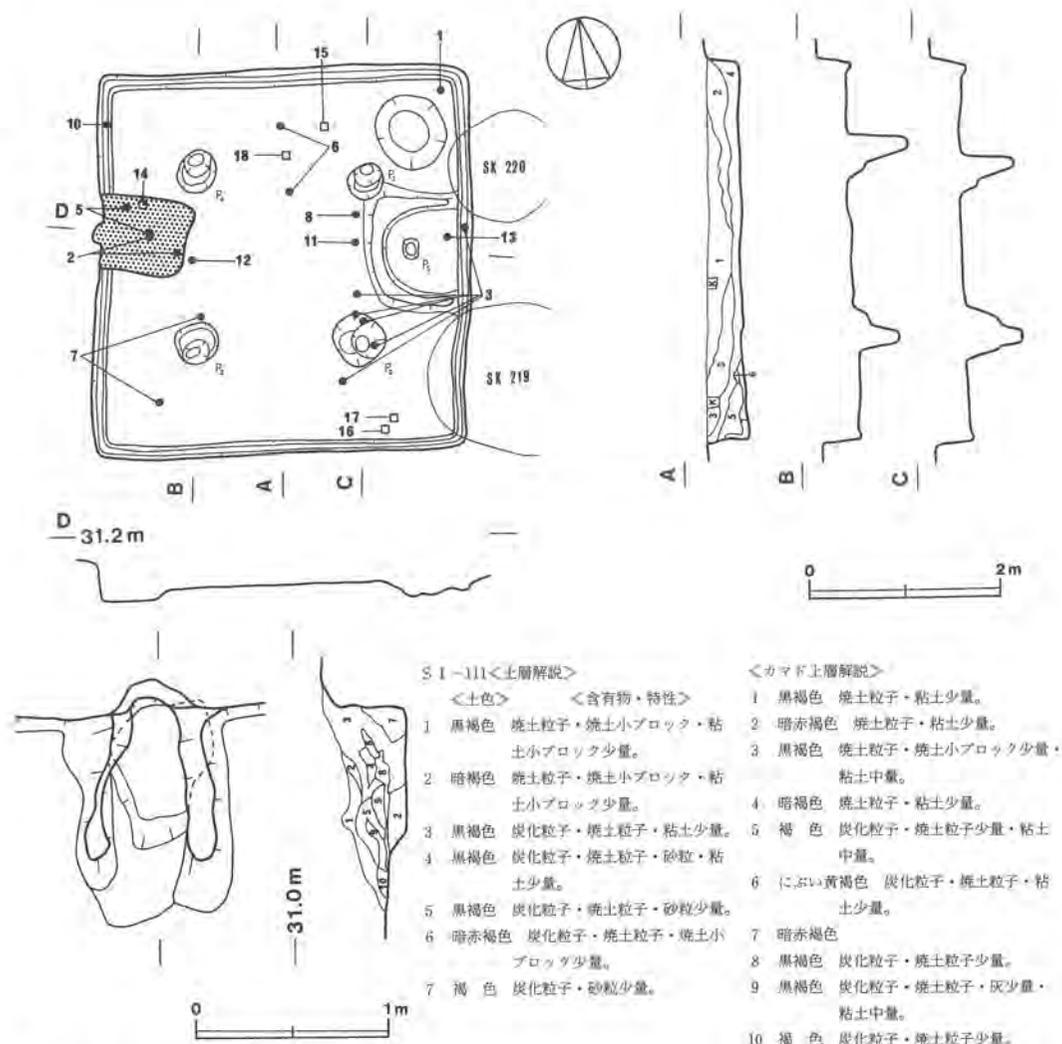


第131図 第110号住居跡・カマド実測図

第111号住居跡 (第132図)

位置 C5g₀区。重複関係 本跡<SK-220, SK-219 (新旧関係不明)。平面形 方形。規模 4.09×3.97m。主軸方向 N-82°-W。壁 垂直。壁高30~37cm。壁溝 幅9~11cm, 深さ5cm 前後で全周。床 平坦。出入り口部と思われる東壁付近からカマドに至る床面中央部は、硬く締まる。出入り口部には、梯子ピットを取り囲んで土手状の高まりを確認。ピット 5か所。P₁~P₄ (径39~59cm, 深さ44~64cm) は支柱穴。しっかりとした掘り方で、底部は硬い。貯蔵穴 北東コーナー部に検出。平面形は径82cmの円形を呈し、深さ48cm。カマド 西壁中央部やや北寄りに付設され、粘土・砂で構築。天井部は崩落しているものの袖部の遺存状態は良好。燃焼部奥壁は、住居壁面を6cm前後掘り込まれており、煙道部は緩やかな傾斜をもって屋外に延びている。火床は、床面から20cmほど掘り窪められ、黒褐色土を埋め戻して使用されている。カマド内覆土下層には焼土・灰が堆積。袖の内壁は火熱を受けて赤色硬化。覆土 自然堆積。

遺物 土師器 (甕6, 高坏1, 埴3, 坏3, 細片408点), 石製模造品 (双孔円板4点, 白玉1



第132図 第111号住居跡・カマド実測図

点), 礫1点。遺物は, 住居跡内の全域から出土。

所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

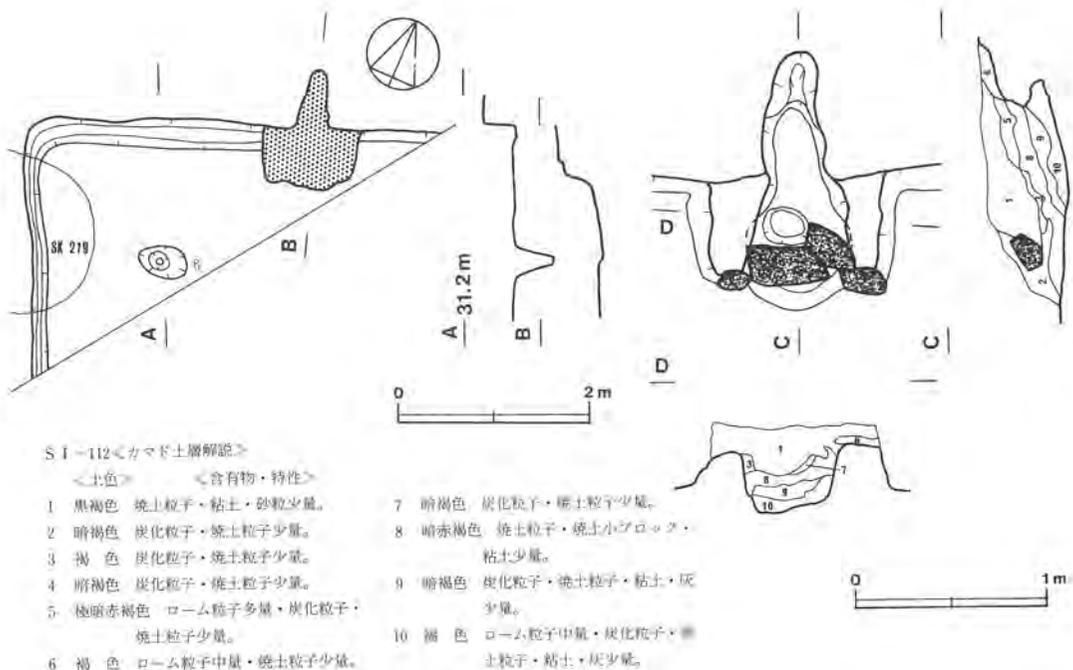
第112号住居跡 (第133図)

位置 C6g₁区。重複関係 SK-219 (新旧関係不明)。平面形 方形と推定。規模 (4.36) × (2.84) m。主軸方向 N-21°-W。壁 垂直。壁高35cm。壁溝 幅23cm, 深さ5cmで全周と推定。床 平坦。床面中央部からカマドにかけて硬い貼床。ピット 1か所。支柱穴。径52cm, 深さ39cm。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部と思われる位置にあり, 住居の壁面を34cm程掘り込んで構築し, 両袖部が残存。火床部は床面から10cm前後掘り窪めている。焚き口部の両側には, 床面を掘り込

んで凝灰岩が据えられており、その上には、(幅)64×(奥行)21×(厚さ)8cmの凝灰岩が2つに割れて折り重なるようにして出土。このような検出状況から、本跡のカマドは、砂質粘土を主体としつつ、焚き口部に凝灰岩を用い、堅牢な構造をもつ。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(坏2, 細片158点), 須恵器片3点。遺物は、住居跡内の全域から出土しているが、細片が殆どである。

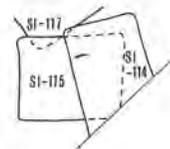
所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第133図 第112号住居跡・カマド実測図

第115号住居跡 (第134図)

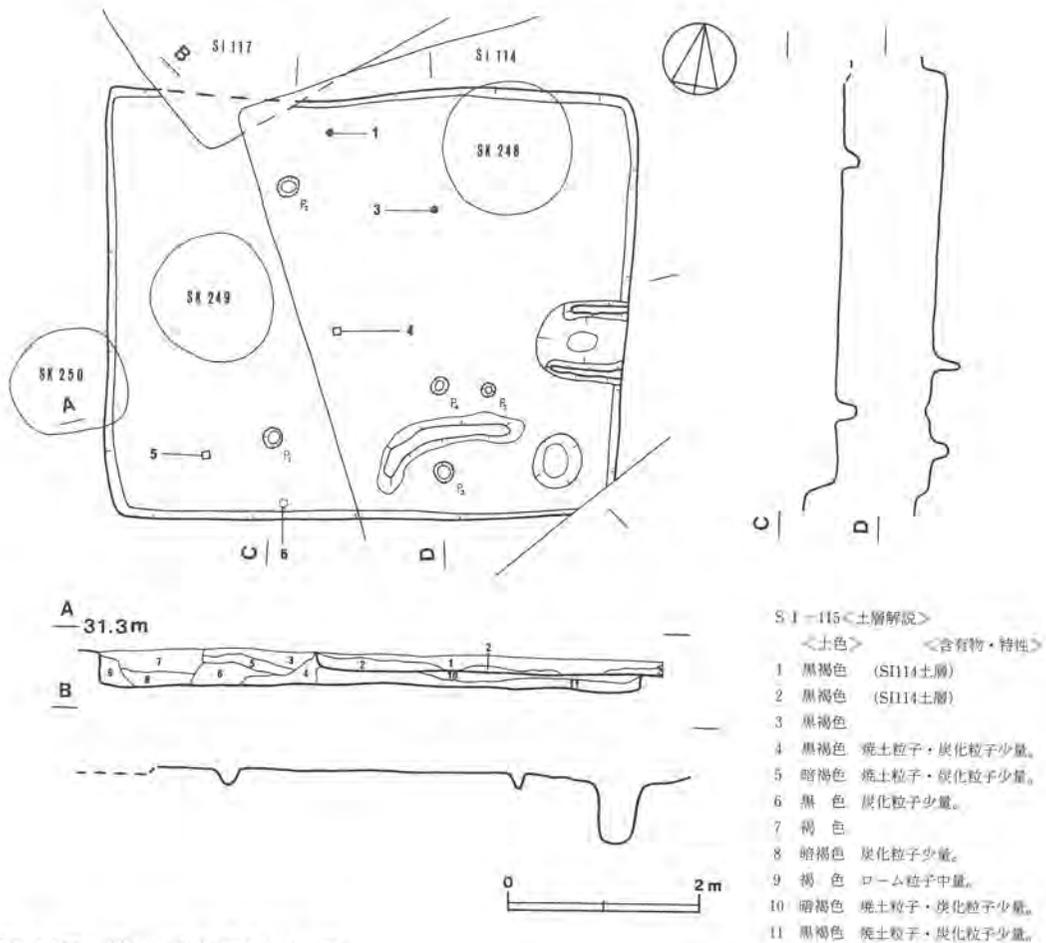
位置 C6e₂区。**重複関係** SI-117<本跡<SI-114。本跡<SK-248。SK-249, 250(新旧関係不明)。**平面形** 長方形。**規模** 5.66×4.61m。**主軸方向** N-84°-E。**壁** 外傾。壁高15~31cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。床面中央部からカマドにかけて、硬い。南壁中央部付近には梯子ピットを取り囲んで土手状の高まりを確認。ピット 5か所。P₁・P₂(径22cm, 深さ16~22cm)は位置・形状から主柱穴と考えられる。P₃(径22cm, 深さ19cm)は、出入り口部に伴う梯子ピット。P₄・P₅は性格不明。**貯蔵穴** 南東コーナー部に検出。平面形は径58cmの円形を呈し、深さ64cm。**カマド** 東壁中央部に付設。第114号住居跡によって天井部・袖の上半部が破壊され、粘土・



砂によって構築された両袖の一部のみ残存。火床部は、床面をわずかに掘り込んで構築し、焼土ブロックが堆積。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器（甕3，高坏1，細片579点），須恵器片4点，石製模造品（双孔円板1点，器種不明1点），鉄製品（鏃1点，不明1点），鉄滓1点，礫2点。遺物は、住居跡内の全域から出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第134図 第115号住居跡実測図

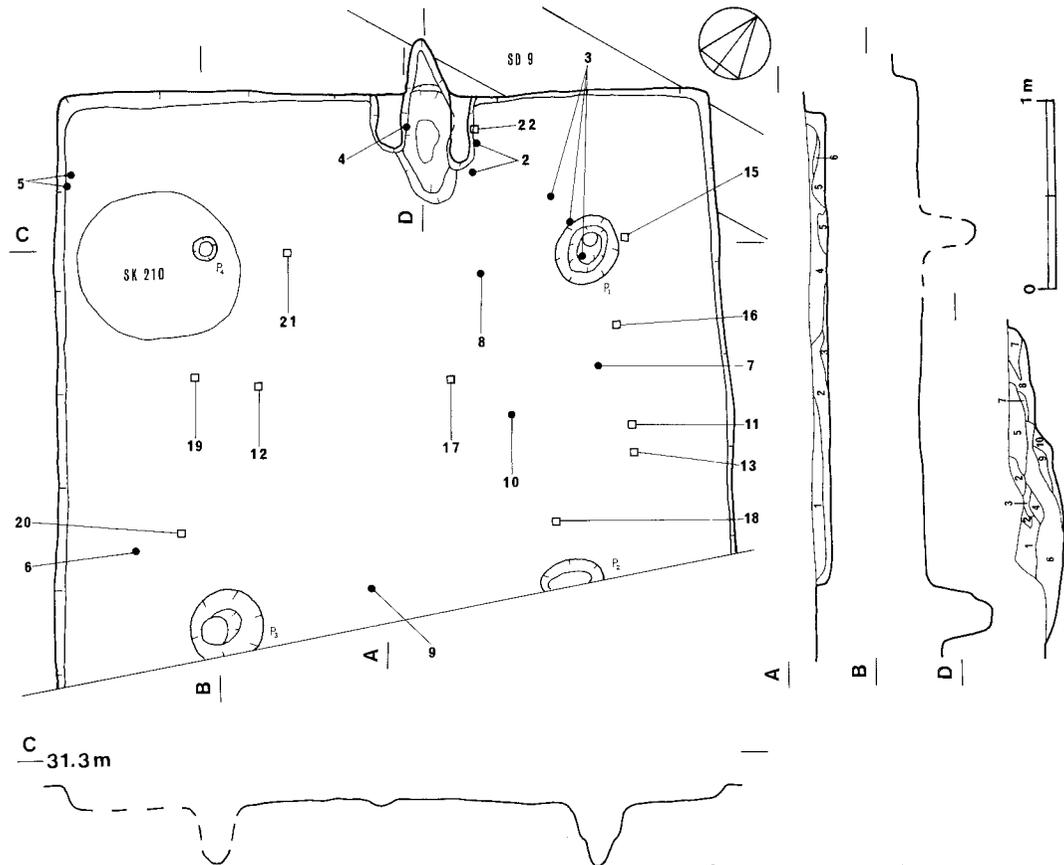
第116号住居跡 (第135図)

位置 C6d₃区。**重複関係** 本跡<SD-9, SK-210(新旧関係不明)。 **平面形** 方形と推定。規模 7.16×(6.34)m。 **主軸方向** N-35°-W。 **壁** 外傾。壁高11~27cm。 **壁溝** 無。 **床** 平坦。床面中央部とカマド付近で硬い。 **ピット** 4か所。全て支柱穴(P₂は、エリア外に延びる。P₄は、SK-210との重複により底部を検出)。規模(P₁・P₃)は、径78cm，深さ68~70cm。底部は硬い。 **貯蔵穴** 無。 **カマド** 北西壁中央部に付設され、粘土・砂によって構築された両袖部が残存。煙

道部は、燃焼部奥壁からやや幅広の煙道が住居の外側へ延びる。火床部は、床面から約15cm掘り窪められ、焚き口部には焼土及び焼土ブロックが堆積。袖の内壁は火熱を受けて赤色変化し、長期間の使用が窺われる。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕5, 高坏3, 碗1, 坏2, 細片906点), 須恵器(高坏1, 細片62点), 鉄製品(鎌1点), 石製模造品(双孔円板6点, 白玉3点, 器種不明1点), 石製品(管玉1点, ガラス玉1点, 砥石2点), 礫7点。遺物は, 住居跡内の全域から出土。第376図5の高坏はカマド内覆土から逆位で, 第377図9の坏は中央部覆土下層から正位で出土。その他, 流れ込みと思われる石錘1点が出土。

所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



S I - 116「土層解説」

＜土色＞

- 1 黒褐色 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 2 黒褐色 炭化粒子・焼土粒子・焼土小ブロック・粘土少量。
- 3 黒褐色 炭化粒子・焼土粒子・粘土少量。
- 4 黒褐色 焼土粒子・砂粒少量。
- 5 暗褐色 ローム粒子中量・焼土粒子少量。
- 6 暗褐色 焼土粒子少量・粘土中量。

＜カマド土層解説＞

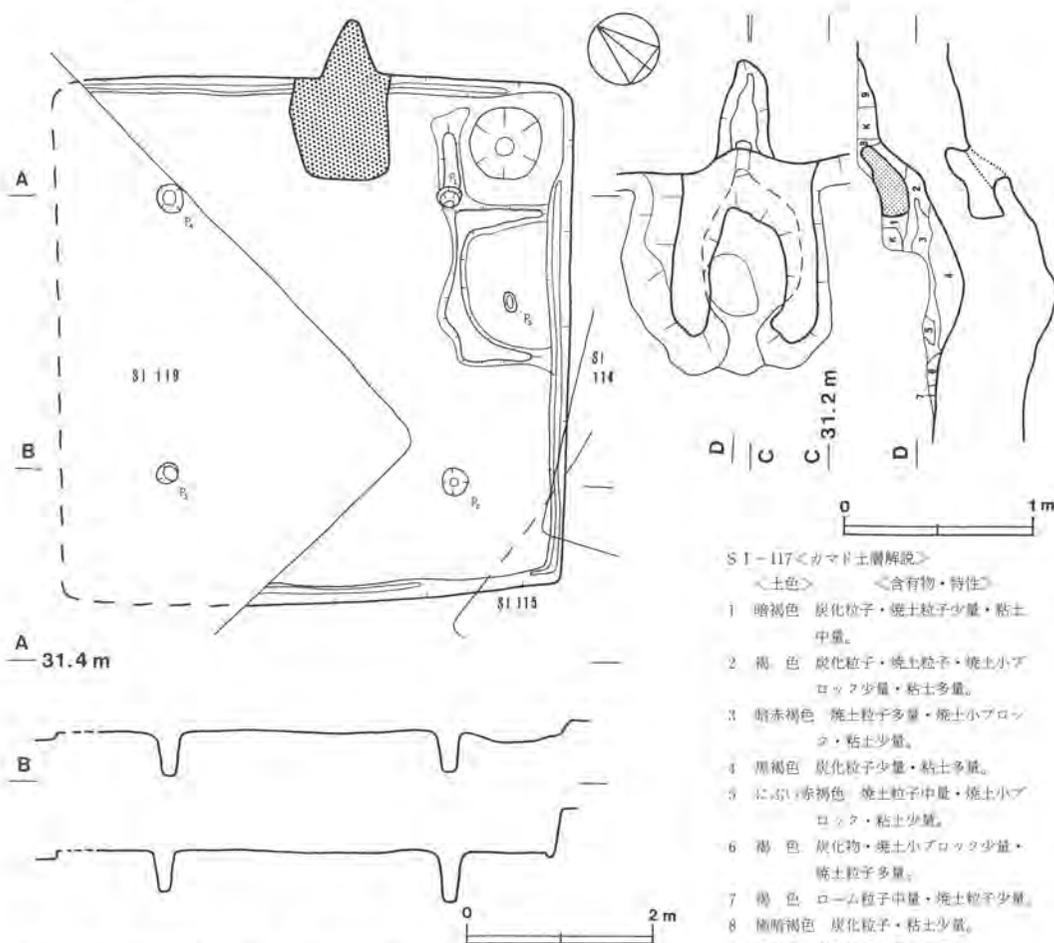
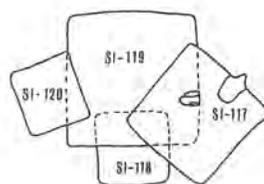
- 1 暗褐色 炭化粒子少量。
- 2 褐色 焼土粒子・砂粒少量。
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量・焼土小ブロック少量。
- 4 灰褐色 灰少量。
- 5 暗褐色 焼土粒子・焼土小ブロック少量・粘土中量。
- 6 暗褐色 焼土粒子・灰少量。

0 2m

第135図 第116号住居跡実測図

第117号住居跡 (第136, 137図)

位置 C6d₂区。重複関係 本跡は、第115, 118, 119, 120号住居跡と複雑に重複しており、その新旧関係は次の通りである。SI-118<SI-119<本跡<SI-115, SI-119<SI-120。平面形 方形。規模 5.60×[5.53]m。主軸方向 N-51°-E。壁 垂直。壁高37~49cm。壁溝 幅10cm, 深さ4cm前後で全周するものと思われる。床 平坦。貼床。壁付近まで硬く踏み固められ、第119号住居跡との重複部分ではしっかりと敲き締められている。出入り口部に伴う梯子ピットと貯蔵穴を取り囲んで土手状の高まりを明瞭に検出。この土手状の高まりは敲き締めた床面にロームを貼って構築。幅15~34cm, 床面との比高約7cm。ピット 5か所。P₁からP₄(径22~33cm, 深さ45~54cm)が主柱穴。底部(径16cm前後)は平坦で、極めて硬い。P₅(径22×14cm, 深さ9cm)は、出入り口部に伴う梯子ピット。貯蔵穴 東コーナー部に検出。平面形は径80cmの円形を呈し、深さ120cm。断面形状は逆

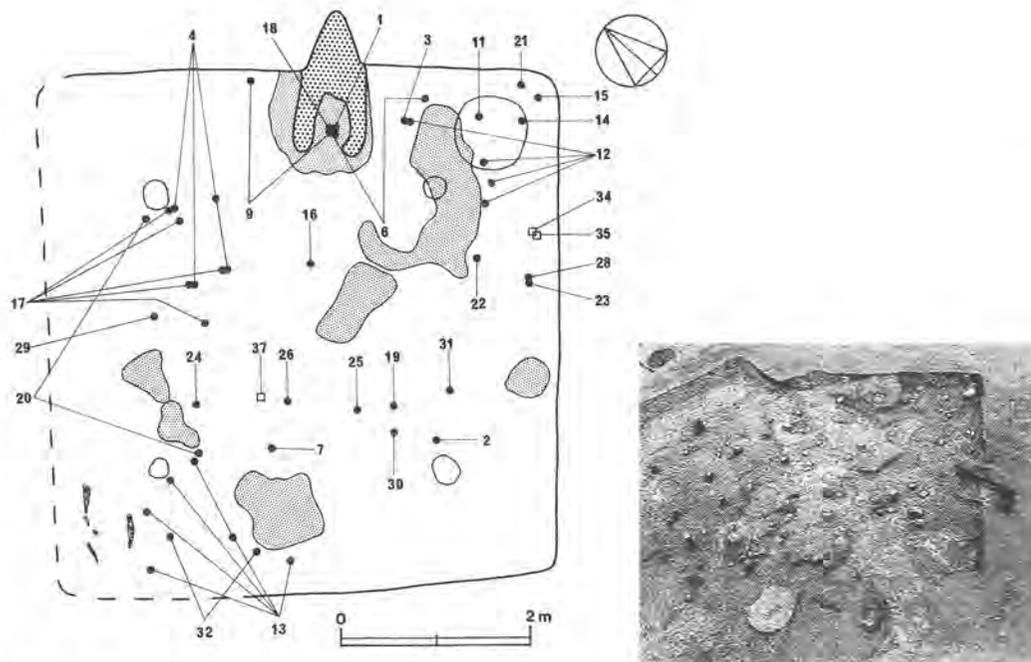


SI-117<カマド土層解説>

<土色> <含有物・特性>

- 1 暗褐色 炭化粒子・焼土粒子少量・粘土中量。
- 2 褐色 炭化粒子・焼土粒子・焼土小ブロック少量・粘土多量。
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量・焼土小ブロック・粘土少量。
- 4 黒褐色 炭化粒子少量・粘土多量。
- 5 にいり赤褐色 焼土粒子中量・焼土小ブロック・粘土少量。
- 6 褐色 炭化物・焼土小ブロック少量・焼土粒子多量。
- 7 褐色 ローム粒子中量・焼土粒子少量。
- 8 暗褐色 炭化粒子・粘土少量。
- 9 暗褐色 炭化粒子・粘土少量。

第136図 第117号住居跡・カマド実測図



第137図 第117号住居跡遺物出土状況図

円錐形。カマド 北東壁中央部に付設され、粘土・砂によって構築。遺存状態は良く、両袖部、天井部の一部が残存。燃烧部奥壁は住居壁面と一致する。煙道部はトンネル状に掘り込まれ、煙道が燃烧部奥壁から緩やかな傾斜をもって住居の外側へ115cmほど延びている。火床は、床面から16cmほど掘り窪められ、黒褐色土を埋め戻して使用されている。カマド内の覆土下層には焼土が堆積。袖の内壁は火熱を受けており、長期間の使用が窺える。覆土 自然堆積。

遺物 土師器（甕16、壺3、甑1、高坏11、埴2、坏6、細片530点）、須恵器片1点、石製模造品（剣形品1点、器種不明1点）、石製品（支脚1点、敲石2点）、滑石片1点。遺物は、カマド・貯蔵穴を中心に住居跡内の全域から出土。第380図15の壺は東コーナー壁直下の床面から正位で、16の壺は中央部床面から正位で、第381図23の高坏は南東壁直下の床面から横位で出土。

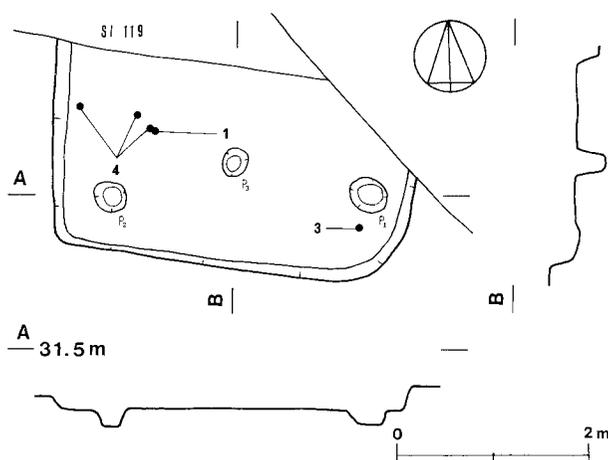
所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。炭化材や焼土の出土状況から焼失家屋と考えられる。

第118号住居跡（第138図）

位置 C6e₁区。重複関係 第117号住居跡参照。平面形 隅丸方形と推定。規模 3.90×(2.14)m。主軸方向 N-6°-E。壁 外傾。壁高14~27cm。壁溝 無。床 平坦。中央部は硬く締まった貼床。ピット 3か所。P₁・P₂(径36~41cm、深さ13~17cm)が主柱穴。P₃(径30cm、深さ

32cm)は、補助的な柱穴と考えられ、底部は硬い。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕4, 壺1, 細片84点), 弥生式土器(壺2, 細片33点)。遺物は、住居跡の南東コーナー及び西壁付近から出土。第383図1の甕は中央部から潰れた状態で、3の壺は南東コーナーから逆位で、4の壺(弥生式土器)は西壁直下から潰れた状態で、全て床面直上から出土。



所見 本跡は、第117・119号住居 第138図 第118号住居跡実測図

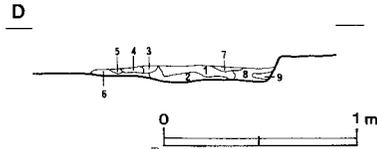
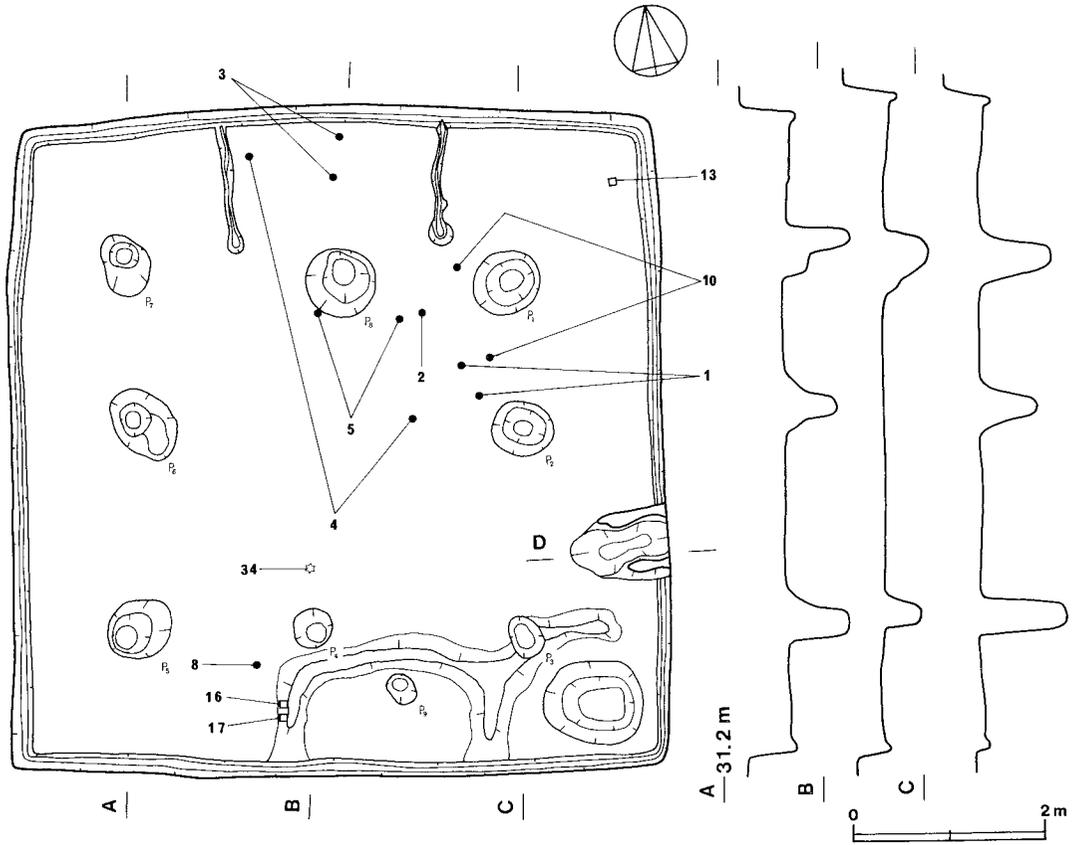
跡によって北半分が削除され、貯蔵穴、炉、カマドの存在は確認できなかった。土師器と弥生式土器が共伴しており、古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。

第119号住居跡 (第139図)

位置 C6d区。重複関係 第117号住居跡参照。平面形 方形。規模 7.20×6.97m。主軸方向 N-81°-W。壁 垂直。壁高41~54cm。壁溝 幅10~15cm, 深さ8cm前後で全周。床 平坦。壁付近まで硬い。南壁中央部付近のP₉(梯子ピット)と貯蔵穴を囲んで、土手状の高まりを確認。この内側の床面には粘土が貼られている。この土手状の高まりは、床面にロームを貼って構築した出入り口部に伴う施設であり、硬く敲击締められている。北壁寄りの床面には、間仕切りのための溝を2条検出。規模は、幅7~27cm, 深さ10~14cm, 長さは134~138cm。ピット 9か所。P₁からP₉(径44~82cm, 深さ37~92cm)が支柱穴。底部はいずれも硬く、しっかりとした掘り方である。P₉(径34cm, 深さ15cm)は、出入り口部に伴う梯子ピット。貯蔵穴 南東コーナー部に検出。平面形は径107cm×90cmの円形を呈し、深さ115cm。カマド 東壁中央部やや南寄りに付設。第117号住居跡を構築した際に大部分は破壊され、粘土・砂によって構築された両袖の一部が残存。火床部の床面からの掘り込みは5cm弱と浅く、燃焼部奥壁は住居の壁面と一致。カマド内には焼土が堆積。火床部・焼き口部は火熱を受け赤色硬化。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕3, 甑1, 高坏3, 埴2, 坏2, 細片844点), 須恵器片13点, 石製模造品(双孔円板1点, 剣形品4点, 白玉16点), 石製品(支脚1点), 礫5点, 滑石片5点。遺物は、住居跡の東側部分を中心に出土。第384図5の高坏は中央部覆土下層から潰れた状態で出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。間仕切り施設を有するという点で、第105号住居跡と同タイプの住居跡と考えられる。



S I-119<カマド土層解説>

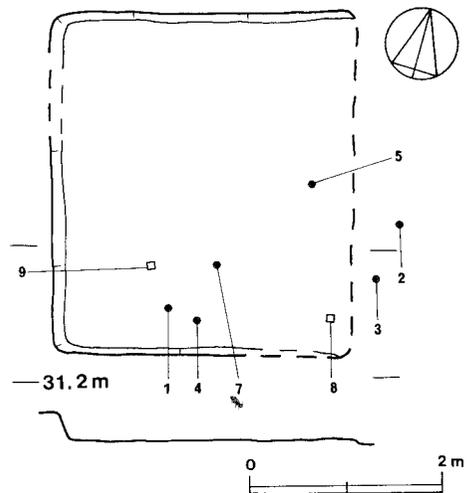
- | <土色> | | <含有物・特性> | | | |
|------|-----|----------------------|---|--------|----------------------|
| 1 | 赤褐色 | 焼土粒子中量・粘土少量。 | 6 | によい黄褐色 | 焼土粒子少量・粘土中量。 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子多量・焼土粒子少量・粘土多量。 | 7 | 暗赤褐色 | 焼土粒子・粘土少量。 |
| 3 | 暗褐色 | | 8 | 褐色 | ローム粒子多量・焼土粒子少量・粘土中量。 |
| 4 | 赤褐色 | 焼土粒子中量・砂粒少量。 | 9 | 黒褐色 | 焼土粒子少量。 |
| 5 | 黒褐色 | | | | |

第139図 第119号住居跡実測図

第120号住居跡 (第140図)

位置 C5d₀区。平面形 長方形。規模 3.68×[3.16]m。主軸方向 N-11°-W。壁 外傾。壁高30cm。壁溝 無。床 平坦。床面中央部の東側部分は硬い。覆土 自然堆積。

遺物 土師器 (甑3, 高坏2, 埴1, 坏1, 細片308点), 須恵器片24点, 石製模造品 (双孔円板1点), 礫1点, 滑石片1点。遺物は, 住居跡の南半分を中心に出土。第386図7の坏は中央部の覆土下層から正位で出土。

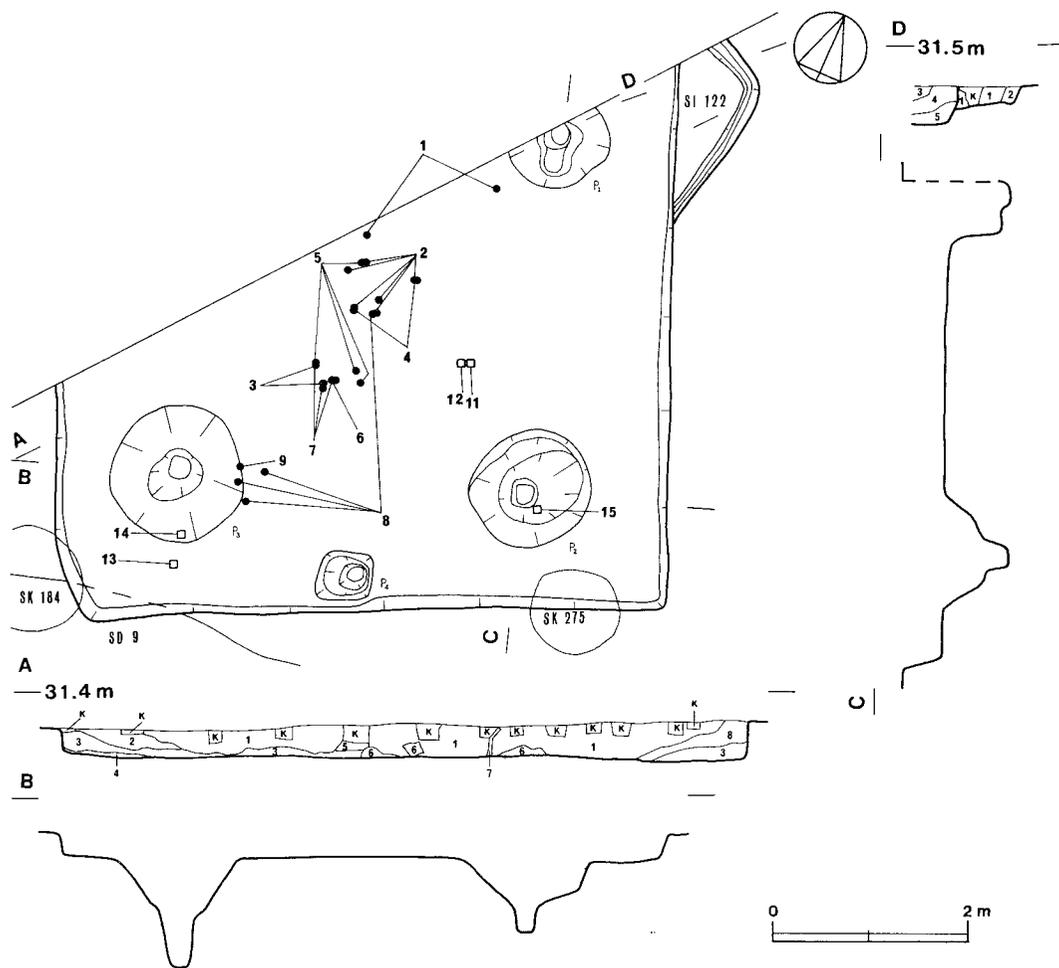


第140図 第120号住居跡実測図

所見 第119号住居跡と重複しており、ピット、貯蔵穴、炉、カマドの存在は確認できなかった。本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第121号住居跡 (第141図)

位置 C5c区。重複関係 SI-122<本跡。SK-275<本跡<SK-184。平面形 方形と推定。規模 6.51×(5.84)m。主軸方向 N-22°-W。壁 外傾。壁高25~40cm。壁溝 無。床 平坦。出入り口部の梯子ピットから床面中央部は硬い貼床。ピット 4か所。P₁(径105、深さ66cm)・



SI-121<土層解説>

- <土色> <含有物・特性>
- 1 暗褐色 炭化物・焼土粒子・焼土小ブロック少量。
 - 2 褐色 炭化粒子・焼土粒子少量。
 - 3 暗褐色 ローム小ブロック中量・焼土粒子・粘土少量。

- 4 褐色 ローム粒子多量。
- 5 黒褐色 焼土粒子・焼土小ブロック少量。
- 6 暗褐色 焼土粒子・粘土少量。
- 7 褐色 焼土粒子少量。
- 8 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量。

SI-122<土層解説>

- <土色> <含有物・特性>
- 1 黒褐色 炭化粒子少量(SI121覆土)。
 - 2 褐色 ローム粒子多量・砂粒少量。
 - 3 暗褐色 焼土粒子少量(SI121覆土)。
 - 4 黒褐色 焼土粒子少量。
 - 5 褐色 ローム粒子中量(SI121覆土)。

第141図 第121・122号住居跡実測図

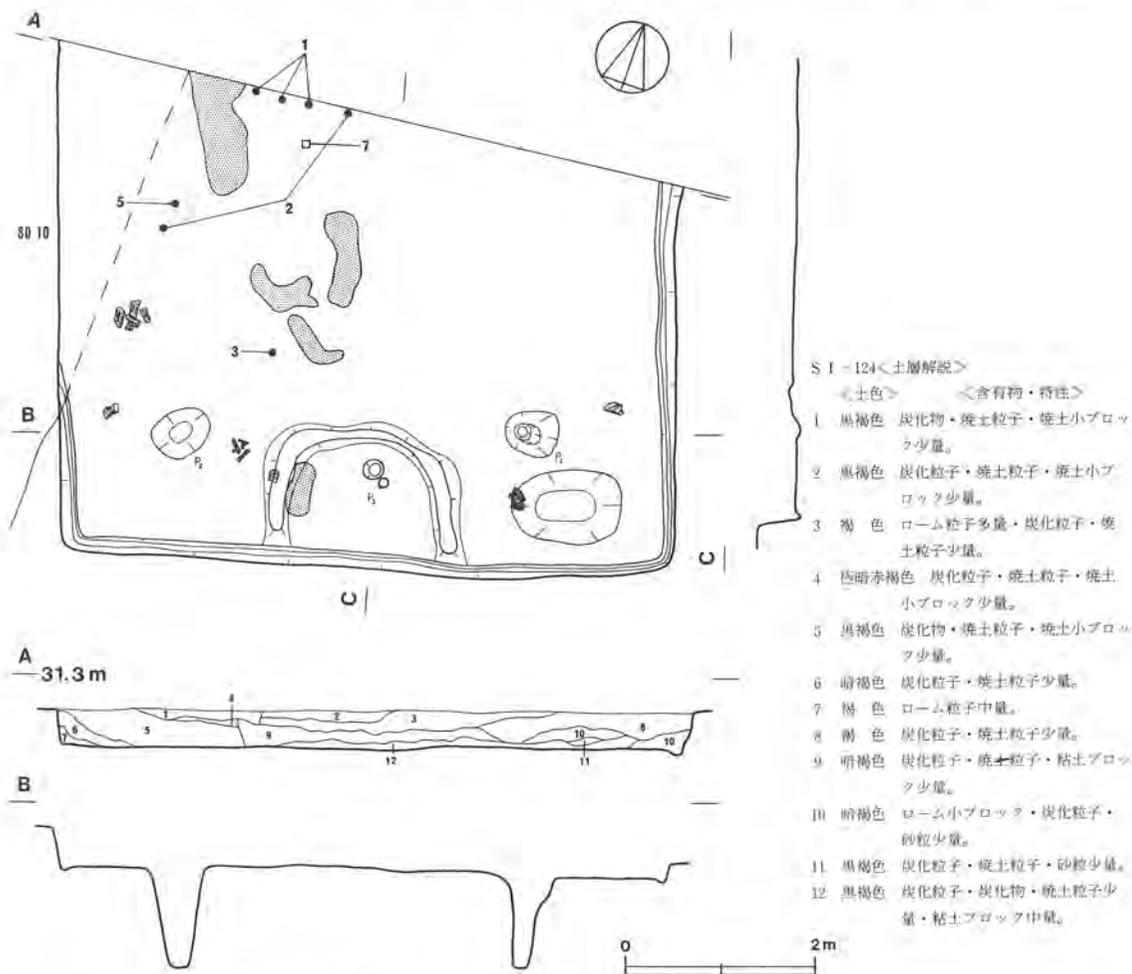
P₂ (径126, 深さ79cm)・P₃ (径146, 深さ117cm) は, 主柱穴。ロート状のしっかりとした掘り方をもつ。底部は, 方形に近い形状で極めて硬い。P₄ (一辺53, 深さ33cm) は, 出入口部に伴う梯子ピット。底部及び壁面は極めて硬い。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕7, 高坏1, 坏2, 細片749点), 須恵器片24点, 石製模造品(双孔円板6点)。遺物は, 住居跡中央部を中心に出土。第388図9の坏は床面から出土。

所見 住居跡の北西部はエリア外に延びるため, 貯蔵穴, 炉, カマドは確認できなかった。本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第124号住居跡 (第142図)

位置 C6b₁区。重複関係 SD-10<SI-126<本跡。SI-125(新旧関係不明)。**平面形** 方形と推定。規模 6.51×(5.43)m。**主軸方向** N-16°-W。**壁** 垂直。壁高43cm。**壁溝** 幅6~8cm,



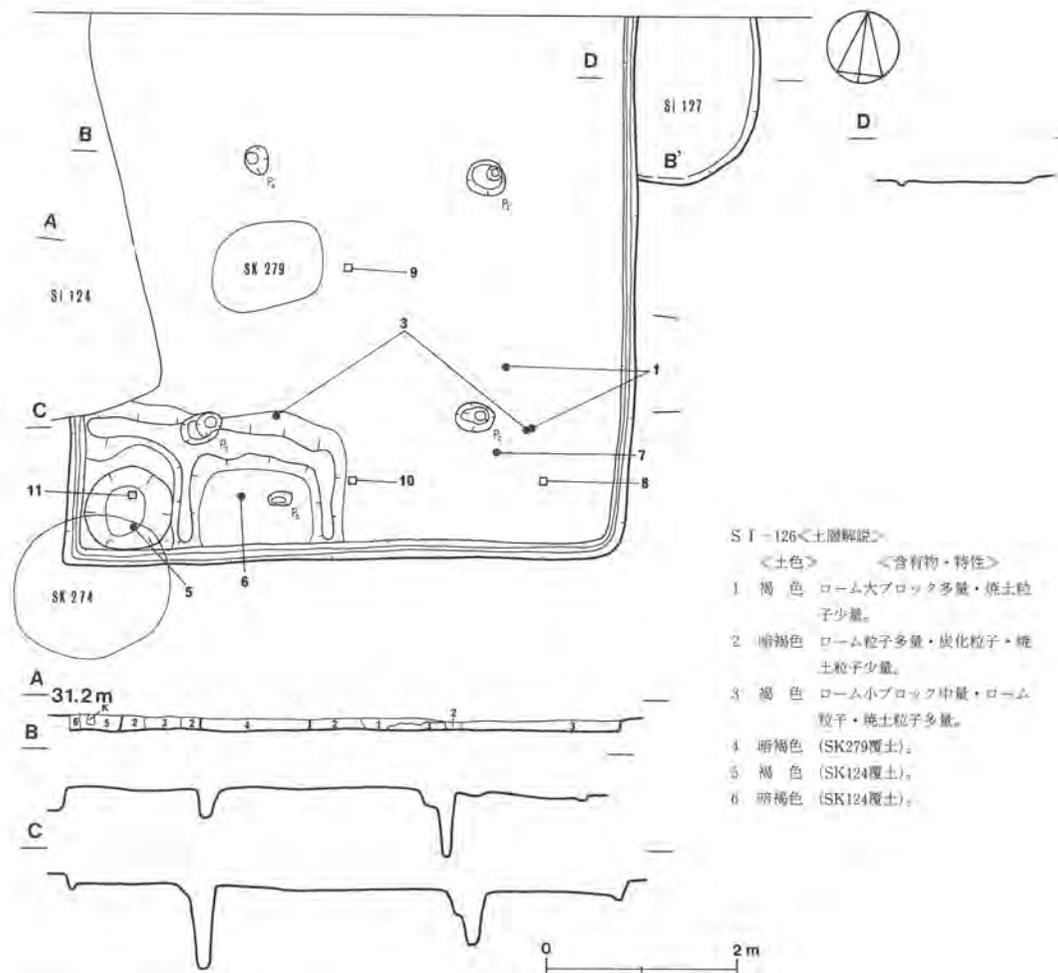
第142図 第124号住居跡実測図

深さ5cm前後で全周するものと思われる。床 平坦。貼床。出入り口部から床面中央部にかけて硬く、第10号堀との重複部分にはしっかりした貼床がなされている。出入り口部には、梯子ピット(P₃)を取り囲んで土手状の高まりを検出。ピット 3か所。P₁・P₂(径55~59cm, 深さ98~110cm)は支柱穴。P₃(径19cm, 深さ8cm)は出入り口部に伴う梯子ピット。底部は硬く締まる。貯蔵穴 南東コーナー部に検出。平面形は径115×81cmの楕円形を呈し、深さは113cm。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕2, 甑1, 鉢1, 高坏1, 坏3, 細片1,335点), 須恵器片96点, 石製模造品(双孔円板3点)。遺物は、住居跡内の全域から出土。第389図5の坏は中央部床面直上から出土。

所見 住居跡の北側がエリア外に延びており、炉, カマドの存在は確認できなかった。本跡は、遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第126号住居跡 (第143図)



第143図 第126・127号住居跡実測図

位置 C6b₂区。**重複関係** 本跡<SI-124, 本跡<SK-279。SI-127, SK-274 (新旧関係不明)。**平面形** 方形と推定。**規模** 5.94×(5.79)m。**主軸方向** N-7°-W。**壁** 垂直。壁高11~17cm。**壁溝** 幅9~11cm, 深さ8cm前後で全周と推定。**床** 平坦。床面は, 壁付近まで硬く, 出入り口部は特に硬く締まる。出入り口部に伴う梯子ピットと貯蔵穴を囲んで土手状の高まりを検出。**ピット** 5か所。P₁~P₃(径42~46cm, 深さ57~90cm)は支柱穴。しっかりとした掘り方である。P₄(径31cm, 深さ23cm)は規模も小さく, 支柱穴とするには若干の疑問が残る。P₅(径24cm, 深さ15cm)は, 出入り口部に伴う梯子ピット。**貯蔵穴** 南西コーナー部に検出。平面形は径90cmの円形を呈し, 深さ52cm。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器(甕2, 甗2, 高坏1, 坏4, 細片494点), 須恵器片6点, 石製模造品(双孔円板2点, 剣形品1点), 石製品(垂飾り1点, 提げ砥石1点), 鉄製品(刀子1点)。遺物は, 住居跡の南部を中心に出土。第389図3の高坏は出入り口部付近の床面から潰れて出土。

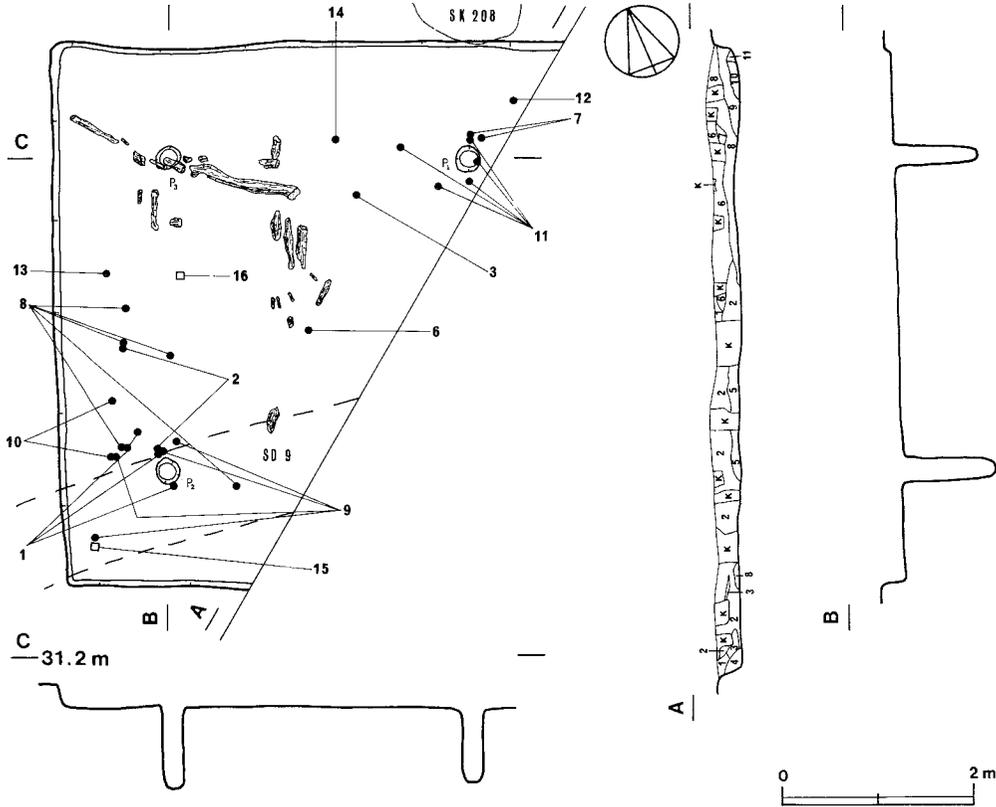
所見 住居跡の北側はエリア外へ延びており, 炉, カマドは確認できなかった。本跡は, 遺物から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。

第130号住居跡(第144図)

位置 C6b₆区。**重複関係** 本跡<SD-9。SI-129, SK-208(新旧関係不明)。**平面形** 方形と推定。**規模** 5.84×(5.43)m。**主軸方向** N-15°-E。**壁** 垂直。壁高8~28cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。南側に若干傾斜。床面中央部は極めて硬い。**ピット** 3か所。いずれも支柱穴。径27~29cm, 深さ79~101cm。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器(甕8, 壺2, 甗2, 鉢1, 高坏2, 細片834点), 須恵器片51点, 石製模造品(勾玉1点, 器種不明1点), 鉄製品(刀子1点), 礫5点(内1点は作業台か), 炭化材。遺物は, 住居跡内の全域から出土。第392図10の甗は西壁付近の床面直上から横位で, 第393図13の高坏は西壁付近の覆土下層から逆位で出土。

所見 住居跡の東側部分はエリア外に延びており, 貯蔵穴, 炉, カマドは確認できなかった。本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定されると思われる, 炭化材の出土状態から焼失家屋の可能性がある。



- | SI-130<土層解説> | | |
|--------------|------------------|------------------------|
| <土色> | <含有物・特性> | |
| 1 暗褐色 | 炭化粒子・焼土粒子少量。 | 5 黒褐色 炭化粒子・炭化材・焼土粒子少量。 |
| 2 暗褐色 | 炭化粒子・炭化物・焼土粒子少量。 | 6 暗褐色 炭化粒子・焼土粒子少量。 |
| 3 黒褐色 | 炭化粒子・焼土粒子少量。 | 7 黒褐色 |
| 4 黒褐色 | 炭化粒子・炭化物・焼土粒子少量。 | 8 暗褐色 炭化粒子・焼土粒子少量。 |
| | | 9 暗褐色 炭化粒子・焼土粒子少量。 |
| | | 10 黒褐色 炭化粒子・焼土粒子少量。 |
| | | 11 褐色 ローム粒子多量。 |

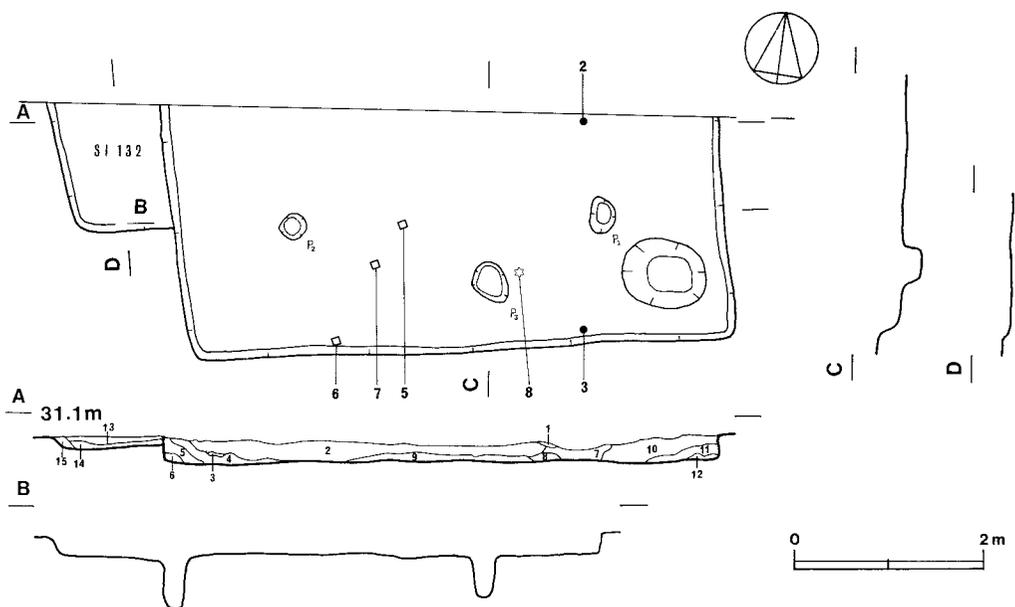
第144図 第130号住居跡実測図

第131号住居跡 (第145図)

位置 C6a₆区。**重複関係** SI-132<本跡。**平面形** 方形と推定。**規模** 5.84×(2.77)m。**主軸方向** N-10°-W。**壁** 垂直。壁高19~21cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。貼床。南壁中央部付近の梯子ピットから床面中央部は硬い。**ピット** 3か所。P₁・P₂(径29~38cm, 深さ47~53cm)は支柱穴。底部は極めて硬い。P₃(径48cm, 深さ20cm)は, 出入り口部に伴う梯子ピット。**貯蔵穴** 南東コーナー部に位置する。径88×75cmの楕円形を呈し, 深さ77cm。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器(甕1, 坏2, 埴1, 細片452点), 石製模造品(双孔円板2点), 石製品(管玉1点), 鉄製品(釘1点), 礫2点。第394図3の坏は南壁面直下の床面から潰れた状態で出土。

所見 住居跡の北側部分はエリア外に延びており, 炉, カマドは確認できなかった。本跡は, 遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



- S I → 131・132 <土層解説>
- | <土色> | <含有物・特性> | 8 | にぶい赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・粘土少量。 |
|-------|---------------------|----|---------------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子・焼土粒子少量。 | 9 | 暗褐色 焼土粒子・焼土小ブロック少量。 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック少量。 | 10 | 黒褐色 炭化物・焼土粒子少量。 |
| 3 黒褐色 | 炭化粒子少量。 | 11 | 黒褐色 炭化物・焼土粒子少量。 |
| 4 暗褐色 | 炭化粒子・焼土粒子少量。 | 12 | 褐色 ローム粒子中量。 |
| 5 黒褐色 | 炭化物少量。 | 13 | 黒褐色 焼土粒子少量(SI132覆土)。 |
| 6 暗褐色 | ローム小ブロック少量。 | 14 | 黒褐色 炭化粒子少量(SI132覆土)。 |
| 7 黒褐色 | 炭化物・焼土粒子・焼土小ブロック少量。 | 15 | 褐色 ローム粒子中量(SI132覆土)。 |

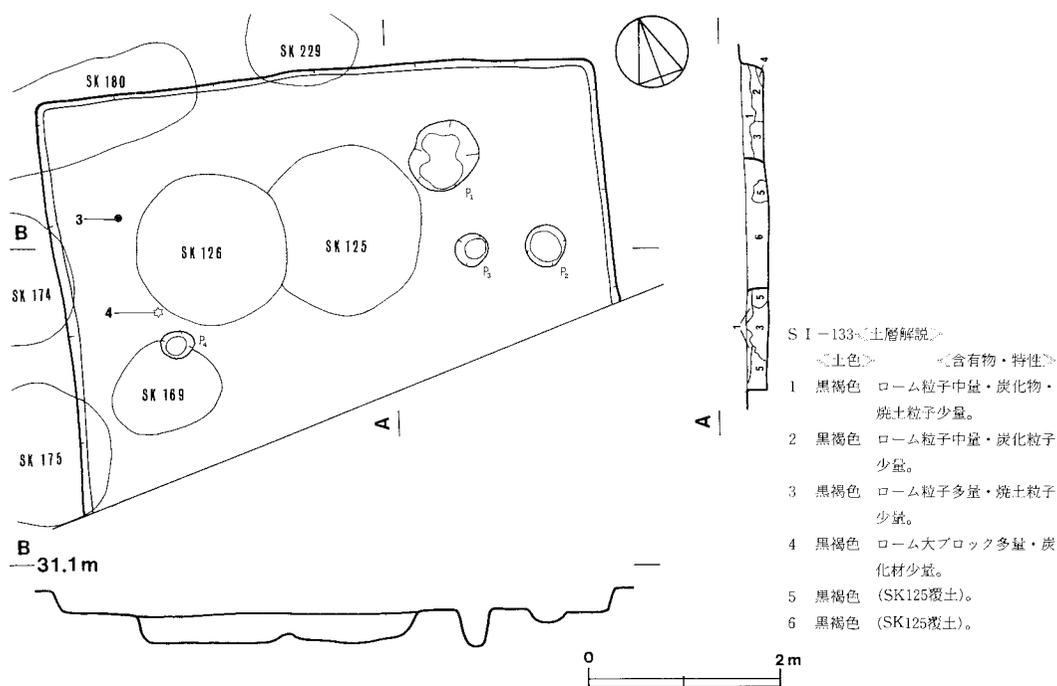
第145図 第131・132号住居跡実測図

第133号住居跡 (第146図)

位置 B6i₇区。**重複関係** 本跡<SK-125<SK-126, 本跡<SK-169。SK-174, 175, 180, 229 (新旧関係不明)。**平面形** 方形と推定。**規模** 5.93×(4.41)m。**主軸方向** N-80°-W。**壁** 外傾。壁高23~27cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。床面中央部は、硬く締まる。**ピット** 4か所。P₁ (径78cm, 深さ20cm), P₂~P₄ (径33~44cm, 深さ13~40cm) は、いずれも、本跡に伴うものと考えられるが、位置・形状からは、支柱穴と明確に判断できない。**覆土** 住居跡の中央部は後世の遺構と重複しており、その他の部分では自然堆積。

遺物 土師器(甕1, 高坏2, 細片230点), 鉄製品(刀子1点), 鉄滓1点。遺物は、住居跡内の全域に散在して出土。第394図3の高坏は西壁付近の床面から逆位で出土。

所見 住居跡の南側部分はエリア外に延びており、貯蔵穴, 炉, カマドの存在は確認できなかった。本跡は、遺物から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。



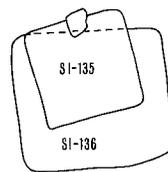
第146図 第133号住居跡実測図

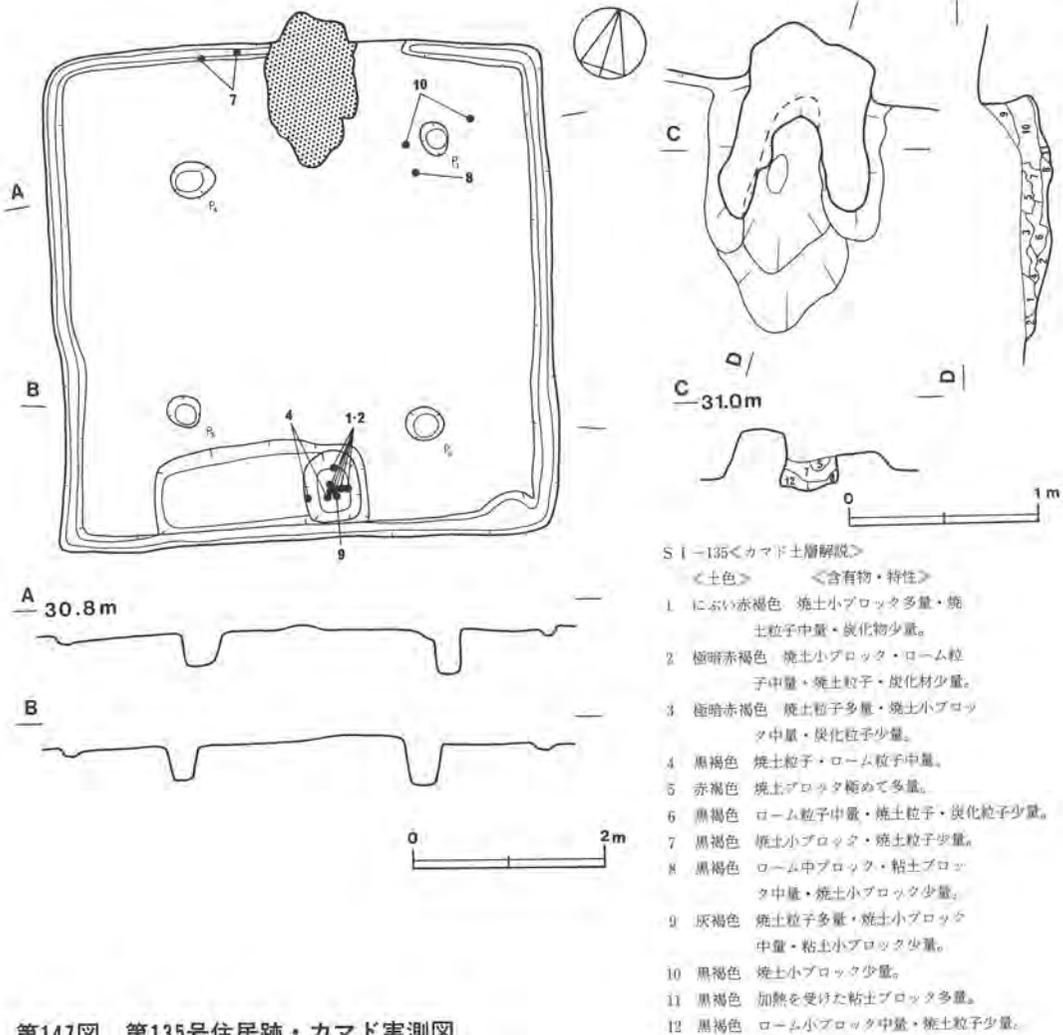
第135号住居跡 (第147図)

位置 B6h₅区。重複関係 SI-148<SI-136<本跡。SI-152 (新旧関係不明)。平面形 方形。規模 5.38×4.34m。主軸方向 N-21°-W。壁 不明。壁溝 幅10~16cm, 深さ6cm前後で全周。床 若干の凹凸があるもののほぼ平坦。南壁寄りに窪みがみられる。床面中央部では硬く締まる。ピット 4か所。すべて支柱穴。径34~47cm, 深さ36~47cm。貯蔵穴 南壁中央部寄りに検出。平面形は径77×61cmの楕円形を呈し, 深さ58cm。カマド 北壁中央部に付設され, 粘土・砂で構築。両袖部, 天井部の一部が残存。燃焼部は住居の壁面より内側に位置し, 火床部は床面より16cm程掘り込んで造られている。カマド内には, 焼土・焼土ブロックが堆積。覆土 自然堆積。

遺物 土師器 (甕3, 甑1, 高坏2, 埴3, 坏4, 装飾器台1, 埴1, 細片235点), 須恵器片5点。遺物は, カマド周辺及び貯蔵穴内から出土。第394図1, 2の甕は貯蔵穴覆土下位から出土。

所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。





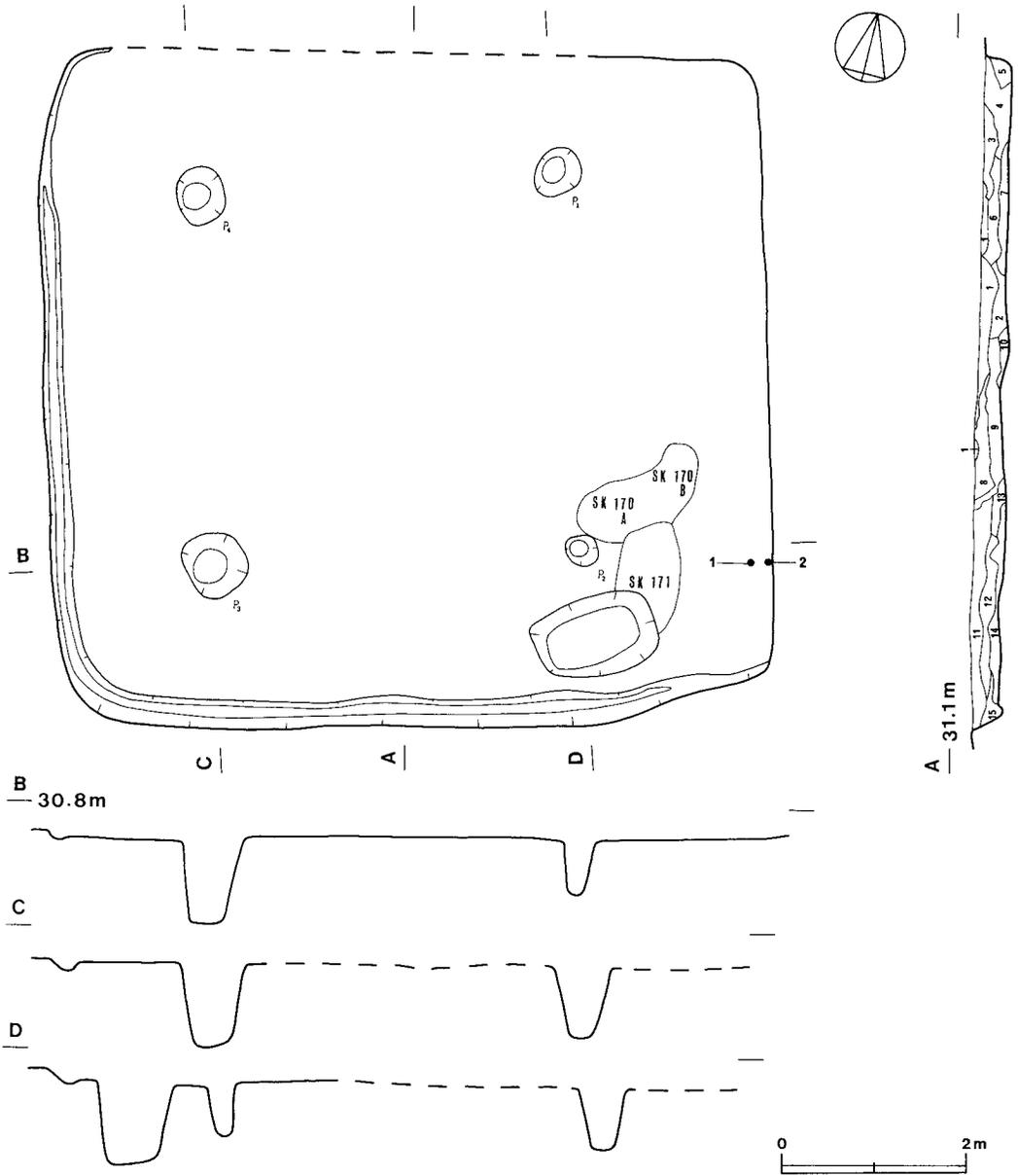
第147図 第135号住居跡・カマド実測図

第136号住居跡 (第148図)

位置 B6i₃区。重複関係 SI-148<本跡<SI-135。SI-152, SK-170A, 170B, 171 (新旧関係不明)。平面形 方形。規模 7.98×[7.40]m。主軸方向 (N-10°-W)。壁 不明。壁溝 不明。床 ほぼ平坦。床面は、中央部が第135号住居跡によって削除され、その他の部分でも後世の攪乱があり遺存状態は極めて悪い。部分的に硬い床面を確認。ピット 4か所。すべて主柱穴。径36~75cm, 深さ59~92cm。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出。平面形は径135×87cmの楕円形を呈し、深さ90cm。覆土 後世の多くの遺構と重複しており、その他は自然堆積。

遺物 土師器 (甕2, 高坏1, 埴1, 坏1, 細片830点), 須恵器片7点, 鉄滓2点。遺物は、南東コーナー部を中心に出土。

所見 本跡は、第135号住居跡やその他の遺構と重複し、しかも牛蒡の耕作による攪乱が著し



S1-136「土層解説」

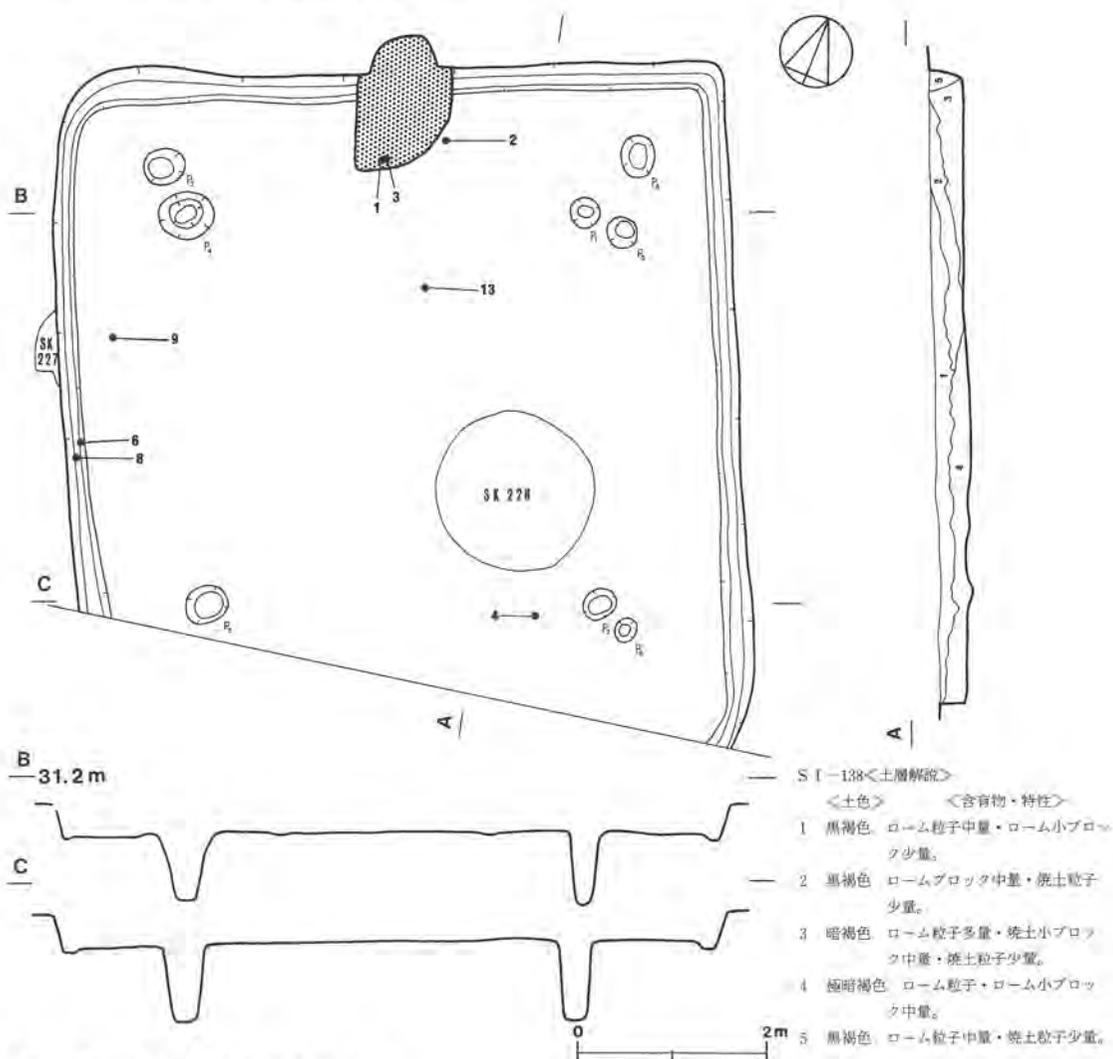
- | ＜土色＞ | ＜含有物・特性＞ | | |
|--------|------------------------------|---------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子中量・炭化材少量。 | 6 黒褐色 | 焼土粒子・ローム粒子中量。 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子中量・焼土粒子・炭化材少量。 | 7 黒褐色 | ローム粒子多量・焼土粒子少量。 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子中量・焼土粒子少量。 | 8 極暗褐色 | ローム粒子多量・焼土小ブロック・焼土粒子中量。 |
| 4 黒褐色 | 焼土小ブロック・ローム粒子中量・焼土粒子・炭化材・少量。 | 9 黒褐色 | 炭化材・ローム粒子多量。 |
| 5 暗褐色 | 焼土粒子少量。 | 10 黒褐色 | ロームブロック多量・焼土粒子・焼土ブロック少量。 |
| | | 11 黒褐色 | ローム粒子多量・焼土粒子少量。 |
| | | 12 黒褐色 | ローム粒子中量。 |
| | | 13 暗褐色 | ローム粒子中量・焼土粒子・炭化粒子少量。 |
| | | 14 極暗褐色 | ローム粒子中量・焼土粒子少量。 |
| | | 15 黒褐色 | ローム粒子中量。 |

第148図 第136号住居跡実測図

く、主軸方向は推定。炉、カマドは、第135号住居跡との重複により確認できなかった。本跡は第135号住居跡の貼床下から検出されており、第135号住居跡よりも古く、遺構の特徴や重複関係から古墳時代中期に位置付けられるものと思われる。

第138号住居跡 (第149, 150図)

位置 B6i区。重複関係 SK-228<本跡<SK-227。平面形 方形と推定。規模 (7.32) × 7.24m。主軸方向 N-21°-W。壁 外傾。壁高30~37cm。壁溝 幅12~22cm、深さ5cm前後で全周。床 平坦。貼床。床面中央部は極めて硬い。ピット 8か所。P₁からP₄(径33~59cm、深さ73~83cm)は支柱穴。P₅からP₇(径27~45cm、深さ23~45cm)は、補助柱穴。P₈(径45cm、深さ46cm)は、性格不明。貯蔵穴 他の遺構との重複により、その有無は不明。カマド 北壁中央

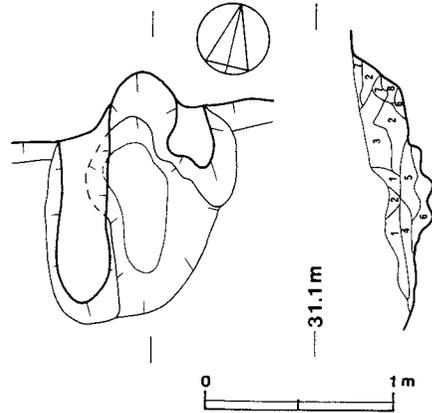


第149図 第138号住居跡実測図

部に付設され、粘土・砂で構築。トレンチャーによる攪乱によって天井部・右袖部が崩壊。燃焼部は、住居壁面の内側にあり、煙道部は、燃焼部奥壁から急な傾斜をもって外側に延びる。火床部は床面から約20cm掘り窪められている。覆土下層には焼土が堆積。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器(甕2, 甑1, 高坏1, 坏8, 細片962点), 須恵器片19点, 鉄製品(刀子1点)。遺物は、カマド周辺及び西壁付近から出土。第396図8の坏は西壁直下の床面から斜位で、4の高坏¹床面から正位で出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



<カマド土層解説>

- 1 黒褐色
- 2 オリーブ褐色 焼土小ブロック少量・粘土層。
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・粘土小ブロック少量。
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック中量・砂質粘土含む。
- 5 暗赤褐色 焼土中ブロック中量。
- 6 赤褐色 焼土小ブロック中量。
- 7 褐色 ローム中ブロック多量。
- 8 黒褐色 ローム粒子中量・焼土粒子少量。

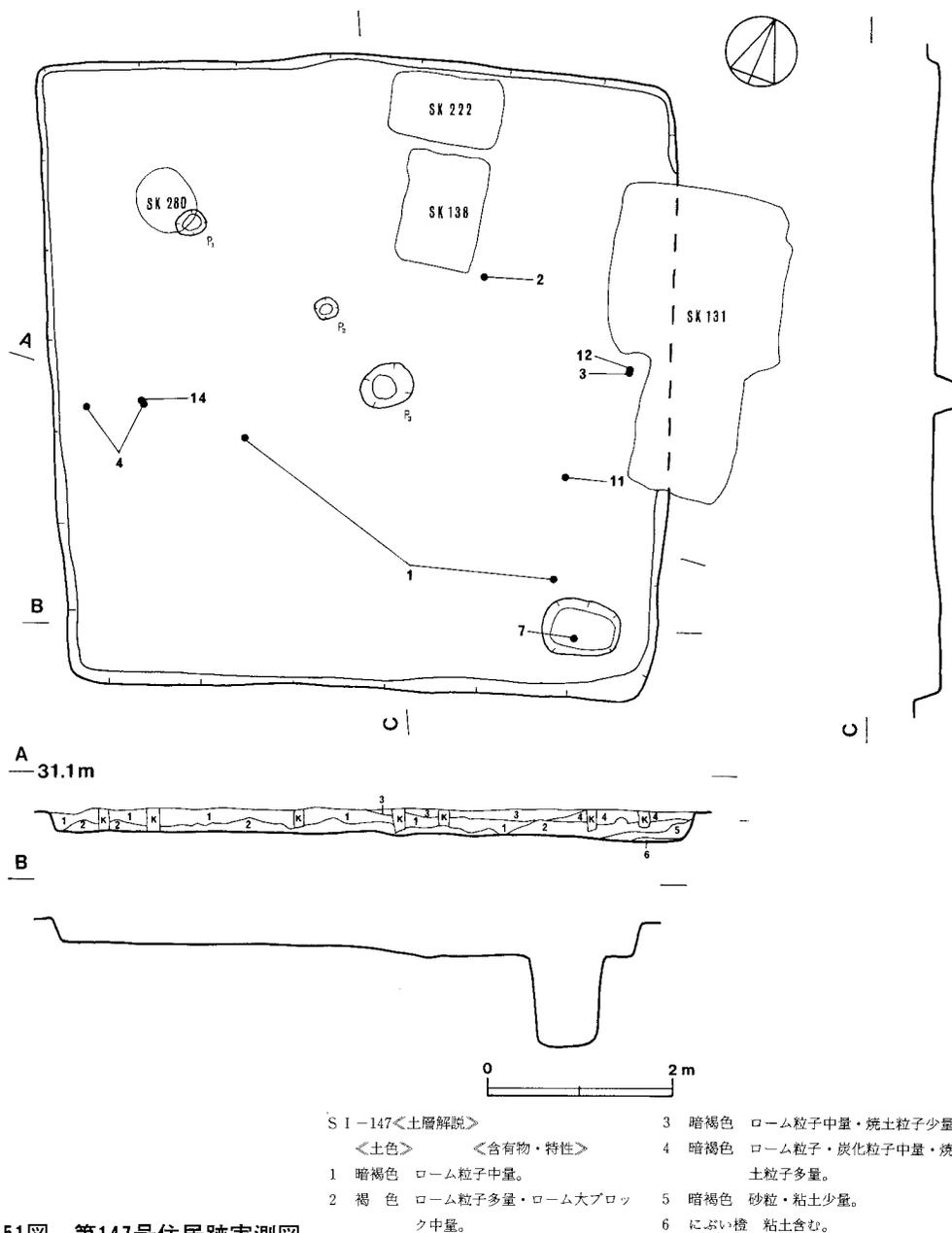
第150図 第138号住居跡カマド実測図

第147号住居跡 (第151図)

位置 B6g₃区。**重複関係** SI-143<本跡<SK-131, SK-138, SK-222。SK-280(新旧関係不明) **平面形** 方形。**規模** 6.96×6.89m。**主軸方向** N-24°-W。**壁** 外傾。壁高12~37cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。壁近くまで硬い。**ピット** 3か所。位置・形状から、P₁(径32cm, 深さ19cm)は支柱穴と考えられる。P₂(径27cm, 深さ17cm)・P₃(径58cm, 深さ31cm)は、性格不明。**貯蔵穴** 南東コーナー部に検出。平面形は径84×60cmの楕円形を呈し、深さ97cm。**炉・カマド** 床面中央部に焼土及び焼土ブロックが堆積している箇所があり、炉の痕跡と思われるが、攪乱が激しく、炉として明瞭にとらえることはできない。カマドも検出されていない。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器(甕3, 甑1, 高坏4, 埴1, 坏6, 細片558点), 須恵器片1点, 石製模造品(双孔円板1点), 石製品(敲石1点), 礫6点。遺物は、住居跡内の全域から出土。第398図7の高坏は貯蔵穴覆土上層から出土。

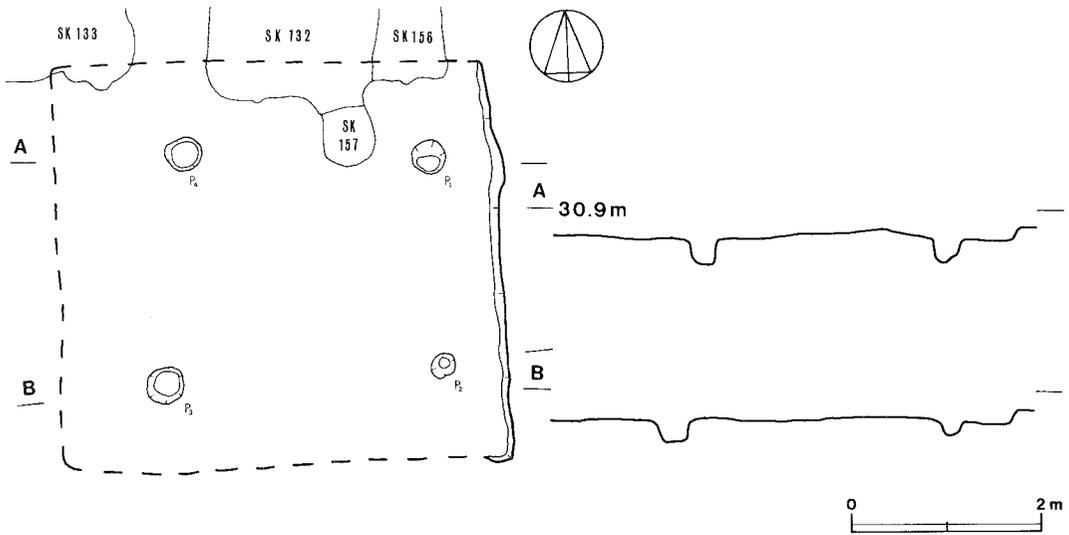
所見 本跡は、遺物から古墳時代中期に比定される住居跡と思われるが、古墳時代後期に入る可能性もある。



第151図 第147号住居跡実測図

第150号住居跡 (第152図)

位置 B6e区。重複関係 SK-132, 133, 156, 157 (新旧関係不明)。平面形 方形と推定。規模 [4.72]×[4.36]m。主軸方向 N-87°-E。壁 外傾。壁高14~16cm。壁溝 無。床 床面中央部は、硬く貼床され若干の凹凸をもつ。ピット 4か所検出され、いずれも支柱穴。径27~40cm, 深さ15~28cm。貯蔵穴 無。炉・カマド 他の遺構との重複により、その有無は不明。覆土 自然堆積。



第152図 第150号住居跡実測図

遺物 土師器（坏1，細片41点）。出土した遺物はいずれも小片で，実測できる遺物は第400図1の坏1点である。

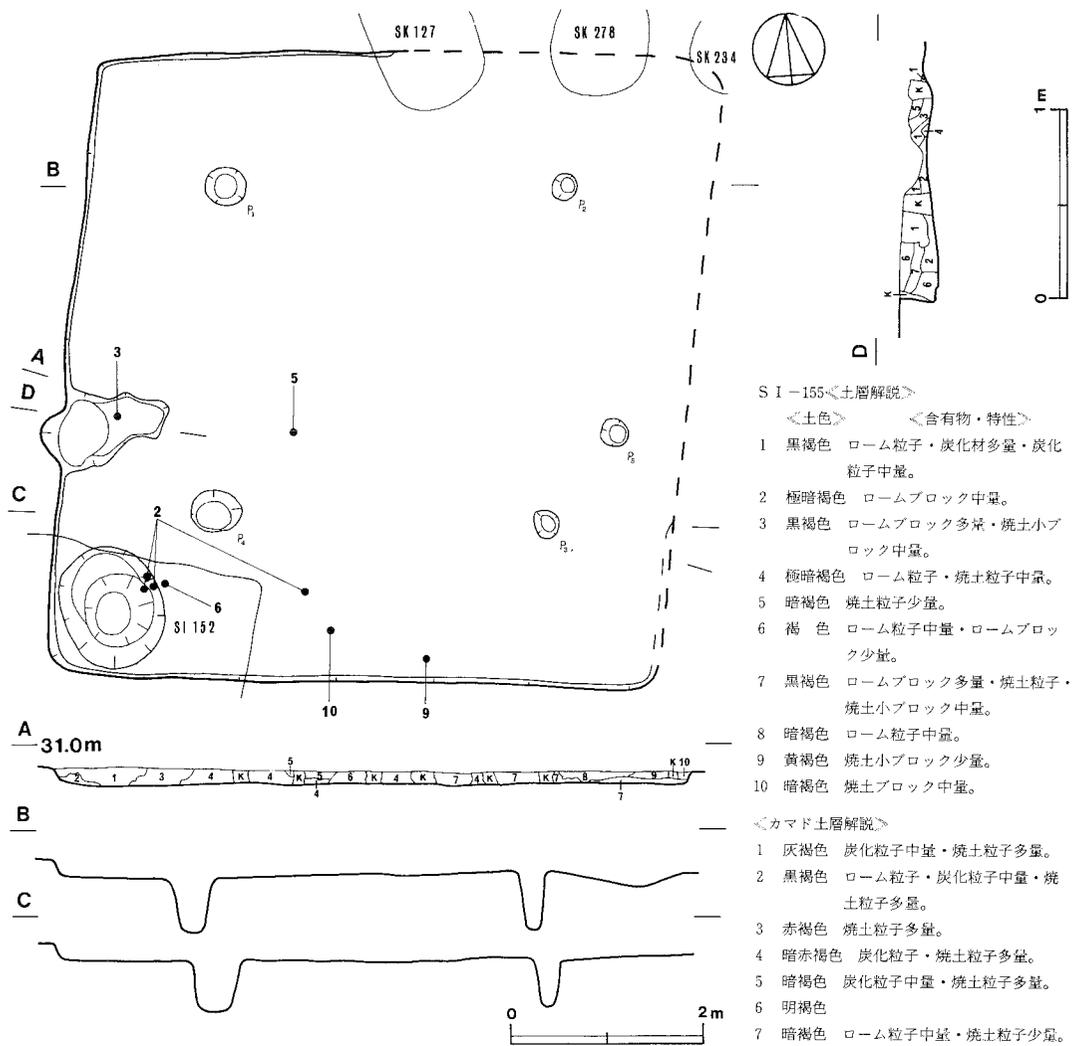
所見 本跡は，出土した遺物がいずれも小片であるが，遺物の特徴から古墳時代後期に位置付けられるものと思われる。

第155号住居跡（第153図）

位置 B6f₇区。**重複関係** 本跡<SK-234。SI-152，SK-127，278（新旧関係不明）。**平面形** 方形。**規模** 6.71×[6.55]m。**主軸方向** N-78°-W。**壁** 外傾。壁高8～22cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。床面全体が硬く締まる。**ピット** 5か所。P₁～P₄（径29～53cm，深さ52～62cm）は支柱穴。P₅（径31cm，深さ43cm）は，出入り口部に伴う梯子ピット。**貯蔵穴** 南西コーナー部に検出。平面形は径132×106cmの不整円形を呈し，深さ62cm。**カマド** 西壁中央部南寄りに付設され，粘土・砂で構築。火床部は，床面から約6cmほど掘り窪められる。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器（甕3，壺1，高坏2，埴2，坏3，細片844点），須恵器片1点，石製品（砥石1点，敲石1点），鉄製品（不明1点）。遺物は，住居跡内の南部を中心に出土。第400図3の壺はカマド内覆土から潰れた状態で，10の坏は南壁付近の床面から正位で出土。

所見 本跡は，遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



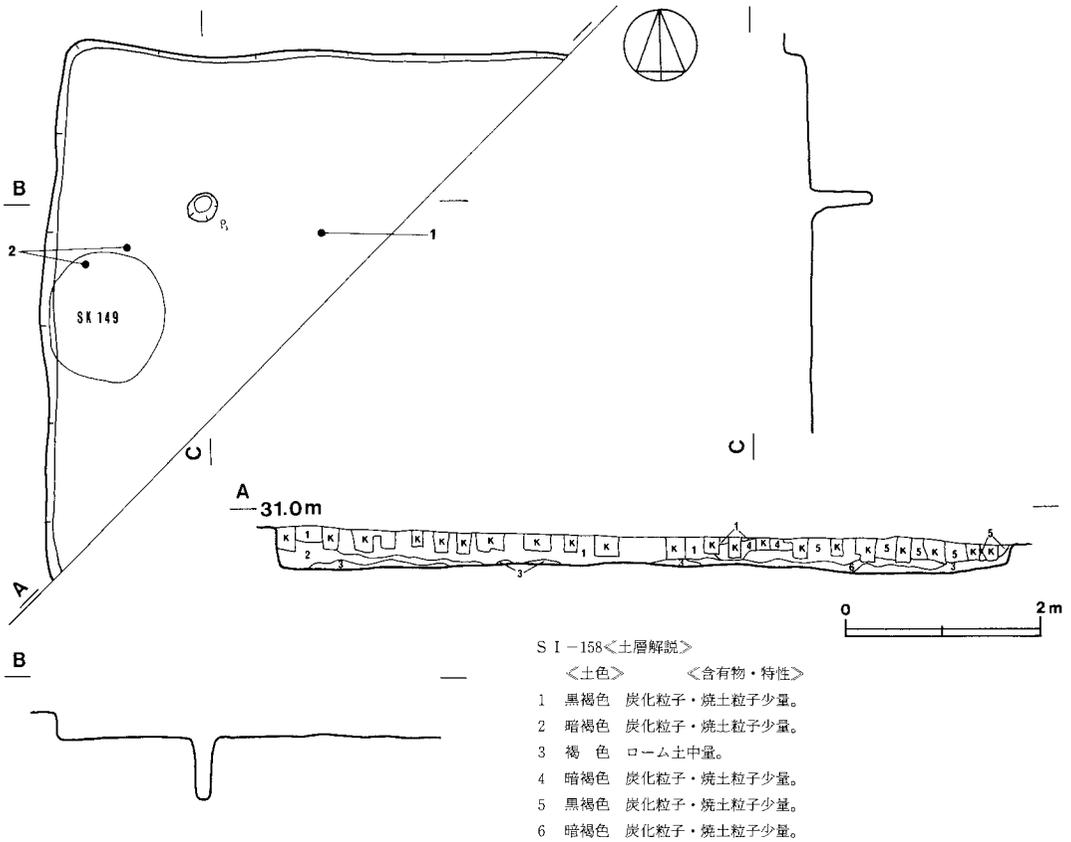
第153図 第155号住居跡実測図

第158号住居跡 (第154図)

位置 B7g₁区。**重複関係** SI-161, SK-149(新旧関係不明)。**平面形** 方形と推定。**規模** (5.78)×(5.33)m。**主軸方向** N-78°-W。**壁** 垂直。壁高25~29cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。床面中央部は極めて硬い。**ピット** 1か所検出され、径34cm、深さ66cm。主柱穴。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器(甕2, 細片344点), 須恵器片3点, 石製模造品(白玉1点), 鉄製品(不明1点)。遺物は、住居跡内の全域から出土。第402図1の甕は中央部床面から潰れた状態で出土。

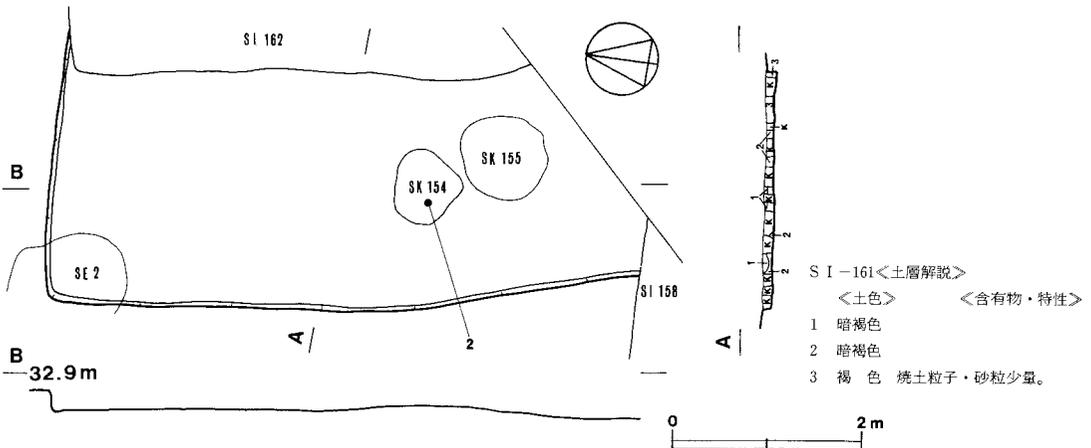
所見 住居跡の南東部がエリア外に延びるため、貯蔵穴, 炉, カマドの存在は確認できなかった。本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第154図 第158号住居跡実測図

第161号住居跡 (第155図)

位置 B7e₂区。重複関係 本跡<SI-162。SI-158, SK-154, 155, SE-2(新旧関係不明)。



第155図 第161号住居跡実測図

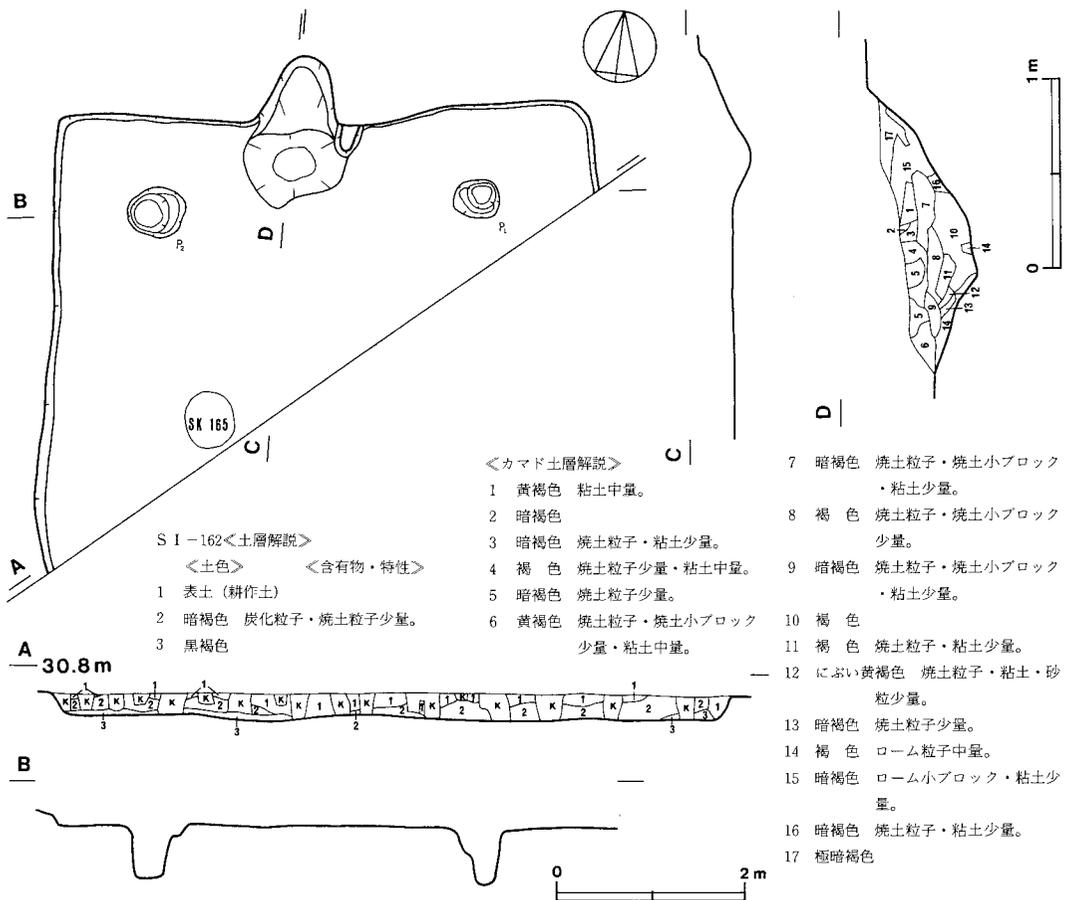
平面形 方形と推定。規模 (6.30)×(2.91)m。主軸方向 N-7°-W。壁 垂直。壁高21cm。壁溝 無。床 平坦。床面中央部は、硬く締まる。ピット 無。覆土 トレンチャーによる攪乱が著しく自然堆積であるか否かは不明。

遺物 土師器 (高坏1, 坏2, 細片127点), 須恵器片1点。遺物は, 細片が殆どで住居跡内の全域から出土。第402図2の坏は西壁付近の覆土下層から正位で出土。

所見 住居跡が延びる東側部分は第162号住居跡と重複しており, 貯蔵穴, 炉, カマドの存在は確認できなかった。本跡は, 遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第162号住居跡 (第156図)

位置 B7e₃区。重複関係 SI-161<本跡。SK-165 (新旧関係不明)。平面形 方形と推定。規模 5.75×(4.92)m。主軸方向 N-4°-W。壁 垂直。壁高31cm。壁溝 無。床 平坦。床面全体が硬い貼床。ピット 2か所。いずれも支柱穴。径47~61cm, 深さ58cm。貯蔵穴 他の遺構



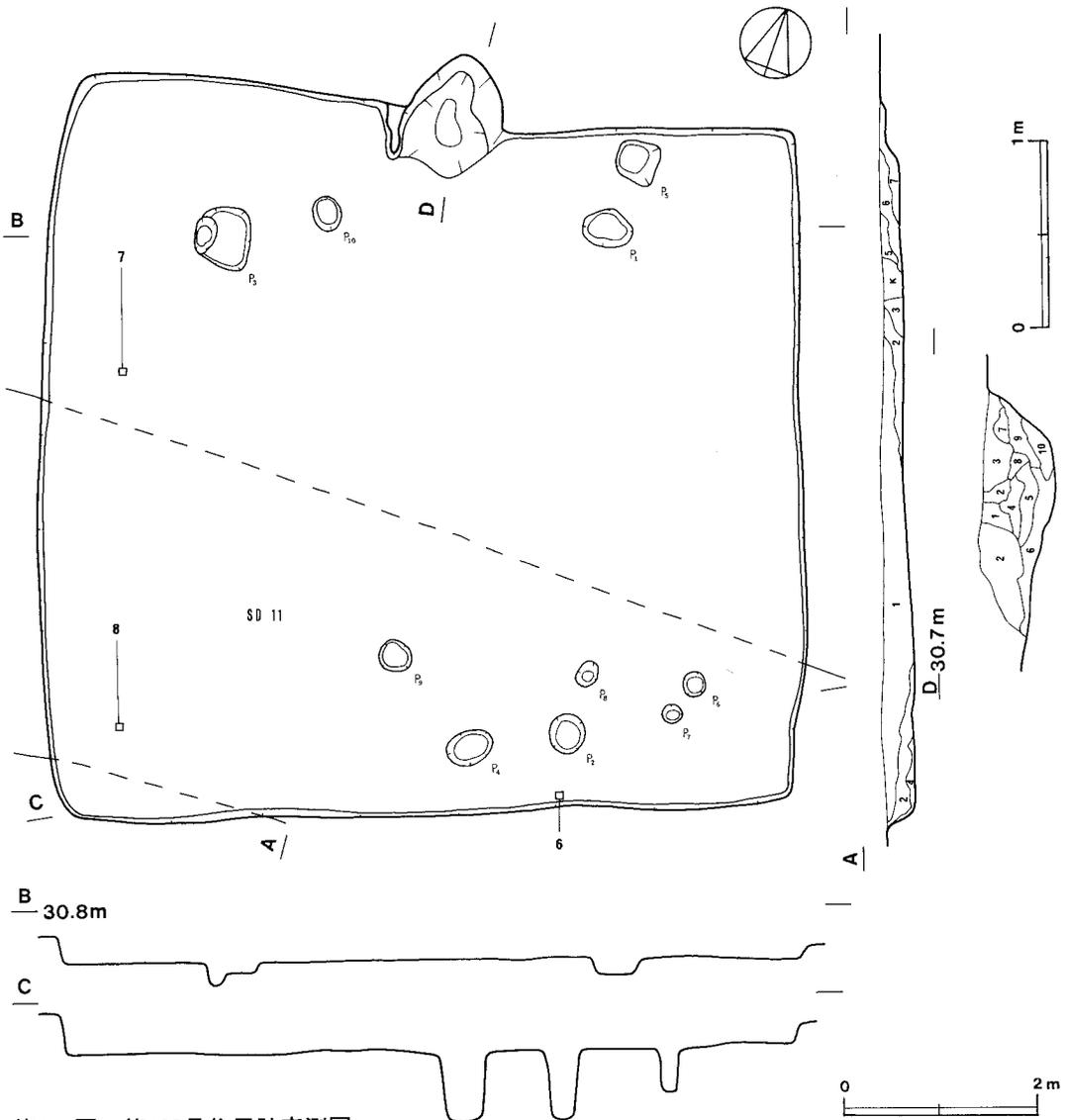
第156図 第162号住居跡実測図

との重複により、その有無は不明。カマド 北壁中央部西寄りに付設され、粘土・砂で構築。天井部は崩落し、右袖部がわずかに残存。火床部は、床面から30cm前後掘り窪められ、煙道部は燃烧部奥壁から緩やかな傾斜で屋外へ延びている。カマド内には焼土・焼土ブロックが堆積。覆土自然堆積。

遺物 土師器（埴1，細片416点），須恵器（坏1，細片8点）。遺物は、住居跡内の全域から出土しているが、いずれも細片が殆どである。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

第165号住居跡（第157図）



第157図 第165号住居跡実測図

S1-165 <土層解説>

<土色> <含有物・特性>

- 1 黒褐色
- 2 黒褐色
- 3 黒褐色
- 4 極暗褐色
- 5 灰褐色 粘土中量・焼土・炭化粒子少量。
- 6 褐色 焼土粒子・炭化粒子少量。
- 7 暗褐色 粘土多量・焼土・炭化粒子少量。

<カマド土層解説>

- 1 凝灰岩
- 2 褐色 粘土中量・焼土ブロック・炭化粒子少量。
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土少量。
- 4 灰褐色 粘土中量・焼土ブロック・炭化粒子少量。
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量・炭化粒子・粘土少量。
- 6 褐色 ローム粒子少量。
- 7 褐色 焼土ブロック・炭化粒子・粘土少量。
- 8 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子・粘土少量。
- 9 暗褐色 粘土中量・焼土・炭化粒子少量。
- 10 褐色 ローム粒子多量・焼土ブロック・炭化粒子・粘土少量。

位置 B7c₄区。重複関係 SD-11<本跡。平面形 方形。規模 8.20×8.12m。主軸方向 N-16°-W。壁 垂直。壁高 12~47cm。壁溝 無。床 平坦。壁付近まで硬い貼床。ピット 10か所。P₁(径42×53cm, 深さ16cm), P₂(径43cm, 深さ78cm), P₃(径60×68cm)が支柱穴。P₄からP₁₀は, 性格不明。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部に付設され, 粘土・砂で構築。トレンチャーによる攪乱が著しく, 左袖一部が残存。火床部は床面から18cm程掘り窪められる。カマド内の覆土中には, 焼土・焼土ブロックが堆積。覆土上層からは, 天井部の補強材として用いたと思われる凝灰岩が出土。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(高坏1, 坏2, 細片767点), 須恵器(高坏2, 細片7点), 石製品(紡錘車2点, 砥石1点)。遺物は, 住居跡内の全域から出土しているが, 細片が多い。

所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。

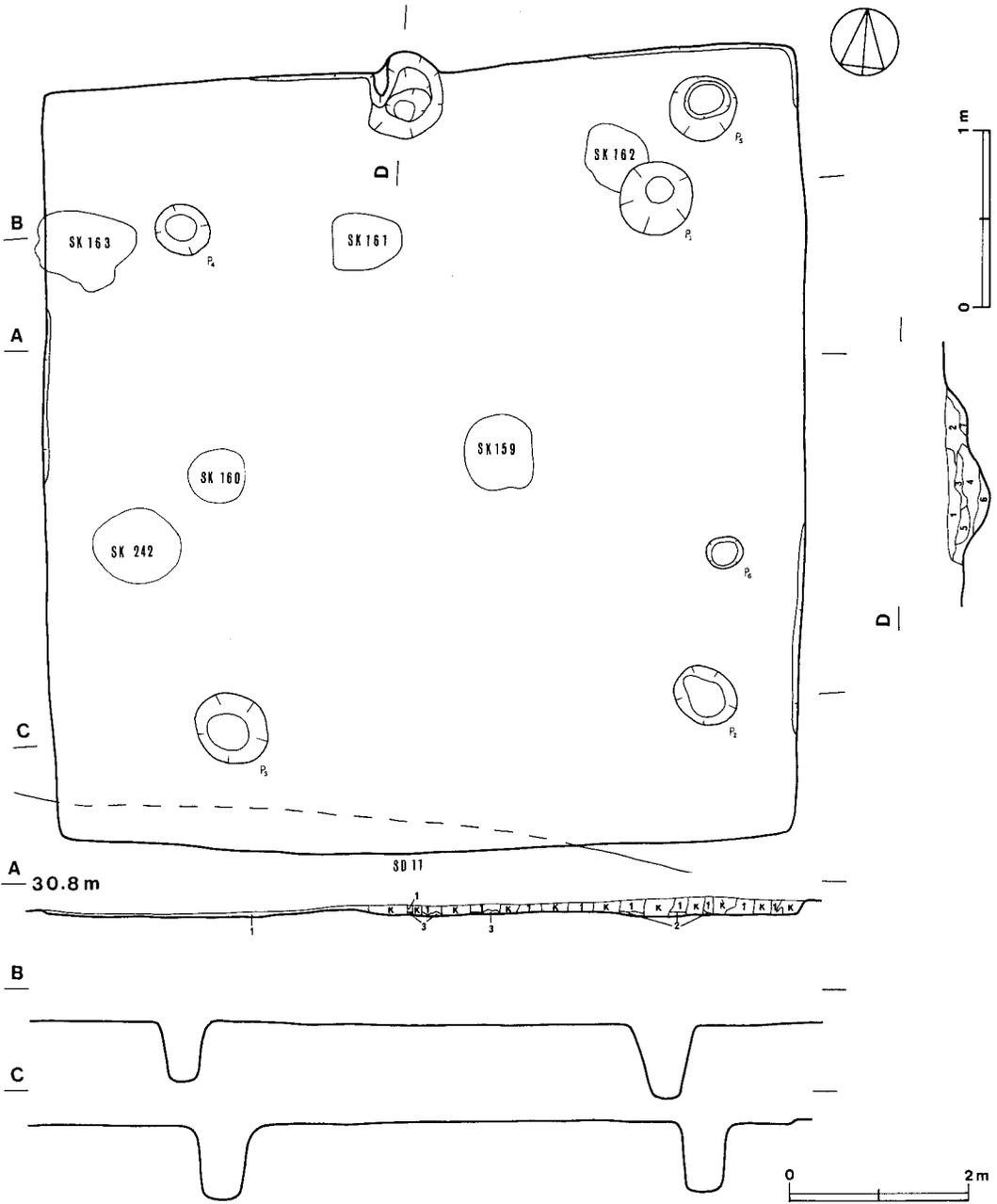
第168号住居跡(第158図)

位置 B6b₀区。重複関係 SD-11<本跡<SK-242。SK-159, 160, 162, 163(新旧関係不明)。平面形 方形。規模 9.00×8.65m。主軸方向 N-11°-W。壁 不明。壁高 0~6cm。壁溝 無。床 平坦。全体が硬い貼床。ピット 6か所。P₁~P₄(径64~89cm, 深さ68~84cm)は支柱穴。P₅・P₆は, 性格不明。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部に付設され, 粘土・砂で構築。左側袖部のみわずかに残存。火床部は, 床面より約14cmほど掘り窪められる。覆土 覆土が浅い上, 攪乱が著しく自然堆積であるか否かは不明。

遺物 土師器(坏2, 細片371点), 石製品(紡錘車1点)。遺物は, 住居跡内の全域から出土しているが, 細片が殆どである。又, 流れ込みと思われる石鏃1点が出土。

所見 本跡は, 遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。





SI-168 <土層解説>

- | <土色> | <含有物・特性> |
|------|--------------|
| 1 褐色 | 炭化粒子・焼土粒子少量。 |
| 2 褐色 | |
| 3 褐色 | ロームブロック中量。 |

<カマド土層解説>

- 1 暗褐色 焼土粒子・焼土小ブロック少量・砂粒中量。
- 2 暗褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・砂粒少量。
- 3 暗赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・粘土小ブロック少量。
- 4 極暗褐色 焼土粒子少量。
- 5 赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック少量。
- 6 暗褐色 炭化粒子少量。
- 7 暗褐色 焼土粒子少量。

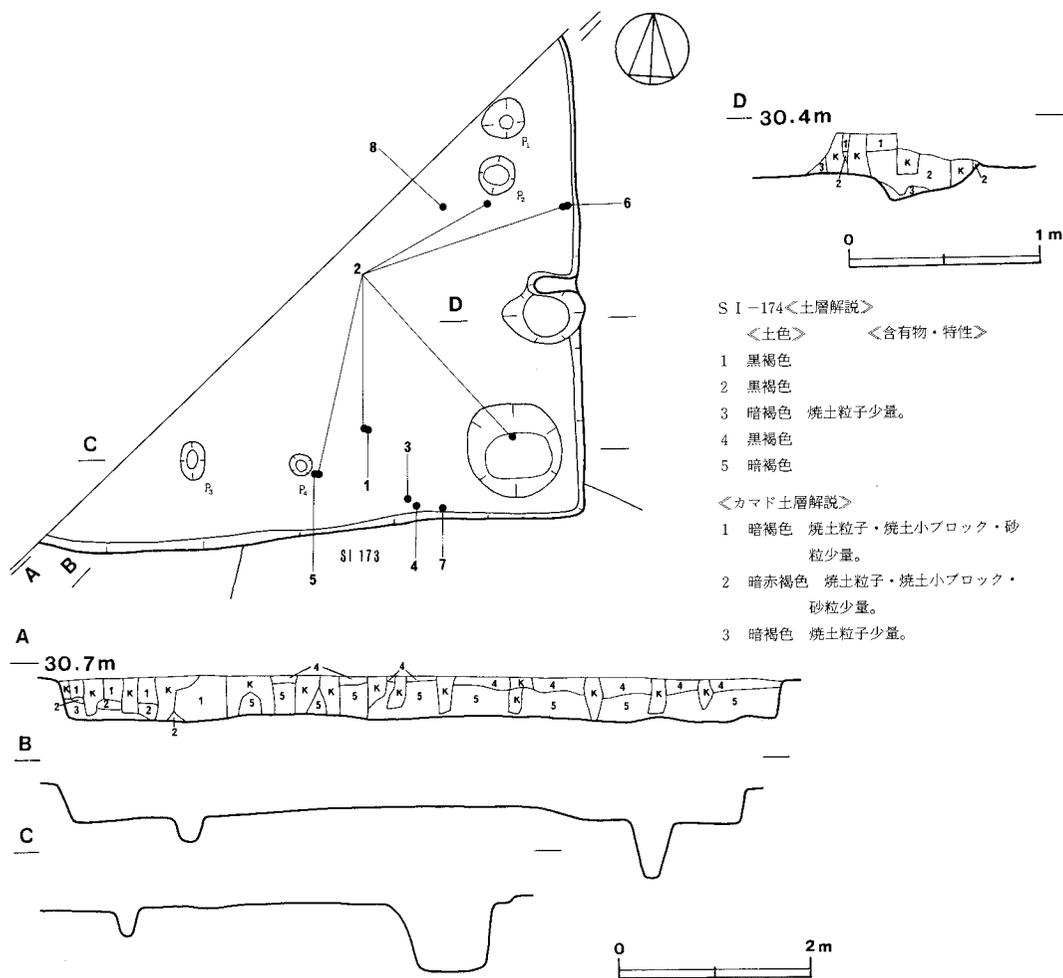
第158図 第168号住居跡実測図

第174号住居跡 (第159図)

位置 A6i₉区。重複関係 SI-173<本跡。平面形 方形と推定。規模 (5.81)×(5.13)m。主軸方向 N-83°-E。壁 外傾。壁高36~41cm。壁溝 無。床 平坦。貼床。床面中央部は極めて硬い。ピット 4か所。P₁~P₃(径40~46cm, 深さ28~46cm)は、支柱穴となる可能性がある。P₄(径23cm, 深さ34cm)は、出入り口部に伴う梯子ピット。貯蔵穴 南東コーナー部に検出。平面形は径102cmの円形を呈し、深さ73cm。カマド 東壁中央部に付設され、粘土・砂で構築。左袖部が残存。火床部は床面から15cm程掘り窪められている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器 (甕2, 甑1, 埴1, 坏6, 細片238点), 須恵器片2点。遺物は、住居跡内の全域から出土。第403図2の甑は貯蔵穴の覆土下層から潰れた状態で、5の坏は南壁付近から正位で出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から古墳時代後期に比定される住居跡と思われる。



第159図 第174号住居跡実測図

(3) 奈良・平安時代

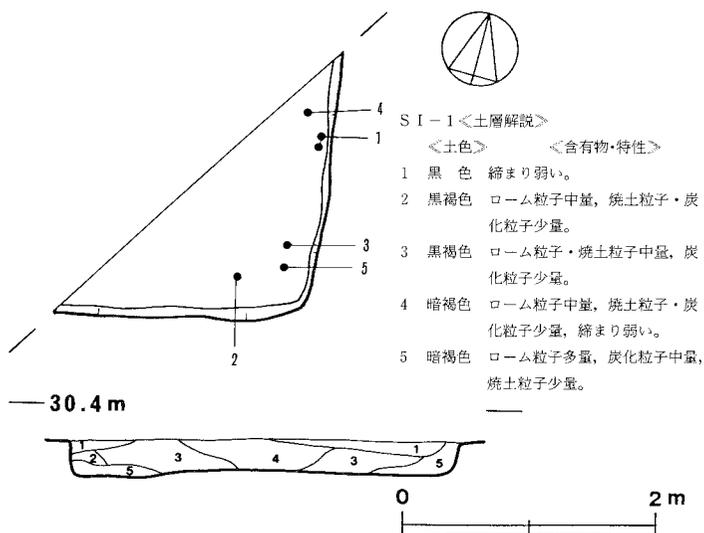
第1号住居跡 (第160図)

位置 H2e₁区。重複関係 無。平面形 [方形]。規模 (1.90) × (1.77)m。主軸方向 N-9°-W。壁 垂直。壁高24~30cm。壁溝 無。床 平坦。中央部付近が硬い。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 北壁のエリア外に付設されているものと思われる。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片85点(うち内黒土器片19点), 須恵器片7点, 鉄製品1点が出土。遺物は, 東壁中央部付近や南東コーナー付

近に集中。第404図1の甕・4の坏が東壁中央部付近の覆土下層から, 5の高台付塊が南東コーナー付近の床面から出土。

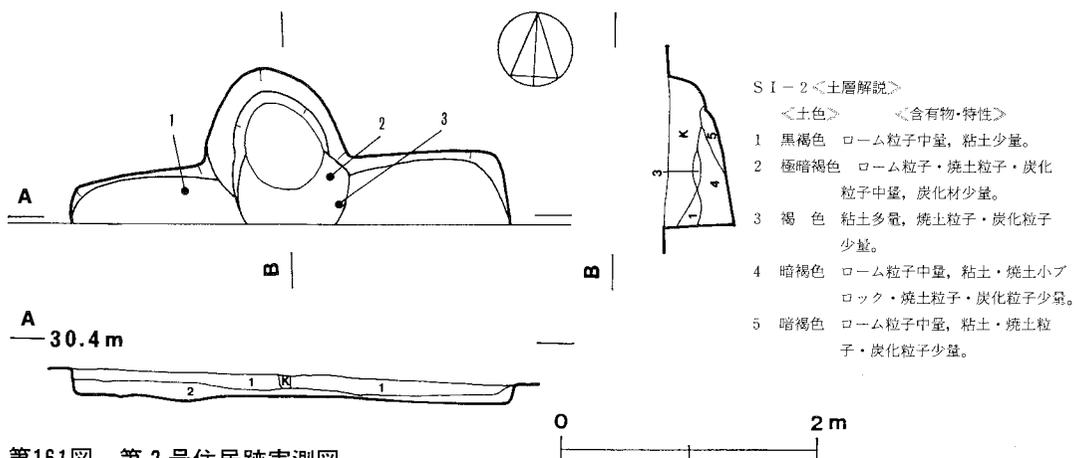
所見 本跡は西側の調査区域外へ延びており, 全体を捉えることはできなかった。本跡は, 遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。



第160図 第1号住居跡実測図

第2号住居跡 (第161図)

位置 H2e₃区。重複関係 無。平面形 [方形]。規模 3.43 × (0.58)m。主軸方向 N-7°-



第161図 第2号住居跡実測図

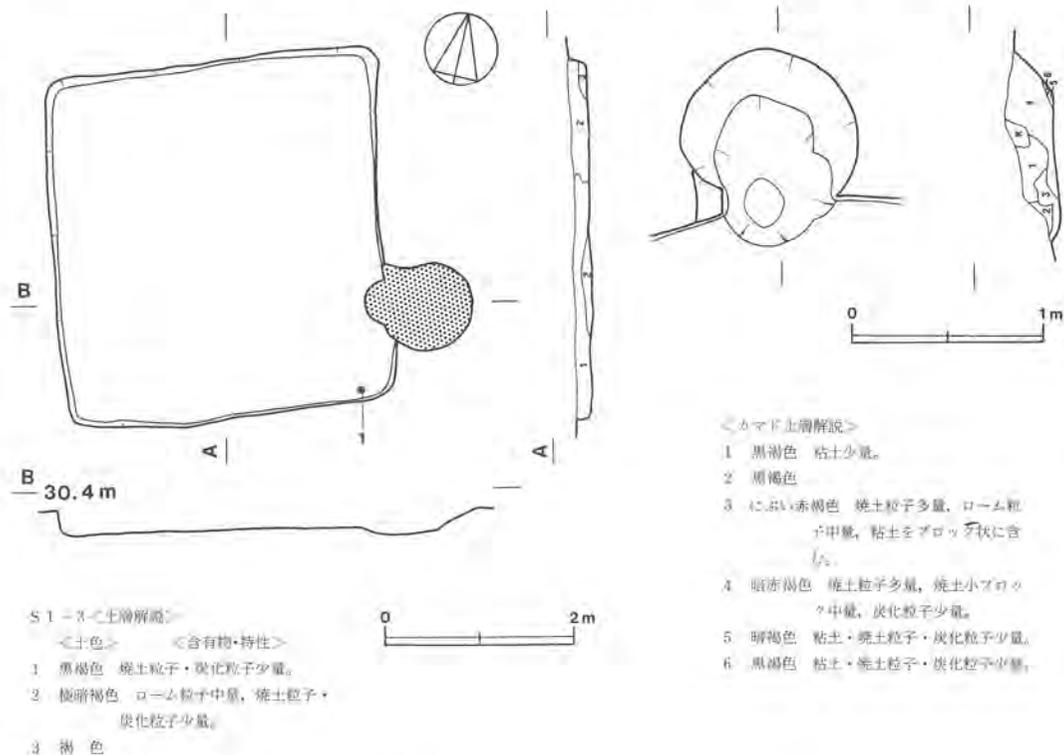
W。壁 垂直。壁高17~20cm。壁溝 無。床 平坦。特にカマド周辺が硬い。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部を80cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面とほぼ同じ高さで、焼き締めりは弱い。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片89点(うち内黒土器片7点)、須恵器片2点が出土。第404図Iの甕がカマド付近の覆土下層から、2の坏の底部片がカマド燃焼部の覆土中層から、糸切り痕を残した3の坏の底部片がカマド燃焼部の覆土下層から出土。

所見 本跡は南側の調査区域外へ延びており、全体を捉えることはできなかった。本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第3号住居跡(第162図)

位置 H2d₂区。重複関係 無。平面形 隅丸長方形。規模 3.83×3.43m。主軸方向 N-80°-E。壁 垂直。壁高18~26cm。壁溝 無。床 平坦。中央部付近が硬い。他は攪乱を受けており、遺存状況は悪い。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 東壁中央部からやや南寄りに付設。壁面をすり鉢状に80cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面を8cm程掘り窪め、ローム



第162図 第3号住居跡・カマド実測図

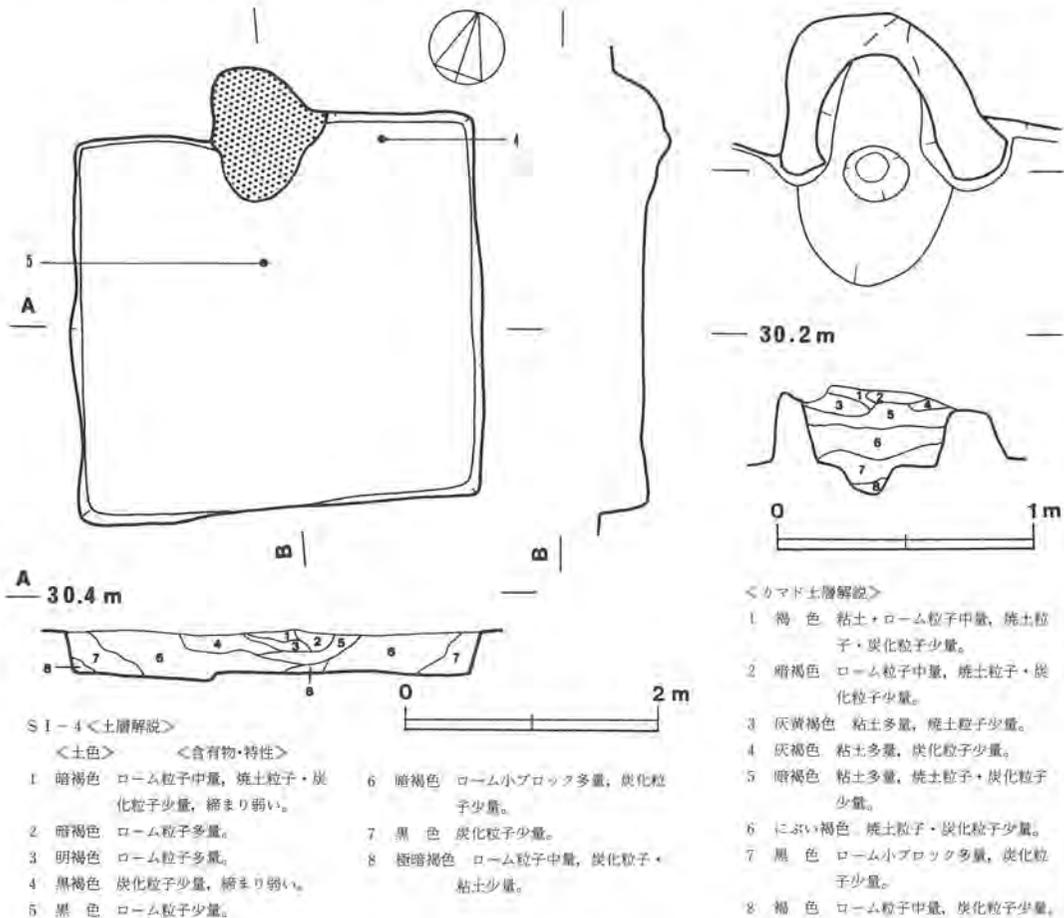
が焼けて赤変硬化している。凝灰岩製の支脚(長さ13cm)が火床から出土。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片102点(うち内黒土器片14点)、須恵器片8点、陶器片1点、砥石1点が出土。遺物はカマド付近に集中。「太」と体部に墨書された第404図1の高台付坏が、南東コーナー付近の覆土下層から正位の状態で出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第4号住居跡(第163図)

位置 H2c₉区。重複関係 無。平面形 隅丸方形。規模 3.24×3.11m。主軸方向 N-25°-W。壁 垂直。壁高30~35cm。壁溝 無。床 平坦。黒褐色土の貼床で、中央部付近が硬い。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 北西壁中央部からやや西寄りに付設。壁面を45cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面を15cm程掘り窪め、ロームがレンガ状に焼き締まっている。煙道部は火床から緩やかに立ち上がり、住居の外に延びている。第405図1の甕(2片)が、西側の袖の



第163図 第4号住居跡・カマド実測図

側壁から出土し、袖の補強に使われたものと思われる。覆土 人為堆積。

遺物 土師器片56点(うち内黒土器片3点)、須恵器片3点、砥石1点が出土。第405図5の高台付環が中央部付近の覆土中層から正位の状態、4の坏が北東コーナー付近の覆土下層から逆位の状態で出土。

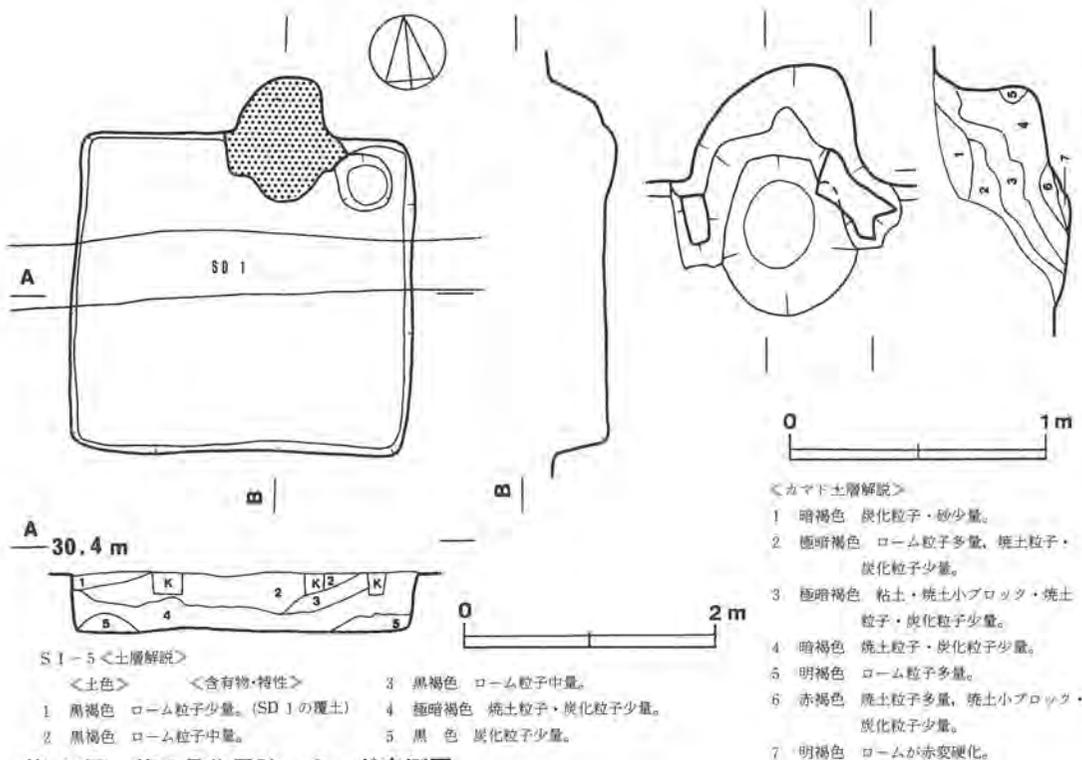
所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第5号住居跡(第164図)

位置 H2c₄区。**重複関係** 本跡<SD-1>。**平面形** 隅丸方形。**規模** 2.66×2.56m。**主軸方向** N-5°-E。**壁** 垂直。壁高44~45cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。特に中央部付近が硬い。**ピット** 無。**貯蔵穴** 北東コーナー付近に付設。径50×44cm、深さ20cmの円形。**カマド** 北壁中央部からやや東寄りに付設。壁面を45cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面を10cm程掘り窪め、ロームが焼けて赤変硬化している。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器片73点、須恵器片1点出土。土師器は、ほとんど甕の小破片である。第405図1の高台付環の底部片が南東部の覆土から出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。



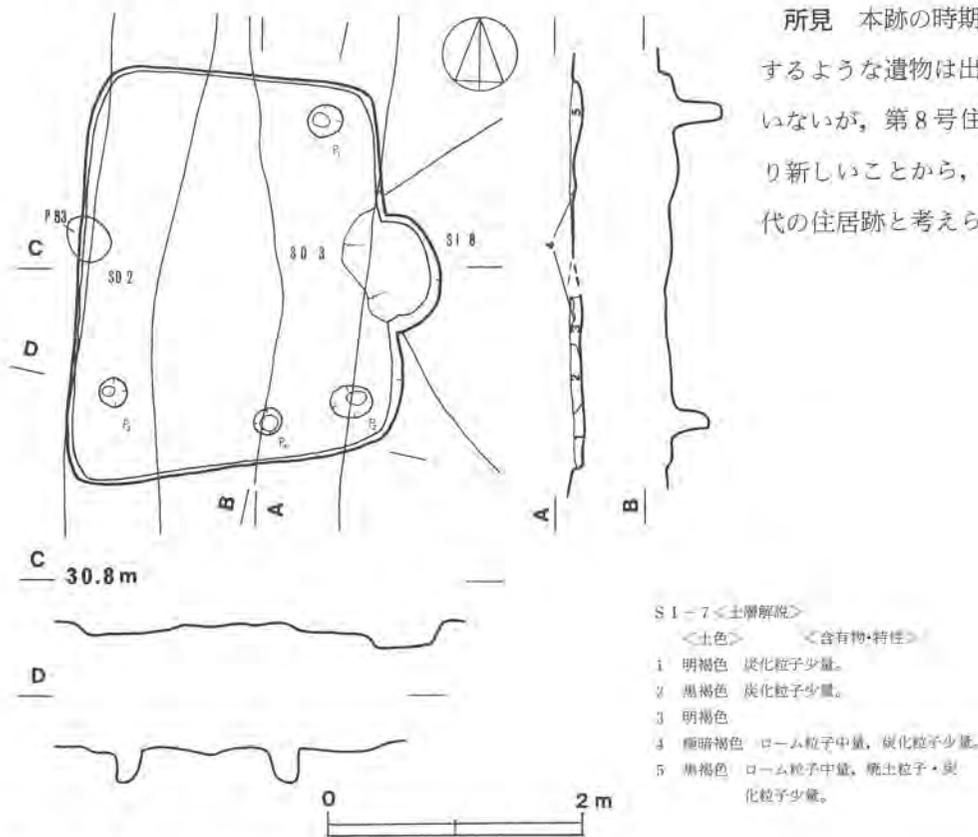
第164図 第5号住居跡・カマド実測図

第7号住居跡 (第165図)

位置 G2j₇区。重複関係 SI-8 <本跡<SD-2, SD-3。P83(新旧関係不明)。平面形 隅丸長方形。規模 3.31×2.54m。主軸方向 N-84°-E。壁 外傾。壁高5~8cm。壁溝 無。床 平坦。中央部付近だけが硬い。ピット 4か所。P₁~P₃(径21~28cm, 深さP₁が53cmと深く, 他は28~30cm)は支柱穴。P₄(径21cm, 深さ26cm)は性格不明。貯蔵穴 無。カマド 東壁中央部からやや南寄りに位置し, 壁面を半円形に36cm程切り込んで付設。大部分は第3号溝によって切られており, 遺存状況が悪い。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片49点(うち内黒土器片3点), 須恵器片2点, 陶器片1点が出土。土師器はほとんどが甕片で, 須恵器は坏の底部片や甕の胴部片である。

所見 本跡の時期を特定するような遺物は出土していないが, 第8号住居跡より新しいことから, 平安時代の住居跡と考えられる。



第165図 第7号住居跡実測図

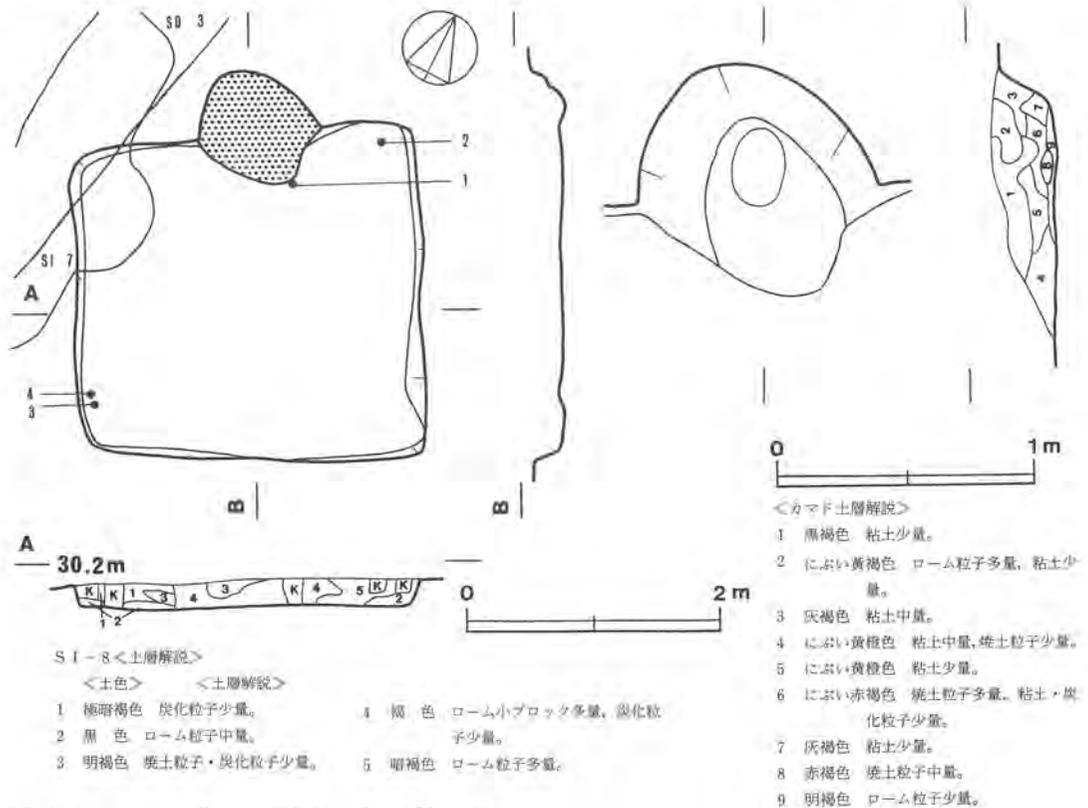
第8号住居跡 (第166図)

位置 G2j₈区。重複関係 本跡<SI-7, SD-3。平面形 隅丸方形。規模 2.71×2.71m。主軸方向 N-31°-W。壁 垂直。壁高18~23cm。壁溝 無。床 平坦。中央部が硬い。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 北西壁中央部からやや東寄りに付設。壁面を50cm程掘り込み, 粘土・

砂などで構築。火床は床面とほぼ同じ高さで、ロームが焼けて赤変硬化している。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。覆土 人為堆積。

遺物 土師器片29点(うち内黒土器片4点)、須恵器片5点が出土。第405図1の坏がカマド前方の覆土下層から、2の高台付坏が北コーナー付近の床面から正位の状態、3と4の高台付坏が南コーナー付近の床面から出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

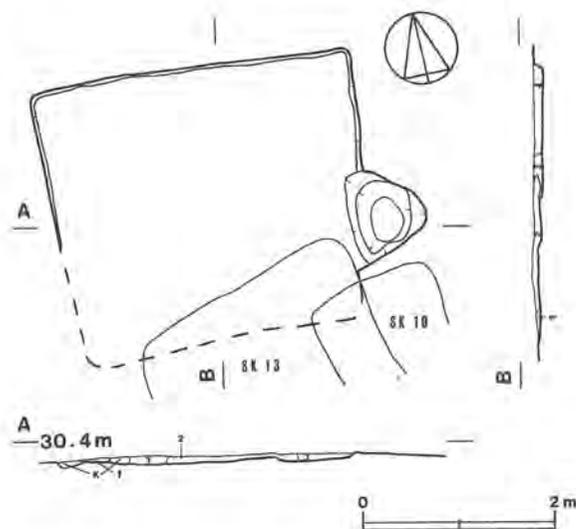


第166図 第8号住居跡・カマド実測図

第9号住居跡 (第167図)

位置 G2i₉区。重複関係 本跡<SK-10, SK-13。平面形 方形。規模 3.37×[3.20]m。主軸方向 N-90°。壁 垂直。壁高2~10cm。壁溝 無。床 平坦。中央部から南壁中央部付近にかけて硬い。他は削平されており、遺存状況が悪い。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 東壁中央部からやや南寄りに付設。壁面を60cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面を10cm程掘り窪め、焼き締まりは弱い。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片92点(うち内黒土器片15点)、須恵器片6点が出土。第405図4の高台付坏がカマ



第167図 第9号住居跡実測図

ト燃焼部の覆土から出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

S I - 9 <土層解説>

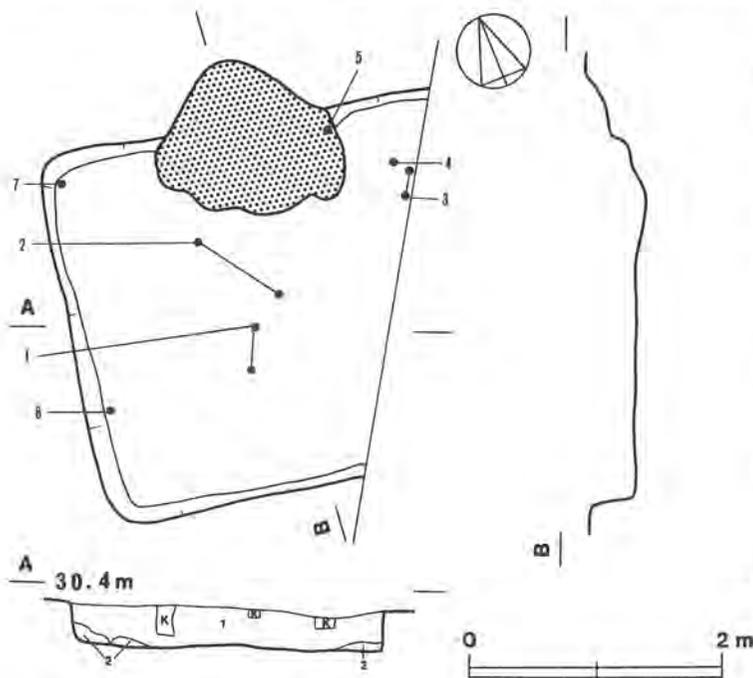
<土色> <含有物・特性>

- 1 黒褐色 ローム粒子少量。
- 2 黒褐色 焼土粒子少量。
- 3 黒褐色 粘土少量。
- 4 黒褐色 ローム粒子少量。

第10号住居跡 (第168・169図)

位置 G3g₂区。重複関係 無。平面形 隅丸方形。規模 (3.04)×3.02m。主軸方向 N-9°-E。壁 外傾。壁高30~38cm。壁溝 無。床 平坦。中央部は硬く、周囲より若干低い。壁付近は軟らかい。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部を50cm程掘り込み、粘土・砂などで

構築。火床は床面を10cm程掘り窪め、ロームが焼けて赤変硬化している。煙道部は火床から緩やかに立ち上がり、住居の外に延びている。焚口部は両袖と天井部に長方形の凝灰岩を配し、箱形の構造にしている。天井部の凝灰岩は長さ177cm、幅42cm、厚さ27cm。覆土自然堆積。

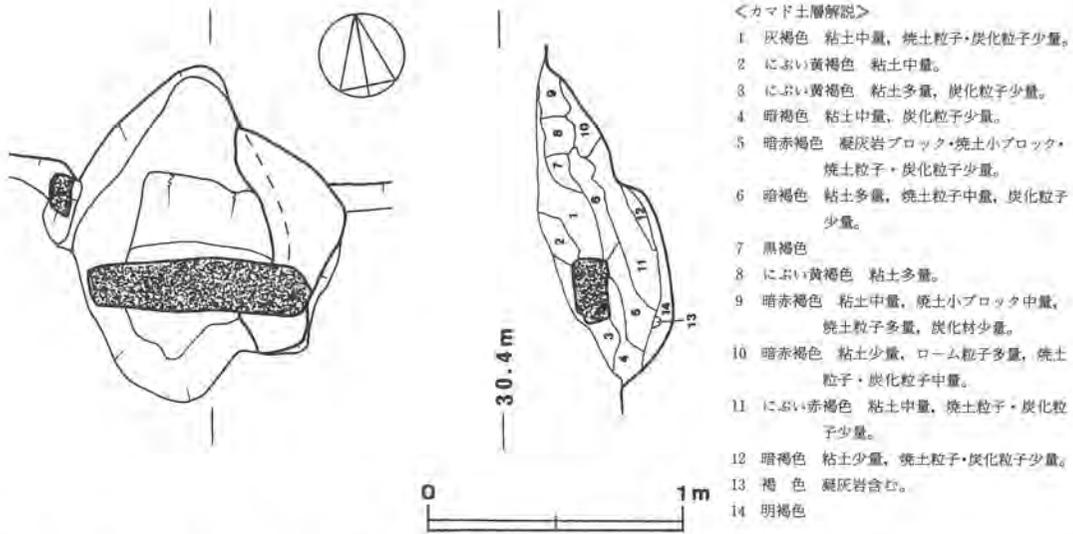


第168図 第10号住居跡実測図

S I - 10 <土層解説>

<土色> <含有物・特性>

- 1 黒褐色 粘土・焼土粒子・炭化粒子少量。
- 2 暗褐色 炭化粒子少量。



第169図 第10号住居跡カマド実測図

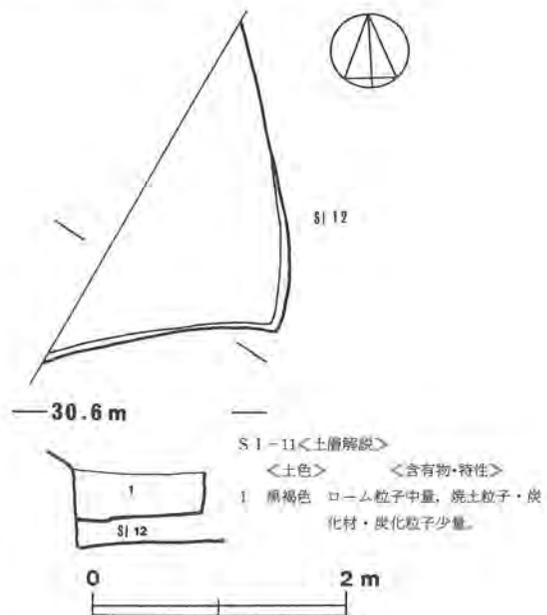
遺物 土師器片139点、須恵器片12点、刀子1点が出土。遺物は住居内の中央部付近が多い。第406図1の甕が中央部付近の床面から潰れた状態で、4の小形甕が北東部の床面から正位の状態、7の高台付坏が北西コーナー壁直下の下層から正位の状態、8の蓋が西壁中央部付近の床面から横位の状態で出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第11号住居跡（第170図）

位置 G2e区。重複関係 本跡>SI-12。平面形 [方形]。規模 (2.47)×(1.88)m。主軸方向 不明。壁 垂直。壁高 31~39cm。壁溝 無。床 平坦。黒褐色土の硬い貼床。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 北東コーナーと南西コーナーを結ぶ線より北西側がエリア外になるため不明。
覆土 自然堆積。

遺物 土師器片141点(うち内黒土器片2点)、須恵器片3点が出土。第407図1の甕の口縁部片が中央部付近の覆土下層から出土。その他、双孔円板1点が覆土から出土。



第170図 第11号住居跡実測図

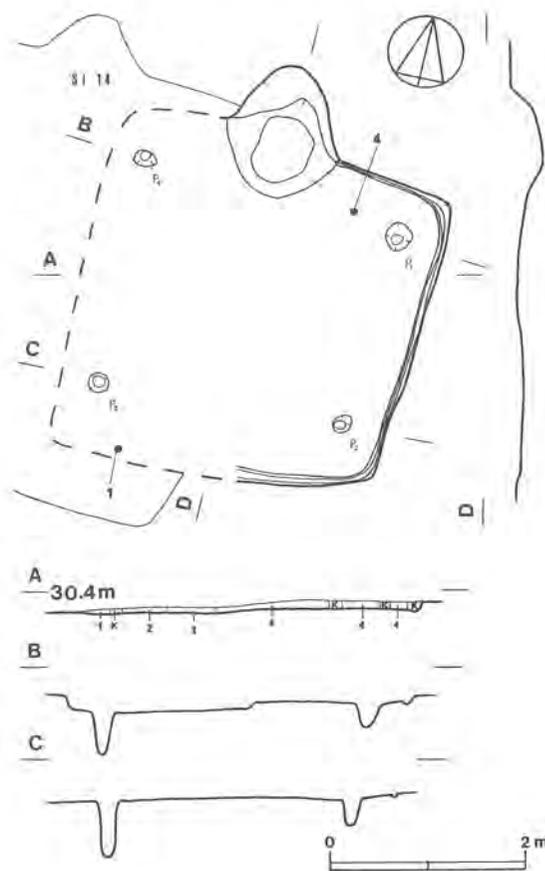
所見 本跡は北西の調査区域外へ延びていることや、第12号住居跡と切り合っていることから、全体を捉えることはできなかった。本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第13号住居跡 (第171図)

位置 G3e₁区。**重複関係** 本跡>SI-14。
平面形 [隅丸方形]。**規模** [3.65]×[3.56]m。**主軸方向** N-4°-E。**壁** 垂直。壁高0~8cm。**壁溝** 幅3~8cm、深さ3~5cmで全周。**床** 平坦。貼床で、中央部が硬い。**ピット** 4か所。P₁~P₄(径18~31cm、深さP₁・P₂が22~27cm、P₃・P₄が54~59cm)はすべて支柱穴。**貯蔵穴** 無。**カマド** 北壁中央部に位置し、粘土・砂などで構築。火床は床面を5cm程掘り窪め、焼き締めは弱い。煙道部は火床から緩やかに立ち上がり、住居の外に延びている。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器片109点(うち内黒土器片14点)、須恵器片11点が出土。遺物は住居内全体から出土。第407図1の甕が南壁中央部からやや西寄りの床面から、4の坏の底部片が北東コーナー付近の床面から出土。覆土から、墨書された内黒土器片や、須恵器の甕の胴部片などが出土。

所見 本跡は、第14号住居跡の上に貼床されて構築されている。本跡の時期は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。



SI-13<土層解説>

<土色> <含有物・特性>

- 1 明褐色
- 2 黒褐色 ローム粒子中量。
- 3 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量。
- 4 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土少量。

第171図 第13号住居跡実測図

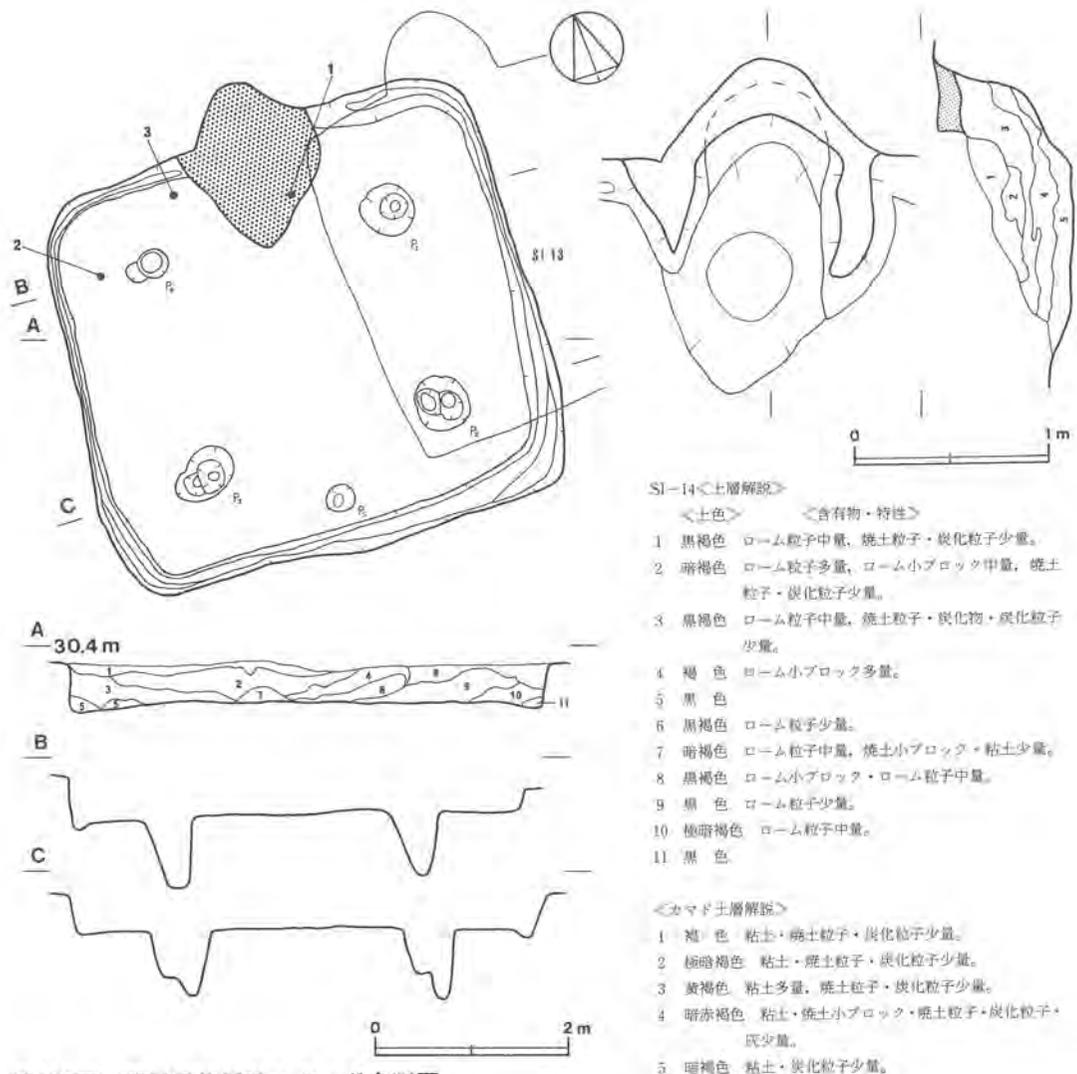
第14号住居跡 (第172図)

位置 G3e₁区。**重複関係** 本跡<SI-13。**平面形** 隅丸方形。**規模** 5.00×4.64m。**主軸方向** N-7°-E。**壁** 外傾。壁高28~55cm。**壁溝** 幅4~48cm、深さ8cm前後で全周。**床** 平坦。全体

的に硬い。ピット 5か所。P₁~P₄(径46~60cm, 深さ57~79cm)が支柱穴。底部は極めて硬い。P₅(径30cm, 深さ33cm)は入り口部に伴う梯子ピット。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部を50cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面を15cm程掘り窪め、ロームがレンガ状に焼き締まっている。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片284点(うち内黒土器片3点)、須恵器片20点、刀子1点が出土。遺物はカマド周辺に集中。第407図1の甕がカマド燃焼部の覆土下層から、5の蓋がカマド燃焼部の覆土から、2の甕の底部片が北西コーナー付近の床面から、3の坏がカマド西側の床面から正位の状態で出土。

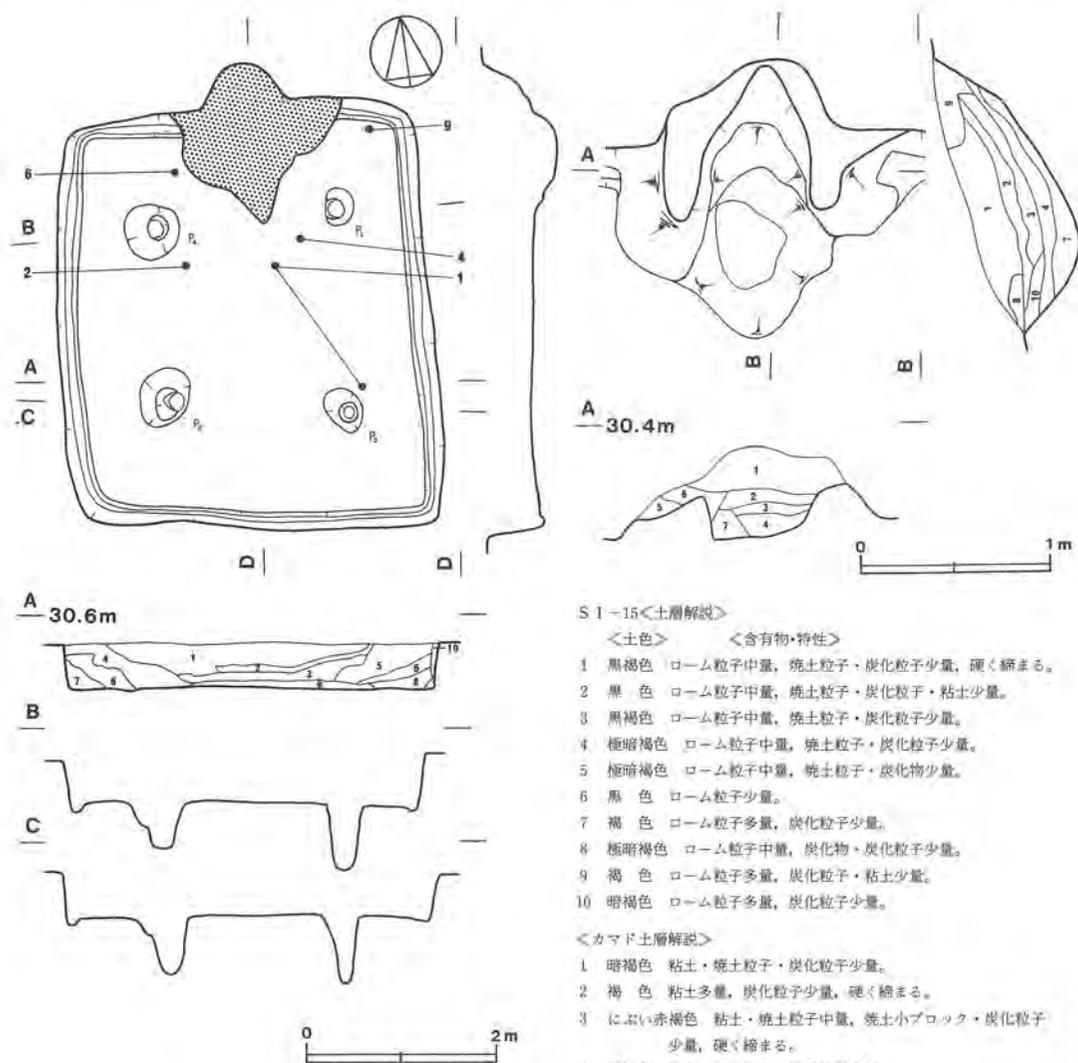
所見 本跡のP₂・P₃の西側にそれぞれ浅いピットが検出されており、補助柱穴の可能性が考えられる。本跡の時期は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。



第172図 第14号住居跡・カマド実測図

第15号住居跡 (第173図)

位置 G3e₂区。重複関係 無。平面形 隅丸長方形。規模 4.64×3.99m。主軸方向 N-10°-E。壁 垂直。壁高43~58cm。壁溝 幅12~30cm, 深さ 4~10cmで全周。床 緩い傾斜。硬いロームの貼床。中央部から壁際に向かい, 低くなっている。ピット 4か所。P₁~P₄(径はP₁・P₂が32~45cm, P₃・P₄が53~65cm, 深さP₁~P₃は61~71cm, P₄は48cm)はすべて支柱穴で, 柱穴の底部は極めて硬い。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部を45cm程掘り込み, 粘土・砂などで構



第173図 第15号住居跡・カマド実測図

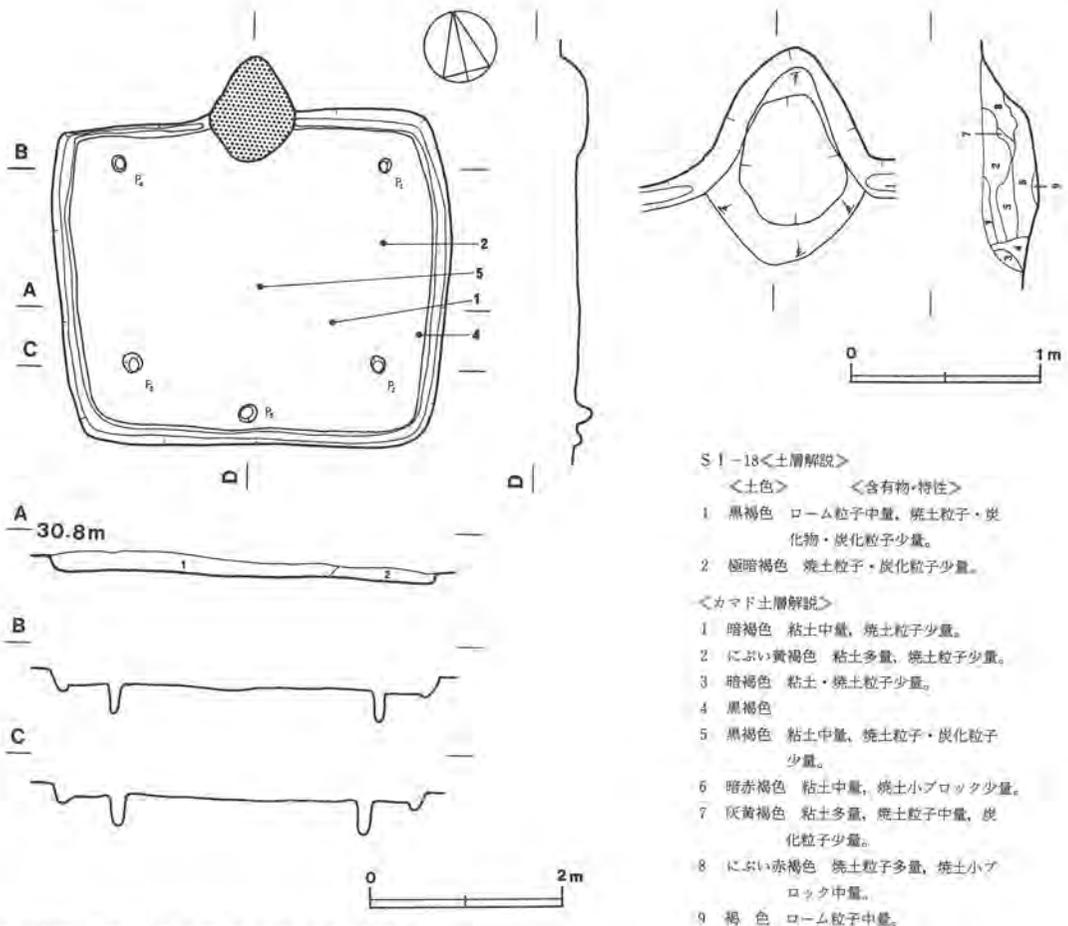
築。火床は床面を20cm程掘り窪め、ロームが焼けて赤変硬化している。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片が221点(うち内黒土器片2点)、須恵器片が15点、鉄製品(釘1点、槍鉋1点)が出土。遺物は住居内全体から出土。第407図1の甕が中央部付近の覆土下層から、第408図6の坏がカマド西側の床面から正位の状態で出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第18号住居跡 (第174図)

位置 G3b₁区。重複関係 無。平面形 隅丸長方形。規模 4.17×3.64m。主軸方向 N-10°-E。壁 外傾。壁高8~18cm。壁溝 幅8~26cm、深さ3~8cmで全周。床 平坦。全体的に硬い。ピット 5か所。P₁~P₄(径13~21cm、深さ30~36cm)が主柱穴。P₅(径20cm、深さ16cm)は入り口部に伴う梯子ピット。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部を60cm程掘り込み、粘土・砂な



第174図 第18号住居跡・カマド実測図

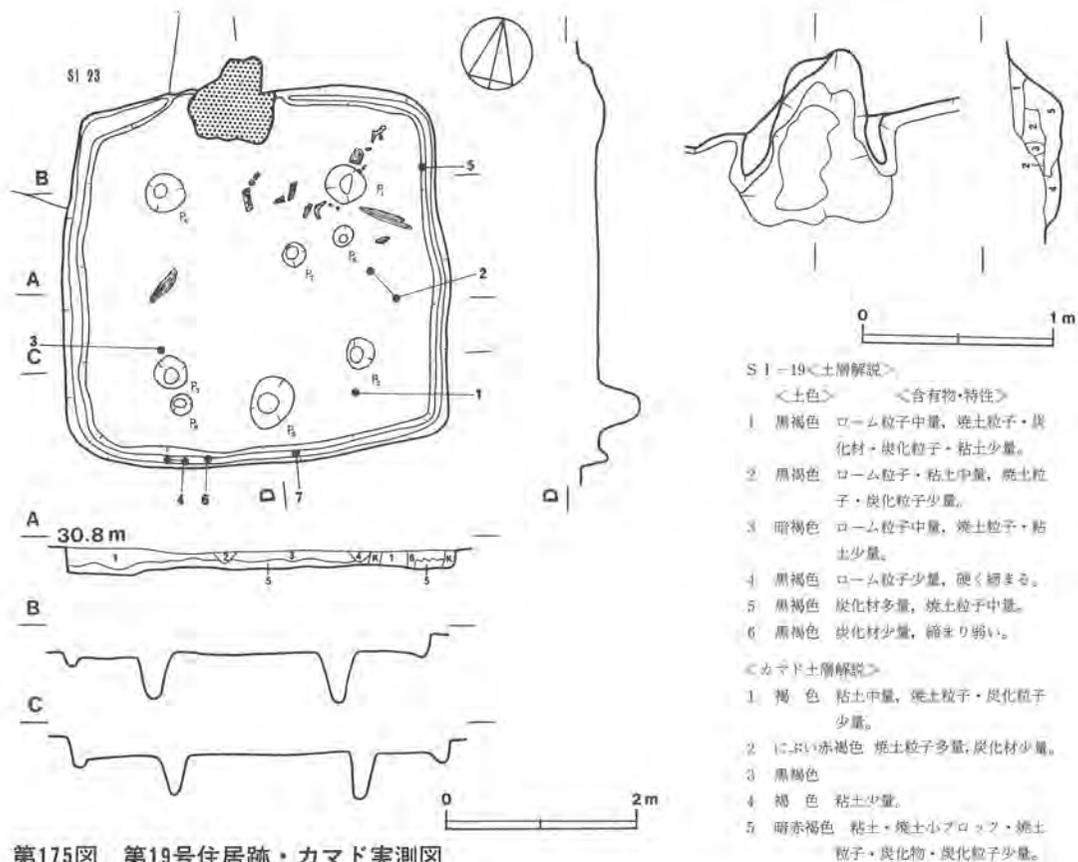
どで構築。火床は床面を12cm程掘り窪め、ロームが焼けて赤変硬化している。煙道部は火床から緩やかに立ち上がり、住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片180点(うち内黒土器片14点)、須恵器片5点、土師質土器片1点、陶器片2点、釘1点、砥石1点が出土。遺物は、中央部から東壁中央部付近にかけて集中。第408図1の甕が中央部付近の覆土下層から、5の灯明皿が中央部の覆土下層から出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第19号住居跡 (第175図)

位置 F3i₁区。**重複関係** 本跡<SI-23。 **平面形** 隅丸方形。 **規模** 4.01×3.98m。 **主軸方向** N-15°-W。 **壁** 垂直。壁高16~24cm。 **壁溝** 幅6~18cm、深さ8cm前後で全周。 **床** 平坦。全体的に硬い。 **ピット** 8か所。P₁~P₄(径34~44cm、深さ47~55cm)が支柱穴。底部は極めて硬い。P₅(径56cm、深さ47cm)は入り口部に伴う梯子ピット。P₆~P₈(径25~27cm、深さ21~28cm)は補助柱穴。 **貯蔵穴** 無。 **カマド** 北壁中央部を40cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。カマドの主



第175図 第19号住居跡・カマド実測図

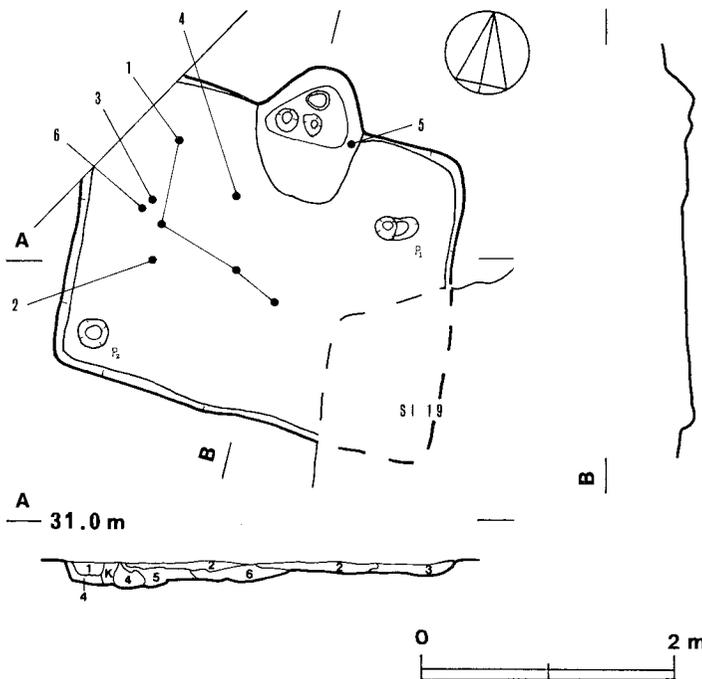
軸方向はN-28°-E。火床は床面を5cm程掘り窪め、ロームがレンガ状に焼き締まっている。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。覆土 人為堆積。全体的に焼土や炭化物を含む黒褐色土で、部分的にロームブロックが混入。

遺物 土師器片200点(うち内黒土器片26点)、須恵器片7点、陶器片4点、刀子片1点、砥石2点が出土。遺物は住居内全体から出土。第409図1の甕が南東部の床面から、3の坏が南西部の床面から正位の状態で、5の坏が北東部の覆土下層から、7の坏が南壁中央部付近の床面から正位の状態で出土。

所見 本跡は、覆土の様子や炭化材の出土状況から判断して、焼失家屋と考えられる。本跡の時期は、遺構・遺物から判断して奈良時代の住居跡と考えられる。

第23号住居跡 (第176図)

位置 F3h₁区。**重複関係** 本跡>SI-19。**平面形** 隅丸長方形。**規模** 3.10×2.48m。**主軸方向** N-4°-E。**壁** 外傾。壁高4~14cm。**壁溝** 無。**床** 南側へ緩く傾斜。貼床で、中央部付近が硬い。**ピット** 2か所。P₁・P₂(径18~25cm、深さ26~27cm)いずれも支柱穴。**貯蔵穴** 無。**カマド** 北壁中央部を40cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面を10cm程掘り窪め、ロームが焼けて赤変硬化している。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。東側の袖の前に第410図5の甕が横位の状態で、西側の袖の前に礫が出土。いずれも袖の補強として



て使用されたものと思われる。

覆土 自然堆積。

SI-23<土層解説>

<土色> <含有物・特性>

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、締まり弱い。
- 2 黒褐色 ローム粒子少量。
- 3 黒褐色 粘土少量。
- 4 極暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量。
- 5 黒褐色 焼土粒子・粘土中量、炭化粒子少量。
- 6 暗褐色 粘土少量。

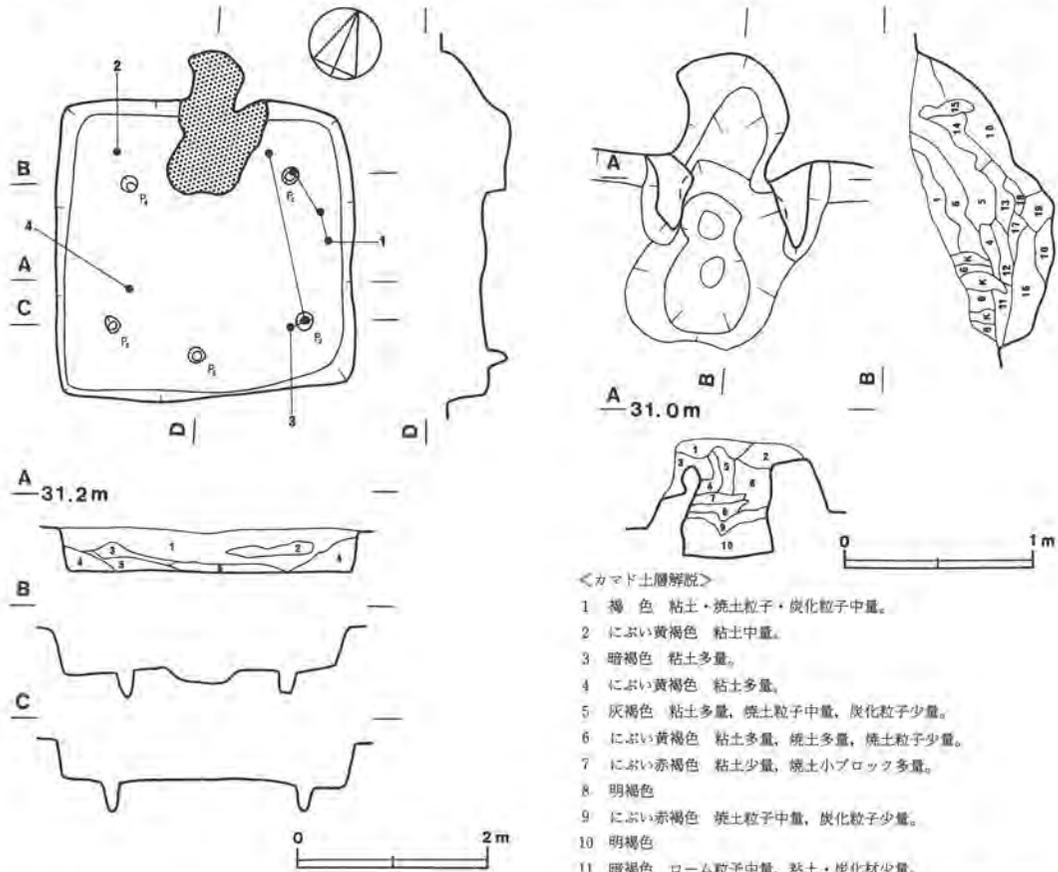
第176図 第23号住居跡実測図

遺物 土師器片116点(うち内黒土器片5点), 須恵器片3点が出土。遺物はカマド内と北西部に集中。第409図1の甕が中央部及び北西部の床面から潰れた状態で, 2の甕が中央部から西壁寄りの床面から逆位の状態で出土。その他, 流れ込みと思われる石製模造品(双孔円板1点)が覆土から出土。

所見 本跡は第19号住居跡の上に貼床されて構築されている。本跡の時期は, 遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第25号住居跡 (第177図)

位置 F3g₄区。重複関係 無。平面形 隅丸方形。規模 3.25×3.17m。主軸方向 N-24°-W。壁 垂直。壁高41~50cm。壁溝 無。床 平坦。特にカマドの周辺が硬い。ピット 5か所。



S I - 25 <土層解説>

<土色> <含有物・特性>

- | | |
|-----------------|----------------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子・砂少量。 | 4 黒色 炭化粒子少量。 |
| 2 黒色 炭化粒子少量。 | 5 極暗褐色 炭化粒子少量。 |
| 3 黒色 炭化粒子少量。 | 6 黒褐色 炭化粒子少量, 硬く硬まる。 |

<カマド土層解説>

- 1 褐色 粘土・焼土粒子・炭化粒子中量。
- 2 におい黄褐色 粘土中量。
- 3 暗褐色 粘土多量。
- 4 におい黄褐色 粘土多量。
- 5 灰褐色 粘土多量, 焼土粒子中量, 炭化粒子少量。
- 6 におい黄褐色 粘土多量, 焼土多量, 焼土粒子少量。
- 7 におい赤褐色 粘土少量, 焼土小ブロック多量。
- 8 明褐色
- 9 におい赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量。
- 10 明褐色
- 11 暗褐色 ローム粒子中量, 粘土・炭化材少量。
- 12 におい赤褐色 焼土小ブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子少量。
- 13 橙色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック少量。
- 14 におい赤褐色 粘土・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
- 15 明褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子少量。
- 16 におい赤褐色 粘土・焼土粒子多量, 焼土小ブロック少量。
- 17 におい赤褐色 粘土・焼土粒子中量, 焼土小ブロック・炭化材少量。
- 18 黒褐色 粘土少量。
- 19 黒色 ローム小ブロック・ローム粒子多量。

第177図 第25号住居跡・カマド実測図

P₁~P₄(径14~20cm, 深さ25~36cm)が支柱穴。P₅(径20×15cm, 深さ22cm)は入り口部に伴う梯子ピット。貯蔵穴 無。カマド 北西壁中央部を55cm程掘り込み, 粘土・砂などで構築。火床は床面を23cm程掘り窪め, ロームが焼けて赤変硬化している。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり, 住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

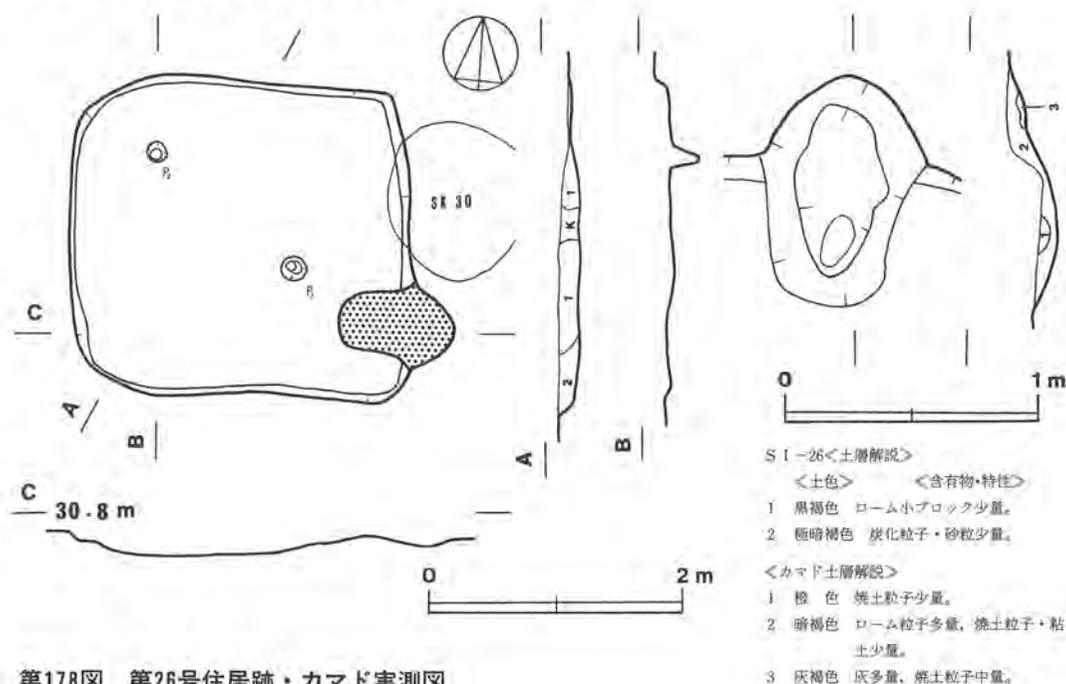
遺物 土師器片338点(うち内黒土器片14点), 須恵器片13点, 釘1点, 石製模造品(剣形品1点), 砥石2点が出土。第410図1の甕が北東部の覆土下層から, 第411図3の甕がカマド付近の床面や南東部の覆土下層から, 4の坏が南西部の覆土下層から出土。

所見 本跡は, 遺構・遺物から判断して奈良時代の住居跡と考えられる。

第26号住居跡 (第178図)

位置 F3i₅区。重複関係 本跡<SK-30。平面形 隅丸方形。規模 2.71×2.51m。主軸方向 N-79°-E。壁 外傾。壁高2~14cm。壁溝 無。床 平坦。南西部が硬い。ピット 2か所。P₁・P₂(径14~20cm, 深さ25~27cm)いずれも支柱穴。貯蔵穴 無。カマド 南東コーナー付近に付設。壁面を半円形に30cm程切り込み, 粘土・砂などで構築。火床は床面を8cm程掘り窪め, 焼き締まりは弱い。煙道部は火床から緩やかに立ち上がり, 住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片42点(うち内黒土器片2点), 石製模造品(双孔円板1点)が出土。土師器は甕の胴部片で, 内黒土器は坏片である。

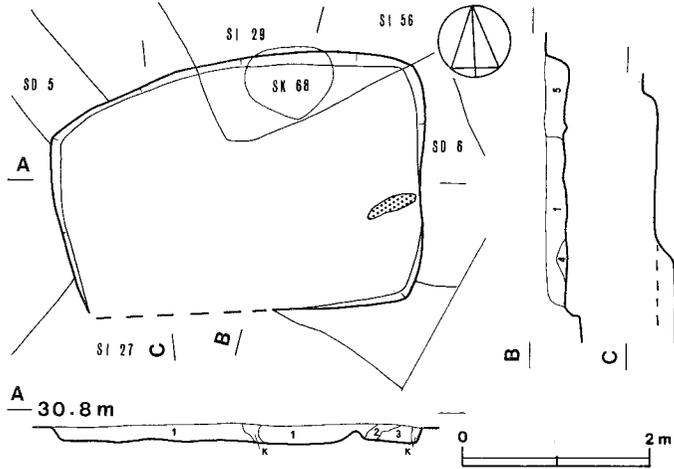


第178図 第26号住居跡・カマド実測図

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第28号住居跡 (第179図)

位置 F3h₇区。**重複関係** SI-27, SI-56, SD-6 <本跡<SI-29, SK-68。SD-5 (新旧関係不明)。**平面形** 不整長方形。**規模** 3.96×[2.74]m。**主軸方向** N-90°。**壁** 外傾。壁高12~14cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。南西部のSI-27と切り合う部分は貼床。**ピット** 無。**貯蔵穴** 無。**カマド** 東壁中央部からやや南寄りに付設。袖がわずかに残存するだけで、詳細は不明。



SI-28<土層解説>

- | <土色> | | <含有物・特性> | |
|--------|-------------------------|----------|---------------------|
| 1 黒色 | 焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量。 | 3 極暗褐色 | ローム粒子中壁, 炭化粒子・砂粒少量。 |
| 2 暗赤褐色 | 粘土・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。 | 4 黒褐色 | ローム小ブロック少量。 |
| | | 5 黒褐色 | ローム粒子少量。 |

第179図 第28号住居跡実測図

覆土 自然堆積。

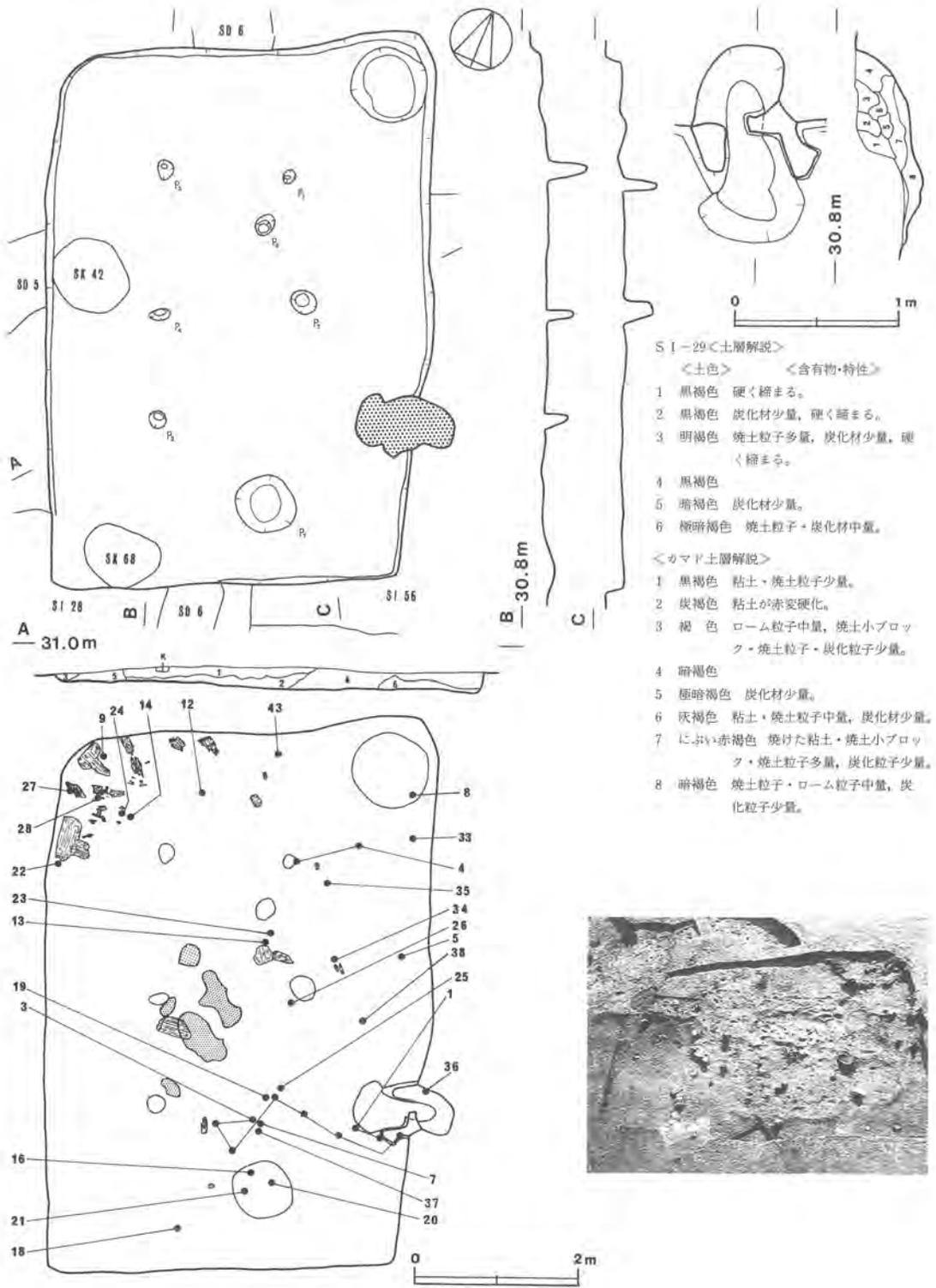
遺物 土師器片46点(うち内黒土器片3点), 須恵器片1点が出土。遺物はカマド周辺に集中。第411図1の甕・2の高台付坏がカマド燃焼部の覆土から出土。その他, 流れ込みと思われる石製模造品(双孔円板1点)が南西部の覆土から出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第29号住居跡 (第180図)

位置 F3g₇区。**重複関係** SI-28, SI-56, SD-6 <本跡<SK-42, SK-68。SD-5 (新旧関係不明)。**平面形** 隅丸長方形。**規模** 6.64×4.80m。**主軸方向** N-68°-E。**壁** 外傾。壁高8~21cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。全体的に硬い。**ピット** 7か所。P₁~P₅(径13~34cm, 深さ32~53cm)が支柱穴。P₆(径28×25cm, 深さ37cm)は補助柱穴。P₇(径76×71, 深さ27cm)は性格不明。**貯蔵穴** 北東コーナー付近に付設。上端径97×95cm, 深さ29cmの円形。覆土中層から炭化材や焼土が出土。**カマド** 東壁中央部からやや南寄りに付設。壁面を50cm程掘り込み, 粘土・砂などで構築。火床は床面を14cm程掘り窪め, ロームがレンガ状に焼き締まっている。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり, 住居の外に延びている。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器片348点(うち内黒土器片92点), 土師質土器片11点, 須恵器片15点, 陶器片2点,



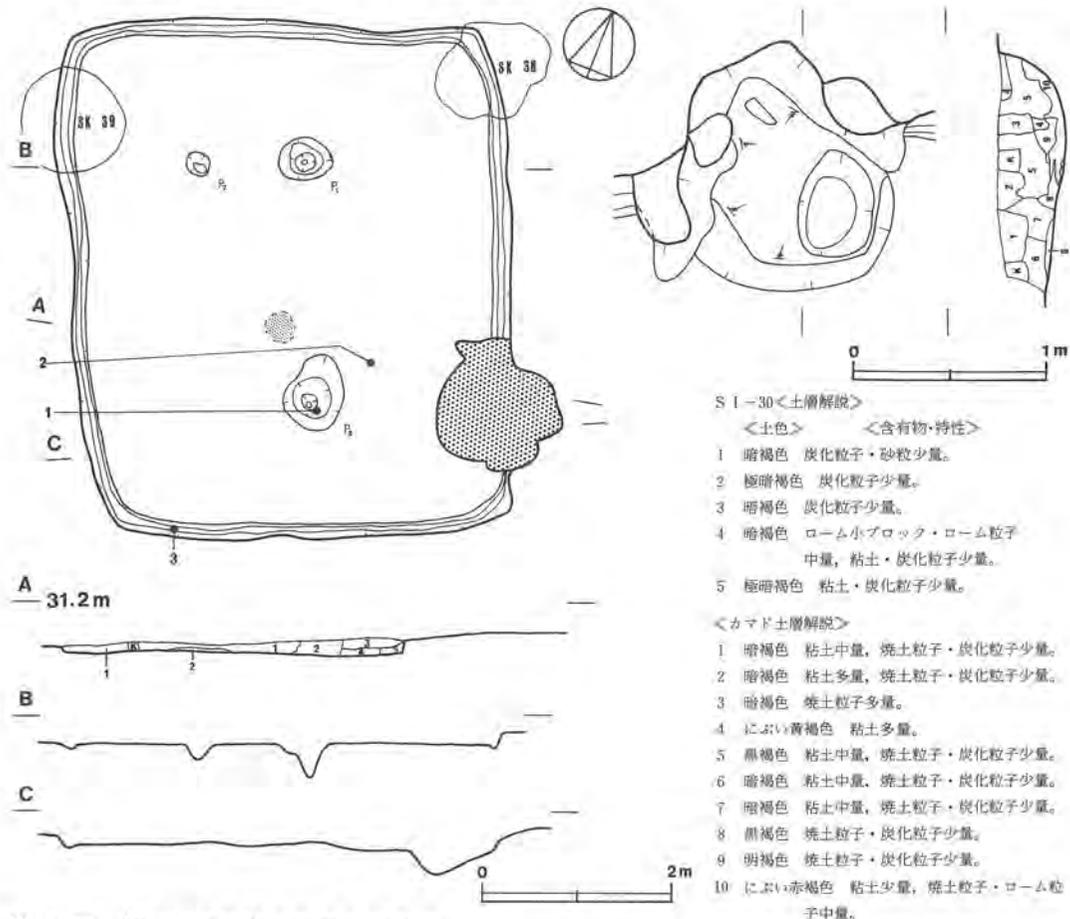
第180図 第29号住居跡・カマド実測図、遺物出土状況図

石製模造品(双孔円板2点), 石製紡錘車1点, 釘1点が出土。遺物は住居内全体から出土。第412図1の甕がカマド付近の床面から, 第413図4の置きカマドが北東部の床面から, 8の坏が北東コーナー付近の床面から, 第414図18の高台付坑が南壁中央部付近の床面から, 19の高台付坑が南東部の床面から, 26の高台付坑が中央部の床面から, 25の高台付坑・第415図37の小皿が南東部の床面から, 36の小皿がカマドの火床から出土。

所見 本跡は, 覆土の様子や炭化材の出土状況から判断して, 焼失家屋と考えられる。カマド前方にあるP₇からは, 土師器4点(坏1, 琿1, 高台付坑2)が出土しており, 貯蔵穴の可能性も考えられる。本跡の時期は, 遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第30号住居跡 (第181図)

位置 F3e₅区。**重複関係** SK-39<本跡<SK-38。**平面形** 隅丸長方形。**規模** 5.62×4.76m。**主軸方向** N-68°-E。**壁** 外傾。壁高2~12cm。**壁溝** 幅8~22cm, 深さ5cm前後で全周。**床** 東側へ緩く傾斜。特に中央部が硬い。**ピット** 3か所。P₁(径57×47cm, 深さ42cm)・P₂(径27×



第181図 第30号住居跡・カマド実測図

24cm, 深さ21cm)いずれも主柱穴。P₃(径82×58cm, 深さ84cm)は性格不明。貯蔵穴 無。カマド 南東コーナー部に位置し, 壁面を60cm程掘り込んで付設。粘土・砂などで構築しており, 袖や天井部の補強に凝灰岩を使用。火床は床面を10cm程掘り窪め, ロームが焼けて赤変硬化している。焚口部に, 楕円形の落ち込み(径55×40cm, 深さ20cm)が見られ, 灰や焼土が多量に堆積している。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片127点(うち内黒土器片28点), 須恵器片15点, 土師質土器片2点が出土。遺物はカマド周辺に集中。第415図1の羽釜がP₃内(床面から24cm下った位置)から, 2の小皿がカマド前方の床面から正位の状態で, 3の小皿が南西コーナー付近の床面から伏せた状態で出土。

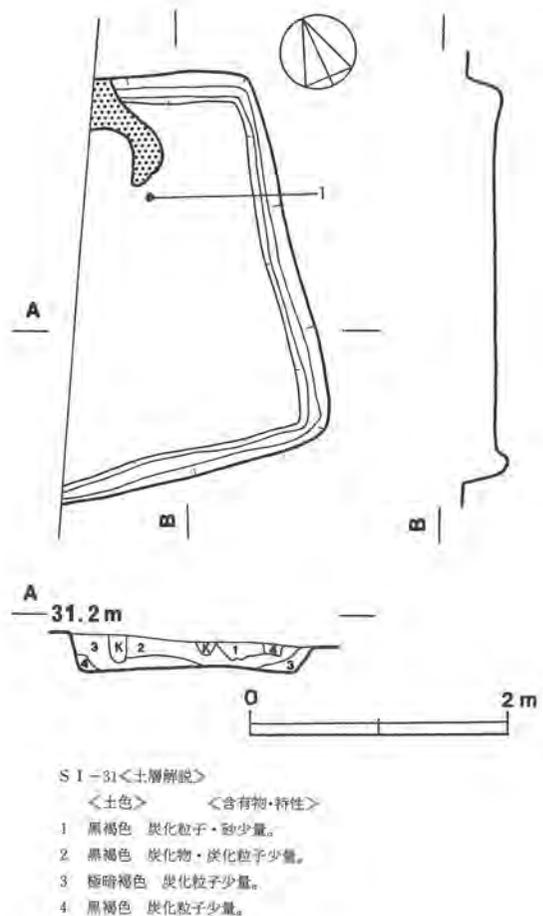
所見 本跡のP₃は, 柱穴にしては規模が大きく, また周囲の床が焼けていることから何らかの意味をもつピットと考えられる。本跡の時期は, 遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第31号住居跡 (第182図)

位置 F3d₃区。重複関係 無。平面形 隅丸方形。規模 3.29×(2.16)m。主軸方向 N-18°-E。壁 外傾。壁高24~26cm。壁溝 幅14~24cm, 深さ6cm前後で全周。床 平坦。全体的に硬い。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部に位置し, 粘土・砂などで構築。火床は床面を10cm程掘り窪め, 焼き締めは弱い。凝灰岩が東側の袖から出土。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片23点, 須恵器片2点が出土。土師器は甕の胴部片や坏の口縁部片である。第415図1の甕の胴部片がカマド付近の覆土下層から出土。その他, 流れ込みと思われる石製模造品(双孔円板1点)が覆土から出土。

所見 本跡は西側の調査区域外へ延びており, 全体を捉えることはできなかった。本跡の時期は, 遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。



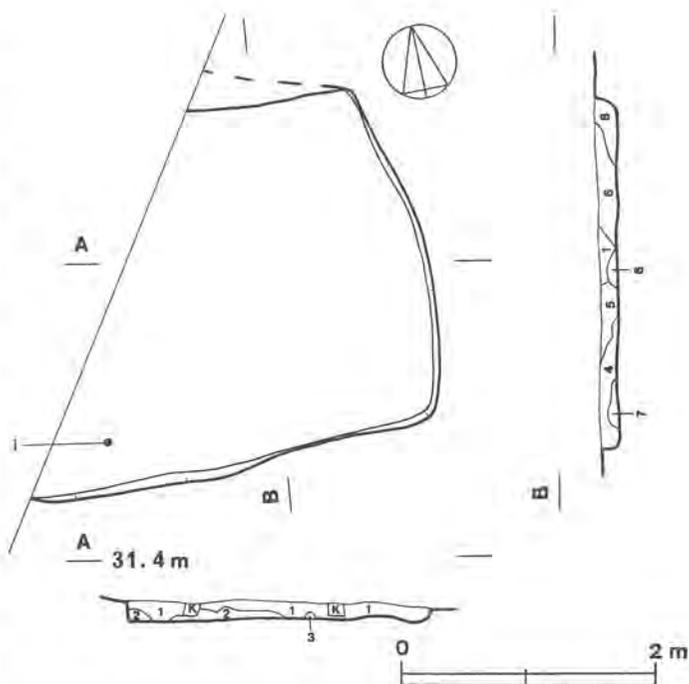
第182図 第31号住居跡実測図

第34号住居跡 (第183図)

位置 F3a₅区。重複関係
無。平面形 不整長方形。
規模 (3.26)×3.09m。主軸
方向 N-0°。壁 外傾。壁
高11~14cm。壁溝 無。床
平坦。全体的に硬い。ピット
無。貯蔵穴 無。カマド 北
壁中央部からやや西寄り付
設。袖の一部が検出されたが、
詳細は不明。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片11点、須恵
器片3点、陶器片1点が出土。
第416図1の盤が南西部の床
面から出土。

所見 本跡は、遺構・遺物か
ら判断して奈良時代末から平
安時代初頭の住居跡と考えら
れる。

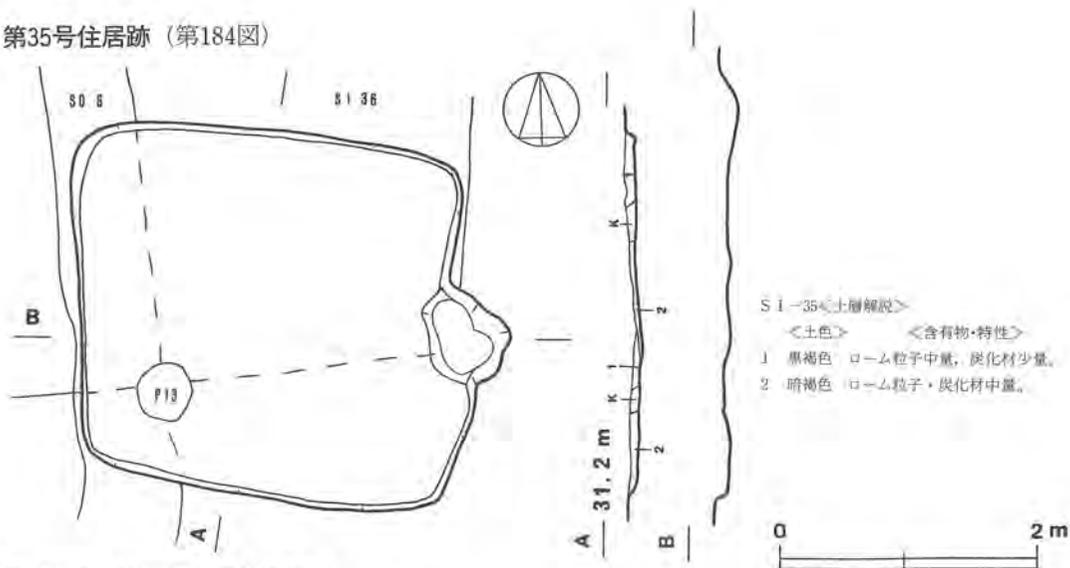


S I -34 <土層解説>

<土色>	<含有物・特性>	
1 黒褐色 粘土少量。		4 褐色 ローム粒子中量。
2 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック 中量。		5 褐色 ローム粒子中量、細まり弱い。
3 明褐色		6 暗褐色 ローム粒子中量。
		7 暗褐色 ローム粒子中量。
		8 褐色 ローム粒子中量、細まり弱い。

第183図 第34号住居跡実測図

第35号住居跡 (第184図)



S I -35 <土層解説>

<土色>	<含有物・特性>
1 黒褐色 ローム粒子中量、炭化材少量。	
2 暗褐色 ローム粒子・炭化材中量。	

第184図 第35号住居跡実測図

位置 F3b₆区。重複関係 SI-36, SD-6, P13(新旧関係不明)。平面形 隅丸長方形。規模 3.17×2.85m。主軸方向 N-80°-W。壁 垂直。壁高6~8cm。壁溝 無。床 平坦。中央部付近が硬い。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 東壁中央部を40cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面を6cm程掘り窪め、焼き締めりは弱い。煙道部は火床から緩やかに立ち上がり、住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

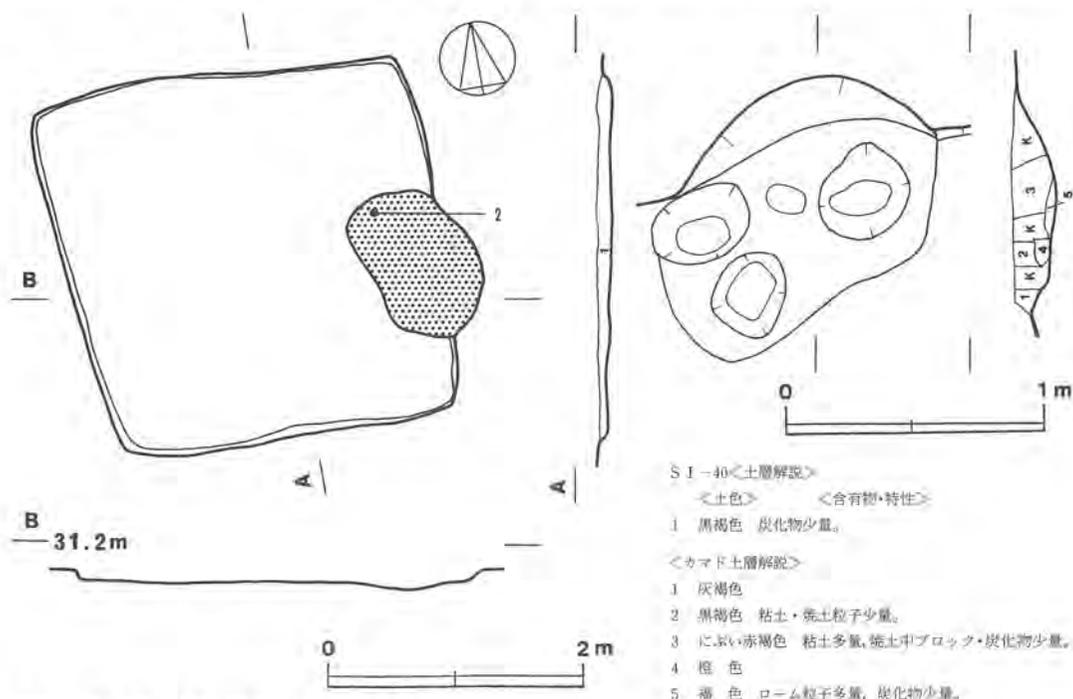
遺物 土師器片65点(うち内黒土器片6点)、須恵器片4点が出土。第416図1の坏が南東部の覆土から出土。土師器の坏片(底部に糸切り痕)や須恵器の坏片が覆土から出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第40号住居跡 (第185図)

位置 F4b₁区。重複関係 無。平面形 不整形。規模 3.02×3.00m。主軸方向 N-84°-E。壁 外傾。壁高8~10cm。壁溝 無。床 平坦。全体的に軟らかい。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 東壁中央部からやや南寄りに位置し、壁面を30cm程掘り込んで付設。粘土・砂などで構築しており、袖の補強に凝灰岩を使用。火床は床面を5cm程掘り窪め、焼き締めりは弱い。煙道部は火床から緩やかに立ち上がり、住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片79点(うち内黒土器片2点)、須恵器片1点、釘1点が出土。遺物はカマド周辺に集中。第416図2の高台付坏の高台部がカマド付近の覆土から、1の高台付坏がカマド燃焼部の



第185図 第40号住居跡・カマド実測図

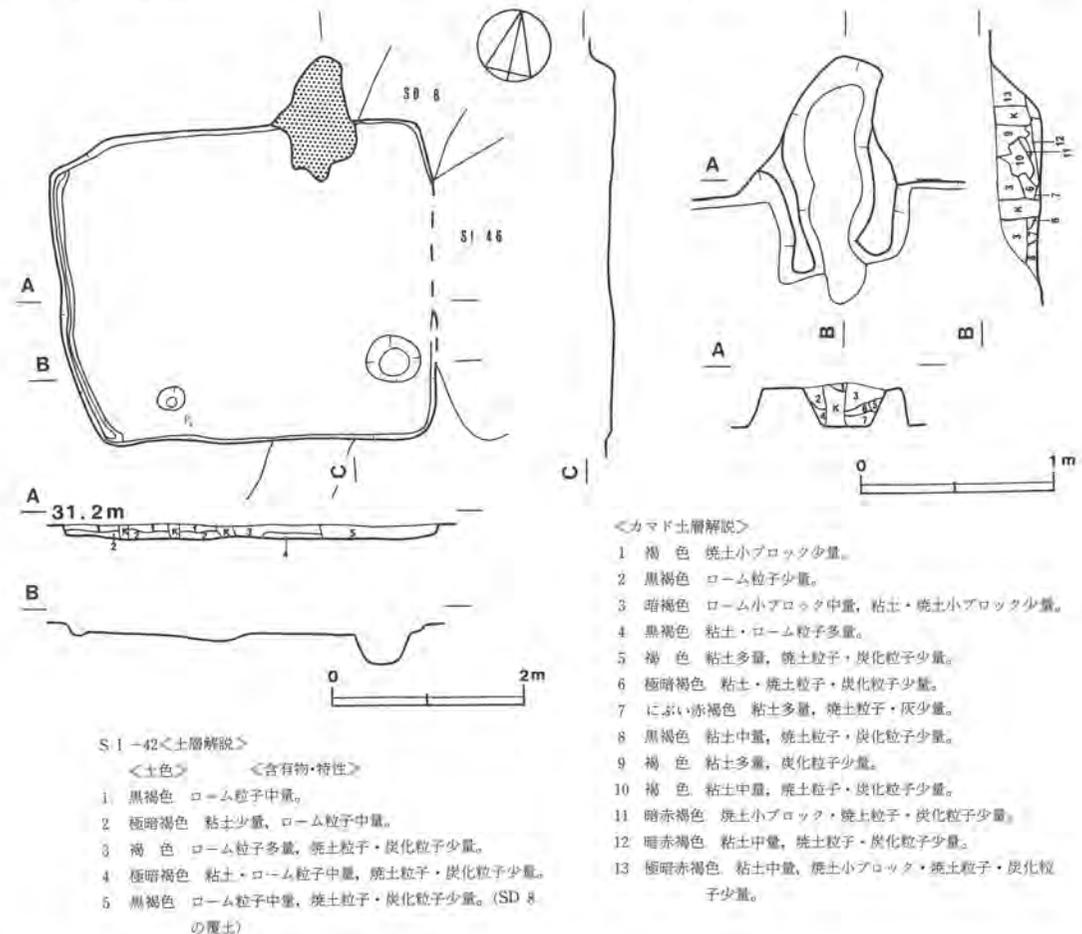
覆土から出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第42号住居跡 (第186図)

位置 E4j₂区。重複関係 本跡<SI-46, SD-8。平面形 隅丸長方形。規模 4.00×3.36m。主軸方向 N-15°-W。壁 外傾。壁高7~13cm。壁溝 西壁だけで、幅10~18cm、深さ4cm前後。床 平坦。特に中央部が硬い。ピット 1か所。径28×25cm、深さ27cmで支柱穴。貯蔵穴 南東コーナー付近に付設。径60×50cm、深さ32cmの楕円形。カマド 北東コーナー付近に付設。壁面を70cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面とほぼ同じ高さで、ロームが焼けて赤変硬化している。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片121点(うち内黒土器片16点)、須恵器片1点、砥石2点が出土。土師器は甕片や



第186図 第42号住居跡・カマド実測図

高台付坏片が多い。第416図1の坏が南東部の覆土から出土。

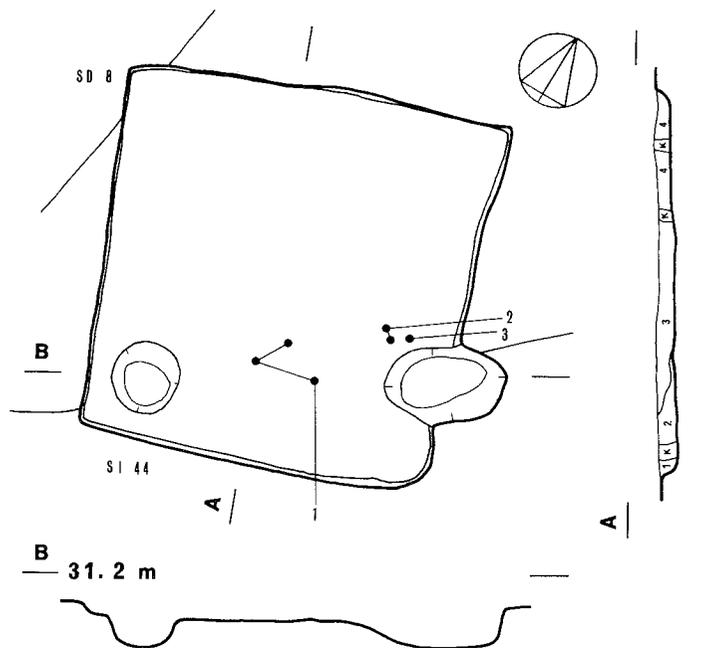
所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第43号住居跡 (第187図)

位置 F4a₃区。**重複関係** 本跡>SI-44。SD-8 (新旧関係不明)。**平面形** 方形。**規模** 3.12×2.96m。**主軸方向** N-70°-E。**壁** 垂直。壁高12~14cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。中央部が硬い。**ピット** 無。**貯蔵穴** 南西コーナー付近に付設。径54cm、深さ28cmの円形。**カマド** 南東コーナー付近に位置し、壁面を45cm程掘り込んで付設。粘土・砂などで構築しており、袖の補強に凝灰岩を使用。火床は床面とほぼ同じ高さで、ロームがレンガ状に焼き締まっている。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。**覆土** 自然堆積。

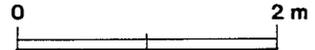
遺物 土師器片87点(うち内黒土器片3点)、須恵器片1点、陶器片1点、鉄製品1点が出土。遺物はカマド周辺に集中。第416図1の甕がカマド前方の床面から、2の甕がカマドの北側の床面から、3の高台付塊がカマド北側の床面から逆位の状態で出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。



SI-43<土層解説>

- | <土色> | <含有物・特性> |
|--------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量、締まり弱い。 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量。 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子中量、硬く締まる。 |
| 4 極暗褐色 | ローム粒子中量、硬く締まる。 |



第187図 第43号住居跡実測図

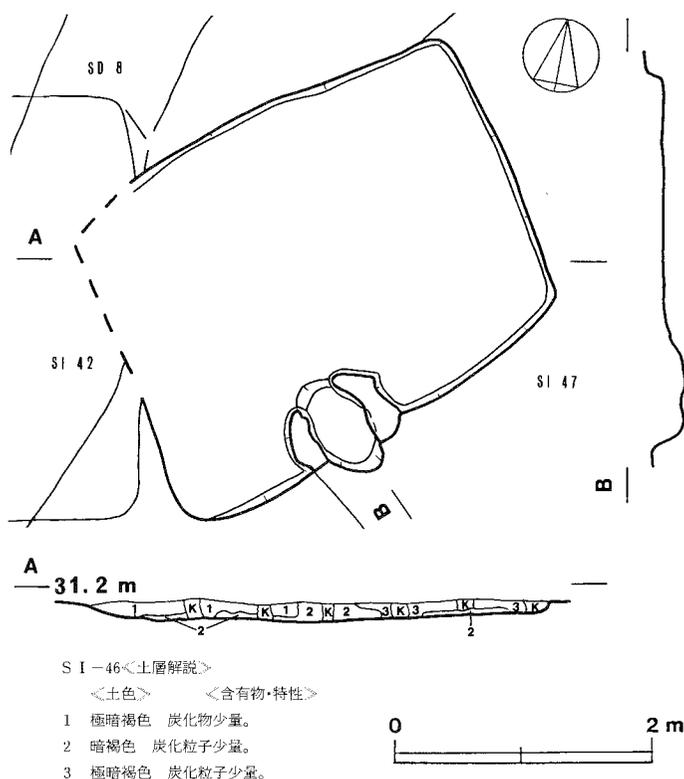
第46号住居跡 (第188図)

位置 E4i₃区。**重複関係** SI-42, SI-47, SI-53<本跡。SD-8 (新旧関係不明)。**平面形** 隅丸長方形。**規模** 3.44×2.74m。**主軸方向** N-45°-W。**壁** 垂直。壁高12~13cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。貼床で、カマド周辺が硬い。**ピット** 無。**貯蔵穴** 無。**カマド** 南東壁中央部からやや南寄りに付設。壁面を25cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面を20cm程掘り窪め、

ロームがレンガ状に焼き締まっている。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。覆土自然堆積。

遺物 土師器片74点(うち内黒土器片3点),須恵器片1点,釘1点が出土。第417図1の底部に糸切り痕のある坏が南西部の床面から出土。土師器の甕の胴部片や甕の底部片などが覆土から出土。その他,流れ込みと思われる石製模造品(有孔円板1点)が覆土から出土。

所見 本跡は,遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。



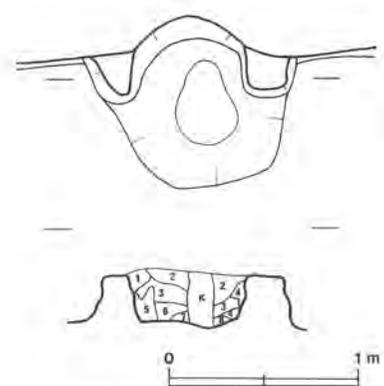
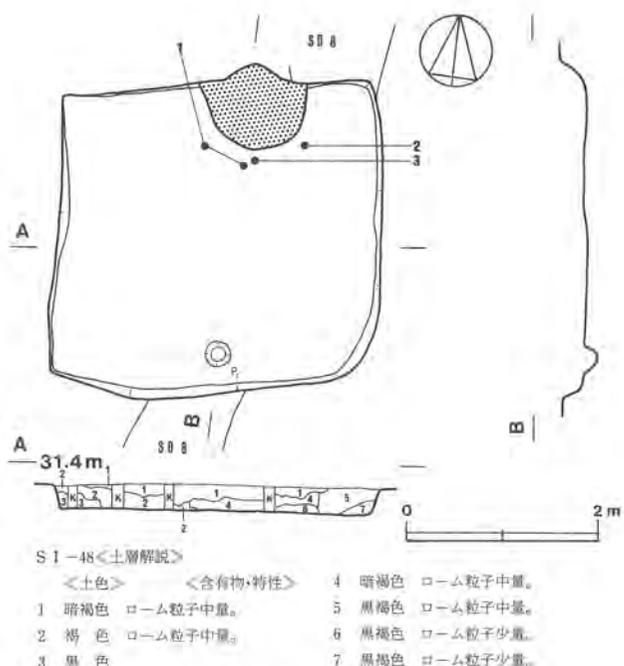
第188図 第46号住居跡実測図

第48号住居跡 (第189図)

位置 E4h₃区。**重複関係** 本跡<SD-8。平面形 方形。規模 3.42×3.36m。主軸方向 N-10°-W。壁 外傾。壁高26~32cm。壁溝 無。床 平坦。特に中央部付近が硬い。ピット 1か所。径26cm,深さ10cmで入り口部に伴う梯子ピット。**貯蔵穴** 無。**カマド** 北壁中央部からやや東寄りに付設。壁面を20cm程掘り込み,粘土・砂などで構築。火床は床面とほぼ同じ高さで,焼き締まりは弱い。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり,住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片136点(うち内黒土器片4点),須恵器片9点が出土。遺物はカマド周辺に集中。第417図1の甕の口縁部片,2の甕の底部片,3の高台付坏が逆位の状態で,カマド付近の覆土下層から出土。その他,流れ込みと思われる石製模造品(剣形品1点)が覆土から出土。

所見 本跡は,遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

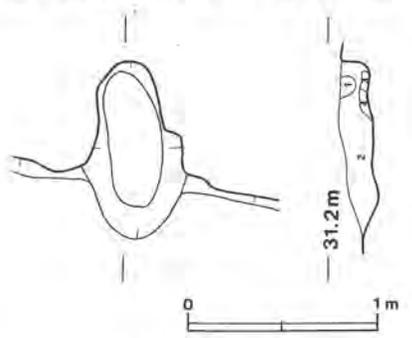
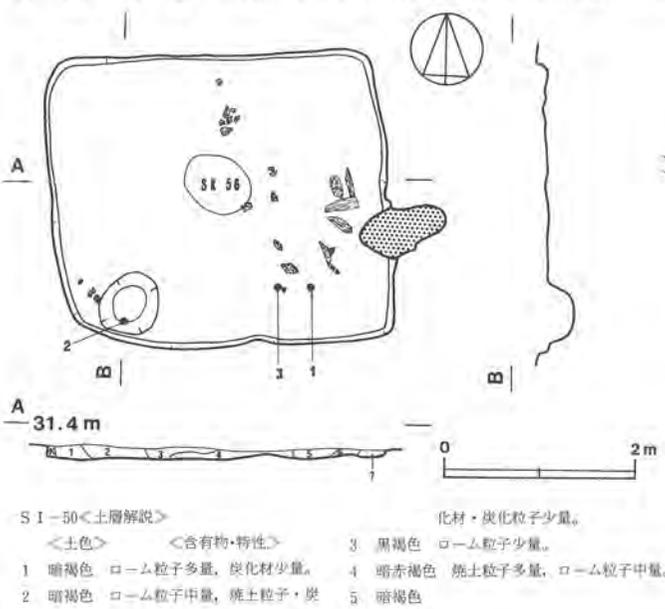


- <カマド土層解説>
- 1 極暗褐色 炭化粒子少量。
 - 2 極暗褐色 炭化粒子少量。
 - 3 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量。
 - 4 暗褐色 粘土多量、焼土粒子少量。
 - 5 褐色 粘土多量、焼土粒子・炭化粒子少量。
 - 6 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量。
 - 7 暗褐色 焼土粒子少量。
 - 8 明褐色 ローム粒子多量。

第189図 第48号住居跡・カマド実測図

第50号住居跡 (第190図)

位置 E4f.区。重複関係 本跡<SK-56。平面形 長方形。規模 3.63×3.14m。主軸方向 N-82°-E。壁 外傾。壁高12~17cm。壁溝 無。床 平坦。全体的に軟らかい。ピット 無。



- <カマド土層解説>
- 1 におい褐色
 - 2 黒褐色 粘土・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
 - 3 におい黄褐色
 - 4 褐色 焼土粒子少量。
 - 6 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子中量、炭化材少量。
 - 7 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量。

第190図 第50号住居跡・カマド実測図

貯蔵穴 南西コーナーに付設。径72×60cm、深さ32cmの楕円形。**カマド** 東壁中央部からやや南寄りに位置し、壁面を65cm程掘り込んで付設。粘土・砂などで構築しており、袖の補強に凝灰岩を使用。火床は床面を6cm程掘り窪め、ロームがレンガ状に焼き縮まっている。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。**覆土** 自然堆積。炭化材や焼土を多く含む。

遺物 土師器片116点(うち内黒土器片13点)、須恵器片5点が出土。遺物はカマド周辺に集中。第417図1の甕、3の坏が伏せた状態で、南東部の床面から出土。4の高台付碗が北東部の覆土から出土。その他、銅銭片1点が覆土から出土しているが、摩滅が著しく判読は不明。

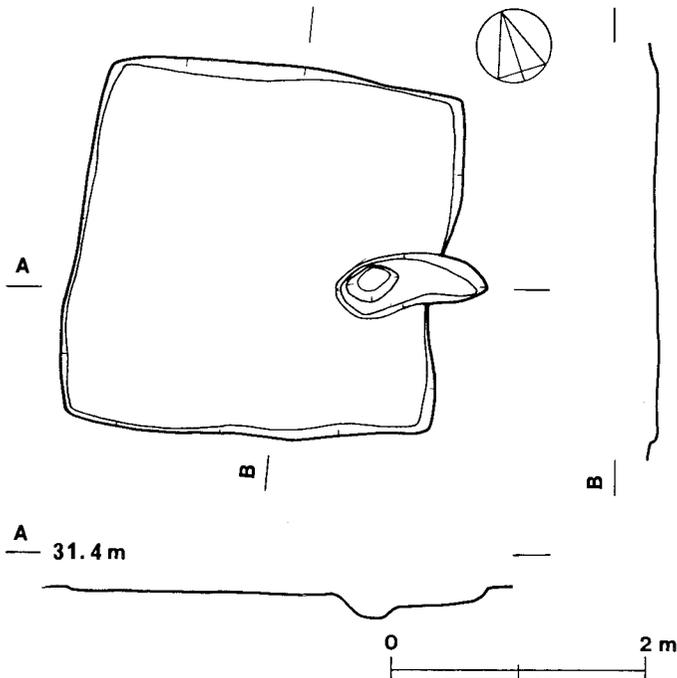
所見 床面全体から炭化材や焼土が検出されており、焼失家屋と考えられる。本跡の時期は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第51号住居跡 (第191図)

位置 E4e₅区。**重複関係** 無。**平面形** 方形。**規模** 3.10×2.98m。**主軸方向** N-73°-W。**壁** 外傾。壁高2～5cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。南西部が硬い。**ピット** 無。**貯蔵穴** 無。**カマド** 東壁中央部からやや南寄りに付設。壁面を45cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面を10cm程掘り窪め、ロームが焼けて赤変硬化している。火床の手前にピット(径40×30cm、深さ10cm)が検出されている。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。**覆土** 削平されており、堆積状況は不明。

遺物 土師器片20点(うち内黒土器片1点)、須恵器片2点、釘1点が出土。土師器・須恵器は、いずれも小破片である。

所見 本跡の時期を特定できるような遺物は出土していないが、概ね平安時代に比定される住居跡と考えられる。



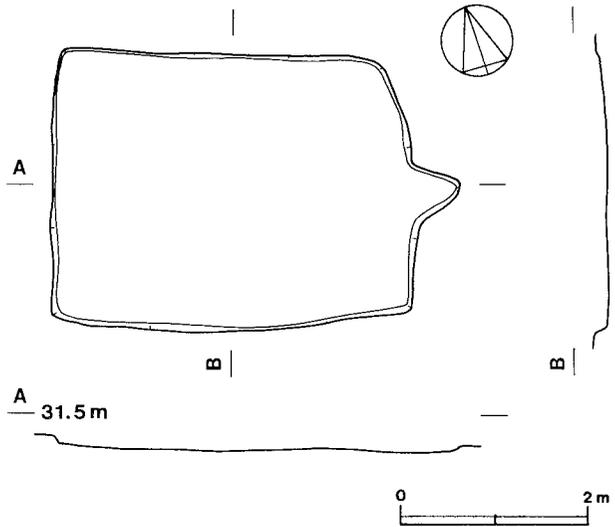
第191図 第51号住居跡実測図

第58号住居跡 (第192図)

位置 E4a₅区。重複関係 無。
 平面形 長方形。規模 3.88×2.92 m。主軸方向 N-71°-W。壁 外傾。壁高10~15cm。壁溝 無。床 平坦。中央部が硬い。ピット 無。
 貯蔵穴 無。カマド 南東壁中央部を50cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面とほぼ同じ高さで、焼き締めは弱い。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片127点(うち内黒土器片5点)、須恵器片4点、釘1点、石製模造品(双孔円板3点)が出土。底部に糸切り痕を残す内黒土器の坏片や須恵器の高台付坏片などが出土しているが、図示可能な遺物は認められなかった。

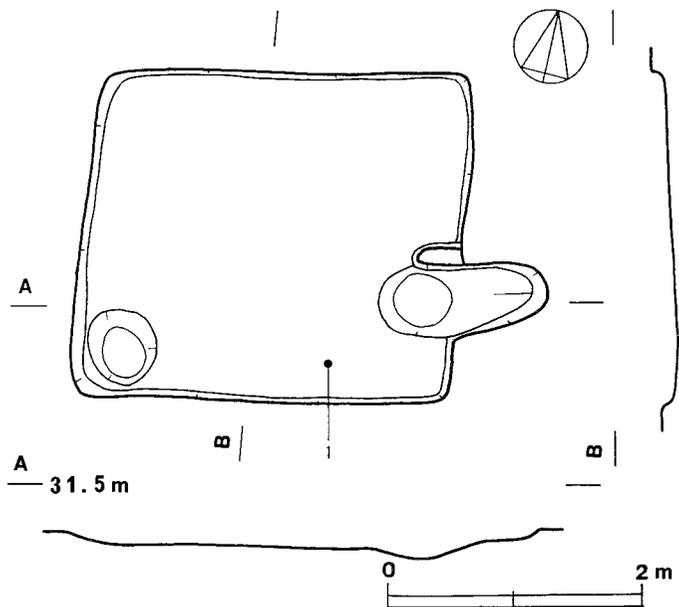
所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。



第192図 第58号住居跡実測図

第59号住居跡 (第193図)

位置 E4d₇区。重複関係 無。平面形 隅丸長方形。規模 3.03×2.62m。主軸方向 N-80°-E。壁 外傾。壁高10~12cm。壁溝 無。床 平坦。中央部付近が硬い。ピット 無。貯蔵穴 南西コーナーに付設。径60×56cm、深さ23cmの円形。カマド 東壁中央部からやや南寄りに付設。壁面をU字形に70cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。火床は床面を8cm程掘り窪



第193図 第59号住居跡実測図

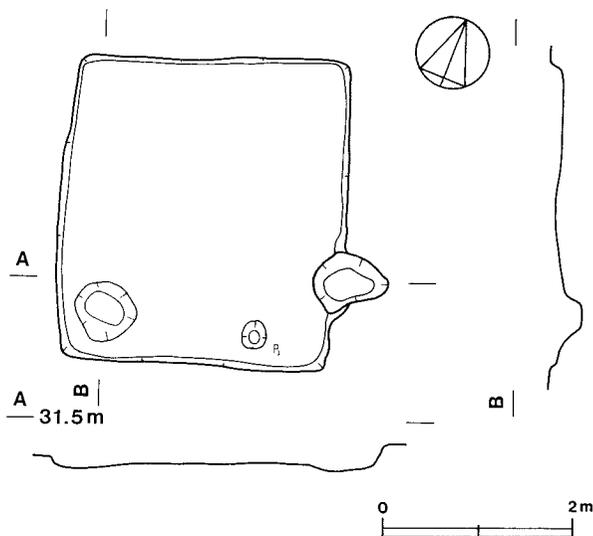
め、ロームが焼けて赤変硬化している。煙道部は火床から緩やかに立ち上がり、住居の外に延びている。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器片211点(うち内黒土器片13点)、須恵器片4点、陶器片1点が出土。遺物は南壁中央部付近に多い。第417図1の壺がカマド前方の床面から、正位の状態で出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第66号住居跡 (第194図)

位置 D4j₆区。**重複関係** 無。**平面形** 方形。**規模** 3.37×3.30m。**主軸方向** N-73°-E。**壁** 垂直。**壁高** 12~20cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。中央部付近が硬い。**ピット** 1か所。P₁(径24cm、深さ15cm)は支柱穴。**貯蔵穴** 南西コーナー付近に付設。径64×61cm、深さ22cmの円形。**カマド** 東壁中央部からやや南寄りに付設。壁面を56cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。袖の補強に凝灰岩を使用。火床は床面とほぼ同じ高さで、若干焼けている程度である。**覆土** 自然堆積。



第194図 第66号住居跡実測図

遺物 土師器片93点(うち内黒土器片6点)が出土。第418図1の甕がカマド付近の床面から出土。その他、覆土から石製模造品(双孔円板2点、勾玉1点)が出土。

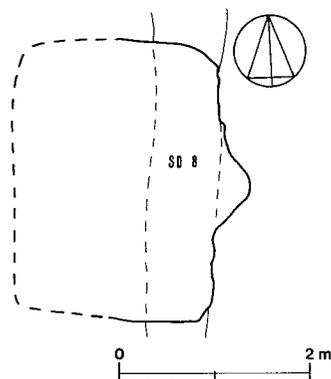
所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第72号住居跡 (第195図)

位置 D4j₄区。**重複関係** 本跡>SD-8。**カマド** 東壁に付設されているが、削平されており詳細は不明。

遺物 土師器片11点(うち内黒土器片5点)が出土。第418図1の坏がカマドの覆土から出土。

所見 本跡は、カマドの一部を残して、ほとんど削平されている。カマドが、第8号溝の上に貼られた状態で検出されていることから、第8号溝より新しい遺構と判



第195図 第72号住居跡実測図

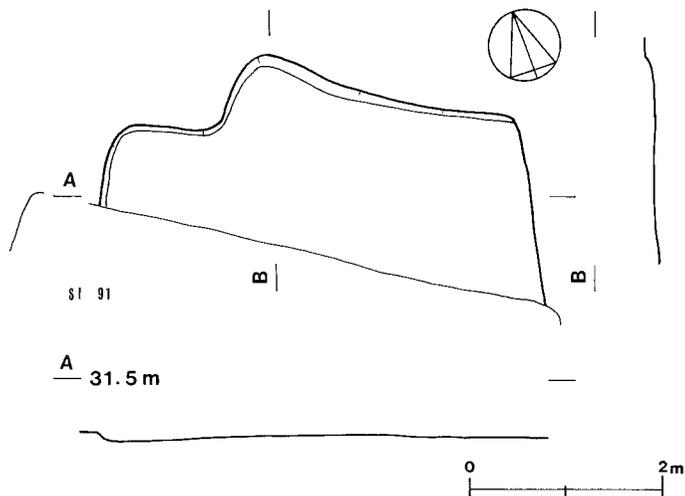
断した。本跡の時期は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第98号住居跡 (第196図)

位置 C5i₅区。重複関係
本跡>SI-91。平面形 不整形。規模 4.59×(1.98)m。
主軸方向 N-13°-E。壁
外傾。壁高 8~10cm。壁溝
無。床 平坦。全体的に軟らかい。ピット 無。貯蔵穴
無。カマド 北壁中央部から
やや西寄りに、カマドの痕跡
と思われる焼土の堆積が見られる。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片175点(うち
内黒土器片4点), 須恵器片
3点が出土。第418図1の甕
の口縁部片が北壁中央部付近
の覆土下層から出土。その他,
流れ込みと思われる弥生式土
器片8点が覆土から出土。

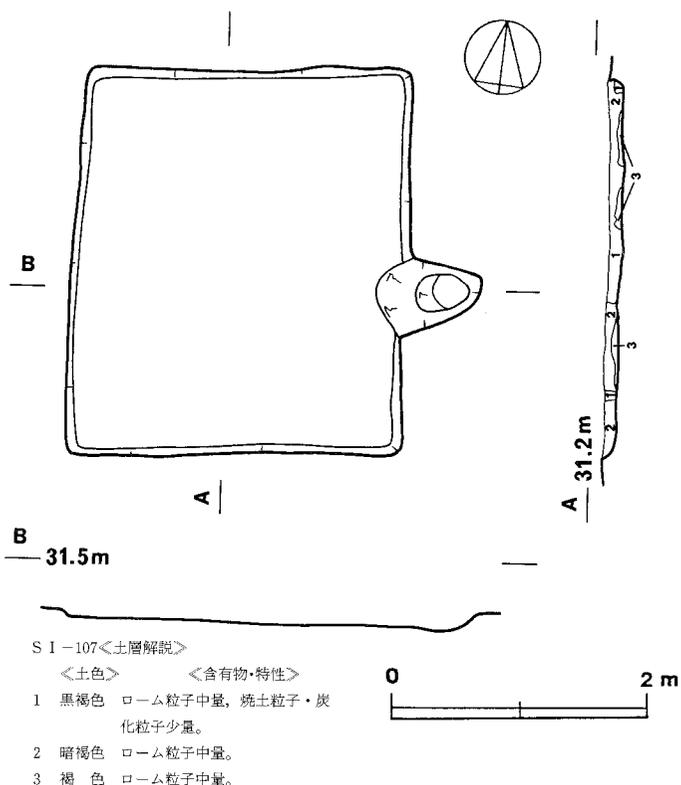
所見 本跡は第91号住居跡
と切り合っており, 明確なプ
ランが捉えることができなかった。本跡の時期を特定する
ような遺物は出土していないが, 概ね平安時代の住居跡
と考えられる。



第196図 第98号住居跡実測図

第107号住居跡 (第197図)

位置 C5g₆区。重複関係
無。平面形 長方形。規模



第197図 第107号住居跡実測図

3.03×2.60m。主軸方向 N-84°-E。壁 外傾。壁高6～9cm。壁溝 無。床 平坦。中央部から西壁中央部付近にかけて硬い。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 東壁中央部からやや南寄りに位置し、壁面を60cm程掘り込んで付設。粘土・砂などで構築しており、袖の補強に凝灰岩を使用。火床は床面を3cm程掘り窪め、ロームがレンガ状に焼き締まっている。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

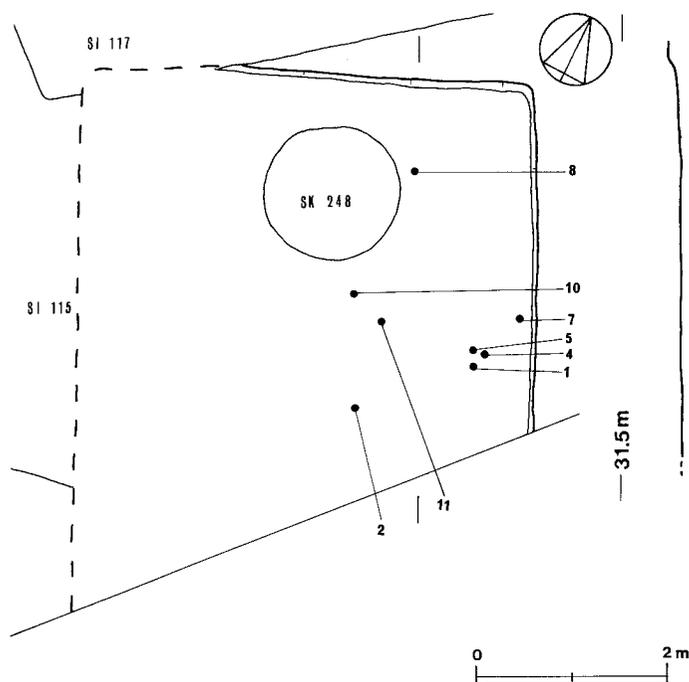
遺物 土師器片36点(うち内黒土器片1点)、須恵器片5点が出土。第418図1の高台付坏が覆土から出土。その他、流れ込みと思われる弥生式土器片1点、石製模造品(双孔円板1点)が覆土から出土。

所見 本跡は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

第114号住居跡 (第198図)

位置 C6e₃区。重複関係 SI-115, SI-117, SK-248<本跡。平面形 [長方形]。規模 (5.18)×[4.84]m。主軸方向 N-64°-E。壁 外傾。壁高8～9cm。壁溝 無。床 平坦。貼床で、全体的に硬い。ピット 無。貯蔵穴 無。カマド 不明。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片119点(うち内黒土器片31点)、土師質土器片3点、須恵器片1点が出土。遺物は住居内全体から出土。第418図1の坏が東壁中央部付近の覆土下層から、10・11の小皿が中央部付近の床面から出土。



所見 本跡は東側の調査区域外へ延びており、全体を捉えることはできなかった。本跡の時期は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。

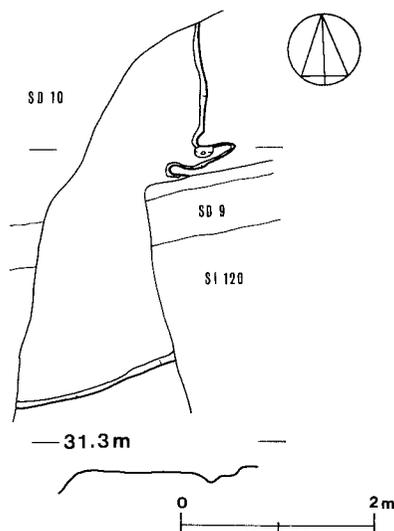
第198図 第114号住居跡実測図

第123号住居跡 (第199図)

位置 C5c₉区。重複関係 SI-120, SD-10<本跡< SD-9。平面形 不明。規模 (3.42)×(2.37)m。主軸方向 N-78°-E。壁 不明。壁溝 無。床 カマドの前の部分で硬い床面を確認。ピット 無。貯蔵穴 不明。カマド 東壁に付設。右袖部は残存しているが、トレンチャーによる攪乱が著しく、遺存状態は極めて悪い。覆土 [自然堆積]。

遺物 土師器片4点(うち内黒土器片1点)が出土。第419図2の坏が覆土から出土。

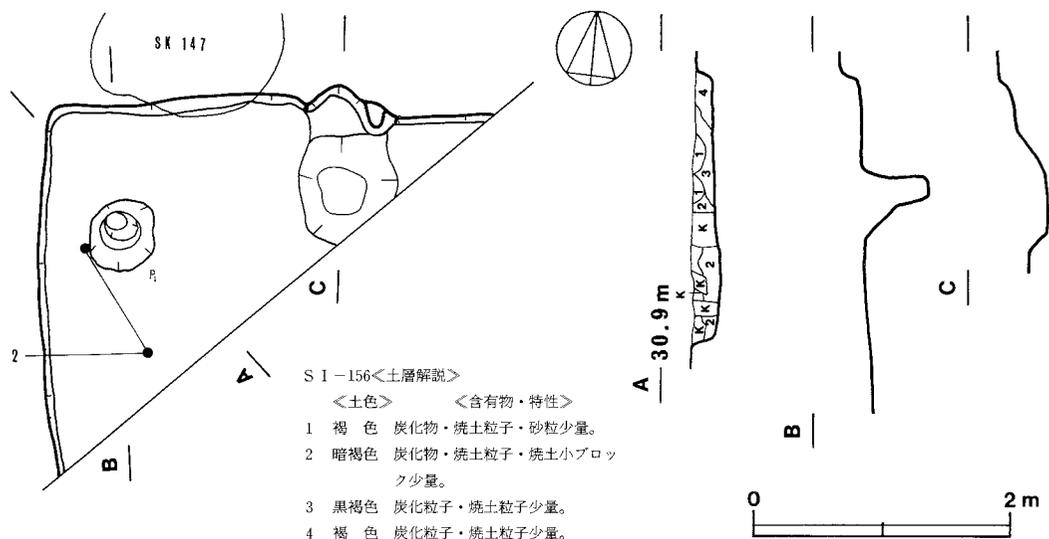
所見 本跡は、第120号住居跡と第10号溝と切り合っており、全体を捉えることはできなかった。本跡の時期は、遺構・遺物から判断して平安時代の住居跡と考えられる。



第199図 第123号住居跡実測図

第156号住居跡 (第200図)

位置 B6h₀区。重複関係 SK-147(新旧関係は不明)。平面形 [方形]。規模 (3.51)×(2.99)m。主軸方向 N-4°-W。壁 外傾。壁高13~22cm。壁溝 無。床 平坦。カマド付近を中心に硬く締まる。ピット 1か所。P₁(径57cm, 深さ53cm)は主柱穴。貯蔵穴 不明。カマド 北壁中央部に22cm程掘り込み、粘土・砂などで構築。天井部・袖部は崩壊。カマド内覆土下層には、焼土が堆積。覆土 自然堆積。



第200図 第156号住居跡実測図

遺物 土師器片96点，須恵器片2点，土製品(支脚1点)が出土。遺物は，細片が殆どで少量である。第419図2の坏が北西部の床面から正位で出土。

所見 本跡は，遺構・遺物から判断して奈良時代に比定される住居跡と思われる。

(4) 時期不明

第22号住居跡 (第201図)

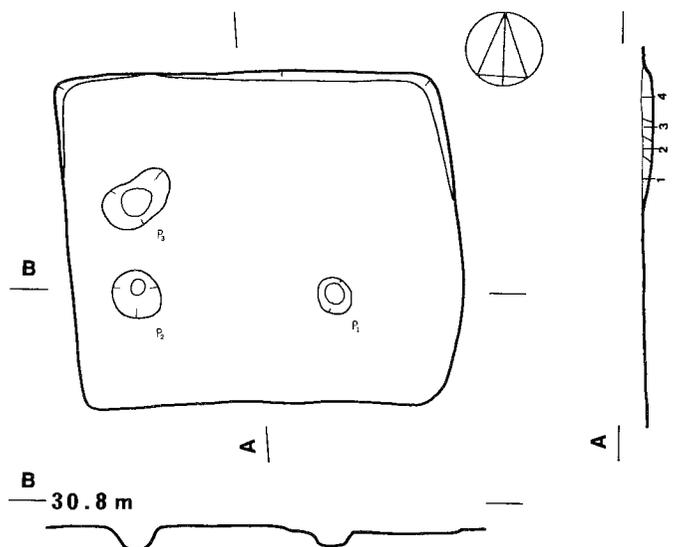
位置 F2j₀区。**重複関係** 無。**平面形** 長方形。**規模** 3.09×2.67m。**主軸方向** N-7°-W。**壁** 垂直。壁高0~4cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。南西部が硬い。**ピット** 3か所。P₁・P₂(径28~40cm，深さ11~20cm)いずれも支柱穴。P₃(径58×34cm，深さ24cm)性格不明。**貯蔵穴** 無。**カマド** 北壁中央部付近に焼土の広がりが見られるが，カマドかどうかははっきりしない。**覆土** 削平されており，堆積状況は不明。

遺物 土師器片11点が出土。甕の胴部片や坏の口縁部片が覆土から出土。

所見 確認面から住居跡の床面までが浅く，その上攪乱を受けており，カマドや住居跡の壁を明確に捉えることはできなかった。本跡は出土した遺物も少なく，時期を特定することはできなかった。

第24号住居跡 (第202図)

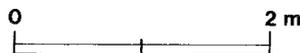
位置 F3g₁区。**重複関係** 無。**平面形** 方形と推定。**規模** (2.63)×(1.70)m。**主軸方向** N-0°。**壁** 外傾。壁高15~19cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。コーナー付近以外は硬い。**覆土** 自然堆積。



S I - 22 <土層解説>

<土色> <含有物・特性>

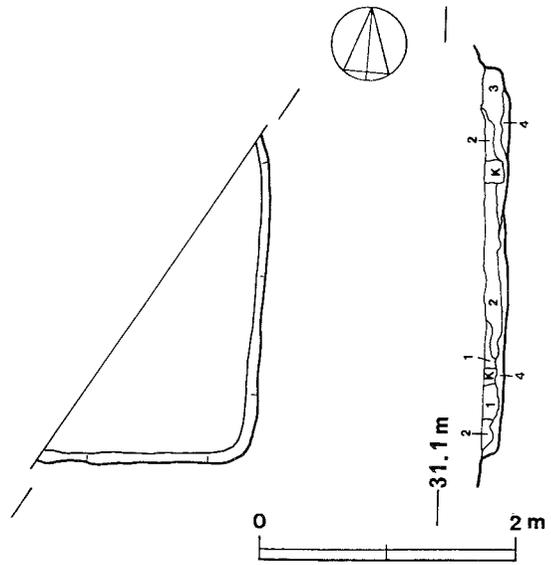
- 1 暗褐色 ローム粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量，炭化材少量。
- 3 褐色 ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
- 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子少量。



第201図 第22号住居跡実測図

遺物 土師器(高坏1, 細片13点), 須恵器片1点。遺物は, 少量であり, いずれも細片が殆どである。第420図1の高坏はコーナー部覆土中から出土したが, 本跡に伴うか否かは不明。

所見 住居跡の南東コーナー部を調査しただけであり, 柱穴, 貯蔵穴, 炉, カマドの存在は不明。本跡は, 遺物も細片であり, 時期を特定することはできなかった。



S I - 24 <土層解説>

<土色> <含有物・特性>

- 1 極暗褐色 炭化粒子・焼土粒子少量。
- 2 黒色 炭化粒子少量。
- 3 極暗褐色 ハードローム小ブロック・炭化粒子少量。
- 4 暗褐色 ローム粒子中量・炭化粒子少量。

第202図 第24号住居跡実測図

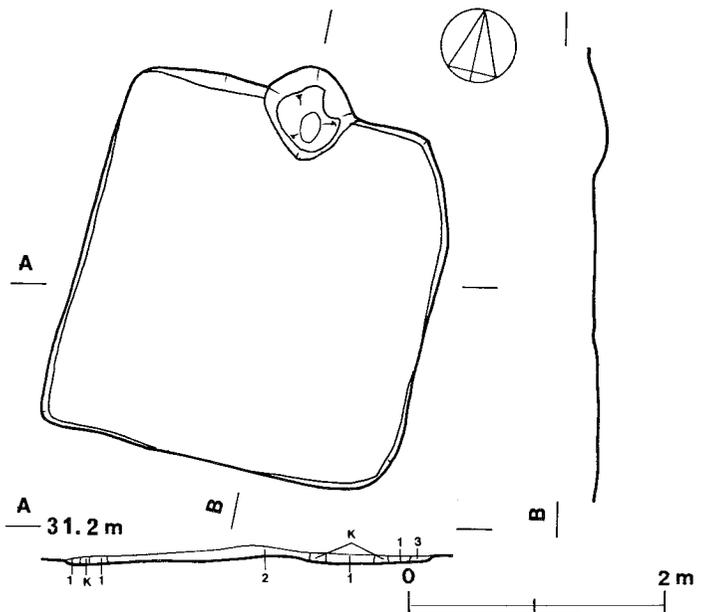
第32号住居跡 (第203図)

位置 F3d₅区。**重複関係** 無。**平面形** 隅丸長方形。**規模** 3.04×2.82m。**主軸方向** N-4°-E。**壁** 壁高0~5cm。削平されており, 壁の状態は不明。**壁溝** 無。**床** 平坦。中央部付近が硬い。**ピット** 無。**貯蔵穴** 無。**カマド** 北壁中央部を35cm程掘り

込み, 粘土・砂などで構築。火床は床面を8cm程掘り窪め, 焼き締まりは弱い。火床から緩やかに煙道部が延びている。**覆土** 大半が削平されており, 堆積状況は不明。

遺物 土師器片14点(うち内黒土器片1点), 陶器片1点が出土。いずれも小破片であり, 土師器は甕片が多く, 内黒土器は坏片が出土。

所見 本跡は, 出土した遺物も少なく, 時期を特定することはできなかった。



S I - 32 <土層解説>

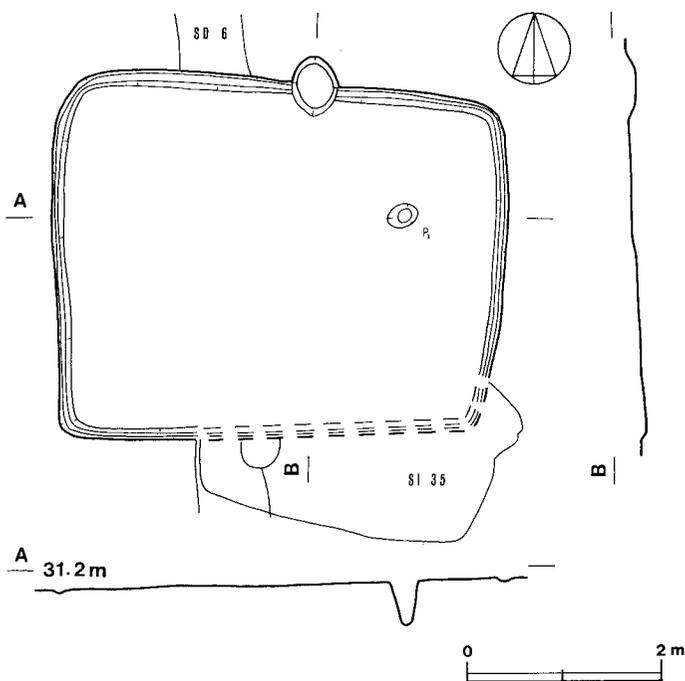
<土色> <含有物・特性>

- 1 褐色 ローム粒子多量。
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量。
- 3 極暗褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子少量。

第203図 第32号住居跡実測図

第36号住居跡（第204図）

位置 F3b₆区。重複関係 SI-35, SD-6（新旧関係不明）。平面形 隅丸長方形。規模 4.76×3.94m。主軸方向 N-2°-E。壁 壁高0～2cm。壁溝 幅4～10cm, 深さ2～3cmで全周。床 平坦。カマドの周辺が硬い。ピット 1か所。径32×29cm, 深さ48cmで支柱穴。貯蔵穴 無。カマド 北壁中央部に付設。削平されており, 詳細は不明。覆土 削平されており, 堆積状況は不明。



第204図 第36号住居跡実測図

遺物 土師器片の甕の口縁

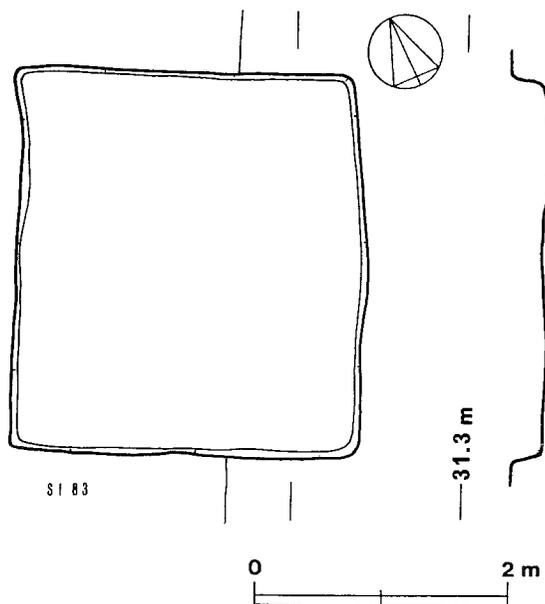
部片や胴部片等8点が覆土から出土。その他, 流れ込みと思われる弥生土器片1点が覆土から出土。

所見 出土遺物が少なく, 本跡の時期を特定することはできなかった。

第84号住居跡（第205図）

位置 D5b₃区。重複関係 本跡< SI-83。平面形 方形。規模 3.10×2.65m。主軸方向 N-26°-E。壁 外傾。壁高25～26cm。壁溝 無。床 平坦。中央部で硬い床面を検出。ピット 無。貯蔵穴 無。炉・カマド 西壁中央部寄りの床面に焼土ブロックが確認され, カマドの痕跡と考えられる。覆土 自然堆積。

遺物 土師器片258点, 須恵器片1点, 礫2点。遺物は, 殆どが細片で実測可能なものは無い。



第205図 第84号住居跡実測図

所見 本跡は、遺物の殆どが細片であり、時期を決定するにいたらなかった。

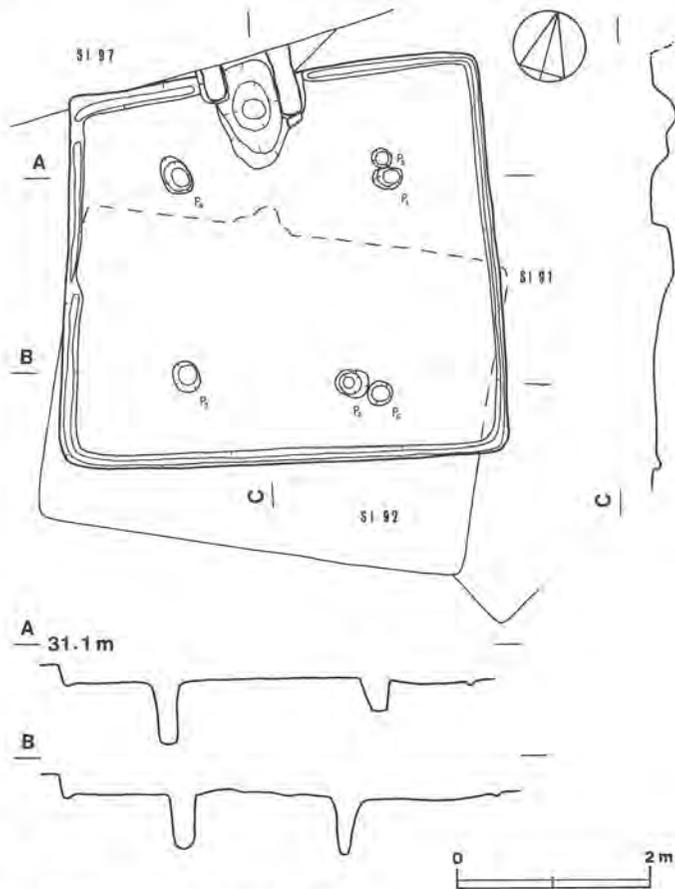
第93号住居跡 (第206図)

位置 C5j₄区。重複関係 SI-91, SI-92, SI-97(新旧関係不明)。平面形 不整形。規模 4.68×4.26m。主軸方向 N-15°-W。壁 外傾。壁高20~22cm。壁溝 幅10~16cm, 深さ6cm前後で全周。床 平坦。カマド周辺が硬い。ピット 6か所。P₁~P₄(径28~44cm, 深さP₁が34cm以外は59~67cm)が支柱穴。P₅・P₆(径20~27cm, 深さ66cm前後)は、それぞれP₁・P₂の補助柱穴。貯蔵穴 無。カマ

ド 北壁中央部に位置し、SI-97との切り合いで一部削平されている。粘土・砂などで構築しており、袖の補強に凝灰岩を使用。火床は床面を24cm程掘り窪め、ロームが焼けて赤変硬化している。煙道部は火床から急な角度で立ち上がり、住居の外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 土師器(甕1, 細片269点), 須恵器片4点。遺物は小破片が殆どで住居内全体から出土。

所見 本跡から出土した遺物は小破片が殆どであり、時期を明確にとらえることができなかった。



第206図 第93号住居跡実測図

第122号住居跡 (第141図)

位置 C5b₇区。重複関係 本跡<SI-121。平面形 方形と推定。規模(1.74)×(0.78)m。壁 外傾。壁高19cm。壁溝 幅8~10cm, 深さ5cm前後で確認される。床 硬く平坦な床面を確認。

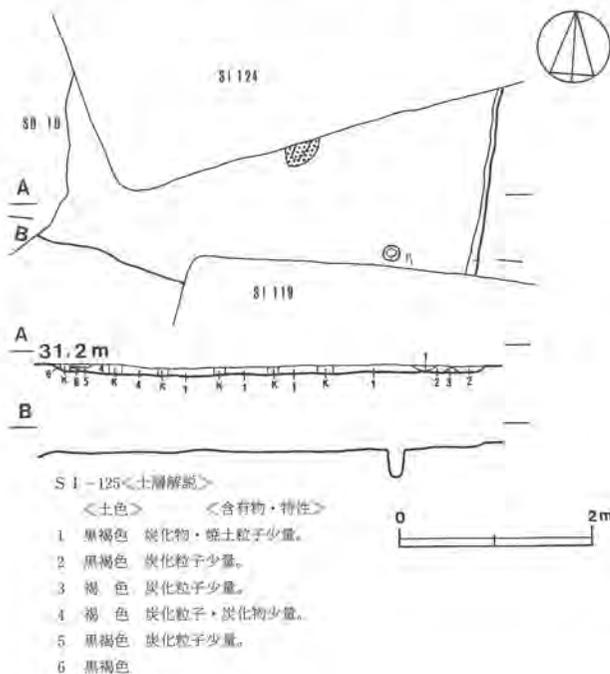
遺物 土師器片48点。遺物は、いずれも細片であり実測可能なものはなかった。

所見 本跡は、住居跡の南東コーナー部を調査しただけであり、主軸方向、ピット、貯蔵穴、

炉, カマド 覆土は, 不明である。また, 遺物からその時期は古墳時代の範疇に入るものと思われるが, 明確に特定できることはできなかった。

第125号住居跡 (第207図)

位置 C6b₁区。重複関係 SI-119, SI-124, SD-10(新旧関係不明)。平面形 方形と推定。規模 (4.61)×(2.04)m。主軸方向 N-11°-E。壁 不明。壁高0~7cm。壁溝 無。床 平坦。炉周辺で硬い床面を確認。ピット 1か所。径19cm, 深さ32cm。性格不明。貯蔵穴 他の遺構との重複により, その有無は不明。炉 床面中央部と思われる位置に検出。半分は第124号住居



跡によって削除され, 44×33cmの範囲で残存。炉内には焼土が堆積し, 炉床は火熱を受けて赤色硬化。覆土他の遺構によって本跡の大半が削除されており, 自然堆積であるか否かは不明。

遺物 炭化材。本跡は, 遺構確認面と床面がほぼ同一レベルであり, 床面から炭化材が多数出土している。

所見 本跡は, 多くの住居跡によって削除された上, 覆土も浅く, 時期を特定するには至らなかった。炭化材の出土状況から, 焼失家屋の可能性はある。

第207図 第125号住居跡実測図

第127号住居跡 (第143図)

位置 C6a₃区。重複関係 SI-126(新旧関係不明)。平面形 不明。規模 (1.79)×(1.34)m。主軸方向 N-7°-W。壁 外傾。壁高6cm。壁溝 無。床 平坦。中央部に硬い床面を確認。

遺物 土師器片1点。

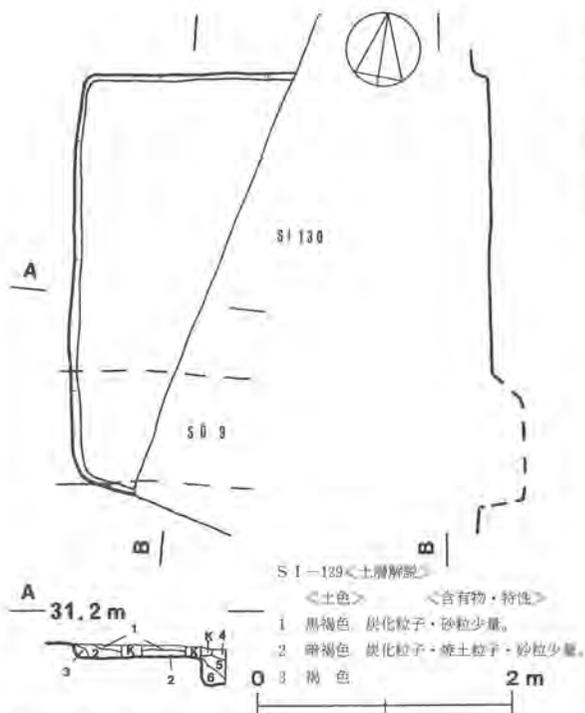
所見 住居跡の南東コーナー部を調査しただけであり, ピット, 貯蔵穴, 炉, カマドは確認できず, 覆土は不明である。本跡の時期についても, 土師器片1点のみであり, 不明である。

第129号住居跡 (第208図)

位置 C6b₅区。**重複関係** 本跡<SD-9。SI-130 (新旧関係不明)。**平面形** 方形と推定。**規模** 3.33×(1.66)m。**主軸方向** N-7°-W。**壁** 外傾。壁高15cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。全体的に硬く締まる。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器片12点。

所見 本跡は、第130号住居跡によって遺構の大部分が削除され、ピット、貯蔵穴、炉、カマドは不明である。本跡の時期についても、土師器片が極少量出土しただけであり、不明である。



第208図 第129号住居跡実測図

第132号住居跡 (第145図)

位置 C6a₅区。**重複関係** 本跡<SI-131。**平面形** 方形と推定。**規模** (1.30)×(1.16)m。**主軸方向** N-15°-W。**壁** 外傾。壁高7cm。**壁溝** 無。**床** 平坦。

遺物 土師器片26点。

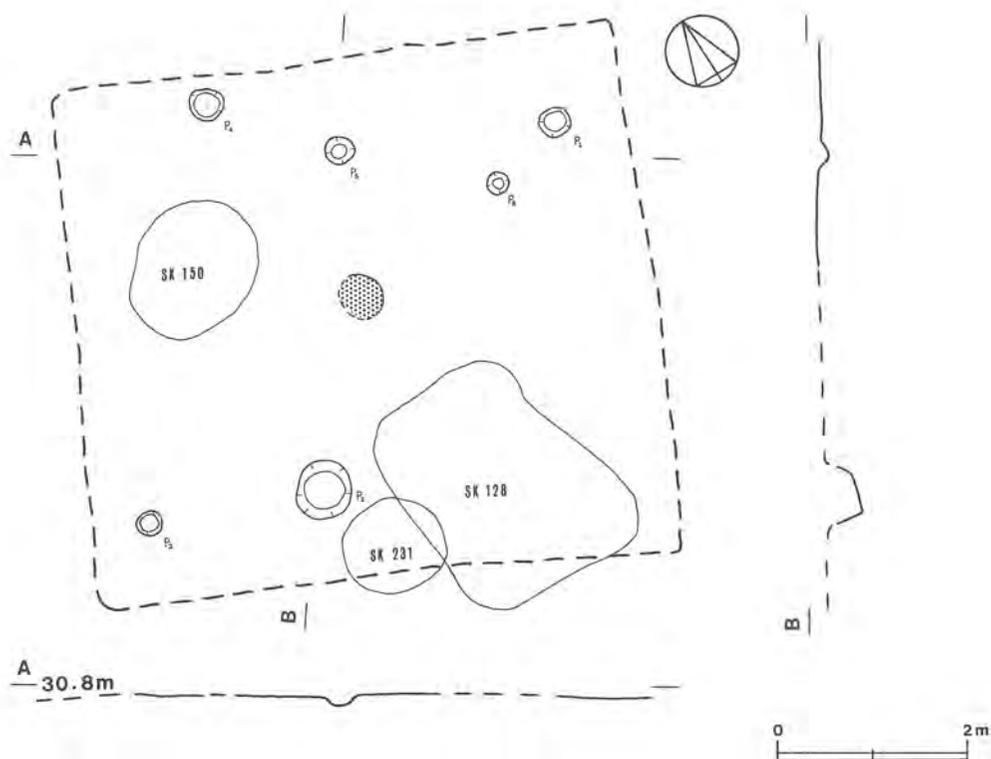
所見 住居跡の南西コーナー部を調査しただけであり、ピット、貯蔵穴、覆土の状態、炉、カマドの存在は不明である。遺物も、土師器の細片が少量出土しただけであり、実測できるものはなかった。時期は不明である。

第152号住居跡 (第209図)

位置 B6g₆区。**重複関係** SI-148<本跡。SI-134, 135, 155, SK-128, 150, 231 (新旧関係不明)。**平面形** 方形と推定。**規模** [6.40]×[5.56]m。**主軸方向** N-67°-W。**壁** 不明。**壁溝** 無。**床** 平坦。床面中央部は極めて硬い。**ピット** 6か所。径13~63cm。**主柱穴**は不明。**貯蔵穴** 無。**炉・カマド** 床面中央部に焼土の堆積がみられ、炉の可能性がある。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器 (甕2, 細片64点), 須恵器片1点。出土した遺物はいずれも小片である。

所見 本跡は、多くの遺構と重複しており、出土した遺物も殆ど小片であり、時期を明確に特定することはできなかった。



第209図 第152号住居跡実測図

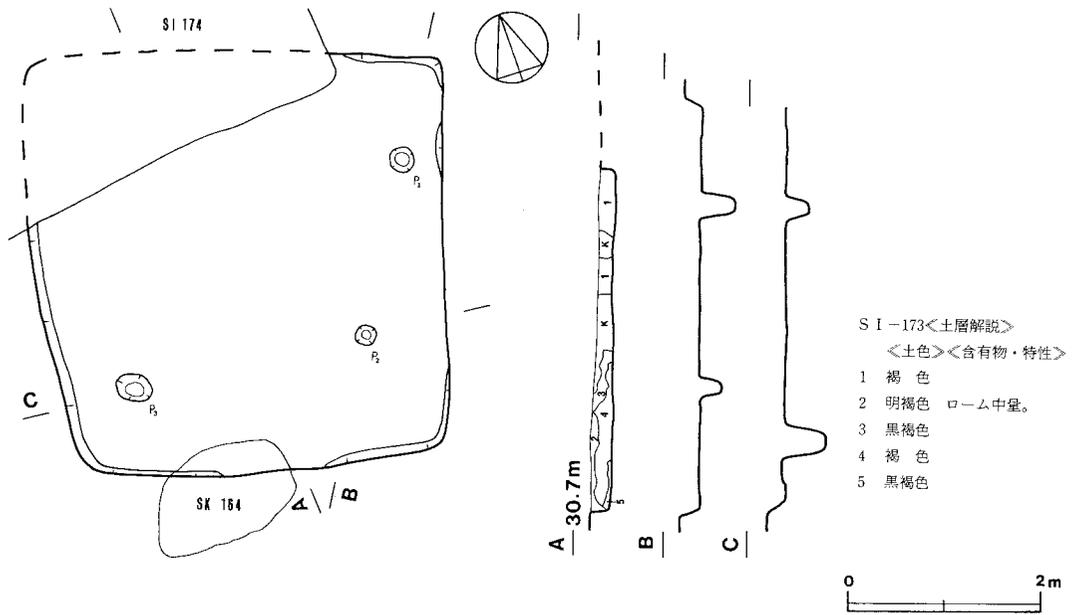
第173号住居跡 (第210図)

位置 A6j₉区。**重複関係** 本跡<SI-174。SK-164(新旧関係不明)。**平面形** 方形。規模 4.30×4.24m。**主軸方向** N-15°-E。**壁** 外傾。壁高19~20cm。**壁溝** 無。**床** 中央部は極めて硬い貼床。**ピット** 3か所。すべて主柱穴で、径22~40cm、深さ25~45cm。**貯蔵穴** 無。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器片127点。遺物は、細片が少量出土しただけであり、実測可能なものはない。

所見 第174号住居跡と重複しており、炉、カマドは確認できなかった。本跡は、出土した遺物が細片のみであり、時期を特定するに至らなかった。





第210図 第173号住居跡実測図

3 豪族居館跡（堀）

当遺跡からは、古墳時代における豪族の居館跡を囲む堀が2条検出されている。第10号堀は南北に、第11号堀は東西に掘られたものである。これらの堀は、調査の過程でそれぞれ別個の名称を付して調査しているが、本来豪族居館を圍繞する一連のものである。

(1) 南北堀（第10号堀）（付図3）

位置 B5i₀区からD5a₆区の範囲で調査エリアの北部に検出された。

重複関係 SI-106<本跡<SI-90, 103, 104, 106, 123, 124, SK-260, 273, SD-9。第103, 104, 124号住居跡は、いずれも古墳時代後期の住居跡で、本跡の覆土を掘り込み、しっかりと貼床がなされていた。

長軸方向 N-7°-E。

規模 全長53m。上幅3.2~4.7m（屈曲部では上幅が広がる）。下幅1.8~2.4m。遺構確認面からの深さは1.1~1.3m。

形状 断面形状は逆台形状を呈し、壁の傾斜角度は、東壁（居館跡の内側）で34°~69°、西壁（居館跡の外側）で40°~70°を測り、西壁の方が東壁より急な傾斜で立ち上がっている。底面は平坦である。

ピット 17か所検出され、全て張出部及びその周辺に位置する。P₁~P₅は張出部北コーナーの

北側に、P₆・P₇は張出部北コーナーに、P₈～P₁₀は張出部南側に、P₁₁・P₁₂は張出部南コーナーに、P₁₃～P₁₇は張出部南コーナーの南側に検出されている。このなかで、P₂・P₅～P₇・P₁₂・P₁₄～P₁₇は、いずれもしっかりとした掘り方がなされ、底面も極めて硬く締まっており、これらのピットは柱穴と考えられる。上記柱穴は、P₁とP₃、P₄とP₅、P₆とP₇、P₁₄とP₁₅、P₁₆とP₁₇というように、対をなす配置状況を示し、何らかの上部構造物を支えた柱穴と考えられる。

覆土 自然堆積。下層にローム粒子・ハードローム小ブロックを含む黒褐色土、中層にローム粒子・炭化粒子を含む黒色土、上層にローム粒子・ハードローム小ブロックを含む褐色土。

張出部 検出された堀のほぼ中央部に、(居館跡の)内側で約15m、外側で約20mの長さをもって、約3m外側(西側)に張り出し、丸みをもった台形状の張出部を形成している。

遺物 土師器(甕33, 壺11, 甑5, 鉢1, 高坏22, 埴13, 坏7, 埴17, 器台3, 甗1, 手捏ね土器4, 細片13, 995点), 須恵器片43点, 縄文式土器片149点, 弥生式土器片1, 174点, 陶器片3点, 鉄滓5点, 土製品(紡錘車1点), 石製模造品(双孔円板8点, 剣形品6点, 勾玉2点, 白玉10点), 石製品(紡錘車2点, 石鏃1点, 砥石2点, 打製石鏃1点, 敲石3点)。遺物は、下層出土のものと、上層出土のものとは大別でき、大半は上層からの出土である。下層の遺物は、張出部北側を中心に、一部張出部南側にも出土している。主な遺物は、第421図2の甕、1の台付甕、第422図5の高坏が、いずれも張出部北側から横位で出土している。上層の遺物は、張出部を中心に大量に出土している。主な遺物は、C5c₈区から第436図113の埴が逆位で、C5d₈区から第433図82の小形壺が斜位で、第437図126の甗が正位で、C5e₈区から第436図101の埴が潰れた状態で、C5f₈区から第432図75の甕(円窓土器)が潰れた状態で出土している。覆土上層の遺物は、器種によって、出土位置に一定のまとまりをしめすものがある。埴・小形壺は張出部北側に、埴は中央部に、手捏ね土器は張出部南コーナー部に、それぞれまとまって出土している。

(2) 東西堀(第11号堀) (付図3)

位置 B6c₈区からB7c₈区の範囲で調査エリアの北端部に、台地縁辺部に沿って、13～15m南側に検出された。

重複関係 本跡<SI-165, 168, SK-108, 123(いずれも本跡より新しい)。第165, 168号住居跡は古墳時代後期の住居跡で、本跡の覆土を掘り込み、しっかりと貼床がなされていた。

長軸方向 N-90°。

規模 全長46m。上幅2.9～3.4m, 下幅1.9～2.0m。確認面からの深さは0.8m～1.1m。

形状 断面形状は逆台形状を呈し、壁の傾斜角度は、南壁(居館跡の内側)で46°～71°, 北壁(外側)で63°～72°を測る。底面は平坦である。

ピット 居館跡に伴うと考えられるものは、検出されなかった。

覆土 自然堆積。下層にローム粒子・ハードロームブロックを含む褐色土、中層にローム粒子・ハードロームブロック・炭化粒子を含む黒色土、上層にローム粒子・炭化粒子を含む暗褐色土。

張出部 調査エリア内においては、検出されない。

遺物 土師器（甕25、壺4、脚付壺1、高坏7、埴1、器台11、装飾器台2、手捏ね土器1、炉器台1、細片2,668点）、須恵器片4点、縄文式土器片377点、弥生式土器片1,584点、陶器片30点、土製品（紡錘車1点、块状耳飾り1点）、鉄製品（鎌1点、刀子1点）、礫2点。遺物は、殆どが覆土下層からの出土であり、検出された堀の中央部、B6c₈区からB7d₂区を中心に集中して出土している。主な遺物は、B6c₇区下層から第427図30の壺が潰れた状態で、B6c₈区下層から33の脚付壺が横位で、第429図58の壺（弥生式土器）が潰れた状態で、B6c₉区下層から第426図28の台付甕が潰れた状態で、B7c₂区下層から第425図18の甕と第428図40の装飾器台が潰れた状態でそれぞれ出土している。器種別による出土位置のまとまりは捉えられない。

(3) 小 結（豪族居館跡としての全体像）

平面形 調査範囲が限定されたものであり、確認された2条の堀からの推定であるが、東西堀と南北堀は、ほぼ96°の角度で交わることから、基本的には、方形に囲むものと想定される。

規模 調査範囲は、豪族居館跡を方形に囲むであろう堀の北西部に限られたが、規模は、南北堀で約90mと推定される。（推定 ①南北堀にある張出部が堀の中央部に位置する。②南北堀と東西堀はそのまま直線的に延びる。）

外郭施設 本跡に伴う外郭施設としては、堀が検出されたのみである。堀は、豪族居館跡に特有の断面逆台形状を呈し、しっかりとした掘り方がなされている。底部は平坦であり、張出部コーナーはシャープで、明瞭にコーナーを意識して構築したことが窺える。堀は、底部の状況及び土層から、空堀と考えられる。また、葦石の痕跡も確認できない。

張出部は、南北堀の中央部と思われる位置に構築されている。東西堀には確認されない。張出部には、その周辺に一對のものと捉えられる柱穴が5対検出された。これらは、掘り方や底部の状況から、橋梁状の何らかの上部構造物をもつ可能性が考えられる。

堀以外の外郭施設（土塁・柵列・柵列に伴う布掘り）は確認されていない。土塁については、土層から、土塁の存在を想定し得るようなロームブロックの混入が認められない以上、その存在は考えにくい。堀の内側については、特に精査したが、柵列状に並ぶ柱穴、布掘り状の遺構あるいは土塁状に排土を積み固めた痕跡はみられなかった。

内部施設 堀の内部に、居館跡と同時期と考えられる遺構は、竪穴住居跡（第118号住居跡）1軒のみである。この竪穴住居跡は、張出部中央の約6m程東側に確認された。北側半分は、後世の遺構によって削除されている。

その外、掘立て柱建物跡、井戸、祭祀遺構などは確認されていない。

出土遺物 遺物は、居館の存続期間中に廃棄または遺棄されたと思われる覆土下層からのものと、居館が廃絶された後に廃棄または遺棄されたと思われる南北堀を中心とした覆土上層からのものとに大別される。

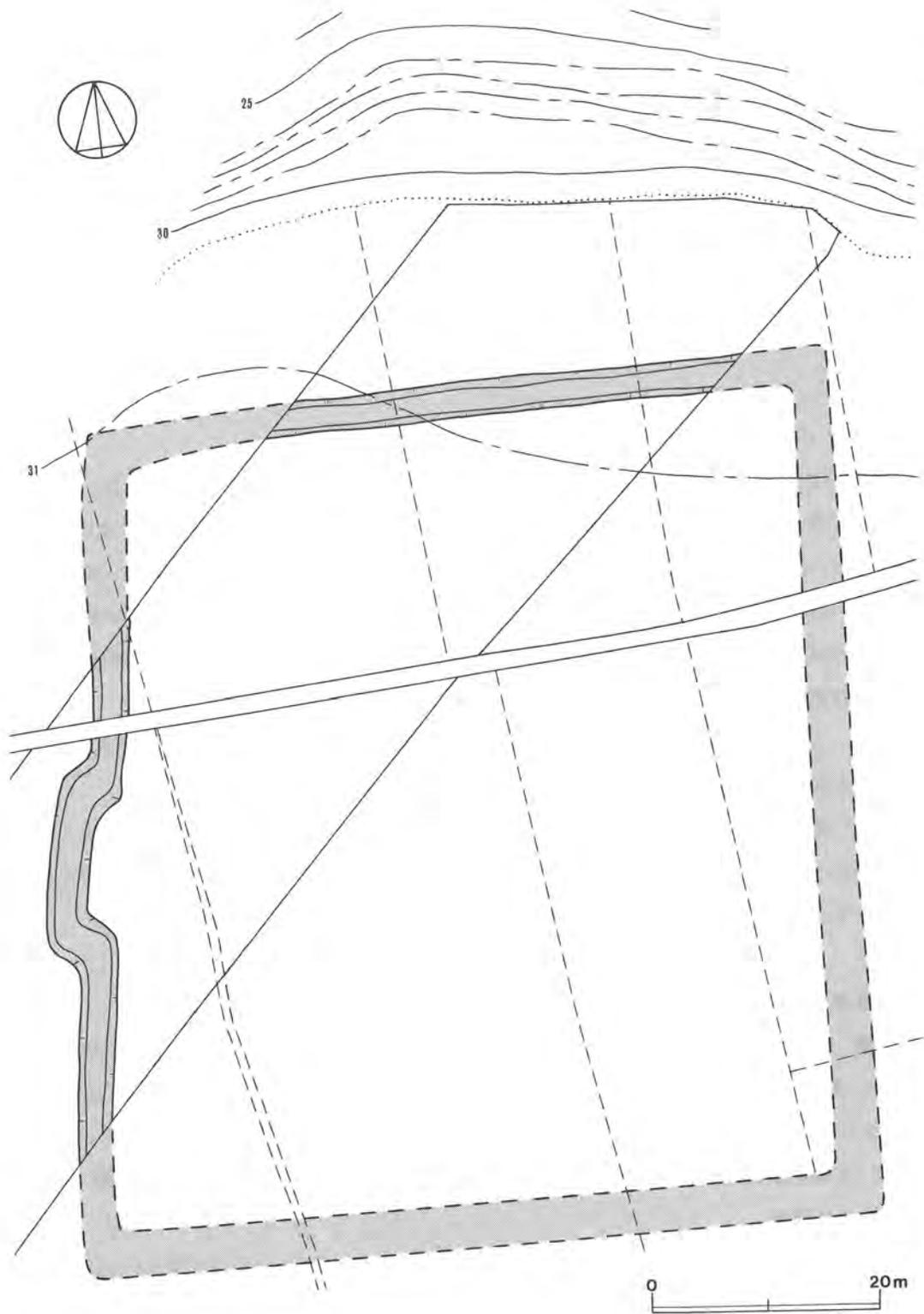
覆土下層からの遺物は、南北堀・張出部の北コーナー部と東西堀の中央部に集中している。器種的には、日常煮沸用の甕・台付甕が多いが、祭祀的な色彩の濃い(装飾)器台・高坏、特殊な器形としての脚付壺などが出土している。

覆土上層からの遺物は、南北堀の張出部を中心に大量に出土している。器種は、下層出土のものと同様、量的には甕・甑が多いものの、祭祀的な色彩をもつ埴・高坏・甗・手捏ね土器などの外、石製模造品(双孔円板・剣形品・勾玉)なども出土している。

存続時期 堀の覆土下層からは、多くの遺物が出土しており、居館が存続している間に何らかの意味をもって、廃棄あるいは遺棄されたものと考えられる。それらの遺物は、その特徴から判断して古墳時代前期、五領式期に比定されるものと思われる。また、張出部の上層からは、大量の土師器及び土師器片が出土しており、和泉式期を主体としながら鬼高式期初頭に比定されるものである。

従って、本跡の時期は、古墳時代前期、4世紀中葉に位置づけられ、それを前後する時期に居館として機能していたものと考えられる。そして、覆土上層に遺棄された遺物から判断して、遅くとも5世紀代までにはすでにその機能を停止していたものと思われる。





第211図 豪族居館跡全体 (想定) 図

4 溝

第1号溝 (第212図)

位置 H2c₂区からH2c₆区。**重複関係** 本跡>SI 5。**規模** 上幅0.33~1.11m, 下幅0.23~0.77m, 深さ6~26cm, 全長[14.75m]。**主軸方向** N-86°-E。ほぼ東西へ直線状に延びている。**高低差** 東端部は標高29.998m, 中央部は29.983m, 西端部29.911m。ほぼ水平。**断面形** U字状。底面は硬く締まっている。**覆土** 自然堆積。

遺物 灰釉陶器片1点が出土。

所見 本跡は第5号住居跡より新しい遺構であるが, 時期・性格を特定することはできなかった。

第2号溝 (第212図)

位置 G2f₇区からH2d₈区。**重複関係** 本跡>SI 7。SI12, SK 3, SK 7, SK51, P 48, P 83(新旧関係不明)。**規模** 上幅0.31~1.06m, 下幅0.23~0.88m。深さは南側では20~25cm, 他は8~17cm。全長[34.64m]。**主軸方向** N-4°-E。南北へ直線状に延びており, H2b₇区からH2c₈区まではN-44°-Wと南東へ向きを変えている。**高低差** 北端部は標高30.099m, 中央部は29.924m, 南端部は29.666m。南へ向かって傾斜している。**断面形** 中央部から北側は皿状, 南側はU字状。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器片50点(うち内黒土器片4点), 須恵器片11点が出土。いずれも覆土から出土しており, 土師器・須恵器とも甕片が多い。

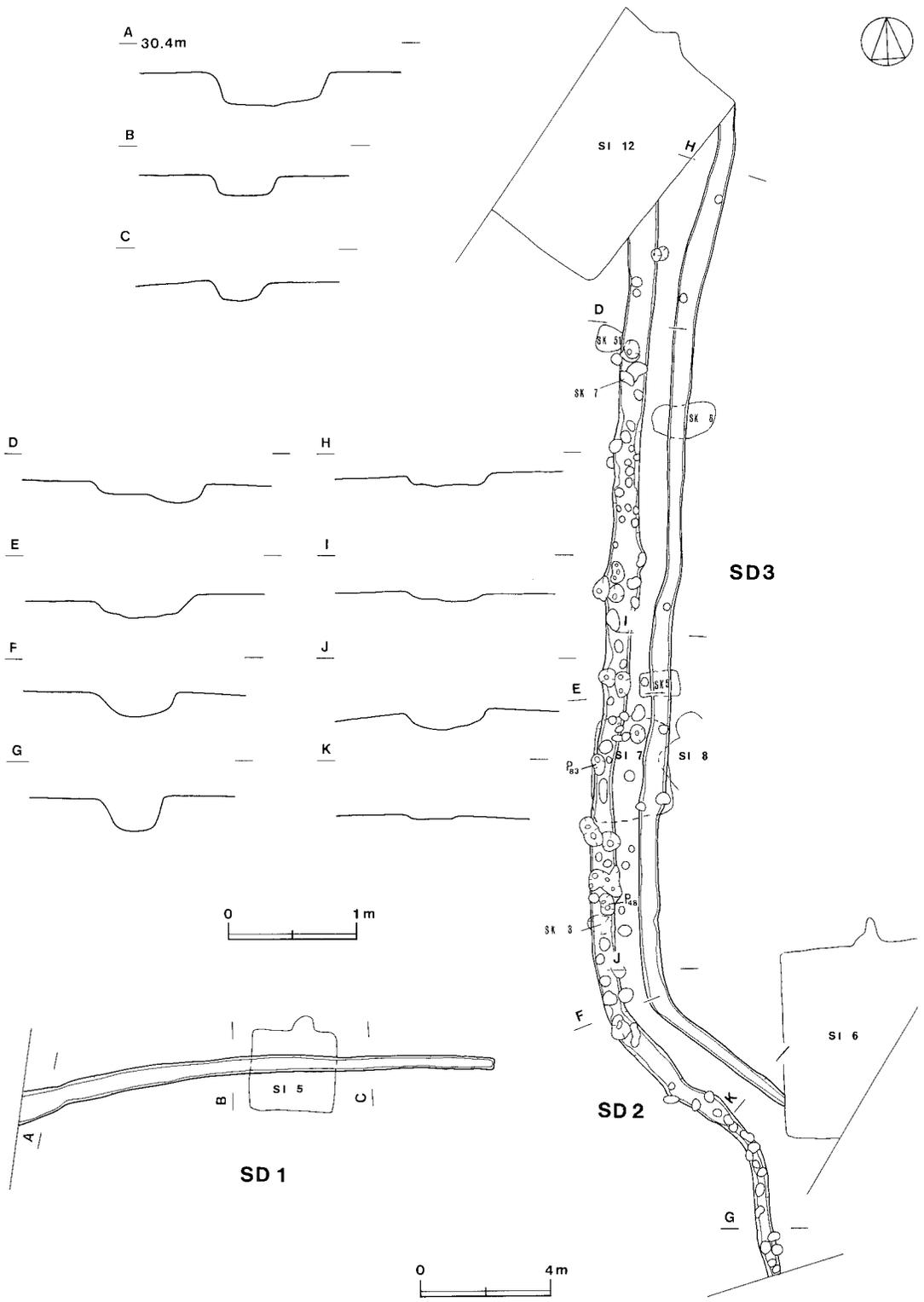
所見 溝全体から径25~35cm, 深さ24~87cmの円形・楕円形のピットが100か所近く検出されている。特に中央部のG2j₇区からH2b₇区に集中しており, 他の場所のピットより規模がやや大きく深くなる。ピットの間隔は不規則ではあるが, 柵列等が伴っていた可能性が考えられる。

第3号溝 (第212図)

位置 G2e₈区からH2c₈区。**重複関係** 本跡>SI 7, SI 8。SI 6, SI12, SK 5, SK 6(新旧関係不明)。**規模** 上幅0.32~0.81m, 下幅0.18~0.76m, 深さ7~15cm, 全長[33.26m]。**主軸方向** N-8°-E。南北へ直線状に延びており, H2b₇区からN-49°-Wと南東へ向きを変えている。**高低差** 北端部は標高30.182m, 中央部は29.942m, 南端部は29.933m。ほぼ水平。**断面形** 皿状。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器片48点(うち内黒土器片2点), 須恵器片3点が出土。ほとんど覆土から出土しており, 土師器の甕の胴部片が多い。

所見 本跡は第7・8号住居跡より新しい遺構であるが, 時期を特定することはできなかった。



第212図 第1・2・3号溝実測図

また、本跡の西側に約1mの間隔で第2号溝がほぼ平行して通っており、2本の溝が何らかの関連をもつものと考えられる。

第4号溝（第213図）

位置 F3i₁区からG3a₁区。**重複関係** SK21(新旧関係不明)。**規模** 上幅0.23～0.53m, 下幅0.17～0.38m, 深さ8～22cm, 全長6.78m。**主軸方向** N-27°-E。緩やかに湾曲しながら南北へ延びている。**高低差** 北端部は標高30.551m, 南端部は30.407m。わずかに南へ向かって傾斜している。**断面形** U字状。**覆土** 自然堆積。上層は黒褐色土で、下層はローム粒子を多く含む褐色土。

遺物 無。

所見 本跡の時期・性格については、出土遺物がなく特定することはできなかった。

第5号溝（第213図）

位置 F3g₇区からF3h₇区。**重複関係** SI28, SI29(新旧関係不明)。**規模** 上幅0.76m～1.11m, 下幅0.67～0.97m, 深さ11～20cm, 全長[4.02m]。**主軸方向** 南端部から中央部までN-30°-W, 中央部から北端部までN-37°-E。SI28とSI29を繋ぐように湾曲している。**高低差** 南端部は標高30.487m, 北端部は30.404m。ほぼ水平。**断面形** U字状。**覆土** 自然堆積。上層は黒色土で、下層はローム粒子を多く含む褐色土。

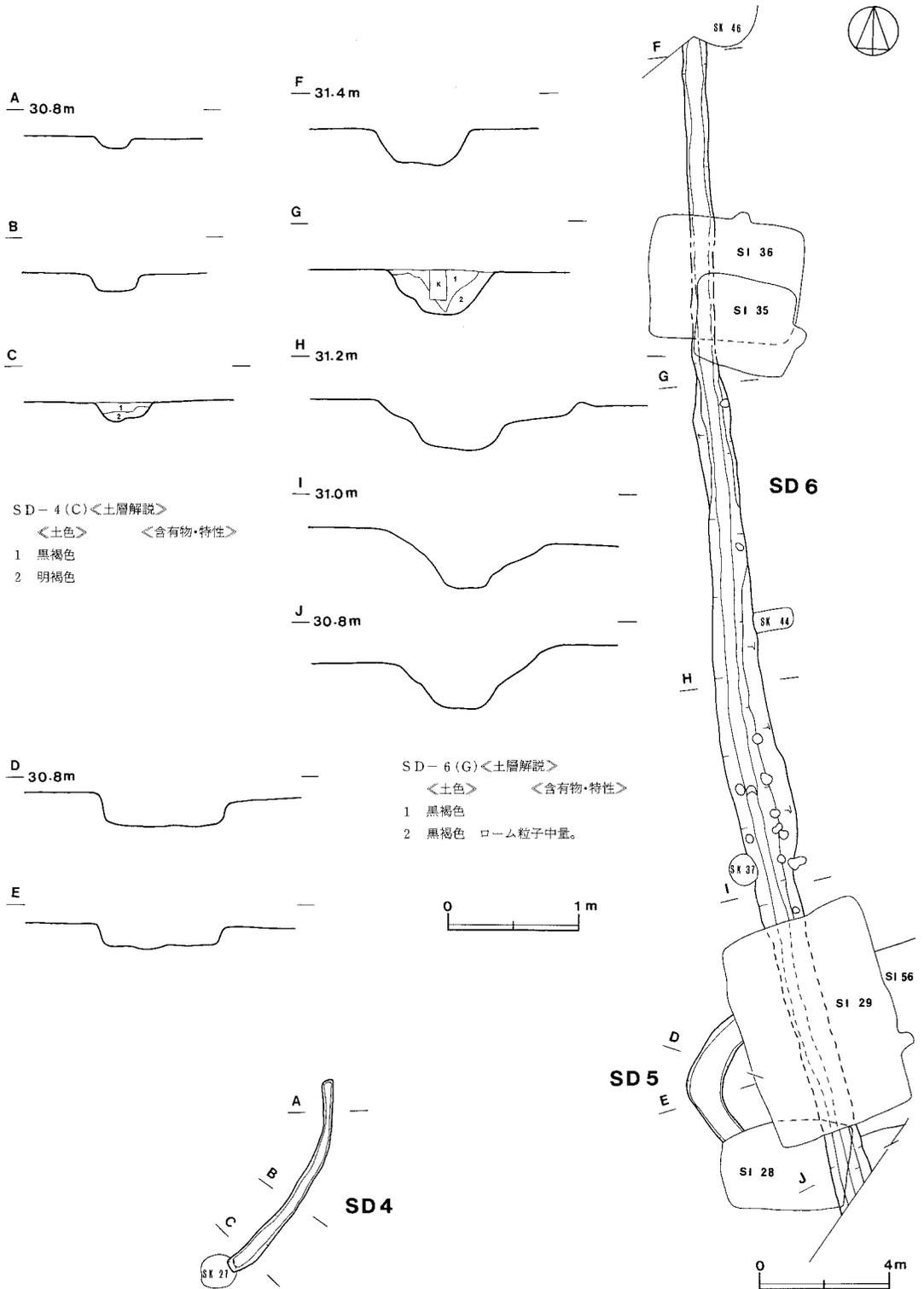
遺物 土師器片7点(うち内黒土器片1点)が出土。土師器は甕片で、内黒土器は高台付坏の底部片である。

所見 遺物が少なく、本跡の時期・性格を特定することはできなかった。

第6号溝（第213図）

位置 E3j₆区からF3i₈区。**重複関係** SI56<本跡<SI28, SI29, SI35, SI36, SK37, SK44, SK46(新旧関係不明)。**規模** 上幅0.64～1.81m, 下幅0.16～0.56m。深さは、中央部から北側は19～28cm, 中央部から南へ向かって35～46cmとやや深くなる。全長[36.85m]。**主軸方向** N-7°-W。南北へ直線状に延びている。**高低差** 北端部は標高30.842m, 中央部は30.441m, 南端部は30.130m。南へ向かって傾斜している。**断面形** 中央部から北側ではU字状を呈し、中央部から南側では逆台形状を呈している。**覆土** 全体的に自然堆積であるが、SI28・SI29との切り合いでは人為的な堆積状況を示している。

遺物 弥生式土器片2点, 土師器片249点(うち内黒土器片11点), 須恵器片38点, 双孔円板1点, 刀子片1点出土。すべて覆土から出土しており、土師器・須恵器とも甕片が多い。



第213図 第4・5・6号溝実測図

所見 第28・29号住居跡が本跡の上に貼床されて構築されていることから、本跡は10世紀以前に機能していた溝と考えられる。

第7号溝 (第214図)

位置 E3e₀区からE5a₁区。**重複関係** 本跡>SI55, SK261, SK265。SI54, SI60, SI62, SI64, SD8(新旧関係不明)。**規模** 上幅1.45~2.01m, 下幅1.01~1.51m, 深さ10~23cm, 全長[50.99m]。**主軸方向** N-71°-E。東西へ直線状に延びている。**高低差** 東端部は標高30.960m, 中央部は31.060m, 西端部は31.040m。ほぼ水平。**断面形** 皿状を呈し, 中央部がやや高まり2本の溝のように見える。**覆土** 自然堆積。全体的に黒褐色土で硬く締まっている。

遺物 土師器片181点(うち内黒土器片8点), 須恵器片9点, 釘1点, 鉄滓1点が出土。第441図1・2・3が第64号住居跡の覆土から出土。土師器は甕の胴部片がほとんどである。

所見 第54号住居跡付近で第8号溝と十字に交差するが, 新旧関係は捉えることはできなかった。また, 本跡は東西の調査区域外に延びており, 全体を捉えることができず, 時期・性格等を特定することはできなかった。

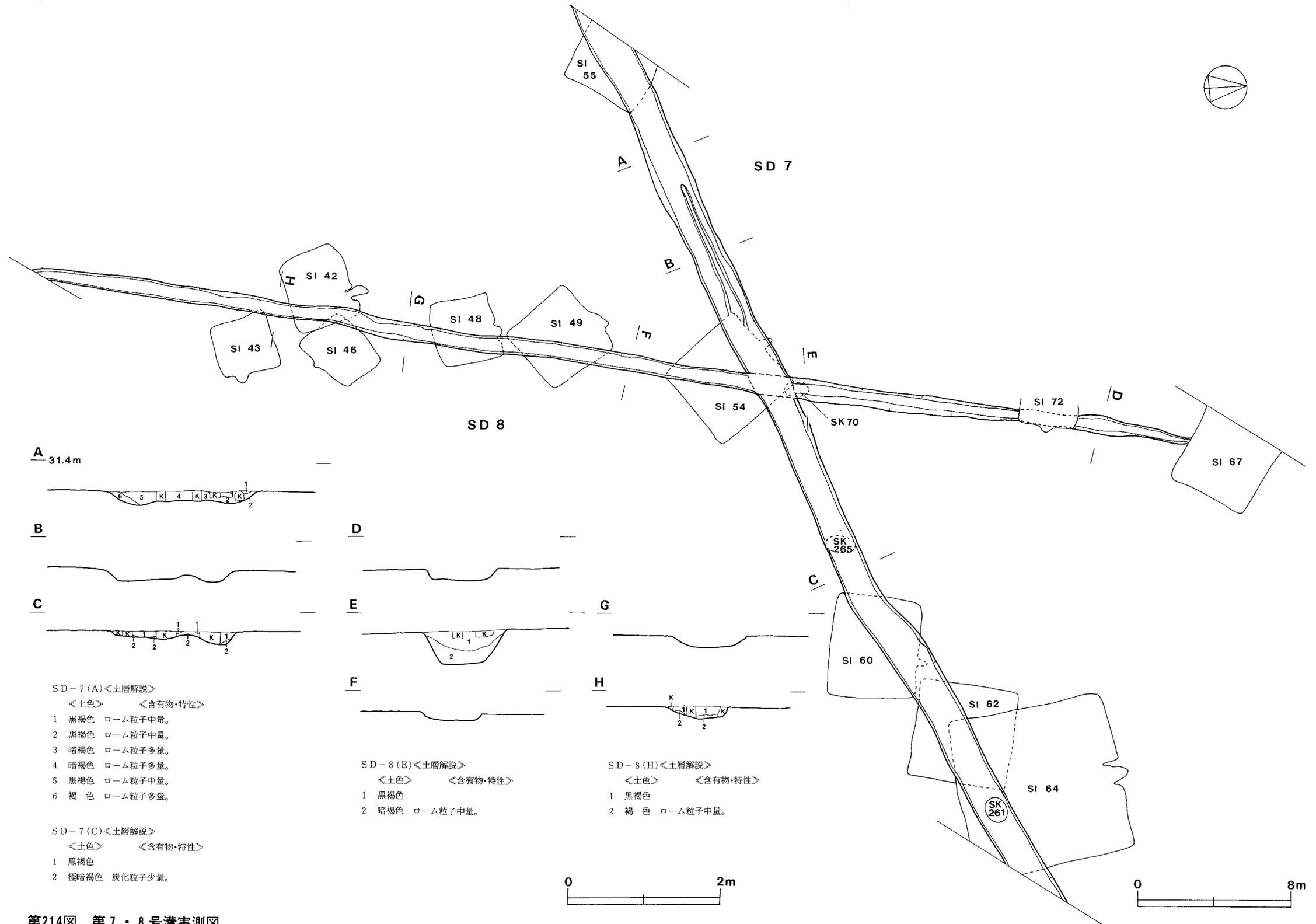
第8号溝 (第214図)

位置 D4h₅区からF4c₂区。**重複関係** SI42, SI48<本跡<SI72。SI43, SI46, SI49, SI54, SI67, SK70, SD7(新旧関係不明)。**規模** 上幅0.39~1.03m, 下幅0.25~0.78m。深さは中央部から南側では11~26cm, 中央部から北側では35~43cm。全長[61.82m]。**主軸方向** N-11°-E。ほぼ南北に直線状に延びている。**高低差** 北端部は標高30.874m, 中央部は30.926m, 南端部は30.849m。中央部がやや高い。**断面形** 中央部から南側では皿状を呈し, 中央部から北側では逆台形状を呈している。**覆土** 自然堆積。上層は黒褐色土で, 下層はローム粒子を多く含む褐色土。**遺物** 土師器片138点(うち内黒土器片3点), 須恵器片5点, 鉄滓2点が出土。いずれも覆土から出土しており, 土師器はほとんどが甕の胴部片である。

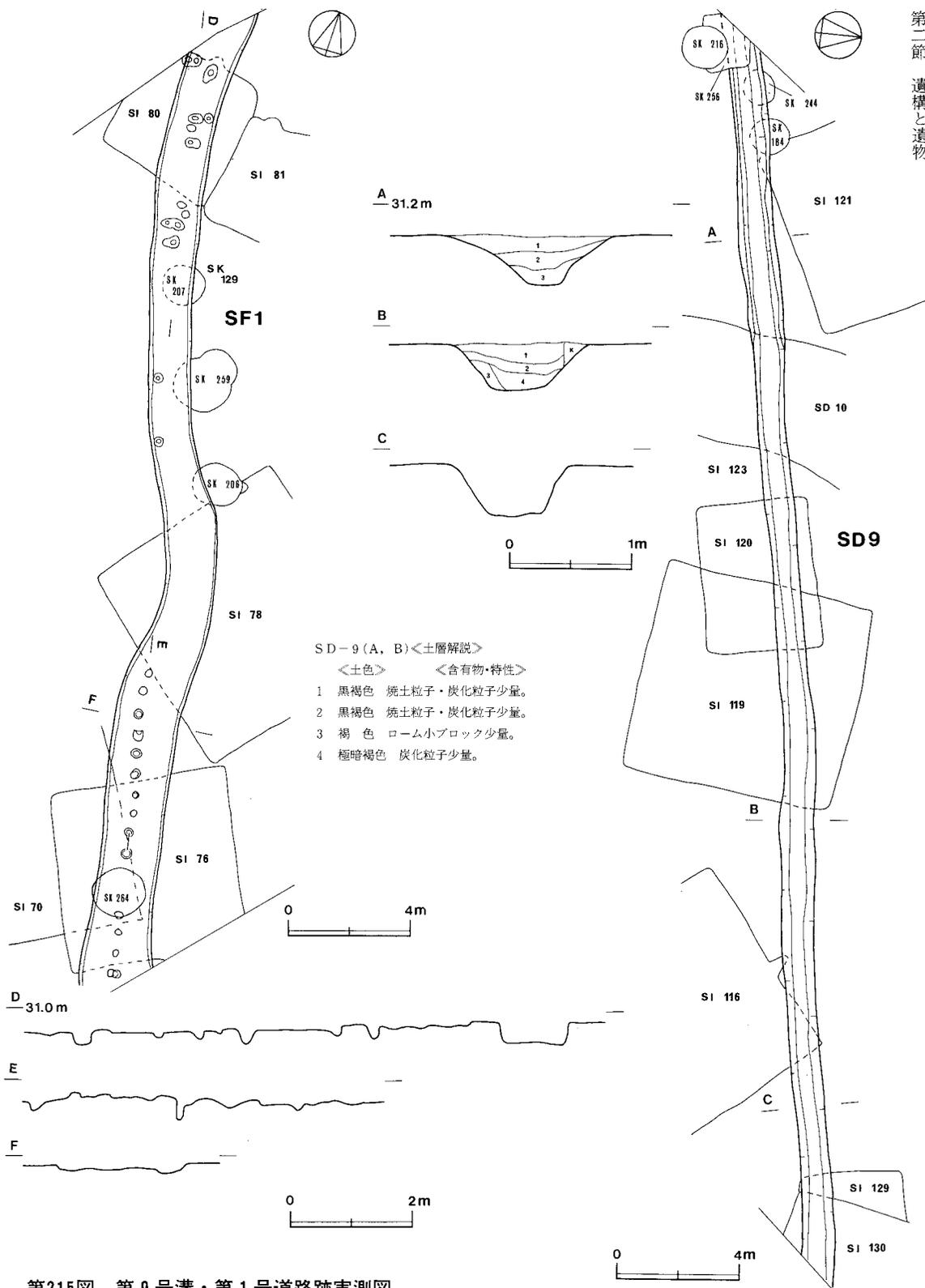
所見 第72号住居跡が本跡の上に貼床されて構築されていることから, 10世紀以前に機能していた溝と考えられる。

第9号溝 (第215図)

位置 C5d₆区からC6c₆区。**重複関係** SI116, SI119, SI120, SI123, SI129, SI130, SD10, SK216, SK244, SK256<本跡<SK184。**規模** 上幅0.92~1.15m, 下幅0.25~0.43m, 深さ41~53cm, 全長[41.50m]。**主軸方向** N-83°-E。ほぼ東西へ直線状に延びている。**高低差** 東端部は標高30.650m, 西端部は30.470m。**断面形** 逆台形状。**覆土** 自然堆積。全体的に締まりのある黒褐色土。



第214図 第7・8号溝実測図



第215図 第9号溝・第1号道路跡実測図

遺物 縄文式土器片3点、弥生式土器片30点、土師器片258点、須恵器片14点、陶器片1点、双孔円板4点が出土。土師器はほとんどが甕の胴部片で、第441図5・6の双孔円板が覆土から出土。

所見 本跡は東西の調査区域外に延びており、時期・性格を特定することはできなかった。

5 道路跡

第1号道路跡（第215図）

位置 D4a₀区からD5h₂区。**重複関係** 本跡>SI70, SI76, SI78, SI80, SK129, SK206, SK207, SK259, SK264(新旧関係不明)。**規模** 道路幅1.48～2.11m。地山を10～15cm程掘り込んでいる。全長[31.10m]。**主軸方向** N-16°-W。南北にやや蛇行しながら延びている。**高低差** 北端部は標高30.610m, 南端部は30.680m。ほぼ水平。**断面形** 皿状。**道路面** 非常に硬く踏み固められており、凹凸が激しい。

遺物 土師器片28点(うち内黒土器片1点)、須恵器片4点、双孔円板1点が出土。第441図1の坑、2の脚付坏が北端部の確認面から出土。

所見 中央部の北側と南側にピットがあり、南側のピットは14本が一直線上に並んでいる。平面形は円形・楕円形を呈しており、上端径25～35cm、深さ8～25cmで形状・規模等もほぼ類似している。ピット間の距離も30～50cmと一定しており、柵列等が伴うことが考えられる。本跡は道路最下面(地山面)から次第に道路面が高くなり、最終的にはほぼ確認面と同じレベルで使用されたものと考えられる。

6 土坑

当遺跡からは、総数260基の土坑が検出されている。それぞれの土坑は、その形状・規模・覆土及び遺物の出土状況に差異がみられる。各々の土坑の解説は一覧表の中に掲載し、その中で特色ある土坑についてはまとめて記述した。

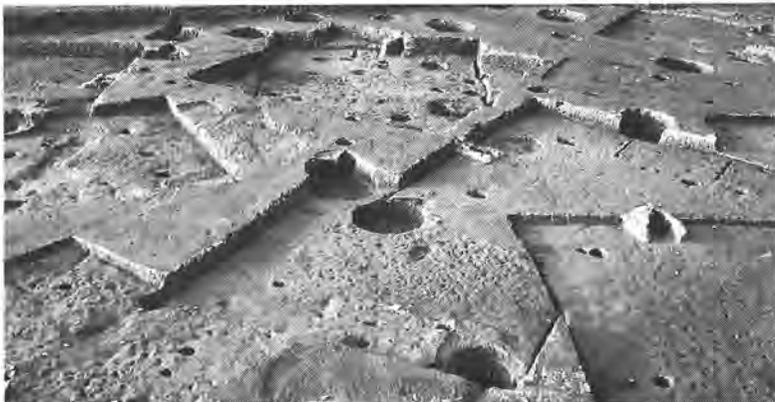


表15 森戸遺跡土坑一覽表

土坑 番号	位置	長徑方向 (長軸方向)	平面形	規 模 (cm)			壁面	底面	覆土	形態	出 土 遺 物	分類	備 考	図版 番号
				長徑	短徑	深さ								
1	H2a ₃	N-27°-E	(楕円形)	240	96	66	段状	皿状	自然	II C4b	土師器片56点, 須惠器片 3点	F		第229図
2	H2a ₅		円形	103	91	36	外傾	平坦	自然	I A2a		C		第223図
3	H2b ₇	N-76°-W	不整形	126	77	101	段状	凹凸	人為	VC2c	土師器片 5点	F	SD2重複	第229図
4	G2j ₅	N-20°-W	楕円形	119	96	16	外傾	平坦	自然	II A2a		[C]		第226図
5	G2j ₇	N-90°	長方形	130	78	28	外傾	平坦	[人為]	IVA2a	土師器片 3点	F	SD3重複	第229図
6	G2h ₇	N-90°	楕円形	207	100	39	外傾	平坦	自然	II A4a	土師器片 5点	F	SD3重複	第229図
7	G2g ₇	N-56°-W	不整形	74	44	80	段状	凹凸	自然	VC1b	土師器片 8点	F	SD2重複	第229図
9	G2j ₉	N-7°-E	隅丸長方形	165	112	15	垂直	平坦	人為	IVA3a		F		第229図
10	G2i ₉	N-10°-W	[隅丸長方形]	174	112	34	垂直	平坦	人為	IVA3a	土師器片25点	F	SI9<本跡< SK13。壁溝有	第229図
11	G3g ₁		円形	97	82	18	外傾	平坦	自然	I A1a		C		第223図
12	G2d ₆	N-15°-W	楕円形	185	87	50	垂直	平坦	自然	II A3b	土師器片 5点	F		第229図
13	G2i ₉	N-19°-W	隅丸長方形	249	179	50	垂直	平坦	自然	IVA4b	土師器片13点, 須惠器片 1点, 内耳片 1点	F	本跡>SI9, SK10。 壁溝有	第229図
14	G2b ₆	N-18°-W	楕円形	128	105	22	外傾	凹凸	自然	II A2a	土師器片25点, 須惠器片 1点, 陶器片 1点, 鉄滓 7点	[C]		第226図
15	G3c ₁		円形	104	100	13	緩斜	皿状	自然	I B2a		C		第223図
16	G3d ₁		円形	105	96	19	外傾	皿状	自然	I B2a	土師器片 5点	C		第223図
17	G3c ₃		円形	116	108	19	緩斜	皿状	自然	I B2a		C		第223図
18	G3a ₂		円形	98	95	27	外傾	皿状	自然	I B1a		C		第223図
19	G3b ₂		円形	100	98	25	外傾	皿状	自然	I B2a	土師器片 3点, 須惠器片 1点	C		第223図
20	G2i ₆	N-10°-W	[隅丸長方形]	222	165	26	外傾	平坦	人為	IVA4a	土師器片11点	F	本跡<SK52。壁 溝『有』	第230図
21	G3a ₁		円形	136	117	44	垂直	平坦	自然	I A2a	土師器片 5点, 須惠器片 1点	C	SD4重複	第223図
22	F3j ₃		円形	109	94	31	外傾	平坦	人為	I A2a		C		第223図
23	G3a ₄		円形	107	105	21	垂直	平坦	自然	I A2a		C		第223図
24	G3b ₄	N-45°-E	楕円形	145	104	25	外傾	平坦	自然	II A2a	土師器片 7点	[C]		第226図
25	G3a ₃	N-14°-W	[長方形]	[153]	87	10	外傾	平坦	自然	IVA3a		F	本跡>SI20	第230図
26	F3h ₂		隅丸方形	226	201	52	垂直	平坦	自然	III A4b	土師器片105点, 須惠器片 2点, 陶器片 1点	F	壁溝『有』	第230図
27	F3g ₂	N-87°-W	隅丸長方形	126	91	34	外傾	平坦	自然	IVA2a	須惠器片 2点	F	本跡>SK28	第223図
28	F3g ₂		[円形]	136	126	14	緩斜	凹凸	自然	I B2a	土師器片 8点	C	本跡<SK27	第223図
29	F3h ₄		円形	92	91	33	外傾	平坦	自然	I B1a		C		第224図
30	F3h ₆		円形	130	116	31	外傾	平坦	自然	I A2a	土師器片10点	C	本跡>SI26	第224図
31	H2b ₃		円形	105	93	40	段状	皿状	自然	I A2a		C		第224図
32	F3g ₅	N-80°-E	楕円形	131	91	26	外傾	平坦	自然	II A2a		[C]		第226図
33	G2h ₃		(円形)	91	(70)	9	外傾	平坦	自然	I B1a	土師器片15	C		第224図
34	F3g ₅		円形	116	108	65	外傾	皿状	人為	I B2b		F		第230図
35	G2h ₃		隅丸方形	150	125	25	外傾	平坦	自然	III A3a	土師器片10点, 陶器片 1点	F		第230図
37	F3f ₁		円形	100	95	19	外傾	凹凸	自然	I B2a		C	SD6重複	第224図
38	F3e ₆	N-47°-E	不整形	114	102	37	外傾	平坦	自然	VA2a	須惠器片 1点	F	本跡>SI30	第230図
39	F3e ₃		円形	113	108	42	外傾	平坦	人為	I A2a	土師器片 4点	C	本跡<SI30	第224図
41	G2h ₄		円形	96	91	12	外傾	平坦	自然	I A1a	土師器片 1点	C		第224図
42	F3g ₇		円形	100	89	33	外傾	平坦	自然	I A2a	土師器片11点, 土師質土器片 1点	C	本跡>SI29	第224図

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模 (cm)			壁面	底面	覆土	形態	出 土 遺 物	分類	備 考	図版 番号
				長径	短径	深さ								
43	F3d ₈		円形	98	86	24	緩斜	皿状	自然	I B1a		[C]		第226図
44	F3c ₃	N-81°-E	長方形	128	65	18	外傾	平坦	自然	IVB2a		F	SD6重複	第230図
45	F3c ₆		円形	109	108	18	外傾	平坦	自然	I A2a		C		第224図
46	E3j ₆	N-35°-E	[楕円形]	227	[148]	54	垂直	平坦	人為	IIA4b	土師器片 3点	F	SD6重複	第231図
47	E3j ₉	N-22°-W	長方形	305	89	19	外傾	凹凸	自然	IVB5a		F		第231図
48	F3b ₀		円形	76	70	62	段状	傾斜	自然	I C1b		F		第231図
49	G2h ₀		円形	79	72	48	段状	凹凸	自然	I C1a	双孔円板片 1点	F		第231図
50	G2i ₆		円形	85	73	31	外傾	皿状	自然	I B1a		F		第231図
51	G2g ₇		円形	96	80	78	段状	傾斜	自然	I C1b	土師器片 3点	F	SD2重複	第231図
52	G2j ₀	N-88°-E	[隅丸長方形]	[173]	121	24	垂直	平坦	人為	IVA3a	土師器片 3点	F	本跡>SK20-62。 壁溝「有」	第230図
53	E4c ₁	N-17°-E	楕円形	168	125	206	垂直	平坦	人為	IID3c		A	Tビット	第216図
54	G2g ₆	N-86°-E	隅丸長方形	186	86	11	緩斜	平坦	自然	IVB3a	土師器片 7点	F		第231図
55	E4d ₈		円形	135	132	35	外傾	平坦	自然	I A2a	土師器片33点,須惠器片 1点, 陶器片 2点, 双孔円板片 1点	C		第224図
56	E4f ₁	N-42°-W	楕円形	75	58	44	垂直	皿状	人為	II B1a	土師器片 8点	F	本跡>SI50	第231図
57	F2j ₆	N-48°-E	[楕円形]	87	[85]	28	垂直	皿状	自然	II B1a	土師器片 4点	F	SK63重複	第231図
58	F2j ₀		円形	105	96	26	外傾	皿状	自然	I B2a	土師器片 6点	C		第224図
60	G3d ₃	N-2°-E	[楕円形]	(141)	131	11	緩斜	平坦	自然	II B2a	土師器片 9点, 須惠器片 1点	F		第231図
61	G3d ₂		円形	74	71	6	外傾	平坦	自然	I A1a	土師器片 2点	F		第231図
62	G2j ₀	N-90°	[隅丸長方形]	[101]	76	17	外傾	平坦	人為	IVA2a	土師器片 1点	F	本跡<SK52	第230図
63	G2a ₆	N-35°-E	[隅丸長方形]	119	[81]	30	緩斜	平坦	人為	IVB2a		F	SK57重複	第231図
64	F3j ₅	N-11°-E	楕円形	95	69	13	段状	凹凸	人為	II C1a		F		第231図
65	F3j ₃		円形	76	72	14	外傾	平坦	人為	I A1a		F		第232図
66	F3f ₁		円形	72	65	23	外傾	凹凸	人為	I B1a		F		第232図
67	E4e ₁	N-88°-W	不整形	97	69	28	緩斜	皿状	自然	V B1a	土師器片25点,須惠器片 2点	F		第232図
68	F3h ₇	N-74°-W	不整楕円形	96	76	33	外傾	皿状	人為	II A1a		F	本跡>SI28・29	第232図
70	E4c ₁		円形	125	120	50	垂直	平坦	自然	I A2b		C	本跡>SD8。 SI54,SD7重複	第224図
71	E4b ₁	N-8°-E	楕円形	226	162	174	外傾	平坦	自然	IID4c	土師器片 5点, 須惠器片 1点, 炭化材	A	Tビット	第216図
73	D4i ₇	N-31°-W	楕円形	274	129	9	緩斜	平坦	自然	II B4a	土師器片14点	F		第232図
74	D4i ₆		円形	123	113	10	緩斜	皿状	自然	I B2a	土師器片18点	C		第224図
76	D4g ₆	N-2°-W	楕円形	135	100	22	外傾	平坦	自然	II B2a	土師器片 4点	[C]		第226図
77	D4f ₇		円形	101	90	16	緩斜	皿状	自然	I B2a		C		第224図
79	D4f ₆	N-2°-E	楕円形	176	142	55	外傾	凹凸	人為	II B3b	土師器片20点,須惠器片 1点	F		第232図
80	D4f ₅		円形	83	76	29	外傾	平坦	人為	I A1a	土師器片12点	F		第232図
81	D4f ₄		円形	83	75	33	外傾	皿状	人為	I B1a	土師器片59点	F		第232図
82	D4e ₀	N-67°-E	楕円形	172	128	24	外傾	平坦	自然	II A3a	土師器片48点,双孔円板片 1点	F	SI73重複	第232図
83	D4e ₀		円形	148	134	25	外傾	傾斜	人為	I A2a	土師器片37点	C	SK99重複	第224図
84	D4e ₀	N-86°-E	[楕円形]	[130]	95	14	段状	皿状	人為	II C2a	土師器片30点,炭化材	F	SK99重複	第232図
85	D4e ₀	N-24°-W	楕円形	165	129	32	緩斜	平坦	人為	II B3a	弥生式土器片 1点, 土師器片14点	F		第232図
86	D4d ₆		円形	73	63	20	緩斜	皿状	自然	I B1a	土師器片 1点	F		第232図
87	D4d ₀	N-23°-E	楕円形	135	108	19	緩斜	凹凸	自然	II B2a	土師器片31点	F		第232図

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)			壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	分類	備考	図版番号
				長径	短径	深さ								
89	D4c ₀		円形	133	124	23	外傾	平坦	人為	I A2a	土師器片22点	C	SI74重複	第224図
90	E4c ₁	N-12'-W	楕円形	176	137	160	段状	皿状	自然	II D3c	土師器片1点	A	Tピット	第216図
91	E4b ₃	N-75'-W	楕円形	95	77	16	垂直	平坦	自然	II A1a		F		第232図
92	E4b ₃	N-33'-W	楕円形	72	56	13	外傾	平坦	人為	II A1a		F		第232図
94	D4c ₀		[円形]	153	(68)	55	垂直	平坦	人為	I A3b	土師器片18点, 双孔円板片2点	B		第217図
95	D4d ₀		円形	189	183	55	垂直	平坦	人為	I A3b	土師器片83点	B	SI74重複	第217図
96	D4d ₀		不整形	110	81	79	外傾	平坦	人為	VC2b		F	SI74重複	第233図
97	D4c ₀		[円形]	82	81	12	緩斜	皿状	人為	I B1a	土師器片8点	F	SI74重複	第233図
98	D4c ₀		円形	75	65	11	外傾	皿状	自然	I B1a	土師器片6点	F		第233図
99	D4e ₀		円形	114	(75)	85	段状	皿状	人為	I C2b	弥生式土器片1点, 土師器片75点	F	SK83・84重複	第232図
104	B6d ₀	N-13'-E	不整形	100	70	35	段状	凹凸	自然	VC2a		F		第233図
107	B6e ₇	N-4'-W	隅丸長方形	104	85	47	段状	凹凸	自然	IVC2a		F		第233図
108	B6d ₀		[円形]	[173]	170	93	垂直	平坦	自然	I A3b		B	本跡>SD11	第217図
109	B6b ₈		円形	62	59	26	外傾	皿状	自然	I B1a		F		第233図
110	B6b ₈		円形	78	66	55	段状	凹凸	人為	I C1b		F		第233図
111	B6c ₇		円形	74	68	46	段状	凹凸	自然	I C1a		F		第233図
112	B6c ₀		円形	73	73	4	外傾	平坦	不明	I B1a		F		第233図
113	B6b ₀		[不整形]	94	(48)	15	緩斜	凹凸	人為	VB1a		F		第233図
114	B6c ₀	N-87'-W	楕円形	239	124	28	垂直	平坦	自然	II A4a		F	SK116重複	第233図
115	B6c ₇	N-74'-E	[不整形]	282	(214)	37	外傾	平坦	自然	VA4a	土師器片32点	F	SD11重複	第233図
116	B6b ₇	N-78'-E	不整形	306	198	32	外傾	凹凸	自然	VB5a		F	SK114重複	第233図
117	B6b ₇	N-9'-E	不整形楕円形	146	102	43	外傾	凹凸	自然	II C2a		F		第233図
118	B6a ₇	N-4'-W	不整形楕円形	316	216	55	外傾	平坦	自然	II A5b	土師器片23点, 須惠器片1点, 鉄鏝1点	F	SK121重複	第234図
119	B6a ₈	N-87'-W	[不整形]	230	[184]	43	外傾	凹凸	自然	VA4a	土師器片4点, 須惠器片1点, 陶器片2点	F	SK151・152重複	第234図
120	B6a ₈	N-30'-W	不整形	190	150	29	外傾	凹凸	人為	VA3a	土師器片2点, 陶器片3点	F		第234図
121	B6a ₈	N-48'-W	楕円形	84	68	41	外傾	皿状	自然	II C1a		F	SK118重複	第234図
122	B6b ₈		円形	63	59	25	垂直	平坦	人為	I A1a	古銭1枚	F		第234図
123	B7c ₂	N-16'-E	楕円形	293	243	80	段状	平坦	人為	II A4b	弥生式土器片6点, 土師器片25点, 陶器片4点, 石器(メノウ片)1点	F	SK11重複	第234図
125	B6i ₈		円形	178	150	43	外傾	平坦	人為	I A3a	土師器片3点	B	SI133<本跡<SK126	第217図
126	B6i ₇		円形	165	150	30	外傾	平坦	人為	I A3a	縄文式土器片2点, 弥生式土器片16点, 土師器片58点, 石器4点	B	SI133<本跡<SK125	第217図
127	B6e ₀	N-18'-W	隅丸長方形	193	109	27	緩斜	平坦	自然	IVB3a	土師器片15点	F	SI155重複	第234図
128	B6h ₀	N-7'-W	不整形長方形	254	(205)	34	外傾	平坦	人為	IVA4a		F	SI152, SK231重複	第235図
129	D5c ₁		[円形]	155	(94)	24	垂直	平坦	人為	I A3a	土師器片10点	B	本跡<SF1, SK207, 壁溝『有』	第217図
130	A6i ₀	N-84'-E	不整形楕円形	116	81	67	段状	平坦	自然	II C2b	土師器片13点	F		第234図
131	B6f ₄	N-17'-W	不整形	336	201	142	内傾	平坦	自然	VA5c	弥生式土器片2点, 土師器片23点	D	本跡>SI147, 地下式壇	第227図
132	B6e ₀	N-5'-W	[長方形]	[210]	177	42	垂直	平坦	人為	IVA4a	縄文式土器片2点, 弥生式土器片4点, 土師器片102点, 陶器片2点, 不明鉄2点	F	SI150, SK156・157重複	第235図
133	B6e ₃	N-4'-W	[長方形]	197	(183)	32	垂直	平坦	人為	IVA3a	弥生式土器片5点, 土師器片203点, 須惠器片4点, 陶器片1点, 古銭1枚, 釘1点, 不明鉄1点	F	本跡>SK136, SI150重複	第235図
134	B6f ₀		円形	163	146	43	垂直	凹凸	人為	I A3a	弥生式土器片2点, 土師器片43点	B		第217図
135	B6f ₀		円形	163	150	55	垂直	皿状	不明	I A3b	弥生式土器片7点, 土師器片39点, 須惠器片1点, 白玉1点, 古銭1枚, 不明鉄1点	B	壁溝『有』	第217図
136	B6d ₁	N-78'-E	楕円形	128	78	47	垂直	平坦	人為	II A2a	石鏝1点	F	本跡<SK133	第235図

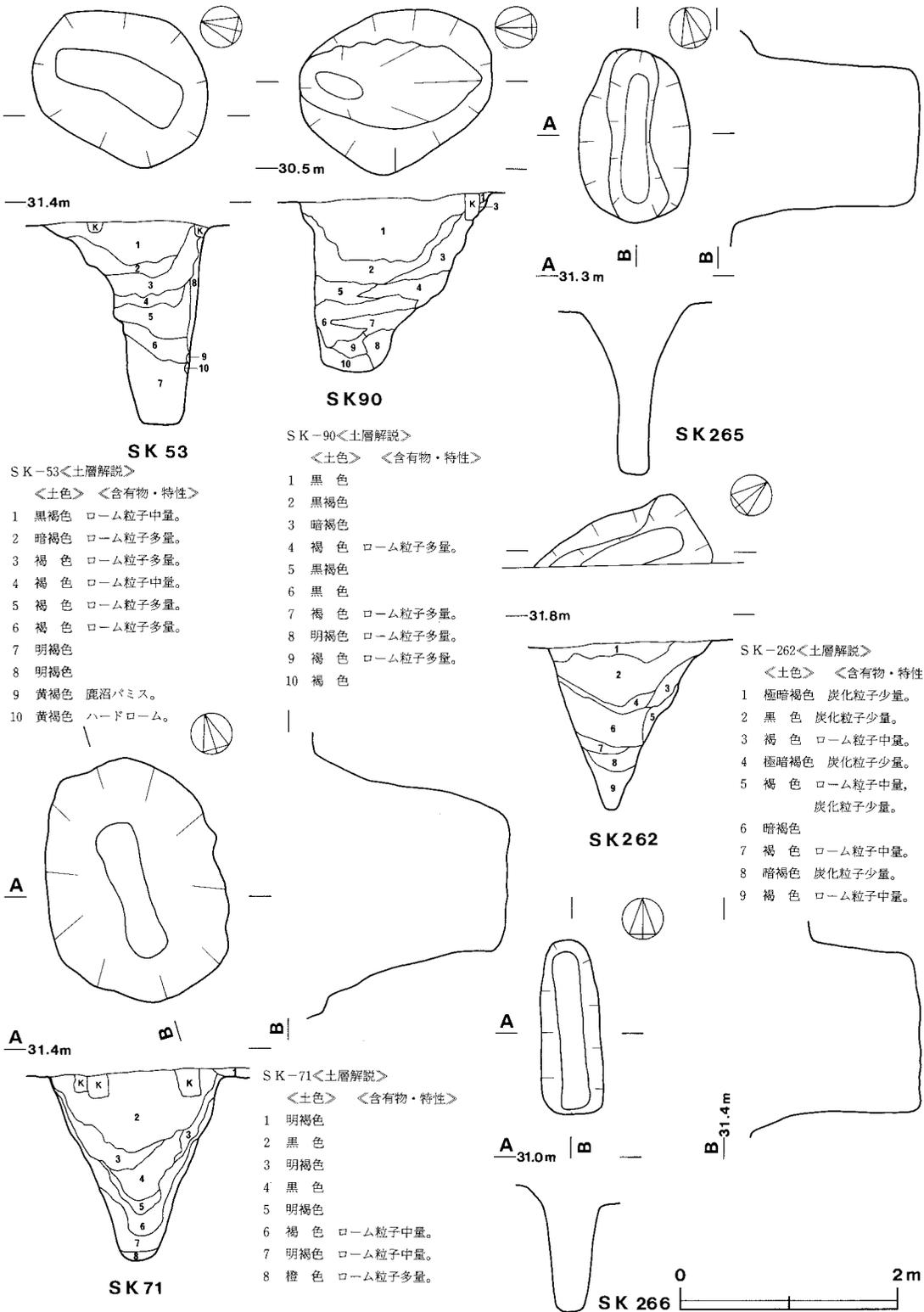
土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)			壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	分類	備考	図版番号
				長径	短径	深さ								
137	B6f ₁		[円形]	[118]	[97]	9	垂直	凹凸	人為	IA2a	古銭1枚	E	墓墳	第228図
138	B6f ₂	N-13°-W	長方形	126	86	9	外傾	平坦	自然	IVA2a		F	本跡>SI147	第235図
139	B6f ₃		円形	100	96	3	[垂直]	平坦	人為	IA2a		E	墓墳	第228図
140	B6f ₄		円形	98	96	31	垂直	皿状	人為	IA1a	土師器片8点	E	墓墳。壁溝『有』	第228図
141	B6f ₅		円形	86	80	12		平坦	人為	IA1a	古銭6枚, 煙管1本, 釘1点	E	墓墳	第228図
142	B7d ₃		円形	88	85	-		平坦	人為	IA1a	弥生式土器片2点, 土師器片36点, 須惠器片2点, 陶器片1点	E	墓墳	第228図
143	B7d ₄		円形	89	88	-		平坦	人為	IA1a	土師器片19点	E	墓墳	第228図
144	B7d ₅		円形	89	84	-		平坦	人為	IA1a	弥生式土器片1点, 土師器片16点, 須惠器片1点, 陶器片1点	E	墓墳	第228図
145	B7d ₂	N-0°	楕円形	95	57	26	外傾	平坦	人為	IIA1a		F		第235図
146	B6g ₀	N-1°-W	楕円形	150	96	20	外傾	皿状	人為	IIA3a		F	SK147重複	第235図
147	B6g ₀	N-60°-E	[楕円形]	160	(138)	30	外傾	平坦	人為	IIA3a	土師器片9点, 陶器片1点	F	SI156, SK146・148重複	第235図
148	B6g ₀	N-80°-E	楕円形	174	112	20	緩斜	傾斜	自然	IIB3a	土師器片28点	F	SK147重複	第235図
149	B7g ₁	N-32°-E	不整形	185	158	41	緩斜	凹凸	人為	VC3a	弥生式土器片5点, 土師器片31点, 須惠器片2点	F	SI158重複	第235図
150	B6g ₆	N-56°-E	楕円形	156	125	18	緩斜	凹凸	人為	IIB3a	弥生式土器片1点, 土師器片8点, 陶器片1点	F	本跡>SI148	第235図
151	A6j ₈	N-60°-W	不整形	80	60	39	外傾	皿状	自然	VC1a		F	SK119重複	第234図
152	B6a ₇	N-82°-W	不整形	71	48	35	緩斜	傾斜	自然	VC1a		F	SK119重複	第234図
154	B7f ₂		円形	80	69	28	緩斜	凹凸	人為	IB1a		F	SI161重複	第235図
155	B7f ₂		円形	98	89	53	段状	凹凸	人為	IC1b	弥生式土器片2点, 土師器片61点, 須惠器片2点, 陶器片1点	F	SI161重複	第236図
156	B6e ₆	N-6°-W	[長方形]	211	(74)	20	垂直	平坦	人為	IVA4a		F	SI150, SK132重複	第235図
157	B6e ₆		円形	62	54	22	外傾	皿状	人為	IB1a		F	SI150, SK132重複	第236図
159	B6b ₀		円形	92	84	38	外傾	段状	人為	IA1a		F	SI168重複	第236図
160	B6b ₀		円形	65	62	30	外傾	皿状	人為	IB1a		F	SI168重複	第236図
161	B6a ₀	N-78°-E	楕円形	79	65	14	緩斜	皿状	人為	IIB1a		F	SI168重複	第236図
162	B6a ₀		円形	70	68	21	外傾	平坦	人為	IA1a		F	SI168重複	第236図
163	B6a ₀	N-65°-E	不整形	117	96	15	外傾	傾斜	人為	VB2a		F	SI168重複	第236図
164	B6a ₀	N-61°-E	楕円形	162	105	45	外傾	平坦	人為	IIA3a	土師器片16点, 須惠器片2点, 土師質土器片1点	F	SI173重複	第236図
165	B7e ₃		円形	60	53	20	緩斜	傾斜	自然	IB1a		F	SI162重複	第236図
166	B6b ₅	N-90°	[不整楕円形]	269	142	42	外傾	皿状	人為	IIB4a	弥生式土器片6点, 土師器片11点, 土師質土器片1点	F	SK180重複	第236図
167	B6i ₆		円形	182	175	64	外傾	平坦	自然	IA3b	弥生式土器片5点, 土師器片20点	B	本跡>SK168	第217図
168	B6i ₆		[円形]	127	(54)	35	外傾	平坦	自然	IA2a	土師質土器片2点, 陶器片1点	F	本跡<SK167・175	第217図
169	B6i ₇	N-82°-W	長方形	117	95	16	外傾	皿状	人為	IVB2a	土師器片6点, 土師質土器片1点, 陶器片1点, 磁石1点, 骨片, 鏝49点	F	本跡>SI133。壁溝有	第236図
170A	B6i ₁	N-69°-E	楕円形	89	67	18	外傾	平坦	自然	IIB1a		F	SI136, SK171重複	第236図
170B	B6i ₁	N-0°	楕円形	78	58	20	外傾	平坦	自然	IIB1a		F	SI136重複	第236図
171	B6i ₆	N-0°	[楕円形]	127	72	21	外傾	平坦	人為	IIA2a	縄文式土器片2点, 弥生式土器片12点, 土師器片81点	F	SI136, SK170A重複	第236図
172	B6i ₄		円形	59	59	60	外傾	平坦	自然	IC1b	土師器片39点	F		第236図
173	B6i ₃		楕円形	77	65	35	外傾	凹凸	自然	IIA1a	土師器片13点	F		第236図
174	B6i ₇		円形	148	145	38	外傾	平坦	人為	IA2a	土師器片7点	B	SI133重複	第218図
175	B6i ₇		円形	163	153	87	垂直	平坦	自然	IA3b	弥生式土器片8点, 土師器片57点, 須惠器片1点, 双孔円板片1点	B	本跡>SK168。SI133重複	第217図
176	B6h ₇	N-31°-E	不整楕円形	155	134	25	外傾	平坦	人為	IIB3a		F	SK177重複	第236図
177	B6h ₇	N-83°-E	[長方形]	216	96	28	外傾	平坦	人為	IVA4a	土師器片6点	F	SK176重複	第236図

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)			壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	分類	備考	図版番号
				長径	短径	深さ								
178	B6h ₇		円形	109	96	22	外傾	皿状	自然	I B2a	弥生式土器片 2点, 土師器片19点	C		第225図
179	C6B ₃		円形	175	170	44	垂直	平坦	人為	I A3a	縄文式土器片 2点, 弥生式土器片 1点, 土師器片113点, 須惠器片 6点	B		第218図
180	B6h ₇	N-85°-E	[不整楕円形]	(277)	98	52	外傾	皿状	人為	II B4b		F	SI133, SK166 重複	第236図
181	C5g ₆		円形	67	63	32	緩斜	平坦	自然	I B1a	弥生式土器片 2点, 土師器片20点	F		第236図
182	C5a ₄		[円形]	109	58	37	垂直	平坦	自然	I A2a	弥生式土器片 2点, 土師器片 4点	C		第225図
183	C5b ₈		円形	118	104	17	外傾	平坦	自然	I A2a	土師器片 6点	C		第225図
184	C5d ₆		[円形]	117	[112]	17	緩斜	凹凸	自然	I B2a	弥生式土器片 2点, 土師器片32点, 須惠器片 1点	C	本跡 > SI121, SD9	第225図
185	C5d ₇		[円形]	79	(75)	28	緩斜	平坦	自然	I B1a		F	SI109, SK209 重複	第236図
186	C5e ₈		円形	200	195	80	垂直	平坦	人為	I A4b	弥生式土器片 2点, 土師器片187点, 双孔円板片 1点	B		第218図
187	C5e ₉		円形	110	107	24	緩斜	皿状	自然	I B2a	土師器片 7点	C		第225図
188	C5g ₇		円形	64	58	43	段状	皿状	人為	I C1a		F		第237図
189	C5f ₈		円形	185	176	46	外傾	平坦	自然	I A3a	弥生式土器片 5点, 土師器片217点, 釘 1点, 礫21点	B		第218図
190	C5f ₇		円形	192	171	81	垂直	平坦	人為	I A3b	弥生式土器片25点, 土師器片82点, 須惠器片 1点	B	壁溝「有」	第218図
191	C6b ₃		円形	159	140	16	緩斜	平坦	人為	I B3a		F		第237図
192	C6e ₁	N-40°-W	長楕円形	246	62	90	段状	凹凸	人為	II C4b	土師器片 5点	F		第237図
193	C5h ₈		円形	140	134	20	外傾	皿状	人為	I A2a	弥生式土器片 2点, 土師器片53点	F	SI105重複	第237図
194	C5j ₆		円形	150	140	52	垂直	平坦	人為	I A3b	弥生式土器片 7点, 土師器片143点	B	本跡 > SK215, SI102・105重複, 壁溝有	第218図
195	C5f ₁		円形	100	97	22	外傾	皿状	自然	I B2a	土師器片27点	C		第225図
196	C5g ₄		円形	150	148	57	垂直	平坦	自然	I A3b	縄文式土器片 1点, 弥生式土器片 3点, 土師器片85点	B		第218図
197	C5g ₄		円形	155	152	56	内彎	平坦	自然	I A3b	土師器片75点, 須惠器片 2点	B		第218図
198	C5i ₈		円形	178	164	60	内彎	平坦	自然	I A3b	弥生式土器片4点, 土師器片27点	B	SI102重複	第218図
199	C5h ₃		円形	169	150	31	垂直	平坦	自然	I A3a	縄文式土器片 2点, 土師器片44点, 須惠器片 1点	B	SI97重複	第219図
200	D5a ₁	N-18°-E	楕円形	146	112	26	外傾	平坦	自然	II A2a	土師器片41点	F	SI81・82重複	第237図
201	D5a ₂		円形	150	140	21	外傾	平坦	人為	I A3a	弥生式土器片 2点, 土師器片71点	B	SI82・83重複	第219図
202	D5c ₂		円形	199	191	52	内彎	平坦	人為	I A3b	弥生式土器片 1点, 土師器片291点, 礫 1点	B	SI83重複	第219図
203	C5h ₃		隅丸方形	167	157	56	外傾	平坦	人為	III A3b	土師器片50点, 須惠器片 3	F		第237図
204	D5d ₂		円形	130	128	52	垂直	平坦	自然	I A2b	土師器片32点	F	SI78重複	第237図
205	D5e ₂	N-12°-W	楕円形	147	77	12	外傾	平坦	人為	II B2a	弥生式土器片 1点, 土師器片12点	F	SI78重複	第237図
206	D5d ₁		円形	150	148	25	垂直	平坦	自然	I A3a	弥生式土器片 7点, 土師器片17点	B	SI78, SF1重複	第219図
207	D5c ₁		円形	136	130	38	垂直	平坦	人為	I A2a	土師器片30点	B	本跡 > SK129, SF1重複	第217図
208	C6b ₆		円形	130	126	40	垂直	平坦	自然	I A2a	弥生式土器片 1点, 土師器片80点, 須惠器片 6点, 双孔円板片 1点	B	SI130重複	第219図
209	C5d ₇		不整円形	123	105	26	外傾	平坦	自然	I A2a	弥生式土器片 1点, 土師器片 1点	C	本跡 > SI109, SK185重複	第225図
210	C6d ₃		円形	174	164	51	外傾	平坦	人為	I A3b	縄文式土器片 1点, 弥生式土器片 5点, 土師器片65点, 須惠器片3点, 礫1点	B	SI116重複	第219図
211	C5e ₃		[円形]	132	(104)	16	外傾	平坦	自然	I A2a	土師器片 8点	C	SI108重複	第225図
212	E4a ₇		円形	135	127	27	緩斜	平坦	自然	I B2a	土師器片68点	C		第225図
213	C5f ₆	N-75°-W	楕円形	126	95	21	緩斜	皿状	人為	II B2a		[C]		第226図
214	C5h ₇		円形	153	144	75	垂直	平坦	人為	I A3b	弥生式土器片 1点, 土師器片32点	B	SI105重複, 壁溝有	第219図
215	C5j ₈		[円形]	160	143	48	内彎	平坦	人為	I A3a	弥生式土器片 1点, 土師器片19点	B	本跡 < SK194, SK102重複	第219図
216	C5d ₆		円形	148	144	59	内彎	平坦	自然	I A2b	縄文式土器片1点, 弥生式土器片1点, 土師器片32点, 双孔円板片1点, 炭化材	B	本跡 < SD9, SK256, 壁溝有	第220図
217	D5a ₇		円形	179	172	38	内彎	平坦	人為	I A3a	土師器片 8点	B	SI90重複	第219図

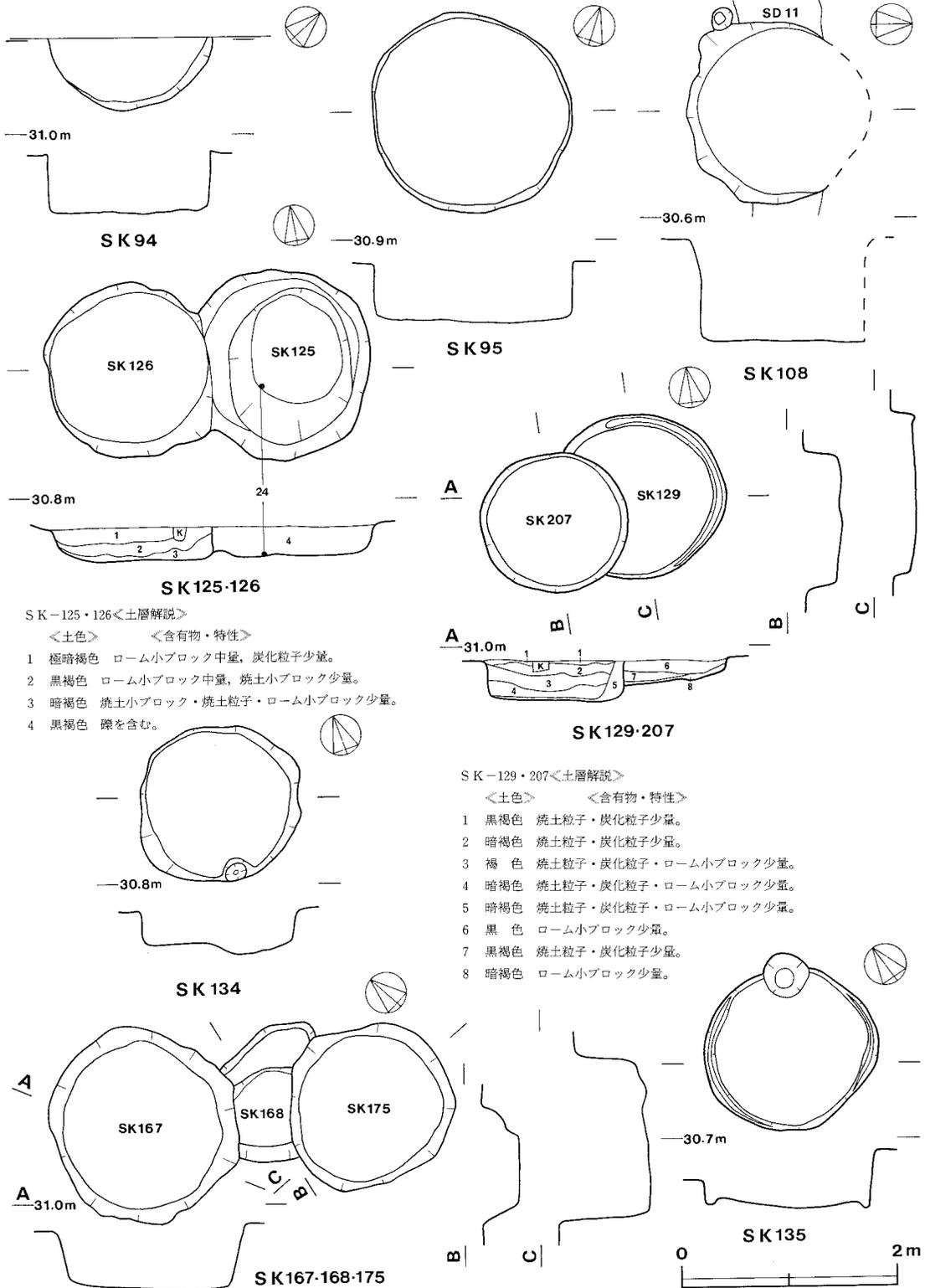
土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模 (cm)			壁面	底面	覆土	形態	出 土 遺 物	分類	備 考	図版 番号
				長径	短径	深さ								
218	D5b ₄		円形	124	121	37	垂直	平坦	自然	I A2a	弥生式土器片2点, 土師器片7点	F	SI89重複	第237図
219	C6g ₁		円形	183	168	42	垂直	平坦	不明	I A3a	弥生式土器片2点, 土師器片7点	B	SI111・112重複	第220図
220	C6g ₁		円形	122	113	62	外傾	平坦	人為	I A2b	土師器片5点, 古銭55枚, 釘5本, 人骨	E	本跡>SI111。 墓塚	第228図
221	A6i ₀		円形	114	109	3	[垂直]	平坦	人為	I A2a	土師質土器片5点, 磁器片2点, 煙管1本	E	墓塚	第228図
222	B6f ₁	N-76'-E	長方形	123	75	10	緩斜	平坦	人為	IVB2a		F	本跡>SI147	第237図
223	B6e ₃		円形	118	116	23	外傾	平坦	人為	I A2a	古銭3枚	E	墓塚	第228図
224	B6e ₃		円形	172	163	44	垂直	平坦	自然	I A3a	弥生式土器片14点, 土師器片69点, 須惠器片2点, 釘2点	B		第220図
225	B6e ₃	N-53'-W	楕円形	126	105	20	外傾	平坦	人為	II A2a	土師器片8点	[C]		第226図
226	B6f ₁		[円形]	136	(43)	30	垂直	平坦	人為	I A2a	弥生式土器片2点, 土師器片11点, 陶器片2点, 不明鉄1点	F	SK234重複	第228図
227	B5j ₀	N-17'-W	不整形	(64)	(25)	30	垂直	平坦	人為	V A1a	人骨, 古銭7枚	E	本跡>SI138。 墓塚	第228図
228	B6j ₁		円形	174	164	39	垂直	平坦	人為	I A3a	弥生式土器片3点, 土師器片80点	B	本跡<SI138	第220図
229	B6h ₃	N-58'-W	[楕円形]	120	91	34	外傾	平坦	自然	II B2a	弥生式土器片7点, 土師器片20点	F	SI133重複	第237図
230	B6f ₁		円形	145	135	37	外傾	平坦	人為	I A2a	弥生式土器片9点, 土師器片17点, 須惠器片1点	B	本跡>SI148	第220図
231	B6h ₄		不整形円形	107	98	21	緩斜	平坦	人為	I B2a		F	本跡>SI148。 SI152, SK128重複	第237図
233	B6e ₃	N-29'-E	[楕円形]	(68)	45	42	緩斜	傾斜	人為	II B1a		F		第237図
234	B6f ₁		[円形]	98	(54)	5	垂直	平坦	人為	I A1a		E	本跡>SI155。 SK226重複。墓塚	第228図
235	B6e ₃		円形	120	114	8	外傾	平坦	人為	I A2a	古銭2枚	E	壁溝『有』。墓塚	第228図
236	B6e ₃		円形	89	85	8	垂直	平坦	人為	I A1a	煙管1本, 古銭2枚	E	墓塚	第228図
237	B6d ₄		円形	89	85	18	垂直	平坦	人為	I A1a	灯明具1点, 古銭3枚	E	墓塚	第228図
238	B6g ₁		不整形円形	154	134	26	外傾	平坦	自然	I A3a	弥生式土器片11点, 土師器片71点	F		第237図
239	B6i ₈		不整形円形	136	121	23	垂直	平坦	人為	I A2a		F		第237図
241	C3h ₀		[円形]	161	(128)	37	内傾	平坦	人為	I A3a	縄文式土器片1点, 土師器片29点	B	本跡>SI110	第220図
242	B6b ₀		円形	132	126	19	外傾	平坦	人為	I A2a	弥生式土器片1点, 土師器片1点, 陶磁器片6点	E	本跡>SI168。墓塚	第228図
243	B7a ₁		円形	116	108	31	外傾	平坦	人為	I A2a	土師器片2点, 陶磁器片10点, 古銭4枚, 骨片	E	墓塚	第228図
244	C5d ₄		[円形]	[120]	[111]	21	外傾	平坦	自然	I A2a	弥生式土器片6点, 土師器片16点	C	本跡<SD9。 SK256	第225図
245	D5b ₇		[円形]	177	[176]	61	内傾	傾斜	人為	I A3b	弥生式土器片1点, 土師器片63点	B	本跡<SK247	第220図
246	D5c ₁		円形	193	183	(11)	外傾	平坦	不明	I A3a	土師器片9点, 鉄滓2点	B	SI86・87重複	第220図
247	D5b ₇		円形	155	153	51	[垂直]	平坦	人為	I A3b	土師器片16点	B	本跡>SK245	第220図
248	C6e ₁		円形	142	140	43	[垂直]	傾斜	[人為]	I A2a	弥生式土器片3点, 土師器片19点	B	本跡<SI114・ 115	第221図
249	C6f ₁		円形	136	130	21	垂直	平坦	人為	I A2a	弥生式土器片1点, 土師器片15点	B	SI115重複。壁溝有	第221図
250	C6f ₁		円形	134	128	62	垂直	平坦	人為	I A2b	弥生式土器片1点, 土師器片6点	B	SI115, SK270 重複	第221図
251	D5e ₁		円形	133	127	24	外傾	平坦	自然	I A2a	弥生式土器片1点, 土師器片46点	C		第225図
252	C5j ₂		円形	162	151	48	外傾	平坦	自然	I A3a	弥生式土器片2点, 土師器片78点	B	SI97重複	第221図
253	D5c ₁		円形	156	142	32	垂直	平坦	自然	I A3a	土師器片203点	B		第221図
254	D5d ₁		円形	133	131	55	外傾	平坦	自然	I A2b	土師器片81点	B	本跡<SK255。 壁溝有	第221図
255	D5d ₁		[円形]	133	126	42	垂直	平坦	人為	I A2a	弥生式土器片2点, 土師器片63点	B	本跡<SK254	第221図
256	C5d ₄	N-89'-W	[長方形]	176	153	36	外傾	平坦	自然	IV A3a	土師器片7点	F	SD9>本跡> SK216, SK244重複	第220図
257	D5c ₂		円形	133	118	16	外傾	皿状	自然	I B2a		C	本跡>SK258	第225図
258	D5c ₂		円形	140	140	40	内傾	平坦	人為	I A2a	弥生式土器片5点, 土師器片53点	B	本跡<SK257。 壁溝『有』	第221図
259	D5c ₁	N-25'-E	楕円形	219	178	23	外傾	平坦	自然	II A4a		F	SF1重複	第238図

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)			壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	分類	備考	図版 番号
				長径	短径	深さ								
260	C5j ₁	N-34'-W	楕円形	130	69	122	段状	凹凸	自然	II C2c	弥生式土器片 2点, 土師器片 64点	F	本跡>SD10, SI103重複	第238図
261	E4a ₁		円形	138	120	89	内湾	平坦	人為	I A2b	土師器片 76点	B	SI64, SD7重複	第221図
262	E4c ₁	[N-18'-E]	[楕円形]	(147)	(57)	154	外傾	平坦	人為	II D2c		A	Tピット	第216図
263	D5h ₁		円形	145	132	37	外傾	平坦	自然	I A2a	弥生式土器片 1点, 土師器片 43点, 須恵器片 1点	B	本跡<SI70	第221図
264	D5g ₂		円形	166	160	39	垂直	平坦	人為	I A3a	土師器片 69点	B	SI70・76, SF1重複	第221図
265	E4c ₁	N-6'-E	楕円形	160	103	155	垂直	平坦	人為	II D3c	土師器片 3点	A	本跡<SD7, Tピット	第216図
266	E4c ₂	N-2'-W	長楕円形	160	55	158	垂直	平坦	人為	II D3c	土師器片 15点	A	本跡<SI60, Tピット	第216図
267	D5f ₁		円形	73	70	41	段状	凹凸	自然	I C1a	土師器片 8点	F	SI70重複	第238図
268	E4a ₁		[不整円形]	77	(69)	108	段状	凹凸	自然	I C1c		F	SI62・64重複	第238図
269	D5b ₁		円形	71	65	65	外傾	皿状	自然	I C1b		F	SI89重複	第238図
270	C6f ₁		円形	146	132	55	内湾	平坦	人為	I A2b	弥生式土器片 10点, 土師器片 33点	B	SK250重複	第221図
271	D5f ₁		円形	69	64	125	外傾	平坦	人為	I C1c		F	SI70重複	第238図
272	D5a ₁		円形	59	57	37	外傾	平坦	不明	I C1a	土師器片 11点	F	SI89・102重複	第238図
273	D5a ₁		[円形]	(135)	(71)	52	内湾	平坦	自然	I A2b	弥生式土器片 2点, 土師器片 10点	B	本跡>SD10, SI90重複, 壁溝有	第222図
274	C6c ₁		円形	166	156	38	内湾	平坦	人為	I A3a	弥生式土器片 1点, 土師器片 25点	B	SI126重複	第222図
275	C5c ₁		円形	92	89	43	内湾	傾斜	自然	I A1a	縄文式土器片 1点	F	本跡<SI121	第238図
276	E4c ₁		円形	106	105	34	外傾	平坦	自然	I A2a	土師器片 32点	C		第225図
277	B6h ₂		円形	198	185	73	垂直	平坦	人為	I A3b		B	壁溝有	第222図
278	B6f ₁		円形	124	114	9	緩斜	皿状	自然	I B2a		C	SI155重複	第225図
279	C6b ₂	N-61'-E	楕円形	126	96	123	外傾	平坦	人為	II C2c	弥生式土器片 4点, 土師器片 12点, 須恵器片 1点	F	本跡>SI126	第238図
280	B6g ₁	N-59'-W	楕円形	73	60	14	緩斜	平坦	人為	II B1a		F	SI147重複	第238図

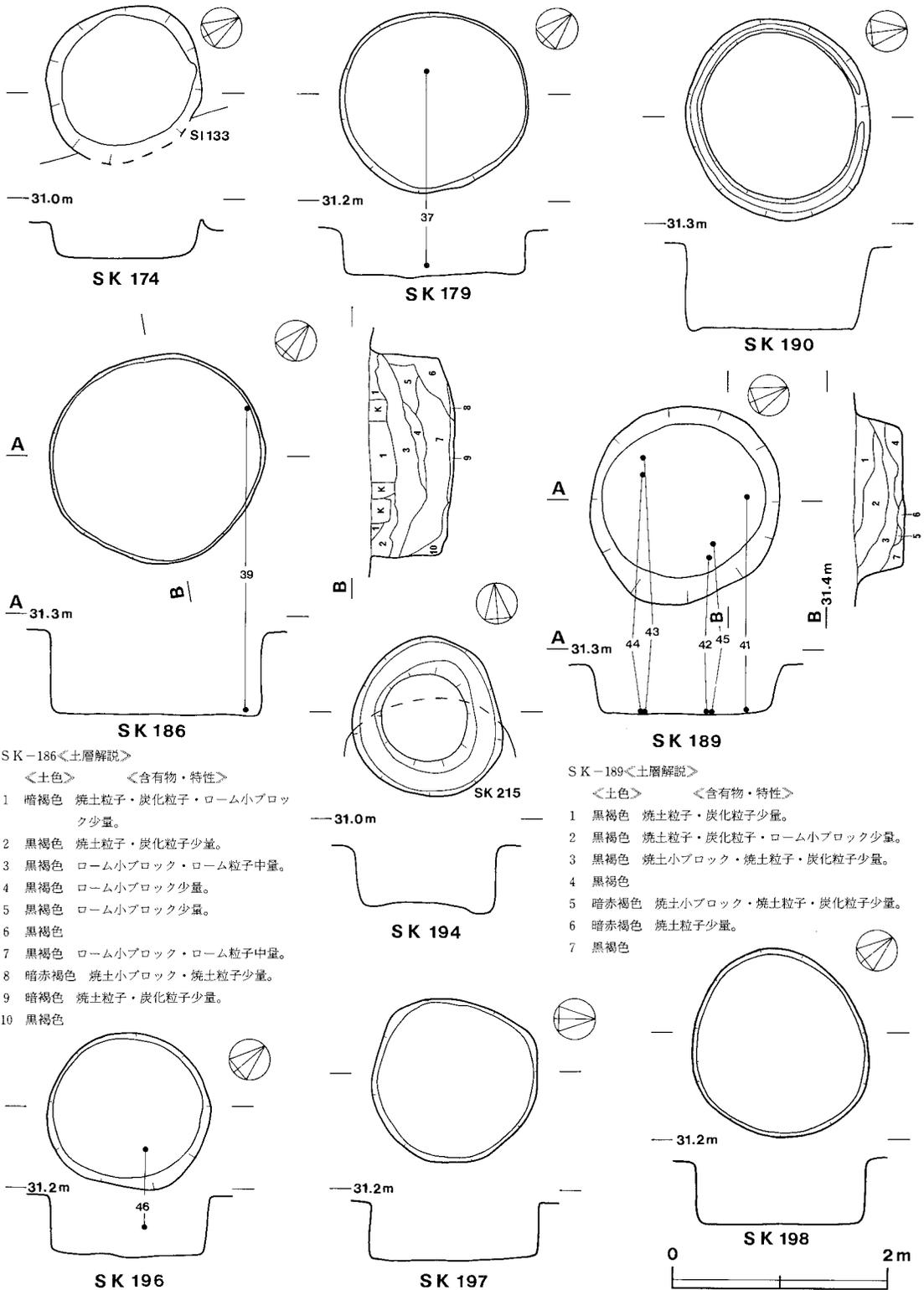




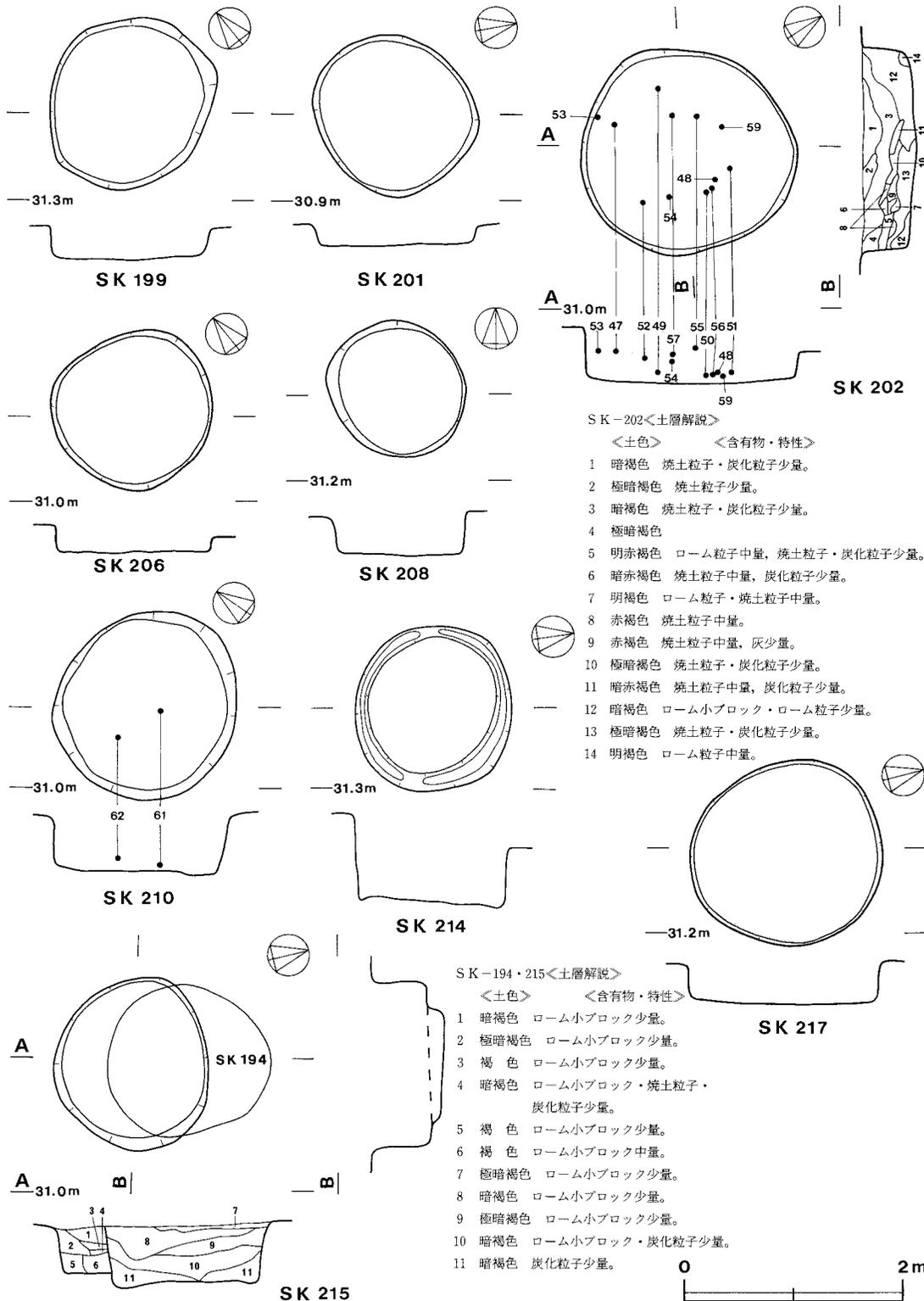
第216図 土坑実測図 (A類)



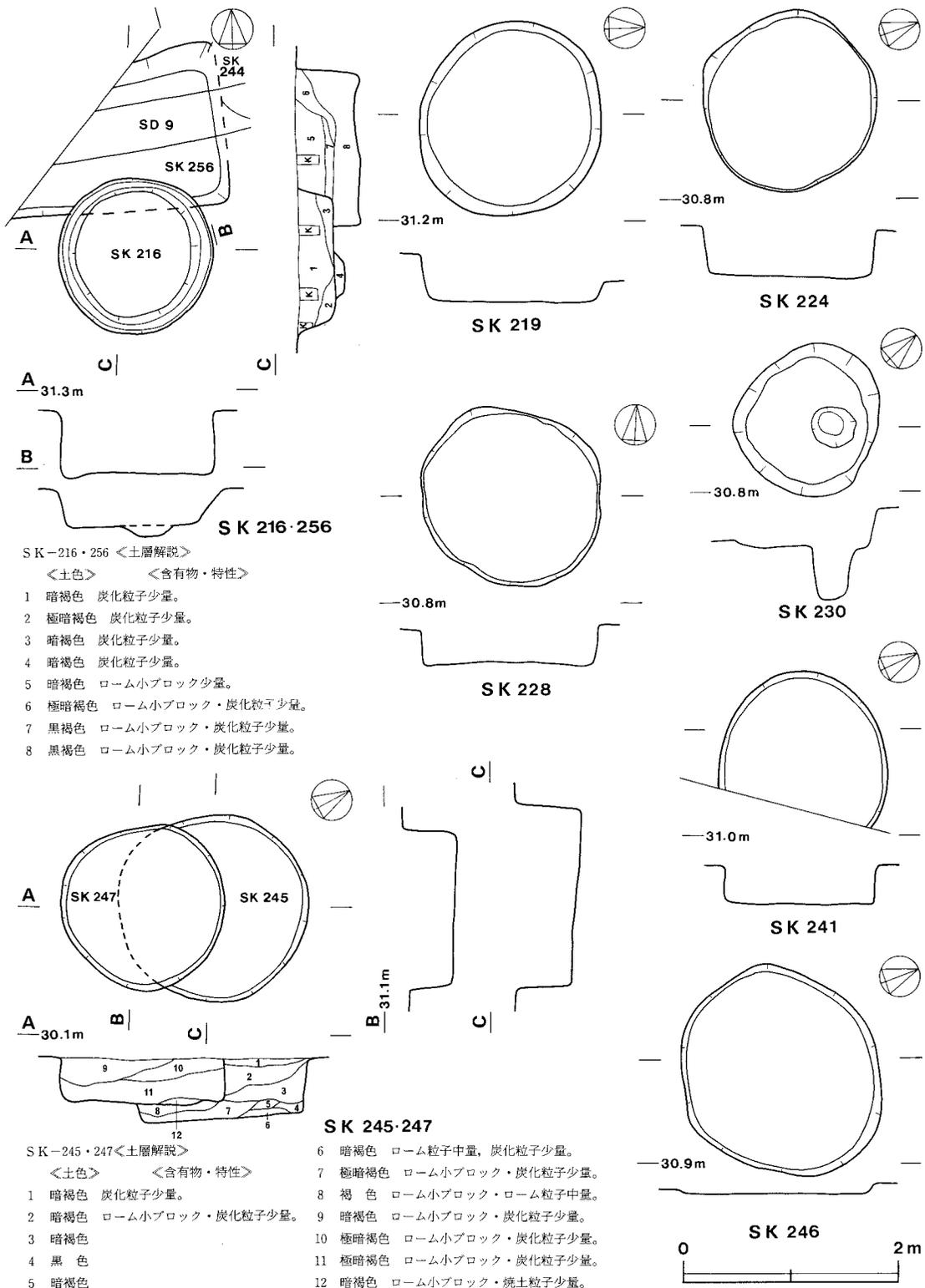
第217図 土坑実測図 (B類-1)



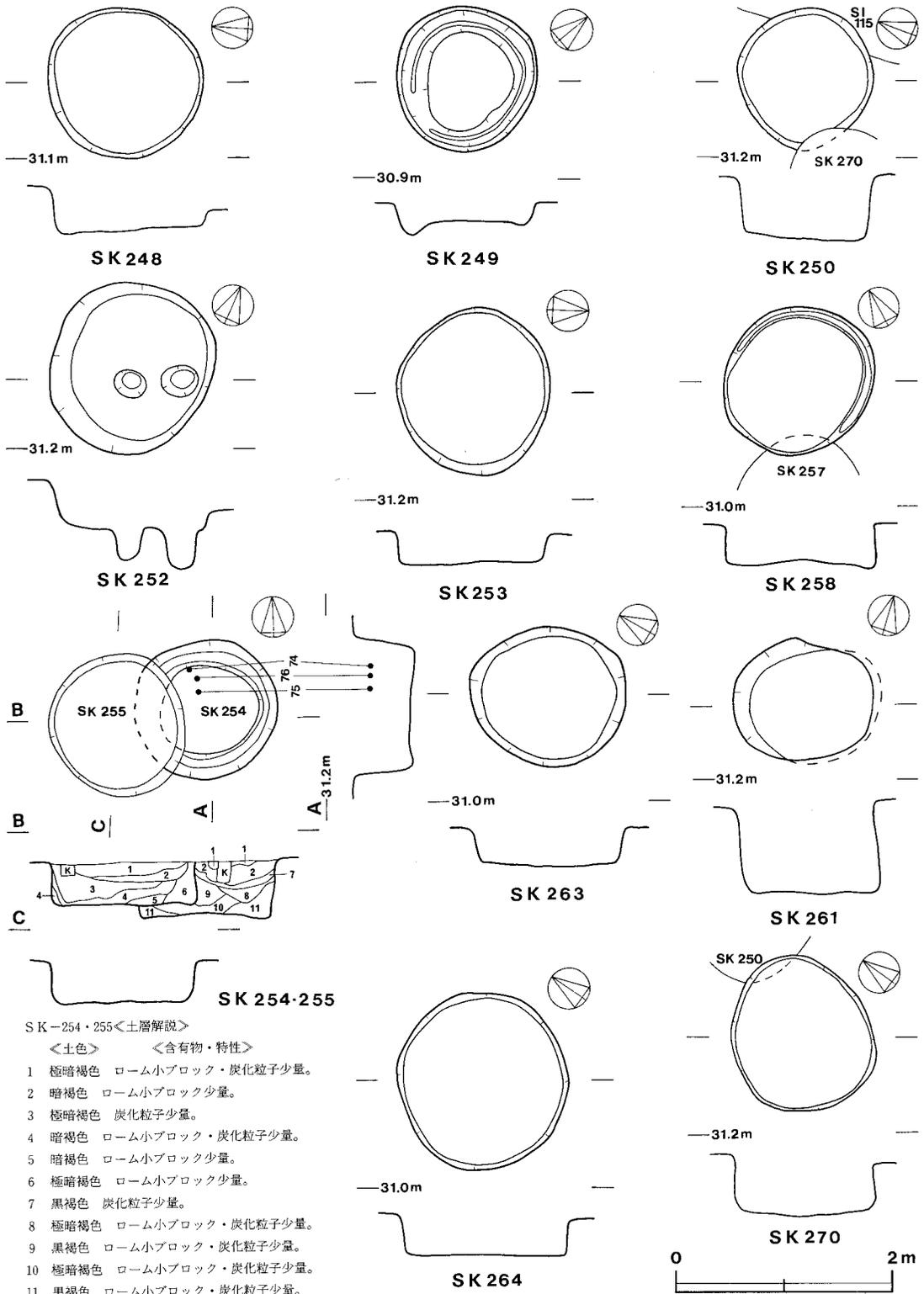
第218図 土坑実測図 (B類-2)



第219図 土坑実測図 (B類-3)



第220図 土坑実測図 (B類-4)

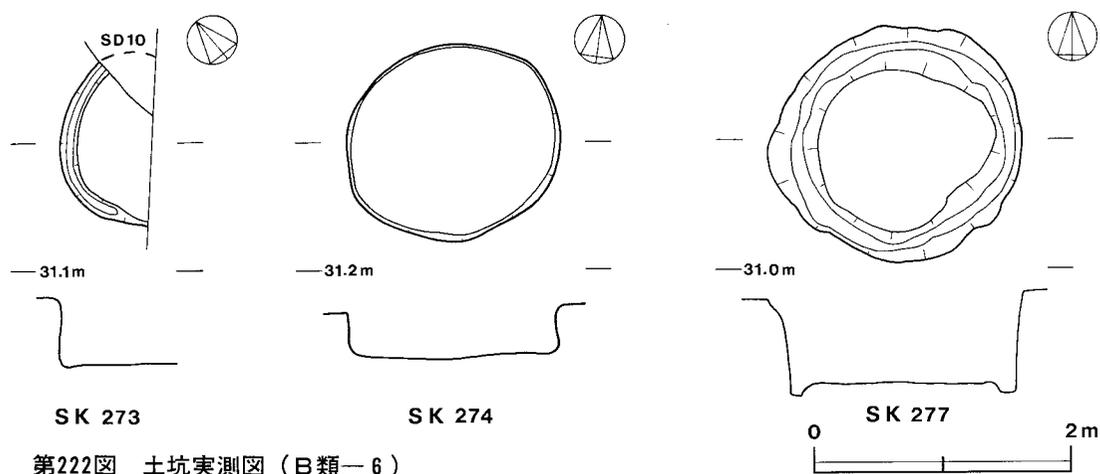


SK-254・255<土層解説>

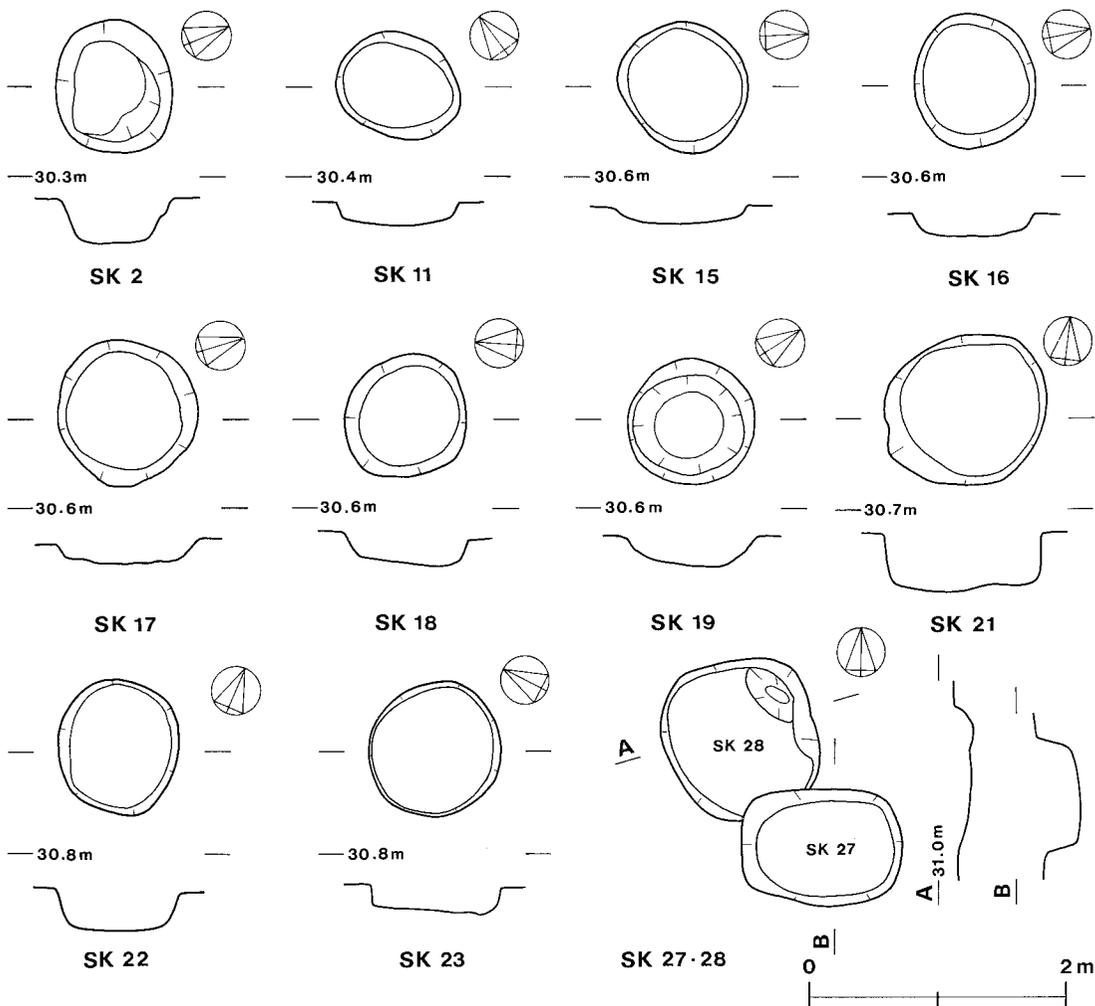
<土色> <含有物・特性>

- 1 極暗褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量。
- 3 極暗褐色 炭化粒子少量。
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量。
- 5 暗褐色 ローム小ブロック少量。
- 6 極暗褐色 ローム小ブロック少量。
- 7 黒褐色 炭化粒子少量。
- 8 極暗褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量。
- 9 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量。
- 10 極暗褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量。
- 11 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量。

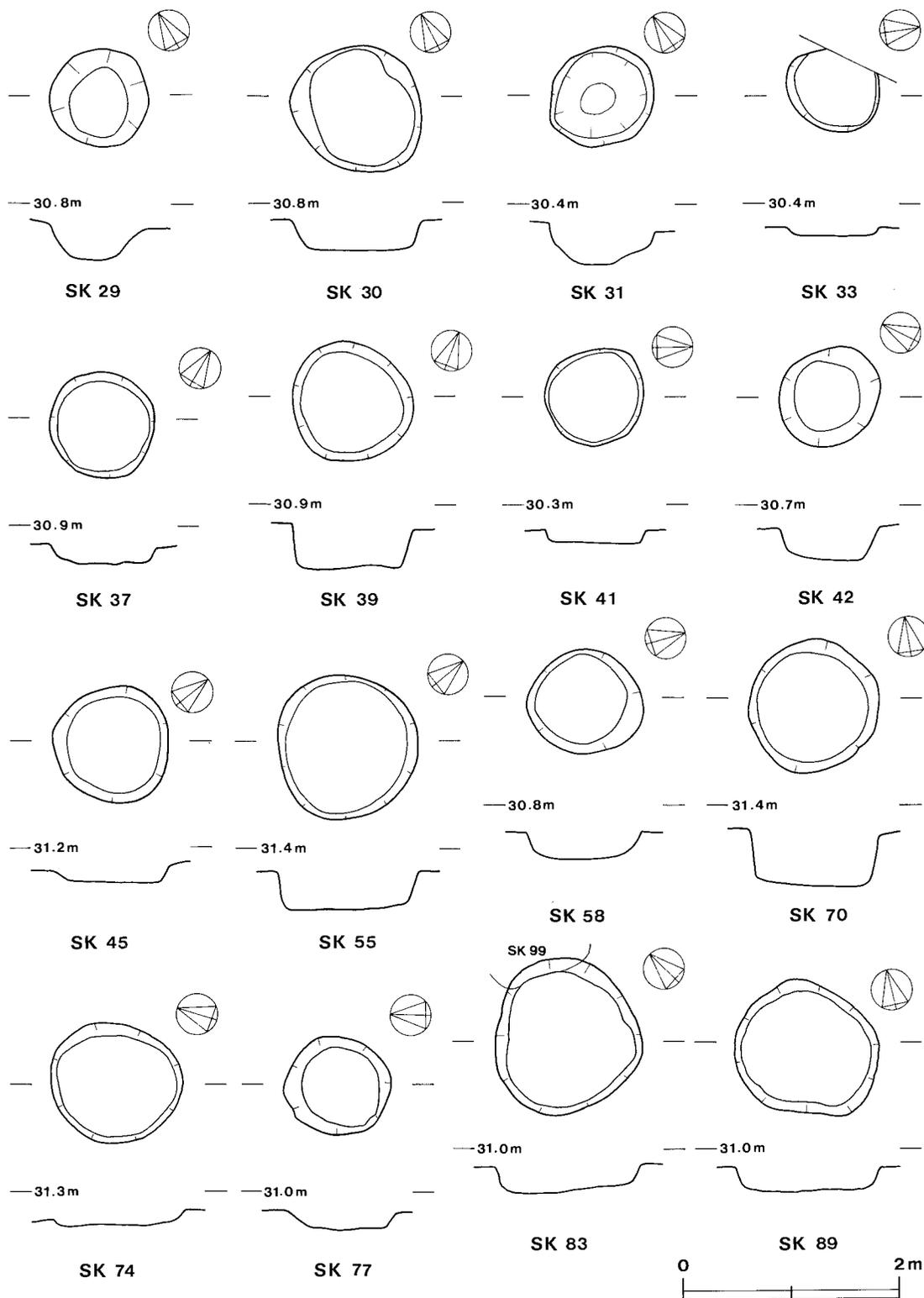
第221図 土坑実測図 (B類-5)



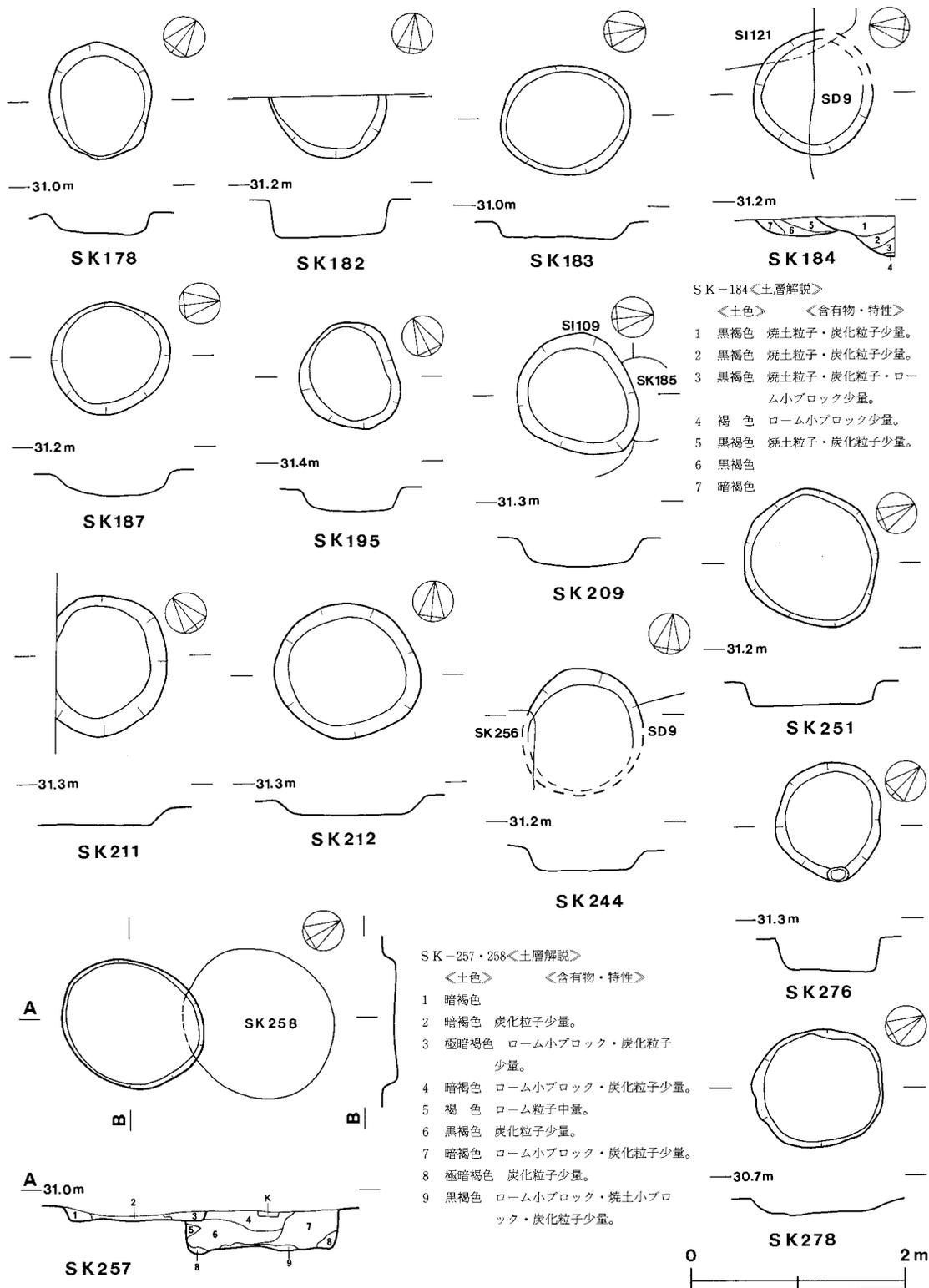
第222図 土坑実測図 (B類-6)



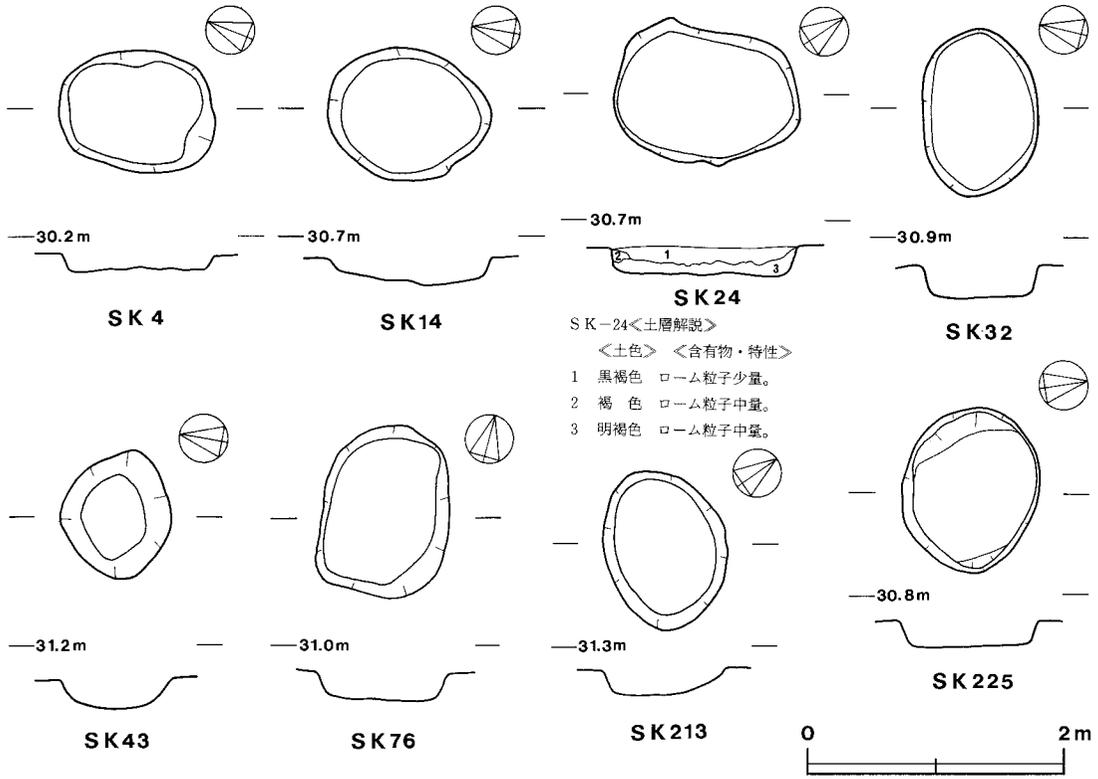
第223図 土坑実測図 (C類-1)



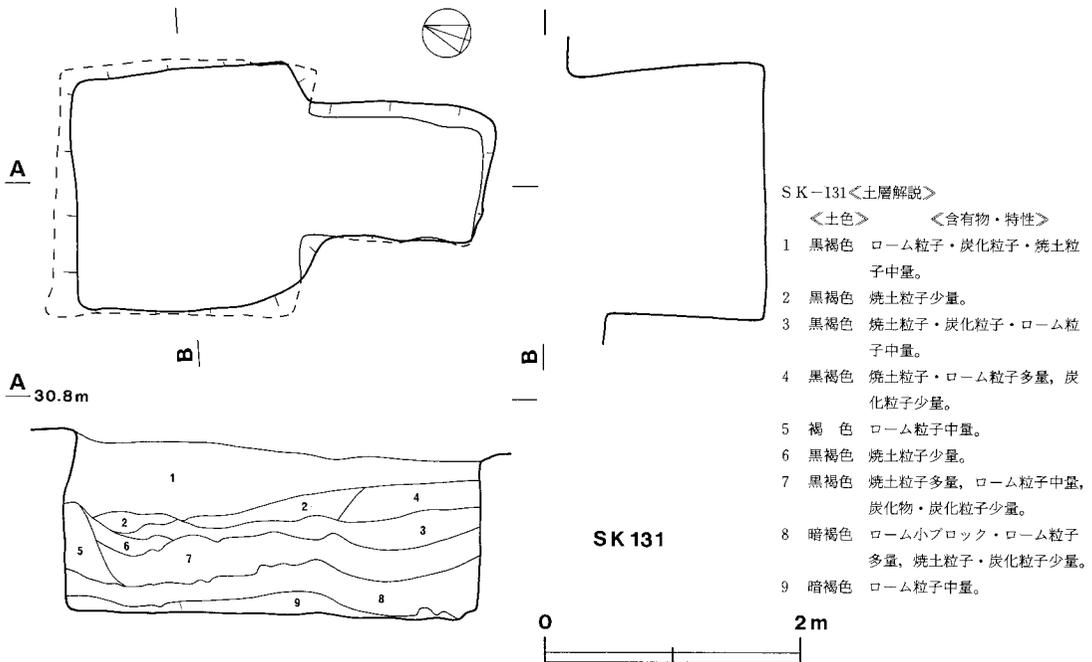
第224図 土坑実測図 (C類-2)



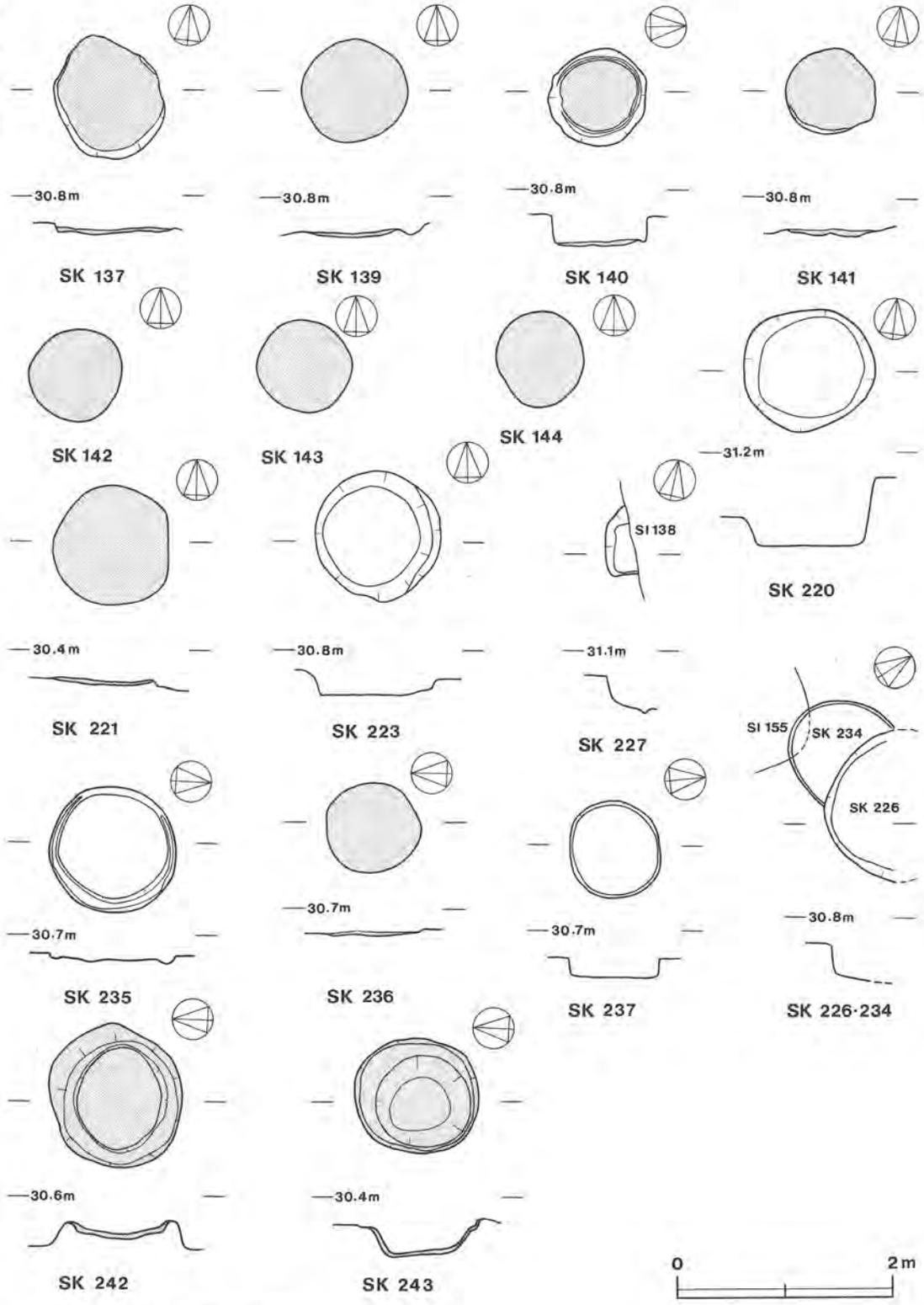
第225図 土坑実測図 (C類-3)



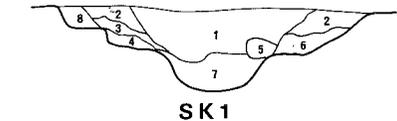
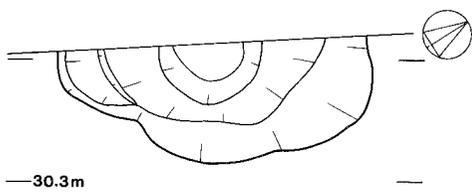
第226図 土坑実測図 (C類-4)



第227図 土坑実測図 (D類)



第228図 土坑実測図 (E類)

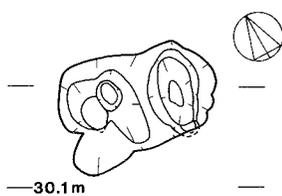


SK 1

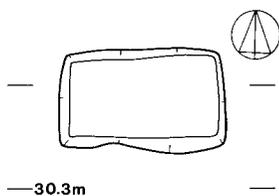
SK-1<土層解説>

<土色> <含有物・特性>

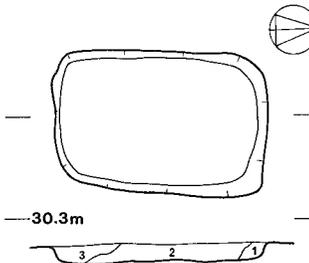
- 1 暗褐色 ローム粒子中量，炭化粒子・焼土粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子中量。
- 3 黒褐色
- 4 褐色 ローム粒子多量。
- 5 暗褐色 ローム粒子中量，炭化材少量。
- 6 褐色 ローム粒子多量，炭化粒子・焼土粒子少量。
- 7 暗褐色 ローム小ブロック・炭化材少量。
- 8 褐色



SK 3



SK 5

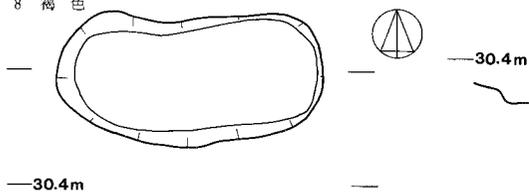


SK-9<土層解説>

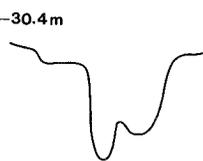
SK 9

<土色> <含有物・特性>

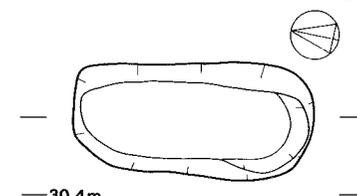
- 1 褐色 ローム粒子中量，炭化粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量。
- 3 極暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。



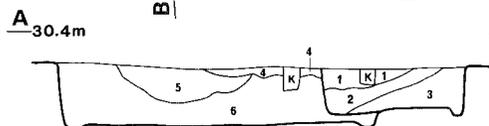
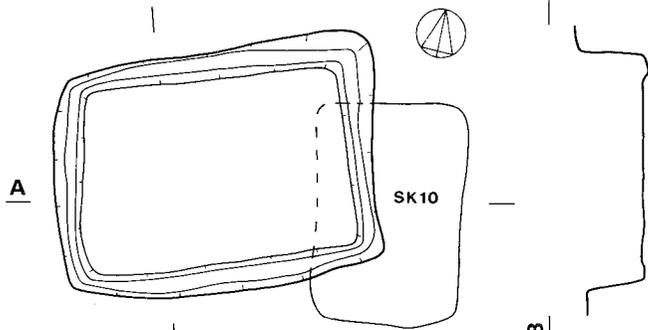
SK 6



SK 7



SK 12

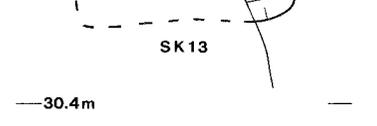
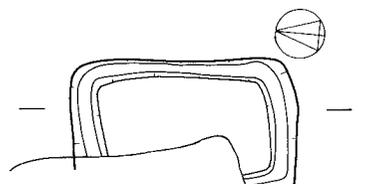


SK 13

SK-10・13<土層解説>

<土色> <含有物・特性>

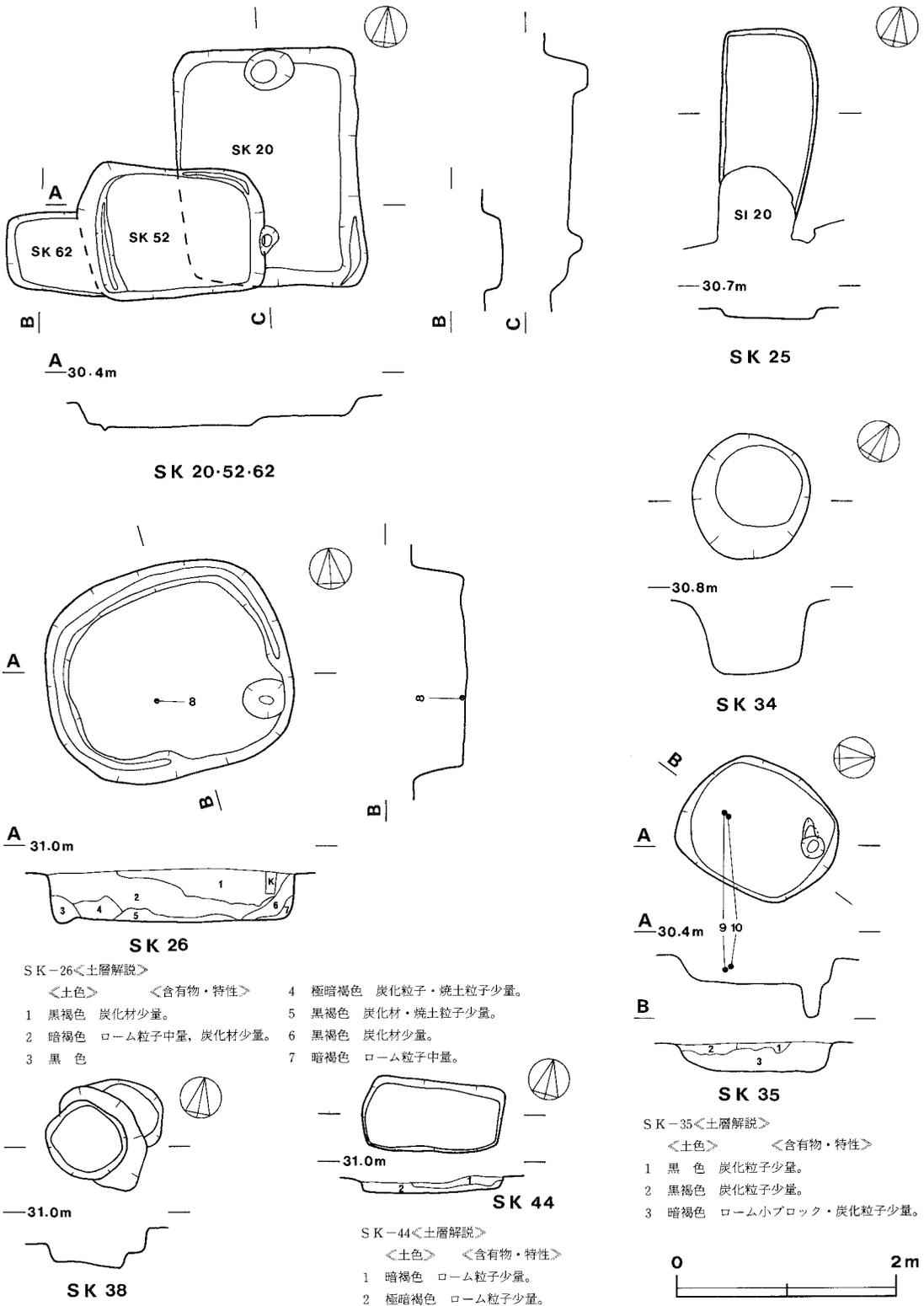
- 1 黒褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量。
- 3 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量。
- 4 明褐色 ローム小ブロック中量。
- 5 黒褐色 ローム小ブロック少量。
- 6 暗褐色



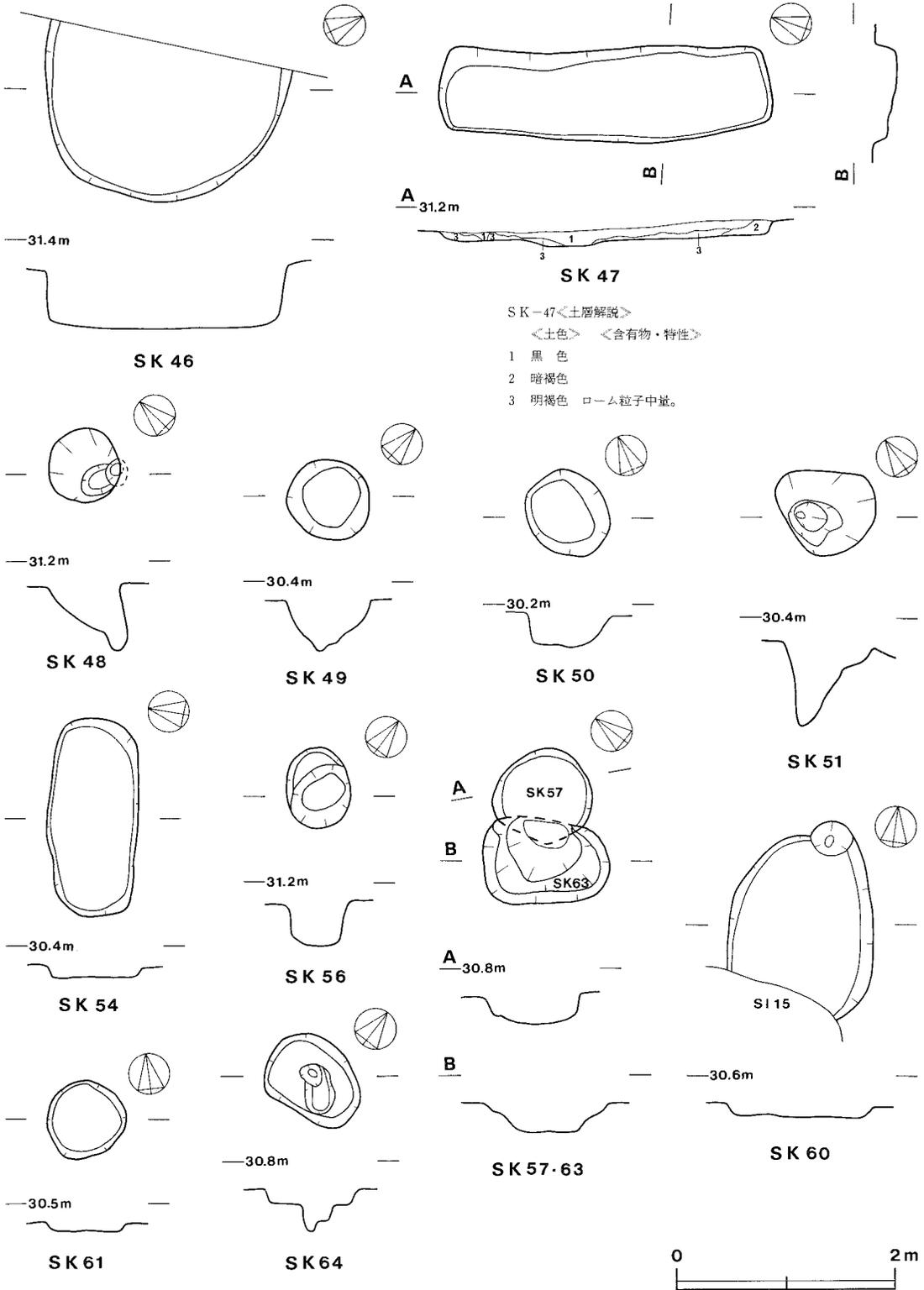
SK 10



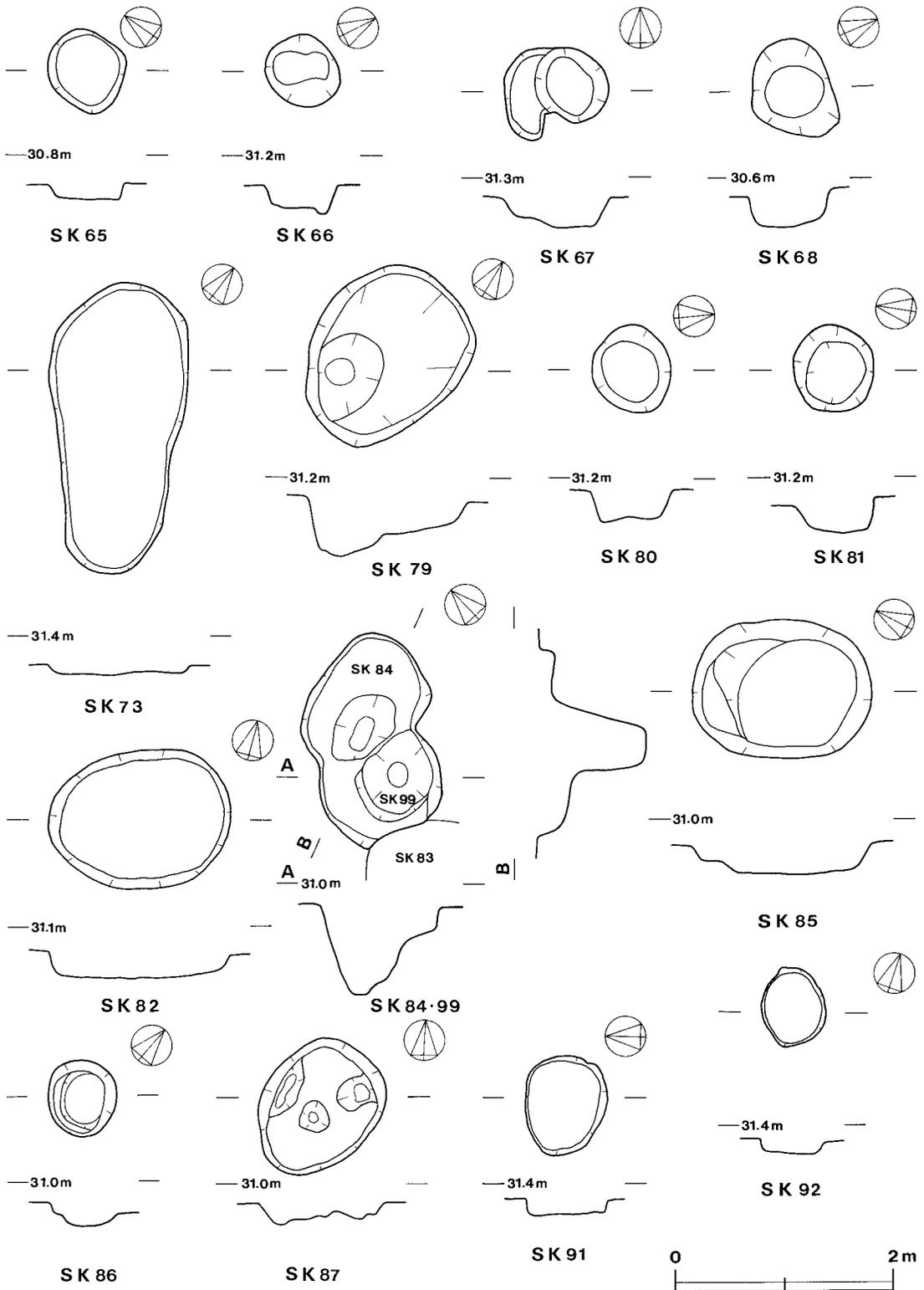
第229図 土坑実測図 (F類-1)



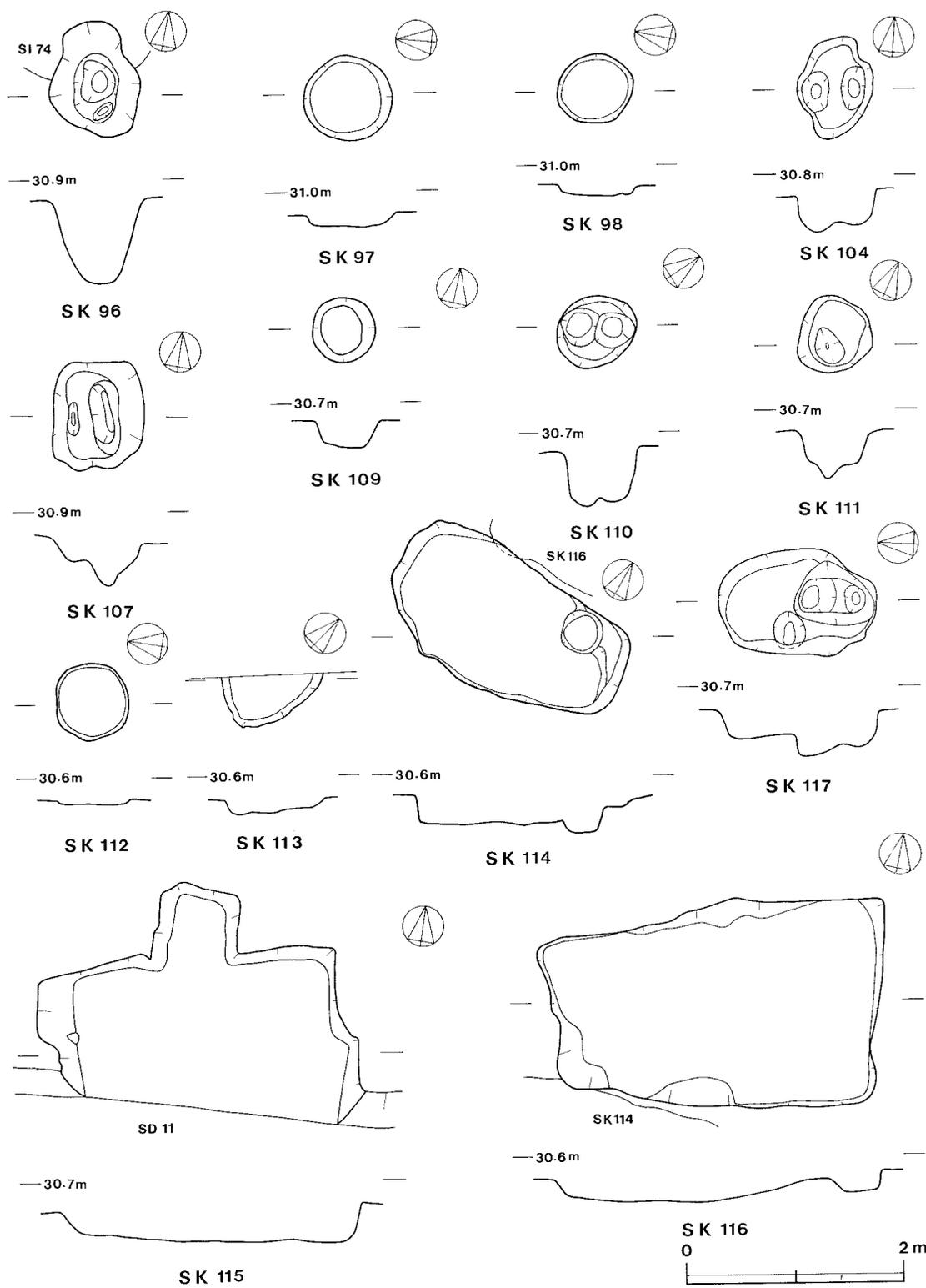
第230図 土坑実測図 (F類-2)



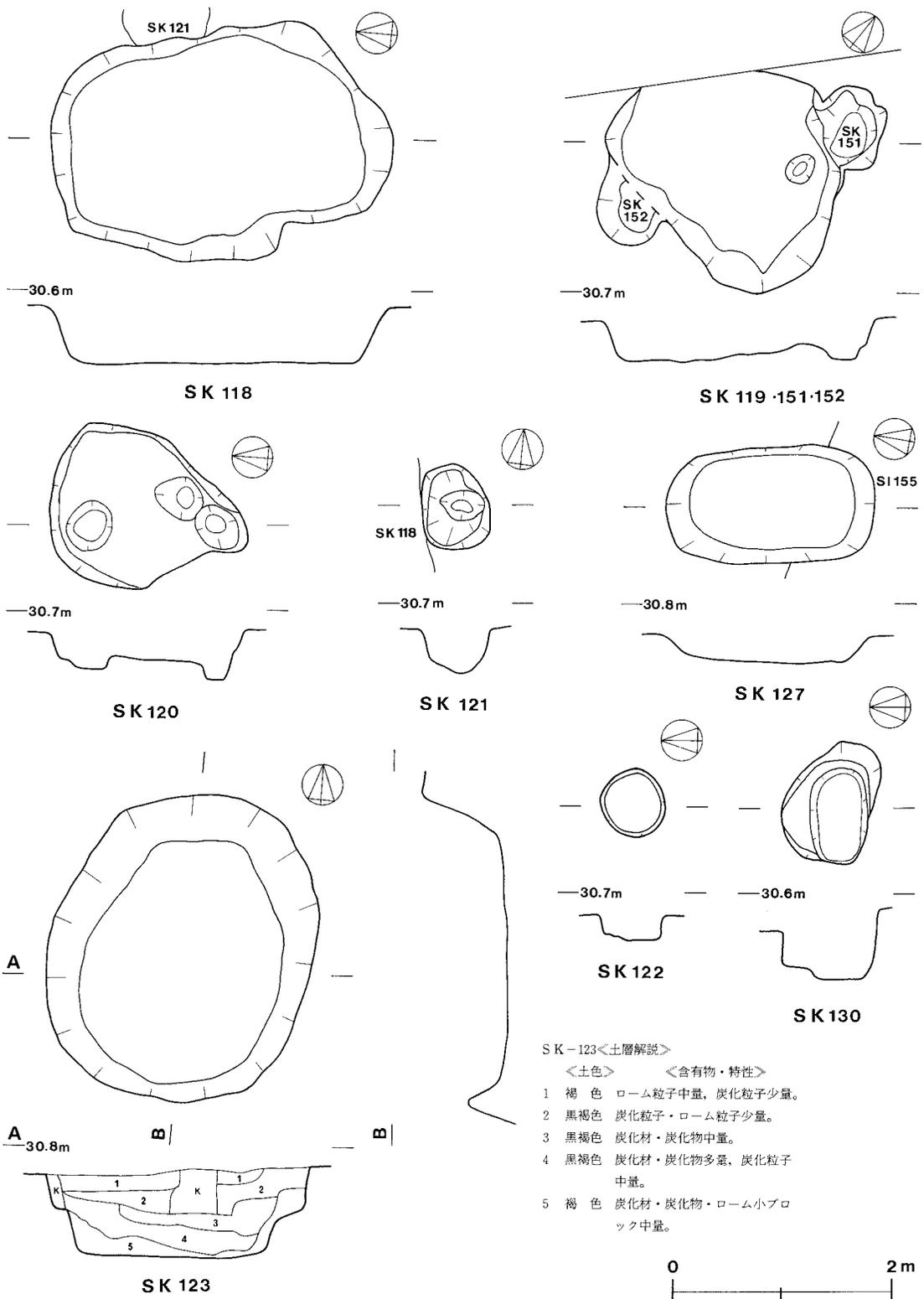
第231図 土坑実測図 (F類-3)



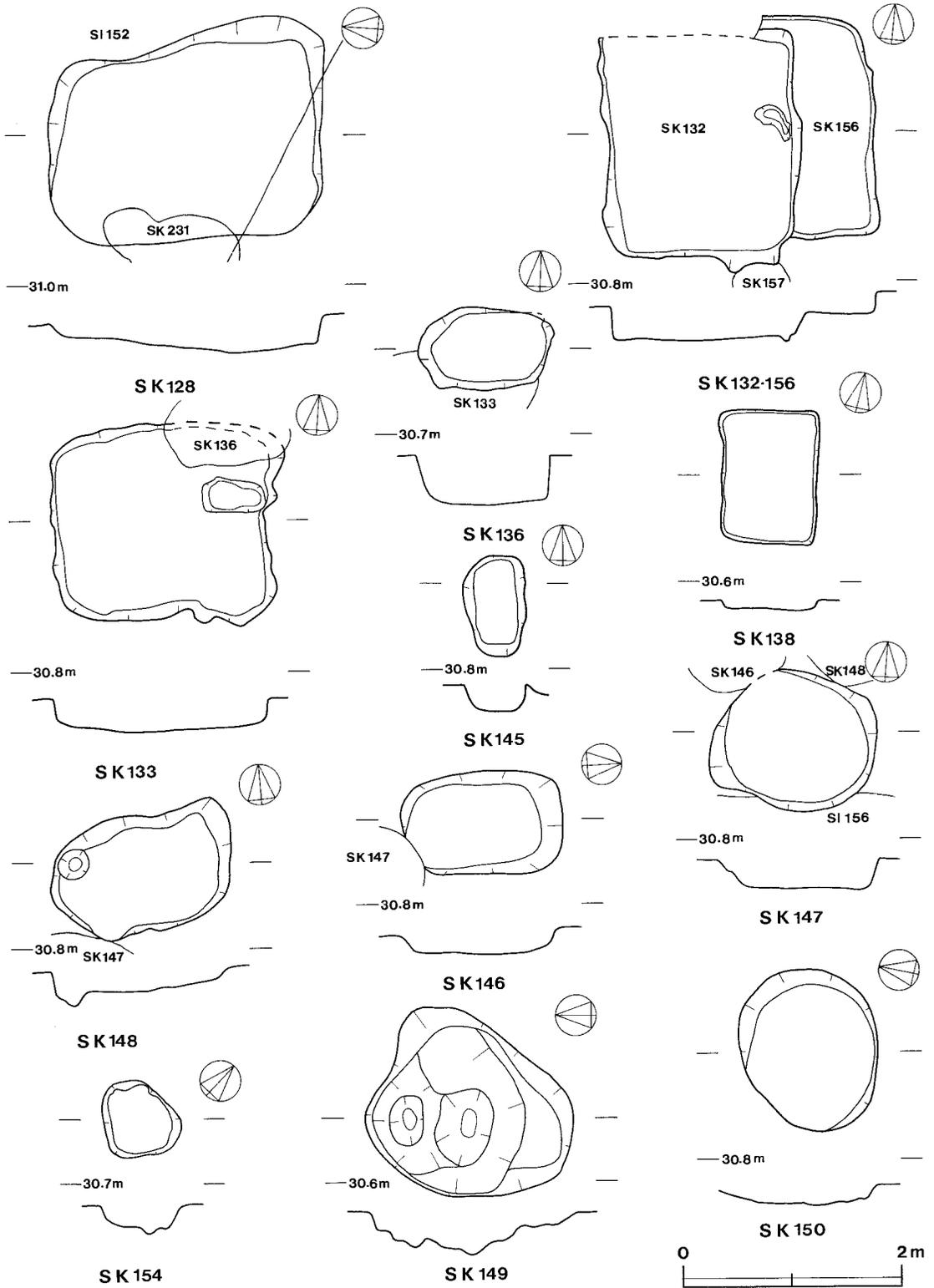
第232図 土坑実測図 (F類-4)



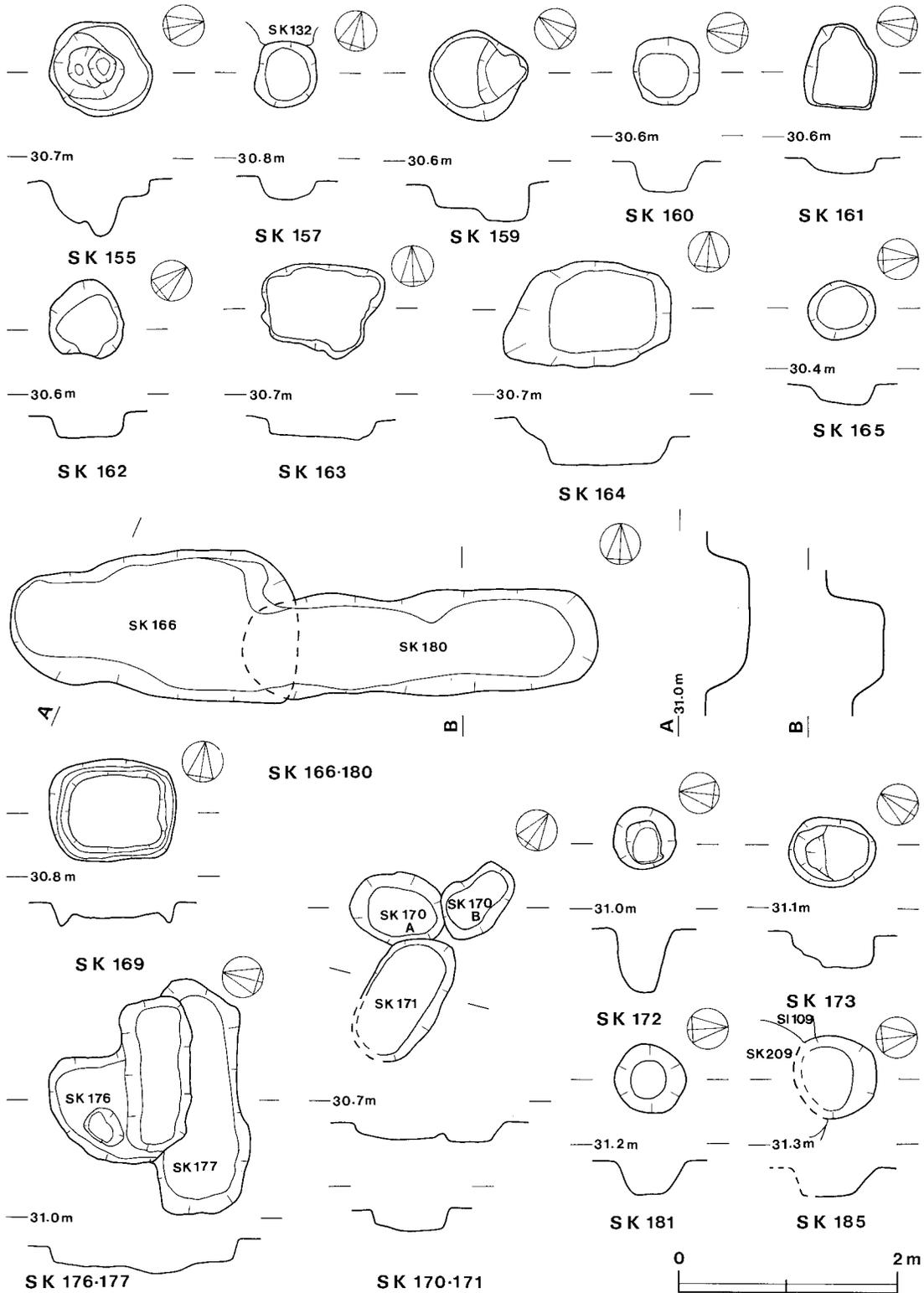
第233図 土坑実測図 (F類一5)



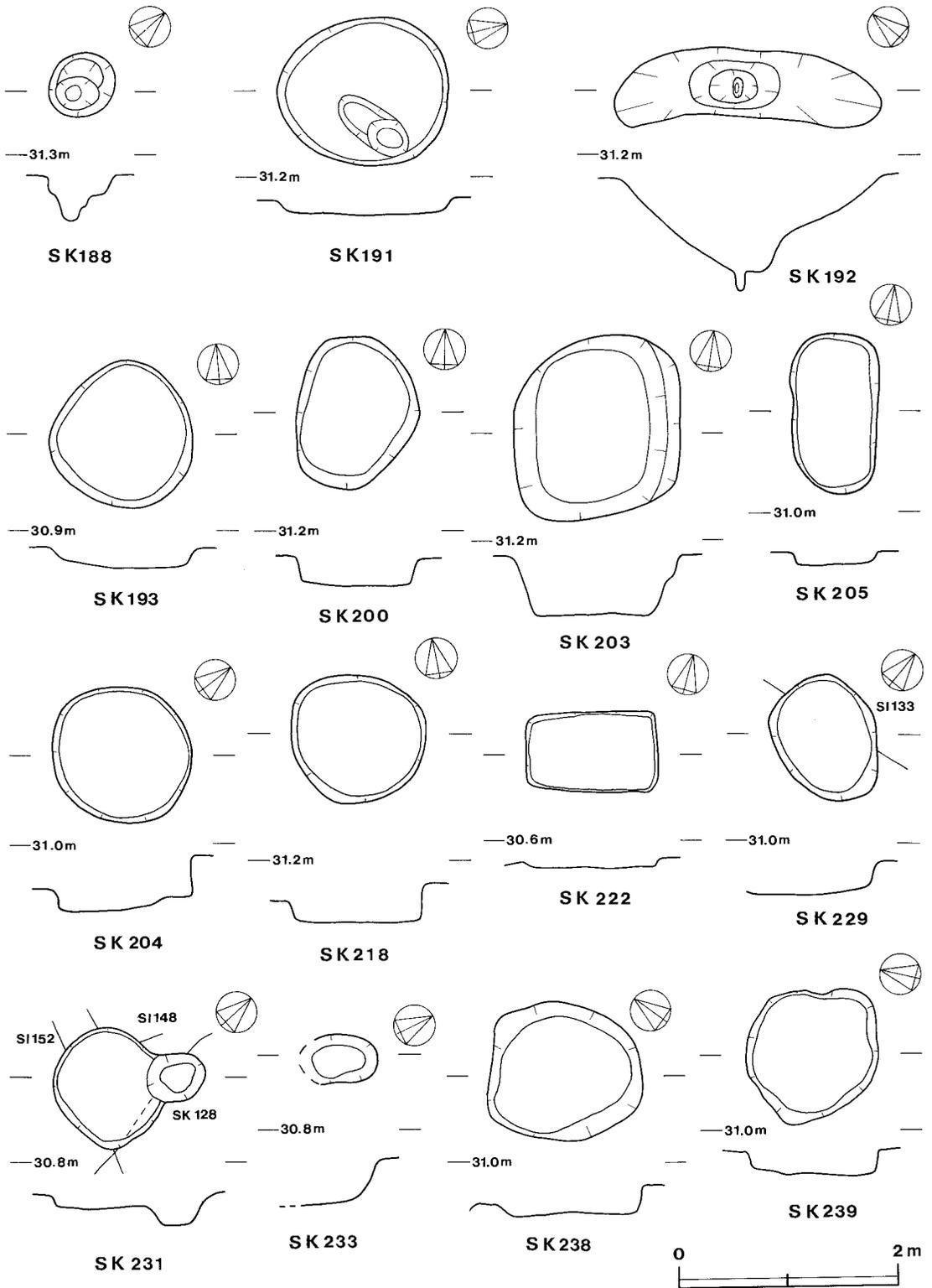
第234図 土坑実測図 (F類-6)



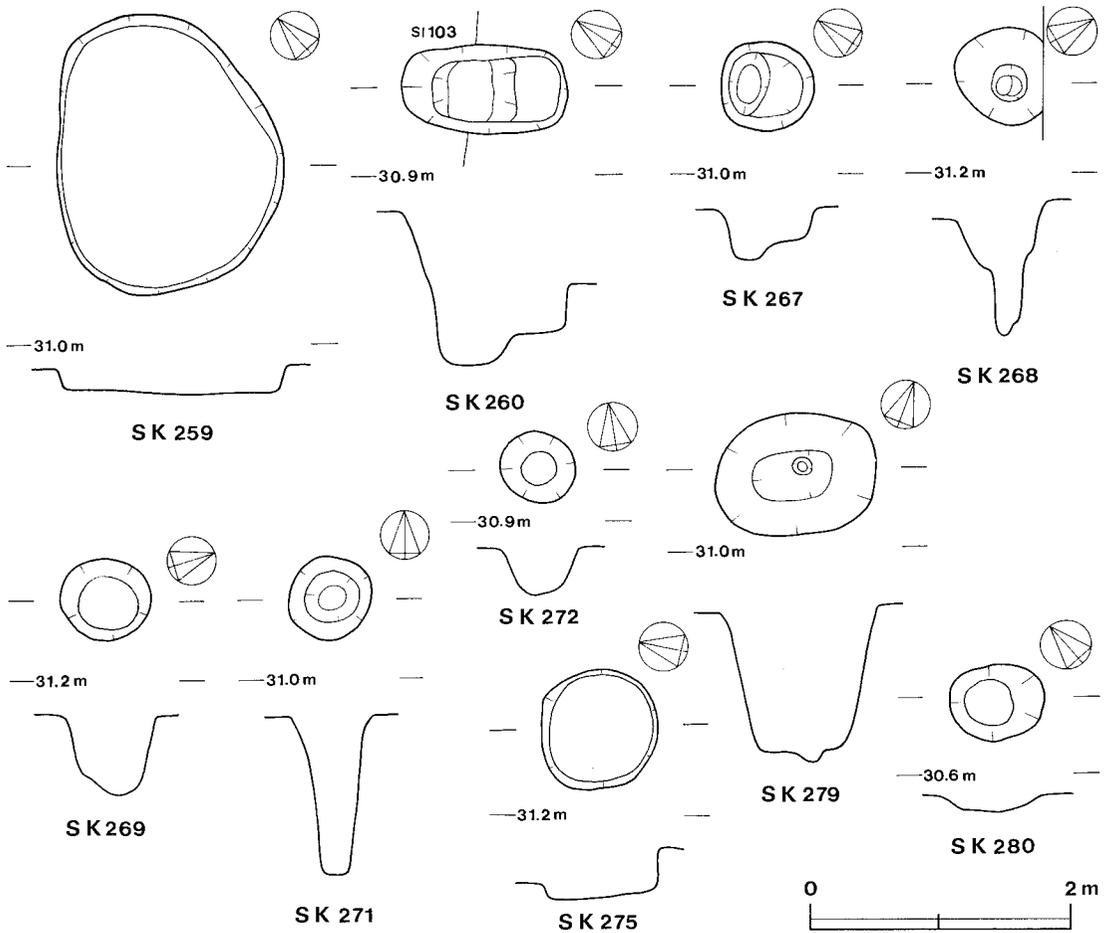
第235図 土坑実測図 (F類一7)



第236図 土坑実測図 (F類-8)



第237図 土坑実測図 (F類-9)



第238図 土坑実測図 (F類一10)

7 井戸

第1号井戸 (第239図)

位置 B6e区。**重複関係** 無。**平面形** 円形。**規模** 長径1.20×短径1.16m。確認面から2.35mまでは円筒状の掘り方で、それ以下は、径約1.4mとやや大きくなる。**覆土** 自然堆積。

遺物 土師器片32点、土鍋片1点、砥石1点が出土。第451図1の土鍋が覆土から出土。

所見 確認面下4mの深さまで調査したが、壁面の崩落が著しくそれ以下の調査は断念した。

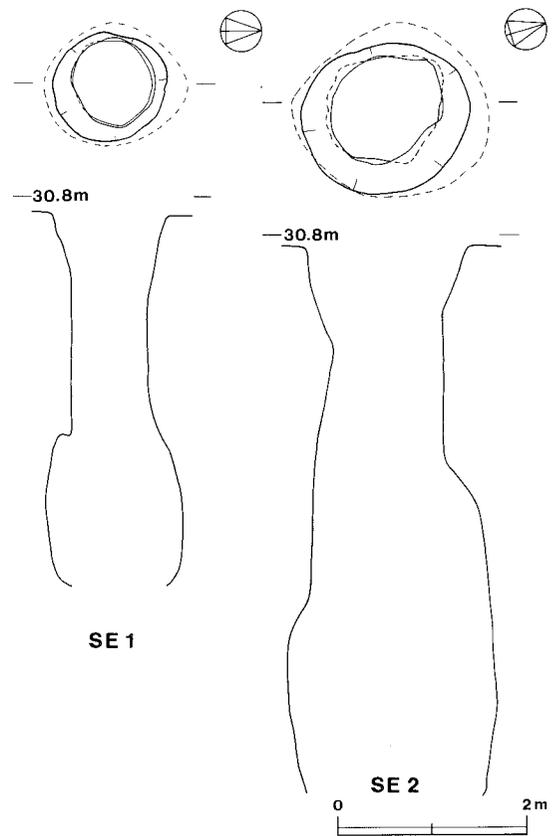
第2号井戸 (第239図)

位置 B7e区。**重複関係** SI161(新旧関係不明)。**平面形** 円形。**規模** 長径1.77×短径1.62m。円筒状に掘り込まれている。確認面から約2.3m地点で径が大きくなり、径約2.0mの掘り方に

変わる。覆土 自然堆積。全体的に黒褐色土で、ローム小ブロックを含んでいる。これは、周囲の壁が崩落して混入したものと思われる。

遺物 縄文式土器片1点、弥生式土器片5点、土師器片21点、土師質土器片3点、陶器片2点、内耳土器片1点、砥石3点が出土。第451図2の坏、3の内耳土器、第452図4の摺鉢、5の三足鍋が覆土から出土。

所見 第1号井戸の東18.4mに位置し、第1号井戸よりも若干規模が大きくなる。壁面の崩落が著しく確認面下6mの深さまで調査したが、それ以下の調査は断念した。



第239図 第1・2号井戸実測図

8 ピット

平面形が円形・楕円形を呈し、上端径が50cm前後のものをピットとした。当遺跡では総数221基が検出されている。各ピットは単独で、あるいは数か所まとまって調査区全域から検出されている。しかし、特に規則的な配列は認められない。ここでは特に遺物が出土しているピットについてだけ掲載した。

ピット番号	位置	規模(cm) 長径×短径×深さ	遺物	備考
P 40	G2h ₅	30×29×44	土師質土器 1点	
P 48	H2a ₇	31×25×63	土師器片 1点	SD 2 と重複
P 83	G2j ₇	33×31×31	土師器片 1点	SI 7, SD 2 と重複

第3節 ま と め

当遺跡からは、先土器時代の石器集中地点(ユニット)6か所、弥生時代から奈良・平安時代の
 竪穴住居跡139軒、土坑260基(陥し穴6基、地下式坑1基、墓壙17基を含む)、豪族居館跡1か所、
 溝9条、道路跡1条、井戸2基、ピット221基が検出された。

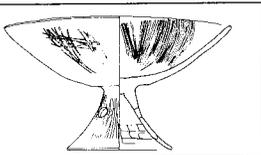
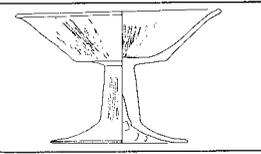
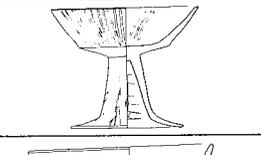
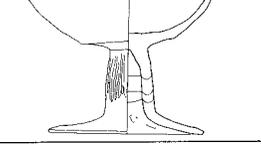
本節では、これらのなかで古墳時代及び奈良・平安時代の遺物と集落、豪族居館跡及び当遺跡
 出土の石製模造品、土坑について、資料の分析と検討を試みた。なお、古墳時代の遺物と集落、
 豪族居館跡、石製模造品、森戸遺跡の概観については西野が、奈良・平安時代の遺物と集落、土
 坑については浅井が分担して執筆することとした。

1 古墳時代及び奈良・平安時代の遺物と集落

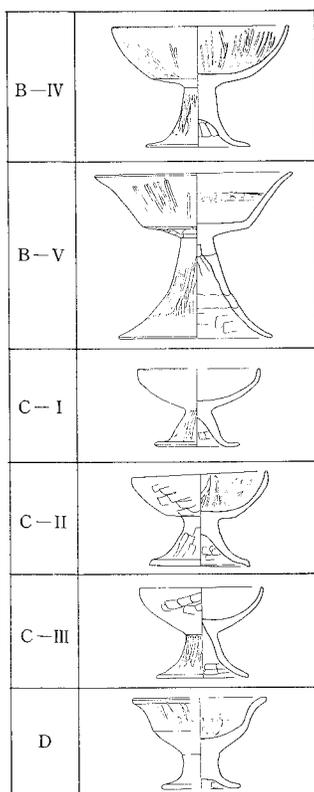
(1) 古墳時代

①土師器の分類

当遺跡出土の土師器については、その特徴を明らかにするため、高坏・埴・坏・甗を器形によっ
 て分類し、その変遷を捉えようと試みた。なお、本文中「56-3」と表記したものは、第56号
 住居跡出土の遺物番号3(土器観察表番号及び実測図番号と同一)を表している。

高 坏		
A		<p>〈A 類〉 坏部は下位に稜を有し、緩く内彎気味に立ち上 がる。脚部は「ハ」の字状に緩く外反気味に開く。坏部・脚部 共内外面は丁寧な篋磨き調整されており、器厚は薄い。脚部 には穿孔されているものが多い。</p>
B-I		<p>〈B 類〉 坏部は下位に明瞭な稜を有し、脚部は円筒(柱) 状または「ハ」の字を呈するものを本類とした。坏部と脚部の 形状から5種に細分した。</p>
B-II		<p>B-I類 坏部は外傾しながら立ち上がり、口縁部で外反す る。脚部は円筒状又は上半部円柱状を呈し、裾部で大きく開く。 調整法は、口縁部横ナデ、坏部・脚部外面には篋磨きされるも のと、篋ナデされるものとに大別される。</p>
B-III		<p>B-II類 坏部は外傾しながら立ち上がりそのまま口縁部に 至る。脚部は円筒状を呈し、裾部で大きく開く。調整法は、口</p>

第240図 高坏形土器分類(1)



第241図 高坏形土器分類(2)

縁部横ナデ、坏部・脚部外面には丁寧な篋磨きが施されるものが多い。

B-III類 坏部は緩く内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。脚部は円筒状を呈し、裾部で大きく開く。調整法は、口縁部横ナデ、坏部・脚部外面には篋磨きが施される。

B-IV類 坏部はB-III類と同様の形状を呈するが、脚部は円柱状を呈する。調整法は、口縁部横ナデ、坏部内外面、脚部外面に篋磨きが施される。

B-V類 坏部は緩く外反気味に立ち上がり、口縁部に至る。脚部は「ハ」の字状に緩く外反して開く。調整法は、坏部・脚部外面に篋磨きが施されるものが多い。

〈**C 類**〉 本類は、脚部が短脚であり、ラップ状に外反するところに最大の特徴がある。坏部は半球状を呈する。脚部の形状から3種に細分した。

C-I類 坏底部・脚基部は肥厚気味で、器厚を減じながら口縁部・裾部に至る。脚部は「ハ」の字状を呈し、裾部で外反するものもみられる。調整法は、坏部・脚部外面に篋磨きが施されるものが多いが、一部坏部外面の下半を篋削りされたままのものもみられる。

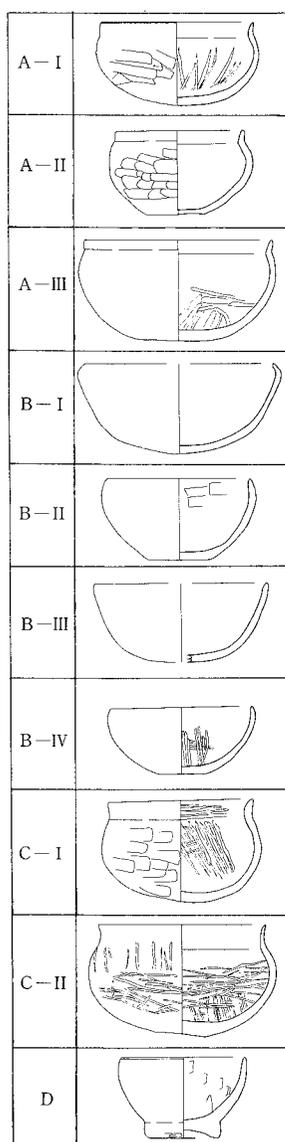
C-II類 脚基部は円柱状を呈し、裾部は外反しながら開く。調整法は、坏部・脚部外面に丁寧な篋磨きされたものと篋ナデ・篋削りされたものがある。

C-III類 脚部は中空でラップ状を呈するが、中空部分が坏部底部の中にまで及んでいるものを本類とした。これは、高坏の製作方法における坏部と脚部の接合方法の違いによる。通常は坏部底部外面の突起を脚部に差し込む方法がとられる⁽¹⁾が、83-21にみられるように、本類では、坏部の底部外面にみられる凹状の窪みに脚部を差し込む方法をとったものと思われる。調整法は、坏部・脚部外面に篋磨きが施されるものもみられるが、多くは篋ナデが施される。

〈**D 類**〉 坏部は下位に稜を有し、坏体部は大きく外反しながら開く。脚部は短脚で、円柱状を呈し裾部で開く。調整法は、坏部・脚部それぞれ篋磨きされるものと篋ナデされるものがある。

境

〈**A 類**〉 口縁部と体部の境にくびれをもち、口縁部内面に稜を有するものを本類とした。



第242図 碗形土器分類

口縁部及び底部の形状から3種に細分した。

A-I類 底部は丸底を呈し、口縁部は外反または外傾する。調整法は、口縁部横ナデ、体部内面には篋磨きを施されるものが多く、外面は篋ナデまたは篋削りされる。

A-II類 底部は平底を呈し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。調整法は、口縁部横ナデ、体部内外面篋ナデされるものが多い。

A-III類 底部は平底を呈し、口縁部は外傾する。調整法は、口縁部横ナデ、体部内面は篋磨き、外面は篋ナデされるものが多く、一部体部下半に篋削りされるものもある。

〈**B類**〉 体部は底部から内彎または外傾しながら立ち上がり、口縁部と体部の境に稜をもたない。口縁部及び底部の形状から4種に細分した。

B-I類 底部は丸底を呈し、口縁部は内彎する。調整法は、口縁部横ナデ、体部内面は篋磨きされるものが多く、外面は篋ナデまたは篋削りされる。

B-II類 底部は平底を呈し、体部は内彎して口縁部に至る。口縁部は直立または内彎する。調整法は、口縁部横ナデ、体部内面は篋磨きされるものと篋ナデされるものがあり、外面は篋ナデされるものが多い。

B-III類 底部は丸底を呈し、体部は外傾して口縁部に至る。調整法は、口縁部横ナデ、体部内外面共篋ナデされるものが多い。

B-IV類 底部は平底を呈し、体部は緩く内彎して口縁部に至る。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。調整法は、口縁部横ナデ、体部内面は篋磨きが施され、外面はナデ調整がなされている。

〈**C類**〉 体部は底部から内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。体部と口縁部の境が明瞭である。底部の形状から2種に細分した。

C-I類 底部は丸底を呈する。調整法は、口縁部横ナデ、体部内面は篋磨きされ、外面は篋ナデされる。

C-II類 底部は平底を呈する。調整法は、口縁部横ナデ、体部内面は篋磨きされるものと、篋ナデされるものがあり、外面は篋ナデされる。

〈**D類**〉 本類は、底部に粘土を貼り付けて高台状に成型するという特徴をもつ。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。

坏	
A	
B-I	
B-II	
B-III	
B-IV	
C-I	
C-II	
D-I	
D-II	
E-I	
E-II	
E-III	
E-IV	
F	
G-I	
G-II	

第243図 坏形土器分類

C-I類 底部は丸底を呈する。口縁部横ナデ，体部内面は篋磨きされるものが多いが，外面は篋ナデまたはナデ調整されるものが多い。

＜D 類＞ 体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は外傾する。底部の形状により2種に細分される。

D-I類 底部は丸底を呈する。口縁部横ナデ，体部内面は篋磨きされるものと，篋ナデまた

＜A 類＞ 底部は丸底または平底を呈し，体部は内彎して口縁部に至る。口縁部は内彎する。口縁部横ナデ，体部内外面篋ナデまたはナデ調整がなされている。

＜B 類＞ 本類は，口縁部内面に稜を有する。底部及び口縁部の形状により3種に細分した。

B-I類 底部は丸底を呈し，口縁部は外傾する。口縁部と体部の境にくびれを有する。口縁部横ナデ，体部内面は篋磨きされるものもあるが，ナデ調整されるものが殆どである。外面はナデ調整である。

B-II類 底部は丸底を呈し，口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部横ナデ，体部内面は篋磨きされるものとナデ調整されるものがあり，外面はナデ調整である。

B-III類 底部は平底を呈し，口縁部は外傾する。口縁部と体部の境にくびれを有するものが多い。口縁部横ナデ，体部内外面は篋磨きされるものと篋ナデされるものがある。体部下半には篋削りが施されているものがある。

B-IV類 底部は平底を呈し，口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部と体部の境にくびれを有するものがある。口縁部横ナデ，体部内面には篋磨きされるものとナデ調整されるものがあり，外面はナデ調整される。

＜C 類＞ 口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部と体部の境は稜をもたないが，明瞭に区分されるものも多くみられ，調整法に明らかな違いが認められる。底部の形状により2種に細分される。

C-I類 底部は丸底を呈する。口縁部横ナデ，体部内面は篋磨きされるものが多いが，外面は篋ナデまたはナデ調整されるものが多い。

C-II類 底部は平底を呈する。口縁部横ナデ，体部内面は篋磨

はナデ調整されるものがある。体部外面は篋ナデまたはナデ調整される。

D-II類 底部は平底を呈する。口縁部横ナデ，体部内外面は篋磨きされるものと，篋ナデまたはナデ調整されるものがある。

〈**E 類**〉 口縁部と体部の境に稜を有する，所謂須恵器模倣の坏が主体となる。底部はすべて丸底を呈する。口縁部や体部の形状から4種に細分される。

E-I類 体部は皿状を呈する。口縁部は直立する。調整法は，口縁部横ナデ，体部内面は篋磨きされるものが多く，体部・底部外面は篋削りまたは篋ナデされる。

E-II類 体部は皿状を呈する。口縁部は外反する。調整法は，口縁部横ナデ，体部内面は篋磨きされるもの，篋ナデされるものがある。体部・底部外面は篋削りまたは篋ナデされる。

E-III類 体部は皿状を呈する。口縁部は内傾する。中には器高が低く，口縁部が強く屈曲して内傾するものもある。調整法は，口縁部横ナデ，体部内面は篋磨きまたは篋ナデされるものがある。体部外面は篋削りまたは篋ナデされる。

E-IV類 口縁部と底部の境に僅かな段を有する。口縁部は短く立ち上がる。調整法は，口縁部横ナデ，体部内外面は篋磨きされるものと篋ナデされるものがある。

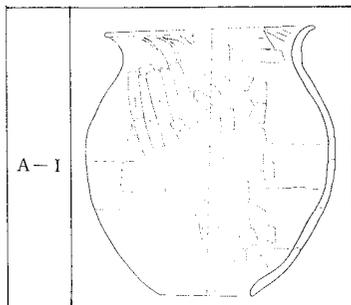
〈**F 類**〉 体部は浅い皿状を呈し，口縁部は短く立ち上がる。調整法は，口縁部横ナデ，体部は内外面篋磨きまたは篋ナデされる。

〈**G 類**〉 皿状の坏部に短い脚部が付くものを，本類とした。須恵器坏蓋を逆転させた器形であるが，内面は丁寧な篋磨きを施したものもあり，脚の付いた坏とした。脚部の形状により，2種に細分される。

G-I類 脚部は「ハ」の字状に開く。調整法は，坏部内面・脚部外面に篋磨きを施したものがみられる。

G-II類 脚部は基部で中実の円柱状を呈し，裾部で開く。調整法は，脚部外面には篋磨きを施したものがみられる。

甌

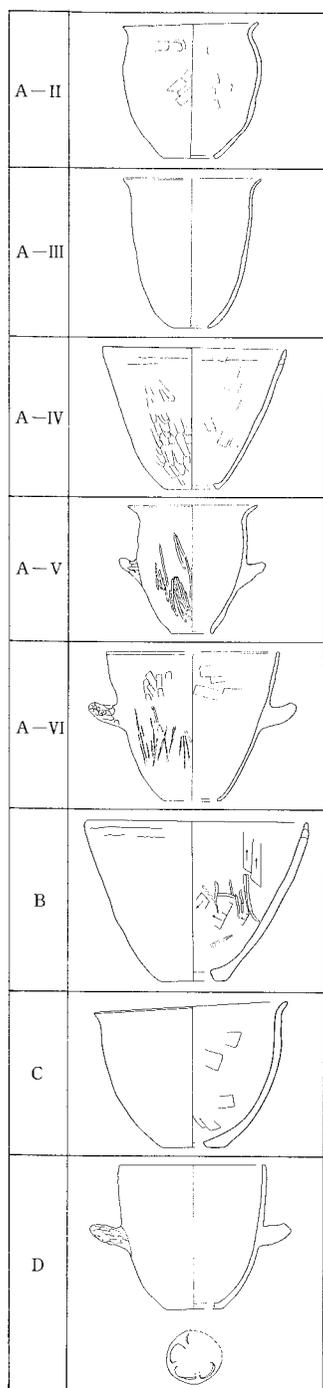


第244図 甌形土器分類(1)

〈**A 類**〉 無底式のを本類とした。口縁部・胴部の形状から4種に細分される。

A-I類 胴部は内彎してやや球形状を呈し，口縁部はくびれをもつ頸部から外反して開く。調整法は，内面横位の篋ナデ，外面縦位の篋削りの後一部に篋磨きが施される。

A-II類 胴部は緩く内彎し，口縁部はくびれをもつ頸部から外傾して開く。調整法は，内外面縦位または斜位の篋ナ



第245図 甑形土器分類(2)

デされるものが多い。

A-III類 胴部は緩く内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾または外反気味に開く。調整法は、内面縦位の篋磨き、外面縦位の篋削りされるものが多い。

A-IV類 胴部は外傾または緩く内彎して口縁部に至る。調整法は、一部篋磨きされるものもあるが、多くは篋ナデされている。

A-V類 胴部は緩く内彎し、中位に角状の把手を有し、口縁部は外反して開く。調整法は、内面篋ナデ、外面は篋ナデされるものと篋磨きされるものがある。

A-VI類 胴部は外傾または緩く内彎して口縁部に至る。胴部中位に角状の把手を有する。調整法は、内面は篋磨き、外面は篋磨きされるものと篋ナデされるものがある。把手の接合方法は、70-17あるいは12-5にみられるように、胴部中位に穿孔し、把手を嵌め込んだものと考えられる。

<B 類> 単孔式と無底式の間位置付けられるもので、底部を僅かに残して穿孔されるものである。胴部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。調整法は、内面は篋ナデ及び篋磨き、外面はナデが施される。

<C 類> 単孔式のものである。胴部は内彎しながら立ち上がり口縁部は外反する。内面は篋ナデ、外面はナデ調整される。

<D 類> 多孔式のもの本類とした。2個体（1個体は底部片）出土しており、5孔式と6孔式のものと思われる。6孔式のものには、胴部中位に角状の把手が付く。内外面共ナデ調整される。

②時期区分

当遺跡の集落は、弥生時代終末期から、平安時代まで継続的あるいは断続的に営まれたものである。本節では、弥生時代を1期（森戸I期）、古墳時代を7期（森戸II期からVIII期）、奈良・平安時代を5期（森戸IX期からXII期）に細分して、時期区分した。

当遺跡で古墳時代に位置付けられる住居跡は82軒である。これら古墳時代の住居跡から出土し

た土師器を、南関東における古墳時代土師器の型式学的編年観に基づき、前期を五領式、中期を和泉式、後期を鬼高式と分類した。住居跡についてみると、五領式期に比定されるものは1軒、和泉式期に比定されるものは15軒、鬼高式期に比定されるものは66軒である。そのなかで、和泉式期、鬼高式期に比定されるものは、以下のような住居跡の切り合い関係から、和泉式期を2期に、鬼高式期を4期に細分できる。

土器型式による 時期区分	森戸遺跡での 時期区分	和泉式期・鬼高式期における 重複関係をもつ住居跡の新旧関係
五領式期	森戸II期	
和泉式期	森戸III期	第89号住居跡
	森戸IV期	↓ 第102号住居跡
鬼高式期	森戸V期	第105号住居跡
	森戸VI期	↓ 第103号住居跡
	森戸VII期	↓ 第104号住居跡 — 第45号住居跡 — 第47号住居跡
	森戸VIII期	↓ 第38号住居跡 — 第53号住居跡

③土師器の変遷

本項では、前々項において述べた土師器（高坏・埴・坏・甗）の分類と、出土した各遺構のなかの土器組成をもとに、前項で分けた各期の土師器の特徴を述べる。

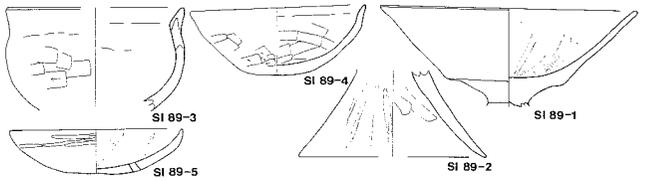
森戸第II期土器群（五領期）

豪族居館跡の堀下層と第118号住居跡から出土した土器群からなる。器種は、甗、壺、脚付壺、高坏、埴、器台、装飾器台などから成る。高坏はA類のみで、器厚は薄く丁寧な篋磨き調整がほとんどされている。甗は、台付甗と平底のものが出土しており、ハケ目整形が施されるものとハケ目整形後ナデ調整されているものが認められる。南北堀1の台付甗は口縁部に輪積み痕を残し、頸部に粘土紐を貼り付けた後、指頭によって押圧されている。土器組成からみた特徴については、豪族居館跡の節で詳述する。

森戸第III期土器群（和泉1期）

第89号住居跡から出土した土器群からなる。器種は高坏、埴、坏からなる。高坏はB-II類、B-V類のもので、坏部は下位に明瞭な稜を有し、外傾又は外反しながら口縁部に至る。坏部内

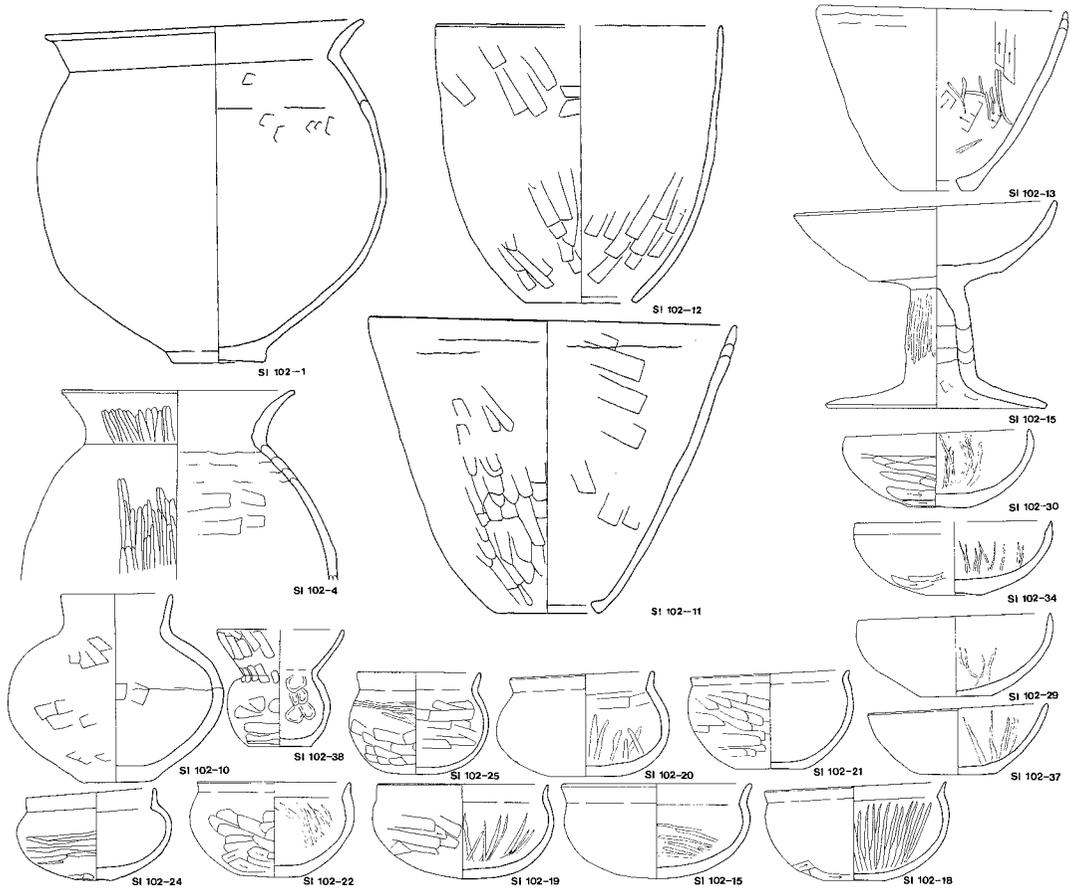
面には刷毛状工具による整形の痕跡が残り、その後篋磨きが施されている。和泉期のなかでは古い様相をもつものと思われる。1住居跡だけのため、セット関係について述べるだけの十分な資料は出土していない。



第246図 森戸第III期土器群

森戸第IV期土器群 (和泉2期)

本群は、第16, 27, 37, 52, 67, 70, 74, 77, 79, 101, 102, 126, 133, 136, 147号住居跡出土の土器群によって構成される。器種は、甕, 壺, 卮, 甗, 鉢, 高坏, 埴, 坏(脚付を含む)である。器種構成のなかで、埴の占める割合が他の時期に比べ特に高く約16%に達する(古墳時代の各期平均は約9%)。同じ供膳具である坏との比較では、坏が54個体, 埴が34個体で、その比は61対39である。高坏は17%と他の時期に比べ高い数値を示している。



第247図 森戸第IV期土器群

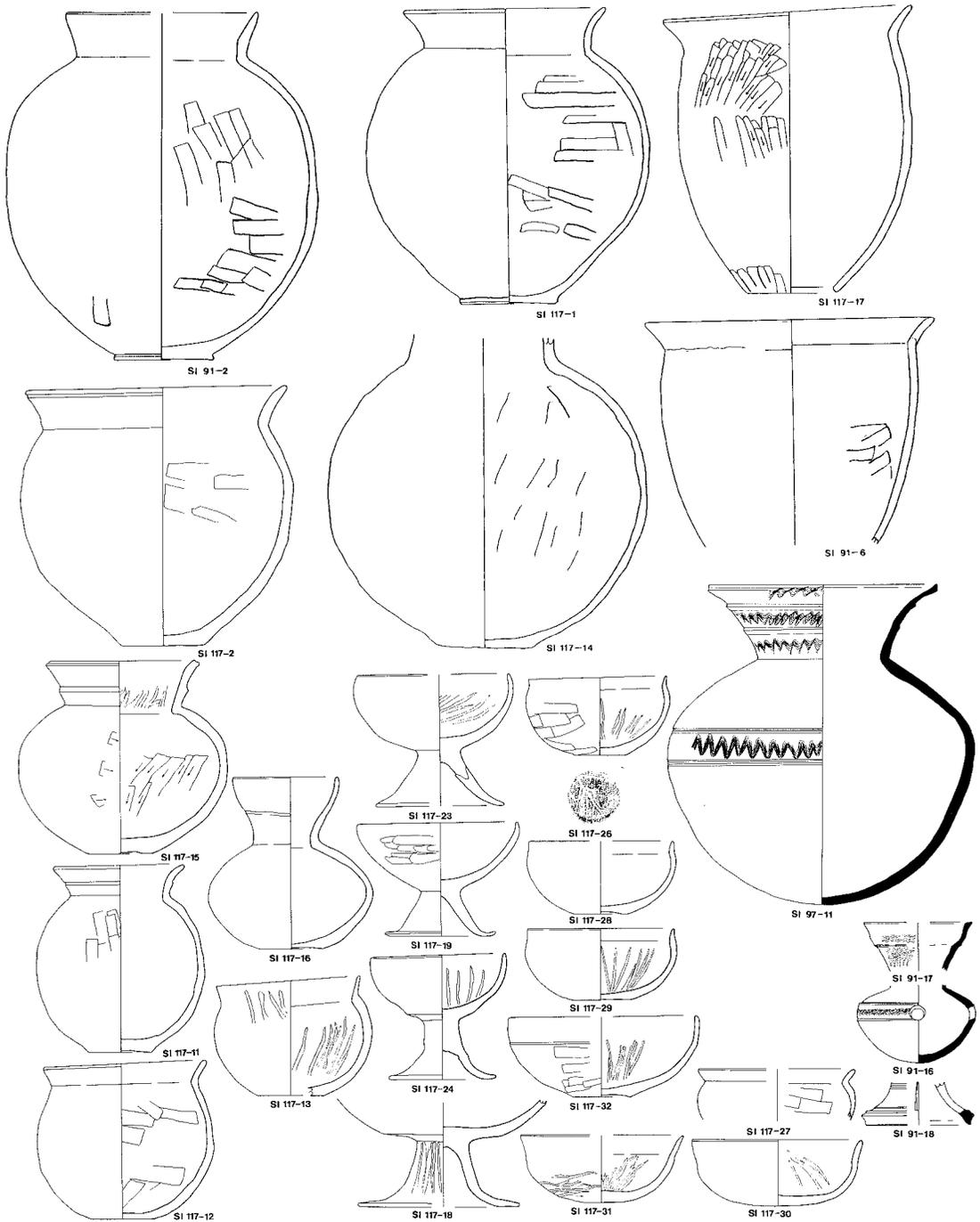
高坏は、B類に限定され、そのなかでもB-I類、B-II類が多くを占め(77%)、それらは丁寧な篋磨きが施されている。埴は、量的に多いだけでなく、タイプ別でもA-I、II、III類、B-I、II、III、IV類、D類とバラエティーに富んでいる。特にA-III類は14個体出土している。底部の形状でみると、平底のものが25個体、丸底のものが6個体と、平底のものが圧倒的に多い。坏は、B類、C類、D類、E類、G類のものがあり、特にB-III類、B-IV類、C-I類、C-II類、D-I類に細分されたものが多い。底部の形状でみると、平底のものが28個体、丸底のものが19個体と、平底のタイプが主流である。また、E類の脚付の坏が出現する。甗は、A-I類、A-IV類、A-VI類、B類、D類がみられる。A-VI類の把手付きの甗はこの期から出現し、D類の多孔式のものはこの期だけに限定される。

須恵器は、細片が8軒の住居跡から43点出土しているが、器形を捉えられるものはなく、明確に共伴するか否かは不明である。

森戸第V期土器群（鬼高1期）

本群は、第12、33、44、55、56、62、73、76、83、86、91、97、105、108、109、110、111、112、117、119、130、135、155号住居跡出土の土器群によって構成される。器種は、甗、壺、甗、鉢、高坏、埴、坏(脚付を含む)、埴、須恵器を模倣したと思われる甗、把手付埴などである。器種構成のなかでは、IV期に比べ坏の出土数はふえ、埴との比では坏が66に対し埴が34と、坏の割合も若干高くなる。高坏は、66個体、19.8%とIV期以降では最も高い数値となる。

高坏は、IV期からの和泉式的様相をもつB類が残ってくるなかで、新しい鬼高式の様相をもつC類も出現する。B類では、B-I類、B-V類が突出して多い。C類では、C-I類、C-II類、C-III類のものがあるなかで、C-I類は9軒の住居跡から23個体と突出する。埴は、IV期よりもさらに増え、37個体出土し、タイプ別でもD類を除くすべてのタイプが現れる。特にA類が多く、65%を占める。底部の形状からみると、平底のものが24個体、丸底のものが11個体と、IV期同様平底のものの方が多いが、その割合は少なくなり、丸底化の傾向を示す。坏は、F類を除くすべてのタイプがあり、特に第112号住居跡からはE類とした須恵器模倣の坏が出土している。底部の形状からみると、平底のものが27個体、丸底のものが31個体と、埴同様IV期と比べると、丸底の割合が高くなっている。甗は、15軒の住居跡から24個体と、IV期からみると飛躍的に増加している。これは、該期の住居跡にカマドが出現することに伴って、甗が煮炊用の土器として一般化したものと考えられ、該期の住居跡23軒のうち15軒から出土しており、その出現率は65%にのぼる。タイプの的にも、A-I類、D類を除くすべてのタイプが存在し、A-II類、A-IV類、A-VI類が特に多い。把手を有するA-V類、A-VI類は、本期をもって消滅する。須恵器は、本期になって増加し、器形の捉られるものが5個体(第91号住居跡から高坏・甗・蓋、第97号住



第248図 森戸第V期土器群

居跡から甕，第105号住居跡から坏)，細片は150点になる。細片は第44，62，111号住居跡を除く20軒の住居跡から出土している。第91号住居跡の甕は，貯蔵穴の覆土中からの出土である。

本期は，埴・坏・甕・B類の高坏などに和泉式期からの様相を色濃くもちつつ，短脚化した高坏C類が出現することに最大の画期をみいだせ，鬼高式期とした所以である。

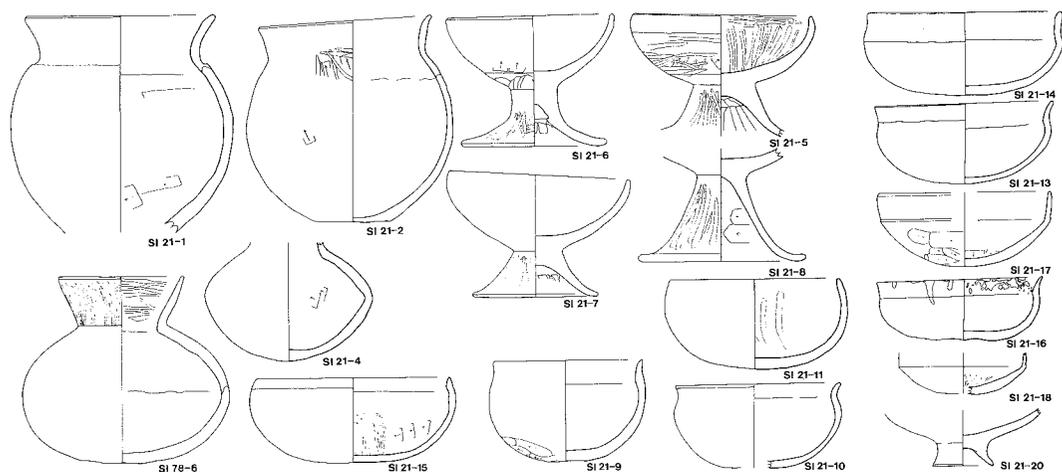
森戸第VI期土器群（鬼高2期）

本群は、第6, 21, 39, 78, 81, 82, 85, 87, 94, 100, 103, 115, 124, 165, 174号住居跡出土の土器群によって構成される。器種は、甕、壺、甗、鉢、高坏、碗、坏(脚付を含む)である。碗との比較では、碗が10個体であるのに対して坏は53個体となり、その比は碗16に対して坏84となる。本期を境にして、供膳具は坏が主体となる。高坏の割合は本期から小さくなる。

高坏は、A類、B類が消滅し、C類、D類が出土するようになるが、D類は1個体のみで、本期においてはC類が主体となる。碗は、A-I類、B-I類、B-III類、B-IV類、C-I類、C-II類とタイプは豊富であるが、個体数は急減する。そして、底部の形状からみたとき、平底のものが3個体、丸底のものが6個体と本期において逆転し、丸底のものが多くなる。坏は、A類を除くすべてのタイプがあるが、須恵器模倣のE類が28個体と、坏全体の55%を占めるようになる。底部の形状では、平底のものが3個体であるのに対し、丸底のものは44個体と、殆ど丸底化すると言っても過言ではない。なお、脚の付くG類は本期をもって消滅し、以後の時期には出現しない。甗は、A-II類、A-III類、A-IV類と、A類のみの構成となる。V期にいったん増加した甗は、本期に至ってまた減少し始める。該期住居跡からの出現率は33%となる。

須恵器は、V期と同じような傾向を示し、個体数で3、細片で193点出土している。

本期は、IV期におけるB類高坏、平底の碗・坏などにみられる和泉式的な様相を払拭し、模倣坏が盛行する。そのことをもって、本期に画期をみいだすメルクマールとする。そして、本期は、鬼高式期の文化がそれまでの和泉式期の文化を完全に凌駕する時期と考えられる。

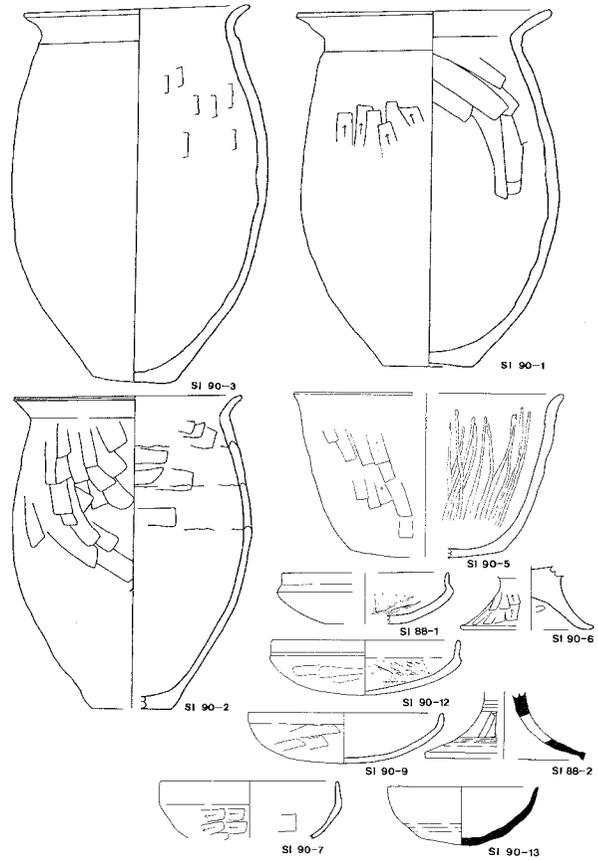


第249図 森戸第VI期土器群

森戸第七期土器群（鬼高3期）

本群は、第45, 47, 49, 54, 60, 64, 80, 88, 90, 104, 116, 121, 131, 138, 162, 168号住居跡出土の土器群によって構成される。器種は、甕、壺、甗、鉢、鉢、高坏、埴、坏、甗である。器種構成では、坏が、全体の38%と最も多く、VI期からの傾向が更に顕著となり、供膳具としては埴から坏に完全にとってかわることになる。

高坏は、VI期と同じような傾向を示し、C類、D類のみの構成になり、C類が主体となる。埴は、A-II類、A-III類、B-III類、C-I類が少数出土する。平底と丸底は混在している。坏は、VI期同様E類が主体となり、坏全体の62%を占める。そのなかでも、E-III類に分類される器



第250図 森戸第七期土器群

高が低く、口縁部が強く屈曲して内傾するものが多く、本期の特徴といえる。底部の形状では、平底のもの4個体に対し、丸底のものが46個体と丸底化の傾向はVI期から継続している。甗は、A-II類、A-III類のみであり、個体数も減少する。

須恵器は、器形を捉えられるものが8個体、細片が224点と増加の傾向をみせる。須恵器を出土する住居跡の割合は16軒中6軒と、約38%の高率であり、当遺跡の古墳時代各期のなかでは最も高い。細片を採ると16軒中13軒と81%の高出現率を示す。なお、90-13の坏は、胎土・調整技法・色調などから常陸太田市幡窯跡で生産されたものと推定される。

本期は、器種構成、同一器種におけるタイプ別組成、底部の形状などにVI期と同様の傾向をもつといえる。しかし、坏のE-III類の盛行に本期の大きな特徴がある。

森戸第八期土器群（鬼高4期）

本期は、第38, 41, 53, 158号住居跡出土の土器群をもって構成されるが、住居数が少なく、各住居から出土した遺物の量が他の時期に比べて少ない。従って、統計的には信頼されうるデータ

は求められないので、出土した遺物のなかから本期の特徴を述べるにとどめたい。器種は、甕、甗、鉢、鉢、埴、坏などがあり、器種構成でみると、甕が突出して多い。

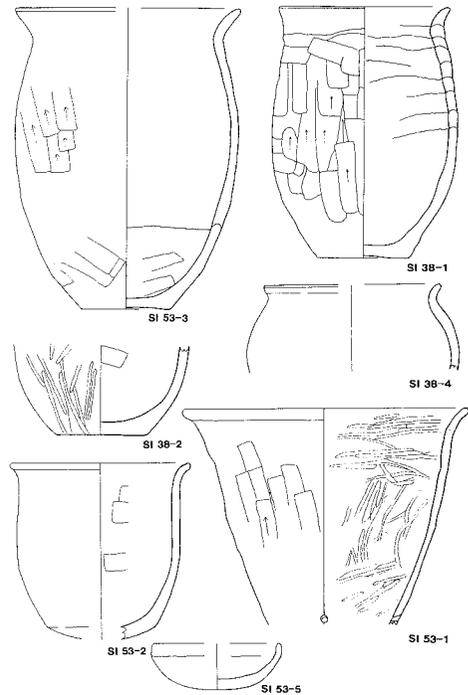
坏は、C-I類のみで、底部は丸底である。甗は、A-III類のものが出土している。

須恵器は、器形の捉えられるものはないが、細片が11点出土している。

④各期の年代について

当遺跡から出土している古墳時代の土器は、前期の五領式期、中期の和泉式期、後期の鬼高式期の各時期にわたっている。そのなかで、遺構の切り合いによる新旧関係から、五領式期は1時期(森戸II期)、和泉式期は2時期(森戸III期・IV期)、鬼高式期は4時期(森戸V期・VI期・VII期・VIII期)

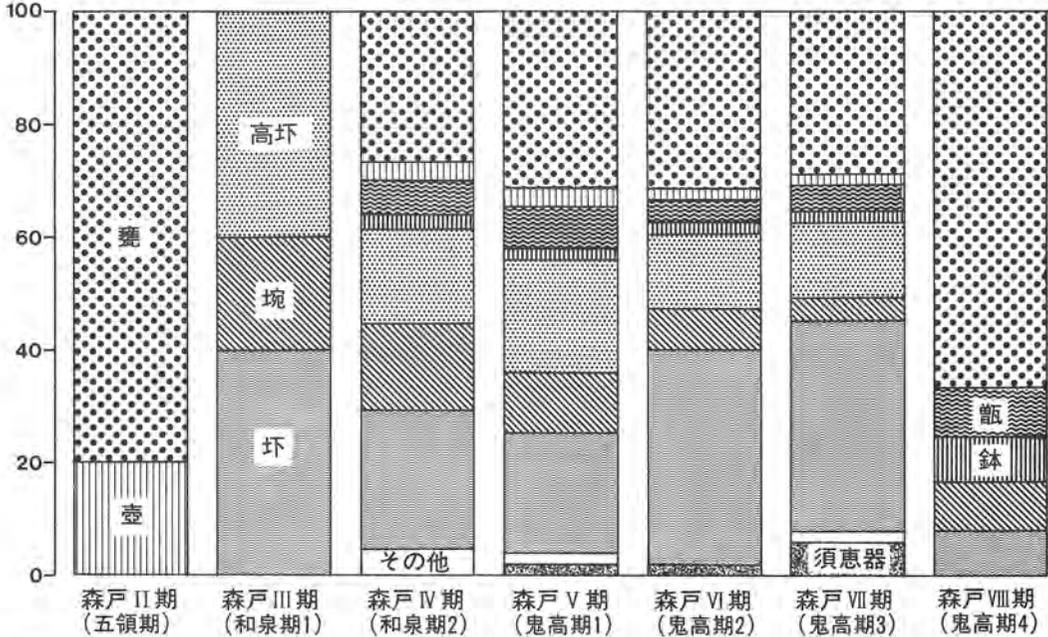
に細分される。しかし、これらはいくまでも型式学的な相対年代であり、実年代をもとめようとすれば、より実年代を推定しえる須恵器の相伴関係をみなければならない。当遺跡において、出土状態と層位的に明らかに相伴すると考えられるものは、V期では3個体、VII期では4個体ある。V期は、91-16の甗、97-11の甕を、その胎土・色調・形状から、陶邑の高蔵窯跡群での編年⁽³⁾と対比させると、TK-208出土の須恵器と併行する時期のものと捉えられる。105-27の坏は、同様にTK-216併行期と捉えられる。TK-216及びTK-208は、5世紀第3四半期に比定される。また、上記3軒のなかで、第105号住居跡からは和泉式の様相を強く留めたB-I類の高坏が、第97号住居跡からは、和泉式の様相を強く留めたB-I類の高坏と共に鬼高式の様相をもつC-I類が相伴し、第91号住居跡からは鬼高式の様相をもつB-I類が、上記須恵器と相伴している。さらに、本県内においては、住居跡にカマドが導入されるのが鬼高期以降とされるのが一般的である。従って、V期は和泉式的な様相を強く残しつつ、鬼高式の様相をもつ高坏が出現することとカマドが導入されることを考え合わせると、V期即ち鬼高期は、その初源を5世紀後半までさかのぼる可能性があり、その下限を下っても6世紀初頭に求めることができよう。VII期は、同様に88-2の高坏がTK-209併行期と考えられ、本期に盛行するE-III類の坏がTK-43併行期の須恵器を模倣したものと捉えられる。従って、VII期には、7世紀第1四半期という年代観を与えたい。なお、須恵器の実年代についてはまだ研究者間でさまざまに論議されており、在地の



第251図 森戸第VIII期土器群

土師器の編年についてもいまだ確立されているとはいえない。従って、本項での実年代についての試論は一つの提示であり、今後、実年代については変わり得る可能性がある。

表16 時期別出土土器 器種構成表



	森戸II期 五領期	割合 (%)	森戸III期 和泉期1	割合 (%)	森戸IV期 和泉期2	割合 (%)	森戸V期 鬼高期1	割合 (%)	森戸VI期 鬼高期2	割合 (%)	森戸VII期 鬼高期3	割合 (%)	森戸VIII期 鬼高期4	割合 (%)
壺	4	80.0	0	0.0	59	27.0	106	31.6	44	31.4	38	28.8	8	66.8
壺	1	20.0	0	0.0	8	3.7	12	3.6	3	2.1	3	2.3	0	0.0
鉢	0	0.0	0	0.0	13	6.0	24	7.2	6	4.3	6	4.5	1	8.3
鉢	0	0.0	0	0.0	3	1.4	5	1.5	3	2.1	2	1.5	1	8.3
高坏	0	0.0	2	40.0	37	17.0	66	19.8	18	12.9	18	13.6	0	0.0
碗	0	0.0	1	20.0	34	15.6	37	11.1	10	7.2	5	3.8	1	8.3
坏	0	0.0	2	40.0	54	24.7	72	21.6	53	37.9	50	37.9	1	8.3
その他	0	0.0	0	0.0	10	4.6	7	2.1	0	0.0	2	1.5	0	0.0
須恵器	0	0.0	0	0.0	0	0.0	5	1.5	3	2.1	8	6.1	0	0.0

表17 古墳時代住居跡出土土器一覽表(1)

住居番号	土 師 器									須 恵 器		時期
	甕	壺	甌	鉢	高坏	埴	坏	その他	細片	器種名	細片	
118	4	1							84			II期
II期小計	4	1	0	0	0	0	0	0	84	0	0	
89					2	1	2		140			III期
III期小計	0	0	0	0	2	1	2	0	140	0	0	
16	1					2	3		103			IV期
27	4		1			1	2		119		2	IV期
37	8	5		1	1	7	6	埴 2	103			IV期
52	2					1	2		642		13	IV期
67	2					4	3		594		4	IV期
70	22	2	6	1	20	8	8	埴 7	3207			IV期
74					1		3		505			IV期
77							3		11			IV期
79	1						1		113			IV期
101	2				4				808		6	IV期
102	9	1	3	1	3	9	12	埴 1	1645		4	IV期
126	2		2		1		4		494		6	IV期
133	1				2				230			IV期
136	2				1	1	1		830		7	IV期
147	3		1		4	1	6		558		1	IV期
IV期小計	59	8	13	3	37	34	54	10	9962	0	43	
12	3		2		4	6	1		857		6	V期
33	12	2	1		1	2	7	把手付埴 1	2229		17	V期
44	1			1				埴 1	38			V期
55	4	1					1		114		9	V期
56	6	1	2	1	8	2	12	甌 2	850		3	V期
62	6		4				1		507			V期
73	1		1						199		3	V期
76	1					1			543		2	V期
83	9			1	14	4	7		1631		5	V期
86	3	1	1		1		1		224		1	V期
91	4		2	1	4	2	2		710	高坏1, 甌1, 蓋1	2	V期
97	3	1	1		4	1	1		1217	甕 1	7	V期
105	6		2		1	4	13		1717	坏 1	1	V期
108	1				1		1		159		1	V期
109	3		2		4	2	2	埴 1	950		12	V期
110	4		1		3	1	3		459		7	V期
111	6				1	3	3		408			V期
112							2		158		3	V期
117	16	3	1		11	2	6		530		1	V期
119	3		1		3	2	2		844		13	V期
130	8	2	2	1	2				834		51	V期
135	3		1		2	3	4	埴1, 裝飾器台1	235		5	V期
155	3	1			2	2	3		844		1	V期
V期小計	106	12	24	5	66	37	72	7	16257	5	150	

表18 古墳時代住居跡出土土器一覧表(2)

住居番号	土 師 器									須 恵 器		時期
	甕	壺	甔	鉢	高坏	埴	坏	その他	細片	器種名	細片	
6				1			2		22	蓋 1	4	VI期
21	3	1			4	4	8		417			VI期
39	4				4	1	1		803		12	VI期
78	5	2		1		1	7		1082		4	VI期
81	1								150		3	VI期
82	3		2		1		3		804		1	VI期
85	1						2		315		4	VI期
87	7					2	3		969		11	VI期
94	1						1		220			VI期
100	5		1		3	1	7		4887		32	VI期
103	7		1		3		8		2691		13	VI期
115	3				1				579		4	VI期
124	2		1	1	1		3		1335		96	VI期
165					1		2		767	高坏 2	7	VI期
174	2		1			1	6		238		2	VI期
VI期小計	44	3	6	3	18	10	53	0	15279		3	193
45							2		93		4	VII期
47	3		1		6	1	6		1338		7	VII期
49	3		3	1	1		6	甗 1	495		13	VII期
54	4	2			1		5		516			VII期
60	3		1		2		2		1267		19	VII期
64	3	1			2	2	3		5940	長頸壺 1	16	VII期
80							1		413	高台付埴 1	13	VII期
88							1		296	高坏 1, 蓋 1	3	VII期
90	6			1	1		7		776	坏 2	19	VII期
104	1						1		1981		17	VII期
116	5				3	1	2		906	高坏 1	62	VII期
121	7				1		2		749		24	VII期
131	1						2	埴 1	452			VII期
138	2		1		1		8		962		19	VII期
162						1			416	坏 1	8	VII期
168							2		371			VII期
VII期小計	38	3	6	2	18	5	50	2	16971		8	224
38	3			1					268		7	VIII期
41	1								190		1	VIII期
53	2		1			1	1		55			VIII期
158	2								344		3	VIII期
VIII期小計	8	0	1	1	0	1	1	0	857		0	11
17	1		1				1		78			鬼高
20	4				2	1	2		827		8	鬼高
63					1				518			鬼高
92	1		2		1				455		7	鬼高
96					1				66			鬼高
120			3		2	1	1		308		24	鬼高
150							1		41			鬼高
161					1		2		127		1	鬼高
古墳時代後期	6	0	6	0	8	2	7	0	2420		0	40
合 計	265	27	56	14	149	90	239	19	61970		16	661

*古墳時代後期とした8軒の住居跡は、遺物が少なくV期からVIII期までに、細分できなかったものである。

表19 時期・器種別出土土器一覧表

器種	タイプ	五領期	和泉1期	和泉2期	鬼高1期	鬼高2期	鬼高3期	鬼高4期	時期不明	合計	
高坏	A	9								9	
	B	I		8	6					1	15
		II		1	9	1				1	12
		III			1						1
		IV			4						4
		V		1		9					10
	C	I				23	8	5			36
		II				6	4	7		1	18
		III				7		2			9
	D					1	1			2	
合計	9	2	22	52	13	15	0	3	116		
坩	A	I		3	6	1				10	
		II	1	3	7		1			12	
		III		14	11		2			27	
	B	I		1	4	3					8
		II			5	5					10
		III			2	1	1	1			5
		IV			3	1	1			1	6
	C	I				1	1	1			3
		II				1	2			1	4
	D			1						1	
	合計	0	1	32	37	9	5	0	2	86	
	坏	A				4				1	5
		B	I	1	4	4	2	2			
II					1	4	1				6
III					9	4					13
IV					6	3					9
C		I		7	4	7	10	1			29
		II			12	22	1	3			38
D		I		7	9	5	2			1	24
		II			1	4	2	1			8
E		I				2	13	19		2	36
		II				1	14	4		1	20
		III					1	7		2	10
		IV			1			1			2
F						1	1			2	
G		I			2	6	4				12
	II			3	2					5	
合計	0	1	53	69	51	50	1	7	232		
甗	A	I		1						1	
		II				6	1	2			9
		III				2	4	3	1	5	15
		IV		4	5	1				1	11
		V			2						2
		VI			2	6					8
	B			1	1					2	
	C				2					2	
	D				2					2	
	合計	0	0	10	24	6	5	1	6	52	

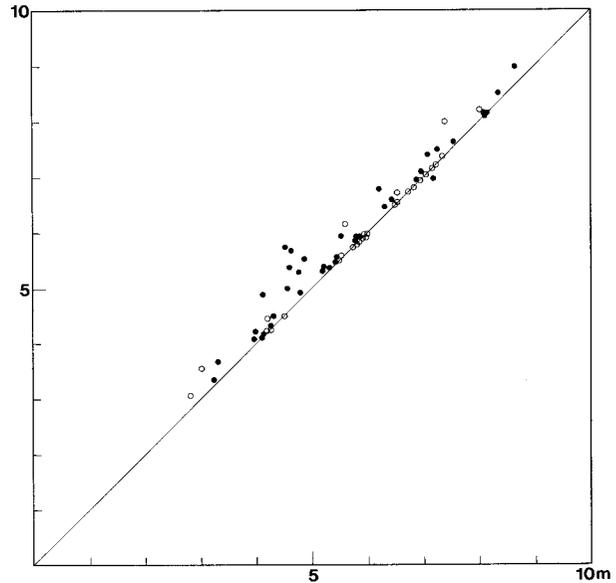
※残存率が低く、タイプに分けられない土器は省いて集計した。

⑤ 竪穴住居跡について

当遺跡からは、古墳時代の住居跡が83軒検出されている。本項では、それら竪穴住居跡の構造上の特徴について資料を分析し、検討を試みた。なお、調査エリアの関係で全掘できずに住居跡の規模・構造がわからないものについては資料から省いた。

〈規模・形態〉

第252図は、古墳時代の住居跡について、長辺の長さを縦軸に、短辺の長さを横軸にとって表したものである（○は推定による）。これをみると、12軒を除いた全ての住居跡が長辺1に対して短辺1～0.9のなかに収まることがわかり、住居跡の殆どが方形を呈するといえる。規模は、3m前後の小型のものから9m近い大型のものまで様々であり、規模によっていくつかのグループングが可能である。5m未満のものを小型住居跡とすると、その数は16軒になる。5m以上6m未満のものを中型住居跡とすると、その数は23軒。6m以上8m未満のものを大型住居跡とすると、その数は22軒。8mを越える超大型のものは6軒である。時期別に分けたものが、表20であるが、各期ごとに規模の異なる住居跡が存在し、集落内での階層性を感じさせる。



第252図 住居跡規模ドット図
（○…推定値による住居跡）

表20 時期別・規模別住居跡数

時期 \ 規模	小型 (3~5m 未満)	中型 (5~6m 未満)	大型 (6~8m 未満)	超大型 (8m以上)	合計
森戸Ⅱ期(五領期)		1			1
森戸Ⅲ期(和泉1期)			1		1
森戸Ⅳ期(和泉2期)	2	5	4	2	13
森戸Ⅴ期(鬼高1期)	3	10	7	1	21
森戸Ⅵ期(鬼高2期)	4	4	4	1	13
森戸Ⅶ期(鬼高3期)	5	3	6	2	16
森戸Ⅷ期(鬼高4期)	2				2
合計	16	23	22	6	67

〈主柱穴〉

資料として使える住居跡数は46軒であるが、そのなかで4か所の主柱穴を有する住居跡は36軒あり、全体の78%を占める。内3軒は補助柱穴を数か所有するものである。その他は、6か所有するもの2軒、8か所有するもの2軒、全くもたないものが6軒である。住居跡の規模別に見ていくと、主柱穴を全くもたないものは小型のものに限られ、5か所以上の

支柱穴を有する住居跡は、全て大型のものである。なかでも、第78号住居跡は8か所の支柱穴と11か所の壁柱穴を有する。

〈貯蔵穴〉

資料となる53軒のなかで、貯蔵穴を有する住居跡は41軒あり、その割合は77%である。1基有する住居跡は36軒、2基有する住居跡は5軒ある。規模別にみたとき、小型の住居跡の場合、14軒の住居跡のなかで設置されているのは8軒で、設置率は57%にすぎない。中型の住居跡では、18軒中16軒で、設置率89%になる。大型及び超大型の住居跡では、15軒すべてに設置されており、2基以上有するものも4軒含まれる。平面形状は、円形のものと同楕円形のものがある。断面形は、半円形のもの、逆台形状のもの、逆円錐形を呈するものがあり、深さは50cm前後のものと同1m前後のものが多い。断面が逆円錐形になるものなかには、第91号住居跡のように深さが133cmもあるものもある。このタイプの貯蔵穴の使用法としては、大きさの異なる円形の板状のものを数枚間隔をおいて置くことによって、何層かの貯蔵スペースをとったのではないかと推定される。設置場所については、カマドの位置、出入口施設との関係など住居跡の内部構造と密接にかかわりをもつことから、別項を設けて述べたい。

〈出入口施設〉

第12, 33, 37, 54, 56, 62, 94, 96, 97, 102, 109, 111, 115, 117, 119, 124, 126号の17軒の各住居跡からは、出入口の梯子ピットを囲んで土手状の高まりをもつ施設が検出された。この施設は、近接する東海村石神外宿B遺跡⁽⁴⁾の古墳時代後期の住居跡10軒からも検出されているが、その内側には貯蔵穴を有することから、出入口にかかわる施設としては報告されていない。



出入口部（第97号住居跡）

しかし、埼玉県後張遺跡⁽⁵⁾の4軒の住居跡においては、この施設の内側に梯子ピットをもつことから、出入口施設として考えられている。また、埼玉県打越遺跡⁽⁶⁾においても同様の施設が検出され、出入口施設と考えられている。当遺跡での土手状の高まりをもつ施設についても、その内側に梯子ピットを有し、その周辺が極めて硬く踏み固められていることから、出入口にかかわる施設と考えて支障はないと思われる。

この土手状の高まりは、幅15～80cm(40～50cmのものが多い)、床面からの比高5～10cmの規模

を有する。この施設は、第117, 119号住居跡で確認されたように、一旦床面を構築した後にロームを床面に貼り敲き締めて作られている。住居跡内の配置状況については、この施設が、支柱穴や貯蔵穴と一連のものとして検出されている。

時期別にみると、和泉式期の森戸IV期で3軒、鬼高式期では森戸V期で9軒、森戸VI期で3軒、森戸VII期で1軒、時期不明1軒となる。つまり、鬼高初頭に盛行することになるが、V期では16軒中9軒でみられ、設置率は実に56%になる。規模別にみると、中型・大型の住居跡に設置されることが多く、中型の住居跡では44%、大型の住居跡では38%の設置率になる。

〈凝灰岩を使用したカマドについて〉

当遺跡では、カマドを構築する際、袖部・天井部に凝灰岩を使用しているものが、第6, 38, 41, 45, 82, 90, 104, 112, 165号住居跡の9軒検出されている。なかでも、第38, 45, 104号住居跡のように、袖部に凝灰岩を垂直に据え、その上に板状の凝灰岩を差し渡した状態で検出され、その構築状況を良好に捉えられるものもある。同じように凝灰岩を袖部前端に使用したカマド



凝灰岩を使用したカマド (第104号住居跡)

は、東海村石神外宿B遺跡⁽⁷⁾の古墳時代後期の住居跡にもみられる。時期別にみると、古墳時代後期の森戸VI・VII・VIII期のものにみられる。住居跡の規模では、小型のもので4軒、中型のもので1軒、大型のもので2軒、超大型のもので1軒、規模不明のもので1軒となる。

〈内部構造 —カマド・出入り口施設・貯蔵穴の位置関係について—〉

当遺跡では、前述したように出入り口の施設とみられる土手状の高まりをもつ住居跡が検出されているが、この施設は、その配置状況からカマドや貯蔵穴・支柱穴とともに一体のものとして構築されていると考えられる。

この施設は、上述した諸施設との配置状況から、次の4タイプに分けられる。

Aタイプは、梯子ピットと貯蔵穴、そしてその間の支柱穴を取り囲むもので、第12, 33, 37, 54, 97, 102, 117, 119, 126号住居跡が該当する。出入り口方向からみて、貯蔵穴は右側のコーナー部に位置するのが殆どで、左側に位置するのは1軒だけ(第126号住居跡)である。カマドの位置は、出入り口の右側の壁に付設されているのが4軒、出入り口の反対側の壁に付設されているのが2軒である。他の3軒はカマドをもたない住居跡である。

Bタイプは、梯子ピットとその右側の支柱穴を取り囲むもので、第56, 62, 109, 111号住居跡が該当する。このタイプのものは、すべて出入り口方向からみて右側のコーナー部に貯蔵穴を有する。カマドの位置は、Aタイプと同様出入り口の右側の壁に付設されるものと、出入り口の反対側の壁に付設されるものがあり、各2軒ずつ検出されている。第115号住居跡も支柱穴は取り囲まないが、Bタイプのものに類似しており、カマドは右側壁に付設されている。

このA・Bタイプのものでも右側カマドのものは、梯子ピット・カマドが、壁中央から貯蔵穴側に寄るものが多い。これは、住居跡内の諸施設を一つのコーナー付近に集中して、住居跡の居住スペースを確保するためと考えられる。この場合、出入り口の方角とカマドのもつ方角とは、90°のずれをもたらすことになる。このような住居のプランニングは、土手状の高まりをもたない第74, 78, 174号住居跡においても、梯子ピットの位置関係から確認される。

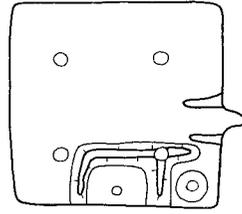
Cタイプは、梯子ピットだけを囲むもので貯蔵穴はその右側（コーナー部付近）に設置される。第94, 124号住居跡がこのタイプに該当する。第94号住居跡ではカマドは出入り口の反対側の壁に付設されている。第124号住居跡のカマドは、住居が調査エリア外に延びているため全掘していないが、確認された住居跡の構造等から、出入り口の反対側の壁に付設されているものと推定される。

Dタイプは、A・B・Cの各タイプが土手状の高まりをもつのに対し、梯子ピットを囲んで全体が一段高く台形状に構築されている。第96号住居跡がこのタイプに該当する。殆どが調査エリア外であるため、カマドや貯蔵穴との位置関係は捉えられない。

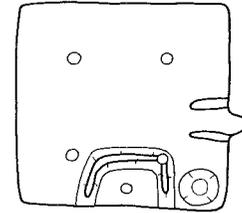
⑥集落の変遷について

先述したように、古墳時代の森戸遺跡は住居跡の切り合いによる新旧関係及び出土土器の分類により、7期に区分される。本項では、各時期ごとに住居跡の形態・配置関係等を検討して、集

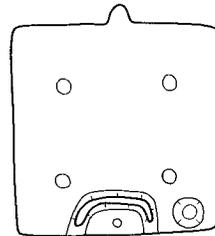
Aタイプ



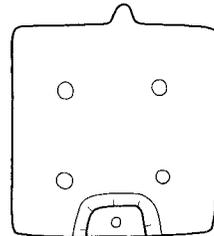
Bタイプ



Cタイプ



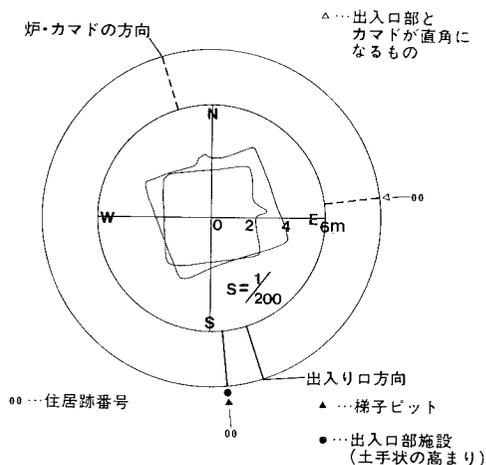
Dタイプ



第253図 出入り口施設
模式図

落の変遷をたどってみたい。しかし、今回の調査は道路建設予定地内に限定されたものであり、調査エリアの東西に広がる広大な森戸遺跡の集落の全容を解明することは不可能である。本項は、調査エリア内における住居跡の配置状況から集落のありようを探ってみたものである。なお、全掘していない住居跡も多くあり、それらは各住居跡の検出状況から推定したデータをもちいた。また、住居跡の方向性については、前項で述べた通り、出入口施設（梯子ピット、土手状の高まり）により出入口の方向として捉えられるものがあり、住居跡の方向としては「出入口方向」を基準にして考えた。

住居跡の規模・方向と出入口部施設模式図



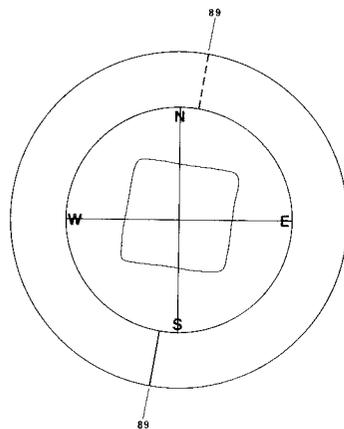
古墳時代の住居跡は、調査エリア全域から検出された。古墳時代中期前半（森戸Ⅲ期）の住居跡は、調査エリア中央部に1軒だけ検出されている。しかし、中期後半（森戸Ⅳ期）から後期にかけては住居跡が急激に増大する。特に調査エリア中央部北側、豪族居館跡張出部の周辺には多くの住居跡が集中し、そこに集落のシンボリックな核を求めるときのごとき様相を呈する。

〈森戸Ⅱ期〉五領期

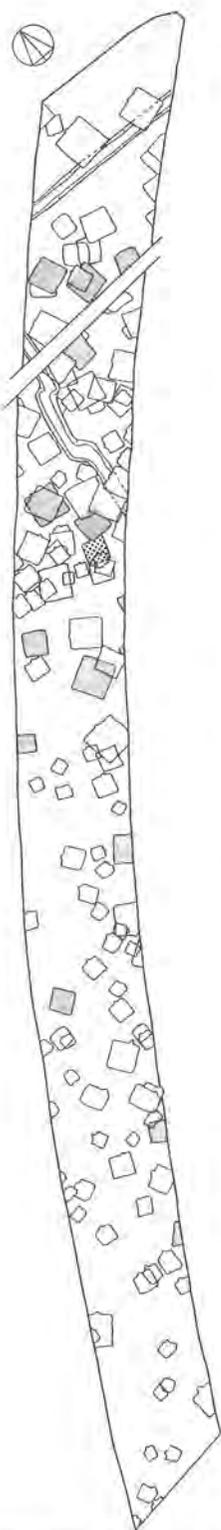
本期に該当する住居跡は1軒（第118号住居跡）検出されているが、同時期の豪族居館跡に伴う遺構と考えられる。居館跡が存在する場合、当然その周辺に一般集落が展開されるものと想像されるが、調査エリア内では検出されていない。本期については、別項の豪族居館跡のまとめで詳述する。

〈森戸Ⅲ期〉和泉期（第1期）

本期に該当する住居跡は1軒（第89号住居跡）検出されている。この1軒は、中央部北側に位置し、和泉期（第2期・森戸Ⅳ期）の住居跡（第102号住居跡）、鬼高期の住居跡（第86, 87, 88号住居跡）によって切られている。住居跡の規模は、一辺が5.5m前後、床面積は30㎡の中型の住居跡で、出入



第254図 森戸Ⅲ期（和泉1期）
住居跡の規模・方向と出入口部施設



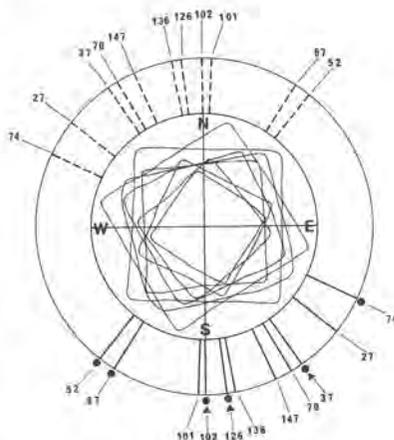
第255図 森戸IV期
住居跡分布図

り口の方向は $N-9^{\circ}-E$ である。炉は床面の中央部のやや北寄りに位置している。

本期に該当するものは、この1軒だけであり、集落の中心は調査エリア外に展開されるものと考えられる。

〈森戸IV期〉和泉期（第2期）

当遺跡において集落が大規模に形成され始めた時期にあたる。該当する住居跡は、第16、27、37、52、67、70、74、77、79、101、102、126、133、136、147号住居跡の15軒である。各住居跡は、調査エリア全体に広く分布しているが、特に中央部北側に居館跡の堀を挟むよう

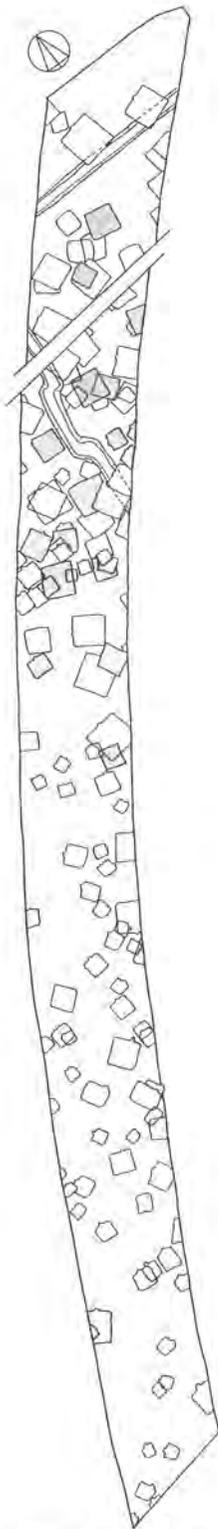


第256図 森戸IV期（和泉2期）
住居跡の規模・方向と出入り口部施設

な配置状況を示して、多数検出されている。

住居跡の規模は、超大型が2軒、大型が4軒、中型が5軒、小型が2軒、規模不明が2軒である。大型・超大型のものは北側部にみられ、中型・小型のものは南側部に分布する傾向を示している。第70、101号住居跡は床面積が $67m^2$ を越し、これらの住居跡は、すべて地床炉を有する。出入り口方向から配置状況を見ると、 $S-0^{\circ}-64^{\circ}-E$ の間にはいる一群があり、これらの住居跡群は南東方向に向いて大きな弧状を描くように位置している。その他の住居跡については、出入り口方向や分布状況から、その配置についての意図や計画性をみいだすことはできない。

北側部の住居跡群は、居館跡の堀を避けて配置され、張出部を挟んで集落が構成されており、規模的にも大型のものが中心となっている。また、居館跡張出部の上層に遺棄された状態で出土した土器群は本期とほぼ同一時期のものと比定され、本期の集落を営んだ人々は、何ら



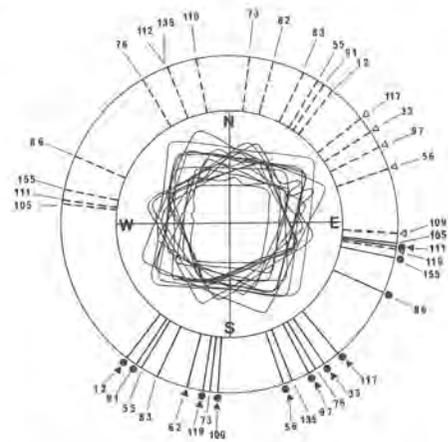
第257図 森戸V期
住居跡分布図

かの意味をもって居館跡そのものに対して祭祀をおこなっていた可能性が考えられる（居館跡廃絶後の居館跡に対する祭祀については、次項の豪族居館跡を参照）。そして、その祭祀の対象となる居館跡の内側に居住することができ、張出部を集落の中心に位置付けることが可能な北側の住居跡群は、本期における中核的な単位集団を構成したことが考えられる。

また、北側部住居跡群の南側に位置する第70号住居跡は、鍛冶炉3基を有しており、本期集落のなかで工房的性格を有した遺構と考えられる。

〈森戸V期〉鬼高期（第1期）

IV期から継続する集落が大規模に展開する時期である。該当する住居跡は、第12, 33, 44, 55, 56, 62, 73, 76, 83, 86, 91, 97, 105, 108, 109, 110, 111, 112, 117, 119, 130, 135, 155号住居跡の23軒である。住居跡は、調査エリア全域に広く展開されるが、IV



第258図 森戸V期（鬼高1期）
住居跡の規模・方向と出入り口部施設

期同様、居館跡の堀は避けながら中央部北側の居館跡張出部周辺に集中している。

本期の住居跡群は、軒数も多く本期内での住居跡の切り合い（第119号住居跡<第117号住居跡）もみられる。また、住居跡の出入り口方向からも、3群（a, b, c群）にグルーピングが可能かと思われるので、細分した各住居跡群ごとに記述する。なお、本期の住居跡は、第91号住居跡で炉を有し、第12号住居跡では炉とカマドを併設するが、そのほかはすべてカマドを有している。

森戸V期 a群 出入り口方向が、S-39°-WからS-9°-Eの間に収

まる9軒の住居跡群であり、住居跡の出入り口部が南ないし南からやや西に偏したものである。大型の住居跡が3軒、中型のものが5軒、小型のものが1軒から構成される。このなかで、第109、119号住居跡は、前項の「住居跡の内部構造」のなかで述べたように、出入り口方向とカマドの方向が90°になる当遺跡独特の構造をもつ。また、第119号住居跡には間仕切りの施設が検出された。これら住居跡のなかで、第12、55号住居跡を除く7軒のものは、大きな円弧を描いて配置されているようにもみることができる。

森戸V期b群 出入り口方向が、S-18~39°-Eの間に収まる7軒の住居跡群であり、住居跡の出入り口部は南東方向にもつものである。大型の住居跡が3軒、中型のものが4軒で、小型のものはみられない。この7軒のなかで、出入り口方向とカマドの方向が90°になる構造をとるものが4軒あり、本群の特徴となっている。

森戸V期c群 出入り口方向によって、S-66~83°-Eの幅に収まる4軒の住居跡群であり、住居跡の出入り口部はほぼ東方向にもつ。住居跡の規模でみると、超大型、大型、中型、小型とそれぞれのものが1軒ずつで構成され、超大型に分類される第105号住居跡は、間仕切り施設を有している。4軒とも出入り口方向とカマドの方向は直線的になるもので、カマドは西壁に位置し、本期のなかでも特徴的な一群である。

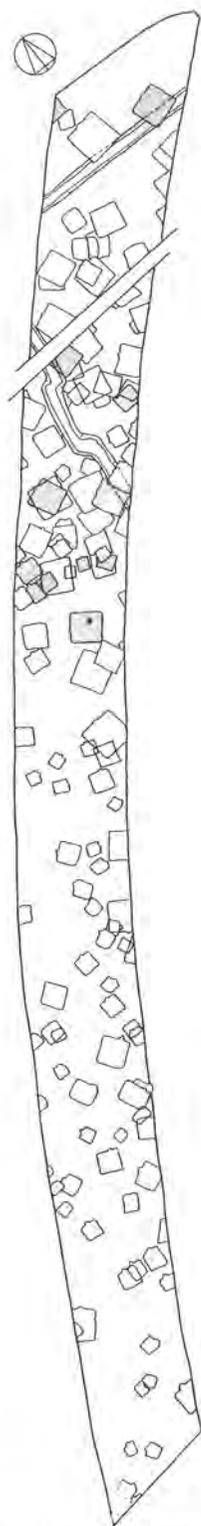
以上、3群について個々に述べてきたが、いずれにしても、居館跡張出部周辺に集中している住居跡は規模や内部施設の面で特異な存在であることがわかる。そして、遺物についてみても、須恵器の甕を出土した第97号住居跡、同じく甕を出土した第91号住居跡、外来系の土師器を出土した第117号住居跡、石製模造品を多数出土している第109、111、119号住居跡などは、いずれもこの周辺に位置している。これらのことから、本期においても、IV期同様、張出部周辺は、拠点的な性格を有する地区であったことが窺える。

また、住居跡内部の構造では、梯子ピット及びそれを取り囲む土手状の高まり、出入り口方向とカマド方向が90°に交差するなど、当遺跡から検出された古墳時代の住居跡の特徴的な構造を最も良く具現化している住居跡群であり、本期の大きな特徴といえる。

なお、細分した3つの住居跡群は、前述したように第117、119号住居跡に切り合いがあることから同時期に存在したとは考えられないが、土器型式からは大きな時間幅を想定することはできず、短期間のなかで変遷していったものと思われる。

〈森戸VI期〉鬼高期（第2期）

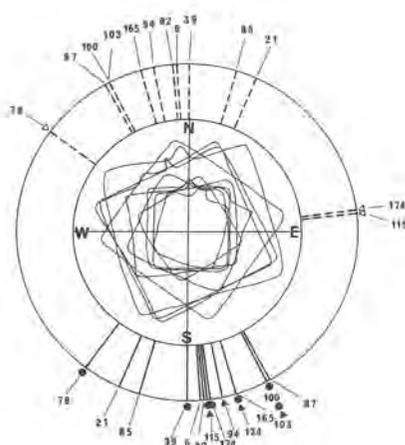
本期は、V期が和泉期から鬼高期への過渡期的な様相をもつものと考えられるのに対して、住居跡の分布状況からみても、安定的な時期といえよう。該当する住居跡は、第6、21、39、78、81、82、85、87、94、100、103、115、124、165、174号住居跡の15軒である。各住居跡の分布状況は、



第259図 森戸VI期
住居跡分布図

南側半分が密度は薄く散在するのに対し、中央部北側、居館跡張出部周辺に集中している。本期からの大きな特徴は、居館跡の堀の覆土を掘り込んで住居跡が構築されることである(第103, 124, 165号住居跡)。

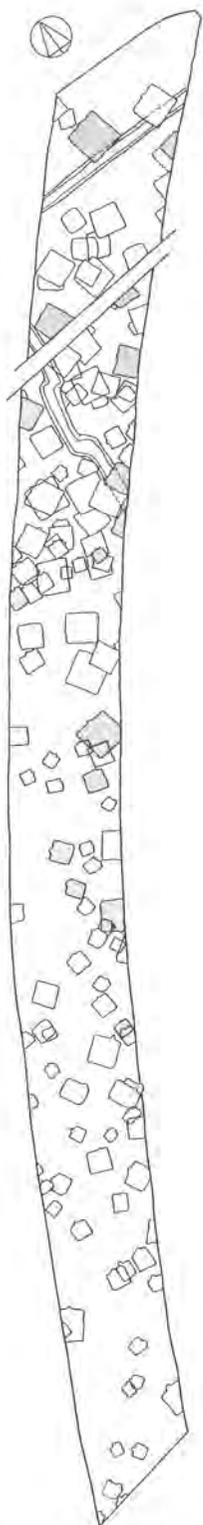
住居跡の規模は、超大型のものが1軒、大



第260図 森戸VI期(鬼高2期)
住居跡の規模・方向と出入り口施設

型のもものが4軒、中型のもものが4軒、小型のもものが4軒である。ここでも、大型のものは、張出部周辺に集中する傾向がみられる。出入り口方向によってグルーピングすると、S-0°-29°-Eの幅のなかに収まり、住居跡の出入り口部を南からやや南東方向に向ける一群と、S-16°-36°-Wの幅で収まり、住居跡の出入り口部を南からやや西寄りに向ける一群に分けることが可能である。このなかで、第78号住居跡は、内部構造及び集落内での位置にこれまでの各時期にみられなかった特徴がある。つまり、本跡は、8か所の支柱穴と11か所の壁柱穴を有するという特異な住居構造をもつ大型住居である。そして、V期までは、そのようなやや特異な住居跡は、居館跡張出部を挟んだ位置に配置されるのに対し、本跡は、かつての集落の中心であった場所からやや距離を置き、より南側に位置している。このことは、本期に至って住居跡が居館跡・堀の覆土上に進出していくことと併せて、本期(鬼高2期)の集落を営んだ人々が、居館跡に対する意識に何らかの変容があったのではないかと考えられる。

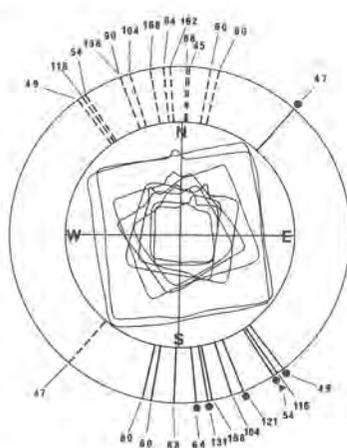
また、本期でグルーピングした2群は、第85号住居跡と第87号住居跡が近接していることや出入り口方向から、同時存在の可能性は少ないものと思われる。



第261図 森戸VII期
住居跡分布図

〈森戸VII期〉鬼高期（第3期）

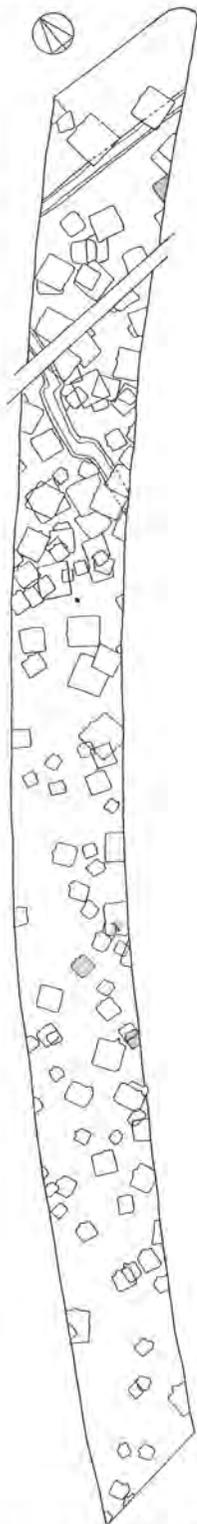
本期は、鬼高期においても最も安定的な集落構成をとっていたと思われる時期である。該当する住居跡は、第45、47、49、54、60、64、80、88、90、104、116、121、131、138、162、168号住居跡の16軒である。各住居跡の配置状況をもみても、北側部に集中する傾向は



第262図 森戸VII期（鬼高3期）
住居跡の規模・方向と出入り口部施設

VI期までと変わらないが、中央部にも集落の単位集団としてのまとまりをみせる一群があることは、これまでにはみられなかったことである。VI期からみられた堀の覆土上への住居跡の構築は、本期においても着実に進んでいる。

住居跡の規模は、超大型のものが2軒、大型のものが6軒、中型のものが3軒、小型のものが5軒である。出入り口方向をみると、第47号住居跡を除きS-1~40°-Eのなかにあり、幅はあるものの集落を構成する住居跡の殆どが南から南東方向に出入り口部をもつことになる。第47号住居跡については、カマドが南西壁に付設され出入り口部は北東壁に有する、当遺跡ではやや異質な構造をとるものである。しかし、本跡が帰属する中央部の住居跡単位集団の中でみると、出入り口部は総じて単位集団の中心部に向く弧状の住居配置を示している。遺物の出土状況を見ると、第116号住居跡からは、双孔円板6点、白玉3点、管玉1点が、第121号住居跡からも双孔円板6点が出土している。このことから、居館跡張出部周辺の住居跡群は、集落内での中核的な性格をもっていたものと思われる。しかし、本期のなかで、石製模造品を大量に出土した第64号住居跡が、張出部周辺を離れて中央部の住居跡群のなかに位置することは、VI期の第78号住居跡とともに注目される。ただ、今回の調査のなかだけでは判断することは不可能であ



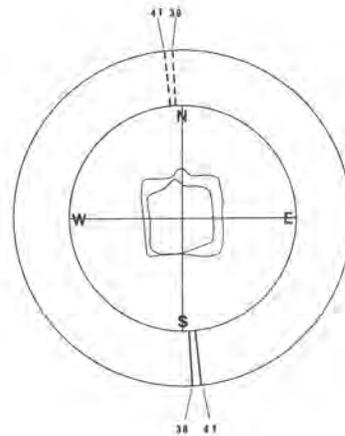
第263図 森戸Ⅷ期
住居跡分布図

り、問題の提示に留めておきたい。

〈森戸Ⅷ期〉鬼高期（第4期）

本期は、当遺跡における集落の中心が調査エリアから離れ、周辺の地域に移っていった時期と考えられる。該当する住居跡も第38、41、53、158号住居跡の4軒だけとなり、分布状況からも調査エリアの南部と北端部に分かれる。

住居跡の規模でみると、第158号住居跡が大型になるものと思われるが、全掘した第38、41号住居跡は小型のものである。この2軒を、出入り口方向でみるとS-3~6°-Eの狭い範囲に収まり、本期のひとつの単位集団を構成する住居跡群の一部を成すものと考えられる。



第264図 森戸Ⅷ期（鬼高4期）
住居跡の規模・方向と出入り口部施設

以上、各期ごとに集落の変遷を概観してきたが、これらを総括すると次のようなことになる。

古墳時代、森戸遺跡における、今回の調査エリアのなかでの集落の変遷は、集落が展開し始める森戸Ⅳ期以降、前期の豪族居館跡張出部の周辺を集落展開の核として捉えることができる。森戸Ⅳ・Ⅴ期においては居館跡の堀を避け、森戸Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ期に至って堀の覆土上に住居跡を構築するという違いは認められる。しかし、その周辺の住居跡には、規模、内部構造、出土遺物などの点で他の住居跡と比較したとき、種々の優越性が感じられる。そして、森戸Ⅴ期においてこの張出部周辺に強く集中していた住居跡が、森戸Ⅶ期にはややその集中度が弱くなる傾向が現れ、森戸Ⅷ期に至っては、集落の中心が完全に他の場所に移動していることがわかる。

次に、炉・カマドを含めた住居跡の内部構造についてみると、集落が大きく展開する森戸Ⅳ期からⅤ期にかけては、炉をもつ住居跡がカマドをもつ住居跡へと社会が大きく変革する時期にあたる。当遺跡においてカマドが導入されるのは、森戸Ⅴ期・鬼高期の初頭である。この時期のカマドは、その付設される場所が、北・西北西・東方向と3つの方向性を示し、それが森戸Ⅶ期以降になると、ほぼ北壁に付設されるという、斉一性をもつようになる。また、カマドが導入された初期の段階（森戸Ⅴ期）では、カマドが貯蔵穴や梯子ピット・土手状の高まりをもつ出入口施設とセットとなって構築されるという特異な展開をみせている。

森戸遺跡は、古墳時代前期に首長層が居館を築造していることからわかるように、地理的優位性を背景として、古墳時代には、この地域における拠点的な集落が営まれていたものと思われる。

注

- (1) 岩淵一夫「高坏の製作方法について」『赤羽根』栃木県埋蔵文化財調査報告第57集 1984年
- (2) 杉原荘介，大塚初重編『土師式土器集成』1971～74年
古墳時代土器研究会『古墳時代土器の研究』1984年
- (3) 田辺昭三『須恵器大成』1981年
- (4) 茨城県教育財団「石神外宿B遺跡」『常磐自動車道関係埋蔵文化財調査報告書第23集』1983年
- (5) 宮崎朝雄「後張 集落について」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集』1983年
- (6) 会田明 他『打越遺跡』富士見市教育委員会 1978年
- (7) 前掲(4)に同じ

参考文献（順不同）

- ・茨城県『茨城県史 原始古代編』1985年
- ・茨城県教育財団「石神外宿B遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第23集』1983年
- ・茨城県教育財団「西原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第31集』1985年
- ・茨城県教育財団「南三島遺跡3・4区」『茨城県教育財団文化財調査報告第49集』1989年
- ・茨城県教育財団「鹿の子C遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第20集』1982年
- ・岩淵一夫 他「赤羽根」『栃木県埋蔵文化財調査報告第57集』1984年
- ・大村 直「集落からみた社会の変化」『季刊考古学第16号』1986年
- ・小笠原好彦「民衆の村」『古代史復元6 古墳時代の王と民衆』1989年
- ・鬼頭清明「古代の村」『古代日本を発掘する6』1985年
- ・木本元治「福島県内の黒色土器（古墳時代～奈良時代）」『東国土研究第2号』1989年
- ・黒沢彰哉「茨城県中・南部における六・七世紀土師器の様相」『婆良岐考古第8号』1986年

- ・酒井清治「武蔵国における須恵器年代の再検討」『研究紀要第9号』埼玉県立歴史資料館 1987年
- ・坂口 一「群馬県における古墳時代中期の土器の編年—共存関係による土器型式組列の検討—」『研究紀要第4号』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987年
- ・辻 秀人「東北古墳時代の画期について（その1）—中期後半の画期とその意義—」『福島県立博物館紀要第3号』福島県立博物館 1989年
- ・外山政子「群馬県地域の土師器甕について」『研究紀要6』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989年
- ・那珂町『那珂町史 自然環境 原始古代編』1988年
- ・中村倉司「関東地方における竈・大形甕・須恵器出現時期の地域差」『研究紀要第6号』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989年
- ・中村 浩『和泉陶邑窯の研究—須恵器生産の基礎的考察—』1981年
- ・中村 浩『須恵器』考古学ライブラリー5 1980年
- ・中村 浩 他『陶邑I』大阪府文化財調査報告書第28輯 1976年
- ・原口正三『須恵器』『日本の原始美術4』1979年
- ・水口由紀子「古墳時代後期における土師器の一分析」『東国土器研究第2号』東国土器研究会 1989年
- ・宮崎朝雄 他「後張」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26号』1983年

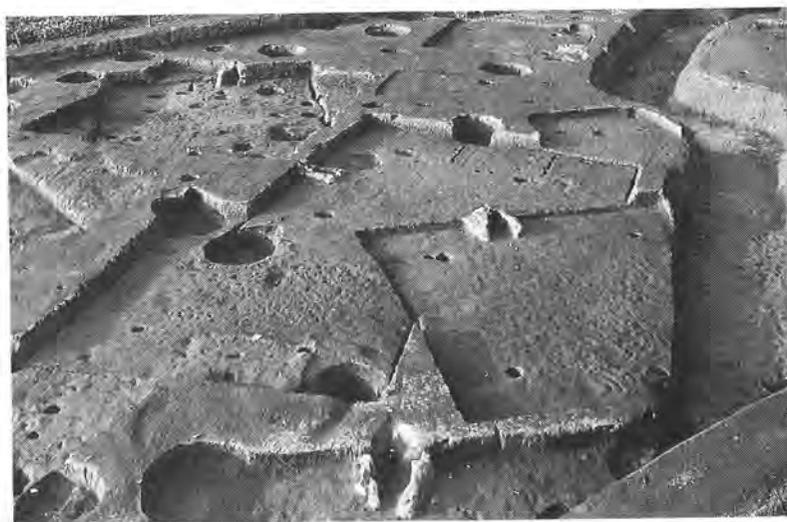


表21 古墳時代竪穴住居跡一覧表

(注) 入り口部施設の欄で、「土」は土手状の高まり、「P」は梯子ピットを示す。

住居番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)		壁高(cm)	内 部 施 設				炉 カマド	覆土	出 土 遺 物	時期	備 考
				長 軸	短 軸		壁溝	主柱穴	貯蔵穴	入り口施設					
6	H2b ₉	N-4°-W	(方 形)	5.92	(5.20)	14~16	全周	2	不明		カマド	自然	土師器・須恵器・石製品・礫・鉄製品・鉄滓	VI	
12	G2e ₇	N-38°-E	(方 形)	7.38	(4.53)	54~60	全周	2	○	土・P	炉・カマド	自然	土師器・須恵器片・石製模造品	V	
16	G3d ₄	不 明	(方 形)	5.48	(1.90)	40~45	(全周)	2	不明		不明	自然	土師器・石製品	IV	
17	G3b ₉	N-34°-E	隅丸長方形	4.20	3.45	6~9	全周	無	無		カマド	自然	土師器・陶器片	後期	
20	G3a ₉	N-26°-W	長方形	5.49	4.80	38~48	全周	4	○		カマド	自然	土師器・須恵器片・陶器片・鉄製品・石製模造品	後期	
21	F3i ₄	N-23°-E	長方形	5.27	4.75	5~24	全周	4	○		カマド	自然	土師器・石製模造品	VI	焼失家屋
27	F3i ₇	N-51°-W	(方 形)	4.70	(3.65)	28~39	無	4	2		炉	自然	土師器・須恵器片	IV	
33	F3e ₉	N-57°-E	方 形	6.46	6.32	52~68	全周	4	2	土・P	カマド	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・礫・滑石	V	
37	E3j ₈	N-34°-W	方 形	5.38	5.22	27~39	全周	4	○	土・P	炉	自然	土師器・石製模造品	IV	
38	F3e ₉	N-3°-W	方 形	3.37	3.24	38~43	無	無	無		カマド	自然	土師器・須恵器片	VIII	
39	F3c ₉	N-0°	方 形	4.27	4.25	36~44	全周	4	無	P	カマド	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・石製品	VI	
41	E3j ₉	N-6°-W	方 形	4.14	4.12	16~34	全周	4	無		カマド	自然	土師器・須恵器片・刀子・石製模造品	VIII	
44	F4a ₉	N-33°-W	(方 形)	6.75	(2.82)	54~62	全周	1	不明		カマド	自然	土師器・石製模造品・礫	V	
45	F3d ₉	N-2°-E	長方形	3.55	[3.00]	43~48	全周	無	○		カマド	自然	土師器・須恵器片・石製品	VII	
47	E4i ₃	N-40°-E	(方 形)	7.05	(5.35)	43~50	全周	4	不明	P	カマド	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・石製品・鉄製品	VII	
49	E4f ₁	N-37°-W	隅丸方形	4.24	4.00	25~33	無	1	無	P	カマド	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・礫	VII	
52	E4f ₉	N-39°-E	(方 形)	6.94	(4.20)	48~56	全周	5	不明	P	炉	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・鉄製品・石製品	IV	
53	E4j ₃	N-90°-W	不 明	不明	不明	不明	不明	不明	不明		カマド	不明	土師器・石製品	VIII	
54	E4d ₁	N-34°-W	方 形	4.91	4.83	24~41	全周	4	○	土・P	カマド	自然	土師器・鉄製品・石製品・礫	VII	
55	E3e ₉	N-32°-E	(方 形)	4.26	(3.25)	11~27	無	無	○		カマド	自然	土師器・須恵器片・石製模造品	V	
56	F3g ₉	N-72°-E	方 形	[5.49]	5.45	48~57	全周	4	○	土・P	カマド	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・石製品・鉄滓・礫・炭化材	V	焼失家屋
60	E4c ₇	N-9°-E	隅丸長方形	5.39	4.61	40~46	全周	4	無		カマド	自然	土師器・須恵器片・鉄製品・石製模造品・滑石・石製品	VII	
62	E4b ₉	N-15°-E	方 形	5.22	5.20	27~43	全周	4	○	土	カマド	自然	土師器・石製模造品・滓・礫	V	
63	E4a ₉	N-11°-E	(長方形)	(3.50)	3.12	13~17	無	無	無		カマド	自然	土師器片	後期	
64	E4a ₉	N-6°-W	方 形	8.51	8.34	12~27	全周	4	無	P	カマド	自然	土師器・須恵器・石製模造品・石器	VII	
67	D4h ₉	N-33°-E	方 形	4.50	4.32	24~42	全周	4	○	P	炉	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・滑石	IV	
70	D5g ₁	N-30°-W	方 形	8.15	8.13	10~36	全周	4	○		炉	自然	土師器・石製模造品・鉄滓・土製品・礫・滑石・石製品	IV	焼失家屋
73	D4e ₉	N-7°-E	方 形	5.00	4.56	5~8	無	4	無		カマド	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・鉄製品	V	
74	D4c ₉	N-64°-W	方 形	5.52	5.30	8~16	無	4	○	P	不明	自然	土師器・石製模造品・石製品	IV	
76	D5g ₂	N-30°-W	方 形	5.87	5.80	18~20	無	4	○	P	カマド	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・礫・石製品	V	
77	D5g ₃	不 明	(方 形)	(1.79)	(1.35)	19	(全周)	無	無		無	自然	土師器	IV	
78	D5e ₂	N-54°-W	方 形	7.38	7.06	20~40	全周	8	2	P	カマド	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・滑石	VI	
79	D5e ₃	不 明	(方 形)	(3.13)	(2.80)	34~39	(全周)	無	無		無	自然	土師器・石製模造品・鉄滓・炭化材	IV	焼失家屋
80	D4a ₉	N-12°-E	方 形	4.18	4.14	20~27	(全周)	3	無		カマド	不明	土師器・須恵器・石製模造品・滑石・鉄製品	VII	
81	D5a ₁	不 明	不 明	不明	不明	不明	無	無	無		カマド	不明	土師器・須恵器片・滑石	VI	
82	D5b ₂	N-5°-W	長方形	[4.50]	4.12	13前後	一部	4	○		カマド	自然	土師器・須恵器片	VI	

住居 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)		壁高 (cm)	内 部 施 設				炉 カマド	覆土	出 土 遺 物	時期	備 考
				長 軸	短 軸		壁溝	柱穴	貯蔵穴	入り口扉設置					
83	D5b ₃	N-26°-E	方 形	7.65	7.56	10~17	無	6	○		不明	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・石製品・礫・炭化材	V	焼失家屋
85	D5b ₄	N-16°-E	長方形	3.65	3.27	12~30	全周	4	無		カマド	自然	土師器・須恵器片	VI	
86	D5c ₅	N-66°-W	方 形	5.48	5.12	27~38	無	4	○	P	カマド	自然	土師器・須恵器片・石製模造品	V	
87	D5c ₅	N-29°-W	(方 形)	[4.43]	[4.18]	19~20	不明	4	○		カマド	自然	土師器・須恵器片・土製品・石製品・鉄製品	VI	
88	D5b ₅	N-1°-E	方 形	3.07	2.82	不明	無	2	無		カマド	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・礫	VII	
89	D5a ₈	N-9°-E	方 形	5.55	5.48	11~14	無	4	○		炉	自然	土師器・石製品・礫	III	
90	D5a ₇	N-21°-W	(方 形)	6.70	(4.37)	37	無	2	無		カマド	自然	土師器・須恵器・土製品・石製品・礫	VII	
91	C5j ₄	N-34°-E	方 形	5.97	5.80	27~35	無	4	○		炉	自然	土師器・須恵器・土製品・石製模造品・石製品・滑石・炭化材	V	焼失家屋
92	D5a ₄	N-4°-W	長方形	[4.54]	3.45	19~26	無	1	無		カマド	自然	土師器・須恵器片・鉄製品	後期	
94	C5j ₁	N-12°-W	長方形	5.73	4.50	8前後	全周	4	○	土	カマド	自然	土師器	VI	
96	C5i ₁	N-4°-W	(方 形)	(3.57)	(3.26)	17~18	一部	不明	不明	土・P	不明	自然	土師器	後期	
97	C5i ₅	N-63°-E	方 形	6.77	6.22	27~49	全周	4	2	土・P	カマド	自然	土師器・須恵器・石製模造品・鉄製品・滑石・礫	V	
100	C5h ₅	N-28°-W	方 形	7.07	6.93	55~58	全周	6	○	P	カマド	自然	土師器・須恵器片・鉄製品・石製模造品・石製品・礫	VI	
101	C5h ₅	N-3°-E	方 形	8.31	8.12	45~57	全周	4	2		炉	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・滑石	IV	
102	C5j ₈	N-0°	方 形	6.57	6.44	23~38	(全周)	2	○	土・P	炉	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・石製品・鉄製品・礫・炭化材	IV	焼失家屋
103	C5j ₈	N-28°-W	方 形	7.47	7.24	23~31	(全周)	4	○	土・P	カマド	自然	土師器・須恵器片・石製品・滑石	VI	
104	C5i ₉	N-18°-W	(方 形)	[6.16]	[5.60]	24~40	(全周)	3	無		カマド	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・石製品・礫	VII	
105	C5i ₇	N-83°-W	方 形	[8.23]	8.03	30~39	(全周)	3	無		カマド	自然	土師器・須恵器・土製品・土製品	V	
108	C5e ₅	不明	(方 形)	(2.13)	(2.12)	22~23	無	無	○		無	自然	土師器・須恵器片・礫	V	
109	C5e ₇	N-86°-W	方 形	5.94	5.89	10~20	全周	4	○	土・P	カマド	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・滑石・礫・炭化材	V	焼失家屋
110	C5h ₆	N-11°-W	(方 形)	4.51	(4.30)	25	無	3	無		カマド	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・鉄滓・礫	V	
111	C5g ₆	N-82°-W	方 形	4.09	3.97	30~37	全周	4	○	土・P	カマド	自然	土師器・石製模造品・礫	V	
112	C6g ₁	N-21°-W	(方 形)	(4.36)	(2.84)	35	(全周)	1	無		カマド	自然	土師器・須恵器片	V	
115	C6e ₂	N-84°-E	長方形	5.66	4.61	15~31	無	2	○	土・P	カマド	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・鉄滓・礫・鉄製品	VI	
116	C6d ₃	N-35°-W	(方 形)	7.16	(6.34)	11~27	無	4	無		カマド	自然	土師器・須恵器・鉄製品・石製模造品・石製品・礫	VII	
117	C6d ₂	N-51°-E	方 形	5.60	[5.53]	37~49	(全周)	4	○	土・P	カマド	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・石製品・滑石	V	焼失家屋
118	C6e ₁	N-6°-E	(隅丸方形)	3.90	(2.14)	14~27	無	2	不明		不明	自然	土師器・弥生式土器	II	
119	C6d ₁	N-81°-W	方 形	7.20	6.97	41~54	全周	8	○	土・P	カマド	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・石製品・礫・滑石	V	
120	C5d ₆	N-11°-W	長方形	3.68	[3.16]	30	無	不明	不明		不明	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・礫・滑石	後期	
121	C5c ₇	N-22°-W	(方 形)	6.51	(5.84)	25~40	無	3	不明	P	不明	自然	土師器・須恵器片・石製模造品	VII	
124	C6b ₁	N-16°-W	(方 形)	6.51	(5.43)	43	(全周)	2	○	土・P	不明	自然	土師器・須恵器片・石製模造品	VI	
126	C6b ₂	N-7°-W	(方 形)	5.94	(5.79)	11~17	(全周)	3	○	土・P	不明	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・石製品・鉄製品	IV	
130	C6b ₈	N-15°-E	(方 形)	5.84	(5.43)	8~28	無	3	不明		不明	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・鉄製品・礫・炭化材	V	焼失家屋
131	C6a ₈	N-10°-W	(方 形)	5.84	(2.77)	19~21	無	2	○	P	不明	自然	土師器・石製模造品・石製品・鉄製品・礫	VII	

住居 番号	位置	主軸方向	平面形	規 模 (m)		壁高 (cm)	内 部 施 設				炉 カマド	覆土	出 土 遺 物	時期	備 考
				長 軸	短 軸		壁溝	主柱穴	貯蔵穴	入り口部施設					
133	B6i ₇	N-80°-W	(方 形)	5.93	(4.41)	23~27	無	不明	不明		不明	自然	土師器・鉄製品・鉄滓	IV	
135	B6h ₅	N-21°-W	方 形	5.38	5.34	不明	全周	4	○		カマド	自然	土師器・須恵器片	V	
136	B6i ₅	[N-10°-W]	方 形	7.98	[7.40]	不明	不明	4	○		不明	自然	土師器・須恵器片・鉄滓	IV	
138	B6i ₁	N-21°-W	(方 形)	(7.32)	7.24	30~37	全周	4	不明		カマド	自然	土師器・須恵器片・鉄製品	VII	
147	B6g ₃	N-24°-W	方 形	6.96	6.89	12~37	無	1	○		(伊)	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・礫・石製品	IV	
150	B6e ₉	N-87°-E	(方 形)	[4.72]	[4.36]	14~16	無	4	無		不明	自然	土師器	後期	
155	B6f ₇	N-78°-W	方 形	6.71	[6.55]	8~22	無	4	○	P	カマド	自然	土師器・須恵器片・石製品・鉄製品	V	
158	B7g ₁	N-78°-W	(方 形)	(5.78)	(5.33)	25~29	無	1	不明		不明	自然	土師器・須恵器片・石製模造品・鉄製品	VIII	
161	B7e ₂	N-7°-W	(方 形)	(6.30)	(2.91)	21	無	無	不明		不明	不明	土師器・須恵器片	後期	
162	B7e ₃	N-4°-W	(方 形)	5.75	(4.92)	31	無	2	不明		カマド	自然	土師器・須恵器	VII	
165	B7c ₄	N-16°-W	方 形	8.20	8.12	12~47	無	3	無		カマド	自然	土師器・須恵器・石製品	VI	
168	B6b ₆	N-11°-W	方 形	9.00	8.65	0~6	無	4	無		カマド	不明	土師器・石製品	VII	
174	A6i ₉	N-83°-E	(方 形)	(5.81)	(5.13)	36~41	無		○	P	カマド	自然	土師器・須恵器片	VI	

(2) 奈良・平安時代

①出土土器について

奈良・平安時代の住居跡から出土している土器をみると、その器種構成や調整技法などから、下記のⅠ群からⅤ群までのようなグループにまとめられる。ここでは、各グループの特徴を記述し、当遺跡での土器の新旧関係を明らかにしたい。

尚、当遺跡の奈良・平安時代の住居跡の重複関係は以下の通りである。

旧	新
第8号住居跡	第7号住居跡
第14号住居跡	第13号住居跡
第19号住居跡	第23号住居跡
第28号住居跡	第29号住居跡
第42号住居跡	第46号住居跡

Ⅰ群 (第265図)

Ⅰ群は、第19・25・156号住居跡から出土している土器をもって設定した。土師器では甕・坏、須恵器では甕・坏が出土している。主体となるのは土師器で、須恵器は第25号住居跡から出土した甕と第19号住居跡から出土した坏だけである。

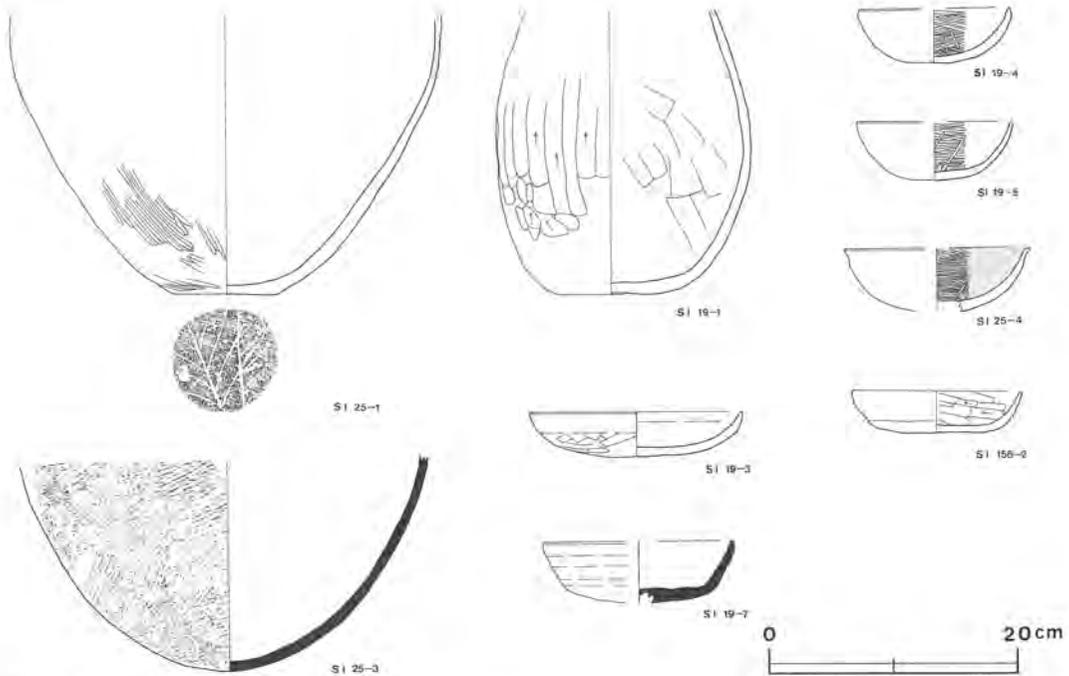
土師器の甕は、古墳時代後期に見られる長胴形で胴部が縦位の篔削り調整のものと、胴部が篔磨き調整された新しい形態のもの2種が認められる。後者は胴部中位に張りがあり、底部に木葉痕を有するという特徴をもっている。

土師器の坏は、丸底を呈する古墳時代後期に見られる坏と盤状を呈する坏、及び丸底気味の内黒の坏の3種が認められる。古墳時代後期から見られる坏は、体部と口縁部との境の稜がわずかに残存するだけである。底部から体部にかけては篔削り調整、内面は篔磨き調整が施されている。盤状を呈する坏は、大形と小形の2種が認められる。ともに丸底気味の底部から、やや内彎気味に立ち上がり、底部と口縁部の境は明瞭になっている。口縁部内・外面横ナデ、底部は篔削り調整が施されている。内黒の坏は口縁部内・外面横ナデ、内面篔磨き調整後黒色処理が施されている。

須恵器の甕は、胴部が球状を呈し、外面に叩き目が残る。焼成状態が悪く、器面が脆く剥がれやすくなっている。

須恵器の坏は、底部が丸底で、口径15.2cm、器高4.9cmを測り、59°の傾きをもって立ち上がる。底部は回転篔削り調整が施されている。

I 群



第265図 奈良・平安時代 I 群の土器

II 群 (第266図)

II 群は、第5・10・14・15・34号住居跡から出土している土器をもって設定した。土師器では甕・坏・鉢、須恵器では坏・高台付坏・蓋・盤が出土している。本群は、古墳時代の土器様相が消失して、土器の形態や調整技法に新しい様相が定着する時期と考えられる。特に I 群に比べて須恵器の出土量が増加することが本群の特徴である。

土師器の甕は、ほとんどがいわゆる「常陸型」の甕で、胴部上位が丸く張り、胴部下半がすぼまり底部に木葉痕をもつものが多く見られる。特に本群の甕は、頸部のくびれが強く口縁部が水平気味になり、口縁端部を垂直というよりは外側へつまみ出すというような特徴をもっている。

土師器の坏や鉢は、粘土紐巻き上げ後、回転力を利用して巻き上げ痕を消す方法で作られ、内面は篋磨き調整後黒色処理が施されている。

須恵器の坏は、I 群に見られた丸底のものは認められず、すべて平底に変わっている。本群から出土している坏は総数6個体で、そのうち口径と底径がわかるものは4個体である。口径13.0~13.8cm、底径7.8~8.8cm、器高4.0~4.9cmで、4個体平均の口径と底径の比は1:0.62で約59°の傾きをもって直線的に立ち上がっている。底部は回転篋切り後、回転篋削りまたは手持ち篋削り調整が施されて丁寧に仕上げられている。回転篋削り調整は体部下端にまで及ぶものもある。

須恵器の高台付坏は、大形と小形の2種が認められ、ともに直立する高台が付いている。

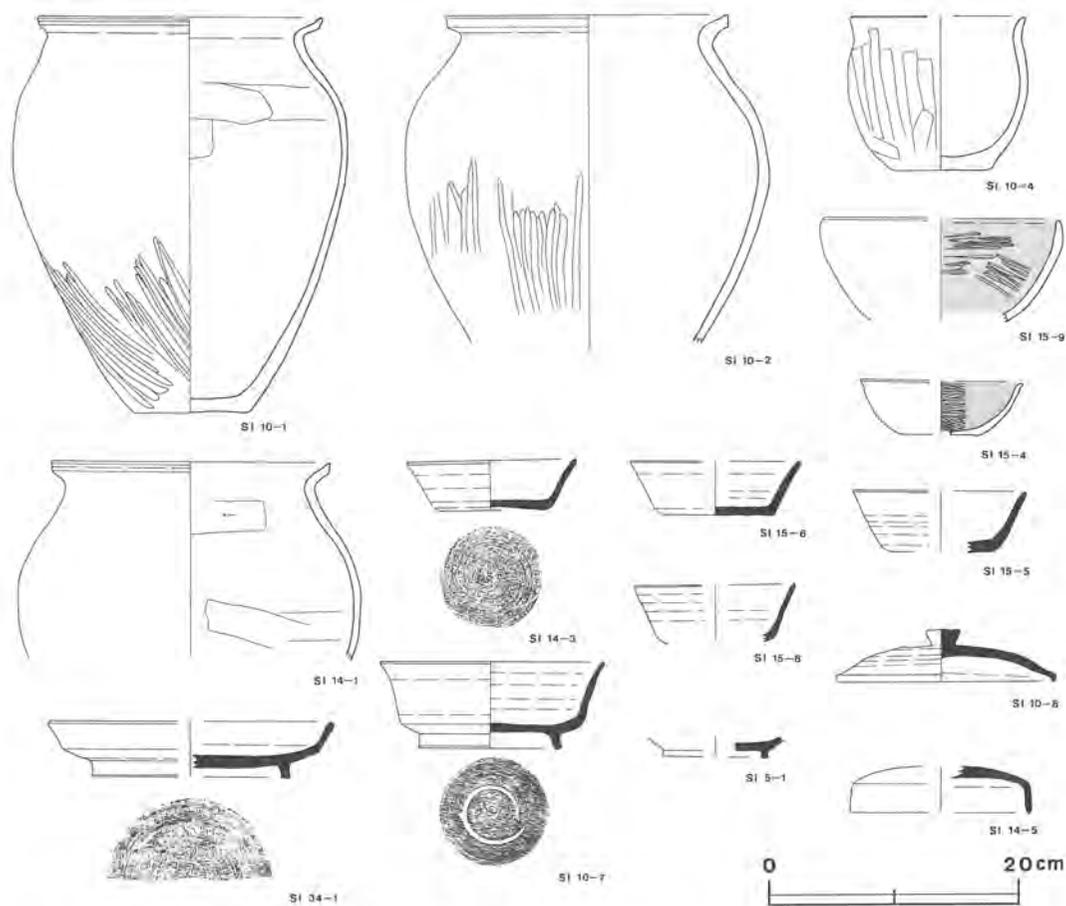
須恵器の蓋は、口縁部が屈曲し短く垂下する形態のもの、口縁部が屈曲し長く垂下するものの2種認められる。前者は坏の蓋に、後者は短頸壺の蓋と考えられる。また、前者はつまみ高が高く上部が平坦な鈕を有している。

須恵器の盤は、第34号住居跡から1点だけ出土しており、大振りのもので底部が高台よりわずかに上がっている。

Ⅲ群 (第267図)

Ⅲ群は、第1・2・4・8・11・13・18・23・42・48号住居跡から出土している土器をもって設定した。土師器では甕・甔・坏・高台付坏・高台付碗、須恵器では甕・壺・坏・高台付坏、土師質土器では皿が出土している。本群の特徴としては、須恵器に比べて土師器の出土量が増加する傾向が見られることである。

Ⅱ群



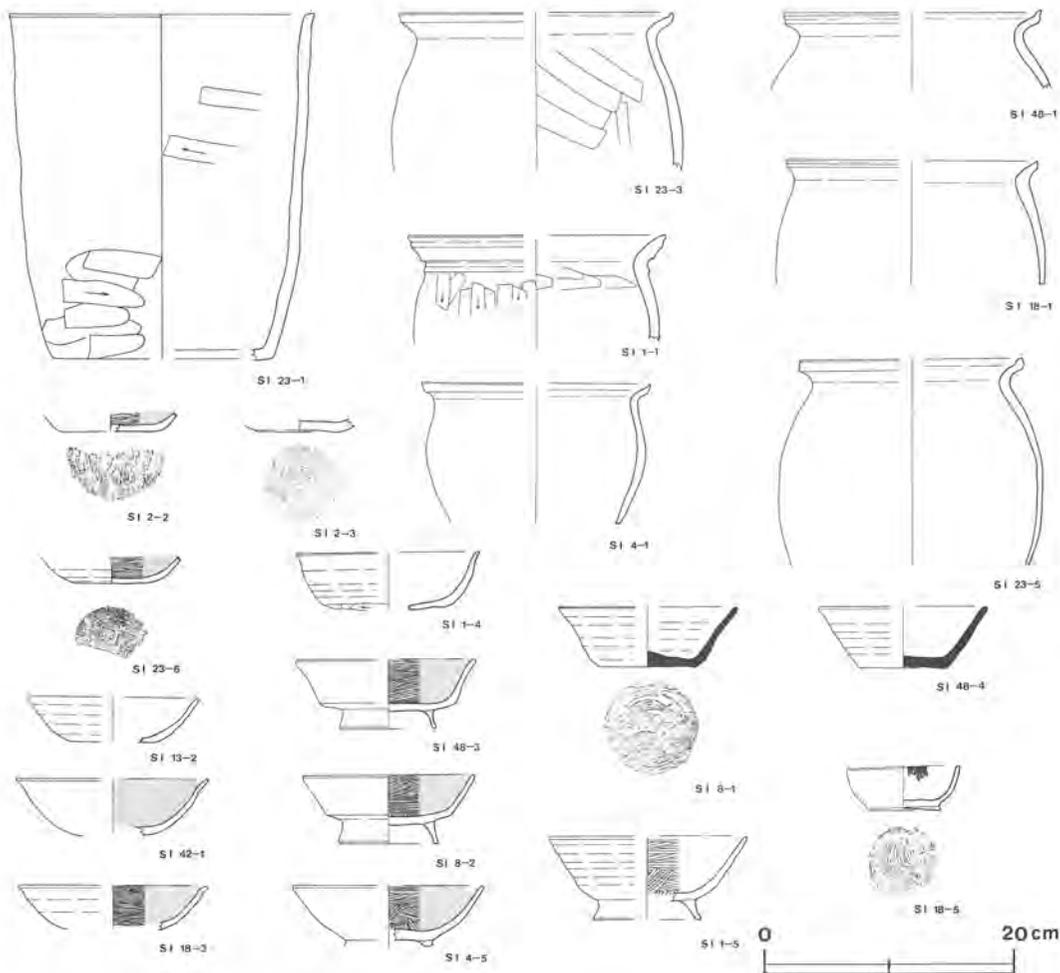
第266図 奈良・平安時代Ⅱ群の土器

土師器の甕は、ほとんどがⅠ・Ⅱ群と同じ「常陸型」の甕である。本群の甕は完全に復元されたものがなく、全体を捉えることはできないが以下のような特徴が認められる。Ⅱ群の甕に比べて胴部の張りが弱く、その分頸部のくびれも弱くなり、口縁端部のつまみ出しもほぼ垂直に近い状態を示している。

土師器の坏は、Ⅱ群と同様の製作技法で作られ、内面は黒色処理を施し、底部及び体部下端に回転篋削り調整がなされて丁寧に仕上げられている。但し、第2号住居跡からは、底部が回転糸切り放しのものと、回転篋切り後ナデ調整のものが出土しておりⅠ・Ⅱ群では見られない様相が認められる。

土師器の高台付坏は、須恵器の高台付坏を模倣したような底部と体部に明瞭な稜をもつものと、底部から内彎気味に立ち上がるものが見られる。どちらも内面篋磨き調整後、黒色処理が施され

Ⅲ群



第267図 奈良・平安時代Ⅲ群の土器

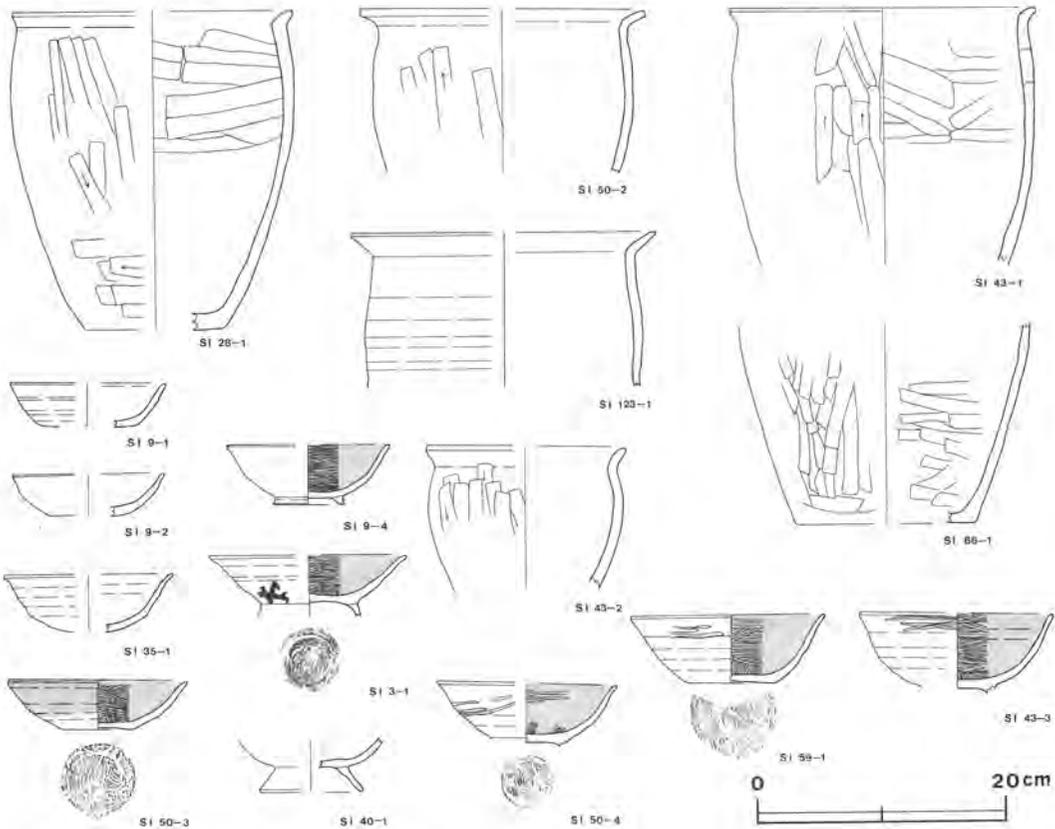
ている。量的には前者のほうが多く出土している。

土師器の甔は、多孔式で胴部と口縁部の区別がほとんど見られず、全体的に筒状を呈している。須恵器の坏は、II群に比べて口径と底径ともに小さくなり、器高が高くなるという特徴が見られる。本群からは、総数3個体出土しており、そのうち口径と底径がわかるものは2個体である。口径は13.2cmと14.0cm、底径は7.0cmと7.4cm、器高は4.9cmと5.0cmで2個体の口径と底径の比の平均は1:0.53で57°の角度で立ち上がる。底部の切り離しは回転篋切りで、底部や体部下端を回転篋削りで丁寧に仕上げるものとナデ調整のみのものが見られる。

IV群 (第268図)

IV群は第3・7・9・28・35・40・43・46・50・59・66・72・107・123号住居跡から出土している土器をもって設定した。本群の特徴としては、出土している土器の大部分が土師器であり、新たに埴が器種構成の中に加わる時期と考えられる。器種としては、甔・埴・坏・高台付坏・高台付埴の5種類が認められる。須恵器は少量出土しているがいずれも小破片で、図示可能な遺物は認められなかった。

IV群



第268図 奈良・平安時代IV群の土器

甕は、Ⅰ～Ⅲ群まで見られた「常陸型」の甕が消失し、単純口縁の甕が定着してくるという大きな変化が認められる。本群の甕は口縁部が短く外反し、内・外面横ナデがなされており、さらに口縁部の下から縦位の篋削り調整が施されている。底部は胴部との境を明瞭にする平底で、胴部内面は横位の篋ナデ調整が施されている。

坏は、法量分化が認められ、大・中・小の3種類が認められる。焼成もⅠ～Ⅲ群までとは異なる硬く焼き締まったものが多く見られる。内面は篋磨き調整が施され、その後黑色処理を施しているものが主体を占めるが、黑色処理をしない坏も増えてくる。また、黑色処理を施している坏は、外面も丁寧に篋磨き調整がなされているものも多く認められる。底部の切り離しは、Ⅲ群に多少見られた回転糸切り放しのものが主体を占めている。

高台付坏は、Ⅲ群までの底部と体部に稜をもつものから、やや内彎気味に立ち上がるものへと変化が認められる。また「ハ」の字状に開く高い高台が付くことが特徴と言える。

坑や高台付坑は、本群から増加してくる傾向が認められる。大・小の2種が認められ、内・外面篋磨き調整後、内面黑色処理を施して丁寧に仕上げられている。坏類はだんだんと黑色処理が省略されるのに比べて、坑類はすべて黑色処理を施していることが特徴と言える。

V群 (第269図)

V群は第29号住居跡から出土している土器を中心に、第30・114号住居跡から出土している土器を一部加えて設定した。本群は、浅黄橙色を呈した硬質の土師器の盛行期であり、羽釜・置きカマド・土師質土器の皿が共伴してくるという特徴をもつ。土師器では、甕・坏・高台付坏・坑・高台付坑・耳皿・羽釜・置きカマドが出土しており、器種の豊富さが感じられる。須恵器は、少量出土しているが図示可能な遺物は第29号住居跡から出土している大形の甕だけである。土師器の坏類に関してはⅠ～Ⅳ群まで行われていた篋磨き調整が全くなり硬質に焼かれたものがほとんどで、見た目荒っぽさが感じられる。それに対して坑類は篋磨き調整後黑色処理が施されており、丁寧に仕上げられているという特徴が認められる。また、坏・坑類の法量が一定する傾向が認められる。

甕は、Ⅳ群と同様の単純口縁のものであるが、口縁部の横ナデがおこなわれず、指頭圧痕が残る雑な調整に変わっている。口縁部の下から縦位の篋削りが施されており、底部は厚手で平底を呈している。

坏は、体部中位に弱い稜をもち、内彎気味に外傾して立ち上がる器形を示している。底部の切り離しはすべて回転糸切りで、内面黑色処理が施されているものも認められる。但し、篋磨き調整は省略されている。

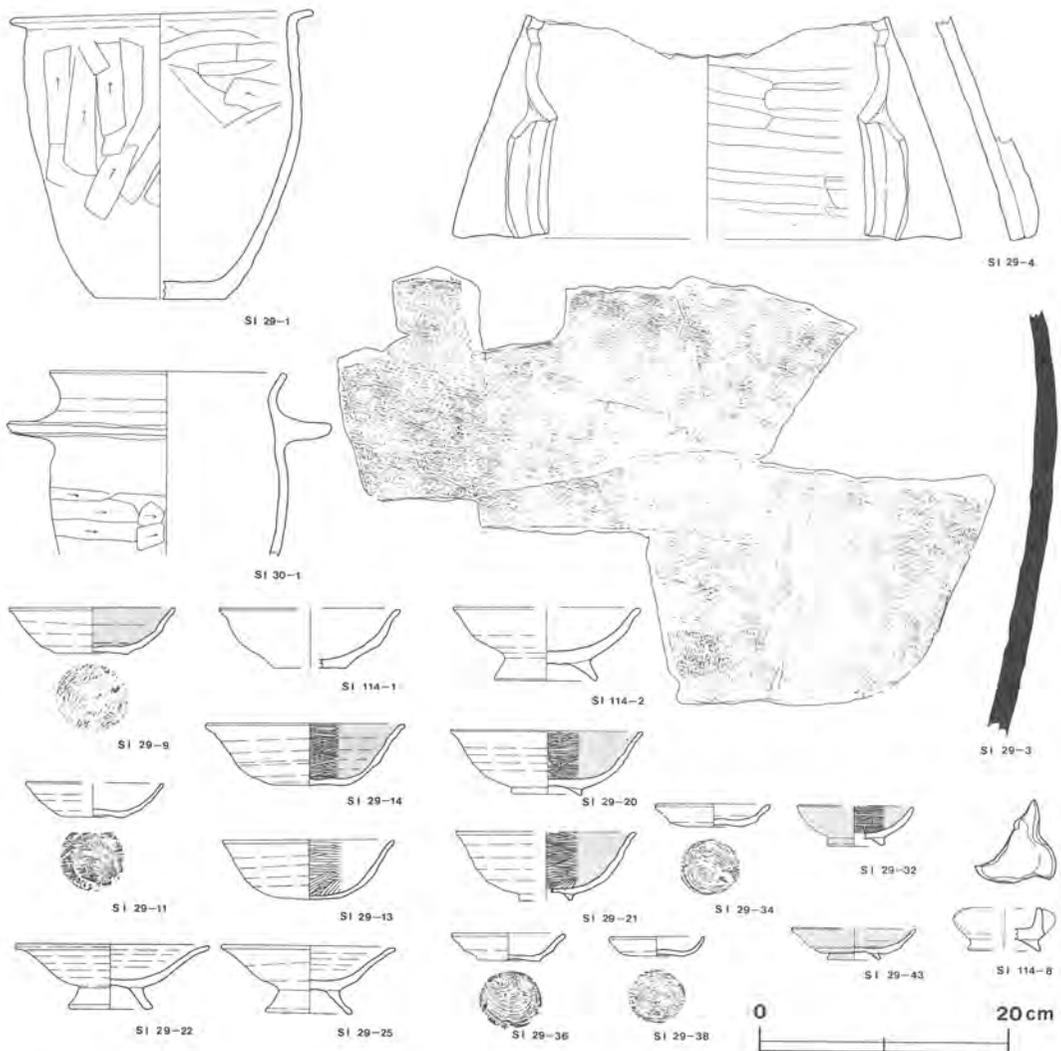
高台付坏は、足高高台付坏と呼ばれている器形に類似した高台部が発達した坏が主体を占めている。

埴は、高台が付くタイプのもとは高台が付かないタイプに分類できる。他の器種に比べて作りが丁寧であることが特徴と言える。

羽釜は第30号住居跡から出土しており、県内では他に石岡市鹿の子C遺跡⁽¹⁾や日立市遠下遺跡⁽²⁾からの出土例が見られる。当遺跡から出土しているものは、口縁部が外反していることや胴部外面に横位の篋削り調整が施されていることからみると、遠下遺跡出土の羽釜のほうに類似していると考えられる。

土師質土器の皿は、底部はすべて回転糸切り放しのものである。内面の様子などから灯明具としての使用より、供膳具として使用された可能性が考えられる。また皿のなかには、埴と同様の

V群



第269図 奈良・平安時代V群の土器

短く垂下する高台が付く形態のものが2点出土している。

須恵器の甕は、外面の叩き目は弱く内面のあて具の痕跡もはっきり認められないものである。

②時期区分

当遺跡の出土土器は上述したグループに、それぞれの特徴から区分できる。次に、当遺跡の住居跡の重複関係からⅠ～Ⅴ群の土器群の新旧関係を考えると以下ようになる。

第19号住居跡(Ⅰ群)・第14号住居跡(Ⅱ群)→第8・13・23・42住居跡(Ⅲ群)

→第7・28・46号住居跡(Ⅳ群)→第29号住居跡(Ⅴ群)

第19号住居跡と第14号住居跡との先後関係については、両住居跡から出土している土器を比べてみると形態や調整技法に差異が認められる。前者の須恵器の坏は丸底で底部は回転篋削り調整が施されており、後者の坏は平底で前者より丁寧な回転篋削り調整が施されている。須恵器の坏に関しては、水戸市木葉下窯跡⁽³⁾の調査でB1号・B2号窯では丸底の坏が認められるが、より新しいとされているC3号・C4号窯では平底のものが増加することから、底部が丸底のものから平底のものへ変化することが認められる。従って、第19号住居跡は第14号住居跡に先行するものと考えられる。

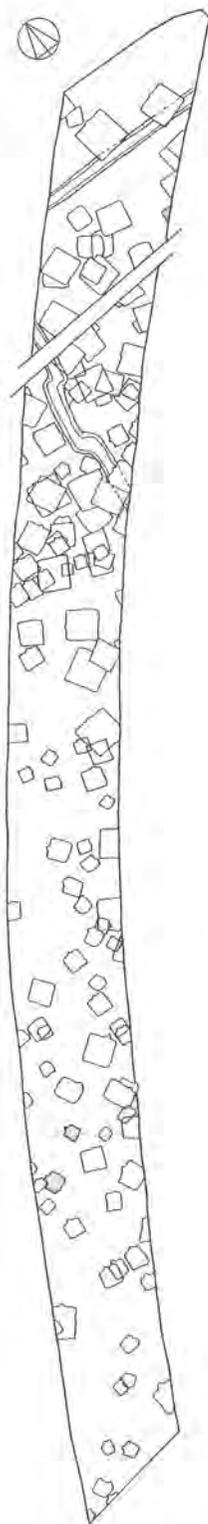
以上のような操作から、Ⅰ群の土器は森戸遺跡の古墳時代に続く森戸Ⅸ期、Ⅱ群の土器は森戸Ⅹ期、Ⅲ群の土器は森戸Ⅺ期、Ⅳ群の土器は森戸Ⅻ期、Ⅴ群の土器は森戸Ⅼ期へと、土器群の区分がそのままの順序で、時間的に配列されることが認められる。

③年代観について

当遺跡の奈良・平安時代の土器をⅨ～Ⅼ期に区分した訳であるが、最後に各時期の年代を考えてみたい。Ⅸ期については、かなり平坦な底部を有する盤状を呈する土師器の坏や、底部が丸底で口径・底径ともに大きい須恵器の坏などの形態から考えて8世紀前半ごろに位置づけられる。Ⅹ期については、須恵器の出土が多くなる時期で、須恵器の坏の底部は平底化するが、口径に対する底径の割合がまだ大きいことから8世紀後半から9世紀前半ごろに位置づけられる。Ⅺ期については、須恵器の出土は少なくなり、変わって土師器が再び増加してくる時期で、9世紀中ごろから後半にかけての時期が考えられる。Ⅻ期・Ⅼ期については、須恵器がほとんど出土しない土師器主体の時期で、はっきりとした時期を特定することは難しい。ただ、Ⅼ期については、置きカマド・羽釜・高台の高い坏・土師質土器の皿などの遺物や住居跡のカマドの位置がコーナーに寄るなどのことから、福田健司氏の南武蔵における平安時代後期の土器編年の第Ⅱ期に相当し、⁽⁴⁾10世紀末から11世紀前半ごろと推定される。(福田 1986)

表22 奈良・平安時代遺構別出土土器一覧表

住居 番号	土 師 器										須 恵 器							土師質土器		合計	土器群		
	甕	甌	坏	高台 付坏	埴	高台 付埴	坏 (内黒)	高台 付坏 (内黒)	高台 付碗 (内黒)	その他	土師器 小破片	内黒 土器 小破片	甕	壺	坏	高台 付坏	盤	蓋	須恵器 小破片			皿	高台 付皿
19	2		4								168	26			1				6			7	I
25	3						1				321	13	1						12			5	I
156	1		1								94								2			2	I
小計	6	0	5	0	0	0	1	0	0	0	583	39	1	0	1	0	0	0	20	0	0	14	
5											73				1							1	II
10	5										134				1	1		2	8			9	II
14	2										279	3			2			1	17			5	II
15	3						1			1	216				4				11			9	II
34			1								10						1	1	1			3	II
小計	10	0	1	0	0	0	1	0	0	1	712	3	0	0	7	2	1	4	37	0	0	27	
1	3		1	1		1					60	19							7			6	III
2	1						2				81	5							2			3	III
4	1						1		1		52	1		1	1				1			5	III
8								3		2	23	1			1				4			6	III
11	1										138	2							3			1	III
13	1		2				2				92	12							11			5	III
18	1					1	1		1	1	163	13	1						4	1		6	III
23	5	1	1				1			1	103	4			1				2			10	III
42							1	1			105	14							1			2	III
48	1							1			131	3	1		1				7			4	III
小計	14	1	4	1	0	2	8	5	1	4	948	74	2	1	3	1	0	0	42	1	0	48	
3				1				2			87	12							8			3	IV
9			3					1			74	14							6			4	IV
28	1			1							41	3							1			2	IV
35			1								58	6							4			1	IV
40				2							75	2							1			2	IV
43	2								1		82	2							1			3	IV
46			1								70	3							1			1	IV
50	2						1		1		101	11							5			4	IV
59					1						198	12							4			1	IV
66	1										86	6										1	IV
72							1				6	4										1	IV
107								1			35								5			1	IV
123	1						1				2											2	IV
小計	7	0	5	4	1	0	3	4	2	0	915	75	0	0	0	0	0	0	36	0	0	26	
29	2		3	10	5	2	3	2	3	3	232	83	1						14	9	2	45	V
30										1	98	28							14	2		3	V
114			1	5				1		1	81	30							1	3		11	V
小計	2	0	4	15	5	2	3	3	3	5	411	141	1	0	0	0	0	0	30	14	2	59	
31											23		1						1			1	不明
98	1										170	4							3			1	不明
小計	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	193	4	1	0	0	0	0	0	4	0	0	2	
合計	40	1	19	20	6	4	16	12	6	10	3762	336	5	1	11	3	1	4	169	15	2	176	



第270図 森戸IX期
住居跡分布図

④住居跡について

当遺跡は、標高20~30mの台地に立地しており、規模の大きな集落が存在していたと考えられる。しかし、今回の調査はあくまで森戸遺跡の一部分であり、その全体像を捉えるには至らなかった。ここでは、森戸遺跡から検出された奈良・平安時代の竪穴住居跡40軒を、土器編年の時期区分に基づき分類してその特徴について記述した。

IX期 (第270・271図)

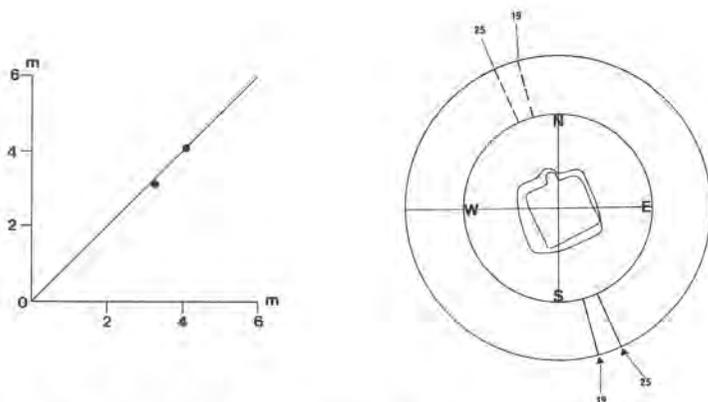
IX期に分類される竪穴住居跡は3軒で、第19・25・156号住居跡が該当する。第19・25号住居跡は調査区域の南側から、第156号住居跡は調査区域の北側から検出されている。また、第19号住居跡は、床面の焼土や炭化材の様子から焼失家屋と考えられる。

規模や形状は、3軒の住居跡とも1辺が3m台の方形を呈している。

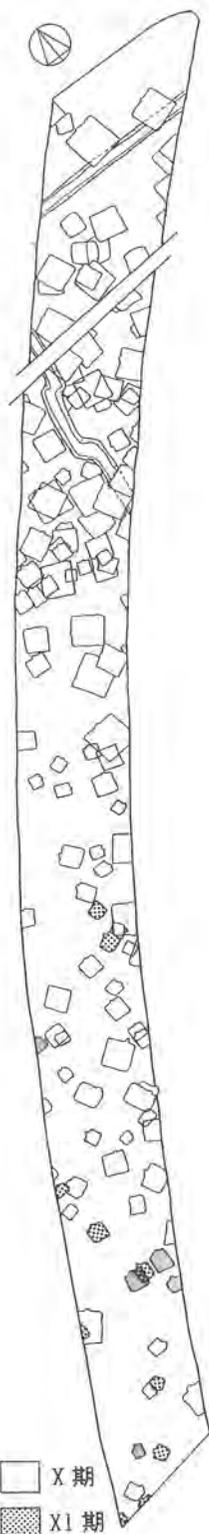
柱穴は、どの住居跡も古墳時代の森戸VIII期の住居跡と同様、主柱穴4か所と入り口部に伴う梯子ピットの計5か所が検出されている。

カマドは、3軒とも北壁中央部に粘土・砂などで構築されている。但し、古墳時代後期の住居跡にみられた凝灰岩を使用したものは見られなくなる。

主軸方向は、3軒ともやや西へ傾いており、古墳時代の森戸VIII期の住居跡と比較しても全体的にやや西へ傾いている。



第271図 森戸IX期 住居跡の規模・方向



第272図 森戸X・XI期
住居跡分布図

X期 (第272・273図)

X期に分類される竪穴住居跡は5軒で、第5・10・14・15・34号住居跡が該当する。5軒ともすべて調査区域の南側から検出されている。

住居跡の規模や形状は、IX期より大型の一辺が4～5mの隅丸方形・長方形を呈する住居跡が2軒、小型の一辺が2.5～3.0mの隅丸方形・長方形を呈する住居跡が3軒検出されている。

柱穴は、大型の2軒には支柱穴が4か所検出されたが、小型の3軒には全く検出されていない。また大型の住居跡には壁溝が周回している。

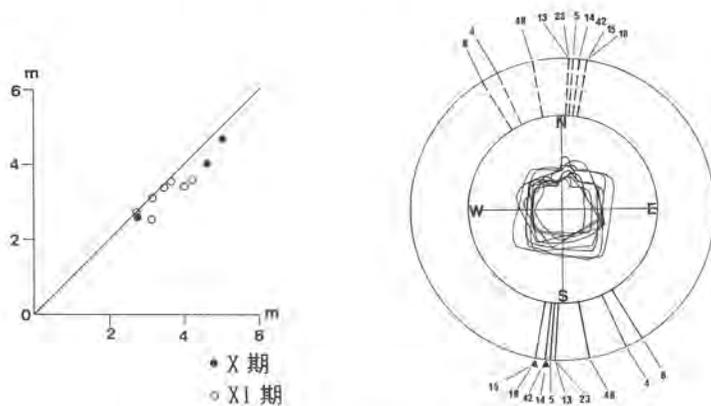
カマドは、5軒とも北壁中央部に検出され、壁への掘り込みも50cm前後と一定している。その中で、第10号住居跡のカマドは、古墳時代後期のカマドに見られる凝灰岩を箱型に配置する構造になっている。

主軸方向は、5軒ともやや東へ傾いており、その傾きがN-0°～10°-Eの範囲内におさまっている。

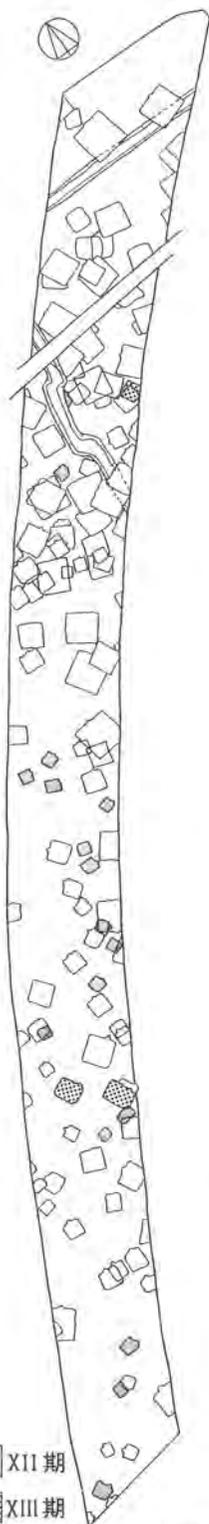
XI期 (第272・273図)

XI期に分類される竪穴住居跡は10軒で、第1・2・4・8・11・13・18・23・42・48号住居跡が該当する。すべて調査区域の南側から検出されており、IX期・X期に比べて全体的に住居跡が小型化し、規模的にある程度まとまりが認められる。

住居跡の規模や形状は、第18・42号住居跡は一辺が3.5～4.0mの隅丸長方形を呈しているが、第2・4・13・48号住居跡は一辺が3.0～3.5mの方形を呈しており、3.5m前後の規模を有する住居跡が多く見られる。



第273図 森戸X・XI期 住居跡の規模・方向



第274図 森戸 XII・XIII期 住居跡分布図

柱穴は、第13・18号住居跡は支柱穴が4か所検出され、さらに壁溝が周回している。第23号住居跡からは支柱穴が2か所、第42・48号住居跡からは支柱穴が1か所検出されているが、他の5軒の住居跡からは全く検出されていない。

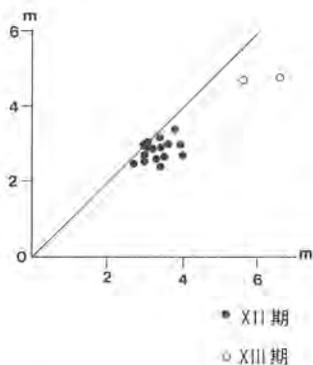
カマドは、北壁中央部に構築されているものが主体を占めていて、IX期・X期に比べて東・西の何れかの方向に片寄る傾向が認められる。第23号住居跡は、袖の補強に土師器の甕や礫を使用している。

主軸方向は、すべてやや西へ傾いているものの特定の角度に集中するような傾向は見られない。

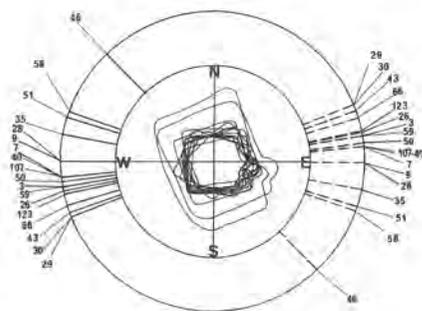
XII期 (第274・275図)

XII期に分類される竪穴住居跡は17軒で、第3・7・9・26・28・35・40・43・46・50・51・58・59・66・72・107・123号住居跡が該当する。該期は土器の項でも述べたように出土土器において大きな変化がみられる時期である。住居跡においても、数的にXI期に比べて倍増し、カマドの構築場所や主軸方向にも変化が認められる時期である。

住居跡の規模や形状は、一辺が4mを超えるような住居跡は認められず、3m前後の小型の住居跡がほとんどで、規模の統一性が認められる。また、ほとんどの住居跡が方形・長方形を呈しているが、なかにはやや崩れた形状を呈するものも見られる。



第275図 森戸 XII・XIII期 住居跡の規模・方向



柱穴は、XI期で見られた柱穴の検出されない住居跡が17軒中14軒と、さらに増える傾向が見られる。

カマドは、すべて東壁のやや南寄りに検出されており、古墳時代以来続いてきた北カマドの原則が一変する。また、5軒の住居跡でカマドに凝灰岩が使用されている。しかし、古墳時代後期に見られたような、凝灰岩を箱型に配置するものではなく、袖に埋め込まれたり、片側の側壁だけに認められることから袖の補強を目的にしたものと思われる。

第43・50・59・66号住居跡では、上端径50～70cmの円形の貯蔵穴を有している。

主軸方向においては、いままでより90°以上東に傾き、東を中心に南北へ15°の範囲におさまることが認められる。

カマドの構築場所や主軸方向の大きな変化を、風の方向や風土的影響等と考えることもできるが、それ以上に、住居構築に対して何らかの強い規制が働いたことが看取される。さらに土器様相の変化をも考え併せると、該期は森戸遺跡の奈良・平安時代の中でも大きな変化があった時期と考えられる。

XIII期（第274・275図）

XIII期に分類される竪穴住居跡は3軒で、第29・30・114号住居跡が該当する。

住居跡の規模や形状は、奈良・平安時代に分類した中で最大の規模をもち、長軸5.5～6.6m、短軸4.8m、床面積29.3㎡と南北に長い隅丸長方形を呈している。XII期の住居跡と比べると、約3倍の床面積を示している。

柱穴は、第29号住居跡で支柱穴が5か所が検出されているが、住居跡の規模や柱穴の配置状況から考えて、本来南東部にも1か所存在し、計6か所で上屋をささえていたものと考えられる。第30号住居跡では北側に2か所検出されているが、配置関係から考えて、4か所または第29号住居跡と同様6か所存在していた可能性が考えられる。第114号住居跡からは、全く検出されなかった。

カマドは、XII期同様、東側に検出されており、XII期の住居跡よりさらにコーナー部に近い位置に構築されていることが特徴である。第29号住居跡は、置きカマドが出土しており、造り付けのカマドも存在している。どちらも使用痕跡が認められ、両者とも併用されていたことが考えられる。

主軸方向は、XII期同様、東へ傾いており、3軒ともN-64～68°-Eの範囲である。

表23 奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表

住居番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)		壁高(cm)	内 部 施 設				炉カマド	覆土	出 土 遺 物	時期	備 考
				長 軸	短 軸		壁溝	主柱穴	貯蔵穴	入り口施設					
1	H2e ₁	N-9°-W	[方 形]	(1.90)	(1.77)	24~30					カマド	自然	土師器片・須恵器片	XI	
2	H2e ₃	N-7°-W	[方 形]	3.43	(0.58)	17~20					カマド	自然	土師器片・須恵器片	XI	
3	H2d ₃	N-80°-E	隅丸長方形	3.83	3.43	18~26					カマド	自然	土師器片・須恵器片・墨書土器片・砥石	XI	
4	H2c ₅	N-25°-W	隅丸方形	3.24	3.11	30~35					カマド	人為	土師器片・須恵器片・砥石	XI	
5	H2c ₄	N-5°-E	隅丸方形	2.66	2.56	44~45			○		カマド	自然	土師器片・須恵器片	X	
7	G2j ₁	N-84°-E	隅丸長方形	3.31	2.54	5~8		3			カマド	自然	土師器片・須恵器片	XI	
8	G2j ₈	N-31°-W	隅丸方形	2.71	2.71	18~23					カマド	人為	土師器片・須恵器片・墨書土器片	XI	
9	G2i ₉	N-90°	方 形	3.37	[3.20]	2~10					カマド	自然	土師器片・須恵器片・墨書土器片	XI	
10	G3g ₂	N-9°-E	隅丸方形	(3.04)	3.02	30~38					カマド	自然	土師器片・須恵器片・刀子	X	
11	G2e ₆		[方 形]	(2.47)	(1.88)	31~39					カマド	自然	土師器片・須恵器片・双孔円板	XI	
13	G3e ₁	N-4°-E	[隅丸方形]	[3.65]	[3.56]	0~8	全周	4			カマド	自然	土師器片・須恵器片・墨書土器片	XI	
14	G3e ₁	N-7°-E	隅丸方形	5.00	4.64	28~55	全周	4		P①	カマド	自然	土師器片・須恵器片	X	
15	G3e ₂	N-10°-E	隅丸長方形	4.64	3.99	43~58	全周	4			カマド	自然	土師器片・須恵器片・墨書土器片・鉄・釘	X	
18	G3b ₁	N-10°-E	隅丸長方形	4.17	3.64	8~18	全周	4		P①	カマド	自然	土師器片・須恵器片・土師質土器片・釘・砥石	XI	
19	F3i ₁	N-15°-W	隅丸方形	4.01	3.98	16~24	全周	4		P①	カマド	人為	土師器片・須恵器片・砥石	IX	焼失家屋
23	F3h ₁	N-4°-E	隅丸長方形	3.10	2.48	4~14		2			カマド	自然	土師器片・須恵器片・墨書土器片・双孔円板	XI	
25	F3g ₄	N-24°-W	隅丸方形	3.25	3.17	41~50		4		P①	カマド	自然	土師器片・須恵器片・釘・砥石・剣形品	IX	
26	F3i ₅	N-79°-E	隅丸方形	2.71	2.51	2~14		2			カマド	自然	土師器片・双孔円板	XI	
28	F3h ₇	N-90°	不整長方形	3.96	[2.74]	12~20					カマド	自然	土師器片・須恵器片・双孔円板	XI	
29	F3g ₇	N-68°-E	隅丸長方形	6.64	4.80	8~21		5	○		カマド	自然	土師器片・須恵器片・土師質土器片・灰釉陶器片・置きカマド・石製紡錘車・釘・双孔円板	XIII	焼失家屋
30	F3e ₃	N-68°-E	隅丸長方形	5.62	4.76	2~12	全周	2			カマド	自然	土師器片・須恵器片・土師質土器片・羽釜	XII	
31	F3d ₃	N-18°-E	隅丸方形	3.29	(2.16)	24~26	全周				カマド	自然	土師器片・須恵器片・双孔円板		
34	F3a ₅	N-0°	不整長方形	(3.26)	3.09	11~14					カマド	自然	土師器片・須恵器片	X	
35	F3b ₆	N-80°-W	隅丸長方形	3.17	2.85	6~8					カマド	自然	土師器片・須恵器片	XI	
40	F4b ₁	N-84°-E	不整方形	3.02	3.00	8~10					カマド	自然	土師器片・須恵器片・釘	XI	
42	E4j ₂	N-15°-W	隅丸長方形	4.00	3.36	7~13	部分	1	○		カマド	自然	土師器片・須恵器片・砥石	XI	
43	F4a ₃	N-70°-E	方 形	3.12	2.96	12~14			○		カマド	自然	土師器片・須恵器片	XI	
46	E4i ₃	N-45°-W	隅丸長方形	3.44	2.74	12~13					カマド	自然	土師器片・須恵器片・釘・有孔円板	XI	
48	E4h ₃	N-10°-W	方 形	3.42	3.36	26~32				P①	カマド	自然	土師器片・須恵器片・剣形品	XI	
50	E4f ₄	N-82°-E	長方形	3.63	3.14	12~17			○		カマド	自然	土師器片・須恵器片・古銭	XI	焼失家屋
51	E4e ₅	N-73°-W	方 形	3.10	2.98	2~5					カマド	不明	土師器片・須恵器片・釘	XI	
58	E4a ₅	N-71°-W	長方形	3.88	2.92	10~15					カマド	自然	土師器片・須恵器片・釘・双孔円板	XI	
59	E4d ₇	N-80°-E	隅丸長方形	3.03	2.62	10~12			○		カマド	自然	土師器片・須恵器片	XI	
66	D4j ₆	N-73°-E	方 形	3.37	3.30	12~20		1	○		カマド	自然	土師器片・双孔円板・勾玉	XI	
72	D4i ₄	不 明	不 明	不明	不明	不明					カマド	不明	土師器片	XI	
98	C5i ₅	N-13°-E	不整形	4.59	(1.98)	8~10					[カマド]	自然	土師器片・須恵器片		
107	C5g ₆	N-84°-E	長方形	3.03	2.60	6~9					カマド	自然	土師器片・須恵器片・双孔円板	XI	
114	C6e ₃	N-64°-E	[長方形]	(5.18)	[4.84]	8~9					不 明	自然	土師器片・須恵器片・土師質土器片・耳皿	XIII	
123	C5c ₉	N-78°-E		(3.42)	(2.37)						カマド	[自然]	土師器片	XI	
156	B6b ₆	N-4°-W	[方 形]	(3.51)	(2.99)	13~22		1			カマド	自然	土師器片・須恵器片・土製品	IX	

注

- (1) 佐藤正好・川井正一『鹿の子C遺跡』 茨城県教育財団 1983年
- (2) 佐藤政則『日立市遠下遺跡調査報告書』 日立市教育委員会 1975年
- (3) 根本康弘『木葉下遺跡Ⅰ(窯跡)』 茨城県教育財団 1983年
- (4) 福田健司「シンポジウム古代末期～中世における在在系土器の諸問題」『神奈川考古』第21号 神奈川考古同人会 1986年2月

参考文献

- ・ 井上義安『水戸市大鋸町遺跡』 水戸市大鋸町遺跡発掘調査会 1988年12月
- ・ 神谷佳明「東国出土の甕形土器についての検討」『群馬の考古学』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988年
- ・ 川井正一・小河邦男『木葉下遺跡Ⅱ(窯跡)』 茨城県教育財団 1984年
- ・ 川井正一「茨城県における八・九世紀の須恵器について」『シンポジウム房総における奈良・平安時代の土器』 史館同人 1983年10月
- ・ 豊巻幸正・笹生 衛『永吉台遺跡郡』 君津郡市文化財センター 1985年
- ・ 佐々木義則「木葉下窯跡群出土土器・盤類の法量分化について」『婆良岐考古』第11号 1989年5月
- ・ 鈴木裕芳『久慈吹上』 日立市教育委員会 1981年
- ・ 中沢 悟『清里・陣場遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981年
- ・ 橋本澄朗『薬師寺南遺跡』(本文編) 栃木県教育委員会 1979年
- ・ 福田健司「シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題－相模国と周辺地域の様相－第Ⅱ版」『神奈川考古』第14号 神奈川考古同人会 1983年
- ・ 福田健司「須恵系土師質土器について」『日野市落川遺跡調査概報Ⅴ』 日野市落川遺跡調査会 1987年

(3) 弥生時代・時期不明

表24 弥生時代竪穴住居跡一覽表

住居番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)		壁高(cm)	内部施設				炉カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
				長軸	短軸		壁溝	支柱穴	貯蔵穴	入り口施設					
106	C5g _s	N-27°-W	隅丸方形	4.59	4.27	18~29	無	4	無		炉	自然	弥生式土器・土製品・石製品	I	
143	B6g _z	N-54°-W	(隅丸方形)	5.74	(3.44)	17	無	不明	無		炉	自然	弥生式土器	I	
148	B6g _s	N-65°-W	隅丸長方形	6.34	5.52	13~21	無	4	無		炉	自然	弥生式土器片・土製品	I	

表25 時期不明竪穴住居跡一覽表

住居番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)		壁高(cm)	内部施設				炉カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
				長軸	短軸		壁溝	支柱穴	貯蔵穴	入り口施設					
22	F2j _o	N-7°-W	長方形	3.09	2.67	0~4	無	2	無		不明	不明	土師器片		
24	F3g ₁	N-0°	(方形)	(2.63)	(1.70)	15~19	無	不明	不明		不明	自然	土師器・須恵器片		
32	F3d _s	N-4°-E	隅丸長方形	3.04	2.82	0~5	無	無	無		カマド	不明	土師器片・陶器片		
36	F3b _s	N-2°-E	隅丸長方形	4.76	3.94	0~2	全周	1	無		カマド	不明	土師器片		
84	D5b ₃	N-26°-E	方形	3.10	2.65	25~26	無	無	無		(カマド)	自然	土師器片・須恵器片・礫		
93	C5j ₄	N-15°-W	不整形	4.68	4.26	20~22	全周	4	無		カマド	自然	土師器片・須恵器片		
122	C5b ₇	不明	(方形)	(1.74)	(0.78)	19		不明	不明		不明	不明	土師器片		
125	C6b ₁	N-11°-E	(方形)	(4.61)	(2.04)	0~7	無	不明	不明		炉	不明	炭化材		(焼失家屋)
127	C6a ₃	N-7°-W	不明	(1.79)	(1.34)	6	無	不明	不明		不明	不明	土師器片		
129	C6b ₅	N-7°-W	(方形)	3.33	(1.66)	15	無	不明	不明		不明	自然	土師器片		
132	C6a ₅	N-15°-W	(方形)	(1.30)	(1.16)	7	無	不明	不明		不明		土師器片		
152	B6g _s	N-67°-W	(方形)	[6.40]	[5.56]	不明	無	不明	無		(炉)	自然	土師器・須恵器片		
173	A6j _o	N-15°-E	方形	4.30	4.24	19~20	無	3	無		不明	自然	土師器片		



2 豪族居館跡について

当遺跡からは古墳時代の首長層の居宅を囲む堀が検出されている。所謂“豪族居館跡”といわれる遺構である。しかし、検出された堀によって囲まれた居館内部は、推定される居館全体のおよそ3分の1にすぎない。その上、居館の内側部分は後世の遺構が激しく重複しているため、不明な点が多い。本節では、調査したなかで知り得た豪族居館跡の特徴と性格について、他の類例との比較検討をおこない、若干の考察を試みた。

(1) 立地

本跡は、額田台地の北西部先端に占地しており、北側の沖積低地との比高は約20mと高く、他の類例の多くが低台地上に占地するのに対して違いがみられる。また、他の類例と同じように、本跡は周辺の集落と同じ額田台地上に築造されたものと思われる。額田台地の北側には、久慈川が蛇行して流れ、その支流である山田川は当遺跡の北方で合流する。合流点から北西約2kmには久自の国造舟瀬足尼の墓とされる梵天山古墳が位置している。舟瀬足尼は、久慈川の水運を司っていたとされており、本跡の所在する台地は、このことから、交通の要衝であったことが窺え、当時の首長層がここに居館を築造して周辺地域を支配する上で、立地上の大きな優位性と重要性をもっていたと考えられる。

(2) 基本プランと施設

当遺跡の居館跡がどのようなプランをとっていたかは、前節・遺構の項で述べた通り、全掘していない現状から想定の域を出ない。しかし、検出された2条の堀の方向性から推測して、方形になるものと考えられる。つまり、弥生時代の環濠や萌芽期の居館跡にみられる曲線的な堀とは明らかに様相を異にし、直線的で計画的な方格プランをもつものである。規模は、推定で一辺90mを前後するものと思われ、これを内部の占有面積に直すと5,500㎡前後となる。これは、本跡と同時期に考えられている古墳時代前期の類例と比較すると、他の平均がおよそ一辺50m前後の堀をもつものであり、前期としてはかなり大規模なものと思われる。

堀は、上幅約4mの断面逆台形状を呈し、張出部を有することから、居館跡の萌芽期にみられる区画溝の段階を脱したものである。

張出部付近には堀の内外で対になるとと思われる柱穴群を検出した。張出部の南北には、2対4基の柱穴が配置されており、橋梁状の上部構造物を有した可能性がある。張出部及びその周辺が外部との通路として機能していたとの説があるなかで、橋梁を想定する蓋然性は高いものと考えられる。なお、張出部北コーナー部付近にみられる1対2基の柱穴は、三ツ寺I遺跡にみられる

⁽³⁾導水施設の例もあるが、その根拠となる遺物や遺構は検出されず、その性格は不明とせざるをえない。その他外郭施設としての土塁、柵列、布掘り遺構は伴わない可能性が高く、居館としての防禦的性格は弱いものと思われる。

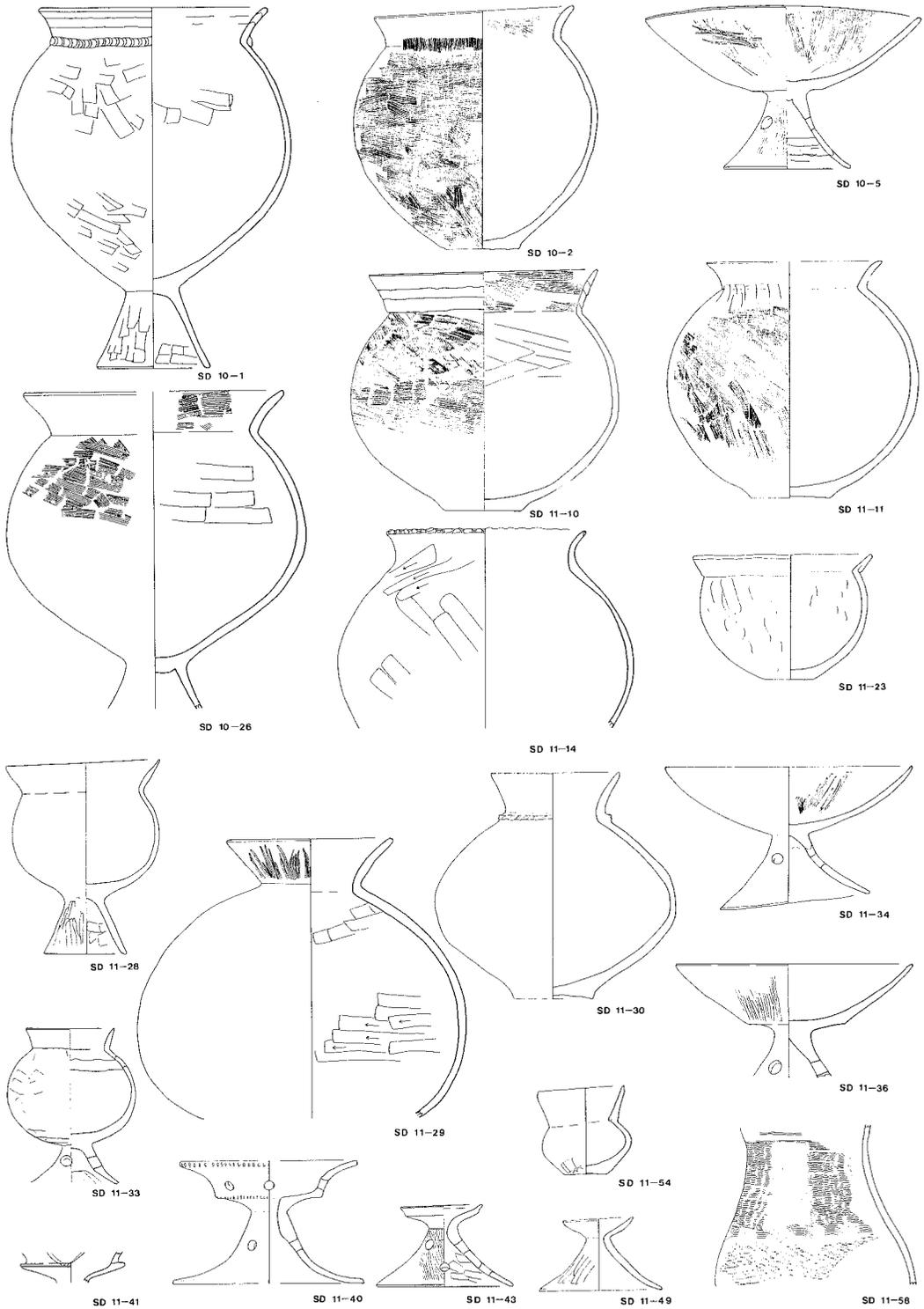
内部施設としては、張出部の東側に竪穴住居跡が1軒検出されたのみである。この竪穴住居跡は、一辺が6m弱であり、前期の住居跡としては規模的にも、施設の的にも特異なものではない。ただ、張出部中央に方位をほぼ同じくして位置していることは注目される。居館跡の内側には、後世の遺構がかなり濃密に検出されていることから、調査エリア内にも居館跡に伴う遺構の存在を否定できないが、いずれにしてもかなりの“オープンスペース”をもっていたことはまちがいない。ただ、それがいかなる性格をもつ空間なのか、言及するだけの資料は、今回の調査では得られなかった。

(3) 出土遺物

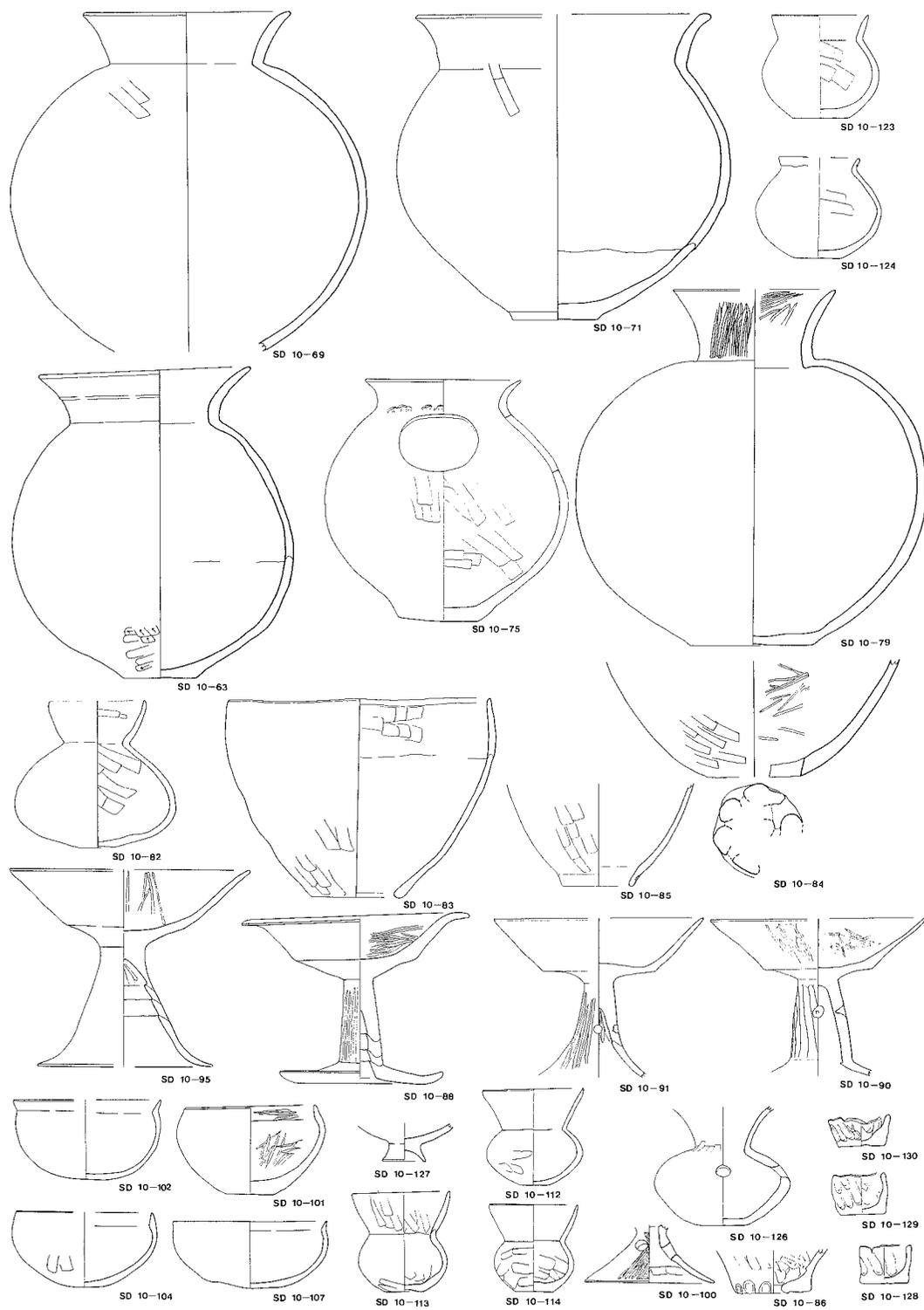
下層即ち居館存続期間中の遺物は、甕などの生活用具に混じって、高坏・3孔を穿った脚付壺・装飾器台・器台など祭祀的な様相を強くもつ土器が出土している。これらの土器群は、出土位置が張出部北側及び東西堀中央部に限定され、しかも、出土状態をみると横位でほぼ完形の状態で出土している。これは、投棄というよりも、居宅内での祭祀終了後に安置する状態で遺棄されたと考えるほうが妥当であろう。しかし、居館の内部からは、特定の場所への祭祀遺物の集中はみられず、敷石等祭祀遺構も検出されなかった。そのため、居館の内部における首長層による祭祀執行の具体像を、探りだす手掛かりをもたない。

上層の遺物は、居館跡がその機能を停止した後のものであるが、下層の遺物と同様、甕などの生活用具と共に高坏・埴・器台・甗・手捏ね土器・円窓土器など祭祀的な様相をもつ土器や石製模造品が出土している。これら土器群は、出土位置が張出部及びその周辺に限定されるばかりでなく、前節遺構の項で述べたように、器種により出土位置を異にするという特徴をもつ。出土状態は、下層出土の遺物同様、個体としてのまとまりを保ち、しかも、多量に出土している。

これらのことを考えると、居館廃絶後も後世の和泉期及び鬼高期初頭に集落を営んだ人々にとって、居館は、充分にその存在を意識され、何らかの意味での祭祀の対象となっていたことが窺える。居館跡廃絶後の住居跡の分布状況を見ても、和泉期から鬼高期初頭までの時期は居館の堀を避けているのに対し、次の鬼高期の第2段階以降になると堀の覆土を掘り込んで住居跡が構築されている。このことは、群馬県三ツ寺I遺跡においても、居館が廃絶した6世紀中葉以降9世紀前半まで、形態を変えながらも居館に対する祭祀行為が続けられ、9世紀後半以降になってはじめて居館内に集落が進出することと、極めて多くの類似点を看取しうる。そして、居館廃絶後も1世紀前後の間、居館が意識され、居館に対する祭祀行為が行われている。このことは、居



第276図 豪族居館跡堀下層出土遺物



第277図 豪族居館跡堀上層出土遺物

館及びその経営者に、当時の人々が大きな祭祀性を求めていたことの証左と言えるのではないだろうか。

(4) 奥津城との関係

当遺跡周辺には、額田台地も含めその周辺の台地上に多くの古墳が確認されている。しかし、本格的な調査がなされておらず、その詳細はいまだ不明な部分が多い。台地上に分布する古墳については、5世紀前半に比定されるひょうたん塚古墳を最古とし、6世紀以降の古墳が主体をなす。一方、当遺跡から久慈川を挟んだ対岸に目を転じると、北西約2.2kmの位置に梵天山古墳群が所在する。その盟主たる梵天山古墳は、1965年明治大学によって測量調査がなされたが、墳形は前方部が撥形を呈し、古い様相をもつものである。その他にも、梵天山古墳群及びその周辺には、当地域における出現期の古墳とされる梵天山北古墳⁽⁵⁾や、星神社古墳⁽⁶⁾などが所在する。

このような、周囲の古墳の分布状況をみたとき、4世紀代に位置付けられる、当遺跡居館・経営者の奥津城は、久慈川右岸の台地上よりも、対岸の梵天山古墳群及びその周辺に求めうるのが妥当であろう。そして、本跡のプランとその計画性、時期との対応関係をみていくと、地域首長クラスを想定し得、梵天山古墳がその奥津城として考えられないだろうか。しかし、その年代観は、4世紀代の箸墓古墳よりも遡るとの説⁽⁷⁾がある一方、5世紀代に位置付けられるのが一般的であり、⁽⁸⁾実に1世紀100年の時間幅がある。従って、対応する奥津城については、周辺地域の古墳の編年的位置付けを待たねばならないと考える。

(5) 豪族居館跡の性格と特徴

古墳時代豪族の、居館あるいは居宅としての意義は、首長層の集落からの隔絶、防禦性、祭祀性などが挙げられる。

本跡は、先述したように一般集落から小溝によって首長層の居宅を区画する段階を脱し、首長の強い指導力のもとに計画性をもって築造されたことが窺える。その経営者は、これだけの居館を築造するに必要な技術力及び工事に動員できるだけの民衆への支配力を持ち得、更に前期としては明瞭に意識された張出部をもつという政治的先見性を兼ね備えた階層が考えられる。従って、それらの条件を兼ね備えた首長層としては、地方の部族首長クラスを想定できるのではないだろうか。

以上、本跡は、その内部施設において豪族居館としての萌芽的な要素を残しつつも、その経営主体は強力な政治権力、及び祭祀性を背景としながら、先見的な居館を築造しえたのではないだろうか。そして、その性格は、あくまでも首長層の一般集落からの隔絶性に最大の意義をもちつつ、首長権執行において祭祀的な様相を色濃くもつものであったものと考えられる。

注

- (1) 志田諄一「古代・中世の常陸の河川港」『溯源東海』創刊号 1987年
- (2) 橋本博文「古墳時代首長層居宅の構造とその性格」『古代探叢II』1985年
- (3)(4) 下城正「三ツ寺I遺跡」『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第8集』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988年
- (5) 大塚初重「梵天山古墳」『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』1974年
- (6) 大塚初重「古墳時代の発展と古代国家の成立」『茨城県史 原始古代編』1985年
- (7) 田中新史「奈良盆地東縁の大形前方後円墳出現に関する新知見」『古代88号』1989年
- (8) 前掲注(5)に同じ
茂木雅博「地域における編年 常陸」『季刊考古学第10号』1985年

参考文献（順不同）

- ・小笠原好彦「豪族居館が語るもの」『季刊考古学第16号』1986年
「豪族の居館と構造」『古代史復元6 古墳時代の王と民衆』1989年
- ・鬼頭清明『古代日本を発掘する6 古代のむら』1985年
- ・辰巳和弘「古墳時代の社会と生活」『日本の古代5 前方後円墳の世紀』1986年
- ・橋本博文「古墳時代における首長層の居宅と奥津城」『考古学雑誌』第72巻第4号 1987年
「古墳時代における首長層居宅（総論）」『考古学ジャーナル』289号 1988年
- ・茨城県教育財団「奥谷遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第50号』1989年
- ・井上唯雄・下城 正 他「三ツ寺I遺跡」『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第8集』1988年
- ・下城正 他「群馬県三ツ寺I遺跡調査概要」『考古学雑誌』第67巻第4号 1982年
- ・茨城県考古学協会編「関東の古代豪族居館跡」『第2回遺跡検討会』シンポジウム資料 1989年
- ・鹿田雄三 他「荒砥荒子遺跡の方形区画遺構」『研究紀要1』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984年
- ・中山 晋「栃木県における豪族の居館跡」『考古学ジャーナル』289号 1988年
- ・井上唯雄・下城正「群馬における豪族の居館跡」同上
- ・広瀬和雄「大阪府における豪族の居館跡」同上
- ・清水真一「奈良県における豪族の居館跡」同上
- ・服部芳人「三重県・高瀬遺跡」同上
- ・群馬県埋蔵文化財調査事業団『古代東国の王者—三ツ寺居館とその時代—』1988年

3 石製模造品について

森戸遺跡は、すでに渡辺明氏によって石製模造品を出土する遺跡として紹介されている⁽¹⁾。今回の調査では、総数690点に及ぶ石製模造品が出土している。その出土点数は、県内においては、東海村釜付祭祀跡、桜川村尾島貝塚、総和町向坪B遺跡、潮来町埴貝塚などの祭祀遺跡あるいは工房跡からの出土例などを除き、集落跡の住居跡出土のものとしては、最大級のものであると思われる⁽²⁾。ここでは、当遺跡から出土した石製模造品について、資料の分析をおこない、若干の検討を加えた。

(1) 森戸遺跡での石製模造品の出土状況

森戸遺跡から出土した石製模造品は、上記したように総点数が690点に及ぶ。種類別の点数は、有孔円板400点、剣形品42点、勾玉11点、白玉133点、種類が不明なもの104点である。これを遺構の種類ごとにみても表26の通りである。

表26 遺構の種類別石製模造品出土点数

	有孔円板	剣形品	勾玉	白玉	不明	合計
住居跡	351	33	8	118	103	613
居館跡堀	8	6	2	10	0	26
土坑	7	0	0	1	0	8
溝	3	0	0	0	0	3
表採	31	3	1	4	1	40
合計	400	42	11	133	104	690

これをみると、住居跡からの出土が殆どであり、その出土状況の特徴については後述する。居館跡の堀から出土したものは、出土位置がすべて南北堀の張出部及びその周辺からであり、層位はすべて上層からである。つまり、豪族居館跡の項で述べたように居館が廃絶された後に行われた祭祀行為に伴うものであろうと思われる。土坑からのものは、8基から各1点ずつ出土している。浅井の分類による古墳時代のものと推定される円形土坑A（5基）からのものは5点で、双孔円板1点、白玉1点である。いずれも土師器片を伴っており、遺構に伴うものと考えられる。平安時代のもので推定される円形土坑B（1基）からのものは、1点（双孔円板）だけであり、共伴する可能性は少ない。他の2基からは双孔円板が2点出土しているが共伴関係は不明である。溝（第6、9号）からのものは、双孔円板が3点である。その他、表採としてあるものは、遺構に伴わず表土または確認面から採集されたもので、双孔円板31点をはじめ多数にのぼる。これは、トレンチャー等による攪乱によって原位置を動かされているものと考えられる。勿論、集落内においてある特定の場所で行われる祭祀行為は想定しなくてはならないが、敷石、巨石、巨木跡と思われる風倒木痕、屋外火床跡等の祭祀遺構は、その痕跡を確認できなかった。

(2) 住居跡別の出土状況

次に、住居跡を中心に時期別の出土状況を見ることにする。表27は、遺構別（住居跡は時期別）の石製模造品一覧表である。これをみると、奈良・平安時代の住居跡からも総計16点の石製模造品が出土しているが、第11, 28, 29, 46号住居跡は古墳時代の住居跡と重複しており、その他の住居跡の場合も、覆土から出土していることから、奈良・平安時代の住居跡には伴わないものと考えられる。また、古墳時代前期の住居跡からは出土していない。

石製模造品を出土している古墳時代中・後期の住居跡についてみると、中期の住居跡16軒のなかで石製模造品を出土しているものは11軒、後期の住居跡58軒のなかで石製模造品を出土しているものは37軒である。表28は、時期別に該当住居跡数と石製模造品出土住居跡数、及び石製模造品出現率を表したものである。これをみると、森戸IV期（和泉2期）で73%、森戸V期（鬼高1期）で78%と高い出現率を示すものの、鬼高期後半にあたる森戸VII期においても69%と高くなっている。当遺跡¹³⁾においては、通常言われているよりも時代が下ってまで、石製模造品を用いた祭祀が行われて

表28 時期別石製模造品出土住居跡の割合

時期	住居跡数 (割合)	該期 住居跡数	石製模造品出 土住居跡数	石製模造品 出現率
森戸III期(和泉1期)		1	0	0%
森戸IV期(和泉2期)		15	11	73%
和泉期小計		16	11	69%
森戸V期(鬼高1期)		23	18	78%
森戸VI期(鬼高2期)		15	7	47%
森戸VII期(鬼高3期)		16	11	69%
森戸VIII期(鬼高4期)		4	2	50%
鬼高期小計		58	38	66%
合計		74	49	66%

表27 住居跡別石製模造品一覧表

住居番号	有孔内板	剣形品	勾玉	白玉	不明	時期
27	1					IV期
37	1					IV期
52	6					IV期
67			1			IV期
70	1		1			IV期
74				1		IV期
79				1		IV期
101	1	1		1		IV期
102	1			3	1	IV期
126	2	1				IV期
147	1					IV期
和泉2期	14	2	2	6	1	
12	1					V期
33	3					V期
44	2					V期
55		1				V期
56	2	1			1	V期
62	7				6	V期
73	1					V期
76	1					V期
83	4			3		V期
86				1		V期
91				8		V期
97	3		1	5		V期
109	4	1		1		V期
110	2					V期
111	4			1		V期
117		1			1	V期
119	1	4		16		V期
130			1		1	V期
鬼高1期	35	8	2	35	9	
21	1					VI期
39	1					VI期
78			1	3		VI期
87	1					VI期
100	4		1			VI期
115	1				2	VI期
124	3					VI期
鬼高2期	11	0	2	3	2	
47	3					VII期
49			1			VII期
60	6	1		5	12	VII期
64	225	17		59	70	VII期
80				1		VII期
88	1	1				VII期
104	1					VII期
116	6			3	1	VII期
121	6					VII期
131	2					VII期
162	1					VII期
鬼高3期	251	19	1	68	83	
41	3					VIII期
158				1		VIII期
鬼高4期	3	0	0	1	0	
25		1				奈良
11	1					平安
23	1					平安
26	1					平安
28	1					平安
29	2					平安
31	1					平安
46	1					平安
48		1				平安
58	2				1	平安
66	2		1			平安
奈良平安	12	2	1	0	1	
20	2	2				不明
63	21			5	7	不明
120	2					不明
時期不明	25	2	0	5	7	
合計	351	33	8	118	103	

いた可能性が高いものと考えられる。

また、表29は、石製模造品を出土した各住居跡が、どのような数量・種類をもっていったかをあらわしたものである。即ち、〈A類〉としたものはある一種類のものを単数出土した住居跡、〈B類〉としたものはある一種類のものを複数出土した住居跡、〈C類〉としたものは2種類以上のものを単数ずつ出土した住居跡、〈D類〉としたものは2種類以上のものを複数出土した住居跡とした。これによると、〈A類〉が22住居跡45%と最も多いものの、特に鬼高1期・3期の大型の住居跡では〈B類〉のものも多い。2種類以上のものを複数出土する〈D類〉も13軒27%とかなりの高率を示している。

表29 時期別石製模造品出土状況

時期	出土類型		A 類		B 類		C 類		D 類	
	住居跡数	割合 (%)								
森戸Ⅲ期 (和泉1期)	0	—	0	—	0	—	0	—		
森戸Ⅳ期 (和泉2期)	6	55	1	9	2	18	2	18		
和泉期小計	6	55	1	9	2	18	2	18		
森戸Ⅴ期 (鬼高1期)	7	39	5	28	0	0	6	33		
森戸Ⅵ期 (鬼高2期)	4	58	1	14	0	0	2	28		
森戸Ⅶ期 (鬼高3期)	4	37	3	27	1	9	3	27		
森戸Ⅷ期 (鬼高4期)	1	50	1	50	0	0	0	0		
鬼高期小計	16	42	10	26	1	3	11	29		
合計	22	45	11	22	3	6	13	27		

第278、279図は、時期別に

どの住居跡からどのような石製模造品を出土したかを示したものである。これによると、各期を通して小型の住居跡からは上記の〈A類〉に属するものが多いが、大型の住居跡からは2種類以上のものを複数以上出土しているものが多い。特に、集落の変遷の項で述べたように、居館跡の張出部を中心としたその周辺の住居跡からは、各期を通じて多数の石製模造品を出土した住居跡が多い。従って、これらの住居跡の居住者は、祭祀権を執行できるような立場を集落または単位集団のなかで有していたと思われる。

(3) 森戸遺跡出土石製模造品の特徴

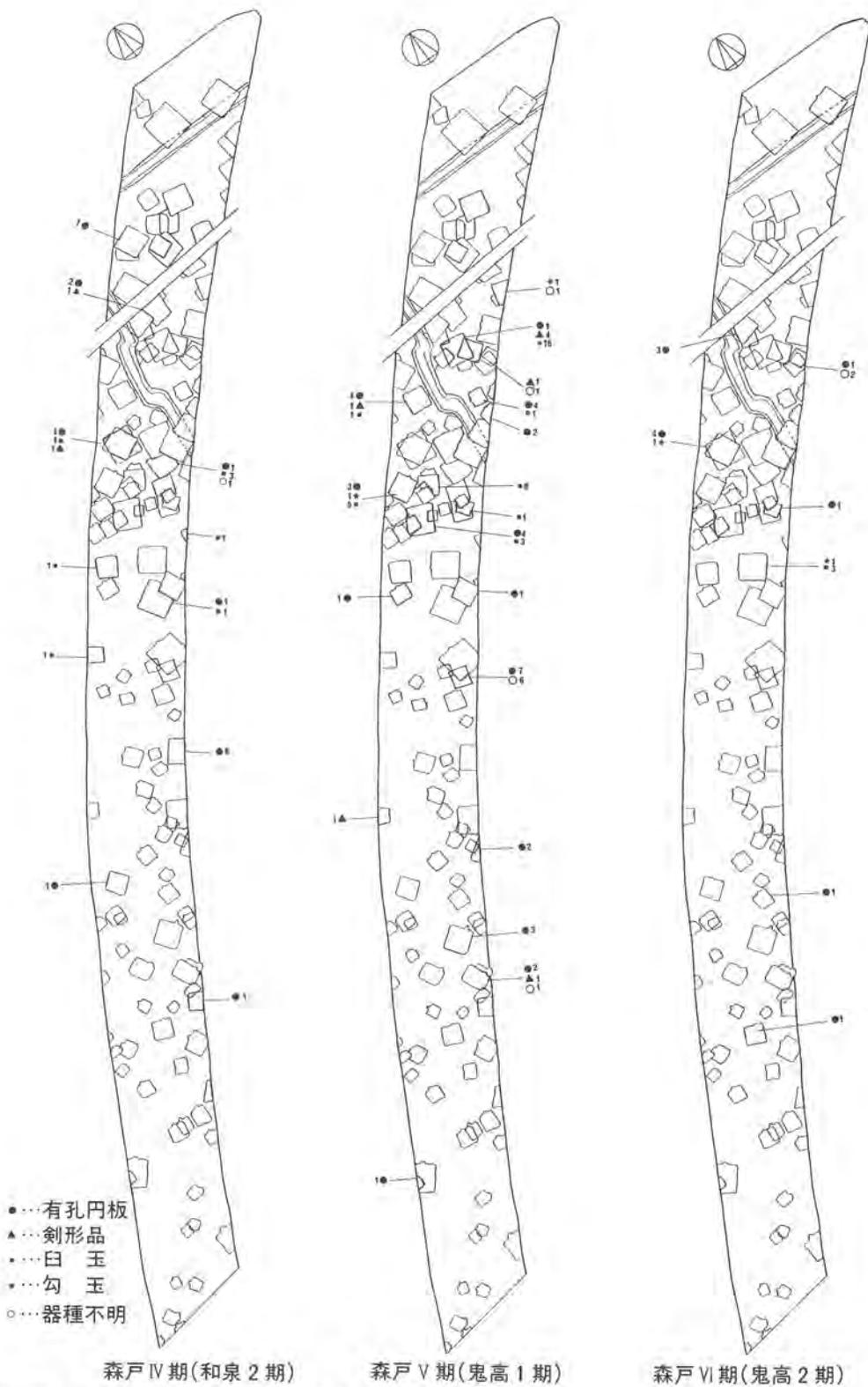
ここでは、当遺跡から出土した石製模造品を、拙稿で⁽⁴⁾まとめた県内の各遺跡から出土した石製模造品の特徴と比較して、当遺跡出土の石製模造品の特徴を明らかにしたい。

①有孔円板 当遺跡から出土した有孔円板は、殆どが双孔を有するもので、単孔のものは第46、64号住居跡から出土した2点だけである。県内での有孔円板のなかでの単孔と双孔の比は、拙稿に

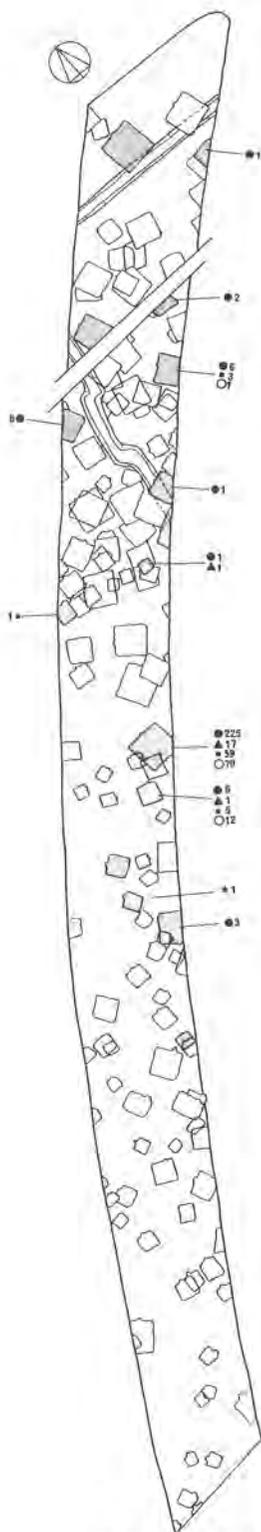
表30 有孔円板法量別集計表

径 (cm)	1.5~1.9	2.0~2.4	2.5~2.9	3.0.~3.4	3.5~3.9	4.0~4.4	4.5~	合計
	小形	やや小形	中形	やや大形	大	形		
和泉期		1	3	4	5	1	1	15
%		7	20	26		47		100
鬼高期	2	17	58	64	41	30	17	229
%	2	7	25	28		38		100
その他		2	5	6	4	4	4	25
%		8	20	24		48		100
合計	2	20	66	74	50	35	22	269
%	1	7	25	28		39		100

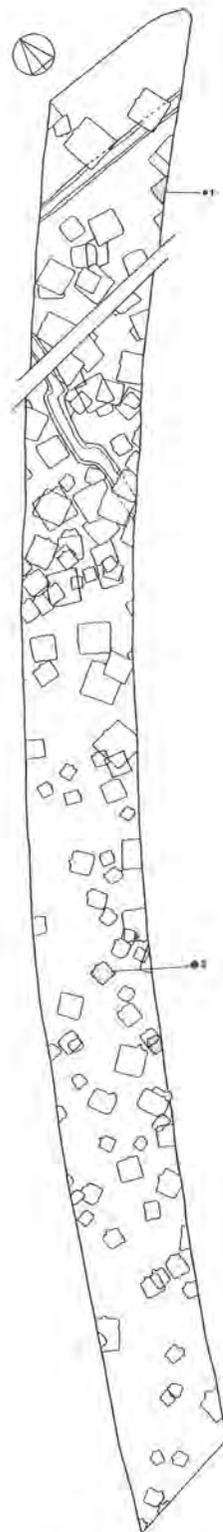
*法量が測定できないものについては、割愛した。



第278図 石製模造品出土住居跡配置図(1)



森戸Ⅶ期(鬼高3期)

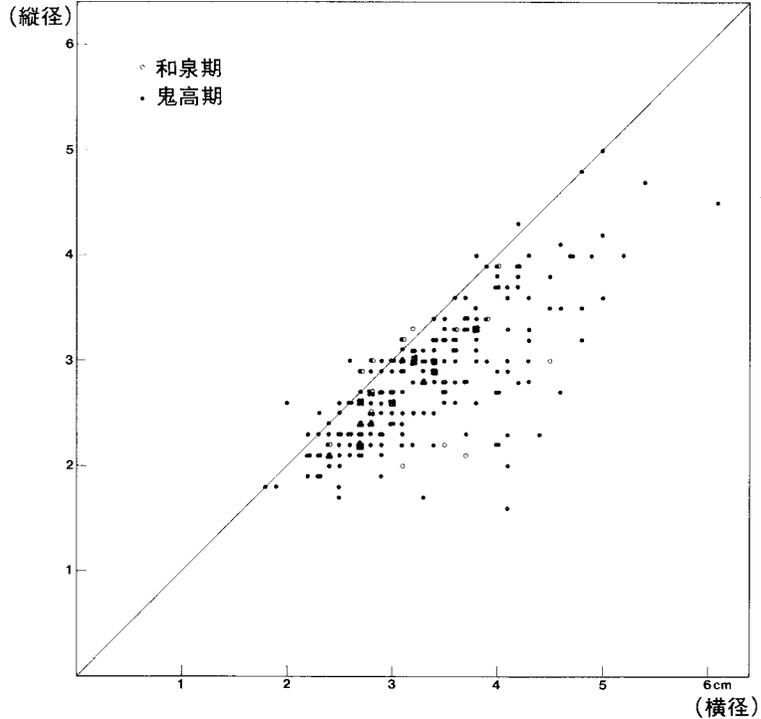


森戸Ⅷ期(鬼高4期)

第279図 石製模造品出土住居跡配置図(2)

よれば単孔11に対して双孔が89であるから、当遺跡での双孔の比率は非常に高いものであるといえる。次に、大きさ（径）によって分類したのが第280図、表31である。これによると、最も多いのが径3.5cmを越える大形のもので、全体の40%以上を占める。これは、県内での有孔円板のデータからみると、大形のもの割合が22%であるから、当遺跡出土のものは全体に大形のもの比率が高いということが言える。

また、表31は、横径に対する縦径の割合を示したものである。通常有孔円板は円形を呈するものが多いが、当遺跡出土のものは円形のもの（横径1に対して縦径が0.9～1.1の範囲のもの）は39%にすぎない。そして、楕円



第280図 有孔円板法量ドット図

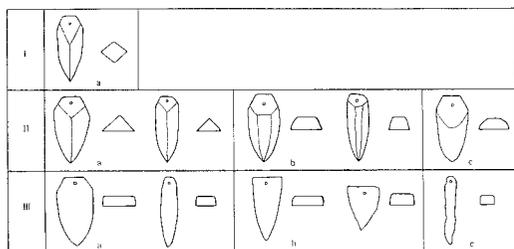
表31 有孔円板集計表（横径に対する縦径の割合）

割合	横径 (cm)							合計
	1.5~1.9	2.0~2.4	2.5~2.9	3.0~3.4	3.5~3.9	4.0~4.4	4.5~	
	小形	やや小形	中形	やや大形	大形			
0.3~ (%)						2		2
						100		1
0.5~ (%)			2	4	4	9	3	22
			9	18		73		9
0.7~ (%)		7	34	29	27	9	13	119
		6	29	24		41		50
0.9~1.1 (%)	2	11	25	30	12	11	2	93
	2	12	27	32		27		39
~1.3 (%)		1	1					2
		50	50					1
合計 (%)	2	19	62	63	43	31	18	238
	1	8	26	26		39		100

*法量が測定できないものについては、割愛した。

形（横径1に対して縦径1.1未満～1.3以下または0.3～0.7未満のもの）が61%も占める。特に、大形のものにその傾向が強いようである。

②剣形品 42個体出土しているなかで、形状・法量を捉えられる36個体についてデータとして用いた。そのなかで、穿孔がなく未製品のもの1点（居館跡南北堀上層出土）のみであり、4点は、双孔円板からの転用で孔が2か所に穿たれている。剣形品の形態分類については、井上義安氏のものによる⁽⁵⁾（『常陸釜付祭祀遺跡』第281図参照）。これによると、両面に^{しのぎ}鋸を有するI類に属



第281図 剣形品模式図

(井上義安「常陸釜付祭祀遺跡」より転載)

するものは、第101号住居跡から出土した長さ8.5cmの大形のもので、1点のみである。片面に鍔を有するII類のものは、19点出土し全体の53%と最も多い。両面とも鍔が省略され平板なIII類に属するものは、16個体出土し全体の44%を占める。県内の出土例と比較すると、II類のものは、26%にすぎないのに対し、当遺跡出土のもの53%は大変高い割合であるといえる。また、法量的にみたとき長さが5cm前後のものが多く、全体的に大形である。

③勾玉 11個体出土しており、3個体は半欠品のため8個体をドット図に示したのが、第283図である。これを見ると、最長のもので4.3cmと全体的にはあまり大形のものとは出土していない。しかし、断面が楕円形を示すものが3個体あり、全体としては本来の形状を忠実に模倣したものの割合が高いといえる。

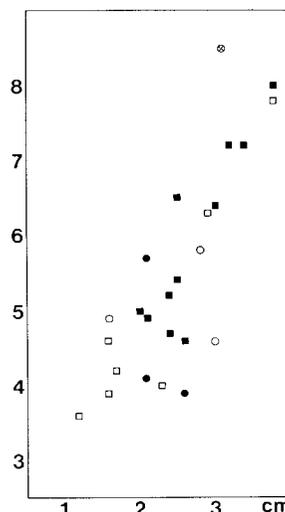
以上、森戸遺跡出土の石製模造品について、その出土状況と石製模造品そのものの特徴について述べてきた。総括すると、

まず、他の遺跡と比べた時、有孔円板や剣形品は大形のもの割合が高く、剣形品では本来の形をより忠実に模した片面に鍔を有するもの割合が高い傾向がある。当遺跡においては、祭祀のための道具としての石製模造品が、⁶⁾ 時期的にも大変長い期間にわたって使われてきた可能性が高く、鬼高期には粗雑化していくという一般的な傾向の中で、なお忠実に、あるいは保守的に、従前の祭祀形態を留めていたものと考えられる。

注

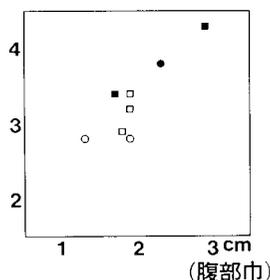
(1) 小野真一『祭祀遺跡地名総覧』1982年

(2) (4) (5) 拙稿「住居内出土の石製模造品について」『年報8』茨城県教育財団 1989年



和泉期…○ 平板 ● 片面・鍔 ◎ 両面・鍔
鬼高期…□ 平板 ■ 片面・鍔

第282図 剣形品計測値ドット図



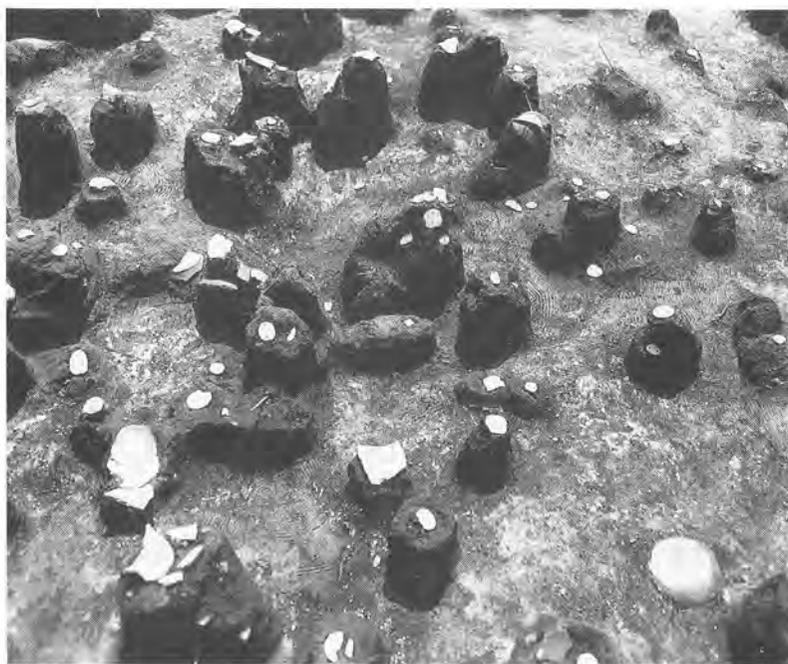
和泉期…○ ● は
鬼高期…□ 断面形が円形又は楕円形のもの

第283図 勾玉計測値ドット図

- (3) 高橋一夫「石製模造品出土の住居址とその性格」『考古学研究18巻2号』1971年
- (6) 井上義安『常陸釜付祭祀遺跡』1986年

参考文献

- ・大場磐雄編『神道考古学講座』1972年
- ・亀井正道「祭祀遺物－模造品の変遷－」『古代の日本第2巻』1971年
- ・亀井正道「信仰から儀礼へ 祭祀遺跡」『世界考古学大系第3巻』1959年
- ・小野真一『祭祀遺跡』考古学ライブラリー10 1982年
- ・佐藤政則「家屋内出土の祭祀遺物」『日立市郷土資料館紀要2』1982年
- ・寺沢知子「祭祀の変化と民衆」『季刊考古学第16巻』1986年



4 土坑について

当遺跡から総数260基の土坑が検出されている。その中で特色ある土坑についてここでは記述した。

A類 楕円形を呈し長径は1.9m前後、深さ1.75m前後のもの……………6基（第216図）

いわゆる「Tピット」とよばれている土坑で、E4区に6基がほぼ一直線上に並んで検出されている。平面形は長径1.60～2.26m、短径1.03～1.51mの楕円形を呈し、深さは1.54～2.06mを測る。長径方向は、N-2°-WからN-18°-Eのある一定の範囲内におさまる。縦断面は下位でややオーバーハングし、中位でほぼ垂直に立ち上がって「┌」状を呈している。横断面は下位から中位にかけてほぼ垂直に、上位で外傾しながら立ち上がり「┐」状を呈している。坑底は平坦で、長径1.20～1.45m、短径0.21～0.43mの長楕円形を呈している。覆土は第71・90号土坑は自然堆積で、第53・262・265・266号土坑は人為堆積の様相を示している。遺物は、土師器片・須恵器片が数点出土しているだけである。各土坑間の距離は第90号土坑のところやや狭くなるにしても、概ね5m間隔で配置されている。6基の土坑は形状・規模・配置等から考えて、ほぼ同時期に存在していた遺構と考えられる。「Tピット」は、「棒状遺構」・「溝状遺構」・「V字形土坑」等とも呼ばれ、その性格については、「落とし穴」とする解釈が主流をなし、構築年代については(ア)縄文早期前半、(イ)縄文早期末～前期初頭、(ウ)縄文前期～中期末、(エ)縄文後期初頭、(オ)弥生～中世の五説⁽¹⁾が上げられている。当遺跡から検出されている「Tピット」については、その配置状況から落とし穴と考えられるが、時期を限定しうるだけの資料は得られなかった。

B類 円形を呈し上端径1.5m内外、深さ50cm前後の古墳時代の

遺物を出土する土坑……………53基（第217～222図）

調査区域の中央部から北側のD5区・C5区・B6区に密集して検出され、重複関係をなしているものも見られる。平面形は上端径1.30～2.00m(平均1.53～1.61m)の円形で、正円に近い。深さは24～93cmで、平均51.1cmを測る。壁は、底面と明瞭な境をなし、垂直又は壁の一部がオーバーハングして立ち上がっている。覆土は人為堆積が33基、自然堆積17基、不明3基で、人為的に埋め戻された土坑が多く見られる。人為堆積の土坑は、黒褐色土を主体としてローム小ブロックが全体的に混じり、自然堆積の土坑は全体的にローム粒子が少量混じっている。遺物は第189号土坑から土師器片217点が出土し、第444図41～45の甕1点、高坏の脚部3点、埴1点が底面から出土している。第202号土坑から土師器片291点が出土し、第444図47～50、第445図51～59の甕2点、甗1点、鉢1点、高坏4点、埴1点、坏2点、手捏ね土器1点が底面から、57の坏が覆土中層から出土している。第210号土坑から土師器片65点、須恵器片3点が出土し、第445図61の甕と62の坏が床面直上から出土している。第254号土坑から土師器片81点が出土し、第446図74・75の甕、第447

図76の甕が覆土中層から出土している。その他の土坑からも、土師器片、須恵器片、双孔円板、縄文式土器片、弥生式土器片などが出土している。この土坑の特徴をまとめると、「(ア)平面形が円形を呈し、正円に近い。(イ)断面形が垂直又は一部オーバーハングしている。(ウ)底面の壁際に溝を有するものも見られる。(エ)規模が上端径1.6m±30cmで、深さが50cm前後。(オ)覆土が全体的に黒褐色土で、ローム小ブロック・ローム粒子が混入している。(カ)遺物の出土している土坑は、覆土に焼土が混入している例が多い。(カ)古墳時代の遺物が出土している。」などが上げられる。竪穴住居跡との関係については、明確に捉えることはできなかった。しかし、調査区域の北側に、古墳時代の竪穴住居跡とこの土坑が多く分布していることから、両者は何らかの関係があったことが窺える。この土坑の時期については、各土坑から出土している遺物をみると、古墳時代後期初頭の所産と推定される。重複している土坑もあり、すべての土坑が同一時期に存在したことは考えられないが、形状・規模・遺物から判断して概ね古墳時代後期の所産と推定される。また、当教育財団の石神外宿B遺跡から検出されている第1～8号土坑も類似の土坑と考えられる⁽²⁾。一般的に土坑の用途・機能を考える場合に、引き合いに出すのが陥し穴・墓壇・貯蔵穴の三者である。この土坑の性格についてもこの三者の中の貯蔵穴的な性格が考えられるが、現状では、はっきりとした性格づけをすることはできなかった。

C類 円形を呈し上端径1m内外、深さが30cm前後のもの ……………41基(第223～226図)

この土坑は北郷C遺跡で述べた円形の土坑と同じ形態の土坑で、調査区域の南側のG3区・F3区と北側のC5区に多く検出されている。平面形が円形、断面形が円筒状を呈するIA類が22基、平面形が円形、断面形が皿状を呈するIB類が19基である。土坑の規模は、IA類が上端径1.08～1.18m、深さ12～50cm、IB類が上端径1.04～1.10m、深さ9～33cmとIA類のほうがやや大型で深くなっている。覆土は自然堆積37基、人為堆積4基で、ほとんど黒褐色土の自然堆積の様相を示している。各土坑から土師器片・須恵器片がわずかに出土している。またまったく出土していない土坑が14基ある。土坑の時期については、北郷C遺跡でも述べたように遺物や覆土から平安時代の所産と推定される。調査区域の南側に平安時代の竪穴住居跡が多く、何らかの関連が窺える。

D類 竪坑や主室を有するもの ……………1基(第227図)

いわゆる地下式壇と呼ばれている遺構で、調査区域の北端部(B6区)に第147号竪穴住居跡を掘り込んで構築されている。竪坑の規模は、奥行1.43m、幅1.11mの長方形を呈し、深さ1.24mを測る。主室の規模は、奥行1.93m、幅2.01mの方形を呈し、深さ1.42mを測る。底面は竪坑から主室に向かってわずかに傾斜している。壁は、竪坑が89度の傾斜で立ち上がり、主室の東壁と奥壁では底面からオーバーハングして立ち上がっている。覆土は自然堆積で、下層に天井部や壁が崩れ

て堆積したと思われるロームブロックを多く含む黒褐色土が堆積している。遺物は第443図27の坑が覆土から出土している。地下式墳は「地下式土壇」・「地下式横穴」・「地下式土倉」等とも呼ばれ、その性格については「墓壇」とする説と「貯蔵庫」とする説があり、構築年代については「平安時代末から江戸時代」までと広範囲である。⁽³⁾当遺跡で検出された地下式墳は、時期や用途について限定しうるだけの資料は得られなかった。

E類 円形を呈し、人骨などを出土している墓壇と判断されるもの ……………17基（第228図）

調査区域の北側のB6区・B7区を中心にとまって検出されている。上端径0.84～1.32mの円形を呈し、深さ3～62cmを測る。底面は平坦で、厚さ2～3cmの粘土が貼られている。第220・227号土坑から人骨が出土し、その他古銭、煙管、灯明具、陶磁器等が出土している。17基の墓壇は調査区域の北側から、何基かまとめて検出されており、ある時期から墓域となっていたことが窺える。各々の墓壇の時期差、同時期に存在したと思われる墓壇の数、墓域の範囲等については正確に把握することはできなかった。墓壇の形成された時期については、墓壇内から出土する古銭(第448～451図)の初鑄年や陶磁器(第446図70, 71)等から17世紀中頃以降の所産と推定される。(土坑の図版の中のスクリントンは粘土を表す。)

F類 A～E類に属さないもの ……………134基（第229～238図）

最後に当遺跡で検出された260基の土坑についてまとめると以下の通りである。

A類(Tピット) 6基(SK53, SK71, SK90, SK262, SK265, SK266)

B類 53基(表15掲載土坑)

C類 41基(表15掲載土坑)

[C類の可能性のある土坑] 8基(SK4, SK14, SK24, SK32, SK43, SK76, SK213, SK225)

D類(地下式墳) 1基(SK131)

E類(墓壇) 17基(SK137, SK139, SK140, SK141, SK142, SK143, SK144, SK220, SK221, SK223, SK227, SK234, SK235, SK236, SK237, SK242, SK243)

F類(その他) 134基(表15掲載土坑)

注

(1) 石岡憲雄「所謂「Tピット」について」『土曜考古』第2号 1980年6月

(2) 渡辺俊夫・根本康弘『二本松古墳 石神外宿A遺跡 石神外宿B遺跡』茨城県教育財団 1983年8月

(3) 中田 英「地下式墳研究の現状について」『神奈川考古』第2号 神奈川考古同人会1977年
半田賢三「本邦地下式墳の類型学的研究」『伊知波良』2 1979年5月

5 森戸遺跡の概観

当遺跡には、先土器時代から奈良・平安時代までの長期間にわたる各時代に、継続的あるいは断続的に人々の生活が営まれた。本項では、各時代ごとに遺構・遺物の特徴的なことを述べ、森戸遺跡の性格を考えてみたい。

先土器時代では、調査エリアの北端部のローム層の中から削器、搔器を中心とした多くの石器、石核や剥片が出土した。石器集中地点は6か所であり、層位的には大差のないレベルで出土している。当地域において、先土器時代の生活の痕跡を確認できたのは、ひとつの大きな成果である。

縄文時代では、竪穴住居跡はなかったが、陥し穴状の遺構が6基ほぼ東西方向に並んで検出されている。遺物も早期から後期にかけての土器片が出土しており、特に早期の田戸下層式、前期の花積下層式の土器などが主体を占め、該期の集落が周辺に所在するものと思われる。

また、弥生時代では、後期終末期の十王台式土器を伴う住居跡が3軒検出され、当地域に盛行する十王台文化をもった人々が森戸遺跡のなかにも集落を形成していたことが跡付けられた。また、中期中葉の貉式土器も遺構を伴わずに出土している。なお、遺構を伴わない縄文時代、弥生時代の出土土器は、本書では紹介できなかったが、当教育財団発行の『年報9』に掲載した。

古墳時代は、前期に豪族居館跡が築造され、その後、中期後半から後期にかけて大規模な拠点集落が形成された。前期の豪族居館跡は、その規模・プランなどにおいて同期のなかでは卓越しており、祭祀的性格をもつ地方の部族首長クラスのものであった可能性がある。この豪族居館跡は、その後の集落の展開の上でも大きな意味をもち続け、森戸の集落のなかでのシンボリックな核となっていく。即ち、和泉期後半から鬼高期前半までは、居館跡の堀を避けるか、その上にあるかの差異はあるものの、居館跡を意識した集落の展開をみせ、優位性をもった住居跡が居館跡の張出部の近くに集中する。鬼高期も後半になると集落の核は分散的になり、終末期に至り集落の中心は調査エリアの外側に移動する。また、形態や出土遺物から古墳時代に位置付けられる土坑が多数検出されているが、住居跡との関係や集落のなかでの位置付けまでは捉えられなかった。一方、該期の多くの住居跡から大量の石製模造品が出土しており、古墳時代中後期には当地域において石製模造品を用いた祭祀行為が盛んに行われていたものと思われる。

奈良・平安時代の集落は、8世紀前半から11世紀代に至る大変長期にわたるものである。この期間の住居跡の分布状況を見ると、調査エリアの南側半分が中心であり、当遺跡のなかでは、時代が下るにつれ集落が南へ移るという傾向がみられ、当遺跡の南に所在する北郷C遺跡は、奈良・平安時代に時代がほぼ限定される集落跡となる。当遺跡の奈良・平安時代の集落は、時期により、住居跡の平面形、カマドの位置などに変化がみられ、XII期にはカマドがすべて東に位置するという、集落の変遷のなかでの大きな画期を迎える。出土遺物のなかには、10世紀末から11世

紀代に比定される置きカマドや羽釜など、県内での出土例の希な貴重なものも含まれている。また、平安時代の所産と考えられる土坑が、調査エリア南半分を中心に検出されている。

中世のものと考えられる遺構は、地下式坑1基であり、調査エリア北端に検出された。

近世に比定されるものは、北端部に検出された墓墳であり、六道銭として使用されたと思われる「寛永通寶」が出土している。この地域の台地縁辺部には、該期の集落が存在していたと思われる。

以上、森戸遺跡について、時代ごとの概観を述べてきたが、当遺跡の所在する額田台地は平坦な台地面が広がり、この台地の北側には久慈川が流れるという、当時においても生活を営むのに恰好の条件を備えた地域であったと思われる。





終章 むすび

一般国道349号バイパス道路改良工事地内における北郷C遺跡・森戸遺跡の発掘調査は、当教育財団によって、昭和62年4月から同年9月30日まで1年次調査を、昭和63年4月から同年10月31日まで2年次調査を実施した。そして、平成元年度、両遺跡の整理業務をもって、全て終了の運びとなった。

北郷C遺跡は、奈良・平安時代の竪穴住居跡、掘立て柱建物跡、土坑、溝などが検出された。住居跡内からは、多くの土師器や須恵器などが出土し、なかには墨書土器や古代の役人がその位階を示すため付けた鈿帯具などもある。規則性を感じさせる住居跡の配列や上記の出土遺物などから、当遺跡は、単なる農耕集落というよりもやや性格を異にするものと考えられる。また、中世の所産と考えられる埴仏が表土層のなかから出土しており、平安時代以降における当地域の歴史を考える貴重な資料になろう。

森戸遺跡は、先土器時代から、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代に至る大変長い時期にわたる複合遺跡である。先土器時代では、ローム層の中から数か所の石器集中地点を捉えることができ、縄文時代に先行するこの時代から当地域においては先人が生活を営んでいたことが知れる。縄文時代には、陥し穴と思われる遺構が検出され、生活の痕跡を留めている。弥生時代になると、その終末期に十王台式土器を伴う竪穴住居跡が3軒検出され、当遺跡の調査エリアのなかでは、初めて集落として現れる。古墳時代には、前期の豪族居館跡をはじめ、中期後半以降80軒以上もの竪穴住居跡が検出され、大規模な集落が形成されてくることから、この時期の中核的な性格をもった地域であったことが窺える。この集落は、古墳時代以降、一時的な断絶を繰り返しながら奈良、そして平安時代の後半に至るまで長期にわたり営まれることになる。奈良時代の竪穴住居跡は4軒、平安時代の竪穴住居跡は36軒である。当遺跡からは、今回の調査によって、1,500個体以上にのぼる土師器や須恵器、690点の石製模造品など多くの貴重な遺物を出土した。

今回の北郷C・森戸両遺跡の調査は、道路幅という限定された範囲でのものであったが、本報告書にまとめたような多くの成果をあげることができた。本報告書が、今後当地域の歴史の解明のための一助になれば幸いである。しかし、時間的な制約の中で、膨大な資料を十分に検討し、考察を加えられなかった面もある。

なお、本報告書をまとめるにあたり、那珂町教育委員会をはじめ、関係各位からの御指導・御協力をいただいたことに対し、文末ながら深く感謝の意を表する次第である。

茨城県教育財団文化財調査報告第55集

一般国道349号道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

北郷C遺跡 (上)
森戸遺跡

平成2年3月26日印刷

平成2年3月31日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号
印刷 株式会社 あげぼの印刷社
水戸市松が丘2-6-24
TEL 0292-51-5265(代)

